

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第171集

ながのきたうら いせき

長野北浦遺跡

とうのこし いせき

塔の越遺跡

2012

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

濃尾平野に人々が住み始めたのは、縄文海進が終わり、海が後退を始めて平野の拡大が始まった 5000 年程前です。それ以後、濃尾平野では木曾川支流（日光川・三宅川・青木川等）と五条川によって絶えず土砂が運ばれて居住に適した自然堤防の形成が進み、1300 年程前にはほぼ現在に近い地勢がかたちづくられました。その頃に古代尾張国の政治的中枢としての国府が、現在の稲沢市東部の三宅川沿いに設けられました。濃尾平野にようやく中心地が姿を現したのです。長野北浦遺跡・塔の越遺跡はこの中心地の東に位置します。

この度、当センターでは稲沢市北部を東西に貫通する都市再生総合整備事業 3・3・1 4 稲沢・西春線の建設に先立ち、平成 19 年度から平成 22 年度にかけて、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、4 ヶ年にわたってこの長野北浦遺跡・塔の越遺跡の発掘調査を行ってまいりました。

その結果、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代というように連綿と続く人々の営みだけでなく、尾張国府の一端にも迫ることができました。往時の政治中心地周辺の様相が掴めたのは大きな成果です。そのほかにも、本書には重要な成果が盛り込まれています。

この報告書が地域の貴重な歴史を記録したものとして皆様に活用されるとともに、埋蔵文化財への理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、関係各機関および関係者の皆様からのご指導とご配慮、また地域住民の方々のご協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成 24 年 3 月

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 加藤 高明

例言

1. 本書は、愛知県稲沢市長野・塔の越・治郎丸に所在する長野北浦（ながのきたうら）遺跡・塔の越（とうのこし）遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 長野北浦遺跡・塔の越遺跡の発掘調査は、「都市再生総合整備事業3・3・14稲沢西春線」に伴う事前調査であり、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターが、平成19年度から平成22年度までの、のべ4ヶ年（長野北浦遺跡：平成19年度・20年度；計7,000㎡、塔の越遺跡：平成19年度～平成22年度；計9,450㎡）にわたって行ったものである。調査面積は両遺跡を合わせて16,450㎡である。
整理・報告は平成22年度から平成23年度の2ヶ年で実施し、平成24年3月に報告書を刊行した。
 3. 調査・記録方式は愛知県埋蔵文化財センター・調査マニュアルに則っている。
 4. 調査担当は以下のとおりである。
 - ・平成19年度 調査課長：城ヶ谷和宏（現・愛知県立熱田高校教頭）、主査：石黒立人（調整）
調査研究員：樋上 昇（両遺跡調査総括）・蔭山誠一（長野北浦遺跡調査担当）・永井邦仁（長野北浦遺跡調査担当）
早野浩二（塔の越遺跡調査担当）、支援業者：（株）アコード
 - ・平成20年度 調査課長：城ヶ谷和宏（同上）、主任専門員：石黒立人（調整）、調査研究員：蔭山誠一（長野北浦遺跡調査担当）・鶴飼雅弘（塔の越遺跡調査担当；現・愛知県埋蔵文化財調査センター主査）、支援業者：（株）イビソク
 - ・平成21年度 調査課長：赤塚次郎、主査：小澤一弘（調整）、調査研究員：宇佐見 守（調査担当、現・愛知県埋蔵文化財調査センター課長補佐）・伊奈和彦（調査担当、現・愛知県埋蔵文化財調査センター）、支援業者：（株）東海アナース
 - ・平成22年度 調査課長：赤塚次郎、統括専門員：石黒立人（調査担当）
 5. 整理・報告担当は以下のとおりである。
 - ・平成22年度 統括専門員：石黒立人
 - ・平成23年度 統括専門員：石黒立人整理報告にあたって、以下の業務支援があった。
 - ・自然科学分析：（株）パレオ・ラボ
 - ・遺物実測・デジタルトレース：（株）イビソク
（株）文化財サービス
 - ・デジタルデータ加工・調製：（株）国際文化財
 - ・写真撮影：写真工房 遊
 6. 調査にあたっては、愛知県教育委員会学習教育部文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部都市整備課、愛知県一宮建設事務所、稲沢市教育委員会、稲沢市土木部、長野町自治会役員、塔の越町自治会役員、治郎丸町自治会役員、周辺地域住民の皆様のご理解・ご協力をえて円滑に進めることができた。このことに対し深く感謝申し上げます。
 7. 本書の執筆分担は以下のとおりで、必要があれば文末に記した。
第1章：石黒立人、第2章：石黒・樋上 昇・早野浩二・宇佐見 守（同上）・鶴飼雅弘（同上）、第3章：石黒・樋上・蔭山誠一、第4章-1：奥野絵美（愛知県埋蔵文化財調査センター）・第4章-2：鬼頭 剛、第5章-1：早野・第5章-2：永井邦仁、第6章：石黒
全体の編集は石黒が行った。古代の評価を含めて城ヶ谷和宏氏（同上）に多々ご教示を賜った。
なお、事実記載に関わる第2章・第3章について執筆者名が複数であるのは、報告書担当が調査担当者から部分的に原稿の提供を受け、遺物についても同様に個別資料について原稿の提供を受けたことによる。もちろん、調査状況について個別に情報提供を受けたことは当然だが、報告担当として調査担当の認識との間に齟齬が生じた場合には該当分について記述した。
自然科学分析関係（動物遺存体・植物種子・放射性炭素年代測定・材質分析等）の報告については結果のみ掲載するにとどめた。
なお、それぞれについての報告データは当センターで保管している。
 8. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター（0567-67-4164）が、写真を含めた記録類は公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター（0567-67-4161）が保管している。
両機関の所在地 〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24
- ### 凡例
1. 用語のうち、「検1」「検2」「検・・・」は作業工程のうち、遺構検出のための包含層掘削の順序を示す。つまり、1面目の遺構面精査までが「検1」、次に遺構掘削（遺構面）、その次ぎに掘り下げを始めて2面目の遺構精査までが「検2」、そして次、というように作業手順に対応している。基本的にそれぞれの「面」は作業面であり層位区分には対応せず、ましてや有意な地表面を意味するわけではない。
 2. 時期区分は、古墳前期前半、古墳前期後半、古墳前期末、古墳中期、古墳後期、古代（奈良・平安）、中世（鎌倉・室町）、戦国、近世、近・現代（明治・大正・昭和）、もしくは＊世紀と呼称し、特に必要があれば特定型式名や窯式名（『愛知県史』に準拠）を用いた。
 3. 調査時に付与した遺構の種別記号はそのままとした。ただ、井戸の場合に最初「SK」で後に「SE」に変更されることがあったが、番号は唯一なので、むしろ遺構認識の変化として旧種別を抹消せずそのまま記載した。また、報告に際して、建物跡や複数調査区にまたがる遺構については、記述の便宜上、「建物1」「大溝」「河道」というように、別に名称を与えた。
 4. 遺構図や文中の標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。
 5. 遺物実測図は、土器（拓図を含む）・陶磁器・土製品（加工円盤・陶片砥石）等について基本1/4とし、特に大形品は1/8にした。
それ以外、瓦・フイゴ羽口・土錘・製塩土器：1/3、石器：1/2・1/4、鉄器：1/1・1/2、としてその都度図中に表記した。木器については基本1/4、大形品を1/8とした。
拓図については、必要があれば1/2図を追加した。古代以降の土師器は清郷形甕を除き断面にアミ掛けをした。
 6. 遺物番号は、土器・陶磁器・土製品等については調査区ごとに、石器・金属器・木器など点数の少ないものは遺跡ごとに通番をふっている。そのため、レイアウト上は番号が前後する場合がある。

目次

本文

第 1 章 調査と遺跡の概要 1

1. 調査の概要 1

(1) 調査の経緯 1

(2) 調査の経過 1

2. 遺跡の環境

(1) 地理的環境 1

(2) 歴史的環境 1

第 2 章 塔の越遺跡 3

1. 調査の概要 3

(1) 遺跡の状況 3

(2) 作業工程 3

2. 遺構・遺物の各説 4

(1) 古墳 4

A. 概要 4

B. 遺構・遺物 4

(2) 古代 23

A. 概要 23

B. 遺構・遺物 23

(3) 中世 125

A. 概要 125

B. 遺構・遺物 125

(4) 近世 131

A. 概要 131

B. 遺構・遺物 131

第 3 章 長野北浦遺跡 139

1. 調査の概要 139

(1) 遺跡の状況 139

(2) 作業工程 139

2. 遺構・遺物の各説・・・・・・・・・・・・・140

(1) 古墳・・・・・・・・・・・・・140

A. 概要・・・・・・・・・・・・・140

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・140

(2) 古代・・・・・・・・・・・・・163

A. 概要・・・・・・・・・・・・・163

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・163

(3) 中世・・・・・・・・・・・・・165

A. 概要・・・・・・・・・・・・・165

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・165

(4) 近世・・・・・・・・・・・・・179

A. 概要・・・・・・・・・・・・・179

B. 遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・179

第4章 自然科学分析・・・・・・・・・・・・・217

1. 昆虫化石を用いた長野北浦遺跡の古環境復元／奥野絵美・・・217

2. 長野北浦・塔之越遺跡の地下層序と表層地形解析／鬼頭剛・・・225

第5章 考察・・・・・・・・・・・・・235

1. 長野北浦遺跡・塔の越遺跡における

古墳時代の遺構・遺物について／早野浩二・・・・・・・・・・・・・235

2. 古代の塔の越遺跡／永井邦仁・・・・・・・・・・・・・249

第6章 総括・・・・・・・・・・・・・259

塔の越遺跡遺構写真図版

長野北浦遺跡遺構写真図版

等の越遺跡・長野北浦遺跡遺物写真図版

報告書抄録

挿図

第1章

図1 長野北浦遺跡・塔の越遺跡周辺関連分布図及び調査区割全体図・2

第2章

図2 塔の越遺跡調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・3

(1) 古墳

図3 塔の越遺跡古墳時代遺構全体図及び遺構外出土遺物分布図・実測図・4-5

図4 塔の越遺跡 08Bb-Be 区遺構図・・・・・・・・・・・・・・6

図5 塔の越遺跡遺 08Bb 区北壁土層セクション図・・・・・・・・・・・・6

図6 塔の越遺跡 08Bd 区出土埴輪実測図・・・・・・・・・・・・・・7

図7 塔の越遺跡 09C1 区 207SD 検出状況 西から・・・・・・・・・・8

図8 塔の越遺跡 09C2 区 207SD 掘り下げ状況 東から・・・・・・・・8

図9 塔の越遺跡 09C 区 207SD 土層セクション図・・・・・・・・・・・・8

図10 塔の越遺跡 09C2 区 207SD 遺物出土状況図・・・・・・・・・・・・8

図11 塔の越遺跡 09C2 区 207SD 遺物出土状況・・・・・・・・・・・・9

図12 塔の越遺跡 09C2 区 207SD 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・9

図13 塔の越遺跡 09C3 区古墳前期遺物出土分布・・・・・・・・・・・・9

図14 塔の越遺跡 08Aa 区出土遺物実測図区出土遺物実測図・・・・・・・・9

図15 塔の越遺跡 09C3 区他出土古墳前期遺物実測図・・・・・・・・・・10

図16 塔の越遺跡 08Ba・09C・08Aa・08Ac 区遺構図、出土遺物実測図・11

図17 塔の越遺跡 08Aa・08Ab・08Ac・09B 区遺構図・・・・・・・・・・12

図18 塔の越遺跡 08Aa・Ac 区 149SD プラン・セクション図、遺物分布図・・・・・・・・・・・・・・13

図19 塔の越遺跡 08Aa 区 149SD 土層セクション図・・・・・・・・・・・・13

図20 塔の越遺跡 08Aa 区 149SD 関連遺物実測図・・・・・・・・・・・・13

図21 塔の越遺跡 08Ac 区 149SD 土層セクション図・・・・・・・・・・・・13

図22 塔の越遺跡 08Aa 区 149SD 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・14

図23 塔の越遺跡 08Ac 区 149SD 完掘状況 南東から・・・・・・・・・・14

図24 塔の越遺跡 08Ab 区 154SD 周辺遺構プラン・セクション図・15

図25 塔の越遺跡 08Ab 区 154SD 土層セクション図・・・・・・・・・・・・15

図26 塔の越遺跡 08Ab 区 154SD 土層セクション図・・・・・・・・・・・・16

図27 塔の越遺跡 08Ab 区 154SD 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・16

図28 塔の越遺跡 08Ab 区 175SK 遺物出土状況 東から・・・・・・・・17

図29 塔の越遺跡 08Ab 区 175SK 土層セクション図・・・・・・・・・・・・17

図30 塔の越遺跡 08Ab 区 175SK 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・17

図31 塔の越遺跡 08Ab 区 181SX 土層断面・・・・・・・・・・・・・・17

図32 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 遺物 平面及び垂直分布図・・・・・・18

図33 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 土層セクション図・・・・・・・・・・・・18

図34 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・18

図35 塔の越遺跡 08Ab 区遺構外出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・18

図36 塔の越遺跡 07A・07B・10 区遺構図・・・・・・・・・・・・・・19

図37 塔の越遺跡 07A 区出土埴輪実測図・・・・・・・・・・・・・・19

図38 塔の越遺跡 07A 区・B 区 050SD と近世以降の遺構との関係・20

図39 塔の越遺跡 07A 区・B 区 050SD 出土遺物実測図・・・・・・・・・・20

図40 塔の越遺跡 07A・B 区東壁土層セクション図・・・・・・・・・・・・21

図41 塔の越遺跡 07A・B 区 050SD 土層セクション図・・・・・・・・・・21

図42 塔の越遺跡 07B 区 737SX 遺物出土状況図及び写真・・・・・・・・22

図43 塔の越遺跡 07B 区 737SX 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・22

図44 塔の越遺跡 07A 区 256SX 遺物出土状況図及び遺物実測図・・・・22

図45 塔の越遺跡 07B・C 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・22

(2) 古代

図46 塔の越遺跡調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・23

図47 塔の越遺跡 08G 区東部の砂層・・・・・・・・・・・・・・23

図48 塔の越遺跡 08Ic 区南壁セクション図・・・・・・・・・・・・・・23

図49 塔の越遺跡 08Ia 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・23

図50 塔の越遺跡 08G 区出土遺物分布図・・・・・・・・・・・・・・24

図51 塔の越遺跡 08G 区甑出土状況・・・・・・・・・・・・・・24

図52 塔の越遺跡 08G 区土層セクション図・・・・・・・・・・・・・・25

図53 塔の越遺跡 08G 区噴砂検出状況・・・・・・・・・・・・・・25

図54 塔の越遺跡 08G 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・26

図55 塔の越遺跡 08G 区北壁土層セクション図・・・・・・・・・・・・・・27

図56 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 土層セクション図・・・・・・・・・・・・28

図57 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 掘削状況・・・・・・・・・・・・・・28

図58 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・29

図59 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 戸井材及び出土木製品実測図・・・・30

図60 塔の越遺跡 08Ha 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・31

図61 塔の越遺跡 08Hb 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・31

図62 塔の越遺跡 08Ha 区北壁土層セクション図・・・・・・・・・・・・・・31

図63 塔の越遺跡 08G・08Ha・08Ea-Ec・08Fa 区遺構図・・・・・・・・・・32

図64 塔の越遺跡 08Ea 区準備工事・・・・・・・・・・・・・・33

図65 塔の越遺跡 08Ea 区トレンチ掘削・・・・・・・・・・・・・・33

図66 塔の越遺跡 08Ea 区遺構掘削・・・・・・・・・・・・・・33

図67 塔の越遺跡 08Ea 区・Ec 区土層セクション図・・・・・・・・・・・・34

図68 塔の越遺跡 08Ea 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・35

図69 塔の越遺跡 08Ea・08Ec・08Eb・08Fc 区遺構図・・・・・・・・・・36

図70 塔の越遺跡 08Eb 区 023SK・025SX 土層セクション図・・・・・・37

図71 塔の越遺跡 08Eb 区南壁東部土層セクション図・・・・・・・・・・37

図72 塔の越遺跡 08Eb 区北壁土層セクション図・・・・・・・・・・・・・・37

図73 塔の越遺跡 08Eb 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・38

図74 塔の越遺跡 08Eb 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・39

図75 塔の越遺跡 08Fa・08Fc 区遺構図・・・・・・・・・・・・・・40

図76 塔の越遺跡 08Fa 区土層セクション図・・・・・・・・・・・・・・41

図77 塔の越遺跡 08Fa 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・41

図78 塔の越遺跡 08Fa 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・42

図79 塔の越遺跡 08Fc 区土層セクション図・・・・・・・・・・・・・・43

図80 塔の越遺跡 08Fc 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・43

図81 塔の越遺跡 08D・08Cd・08Cc・08Fb・08Fd 区遺構図・・・・・・44

図82 塔の越遺跡 08D 区1面遺物(検2遺物群)出土状況・・・・・・・・45

図83 塔の越遺跡 08D 区遺物分布状況図・・・・・・・・・・・・・・45

図84 塔の越遺跡 08D 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・45

図85 塔の越遺跡 08D 区南壁土層セクション図・・・・・・・・・・・・・・46

図86 塔の越遺跡 08D 区南壁 018SK 付近土層セクション図・・・・・・46

図87 塔の越遺跡 08Cd 区南壁 004SD 付近土層セクション図・・・・・・47

図88 塔の越遺跡 08Cd 区溝群(中央から右へ、010SD、009SD、008SDの順)・・・・47

図89 塔の越遺跡 08Cd 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・48

図90 塔の越遺跡 08Cd 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・48

図91 塔の越遺跡 08Cd 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・49

図92 塔の越遺跡 08Cd 区南壁土層セクション図・・・・・・・・・・・・・・49

図93 塔の越遺跡 08Cb-Cd 区・08F 区遺構図・・・・・・・・・・・・・・50

図94 塔の越遺跡 08Cc 区竪穴建物跡平面図及び土層セクション図、014SI 出土鉄器(鉄鏃?) 実測図・・・・・・・・・・・・・・51

図95 塔の越遺跡 08Cc 区北壁土層セクション図・・・・・・・・・・・・・・52

図96 塔の越遺跡 08Cc 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・52

図97 塔の越遺跡 08Fd 区遺構図・・・・・・・・・・・・・・53

図98 塔の越遺跡 08Fd 区 025SK 遺物出土分布図・土層セクション図・53

図99 塔の越遺跡 08Fd 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・54

図100 塔の越遺跡 08Fd 区 042SX 土層セクション図・・・・・・・・・・・・55

図101 塔の越遺跡 08Fd 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・55

図102 塔の越遺跡 08Fd 区北壁土層セクション図・・・・・・・・・・・・・・56

図 103	塔の越遺跡 08Fd 区出土遺物実測図	57
図 104	塔の越遺跡 08Fd・Fb・Fe 区遺構図	58
図 105	塔の越遺跡 08Fe 区北壁土層セクション図	58
図 106	塔の越遺跡 08Fe 区北壁土層セクション図	58
図 107	塔の越遺跡 08Fe 区出土遺物実測図	59
図 108	塔の越遺跡 08Fe 区 057SD 近景	59
図 109	塔の越遺跡 08Cc-Cb-Ce-Ca・08Fe 遺構図	60
図 110	塔の越遺跡 08Cb 区北壁土層セクション図	61
図 111	塔の越遺跡 08Cb 区出土遺物実測図	62
図 112	塔の越遺跡 08Ca 区北壁土層セクション図	63
図 113	塔の越遺跡 08Ca 区 040SX 出土金属実測図	63
図 114	塔の越遺跡 08Ca 区 040SX 近景	64
図 115	塔の越遺跡 08Ca 区出土遺物実測図	64
図 116	塔の越遺跡 08Ce 区出土遺物実測図	65
図 117	塔の越遺跡 08Bc-Be 区遺構図	66
図 118	塔の越遺跡 08Bc 区北壁土層セクション図	67
図 119	塔の越遺跡 08Bd 区出土遺物実測図	68
図 120	塔の越遺跡 08Bc 区出土遺物実測図	68
図 121	塔の越遺跡 08Bb 区北壁・南壁土層セクション図	69
図 122	塔の越遺跡 08Bb 区出土遺物実測図	69
図 123	塔の越遺跡 08Bd-Ba・09C・08Ab 区遺構図	70
図 124	塔の越遺跡 08Ba 区東壁・南壁土層セクション図	71
図 125	塔の越遺跡 08Ba 区 046SE・047SE 土層セクション図	71
図 126	塔の越遺跡 08Ba 区 047SE 上層遺物出土状況	72
図 127	塔の越遺跡 08Ba 区出土遺物実測図	72
図 128	塔の越遺跡 09C 区 205SE・208SE の検出状況	73
図 129	塔の越遺跡 09C 区北壁・東壁土層セクション図	73
図 130	塔の越遺跡 09C 区 205SE 平面図・側面図	74
図 131	塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土遺物実測図	74
図 132	塔の越遺跡 09C 区 205SE 側面図・土層断面図	75
図 133	塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土の大型植物遺体	75
図 134	塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (1)	77
図 135	塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (2)	78
図 136	塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (3)	79
図 137	塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (4)	80
図 138	塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (5)	81
図 139	塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (6)	82
図 140	塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (7)	83
図 141	塔の越遺跡 09C 区出土遺物実測図	84
図 142	塔の越遺跡 09C 区 208SE 平面図・土層断面図	85
図 143	塔の越遺跡 09C 区 208SE 出土遺物	85
図 144	塔の越遺跡 09C 区 206SD 土層断面図	85
図 145	塔の越遺跡 09C 区刻書須恵器実測図	85
図 146	塔の越遺跡 09C 区出土遺物実測図	86
図 147	塔の越遺跡 08B 区・09C 区掘立柱建物等配置図	87
図 148	塔の越遺跡 09C 区掘立柱建物柱穴土層セクション図	87
図 149	塔の越遺跡 08Bb 区建物 2・3 南西から	87
図 150	塔の越遺跡 09C 区掘立柱建物柱穴土層セクション図	88
図 151	塔の越遺跡 09C 区建物 1 布掘溝と 207SD	88
図 152	塔の越遺跡 09C 区建物 1 東辺布掘溝下部の柱穴列	88
図 153	塔の越遺跡 09C 区遺構外出土遺物実測図 (1)	89
図 154	塔の越遺跡 09C 区遺構外出土遺物実測図 (2)	90
図 155	塔の越遺跡 08Aa-b-c 区・09B 区遺構図	91
図 156	塔の越遺跡 08Ac 区 257SX 土層セクション図	92
図 157	塔の越遺跡 08Ac 区 257SX 出土遺物実測図	92
図 158	塔の越遺跡 08Ac 区 333SE 土層セクション図	92

図 159	塔の越遺跡 08Aa 区北壁土層セクション図	93
図 160	塔の越遺跡 08Aa 区 075SD 土層セクション図	94
図 161	塔の越遺跡 08Aa 区 075SD 出土遺物実測図	94
図 162	塔の越遺跡 08Ac 区 F ライン土層セクション図	94
図 163	塔の越遺跡 08Ac 区 208SX・210SX 出土遺物実測図	94
図 164	塔の越遺跡 08Ac 区 334SX 他土層セクション図	95
図 165	塔の越遺跡 08Ac 区 266・276・281SD 出土遺物実測図	95
図 166	塔の越遺跡 08Aa 区 B・C ライン土層セクション図	95
図 167	塔の越遺跡 08Ac 区 270SX・08Aa 区 101SX 出土遺物実測図	96
図 168	塔の越遺跡 08Aa 区出土遺物実測図	97
図 169	塔の越遺跡 08Ac 区出土遺物実測図	97
図 170	塔の越遺跡 08Ac 区出土遺物実測図	98
図 171	塔の越遺跡 08Aa 区・Ac 区：近世以降の遺構から出土した古代遺物実測図	99
図 172	塔の越遺跡 08Aa 区：近世以降の遺構から出土した古代遺物実測図	100
図 173	塔の越遺跡 08Aa 区遺構外出土遺物実測図	101
図 174	塔の越遺跡 08Ac 区遺構外出土遺物実測図	102
図 175	塔の越遺跡 09B 区遺構土層セクション図	103
図 176	塔の越遺跡 09B 区出土遺物実測図	103
図 177	塔の越遺跡 08Aa 区・Ac 区掘立柱建物等配置図	104
図 178	塔の越遺跡 08Aa 区柱穴出土遺物及び遺構出土遺物実測図	104
図 179	塔の越遺跡 08Aa 区遺構土層セクション図	105
図 180	塔の越遺跡 08Ac 区遺構土層セクション図	105
図 181	塔の越遺跡 08Ac 区建物・柵等柱穴出土遺物実測図	106
図 182	塔の越遺跡 08Ab・09A・07A-C-D 区遺構図	107
図 183	塔の越遺跡 08Ab 区・09A 区出土遺物実測図	107
図 184	塔の越遺跡 08Ab 区・09A 区掘立柱建物等の配置および遺構土層セクション図	108
図 185	塔の越遺跡 07A-B-C-D 区遺構図	109
図 186	塔の越遺跡 07 区 SB 土層セクション図	110
図 187	塔の越遺跡 07 区 SB 出土遺物実測図	111
図 188	塔の越遺跡 07C 区 400SE 平面図・側面図・土層セクション図	112
図 189	塔の越遺跡 07C 区 400SE 出土遺物実測図	112
図 190	塔の越遺跡 07A 区遺構出土遺物実測図	113
図 191	塔の越遺跡 07C 区遺構出土遺物実測図	114
図 192	塔の越遺跡 07A-B-C 区遺構図	115
図 193	塔の越遺跡 07A 区東部遺構種出土遺物実測図	116
図 194	塔の越遺跡 10 区南壁土層セクション図	116
図 195	塔の越遺跡 07B 区出土遺物実測図	116
図 196	塔の越遺跡 07 区掘立柱建物等配置図	117
図 197	塔の越遺跡 07A 区柵 1 柱穴土層セクション図	118
図 198	塔の越遺跡 07A 区柵 1 柱穴出土遺物実測図	118
図 199	塔の越遺跡 07C 区掘立柱建物柱穴土層セクション及び出土遺物実測図	118
図 200	塔の越遺跡 07A 区北壁土層セクション図	119
図 201	塔の越遺跡 07Ac 区・07D：遺構外及び近世以降の遺構から出土した古代遺物実測図	120
図 202	塔の越遺跡 07C 区遺構外出土遺物実測図	121
図 203	塔の越遺跡 07C 区 400SE 出土木製品実測図	120
図 204	塔の越遺跡 07C 区 400SE 出土木製品実測図	123
図 205	塔の越遺跡出土木製品実測図	124
(3) 中世		
図 206	塔の越遺跡 08G 区遺構平面図	125
図 207	塔の越遺跡 08G 区土坑土層セクション図	125
図 208	塔の越遺跡 08Ic 区出土遺物実測図	125
図 209	塔の越遺跡 08G 区出土遺物実測図	125

図 210	塔の越遺跡 Ha 区遺構平面図	125
図 211	塔の越遺跡 08Ha 区出土遺物実測図	125
図 212	塔の越遺跡 08Ca 区遺構平面図	126
図 213	塔の越遺跡 08Ca 区遺構土層セクション図	126
図 214	塔の越遺跡 08Ca 区出土遺物実測図	126
図 215	塔の越遺跡 08Ba 区出土遺物実測図	126
図 216	塔の越遺跡 09C 区遺構平面図、204SD 土層セクション図	127
図 217	塔の越遺跡 09C 区出土遺物実測図	127
図 218	塔の越遺跡 07A・C 区遺構平面図	128
図 219	塔の越遺跡 07A・B・C 区出土遺物実測図	129
図 220	塔の越遺跡 07 区遺構外出土遺物実測図	129
図 221	塔の越遺跡 07B 区 690SE 土層セクション図	129
図 222	塔の越遺跡 10 区南壁土層セクション図	129
図 223	塔の越遺跡 07A・B 区、10 区遺構平面図	130

(4) 近世

図 224	塔の越遺跡 08Ea・08Ec-Eb・08Fa 区遺構図	131
図 225	塔の越遺跡各調査区出土遺物実測図	131
図 226	塔の越遺跡 08Ba-b-c 区遺構図	132
図 227	塔の越遺跡 08B 区各遺構土層セクション図	132
図 228	塔の越遺跡 08Bb 区 040SD 出土遺物実測図	132
図 229	塔の越遺跡 08Ba・09C・08Aa-c 区遺構図	133
図 230	塔の越遺跡 08A 区遺構土層セクション図	133
図 231	塔の越遺跡 08Aa 区遺構出土遺物実測図	133
図 232	塔の越遺跡 09C 区遺構土層セクション図	133
図 233	塔の越遺跡 09C 区遺構出土遺物実測図	133
図 234	塔の越遺跡 08Ac 区出土遺物実測図	134
図 235	塔の越遺跡 07A 区出土遺物実測図	134
図 236	塔の越遺跡 07C 区出土遺物実測図	134
図 237	塔の越遺跡 07A-C-D 区遺構図	135
図 238	塔の越遺跡 07D 区出土鉄器実測図	135
図 239	塔の越遺跡 10 区出土遺物実測図	135
図 240	塔の越遺跡 07A 区各遺構土層セクション図	135
図 241	塔の越遺跡 07A-B・10 区遺構図	136
図 242	塔の越遺跡 07B 区 700SE 土層セクション図	136
図 243	塔の越遺跡 07B 区出土遺物実測図	137
図 244	塔の越遺跡 07 各区出土石製品実測図	138
図 245	塔の越遺跡 07A 区 044SD 出土遺物実測図	138

第 3 章

図 246	長野北浦遺跡調査区配置図	139
-------	--------------	-----

(1) 古墳

図 247	長野北浦遺跡古墳前期後葉遺構全体図	140-141
図 248	長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 北から	141
図 249	長野北浦遺跡 07A 区北部竪穴建物跡群 北から	141
図 250	長野北浦遺跡 07D 区 012SK 出土鏃形石製品実測図	141
図 251	長野北浦遺跡西部古墳前期遺構図	142
図 252	長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 土層セクション図	142
図 253	長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 遺物出土分布図 - 短軸	142
図 254	長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 遺物出土分布図 - 長軸	142
図 255	長野北浦遺跡 07Bb0259SD 土層セクション図	143
図 256	長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 土器群出土状況 北西から	143
図 257	長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 土器群出土状況図	143
図 258	長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 出土土器実測図	144
図 259	長野北浦遺跡 08D 区 048SD 土層セクション図	145
図 260	長野北浦遺跡 08D 区 048SD 出土土器実測図	145
図 261	長野北浦遺跡 08D 区 048SD 土層断面	145

図 262	長野北浦遺跡中央部古墳前期遺構図	146
図 263	長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 土層セクション図	147
図 264	長野北浦遺跡 08C 区 0167SD・07Ba 区 0240SD 周辺遺物出土分布図	147
図 265	長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 土器群分布状況・土層断面 南西から	147
図 266	長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 土器群出土状況図	148
図 267	長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 出土土器実測図	149
図 268	長野北浦遺跡 07Ba 区 0242SD 下層出土土器実測図	149
図 269	長野北浦遺跡 07Ba 区 0241SD・08C 区 167SD 土器分布図	149
図 270	長野北浦遺跡 07Ba 区 0241SD 出土土器実測図	149
図 271	長野北浦遺跡 07Ba 区 0241SD 出土土器実測図	150
図 272	長野北浦遺跡 07Ba 区 0241SD 土器出土状況図	150
図 273	長野北浦遺跡 07Ba 区 0257SX 出土土器実測図	150
図 274	長野北浦遺跡 07Ba 区 0242SD 土層セクション図	151
図 275	長野北浦遺跡 07Ba 区 0242SD 出土土器実測図	151
図 276	長野北浦遺跡 08D 区 029SI・07Ba 区 0242SD 土器出土分布図	151
図 277	長野北浦遺跡 08D 区 029・30SI 出土遺物実測図	151
図 278	長野北浦遺跡 08D 区 050SI 051SI 054SX 土器出土分布図	152
図 279	長野北浦遺跡 08D 区北壁土層セクション図	152
図 280	長野北浦遺跡 08D 区 050SI 出土土器実測図	152
図 281	長野北浦遺跡 08D 区 054SX 出土土器実測図	153
図 282	長野北浦遺跡 08D 区 054SX 土層セクション図	153
図 283	長野北浦遺跡 08D 区 054SX 土層断面 北西から	153
図 284	長野北浦遺跡 08D 区 0245SD 周辺プラン	154
図 285	長野北浦遺跡 08D 区 0245 出土土器実測図	154
図 286	長野北浦遺跡 08D 区 0245SD 北から	154
図 287	長野北浦遺跡 08D 区 0172SK 出土土器実測図	154
図 288	長野北浦遺跡 08D 区 0245SD 土層セクション図	154
図 289	長野北浦遺跡東部古墳前期遺構図	155
図 290	長野北浦遺跡 07Ba 区 140SK 土器出土分布図	156
図 291	長野北浦遺跡 07Ba 区 SK140 土層セクション図	156
図 292	長野北浦遺跡 07B 区 0140SK 出土土器実測図	156
図 293	長野北浦遺跡 07Ba 区 SX140 土層断面	156
図 294	長野北浦遺跡各調査区出土遺物実測図	156
図 295	長野北浦遺跡 07A 区 086SI・08B 区 094SI・095SI 出土状況図	157
図 296	長野北浦遺跡 07A 区 086SI 土層セクション図	157
図 297	長野北浦遺跡 08B 区 094SI 出土種子	157
図 298	長野北浦遺跡 08B 区 094SI・095SI 土層セクション図	157
図 299	長野北浦遺跡 07A 区 086SI 出土土器実測図	157
図 300	長野北浦遺跡 07AB 区 086SI 遺物分布状況図	158
図 301	長野北浦遺跡 08B 区 094SI・095SI 出土土器実測図	158
図 302	長野北浦遺跡 07A 区 090SI・091SI・092SK 土器群出土状況図	159
図 303	長野北浦遺跡 07A 区 090SI・091SI 土層セクション図	159
図 304	長野北浦遺跡 07A 区 090SI 出土土器実測図	159
図 305	長野北浦遺跡 07A 区 092SK 出土土器実測図	159
図 306	長野北浦遺跡 07A 区 090SI 土器群出土状況図	159
図 307	長野北浦遺跡 08B 区 096SI・097SK 出土土器分布図	160
図 308	長野北浦遺跡 08B 区 097SK 出土土器実測図	160
図 309	長野北浦遺跡 08B 区 097SK 土層セクション図	160
図 310	長野北浦遺跡 08B 区 097SK 断面 南から	160
図 311	長野北浦遺跡 08B 区 096SI 土層セクション図	160
図 312	長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 出土土器出土分布図	161
図 313	長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 土層セクション	161
図 314	長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 掘り下げ状況 西から	161
図 315	長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 出土土器実測図	161

図 316 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土土器実測図・・・・・・・・・・161

図 317 長野北浦遺跡 07A 区 005SD 土層セクション図・・・・・・・・・・162

図 318 長野北浦遺跡 07A 区 005SD プラン図・・・・・・・・・・162

図 319 長野北浦遺跡 07A 区 005SD 掘り下げ状況 北西から・・162

(2) 古代

図 320 長野北浦遺跡古代遺構図・・・・・・・・・・163

図 321 長野北浦遺跡 08D 区 068SD 土層セクション図・・・・・・・・・・163

図 322 長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 黒色粘土シルト層上部張り蓋出土状況・・・・・・・・・・163

図 323 塔の越遺跡・長野北浦遺跡瓦塔片出土分布図・・・・・・・・・・164

(3) 中世

図 324 長野北浦遺跡 08D 区南北土層セクション図 1・・・・・・・・・・165

図 325 長野北浦遺跡 08D 区南北土層セクション図 2・・・・・・・・・・165

図 326 長野北浦遺跡 08D 区 036SD 出土遺物実測図・・・・・・・・・・165

図 327 長野北浦遺跡 08D 区 036SD 最下層出土遺物実測図・・・・165

図 328 長野北浦遺跡中世遺構全体図・・・・・・・・・・166-167

図 329 長野北浦遺跡 08C 区東壁土層セクション図・・・・・・・・・・166-167

図 330 長野北浦遺跡 07C 区南北溝土層セクション図・・・・・・・・・・167

図 331 長野北浦遺跡 08D 区 069SK 出土遺物実測図・・・・・・・・・・167

図 332 長野北浦遺跡 08D 区各遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・167

図 333 長野北浦遺跡 08C 区各遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・168

図 334 長野北浦遺跡 08C 区 0232SE 出土木製品実測図・・・・・・168

図 335 長野北浦遺跡 07Ba 区 232SE プラン・土層セクション図・169

図 336 長野北浦遺跡 07Ba 区 0232SE 南西から・・・・・・・・・・169

図 337 長野北浦遺跡 07Ba 区 0232SE 出土遺物実測図・・・・・・・・・・169

図 338 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・170

図 339 長野北浦遺跡区画溝東部遺構図・・・・・・・・・・171

図 340 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・171

図 341 長野北浦遺跡 07A 区南壁土層セクション図・・・・・・・・・・171

図 342 長野北浦遺跡 08B 区 081SX 土層セクション図・・・・・・・・・・172

図 343 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・172

図 344 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・172

図 345 長野北浦遺跡 07A 区北西壁土層セクション図・・・・・・・・・・172

図 346 長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸検出状況 北西から・・172

図 347 長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸底編笠出土状況 北西から・・172

図 348 長野北浦遺跡中世東部プラン・・・・・・・・・・173

図 349 長野北浦遺跡 07A 区 006SE 出土遺物実測図・・・・・・・・・・173

図 350 長野北浦遺跡 07A 区各井戸土層セクション図・・・・・・・・・・173

図 351 長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸底編笠洗浄後の状況・・174

図 352 長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸材実測図 (1)・・・・・・・・・・175

図 353 長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸材実測図 (2)・・・・・・・・・・176

図 354 長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸材実測図 (3)・・・・・・・・・・177

図 355 長野北浦遺跡 07A 区 001・003SD 出土遺物実測図・・・・178

(4) 近世

図 356 長野北浦遺跡東端の南北溝群 北から・・・・・・・・・・179

図 357 長野北浦遺跡近世 1 期遺構図・・・・・・・・・・180-181

図 358 長野北浦遺跡近世 1 期遺構図・・・・・・・・・・182-183

図 359 長野北浦遺跡近世 1 期遺構図・・・・・・・・・・184

図 360 長野北浦遺跡近世 2 期遺構図・・・・・・・・・・185

図 361 長野北浦遺跡近世 2 期遺構図・・・・・・・・・・186-187

図 362 長野北浦遺跡近世 2 期遺構図・・・・・・・・・・188-189

図 363 長野北浦遺跡近世 3 期遺構図・・・・・・・・・・190-191

図 364 長野北浦遺跡近世 3 期遺構図・・・・・・・・・・192-193

図 365 長野北浦遺跡近世 3 期遺構図・・・・・・・・・・194

図 366 長野北浦遺跡近世 2 期建物・井戸分布図・・・・・・・・・・195

図 367 長野北浦遺跡近世 2 期建物・井戸分布図・・・・・・・・・・196-197

図 368 長野北浦遺跡 07Ba 区 034SE 土層セクション図・・・・・・・・・・198

図 369 長野北浦遺跡 07Ba 区 020SE 土層セクション図・・・・・・・・・・198

図 370 長野北浦遺跡 07Ba 区 020SE 出土遺物実測図・・・・・・・・・・198

図 371 長野北浦遺跡 07C 区 001ST 出土遺物実測図・・・・・・・・・・198

図 372 長野北浦遺跡 07Ba 区 020SE 出土木製品実測図・・・・・・・・・・199

図 373 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・200

図 374 長野北浦遺跡 07B 区 187SD 出土遺物実測図 (1)・・・・・・・・201

図 375 長野北浦遺跡 07B 区 187SD 出土遺物実測図 (2)・・・・・・・・202

図 376 長野北浦遺跡 07B 区出土木製品実測図・・・・・・・・・・203

図 377 長野北浦遺跡 07B 区水田関係遺構出土遺物実測図・・・・・・204

図 378 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・204

図 379 長野北浦遺跡 08D 区井戸土層セクション図・・・・・・・・・・204

図 380 長野北浦遺跡 08D 区 011・028・030SD 土層セクション図・204

図 381 長野北浦遺跡 08D 区 001・002SE 出土遺物実測図・・・・・・204

図 382 長野北浦遺跡 08D 区 011SD 出土遺物実測図・・・・・・・・・・205

図 383 長野北浦遺跡 08D 区 011SD 他各遺構出土遺物実測図・・・・206

図 384 長野北浦遺跡 08C 区 050SK (下層が 050SE) 土層セクション図・207

図 385 長野北浦遺跡 08C 区 050SK (下層が 050SE) 出土遺物実測図・207

図 386 長野北浦遺跡 08C 区 050SE (上層が 050SK) 出土遺物実測図・207

図 387 長野北浦遺跡 08C 区井戸土層セクション図・・・・・・・・・・208

図 388 長野北浦遺跡 08C 区 104・105SE 出土遺物実測図・・・・208

図 389 長野北浦遺跡 08C 区柱穴土層セクション図・その他遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・208

図 390 長野北浦遺跡 08B 区東西土層セクション図・・・・・・・・・・209

図 391 長野北浦遺跡 08B 区 019SE 土層セクション図・・・・・・・・・・209

図 392 長野北浦遺跡 08B 区 019SE 出土遺物実測図・・・・・・・・・・209

図 393 長野北浦遺跡 08B 区柱穴土層セクション図・・・・・・・・・・209

図 394 長野北浦遺跡 08B 区 061SK 土層セクション図・出土遺物実測図・210

図 395 長野北浦遺跡 08B 区 022SE 出土遺物実測図・・・・・・・・・・210

図 396 長野北浦遺跡 08B 区各遺構出土遺物実測図・・・・・・・・・・210

図 397 長野北浦遺跡 07A 区 101SE 土層セクション図・・・・・・・・・・211

図 398 長野北浦遺跡 07A 区 101SE 検出状況 南から・・・・・・・・・・211

図 399 長野北浦遺跡 07A 区 006SD 土層セクション図・・・・・・・・・・211

図 400 長野北浦遺跡 07A 区東端溝群土層セクション図・出土遺物実測図・211

図 401 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土木製品実測図 (1)・・・・・・・・212

図 402 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土木製品実測図 (2)・・・・・・・・213

図 403 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土木製品実測図 (3)・・・・・・・・214

図 404 長野北浦遺跡各区出土木製品実測図 (1)・・・・・・・・・・215

図 405 長野北浦遺跡各区出土木製品実測図 (2)・・・・・・・・・・216

第 4 章

1

図 406 試料採取位置平面図 (奥野・蔭山 2009 を改変)・・・・・・・・217

図 407 試料採取位置断面図 (奥野・蔭山 2009 を改変)・・・・・・・・218

図 408 長野北浦遺跡から出土した昆虫化石・・・・・・・・・・223

2

図 409 長野北浦・塔の越遺跡周辺の表層地形と等高線図・・・・・・・・226

図 410 表層地形等高線図を基にした鳥瞰図・・・・・・・・・・227

図 411 調査範囲を通る東西地形断面図・・・・・・・・・・227

図 412 長野北浦・塔の越遺跡における深掘層序断面図・・・・・・・・229

図 413 長野北浦・塔の越遺跡における試錐柱状図・・・・・・・・・・230

第 5 章

1

図 414 古墳時代前期の土器群 (1)・・・・・・・・・・237

図 415 古墳時代前期の土器群 (2)・・・・・・・・・・238

図 416 土器群の変遷 (1)・・・・・・・・・・239

図 417 土器群の変遷 (2) 239

図 418 鋳形石製品の諸例 241

図 419 周辺における前期後半の古墳の分布 241

図 420 地形の復元と古墳の分布 242

図 421 塔の越遺跡出土鉄製品 243

図 422 周辺における中・後期古墳の分布 243

図 423 朝日遺跡 SZ1001 (検見塚) 出土埴輪 245

図 424 岩倉城遺跡の古墳 245

図 425 岩倉城遺跡 2003 年度立会い調査出土埴輪 246

2

図 426 三宅川旧河道周辺の地形概略と遺跡分布 250

図 427 瓦塔出土地点からみた造立推定地と表層土の移動 250

図 428 塔の越遺跡における古代の主要な遺構 252

図 429 塔の越遺跡における古代の遺構変遷 254

図 430 塔の越遺跡の刻書土器実測図とその分布状況 256

第 6 章

図 431 長野北浦・塔の越遺跡の変遷図 (等高線図は鬼頭論文に拠る) . 260

表

第 2 章

表 1 塔の越遺跡調査工程 3

表 2 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土の動物遺体 75

表 3 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土の大型植物遺体 (括弧は破片数を示す) . 75

第 3 章

表 4 長野北浦遺跡調査工程 139

第 4 章

表 5 長野北浦遺跡採取試料一覧 220

表 6 長野北浦遺跡から出土した昆虫化石 222

表 7 深掘層序の放射性炭素年代測定結果 (1) 232

表 8 深掘層序の放射性炭素年代測定結果 (2) 233

表 9 深掘層序 (TK1) の放射性炭素年代測定結果 233

表 10 深掘層序 (TK2) の放射性炭素年代測定結果 233

第 5 章

表 11 尾張平野における中小古墳一覧表 (発掘調査によって検出された古墳) . 244

長野北浦遺跡東端



長野北浦遺跡中部



長野北浦遺跡西端・塔の越遺跡東端



塔の越遺跡東部・跨線橋入口付近：08Ab 区・09A 区



塔の越遺跡東部：08Ba 区以東



長野北浦遺跡・塔の越遺跡
現況
平成 24 年 2 月 28 日現在

塔の越遺跡遺構写真図版

- 1 塔の越遺跡・長野北浦遺跡航空写真 垂直方向
- 2 塔の越遺跡・長野北浦遺跡航空写真／西側斜め 南から
- 3 塔の越遺跡・長野北浦遺跡航空写真／東側斜め 南から
- 4 08G 区 2 面・検出 2 遺物群出土状況
- 5 08Ha 区 1 面・010SE 断面、08Ea 区 1 面
- 6 08Ea 区 12 面・土坑断面、08Eb 区 1 面 025SX 他
- 7 08Eb 区 022SK・023SK 遺物出土状況・断面
- 8 08Fa 区 1 面・調査区壁断面・各遺構
- 9 08Fc 区 1 面各遺構、08D 区近景・各遺構
- 10 08D 区 2 面 018SK 他、08Cd 区全景
- 11 08Cd 区 010SD
- 12 08Cc 区竪穴建物群
- 13 08Cc 区 014SI・015SI 掘り下げ状況
- 14 08Cb 区 028SD 他
- 15 08Ce 区遺物群出土状況、08Ca 区 040SX 他
- 16 08Fd 区 1 面全景・025SX 細部
- 17 08Fd 区各遺構
- 18 08Fe 区 057SD、08Bc 区全景
- 19 08Bc 区柱穴断面・011SD、下層確認状況
- 20 08Bb 区 1 面検出状況・柱穴群掘り下げ状況
- 21 08Bb 区柱穴断面
- 22 08Ba 区検出状況・遺構掘り下げ状況・046SE 近景
- 23 08Ba 区 046SE・047SE 掘り下げ状況
- 24 09C 区 1 面・2 面全景
- 25 09C 区 2 面全景・404-408SE 掘り下げ状況・207SD 他各遺構遺物出土状況
- 26 09C 区 205SE 掘り下げ状況
- 27 09C 区 205SE 掘り下げ状況・208SE 掘り下げ・251SD 遺物出土状況
- 28 08Aa 区 1 面・2 面
- 29 08Aa 区北部 1 面・2 面
- 30 08Aa 区柱穴・土坑断面
- 31 08Aa 区 101SX 他遺物出土状況等細部
- 32 08Aa 区 149SD
- 33 08Ac 区遺構全景・検出状況
- 34 08Ac 区柱穴断面・270SX 遺物出土状況・333SE 断面・257SX 断面
- 35 08Ac 区近景・149SD 各方向・140SD 断面
- 36 09B 区 1 面・2 面・112SE 掘り下げ状況
- 37 08Ab 区 2 面・154SD・154SD 断面
- 38 08Ab 区 175SK・135-136SK 断面
- 39 08Ab 区柱穴検出状況・柱穴断面
- 40 08Ab 区 182SX 掘り下げ状況、09A 区全景・柱穴断面
- 41 07A 区 1 面全景・近景
- 42 07A 区 2 面全景・中景・掘立柱建物群近景
- 43 07A 区柱穴断面・170SB・226SB
- 44 07A 区各遺構
- 45 07A 区 050SD・256SK
- 46 07B 区 1 面全景・各遺構
- 47 07B 区 737SX 出土状況
- 48 10 区 1 面・2 面・21SD 遺物出土状況
- 49 07C 区 1 面・2 面全景
- 50 07C 区 3 面全景・400SE 掘り下げ状況
- 51 07C 区 621-624SK 検出状況・柱穴断面他
- 52 07C 区 SB435・SB673・SB675

長野北浦遺跡遺構写真図版

- 1 07A 区 1 面全景
- 2 08A 区 1 面全景・005SE・006SE 他
- 3 07A 区礎板出土状況・各井戸
- 4 07A 区中世区画溝東部コーナー付近・08B 区 081SX
- 5 08B 区 2 面柱穴群・礎板・柱根・019SE・022SE
- 6 07A 区 005SD・古墳前期遺構群
- 7 07A 区古墳前期遺構と遺物、08B 区古墳前期遺構と遺物
- 8 07Ba 区 1 面全景・020SE・034SE・礎板
- 9 07Ba 区 2 面全景・0140SK 検出状況・0238SD
- 10 07Ba 区 0240SD 近景・01240SD 遺物出土状況・242SD 断面
- 11 07Ba 区 0241SD 近景・0242SD 近景
- 12 08C 区 1 面全景・柱穴礎板出土状況
- 13 08C 区 2 面全景・柱穴礎板出土状況・同柱根出土状況・050SE 桶出土状況他

- 14 08C 区 088SE 掘り下げ状況・0104-0105SE
- 15 08D 区 1 面検出状況・1 面遺構・001-002SE 断面
- 16 08D 区 048SD・050-051SI 近景・土器出土状況
- 17 07Bb 区 1 面全景・同近景、07Ba 区 0232SE 掘り下げ状況
- 18 07Bb 区 0259SD 周辺・0259SD 遺物出土状況
- 19 07C 区全景・010SD 近景・029SD 近景
- 20 07D 区全景・012SK 鐵形石製品出土状況

遺物写真図版

●塔の越遺跡

- 1 07A 区
- 2 07A 区 /07C 区
- 3 07B 区 737SX 集合 /07C 区 /08Aa 区
- 4 08Aa 区
- 5 08Ab 区 175SK 集合 /08Ab 区 /08Ac 区
- 6 08Ac 区 /08Ba 区
- 7 08Ba 区 /08Ca 区 /08Cb 区
- 8 08Cc 区 /08Cd 区 /08Ce 区
- 9 08D 区 /08Eb 区
- 10 08Eb 区 /08Fa 区 /08Fc 区 /08Fd 区 /08Fe 区
- 11 08G 区 /08Ha 区 /09C2 区
- 12 09C2 区 刻書須恵器
- 13 刻書須恵器、漆付着須恵器、羽口
- 14 埴輪、管玉、石斧

●長野北浦遺跡

- 14 土師器、鐵形石製品、軒平瓦片、瓦塔片
- 15 07Bb 区 0259SD 出土土器
- 16 09C 区 205SE 井桁復元、集水升復元
- 17 09C 区 205SE 集水升部材
- 18 09C 区 205SE 隅柱、08A 区 006SE 横棧他
- 19 下駄、曲物

塔の越遺跡西部：08G・E・H・F 区界交差点付近



塔の越遺跡西端：大江用水付近



大江用水

第1章 調査と遺跡の概要

1. 調査の概要

(1) 調査の経緯

愛知県は稲沢市において懸案であった JR 線をまたぐ東西交通の緩和を目的に、都市計画道路稲沢西春線の建設を策定した。建設事業は平成 19 年度に開始されることになり、計画予定地に所在する長野北浦遺跡と塔の越遺跡の発掘調査が必要になった。愛知県教育委員会は愛知県建設部と協議を行い、長野北浦遺跡と塔の越遺跡の平成 19 年度における本調査開始と、同年度に塔の越遺跡の試掘調査を計画した。

公益財団法人愛知県スポーツ・振興財団愛知県埋蔵文化財センターは、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成 19 年度に長野北浦遺跡・塔の越遺跡の発掘調査を開始した。

(2) 調査の経過

平成 19 年度は長野北浦遺跡の橋脚及び道路建設部分と塔の越遺跡の道路建設部分、平成 20 年度は工事計画の変更によって追加調査が必要になった長野北浦遺跡 JR 敷地寄りの該当箇所と塔の越遺跡西部の県道沿い地区、平成 21 年度は塔の越遺跡の買収の遅れた地区、平成 22 年度には塔の越遺跡で最後まで残った地区の調査を行った。このように長野北浦遺跡は平成 19 年度から平成 20 年度の 2 ヶ年、塔の越遺跡は平成 19 年度から平成 22 年度までの 4 ヶ年にわたり発掘調査を実施した。

その間、平成 19 年度と平成 20 年度には塔の越遺跡で現地（および地元）説明会を実施し、多くの見学者を得て調査成果を県民に公開した。長野北浦遺跡については平成 19 年度に随時見学を受け入れ、また毎週速報を配布して成果の公開に努めた。

(3) 整理報告業務

平成 22 年から平成 23 年にかけて報告書作成にむけた整理業務を進め、平成 23 年度末に報告書を刊行した。

従来は当センターにおいて整理業務と報告書作成を一体で進めて、刊行は最終年度に実施していたが、今回は愛知県建設部の事業計画にあわせて、整理業務 2 年目での刊行となった。

出土遺物はコンテナ 211 箱に加えて大形の木製品が含まれており、当センターで可能な作業量を勘案して一部作業を外部に委託して進めた。報告書掲載遺物には登録番号を付してコンテナに収納して整理業務は終了し、報告書の刊行をもって業務全体が完了した。

2. 遺跡の環境

(1) 地理的環境

長野北浦遺跡と塔の越遺跡は稲沢市道を挟んで隣接して東西に広がる二つの遺跡で、時期的には一部が重複しており、考古学的に截然と区分することは難しい。

遺跡は旧三宅川の左岸自然堤防を中心に展開しており、遺跡（現地表ではない）の上面高度は最高所で標高 5.5m である。この自然堤防における遺跡形成は 4 世紀を遡らないので、それ以降に形成されたものである。それ以前の旧地表と想定される堆積層は遺跡のさらに下部、標高 2.5m あたりで検出された黒色粘土質シルト層であり、下津城下層でも近い高度で類似層が検出されている。関係する遺物は縄文後期末から弥生前期であり、おそらく当該期には別のエリアに自然堤防が形成されていたのであろう。塔の越遺跡 07A 区で出土した明らかに縄文時代に属す定角式石斧は下層に包含層が存在したことを示唆するが、所在は不明である。

(2) 歴史的環境

塔の越遺跡に深く関係するのが尾張国府（国衙）である。塔の越遺跡の平成 20 年度最西端調査区である 08Ic 区から約 370m 南西に位置している。そのため、今回の調査では古代に属す遺構・遺物の出土が予想され、結果もまさのその通りであった。とりわけ塔の越遺跡で 9 世紀を遡る井戸が検出されたことは注目される。また、塔の越遺跡が属す字名である「治郎丸」は中世の「名」の遺名であった可能性は高いが、調査では耕作地を検出したに過ぎず、核心を掴むまでには至らなかった。他方、古墳前期に始まり、古墳後期に続く墳墓群を検出したことは、従来は台地や丘陵を中心に考えられてきた「古墳群」を考え直す上で大きな成果であった。

一方、長野北浦遺跡はまったく未知数であったが、古墳前期の遺構群を検出したことは大きな成果であった。また、長野北浦遺跡の南に隣接して古刹「万徳寺」が位置していることから中世の遺構・遺物の存在も想定されたが、近世以降の開田が広範囲に及んでかなりの部分が滅失していた。しかし、近世について長野北浦遺跡では礎板をもつ掘立柱建物群が多数検出された。調査例も少ない近世集落の詳細が把握できたことは大きな成果であった。実際には明治期まで下る遺構・遺物も存在するわけだが、地域の歴史資料として重要であることは確かである。

旧河道の復元

青木川は日光川とともに大山扇状地を流下する本曾川水系の主要河川であり、現在では五条川につながっている。しかし、瀧尾平野が津島市周辺で突出する状況をもたらした三宅川の、稲沢市域における日光川に倍加する大蛇行をみると、まず流路軸が一致する青木川につながるかと考えるのが素直に思える。いっぽう、日光川は一宮市街地北西部に蛇行して南西に流れ、そのやや上流に妙興寺の東を北上する旧三宅川流路がつかがるようである。両者の蛇行は流量によって様々な姿を変え、接続と切断を繰り返した瀧尾平野の河川活動のある時点の姿を大地に刻印したものであるが、問題はそれがいつ固定されたのかということである。

- 古代の風雨災害記録（『新編一宮市史』通史編から）
神護景雲 3 年（769）：鵜沼（木曾）川の河道変更
宝龜 6 年（775）：園分寺被害
承和 4 年（837）：河道変更
貞觀 7 年（866）：台風被害？

上記のように、本曾川は古代には幾度も河道変更を引き起こしている。異常な大雨による増水が急激な浸食や河床上昇、溢水によって破壊を引き起こし、流路を移動させたのであり、それこそが洪水に伴う大災害である。おそらく、同様の事態によって当初三宅川につながっていた青木川も、古代以降赤池周辺に大量の土砂を溜めて旧流路を塞ぎ、そのために主流路を南へと向けていったのだろう。五条川との接続は人為的改変の疑いも濃厚だが、中世後半以降のことである。

さて、このエリアの低地では、本曾川上流域の豪雪地帯を含む広域におよぶ流域水量が流入することによって災害を伴わない毎春の洪水や、それに伴う中・短期の湛水も発生しただろう。湛水期間も長期となれば水域はいわば「湖沼」となるのだが、そのことは喫水の浅い和船にあって交通条件の緩和につながることを、そして河川沿いのみに交通路を限定すべきではないことを示す。それは近世以降になってとなくマイナスイメージに覆われることになった「洪水」の生活的な意味について再検討を促すものである。（石黒）

古墳

古墳時代前期前半の遺物は標高 5.8m が検出面となる陸田白山遺跡でややまとまって出土するが、遺跡は面的な広がりには乏しい。

古墳時代前期後半の遺構・遺物は下津新町遺跡、下津城下層等で検出されている。検出面の標高は 4.0 ～ 4.3m で、長野北浦遺跡の検出面の標高と変わらない。長野北浦遺跡を含めて安定した居住環境を整えた形跡は乏しく、一帯は低湿で不安定な環境下だったであろう。増水時には広範囲が水没したことも想像に難くない。長野北浦遺跡・塔の越遺跡には外部領域とも接触しつつ中小の古墳の築造が促されたが、それもごく短期間で途絶する。

流域に広範囲の安定した領域を整えるには流下する河川を整え、水量を調節する必要があった。大きく蛇行する河川の場合は、古代の河川改修がいかに大事業であったかを端的に示すが、そのことは古墳時代と古代の遺跡立地を対比することでより明瞭となる。（早野）

古代

稲沢市教育委員会による尾張国府跡調査報告歴簡要（年度は報告書刊行年、アルファベットは地点、主要遺構を掲載、時代は遺物の時期幅）

- 1979
A：古代末竪立建物 1、古代～中世
B：古代～中世／風字硯
C：古代末竪立建物 2、古代～中世
D：古代～中世
E：古代
●1980
F：古代～中世／円面硯
G：フイゴ羽口
H：中世
I：古代
J：古代～中世
K：古代
L：中世
M：中世
●1981
N：中世竪立建物 5、古代～中世／緑釉円塔・風字硯
O：古代～中世／円面硯
P（緊急調査）：中世井戸、古墳後遺・中世
●1982
A：古墳後遺・中世／銅印・緑釉円塔・埴輪
Q：中世火葬墓、古代～中世／緑釉風字硯
R：古代～中世／猿面硯
●1984
S：古代～中世／陶紋土師器
A：古墳後遺・古代～中世／緑釉円塔・風字硯
N：古代～中世
T：古墳後遺・中世
U：中世竪立建物 1、古墳後遺・古代～中世・戦国／円面硯・埴輪
V：古墳後遺・古代～中世／銅印・円面硯
●1985
U：古代～中世／陶紋土師器・円面硯・緑釉円塔
●1986
W：古代・中世・戦国
●1987
X：古代・中世
●1988
Y：古代～中世
●1989
Z：古代竪立建物 3、古代～中世／円面硯・緑釉円塔

稲沢市教委の調査結果から国府（衙）を考える上で注目されるのは、確かに覗が多いが、古代の竪立柱建物や井戸、瓦、墨書土器など、特徴的な建物群や生活の存在を窺わせる資料を欠くことである。そして、南東部の L・M は中世が主で古代の範囲外となる点は、国府（衙）関連エリアが方格を基調とせず不定形であった可能性を示す。銅印や緑釉円塔ももちろん重要なのだが、8～9 世紀の議論には参入できない。むしろ、惣社成立の前後に関わって議論すべきなのが稲沢市の調査成果のように思え、国府（衙）のイメージは漠として浮かばない。（石黒）

中世

万徳寺
寺の縁起によれば建立は古代にさかのぼる。しかし、歴史的には天暦年間（1025～1031）の伽藍焼失後、建長 6 年（1254）の常門阿闍梨による再興に始まる。そして、無住の『雑談集』が嘉元 3 年（1305）に万徳寺で慈眼によって書写されていることから存在が確かめられる。戦国時代には観劇寺の座主源雅が尾張に下り、万徳寺で活動を行って、本末寺の関係を緊密なものにしたとされる。（『稲沢市史』通史篇から：石黒）

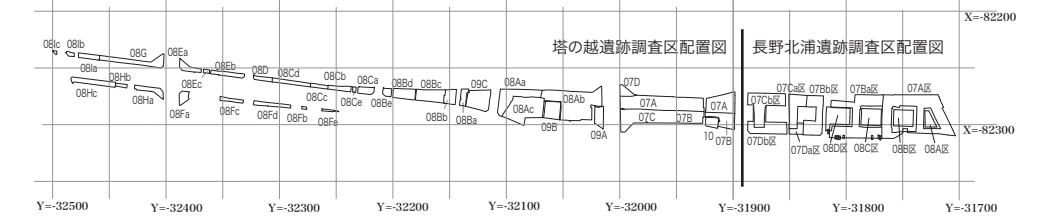
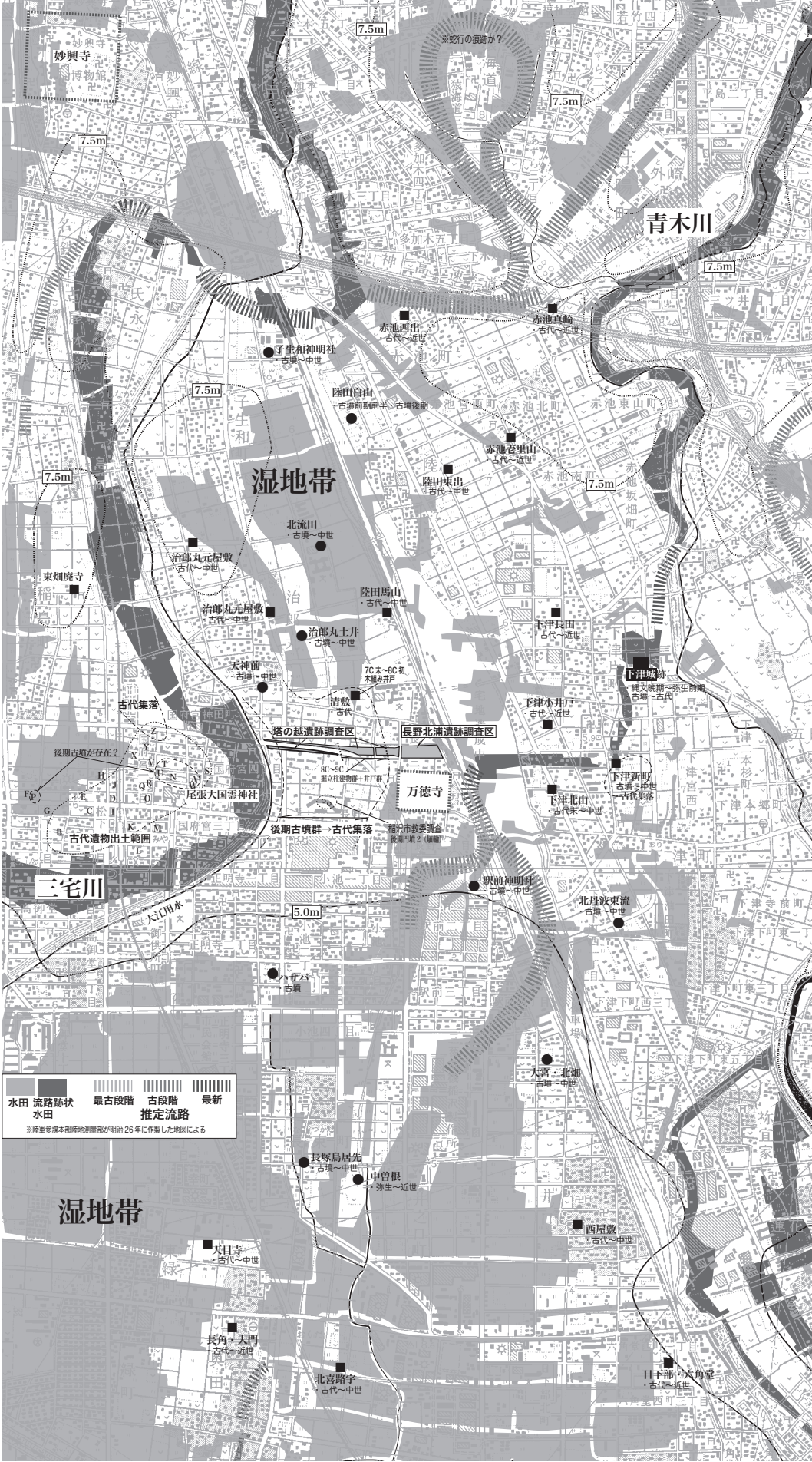


図 1 長野北浦遺跡・塔の越遺跡周辺関連分布図（1/25000）及び調査区割全体図

第2章 塔の越遺跡

1. 調査の概要

(1) 遺跡の状況

塔の越遺跡は尾張国府推定地の旧三宅川を挟んだ東側に位置し、現況は主要道路沿いが宅地化しているとはいえ、畠を中心に、ところどころに水田が分布する、濃尾平野の低平地においても比較的高所となっている。その原因こそが、旧三宅川へと収束する主要な水系が木曽川に始まり、多量の土砂を運搬して自然堤防を形成したことにある。本書の第4章でも自然堤防の形成による地表面の起伏の大きなことが示されている。

今回の調査では、当初は塔の越遺跡の残存状況は良好であったと予想していたのに反して、高まりとして残っている畠であっても耕作だけでなく天地返しによって深く攪乱が及び、また水田に至っては旧微高地を深く掘り下げて造成されているためにほとんど遺構の残存していない箇所が少なくないことが判明した。

結局、濃尾平野では弥生時代までは埋積が大きく進行して多くの遺跡は遺存状況も良好であったが、古墳時代以降は地表面の平準化によって深く埋積するエリアは河川氾濫原に収斂されていったということである。だから、塔の越遺跡が位置するような高所ではよほどの洪水でもなければ新たな堆積層によって上部が覆われることはなく、場合によっては浸食されることさえあったと考える。

さて、塔の越遺跡の形成時期は、大きく古墳、古代、中世、近世以降に分かれる。古墳は前期末と5世紀末～6世紀、古代は遺物について7世紀代も認められるが遺構は希薄であり明確には8～9世紀にまとめ、中世は15世紀代、近世は18世紀以降となる。以下の記述は上記の時期区分を中心に進める。

(2) 作業工程

調査は平成19年～平成22年の4ヶ年に及んだ。調査区配置図にある記号は、頭の数字が調査年度（西暦2000年以降の下二桁）、アルファベットが調査区の大

(小) 区名である。さらにアルファベットの次ぎに数字が付く場合は、調査の面数を意味し、例えば「09C1」なら 09C 区の 1 面目、「09C2」なら 09C 区の 2 面目という具合である。

調査区は、住宅街を横断する東部は事業者の工程等による制限があっても比較的広くとることができたが、県道に沿う西側の範囲は歩道と宅地や畠に挟まれ、出入口や安全確保のために小刻みに分割することを余儀なくされ、そのために短期間の調査となったことは工程表に示されているとおりである。その中で、調査計画上是対象とされた範囲でも極端に狭小な部分については調査を断念した箇所もあった。

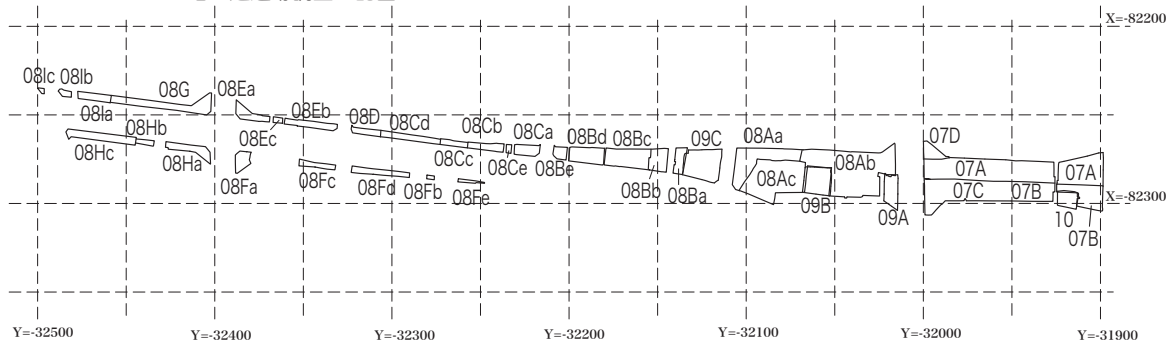
発掘調査における基本作業はマニュアルに即して実施した。本文記載に関わる部分を以下に示しておく。

検1,2,3: 包含層掘削に対応し、1面遺構群を検出するまでが検1で、1面の調査を終了後、2面遺構群を検出するまでが検2となる。
T: 試掘溝。

表 1 塔の越遺跡調査工程

[illegible]

図2 塔の越遺跡調査区配置図



2. 遺構・遺物の概要

(1) 古墳

A. 概要

古墳時代の遺構・遺物の両者が揃い、性格も明らかなのは墳墓が展開する5世紀末以降であり、それ以前の4世紀代については不明な点が多い。

塔の越遺跡の西端は、基盤が下降を始める変換点を08G区と08Ha区で検出している。詳細な時期は不明だが、三宅川の氾濫源から自然堤防への移行帯がこのあたりに存在すると考えられる。古墳時代の遺物は概ねこのラインより東側に分布しているが、08Ca区以西では遺構に伴う資料は皆無である。器種は土師器の高杯や甕、須恵器の坏蓋が主で、後者にも大形品や特殊品は無いが、鉄鏃の分布も勘案すれば墳墓が展開していた可能性は否定できない。

4世紀代は09C区から08Ab区にかけて遺物の分布があり、08Ab区では土坑(182SX)も検出されたが竪穴建物等の居住関連遺構は検出されていない。07A・B区、10区にかけては円墳を圍繞する周溝の一部を検出しており、出土遺物から当該期に属する可能性が高いと推測された。

B. 遺構・遺物

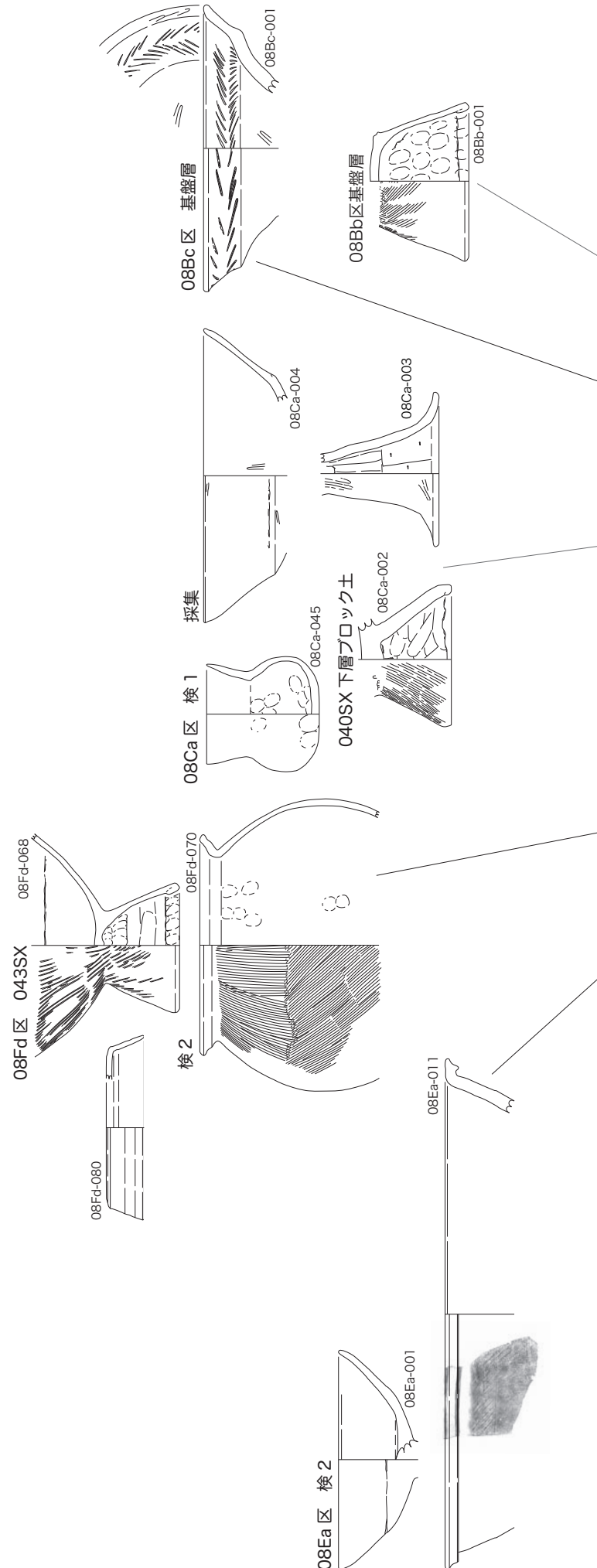
● 08B区

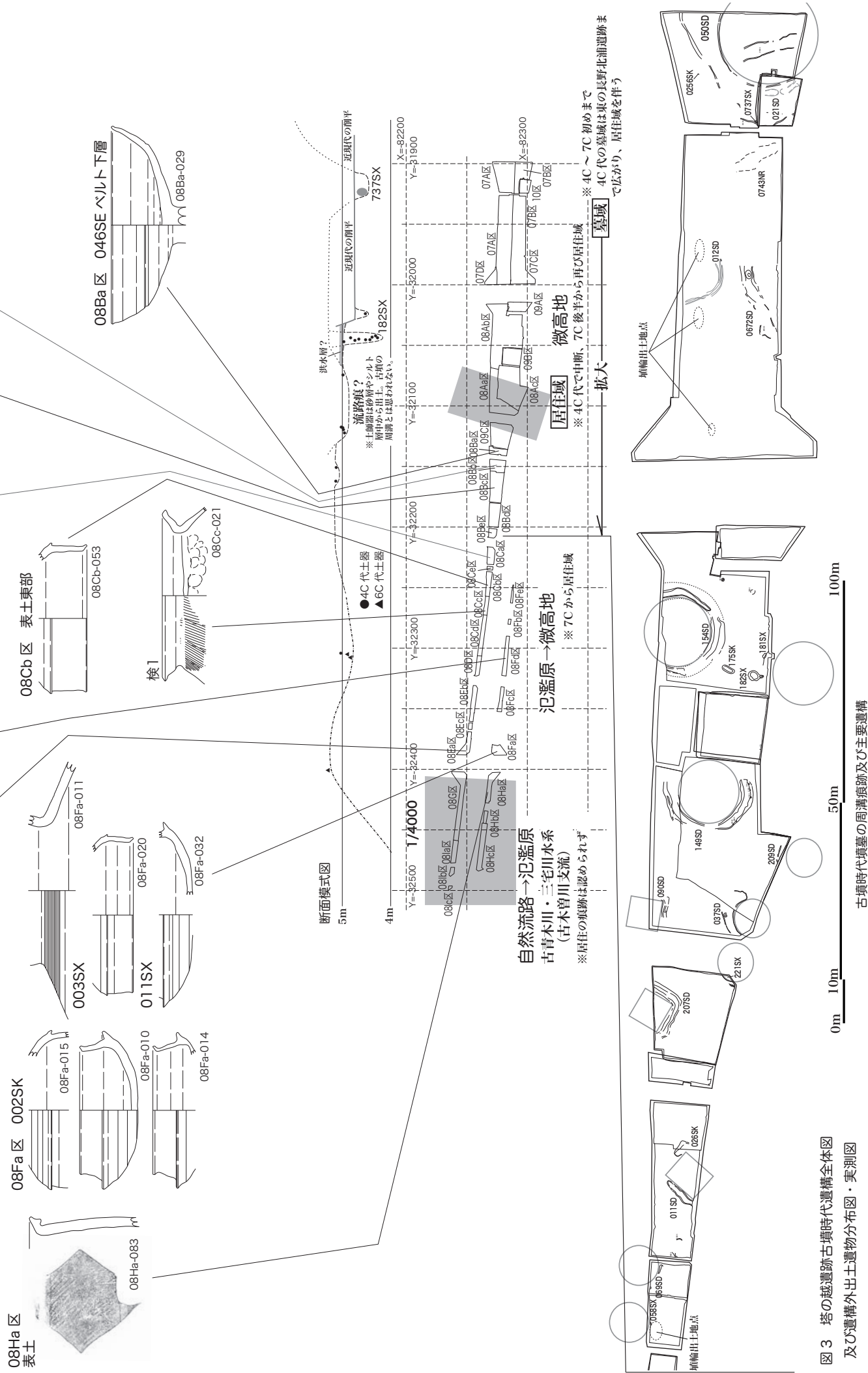
08Bd区出土埴輪片 08Bd区では瓦礫を含む攪乱坑から朝顔形や円筒形の埴輪片が出土した。瓦礫の埋め立てに伴うが、何処から持ち込まれたというよりはもともと包含されたものが攪乱坑の掘削と埋め立てに際し埋藏されたもので、原位置に近いと推測する。付着していた土は黒褐色シルトであり、058SXの堆積層に近い。

058SXは調査区北壁に沿う落ち込みとなっており、東から西にむかって深くなっているのも、調査区の壁面が斜めに切断しているのだとすれば直線的な溝が推測できる。埴輪片が確実に058SXに伴っていたとする根拠は無いが、無関係とはいえない。

08Bd区069SD 攪乱坑によって破壊され、かろうじて一部が残った。北に向かってやや弧を描いている。堆積層は058SXに類似している。

08Bb・Bc区011SD・026SX 遺構面は畠の耕作で削平されており、黒褐色シルトが堆積する011SDは掘り込みも浅い、輪郭も不確かな溝となっている。北で途切れているのは削平のためであり、本来は続いていたものと推測する。





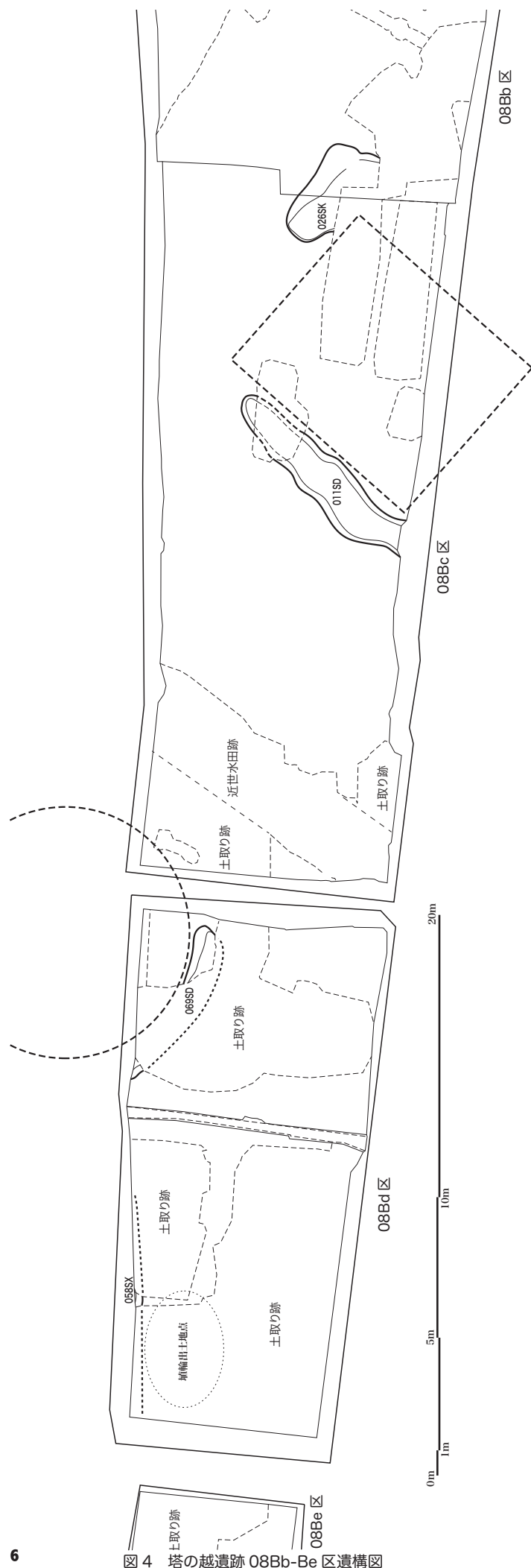


図4 埴の越遺跡 08Bb-Be 区遺構図

埴輪について

埴輪は朝顔形埴輪と円筒埴輪が出土している。形象埴輪は確認されていない。いずれも無黒斑で、堅緻に焼成されるが、須恵器質に焼成された個体はない。なお、埴輪は遺構に伴って出土したものではないが、器表面はあ

まり風化していないことから、これらの埴輪が使用された古墳は出土地点付近に存在していた可能性が高いと思われる。特に 08Bd 区出土の一群は、質感等も相互に共通することから、比較的まとまった資料として把握される。

08Bd-019、08Bd-018 は朝顔形埴輪の口縁部、口縁部から花状部の破片で、内外面に赤彩が残る。

円筒埴輪は全形を復原できる個体はないが、いずれも二突帯三段の通有の「尾張型埴輪」と考えられる。

08Bd 区

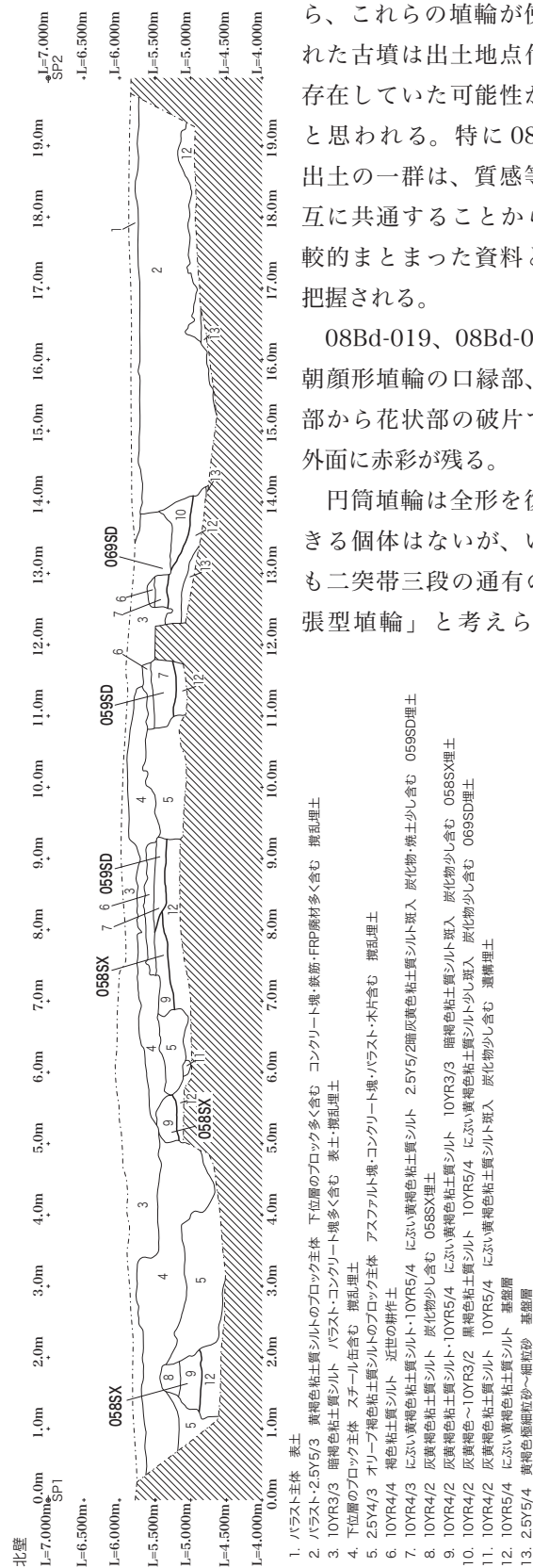


図5 埴の越遺跡 08Bb 区北壁土層セクション図

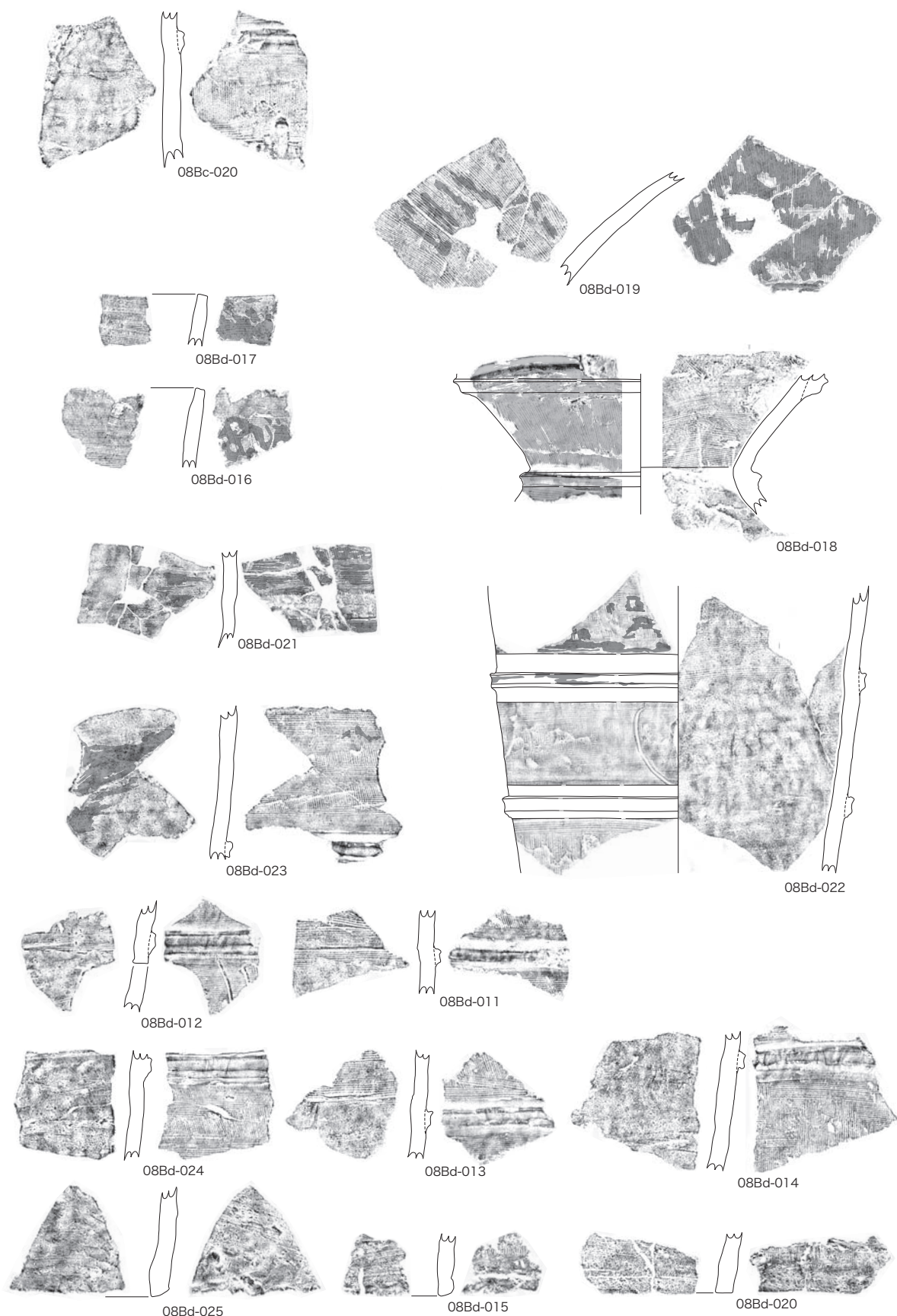


図6 塔の越遺跡 08Bd 区出土埴輪実測図

08Bd-022 のみ第二段の一段以上が残存し、突帯間の間隔は 8 cm を計測する。この突帯間の間隔についても、第二段が第一段と第三段に対して狭いという小型の通常の円筒埴輪の規格に合致するものである。突帯間には円形の透かし孔が鋭利な刀子状の工具によって切削される。透かし孔の周囲には線刻がある。他に 08Bd-012 に円形の透かし孔と線刻、08Bd-023、08Bd-024 に円形

の透かし孔が認められる。突帯はいずれもやや低平な断面M字形の形状である。なお、08Bd-021 は突帯が剥離するが、突帯設定時の痕跡は認められない。08Bd-022、08Bd-023、08Bd-013、08Bd-021 などには外面に赤彩が残る。口縁部（08Bd-017、08Bd-016）はいずれも直立する形状で、外反する形状のものは認められない。外面には赤彩が残る。

外面調整は、いずれも1次調整としてタテハケを施し、突帯の付加後、2次調整として回転ヨコハケ（C種ヨコハケ）を施す。B種ヨコハケを施す埴輪、タテハケのみに終始する埴輪は認められない。なお、（市教委2次調査区出土埴輪に認められる）タタキ調整は認められない。内面は断続的なヨコハケとナデ調整が施される。

底部（08Bd-025、08Bd-015、08Bd-020）には回転ヘラケズリが認められ、08Bd-020には底面に「味美技法」とも呼称されたかすかな段とユビズレの痕跡が認められる。底面にはヘラケズリの痕跡も観察される。ユビズレの痕跡は08Bc-020にも認められ、08Bd-025には市教委2次調査区出土埴輪底部に認められた「底部調整のため倒立させた際さらに一段底部に粘土を積みあげ、底部調整後その部位の補強のため施した手法」と同様の痕跡が認められる。

これらの埴輪は、口縁部に外反する形状のものが認められない点、外面調整として回転ヨコハケを施す埴輪のみで、B種ヨコハケを施す埴輪やタテハケに終始する埴輪が含まれない点、底部の回転ヘラケズリなどの底部調整が明確化している等の諸点から、「尾張型埴輪」の技法が完備され、普遍化する段階の所産で、東山11号窯式に対応する時期を充てておくのが妥当であろう。なお、ここで想定した時期は（本報告出土埴輪にタタキ調整は認められないものの）、市教委2次調査区で検出された古墳の時期とも概ね対応する。（早野浩二）

● 09C 区

古墳時代は2面に分かれ、上面は6世紀以降、下面は4世紀代である。

上面

207SD 主要部分はL字をなすが、西端で再び北に向けて曲がり始めているので、コ字形、もしくは方形溝の



図7 塔の越遺跡 09C1 区 207SD 検出状況 西から



図8 塔の越遺跡 09C2 区 207SD 掘り下げ状況 東から

09C 区 207SD

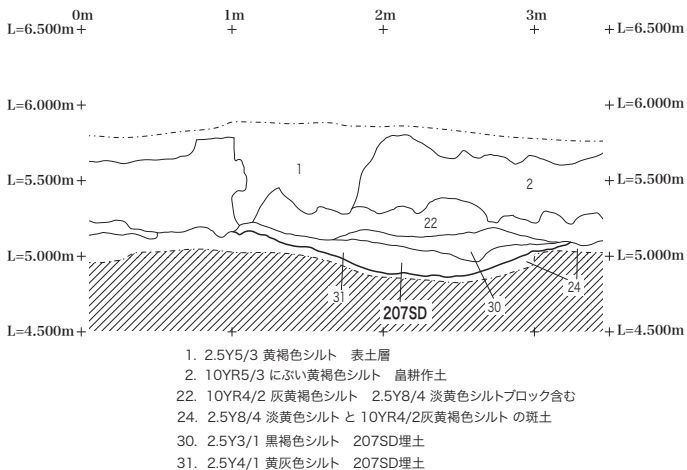


図9 塔の越遺跡 09C 区 207SD 土層セクション図

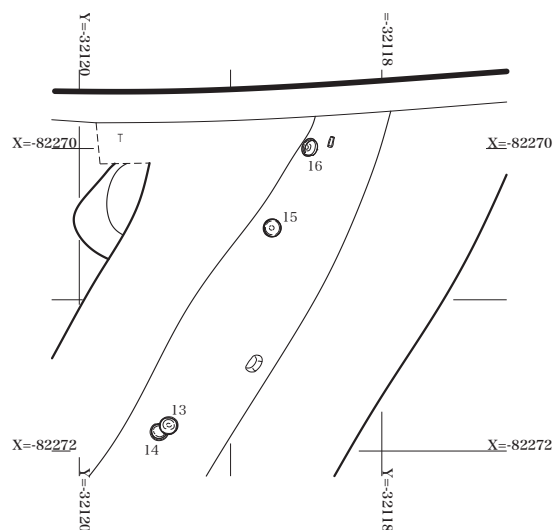


図10 塔の越遺跡 09C2 区 207SD 遺物出土状況図

南辺両隅を検出したものと判断する。

溝幅は1.5～2m、深さは調査区壁面で計測しても20cmほどである。溝は浅く、断面も皿状であり、溝の両壁面への立ち上がりが認められないので、底面を検出したものとする。よって、溝幅・深さともに不明である。

出土遺物は溝底面近くから、須恵器坏身と坏蓋の組み合わせが2セットと管玉が出土した。身と蓋はともに内面を上に向けた状態で出土したが、南側の一組は重なっていた。

古代になると207SD周辺には建物群が展開するようになるが、溝は埋没しても墳丘は残存していたようで、建物の配置も溝で区画された内側までは及んでいない。

221SX 調査区南東隅で検出された暗褐色シルトの堆積する範囲である。古墳周溝の縁辺の可能性はある。

下面

下面は基盤層の浅黄色極細粒砂層が上昇して、その上面がつくる凹地に4世紀代の土器群が集積しており、調査上それらに番号を付して遺物を取り上げたものが「SX」である。しかし、一部の浅黄色極細粒砂層からも遺物が出土することから当該の遺構に特段の人為性が窺えるというのではなく、浅黄色極細粒砂層の堆積中に遺物が含まれたという状況である。

よって、これらの遺物の由来が問題となるのだが、現

状では判断する材料は無い。しかし、ローリング等の風化が認められないことから、付近の包含層を浸食して持ち運ばれてきたものと推測する。

同様の現象は08Aa区でも認めることができ、これら遺物が分布する範囲は大規模な洪水が微高地上面に与えた影響の痕跡である可能性が高い。

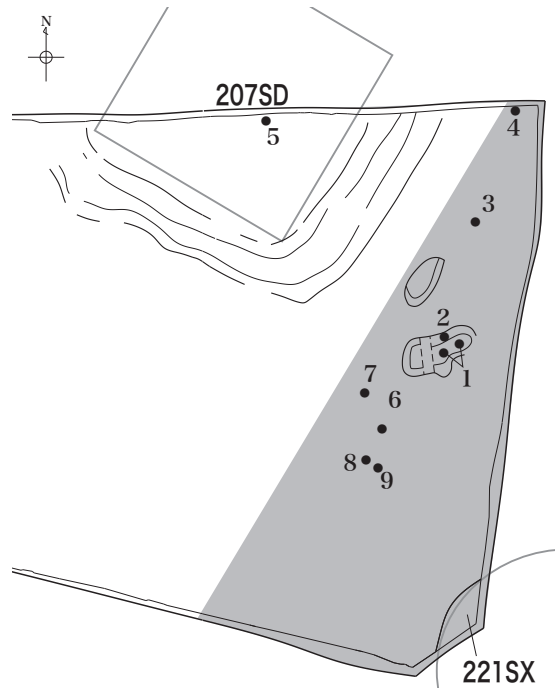


図13 塔の越遺跡 09C3区古墳前期遺物出土分布



図11 塔の越遺跡 09C2区 207SD 遺物出土状況

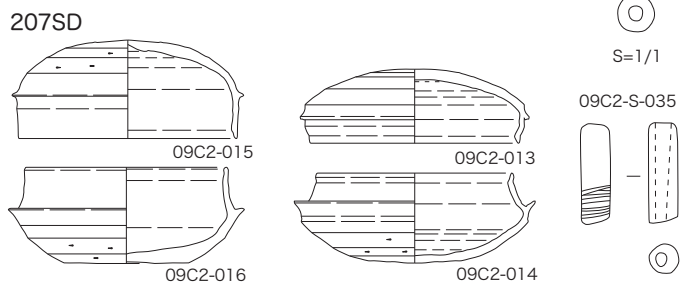


図12 塔の越遺跡 09C2区 207SD 出土遺物実測図

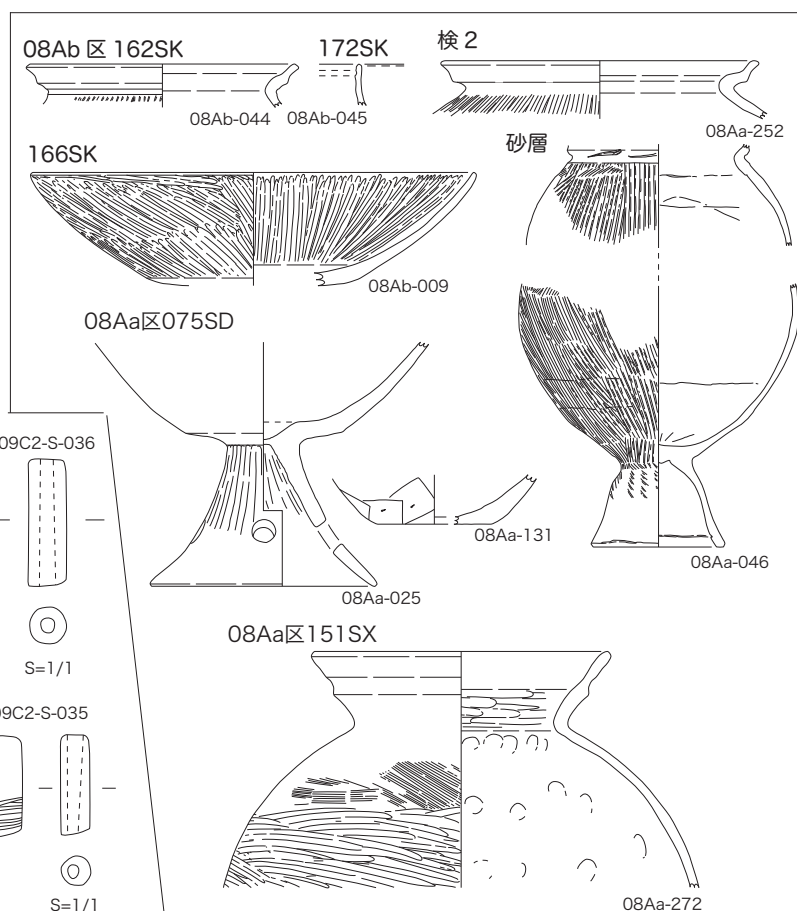


図14 塔の越遺跡 08Aa区出土遺物実測図

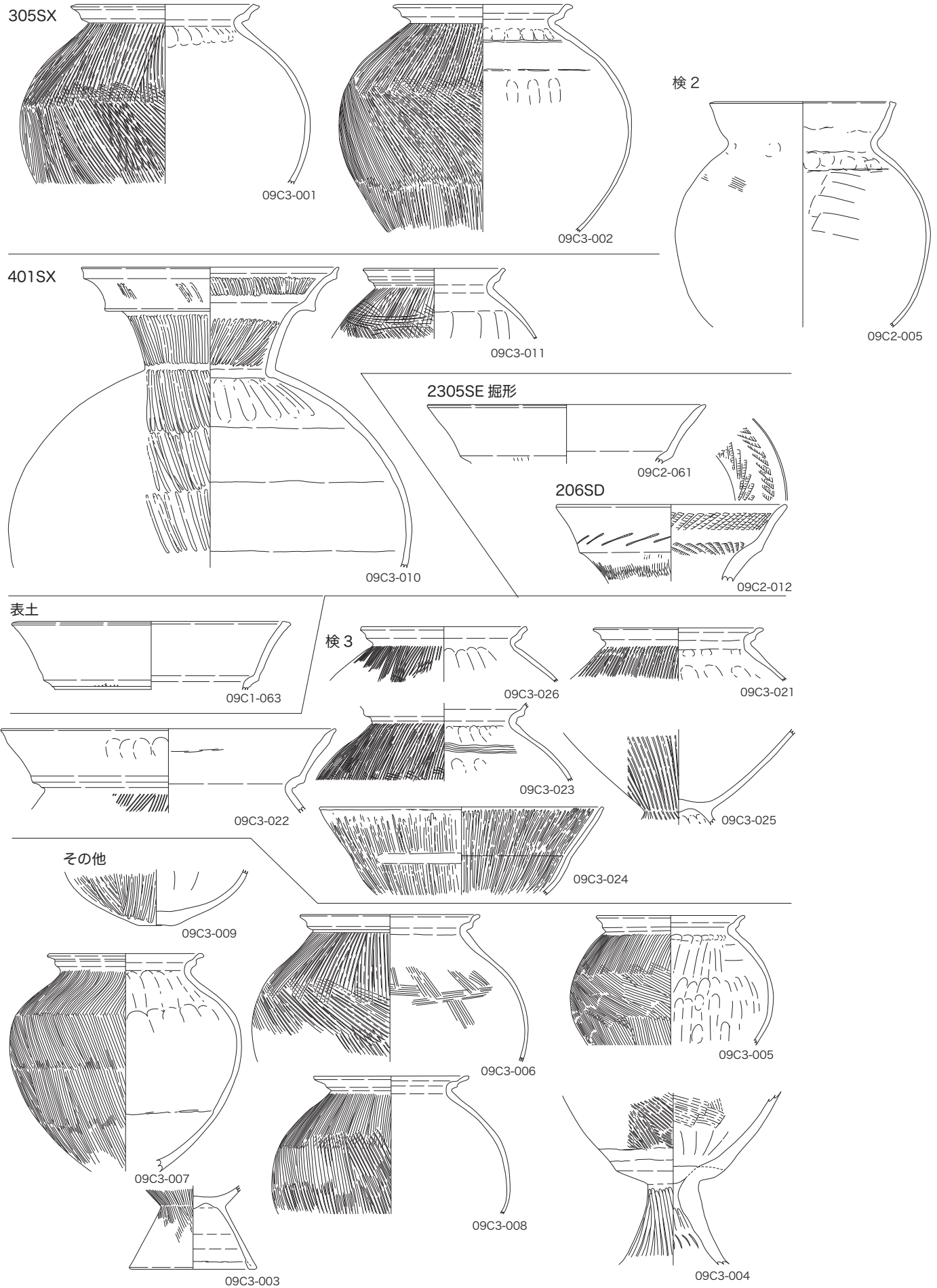
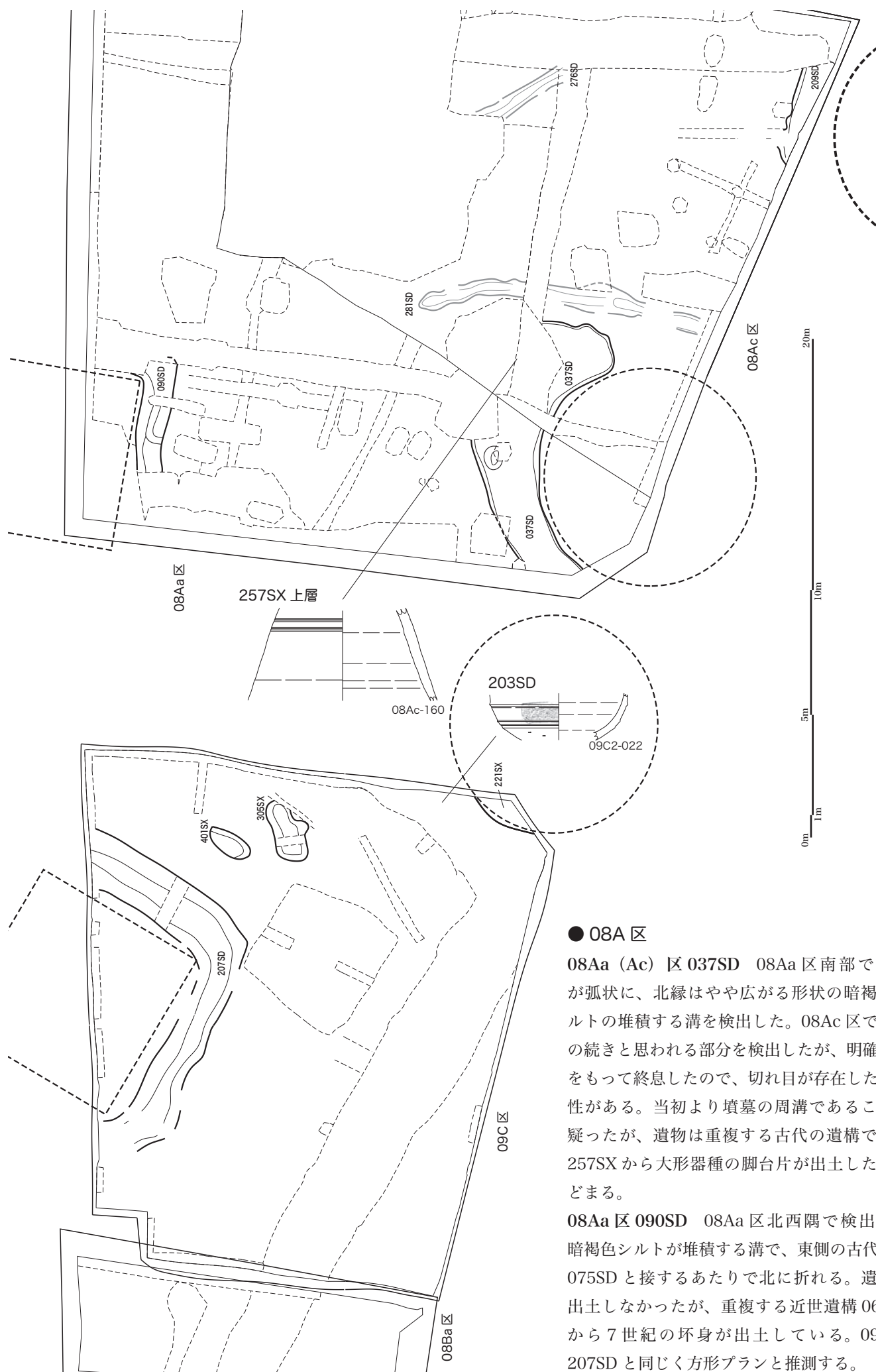


図 15 塔の越遺跡 09C3 区（最下層）他出土古墳前期遺物実測図



● 08A区

08Aa (Ac) 区 037SD 08Aa 区南部で南縁が弧状に、北縁はやや広がる形状の暗褐色シルトの堆積する溝を検出した。08Ac 区でもその続きと思われる部分を検出したが、明確な段をもって終息したので、切れ目が存在した可能性がある。当初より墳墓の周溝であることを疑ったが、遺物は重複する古代の遺構である257SX から大形器種の脚台片が出土したにとどまる。

08Aa 区 090SD 08Aa 区北西隅で検出した暗褐色シルトが堆積する溝で、東側の古代の溝075SD と接するあたりで北に折れる。遺物は出土しなかったが、重複する近世遺構067SD から7世紀の坏身が出土している。09C 区207SD と同じく方形プランと推測する。

図16 塔の越遺跡 08Ba・09C・08Aa・08Ac 区遺構図、出土遺物実測図

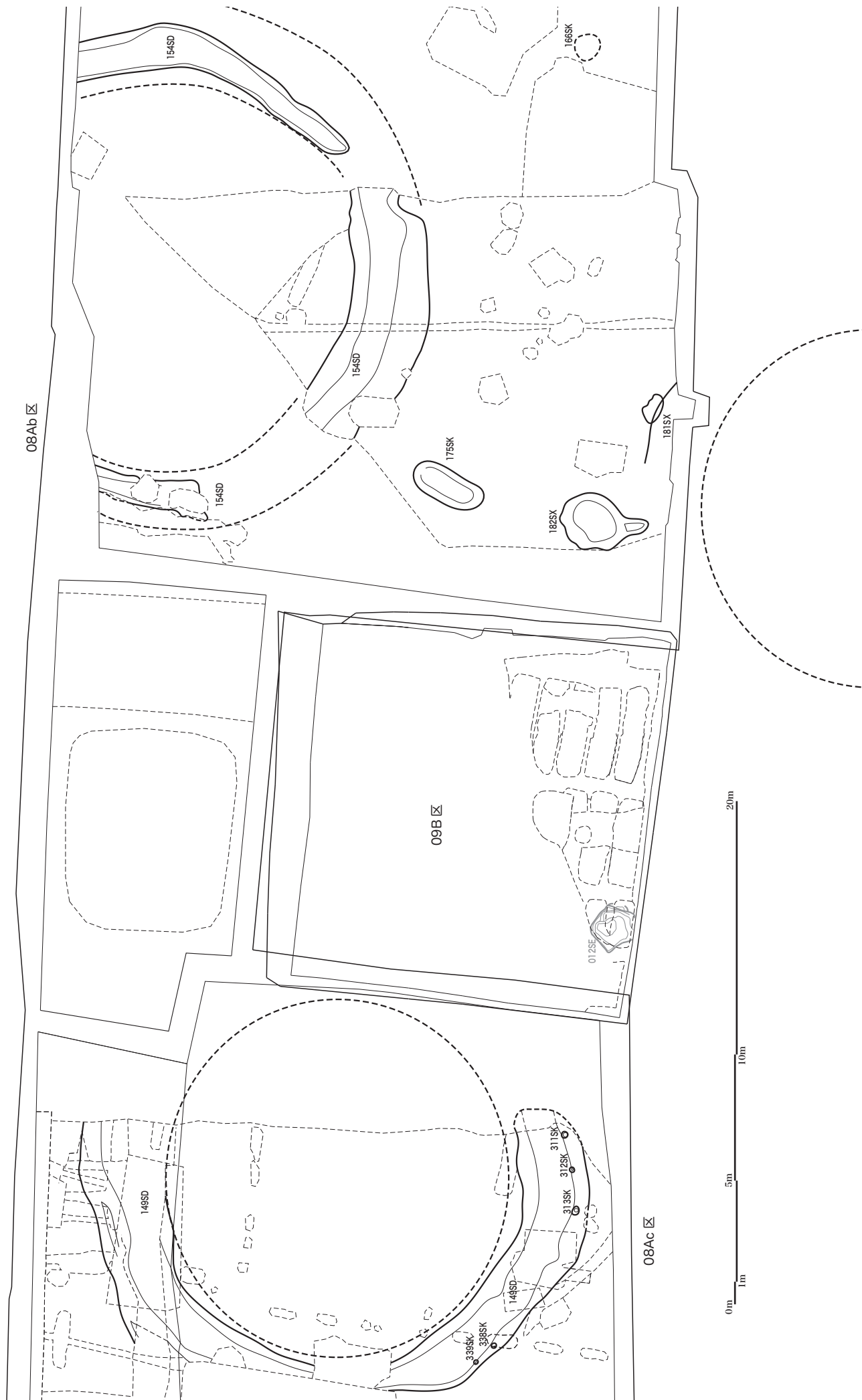


図 17 塔の越遺跡 08Aa・08Ab・08Ac・09B 区遺構図

08Aa区149SD

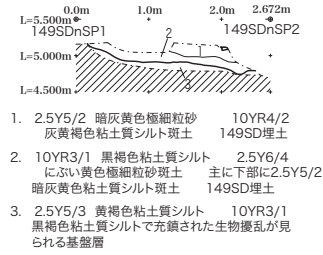


図 19 塔の越遺跡 08Aa 区 149SD 土層セクション図

075SD

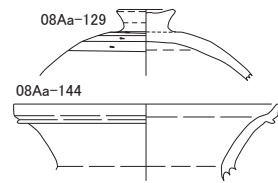


図 20 塔の越遺跡 08Aa 区 149SD 関連遺物実測図

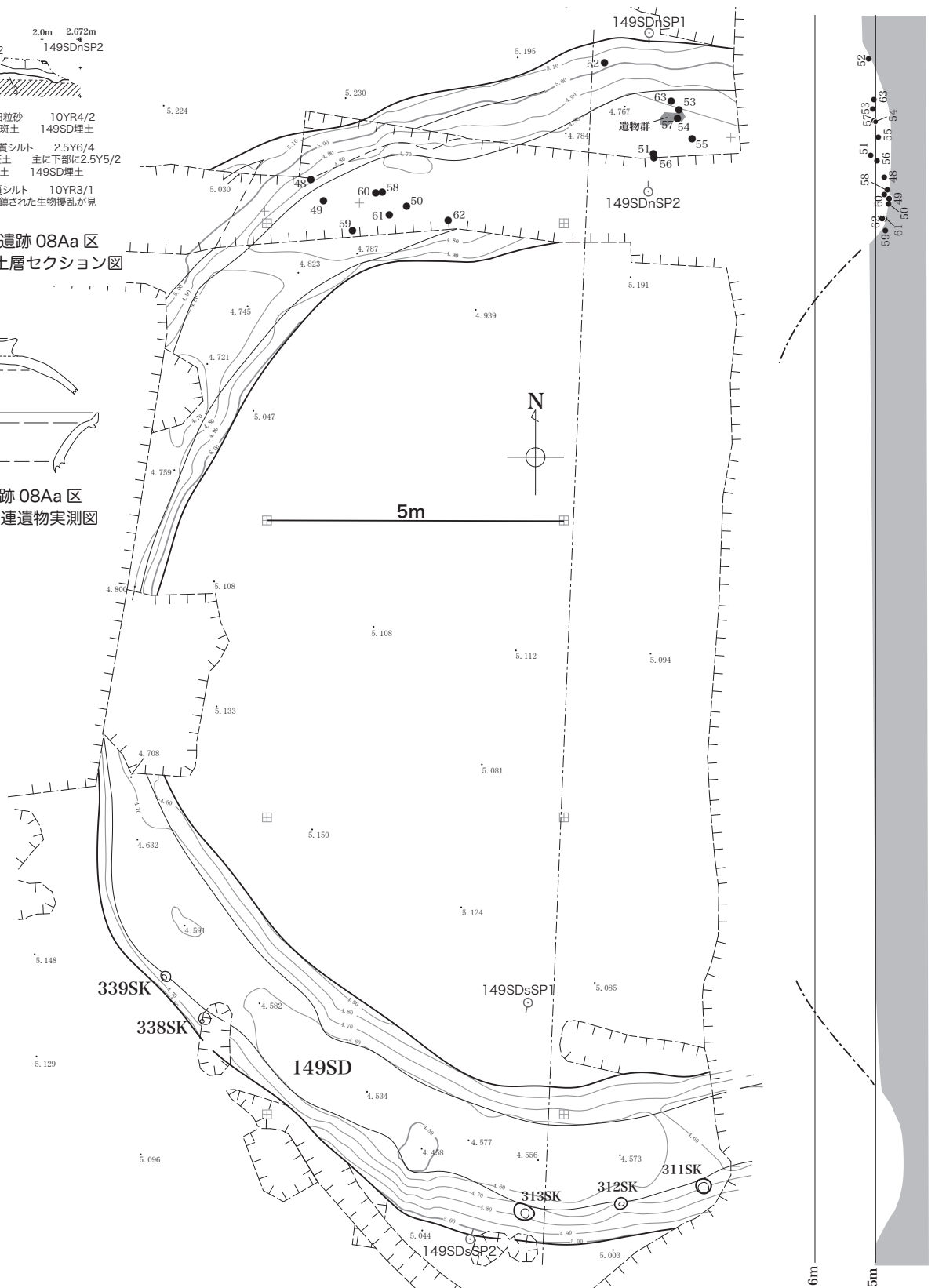


図 18 塔の越遺跡 08Aa・Ac 区 149SD プラン・セクション図、遺物分布図

08Ac区149SD・334SX・335SK

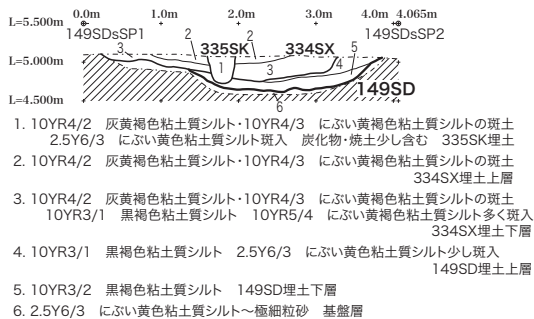


図 21 塔の越遺跡 08Ac 区 149SD 土層セクション図

09Aa (Ac) 区 149SD ほぼ半周を検出し、上端の内径は約 14m である。検出面での溝幅は 1.2～3m で、西側で狭くなっている。深さは約 50cm を測る。溝の断面は逆台形で、底面と壁面の識別は可能である。溝の内縁は滑らかな弧状ではなく、外縁も同様である。溝底面は平坦で、土坑等が存在して凹凸をなす様相は認められない。

堆積層は底部付近が黒褐色粘土質シルトで、09C 区

149SD

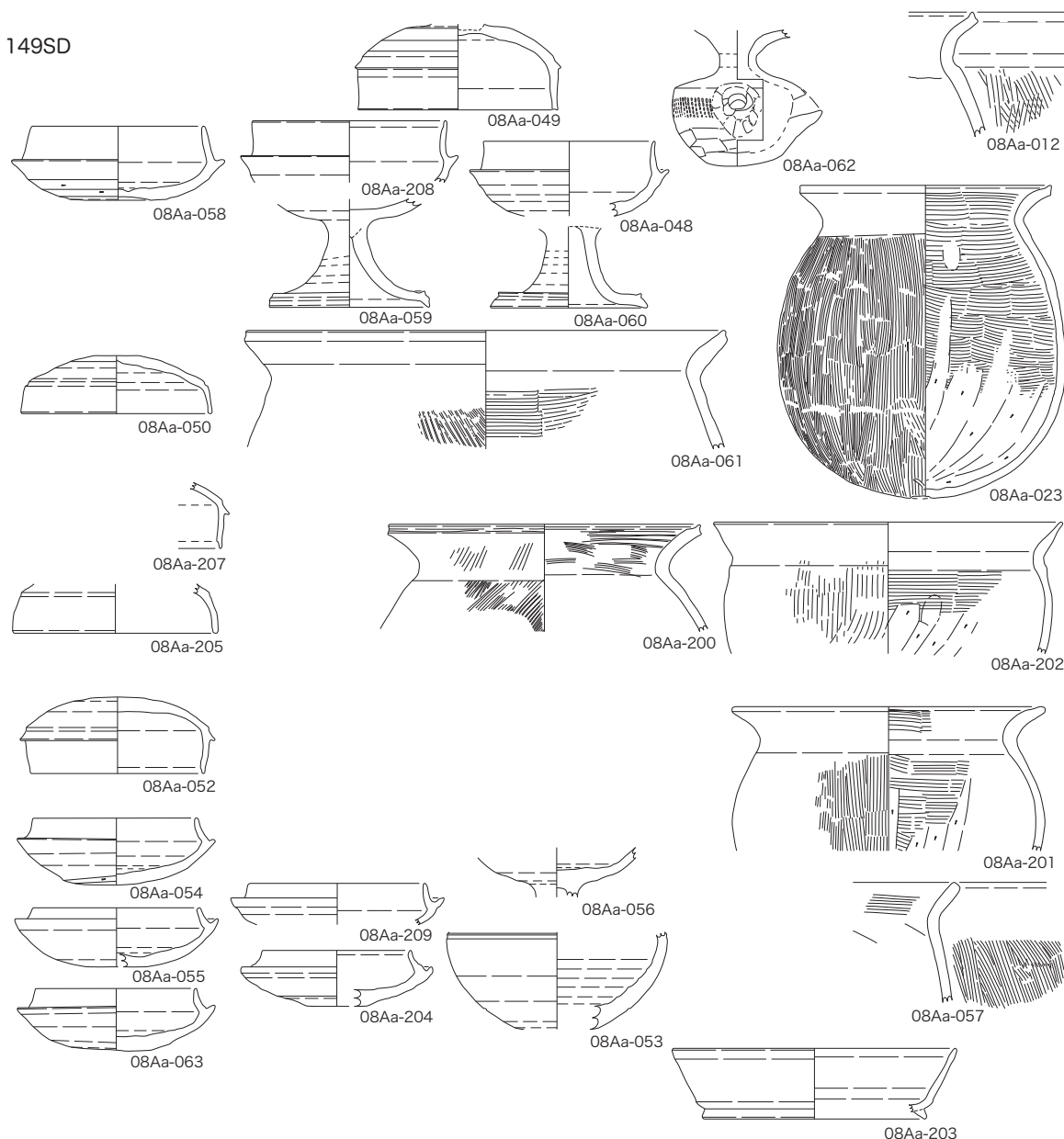


図 22 塔の越遺跡 08Aa 区 149SD 出土遺物実測図

以西の溝に比べて黒味は強い。カーボンの含有量の多さに起因するなら、周辺環境を反映している可能性がある。

溝の南部では南側下端に沿うように小穴が検出された。明らかに溝が埋まり切る前に掘削されたもので、掘形は認められなかったので杭痕と考えられる。

遺物がまとまって出土した北部は、攪乱坑と古代溝 075SD によって溝内の遺物が遊離したが、それでもまとまった量が出土した。それに対して、それ以外の部分ではほとんど遺物が出土せず対照的である。

出土遺物は 6 世紀から 8 世紀まで含み、それが遺物量の多さにも関連しているが、8 世紀の高台坪は混入の可能性が高い。溝の埋没過程に関わる遺物は 7 世紀代までであり、8 世紀には

埋没し、9 世紀には墳丘の削平を伴う整地等が行われて滅失したと考えられる。

なお、08Ac 区 149SD 上部には古代の再掘削と整地の痕跡である 334SX があり、周溝のカーブに重なりつつも内側の肩を削って設けられているので、まず円丘の縮小があり、後に墳丘の削平に至ったと思われる。



図 23 塔の越遺跡 08Ac 区 149SD 完掘状況 南東から

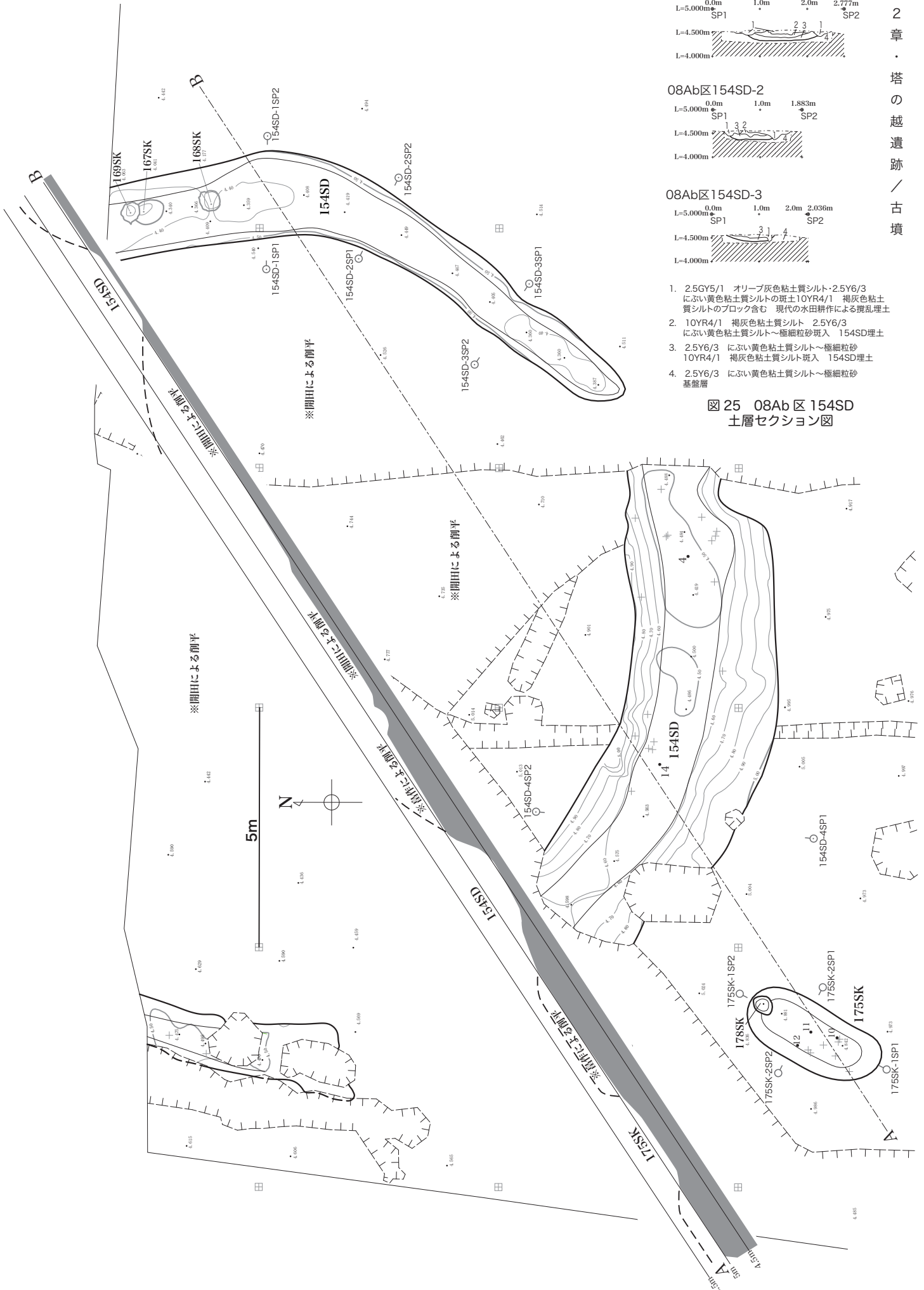
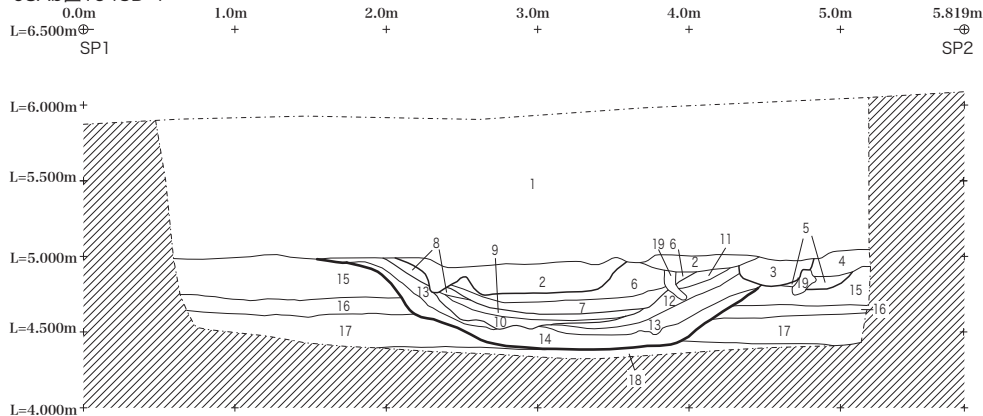


図24 塔の越遺跡 08Ab区154SD周辺遺構プラン・セクション図

08Ab区154SD-4



1. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 上部はブロック状 表土
2. 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂の斑土 炭化物・焼土少し含む 遺構埋土
3. 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルトの斑土 炭化物少し含む 遺構埋土
4. 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂の斑土 炭化物・焼土少し含む 遺構埋土
5. 10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 炭化物・焼土少し含む 遺構埋土
6. 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂斑入 154SD再掘削埋土上層
7. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂斑入炭化物少し含む 154SD再掘削埋土上層
8. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂斑入炭化物・焼土少し含む 154SD再掘削埋土下層
9. 10YR2/1 黒色粘土質シルト 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト少し斑入 154SD埋土上層
10. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂斑入 154SD埋土上層
11. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 154SD埋土下層
12. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂少し斑入 154SD埋土下層
13. 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂斑入炭化物少し含む 154SD埋土下層
14. 15層～18層の斑状 生物擾乱多く見られる 154SD埋土最下層
15. 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト 基盤層
16. 10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂 基盤層
17. 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト 基盤層
18. 10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂～細粒砂 基盤層
19. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 根痕

図 26 塔の越遺跡 08Ab 区 154SD 土層セクション図

08Ab 区 154SD ほぼ南半分を検出したが、北と東は近世以降の開田で深く削平されて、溝底面付近を検出したに過ぎない。とくに東部分では耕作機等による耕起溝が深く及んで、周溝は寸断されてしまっていた。径は15m 程であったと推測する。

旧島に位置して遺存状況が良好であった南部では、溝幅約 3m、深さは約 60cm を測る。最下層は基盤の斑土であり、溝掘削後の整地層と考えられる。

溝への流入土は炭化物を含む 13 層以上である。埋積は連続的ではなく、10 層・7 層が不整合面をなし、再掘削の痕跡が窺える。上部の 2 層は東西方向に重複する現代溝の堆積層で、溝とは無関係である。10 層上部の 9 層が黒色粘土質シルトであり、他の溝でも認められた鍵になる堆積層で、古代に堆積した可能性がある。

出土遺物はまとまりをもつほどではないが、溝の北側から流入した状況で出土した。堆積層には古墳前期の遺物も含まれていた。

東部や北部の溝は、輪郭はもとより底面から両壁面への立ち上がりも不明である。

東部では調査区の北寄り短径 40 ～ 50cm の穴が 3 ヶほど溝に重複して検出された。黒色粘土質シルトが堆積しているので、同層上面から掘り込まれた可能性が高い。とすれば、並びも溝の方向に一致しているので溝の埋没過程に掘り込まれたものと考え、154SD (及び墳墓) に関連する遺構であるのかどうかは不明である。

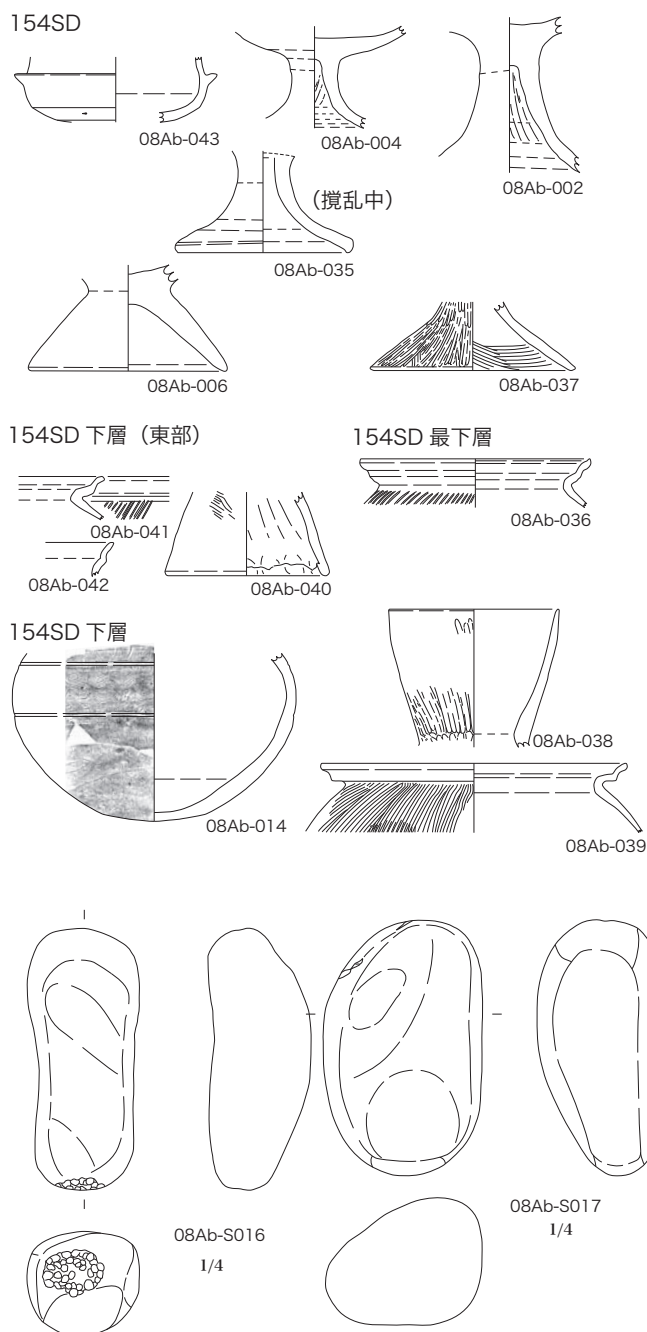


図 27 塔の越遺跡 08Ab 区 154SD 出土遺物実測図

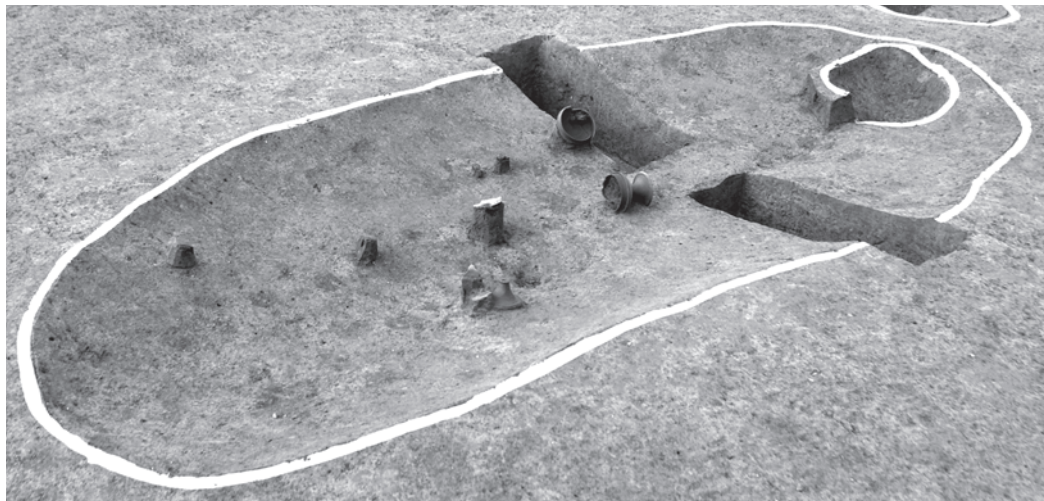


図28 塔の越遺跡 08Ab 区 175SK 遺物出土状況 東から

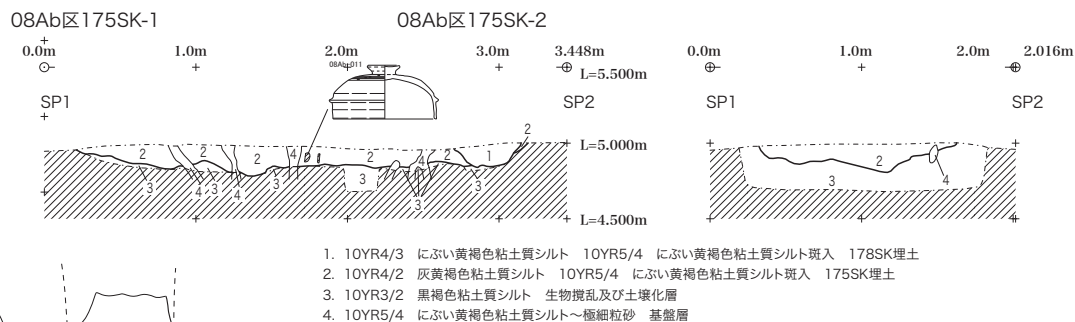


図29 塔の越遺跡 08Ab 区 175SK 土層セクション図

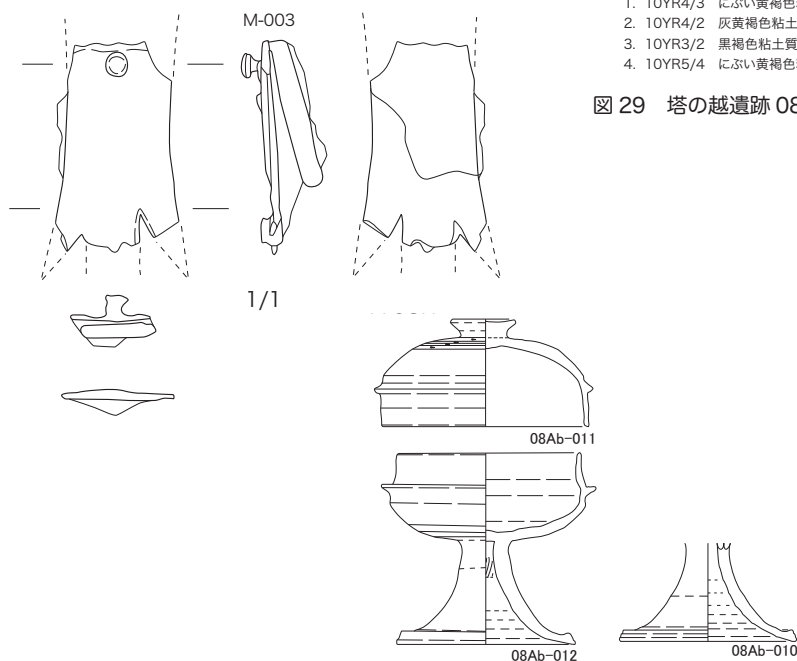


図30 塔の越遺跡 08Ab 区 175SK 出土遺物実測図

08Ab 区 175SK 154SD の南北中心軸から少し西に寄った位置で検出した。長軸 3m、短軸 1.3m の長楕円形で、深さは最大で 20cm、平均 10cm と浅いのは、上部が削平されているためである。断面は土坑壁の立ち上がり不明確であり、よってプランも本来の規模は不明である。底面には凹凸があり、整っていない。

堆積層は斑土ブロックを含む単一層で、地割れによる基盤の噴砂がところどころに認められる。下部には土壌化層があり、開口していた様相を示す。出土遺物も高杯が横転したり移動しており、掘削直後に整地された痕跡は窺えない。そのことから 175SK は独立した土坑ではなく、154SD につながる溝の最下部が残存した疑いも残るが、確証はない。有蓋高杯の他に鉄鏃が出土した。

08Ab 区 181SX 調査区の南端で検出した黒色粘土質シルトの広がりである。壁際に掘削した土層観察用トレンチのために、溝状というような明確な形状は把握できなかったが、堆積層の北縁が弧状をなすことから 154SD と同様の溝が調査区南に存在すると推測する。

下の写真は調査区を拡張して検出した 181SX の断面である。黒色粘土質シルトの下部にも堆積層があり、南にむかって層厚を増しているの、周溝の可能性が高いと考える。

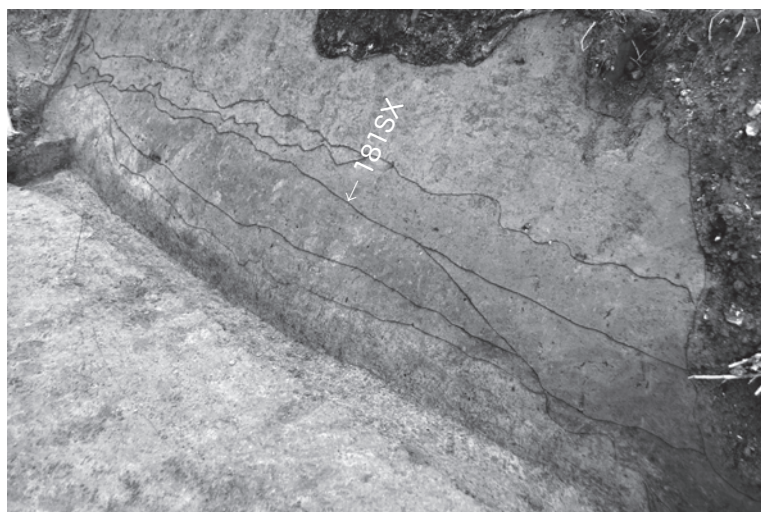


図31 塔の越遺跡 08Ab 区 181SX 土層断面

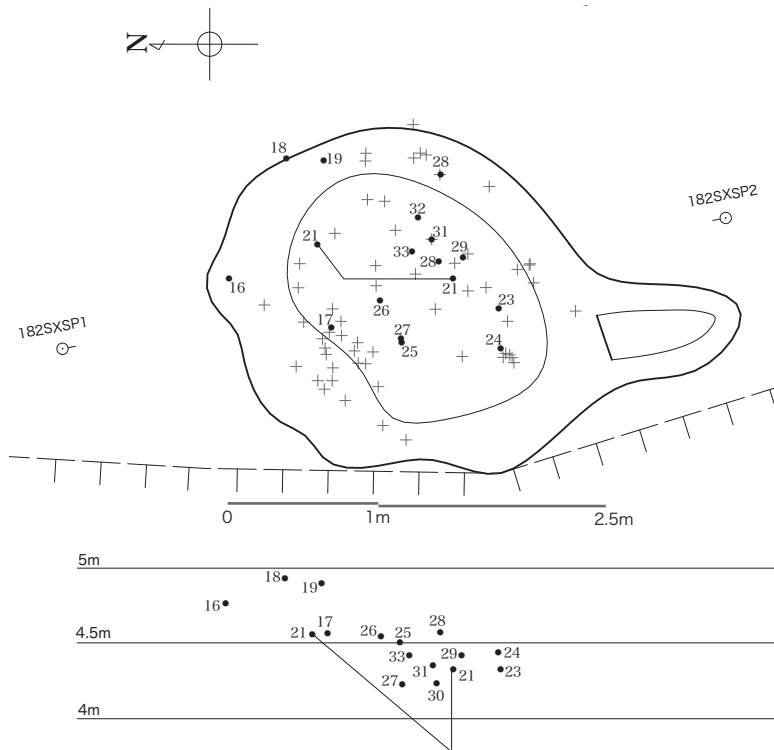
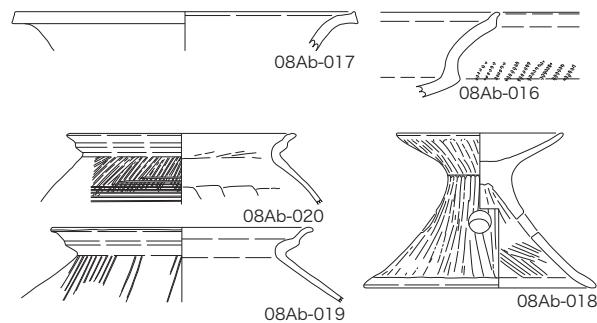


図 32 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 遺物 平面及び垂直分布図

182SX 上層



182SX 下層

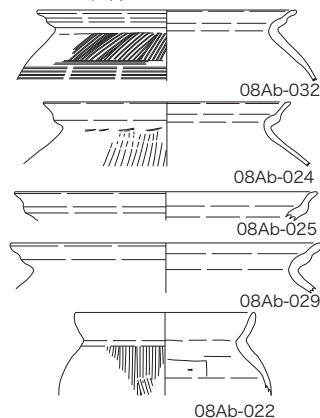
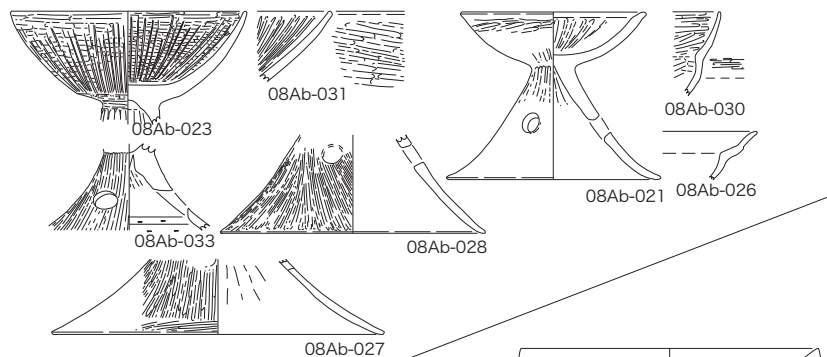
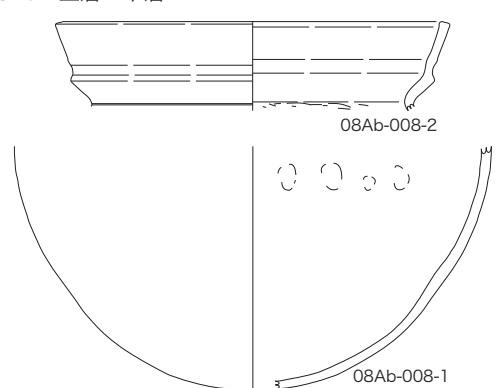


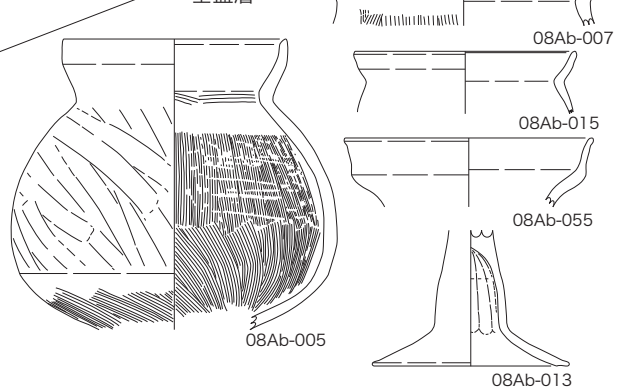
図 34 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 出土遺物実測図



182SX 上層～下層



基盤層



08Ab 区 182SX 長軸 2.7m、短軸 2.15m を測る楕円形のプランで、南側にステップ状の段が取り付く。深さは約 60cm である。底面は基盤の細粒砂層まで掘り抜かれており、調査時にも湧水が著しかったことから「井戸」の可能性も考えたが、断面形状が円筒状ではないので「SX」記号を付した経緯がある。出土遺物は古墳前期後葉に限られる。

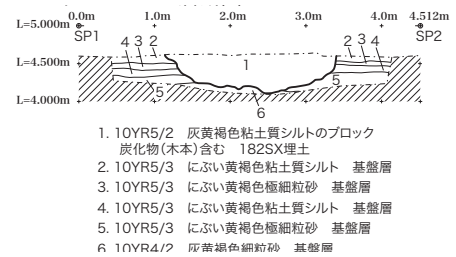


図 33 塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 土層セクション図

図 35 塔の越遺跡 08Ab 区 遺構外出土遺物実測図

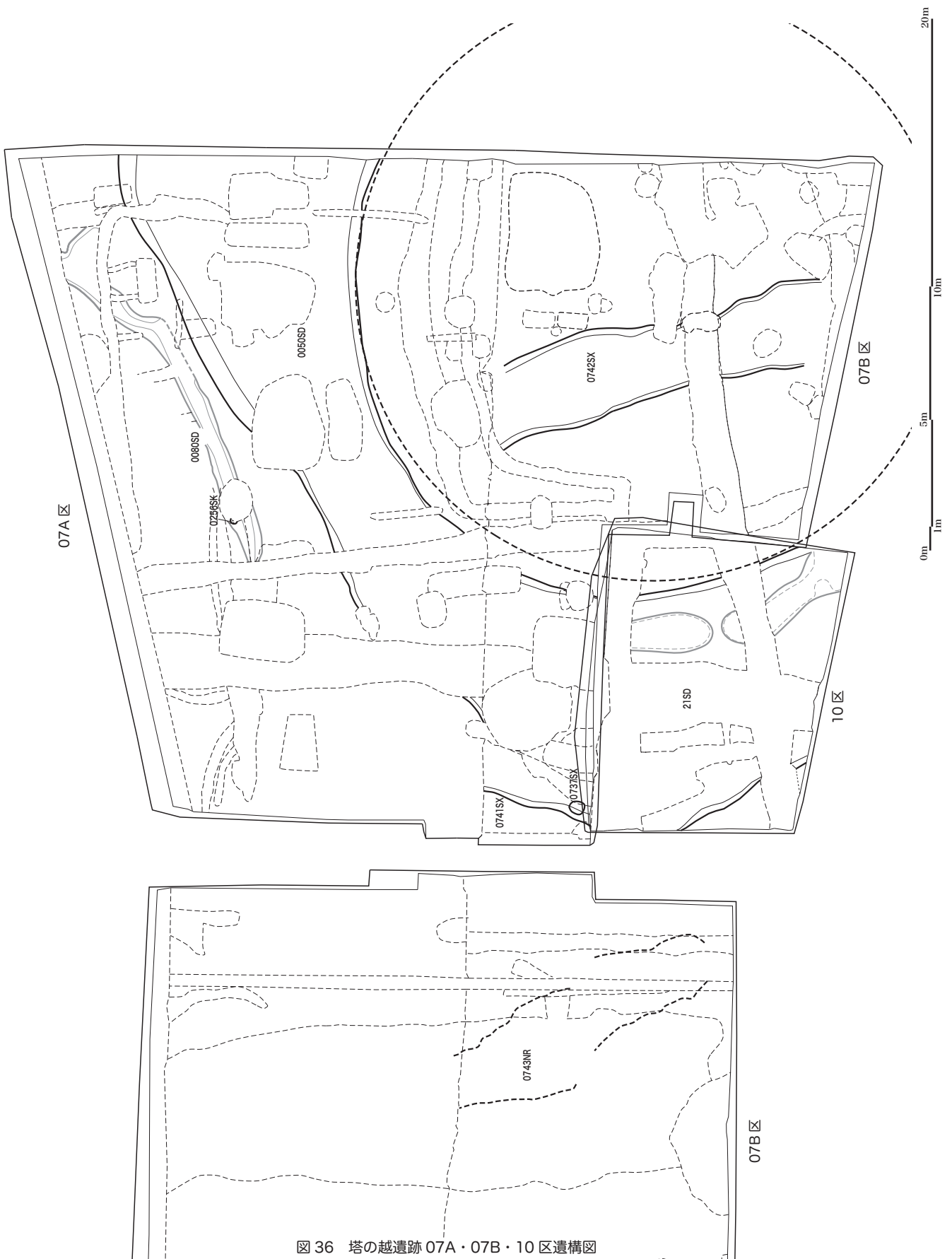


図 36 塔の越遺跡 07A・07B・10区遺構図

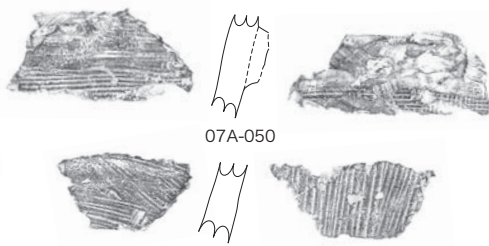
007SD (近世溝)



07A-048

07A-050

07A-049



008SX (近世)



07A-067

図 37 塔の越遺跡 07A 区出土埴輪実測図

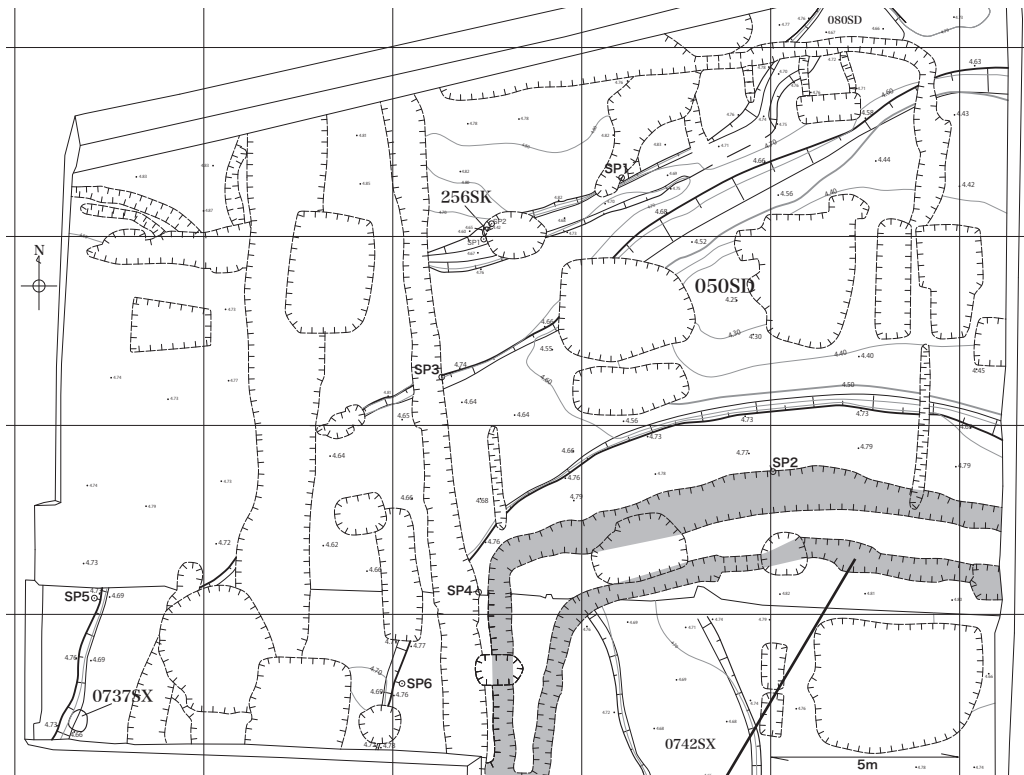
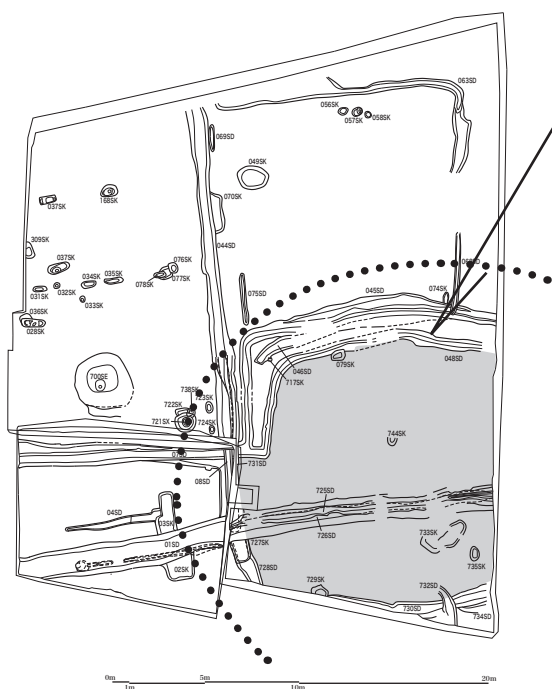


図 38 塔の越遺跡 07A 区・B 区 050SD と近世以降の遺構との関係

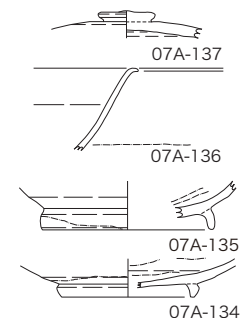
07A・B 区 050SD、10 区 21SD

溝は北西で狭く約 3.7m、北で 9.5m、西で 9m を測る。内側は比較的整った弧状をなし、推定径は 20m を超える。一方で外側についてみると、北と西は直線的で、07B 区から 10 区にけては強く屈折して方形を呈し、輪郭は内：円、外：方の組み合わせとなる。

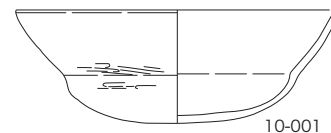
溝壁面の立ち上がりは、外縁コーナー部分を除きそれほど明瞭ではない。底面標高は



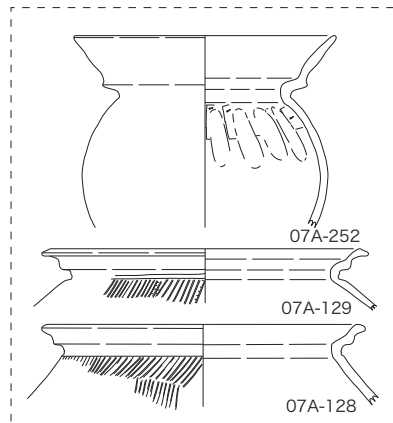
050SD 上層



10 区 21SD



050SD



● 07 区

古墳時代の遺構ではないが、古代溝 07A 区 012SD は弧状をなし、墳墓裾の区画溝の遺構である可能性がある。埴輪片も散布しており、いずれも近世遺構からの出土とはいえ、由来が問題になろう。そのほか、最下面で検出した溝は古墳時代まで遡る可能性もあるが、確証はない。

古墳時代の遺構が希薄な中で確実なのは 07A・B 区 050SD、07A 区 256SK、07B 区 737SX である。

注目されるのは、後述する 050SD の内側に近世以降の方形溝が 2 重にめぐること、西側に方形の突出部が伴うことから、墳丘を基壇にして階段を付設した施設(祠堂)が存在した可能性があることで、後世にまで残る墳丘の環境を示しており興味深い。

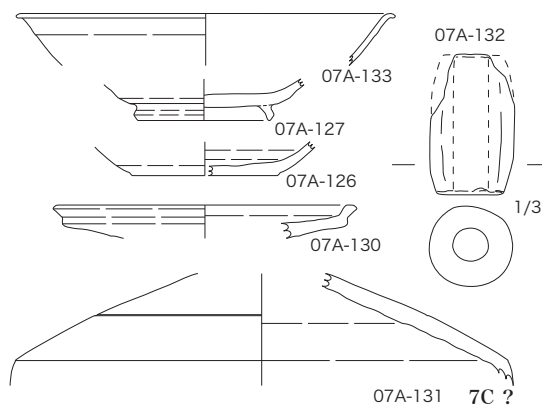


図 39 塔の越遺跡 07A 区・B 区 050SD、10 区 21SD 出土遺物実測図

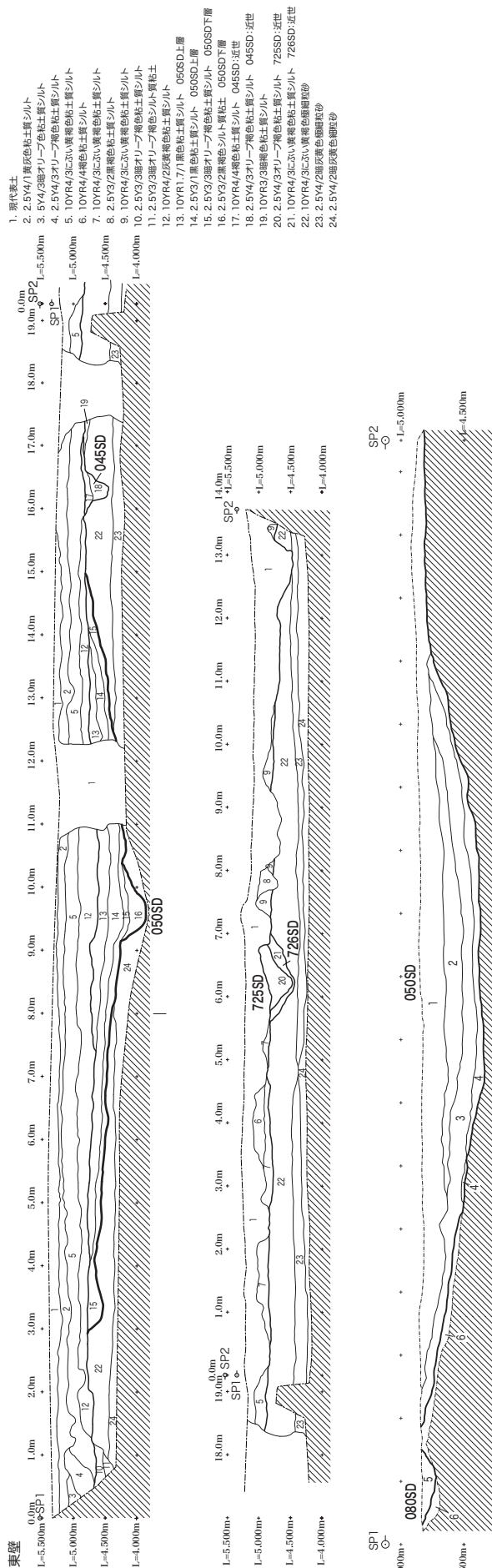


図 40 塔の越遺跡 07A・B 区
東壁土層セクション図

西で4.6m、北西で4.35m、東も主要部は4.35mであるが、最深部にはさらに断面逆台形の溝が設けられており、排水が考慮された底面形状になっている。

堆積層は底部付近まで黒褐色シルトとなっている。しかし、黒褐色シルトの成因や後述する 737SX の検出状況をみるとさらに最下層が存在した疑いも残る。

なお、10区21SDでは内縁に沿って黒褐色シルトが帯状に堆積している。溝の再掘削とすれば、古代に墳丘裾を整えた可能性がある。この点は、第3章で触れる長野北浦遺跡の方形周溝と共通している。

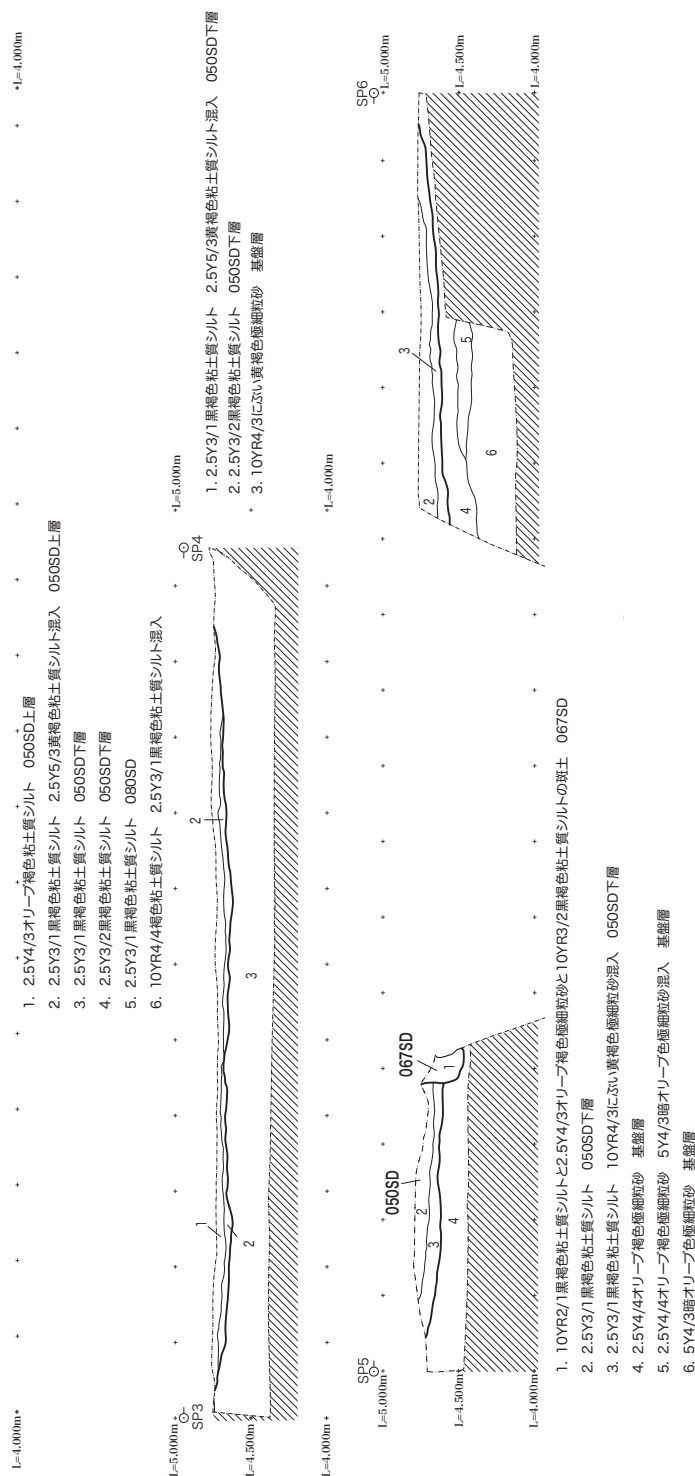


図 41 塔の越遺跡 07A・B 区 050SD 土層セクション図

737SX遺物出土状況図(1回目) 737SX遺物出土状況図(2回目)

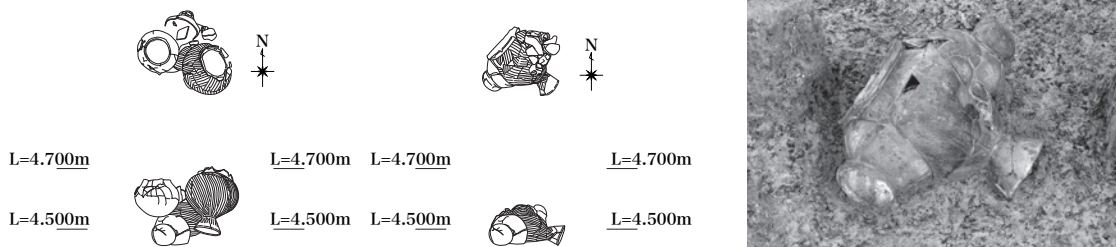


図 42 塔の越遺跡 07B 区 737SX 遺物出土状況図及び写真

07A 区 737SX

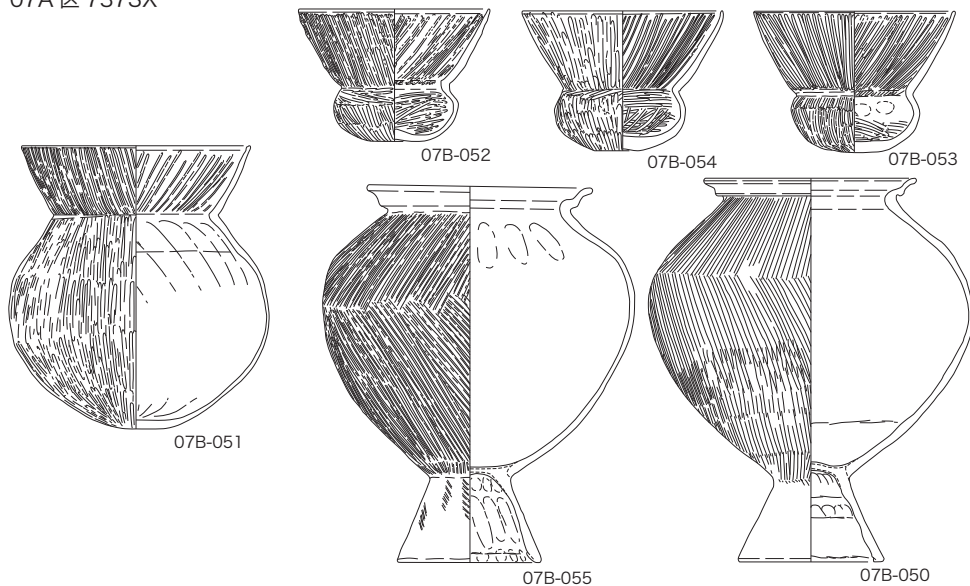


図 43 塔の越遺跡 07B 区 737SX 出土遺物実測図

07B 区 737SX

07B 区 050SD の南東端で検出された。050SD 底面の掘り下げ中に検出されたもので、土坑状の掘り込みは検出されていないので、050SD 最下層に埋置された可能性も否定できない。

丸底壺 1 個体、小型丸底壺 3 個体、S 字甕 2 個体 から構成され、いずれも密着している。丸底壺の口縁部は一部が当初から欠損していた。とりわけ小型丸底壺 2 つが S 字甕を挟み込むように置かれていた点が注目される。まさに据え置かれたという表現が相応しい出土状況である。

07A 区 256SK 柱の抜き穴に口縁部と底部を欠く壺が置かれていた。堆積層の上部は黒褐色粘土質シルトなので所属時期は古代に下るかもしれない。

07A 区 256SK

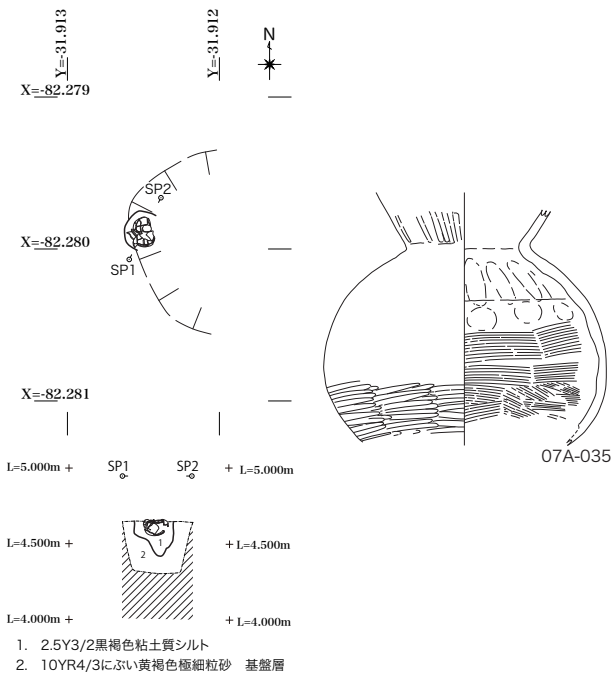


図 44 塔の越遺跡 07A 区 256SK 遺物出土状況図及び遺物実測図

07C 区 582SK

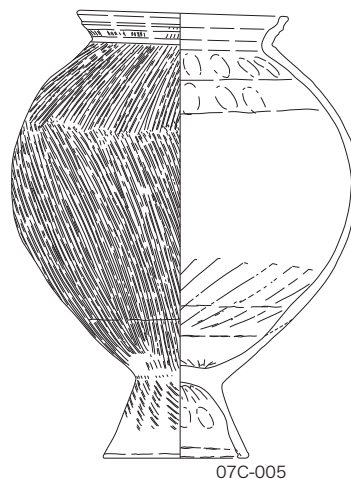


図 45 塔の越遺跡 07B・C 区出土遺物実測図

(2) 古代

A. 概要

遺構・遺物ともに充実しており、塔の越遺跡の中心をなす時期である。とりわけ西方に位置する尾張国府との関連から、国府周辺の様相を考える上で重要な資料である。

つまり、旧三宅川はちょうど08G区東部を左岸としていたもので、旧三宅川沿いに残る「・・・須賀」という地名も濃尾平野では高所となった砂地の場所を示すことから、自然堤防の上面が砂層として地表に露出しているような状況にあったものと推測される。そして、これを西端として三宅川左岸域に幅広く形成された微高地上に古代の遺構群が形成されたものとする。

微高地上面については、遺跡の東部では中世以降の耕

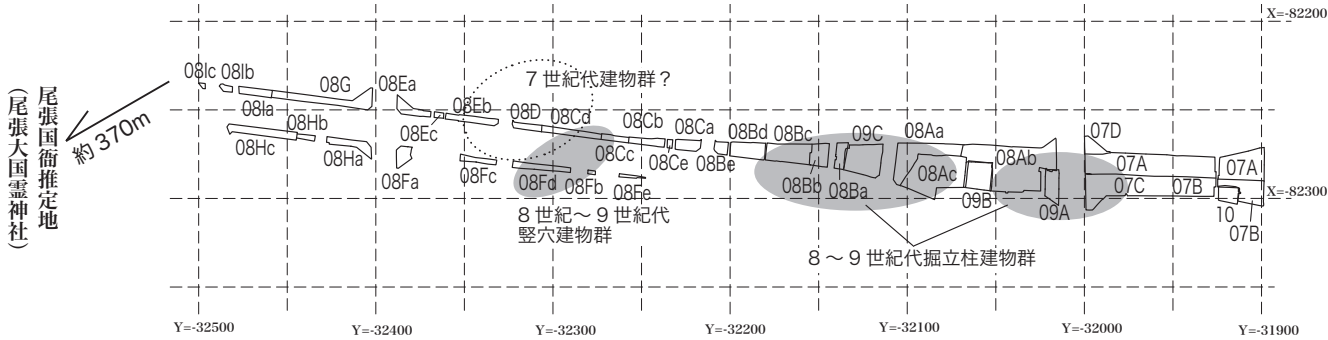


図46 塔の越遺跡調査区位置図

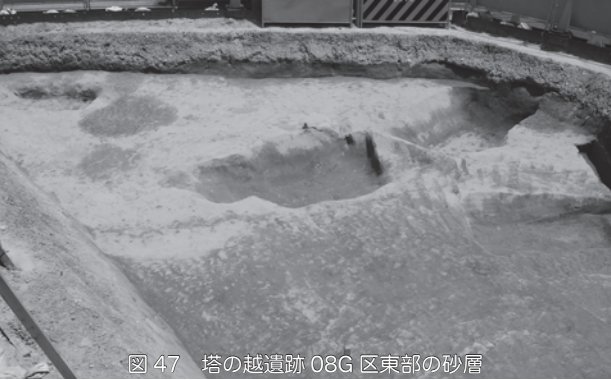
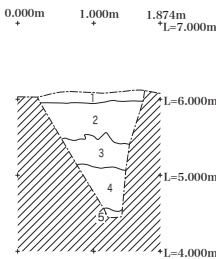


図47 塔の越遺跡 08G区東部の砂層

古代関連の遺構群は、掘立柱建物群が08Bc区から07A・Cで井戸を伴いながら稠密であるのに対して、08Fd区や08Cc区では竪穴建物が散漫に検出されたにとどまる。調査区の狭いことも影響しているとはいえ、むしろ旧地形の高低を反映している可能性がある。つまり、竪穴建物：高、掘立柱建物：低ということである。

西部の08G区では遺構検出面が砂層となっており、また旧三宅川に向かって堆積層が下降する状況を確認した。08Ib区では土取りが行われて堆積状況は確認できなかったが、08Ic区では無遺物層が深くまで及んでおり、河道周辺の堆積環境を示している可能性がある。

図48 塔の越遺跡 08Ic区南壁セクション図



- 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト 2層の斑土・礫・炭化物を含む 表土・調査前までの畑耕作土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトのブロック 5層のブロック・炭化物含む 天地返しによる攪乱層
- 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトのブロック 炭化物含む 天地返しによる攪乱層
- 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂珒入 炭化物含む 天地返しによる攪乱層
- 10YR6/4 にぶい黄橙色極細粒砂 基盤層

作や近世以降の開田によって大幅に削平されて旧地形を窺う材料は無いが、一部で検出された、とても方位を揃えたとは思えない大溝の軸線や自然流路の痕跡からみて、全くの平坦ではなかったことが窺える。この点を古墳分布と古代遺構群との関係から見ると、微高地東部から長野北浦遺跡にかけて展開する古墳群の西側に掘立柱建物群が分布するのに対して、三宅川河岸に近い微高地上に竪穴建物群が分布していることに、やはり高床式建物と地上式建物の分布に影響する環境差が存在したと考えられる（地形について詳しくは第4章参照）。

B. 遺構・遺物

● 08I区

08I区は3小区に分かれる。西端の08Ic区は擁壁で区画された畝の隅にあたってのために重機の搬入は不可能であり、人力掘削で調査することになった。上部は天地返しによる攪乱層であり、その下、標高4.5mで細粒砂層を確認したが、氾濫源を構成する堆積層であるのかどうかは不確かである。

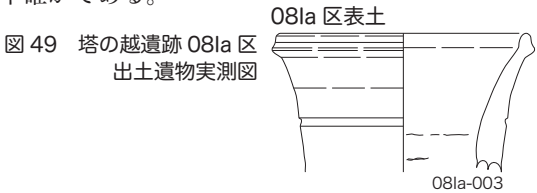


図49 塔の越遺跡 08Ia区出土遺物実測図

塔の越遺跡調査区配置図

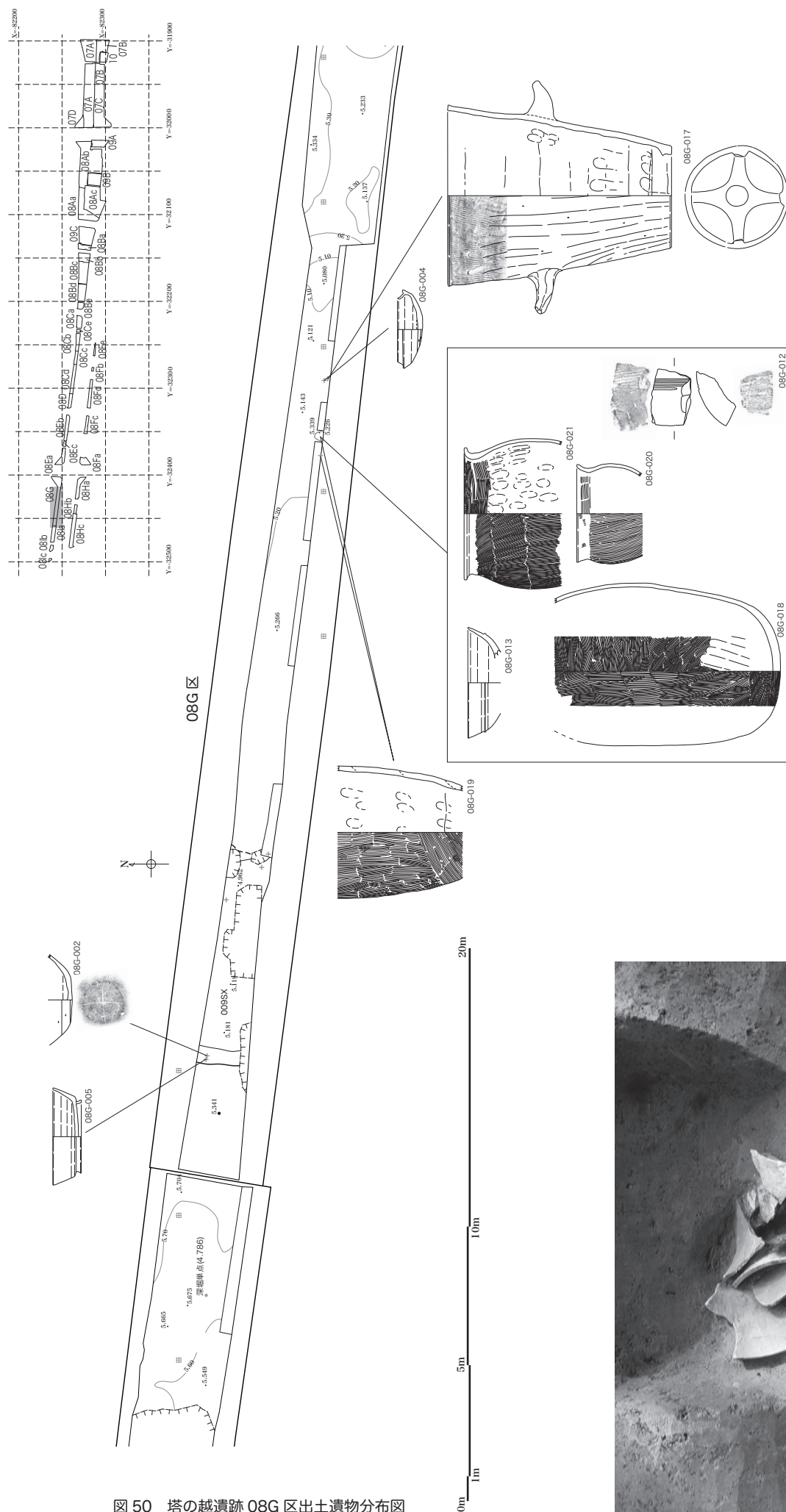


図 50 塔の越遺跡 08G 区出土遺物分布図



図 51 塔の越遺跡 08G 区出土土状況

● 08G 区

08G 区は東端に小規模な攪乱坑が存在し、部分的に天地返し坑もあったが、古代の遺構面を大きく破壊するほどではなかった。

堆積層は比較的安定しており、標高 5.5m あたりか、やや上部を旧地表面として、浅い遺構が展開していた。

基盤層の 28 層は細粒砂であり、08Ea 区以東がシルト層であるとは異なる。自然堤防の本体に近いことを

窺わせる

注目されたのは、遺構外に集積された 7～8 世紀の時期幅をもつ遺物群である。ただ、これら遺物群の集積



図 52 塔の越遺跡 08G 区土層セクション図

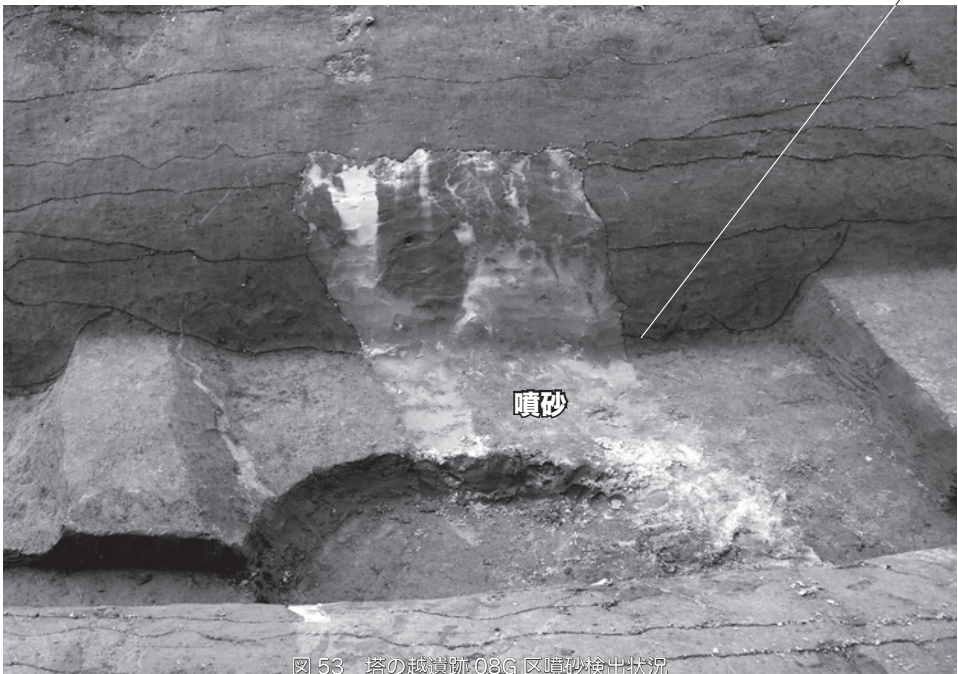
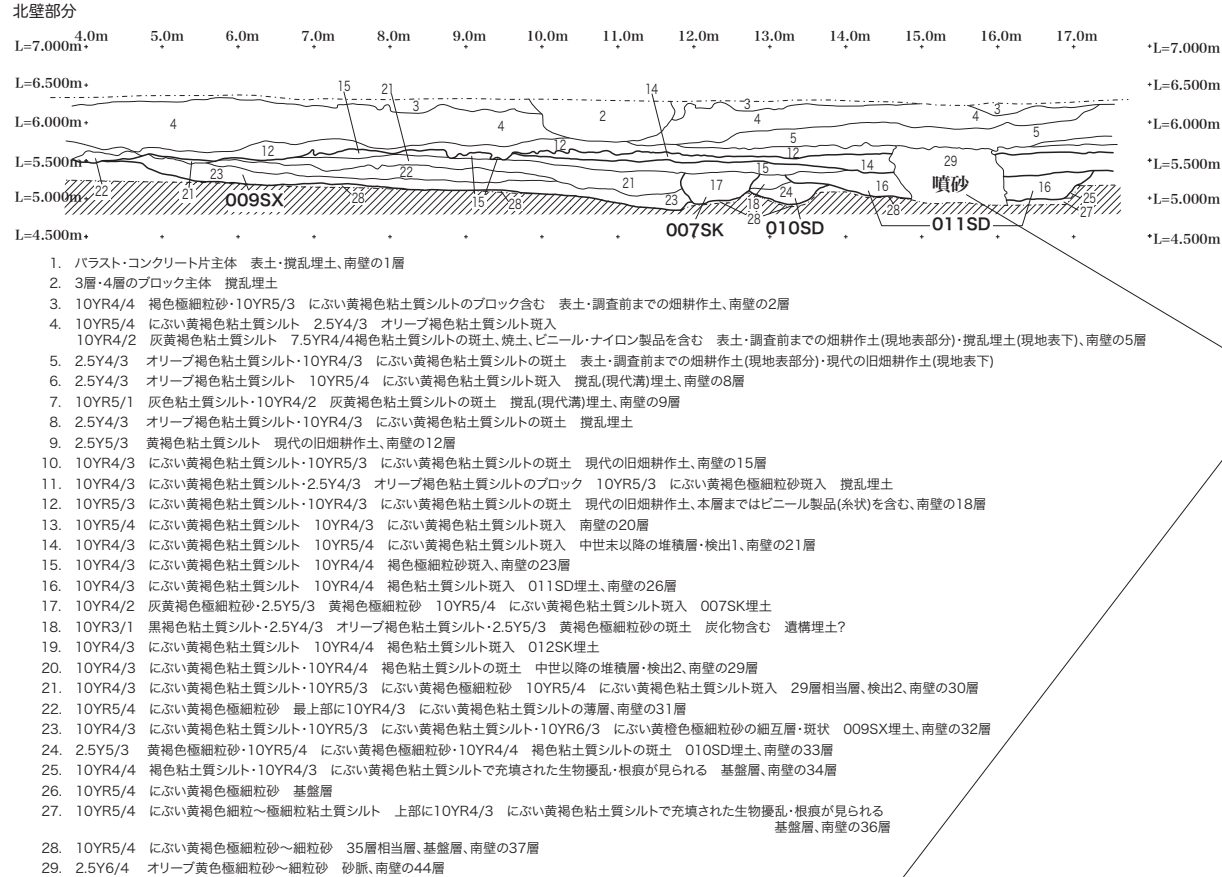
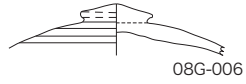


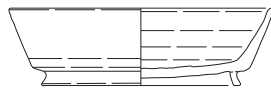
図 53 塔の越遺跡 08G 区噴砂検出状況

001SK



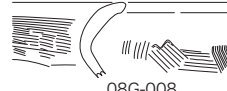
08G-006

009SX



08G-005

010SD

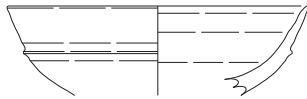


08G-008

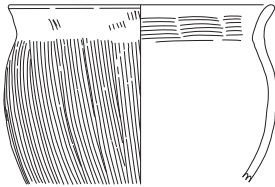
検2遺物群



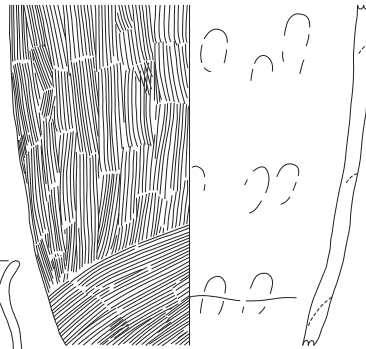
08G-004



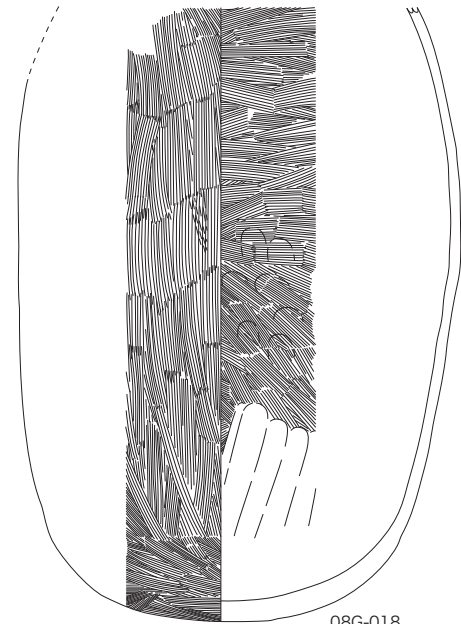
08G-013



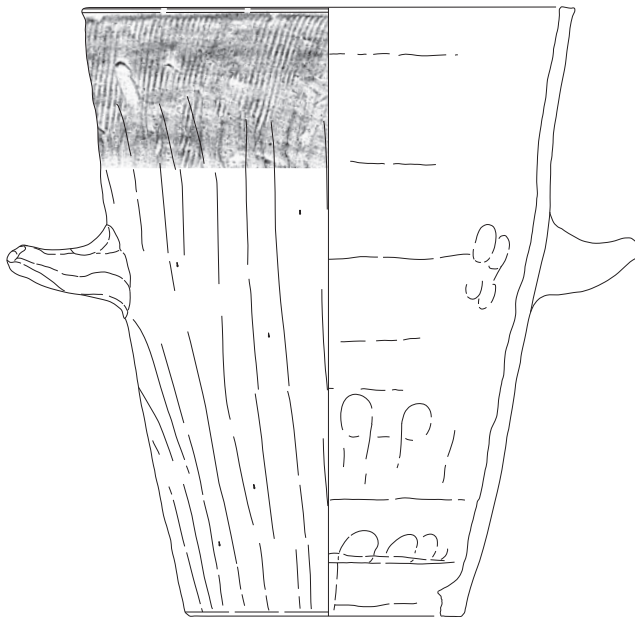
08G-020



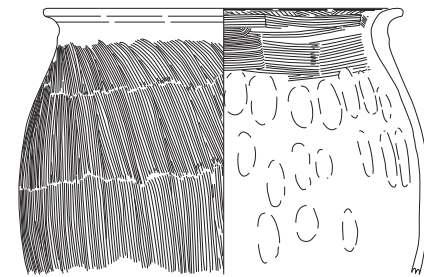
08G-019



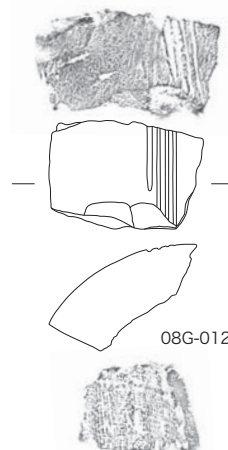
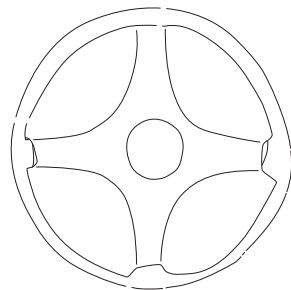
08G-018



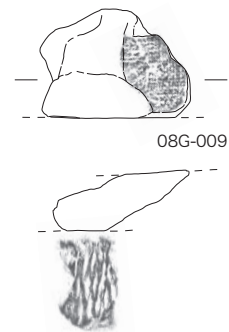
08G-017



08G-021



08G-012

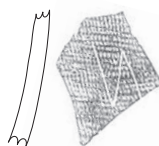


08G-009

検2

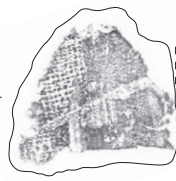


08G-002

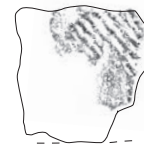


08G-010

表土



08G-015



08G-016



図54 塔の越遺跡 08G区出土遺物実測図

● 08H 区

08G・I 区の県道を挟んだ南側に位置する。3 小区に区分して調査を行った。このうち、08Hb 区の大部分と 08Hc 区全域は土取りのために遺構面は破壊されていた。削平を免れた 08Ha 区でも、標高 5.5m を遺構確認面としたものの、旧地表面ではない。調査区東部では基盤層である 20 層が細粒砂であり、それが西に向かって急激に下降し、上層を 19 層のシルト層が覆っている。08G 区と同様に、この部分がある時期の三宅川左岸といえよう。

調査は、南に新築住宅が接しており、出入り口の確保は当然として、万が一にも地盤崩壊によって家屋に損傷をまねかないように慎重を要した。そのような中で、古代でも末期の井戸を検出した。他に土坑や小穴を検出したが、建物の存在は窺えない。

なお、08Ha 区からも 7 世紀代の遺物が出土しており、やはり 08G 区に対応する。

010SE 遺構検出面では炭化物を濃密に含む黒褐色粘土質シルトの広がりや当初は土坑と認識していたが、トレンチを設けて土層断面を観察したところ、その下部に大規模な掘り込みを確認したので、井戸の可能性を想定した。しかし、上記の理由から掘形の全掘を断念して断ち割り調査に切り替えた。下部からは井戸材を検出することができたが、湧水のためにそれ以下の掘り下げを断念した。

井戸構造物としては縦板組の井戸枠と横棧の一部を検出した。それに至までの掘削過程では、灰釉陶器類の小片が出土したことからそれらが裏込めに含まれていたものと推測したが、構造物の抜き取りに伴う再掘削の痕跡は土層断面で確認できなかった。井戸枠上部の堆積層は

ブロック土を中心としており、整地層との印象が強い。したがって、井戸枠上部が抜き取られたとするなら、裏込めはもとより、当初の井戸設置時の掘形を残さない程に周囲を大きく掘り抜いた可能性を考えなければならないことになる。

井戸の抜き取りと整地後に設けられた土坑状の落ち込みの性格については、中世資料に参考例がある。清須市土田遺跡では井戸廃絶後に炭化物や焼土を充填した土坑が上部に設けられることが複数事例確認されている。010SE に竹が立てられていた痕跡は未確認だが、井戸廃絶に伴う行為の痕跡として土坑が残ったものと考えられ、本例のように炭化物の濃密な土坑は同様の遺構であった可能性が高い。

010SE から出土した遺物は 10 ～ 11 世紀の遺物群で

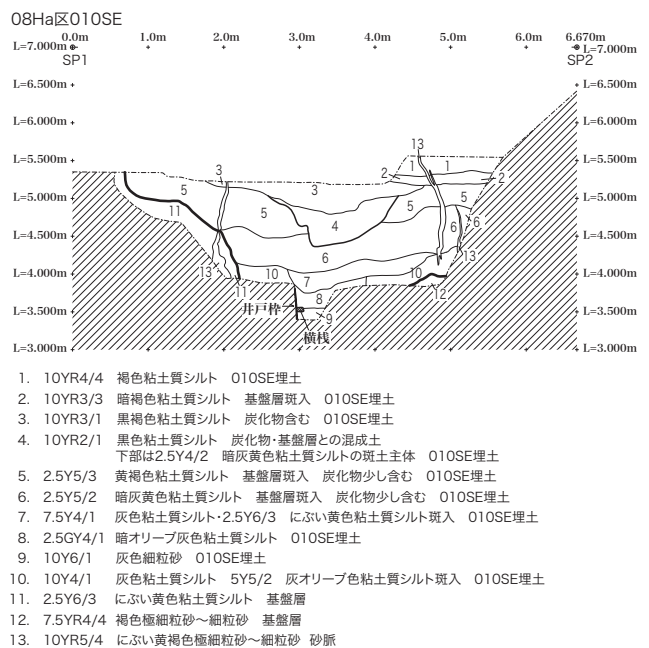
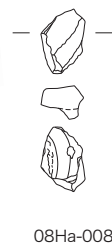
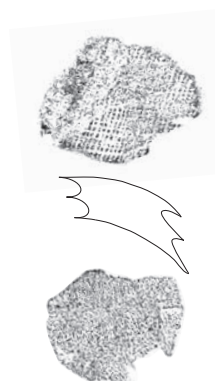
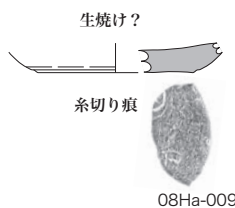
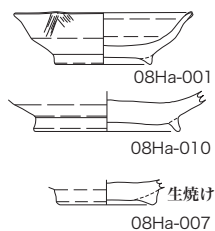
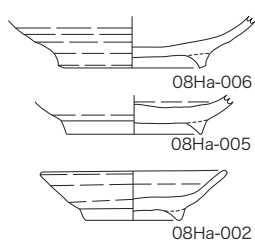


図 56 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 土層セクション図

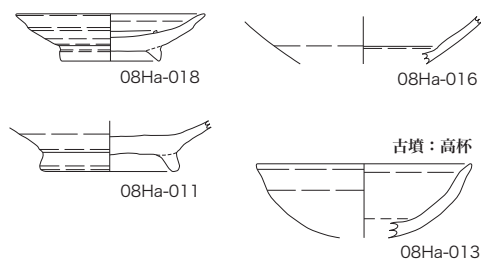
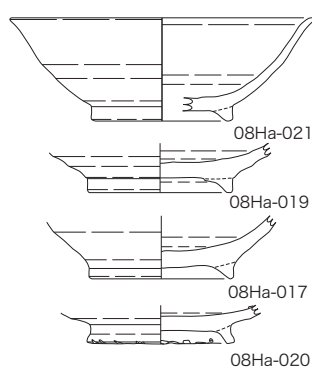
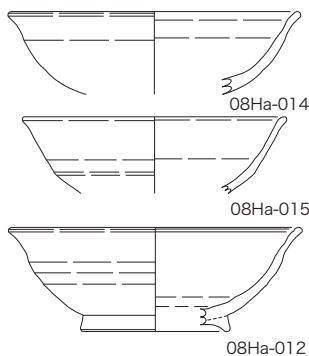


図 57 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 掘削状況

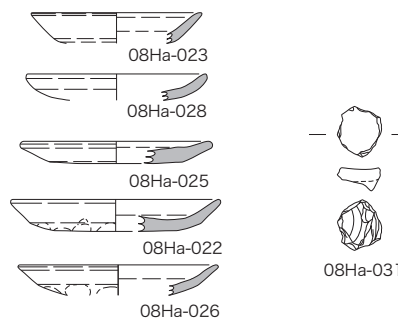
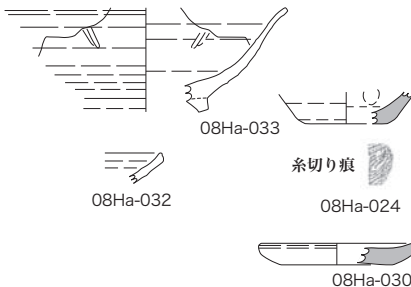
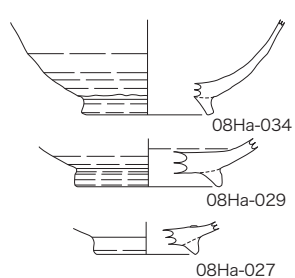
010SE



010SE 上層



010SE 下層



010SE 最下層

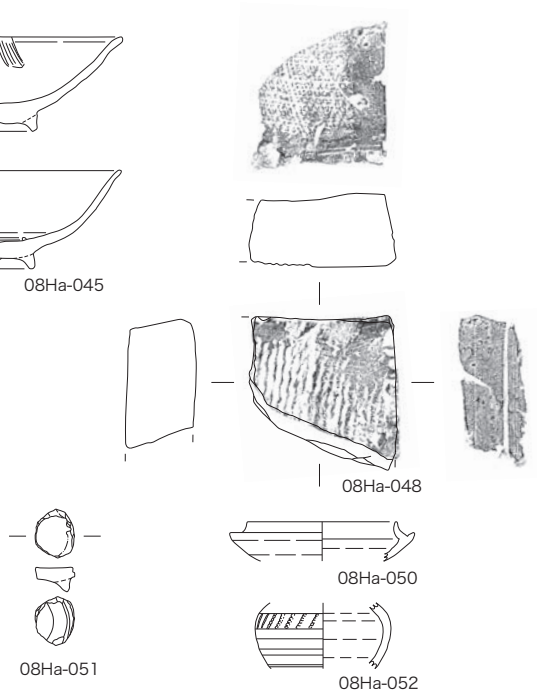
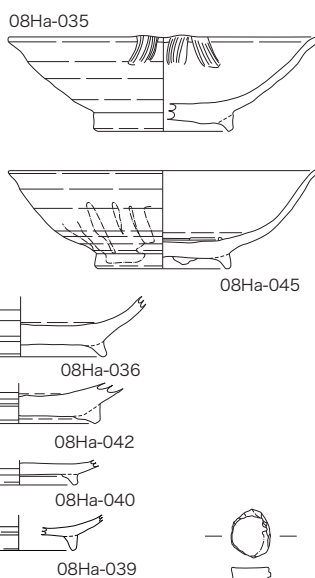
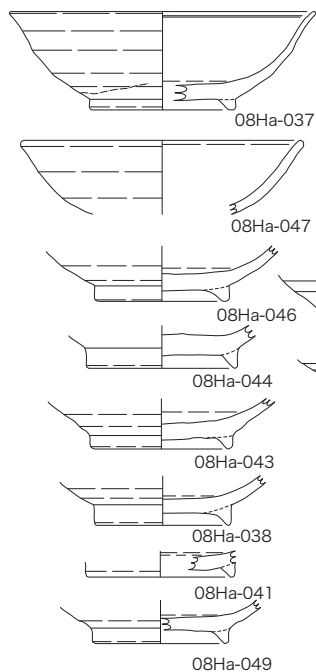
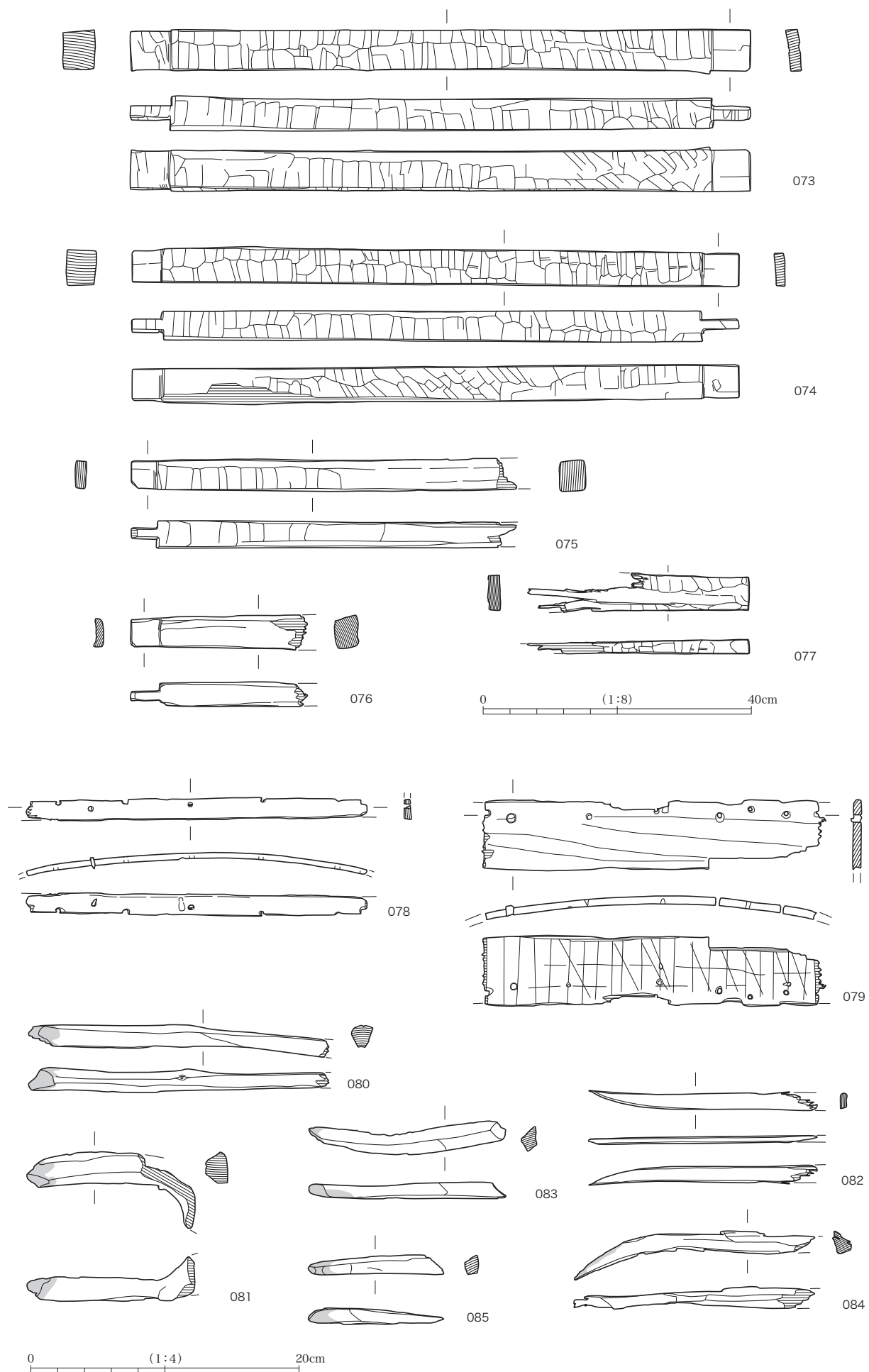
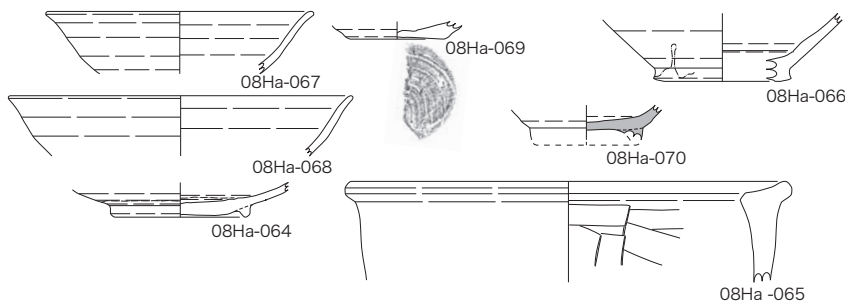


図 58 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 出土遺物

図 59 塔の越遺跡 08Ha 区 010SE 井戸材及び出土木製品実測図



014SK



検 1

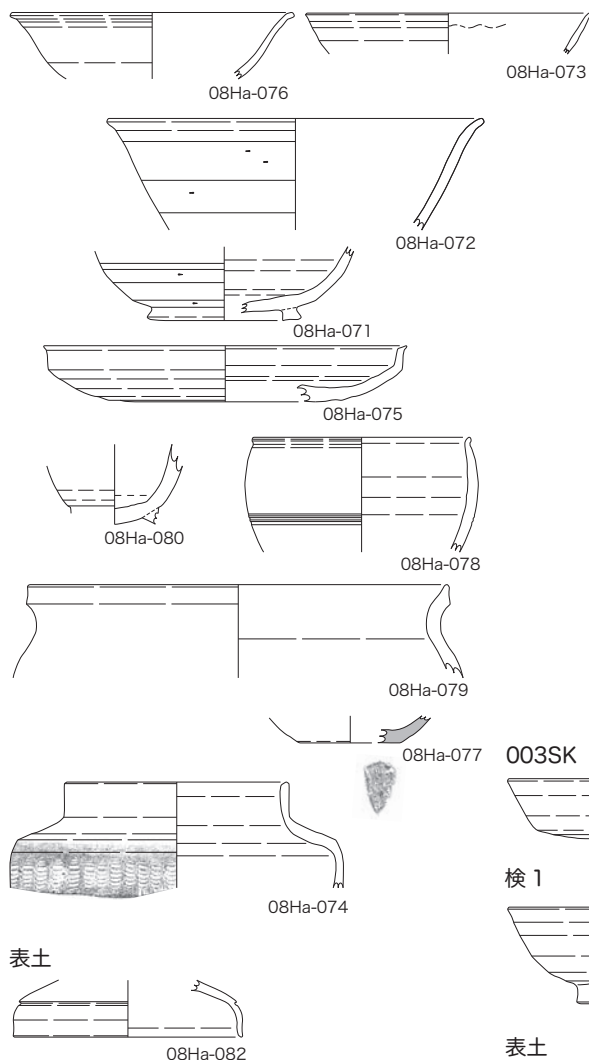


図 60 塔の越遺跡 08Ha 区
出土遺物実測図

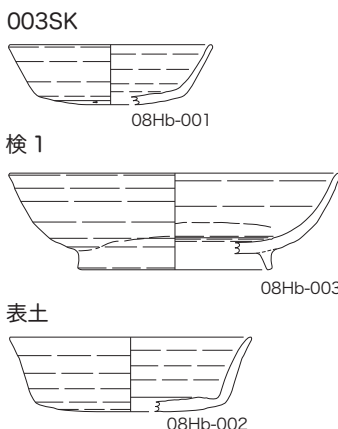


図 61 塔の越遺跡 08Hb 区
出土遺物実測図

あり、一部に初期の山茶碗を含む。

最下層からは0-53 窯式の碗も出土しており、井戸の設置年代はそのあたりに置かれよう。そして、同じく最下層から加工円盤が出土していることは、陶丸に先行して打ち欠きの加工品が存在することを示すものとなろう。しかも、近世とは異なって明らかに高台部分が素材に用いられており、この点は土田遺跡やその他の事例とも共通している。大型品も無く、「円盤」というより「丸」状加工品というほうが相応しい。

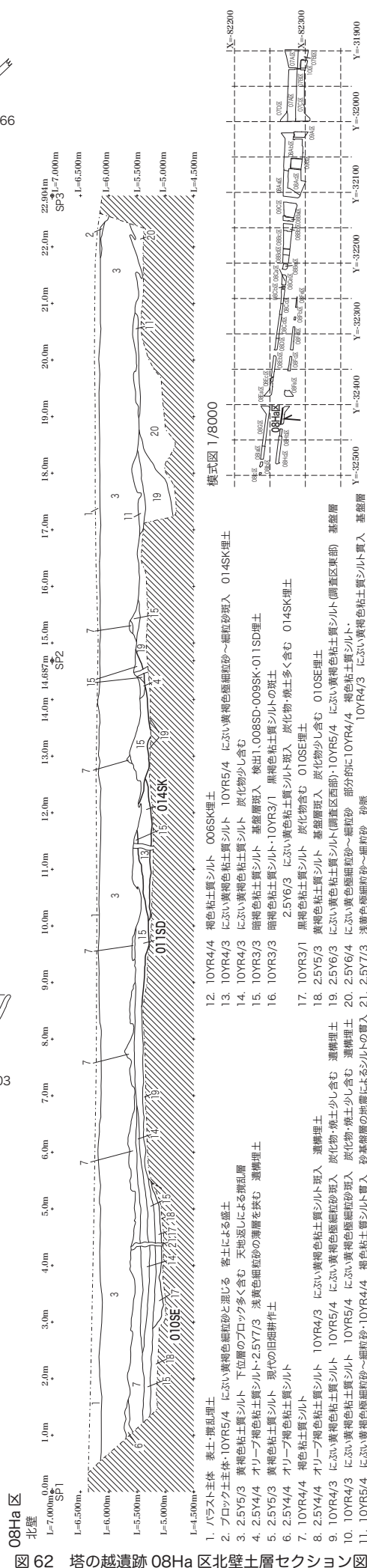
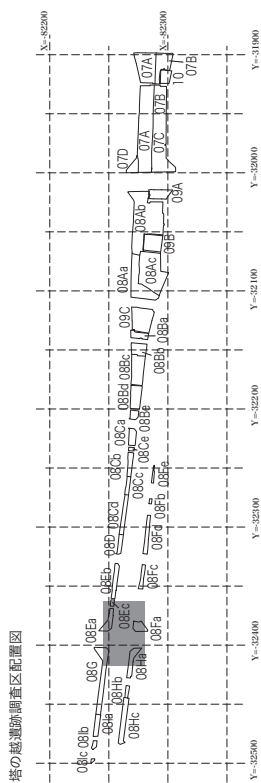
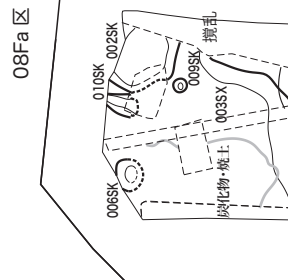
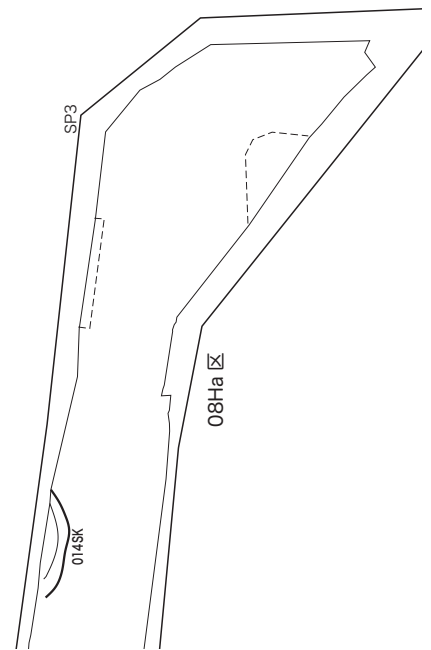


図 62 塔の越遺跡 08Ha 区北壁土層セクション図



A vertical scale bar with markings at 0m, 1m, 5m, 10m, and 20m.



● 08Ea 区

近世以降の耕作痕は深くまで及んでいるが、さいわい下部の遺構を破壊するまでには至っていない。遺構は多数の小穴と溝が2条検出された。

遺構は25層を基盤とするものがほとんどである。25層は斑土で、下面は東がやや高く、北東に向けて下降しており、上面も同様である。030SXは25層の下部に形成されており、それを埋める26層が基盤層の土壌化層であるとの所見によれば、当初に形成されていた地表面の凹凸が25層の形成に際して削平されずに残されたものと考えられる。25層は斑土であり、基盤層である27層との境界が明瞭なことから、当該層は整地層と推測される。

小穴にはサイズの定まらないものも多いが、014SKのように礫を埋め込んだものもあり、根固めとすれば柱穴ということになろう。しかし、掘立柱建物が建つような整然さは調査区内では認められず、もちろん竪穴建物跡の痕跡も認められない。隣接地といった印象である。



図 64 塔の越遺跡 08Ea 区準備工事



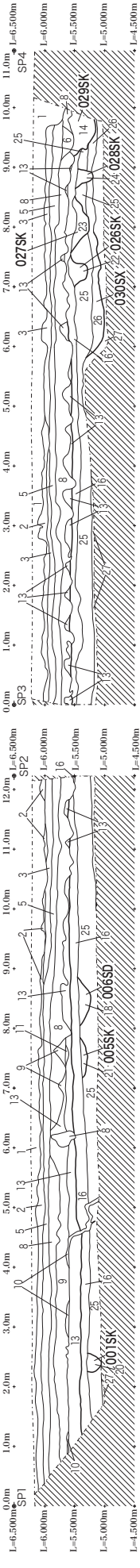
図 65 塔の越遺跡 08Ea 区トレンチ掘削



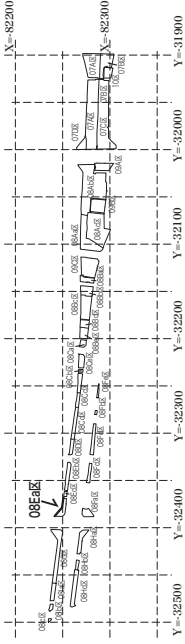
図 66 塔の越遺跡 08Ea 区遺構掘削

08Ea区

北東壁



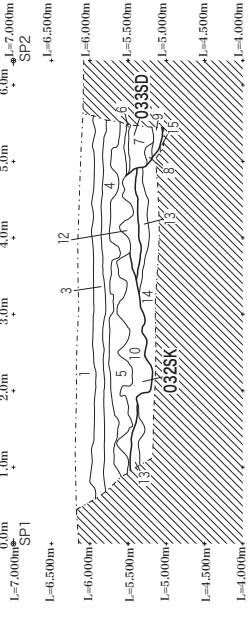
模式図 1/8000



1. パラスト主体 表土・撈乱埋土
2. 5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト 礫混じり・10Y7/1 灰白色細粒砂を薄層状・斑状に含む
3. 5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト 礫混じり
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 下部に2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルトの斑土含む 撈乱埋土
5. 2.5Y4/3 オリーブ黄褐色粘土質シルト 現代の旧耕作土
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 2.5Y4/3 オリーブ灰色粘土質シルト混入 炭化物少し含む 撈乱埋土
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトの斑土 撈乱埋土
8. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 調査区東部では13層・16層のプロック含む
畝間溝の下部は所により10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト・10YR6/3 に近い黄褐色細粒砂の相互層が堆積 近代?の畑耕作土・畝間溝埋土
9. 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト 近代の畑耕作土
10. 2.5Y7/1 灰白色細粒砂 砂脈部分で下位層を斑状・薄層状に含む 砂脈・噴砂
11. 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト 近代の耕作溝埋土
12. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト・10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルトの斑土 遺構埋土
13. 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト・10YR6/3 に近い黄褐色細粒砂の相互層・マーズル状 近世?の畑耕作土
14. 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト 10YR4/4 褐色粘土質シルト混入 土器碎片・炭化物含む 029SK埋土

08Ec区

北壁



1. パラスト主体 表土
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 礫混じり 下部は2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトの相互 撈乱埋土
3. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト 礫混じり
4. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 現代の旧耕作土
5. 2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルト 下部に下位層のプロック多く含む 近代?の畑耕作土・畝間溝埋土
6. 2.5Y7/1 灰白色細粒砂・細粒砂 10YR5/3 に近い黄褐色粘土質シルト混入 033SD埋土(南掘削溝埋土)
7. 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト・2.5Y6/3 に近い黄褐色粘土質シルトの斑土・2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト混入 炭化物少し含む 033SD埋土
8. 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト・2.5Y6/3 に近い黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト混入 033SD埋土
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルトの斑土・2.5Y4/3 オリーブ灰色粘土質シルト・2.5Y6/3 に近い黄褐色粘土質シルト混入 033SD埋土
10. 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 に近い黄褐色粘土質シルト少し混入 土器碎片含む 032SK埋土
11. 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 に近い黄褐色粘土質シルト混入 遺構埋土?
12. 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト・10YR4/4 褐色粘土質シルトの斑土・10YR5/4 に近い黄褐色粘土質シルト混入 細粒の中礫までの砂礫・炭化物・土器碎片多く含む 遺構埋土?
13. 10YR5/4 に近い黄褐色粘土質シルト 10YR4/3 褐色粘土質シルトの斑土・10YR5/4 に近い黄褐色粘土質シルト混入 基盤層の土壌化層
14. 10YR5/4 に近い黄褐色粘土質シルト 基盤層
15. 10YR5/4 に近い黄褐色細粒砂 基盤層

図 67 塔の越前跡 08Ea区・Ec区土層セクション図

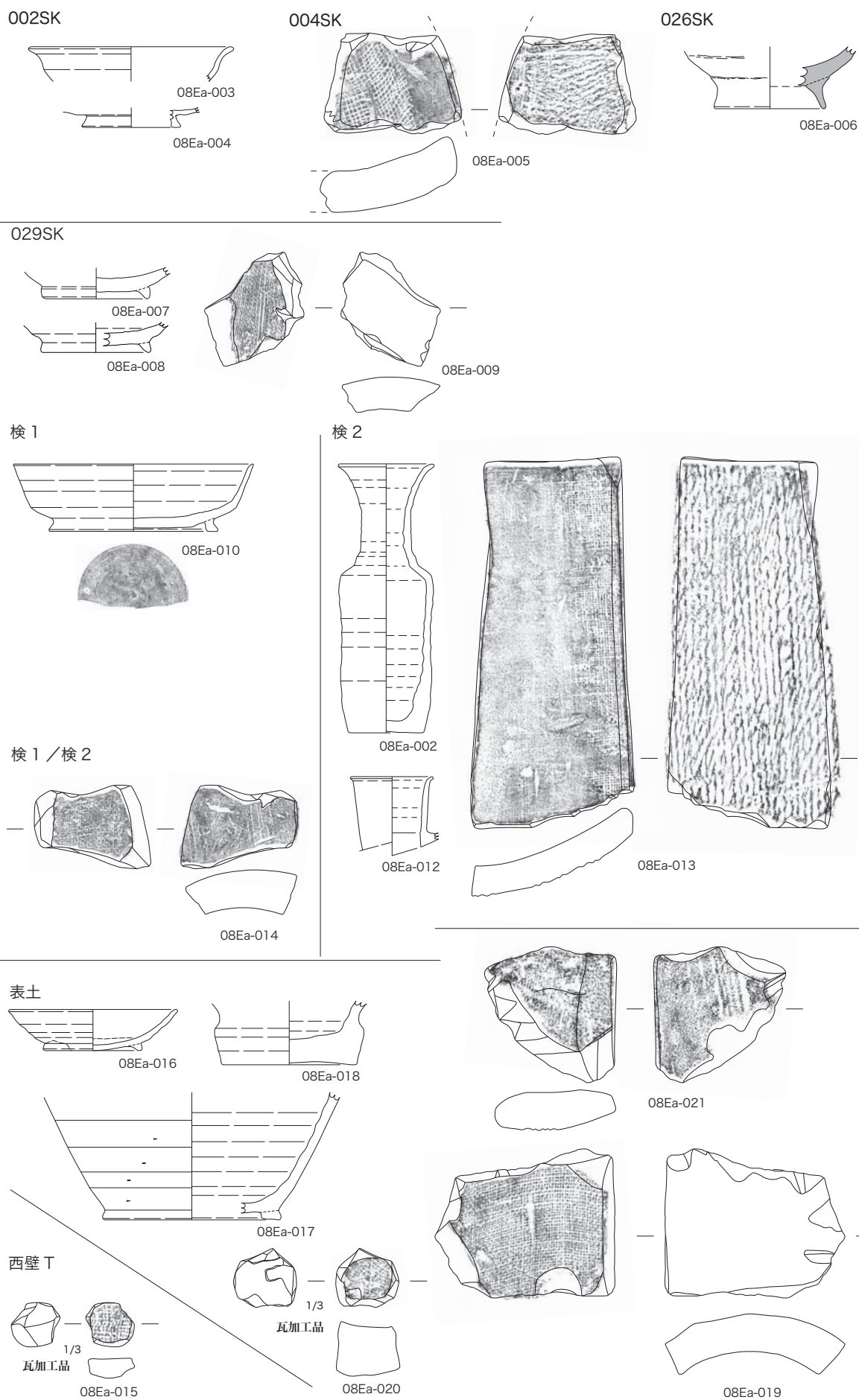
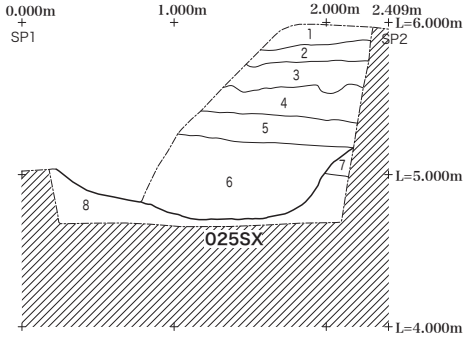


図 68 塔の越遺跡 08Ea 区出土遺物実測図

025SX-EY1ライン



- 1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトの斑土
- 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト埋入 表土
- 2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト埋入
- 3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト埋入
- 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 炭化物少し含む
- 5. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 025SX埋土
- 6. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト埋入 025SX埋土
- 7. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 基盤層
- 8. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂 基盤層

塔の越遺跡 08Eb 区 025SX 土層セクション

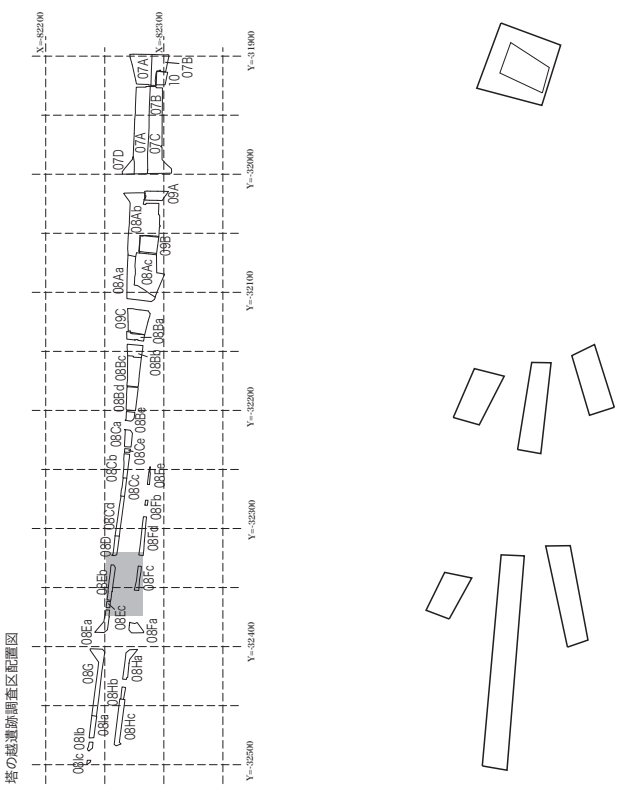
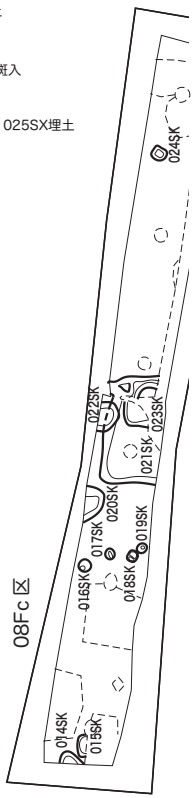
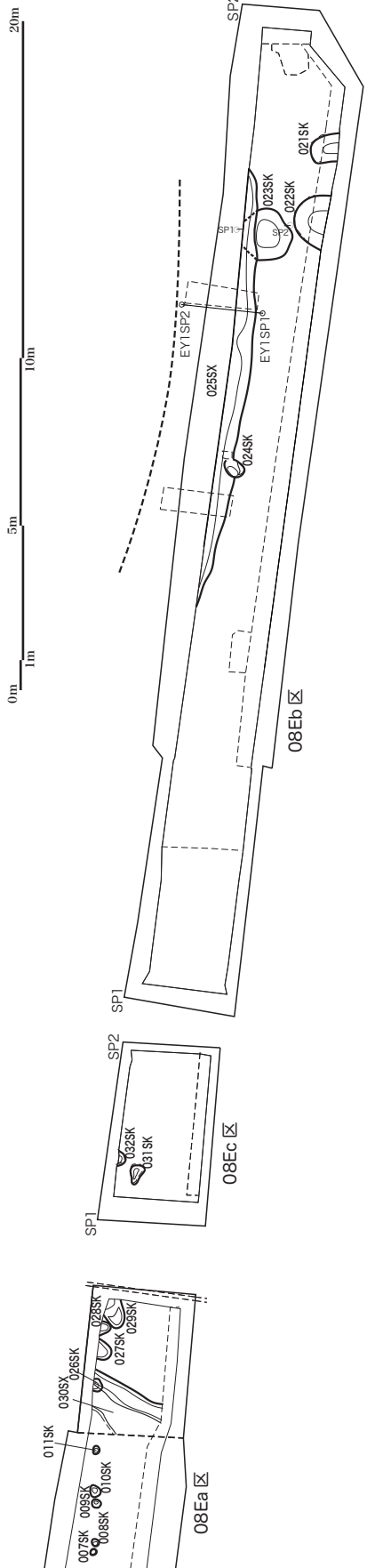


図 69 塔の越遺跡 08Ea・08Ec・08Eb・08Fc 区遺構図

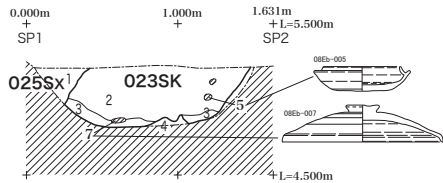
● 08Eb 区

08Ea 区とは異なって、大形の土坑や溝が検出された。検出面は中世の耕作土である 28 層の下にあり、28 層には炭化物が含まれていることから、それによって遺構上面は削平された可能性がある。

後述するように、022SK・023SK は共通した様相の廃棄土坑であり、動物遺存体等を含むことから食生活、もしくは動物処理に関わることは明らかである。不明瞭ではあったが、東に隣接する 08D 区で推測される竪穴建物群の展開と関連するものであろう。

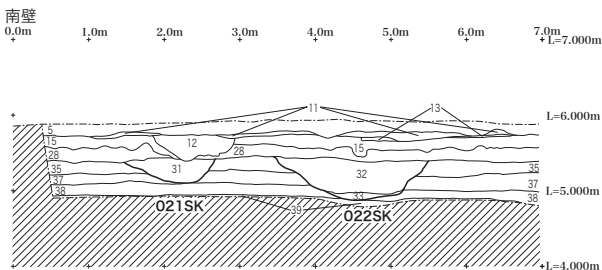
025SX 微妙に弧状をなしており、古墳の周溝

023SK・025SX



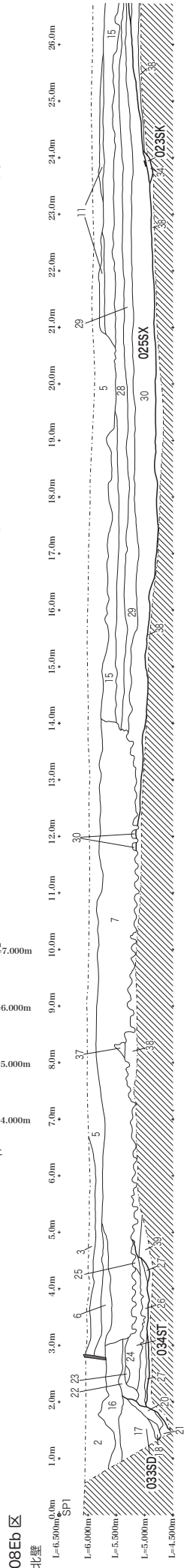
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト珉入 025SX埋土
2. 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト・2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト
10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト珉入
礫・炭化物・焼土多く含む 動物遺体出土 023SK埋土
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト
2.5Y5/1 黄灰色シルトの珉土 023SK埋土
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂 基盤層

図 70 塔の越遺跡 08Eb 区 023SK・025SX 土層セクション図



5. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトの珉土
2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト珉入 ビニール製品含む 表土・調査前までの畑耕作土
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト珉入
現代の旧畑耕作土
13. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトの珉土 攪乱埋土
15. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 28層のブロック含む 現代の旧畑耕作土
28. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 炭化物少し含む 検出1相当
31. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト珉入
炭化物・焼土含む 021SK埋土
32. 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト・2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトの珉土
10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト珉入
礫含む 炭化物・焼土多く含む 動物遺体出土 022SK埋土
33. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトの珉土
022SK埋土
34. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトの珉土
023SK埋土
35. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR6/3 にぶい黄褐色粘土質シルト珉入(東部)
～10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂珉入(西部)
検出2相当
36. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト
2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト珉入 遺構埋土
37. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 基盤層
38. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂 基盤層
39. 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂 基盤層

図 71 塔の越遺跡 08Eb 区南壁東部土層セクション図



08Eb 区
北壁

18. 2.5Y6/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト珉入 炭化物少し含む
033SD埋土(遺構埋土)

19. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y6/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト珉入
033SD埋土

21. 2.5Y5/1 黄褐色粘土質シルト 033SD埋土

20. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルトの珉土/2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 2.5Y6/3 にぶい黄褐色粘土質シルト珉入
033SD埋土

22. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト多く珉入 炭化物少し含む

23. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト・7.5Y5/1 灰黄色粘土質シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂の珉土
034ST埋土(跡地のための埋戻し)

24. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂の珉土 7.5Y5/1 灰黄色粘土質シルト珉入
034ST埋土(跡地のための埋戻し)

25. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルトの珉土 034ST埋土(耕作土)

26. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂珉入 034ST埋土(耕作土)

27. 2.5Y5/2 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂珉入 炭化物少し含む 検出1相当

28. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 炭化物少し含む 検出1相当

29. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 025SX埋土

30. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト珉入 025SX埋土

31. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト珉入 炭化物・焼土含む 021SK埋土

32. 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト・2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトの珉土 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト珉入
礫含む 炭化物・焼土多く含む 動物遺体出土 022SK埋土

33. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトの珉土 022SK埋土

34. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトの珉土 023SK埋土

35. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR6/3 にぶい黄褐色粘土質シルト珉入(東部)
～10YR4/4 褐色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂珉入(西部) 検出2相当

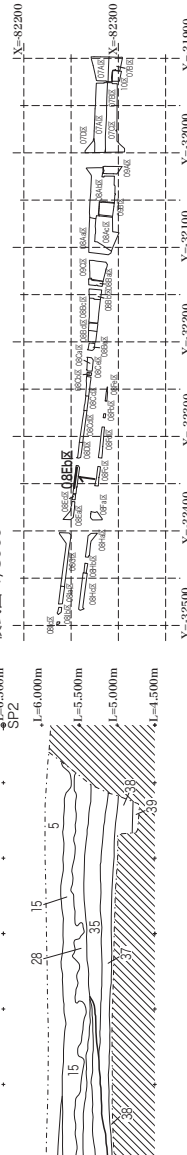
36. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト珉入 遺構埋土

37. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 基盤層

38. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂 基盤層

39. 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂 基盤層

模式図 1/8000



1. 下位層のブロック土主体 バラスト・コンクリート塊含む 表土・假設コンクリート基礎確認埋土

2. 5層・6層のブロック バラスト・コンクリート塊・レンガ含む 表土・攪乱埋土

3. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 表土・調査前までの畑耕作土

4. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト部分的に珉入 ビニール・発泡スチロール製品含む 表土・調査前までの畑耕作土

5. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルトの珉土 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト珉入 ビニール製品含む 表土・調査前までの畑耕作土

6. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR4/4 褐色極細粒砂珉入 礫含む 現代の旧畑耕作土

7. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 下位層のブロック・珉土含む 天地返し、もしくは土取りに伴う攪乱層

8. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 15層・28層のブロック含む 攪乱埋土

9. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 15層・28層・35層のブロック含む 攪乱埋土

10. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト珉入 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト珉入 攪乱埋土

11. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト珉入 現代の旧畑耕作土

12. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘土質シルト 15層のブロック含む 現代の旧畑耕作土

13. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトの珉土 攪乱埋土

14. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y7/2 灰黄褐色極細粒砂の珉土 現代の旧畑耕作土

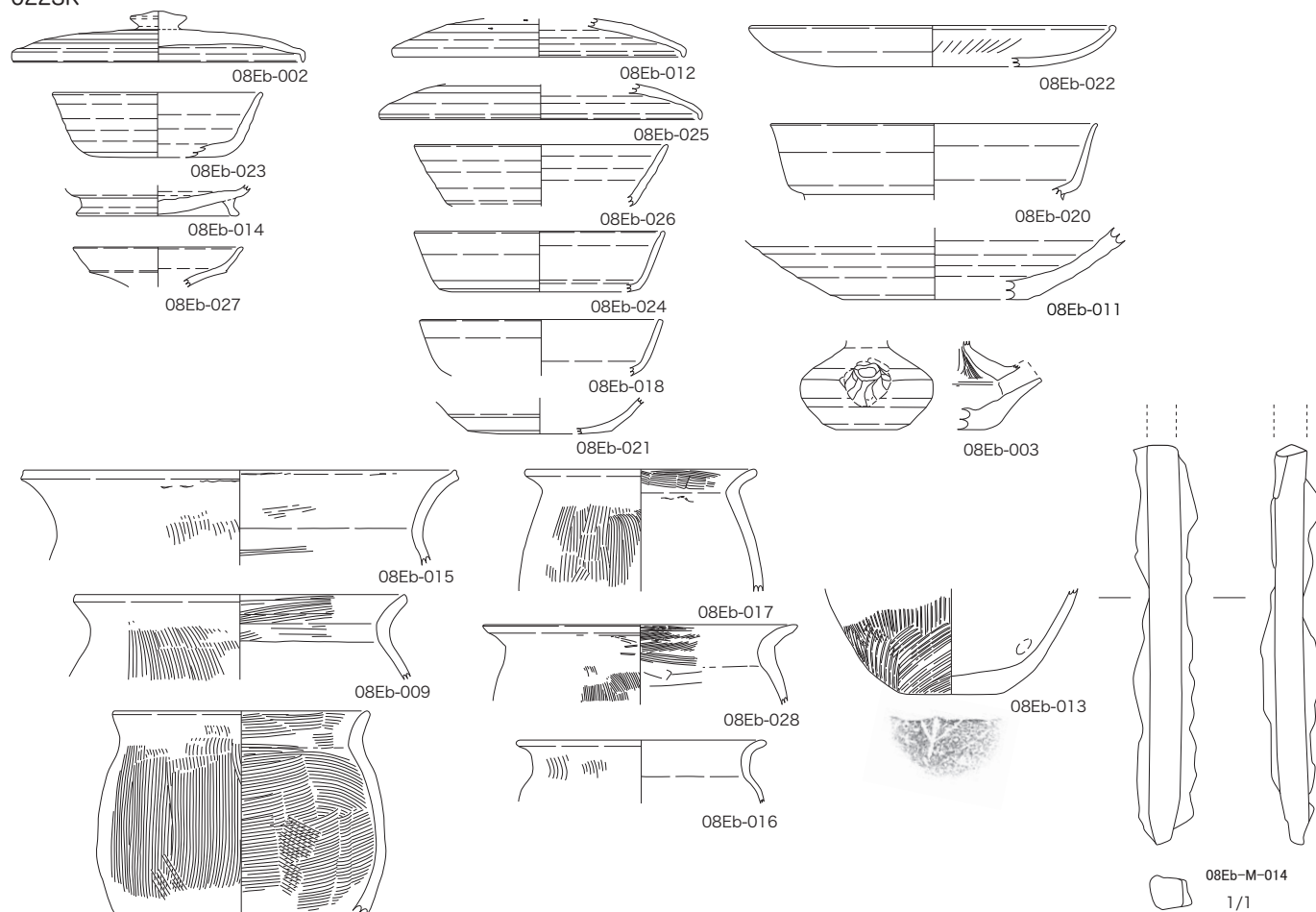
15. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 28層のブロック含む 現代の旧畑耕作土

16. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘土質シルト珉入 炭化物少し含む

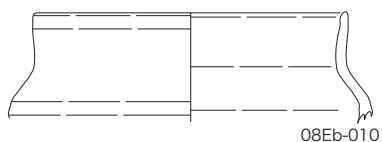
17. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y6/3 にぶい黄褐色粘土質シルトの珉土 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト珉入 炭化物少し含む 033SD埋土(再掘削埋土)

図 72 塔の越遺跡 08Eb 区北壁土層セクション図

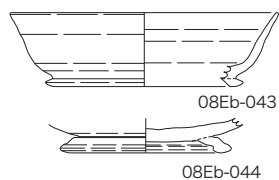
022SK



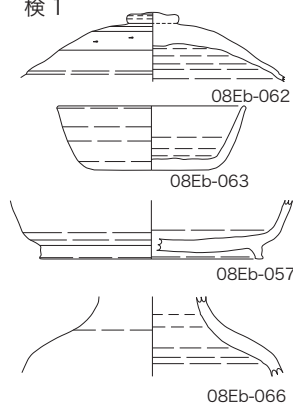
022SK 上層



022SK/023SK



検 1



表土

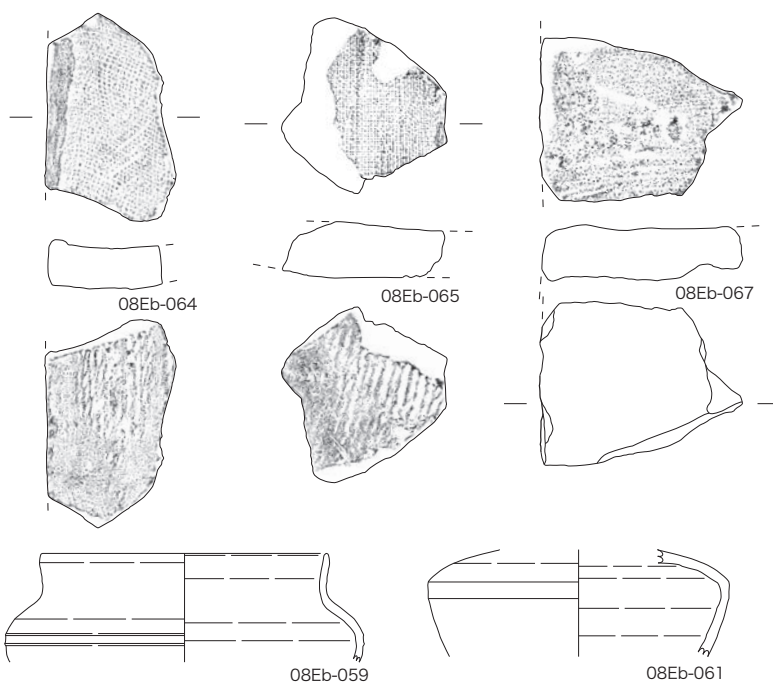
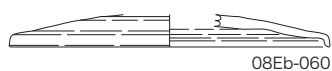


図 73 塔の越遺跡 08Eb 区出土遺物実測図

痕跡をイメージさせる。民地との境界際までトレンチを掘削して確認した結果、幅2m、深さ50cmの斑土を埋土とする溝であることを確認したが、東端で終息するかどうかは不明である。出土遺物には11世紀まで下る清郷形甕やフィゴの羽口片が含まれていた。

021SK やや楕円形のプランで、炭化物や焼土が堆積している。生活残滓の廃棄坑であろう。

022SK 堆積土の大半をなす2層は炭化物や焼土、そ

して歯や肩甲骨等の動物骨片等を含み、いわゆる廃棄土坑に属する。

出土遺物は8世紀前半を中心とする時期で、畿内系の暗紋土師皿も含まれていた。

023SK 堆積土は隣接する022SKとほぼ同じ様相であり、直接の切り合い関係は無いこと、接合資料があることから、近接した時期であろう。

(石黒立人・鶴飼雅弘)

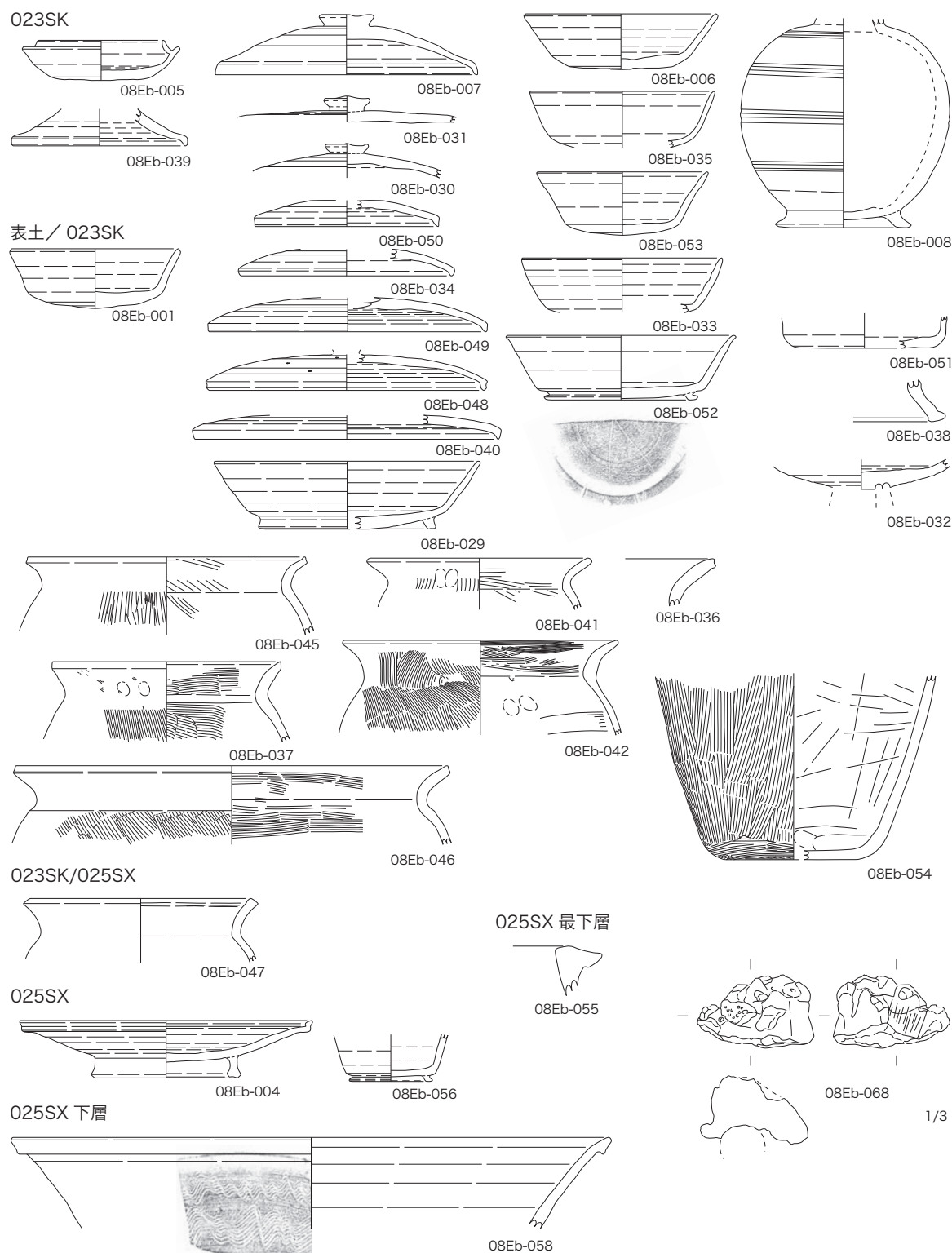
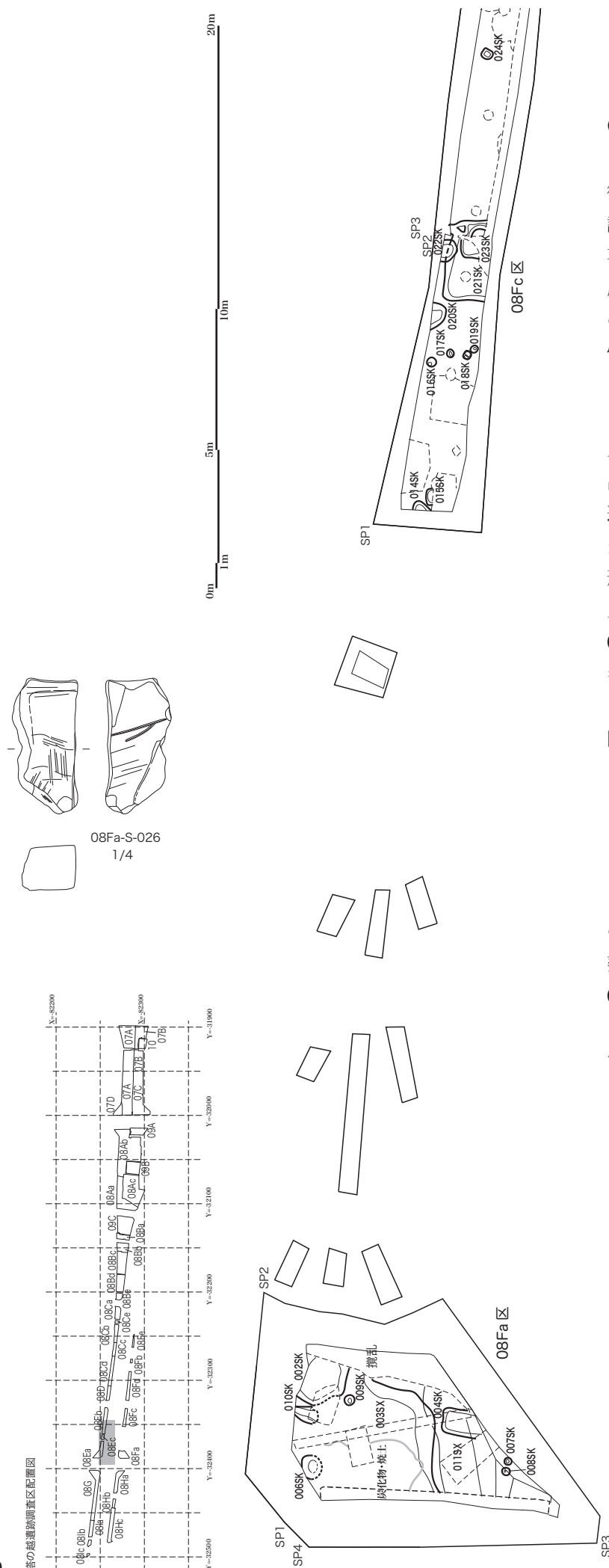


図74 塔の越遺跡 08Eb 区出土遺物実測図



● 08Fa 区

他の地区に比べて古代の包含層の厚いのが特徴で、遺構内部といった印象が強い。しかし、調査範囲の狭さから遺構であるとしても輪郭は不明である。部分的に焼土と炭化物を含む堆積層が不定形な広がりを見せており、それを遺構の輪郭と捉えたが、堆積状況の違いによる可能性もある。残念ながら断面でのみ検出した遺構もある。

古代の遺構は下部（011SX）が8世紀後半、上部（003SX）が9世紀で、7世紀代の遺物も出土している。さらに遡る5～6世紀の遺物は遊離して出土しており、他の調査区と同様に該当する遺構の痕跡は無い。右に掲載した鉄鍬は形状から当該期に属し、後代の遺構堆積層に混入したと推測される。

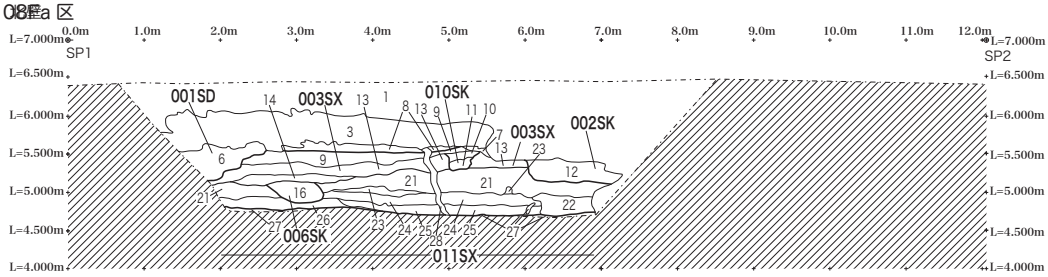
003SX 下部の堆積層（北壁14層相当）には多量の焼土が含まれ、灰釉陶器碗や砥石が出土した。遺構としての底面標高は一定せず、北西隅がやや低くなる傾向にあり、竪穴建物跡という印象は無い。下部にある011SXの埋まり方に関わる堆積層の可能性もあるが、西壁15層を介する不整合面があるので区別できると考える。

出土遺物は9世紀後半を中心に行する時期の遺物を若干含む。碗・蓋・盤など供膳具が主で、甕も出土している。

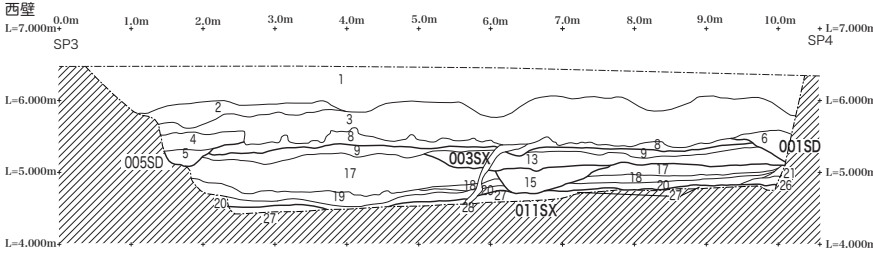
011SX 調査区内で輪郭を押さえることはできなかった。竪穴建物跡というには底面が一定せず、南寄りには溝状の凹地が存在した。堆積層は別にして、形状は08G区009SXに似ていなくもない。上半部は炭化物や焼土を含み（西壁17層に対応）、下部には極細粒砂（西壁19層に対応）が堆積していた。

出土遺物は8世紀後半を中心として、比較的まとまっているが、破片が主である。

図75 塔の越遺跡 08Fa・08Fc区遺構図



1. バラスト主体 表土・攪乱埋土
2. 5Y5/1 灰色粘土質シルト 現代の旧耕作土
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂 下部に8層のブロック 現代の旧畑耕作土
4. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトのブロック含む 005SD埋土
5. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR5/3 にふい黄褐色細粒砂の互層 005SD埋土
6. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトのブロック含む
最下部に10YR6/2 灰黄褐色極細粒砂・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトの細互層 001SD埋土
7. 8層・2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトの斑土
8. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 検出1・近世の畑耕作土
9. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR4/4 褐色粘土質シルトの斑土
10. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトの斑土 焼土含む 010SK埋土
11. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR4/4 褐色粘土質シルトの斑土 炭化物・焼土多く含む 010SK埋土
12. 13層・20層・10YR3/2 黒褐色粘土質シルトの斑土 002SK埋土
13. 10YR4/4 褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 003SX埋土
14. 13層と同じ 炭化物・焼土含む 003SX埋土
15. 10YR4/4 褐色粘土質シルト・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトの斑土 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂斑入 遺構埋土
16. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト斑入 焼土・炭化物含む 006SK埋土
17. 10YR4/4 褐色粘土質シルト・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトの斑土 炭化物・焼土含む 011SX埋土
18. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 011SX埋土
19. 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂 10YR4/4 褐色粘土質シルト斑入 011SX埋土
20. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR5/3 にふい黄褐色極細粒砂斑入 011SX埋土
21. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 炭化物・焼土少量含む 011SX埋土
22. 24層・25層の斑土 10YR4/4 褐色粘土質シルト斑入 011SX埋土
23. 10YR4/3 にふい黄褐色極細粒砂～細粒砂 011SX埋土
24. 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂～細粒砂 011SX埋土
25. 10YR5/3 にふい黄褐色極細粒砂 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 011SX埋土
26. 10YR4/3 にふい黄褐色極細粒砂～細粒砂・10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルトの斑土 011SX埋土
27. 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト～極細粒砂 基盤層
28. 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂 砂脈



1. バラスト主体 表土・攪乱埋土
2. 5Y5/1 灰色粘土質シルト 現代の旧耕作土
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂 下部に8層のブロック 現代の旧畑耕作土
4. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトのブロック含む 005SD埋土
5. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR5/3 にふい黄褐色細粒砂の互層 005SD埋土
6. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトのブロック含む
最下部に10YR6/2 灰黄褐色極細粒砂・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトの細互層 001SD埋土
7. 8層・2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトの斑土
8. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 検出1・近世の畑耕作土
9. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR4/4 褐色粘土質シルトの斑土
10. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトの斑土 焼土含む 010SK埋土
11. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR4/4 褐色粘土質シルトの斑土 炭化物・焼土多く含む 010SK埋土
12. 13層・20層・10YR3/2 黒褐色粘土質シルトの斑土 002SK埋土
13. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 003SX埋土
14. 13層と同じ 炭化物・焼土含む 003SX埋土
15. 10YR4/4 褐色粘土質シルト・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトの斑土 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂斑入 遺構埋土
16. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト斑入 焼土・炭化物含む 006SK埋土
17. 10YR4/4 褐色粘土質シルト・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトの斑土 炭化物・焼土含む 011SX埋土
18. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 011SX埋土
19. 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂 10YR4/4 褐色粘土質シルト斑入 011SX埋土
20. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 10YR5/3 にふい黄褐色極細粒砂斑入 011SX埋土
21. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 炭化物・焼土少量含む 011SX埋土
22. 24層・25層の斑土 10YR4/4 褐色粘土質シルト斑入 011SX埋土
23. 10YR4/3 にふい黄褐色極細粒砂～細粒砂 011SX埋土
24. 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂～細粒砂 011SX埋土
25. 10YR5/3 にふい黄褐色極細粒砂 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 011SX埋土
26. 10YR4/3 にふい黄褐色極細粒砂～細粒砂・10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルトの斑土 011SX埋土
27. 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト～極細粒砂 基盤層
28. 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂 砂脈

図 76 塔の越遺跡 O8Fa 区土層セクション図

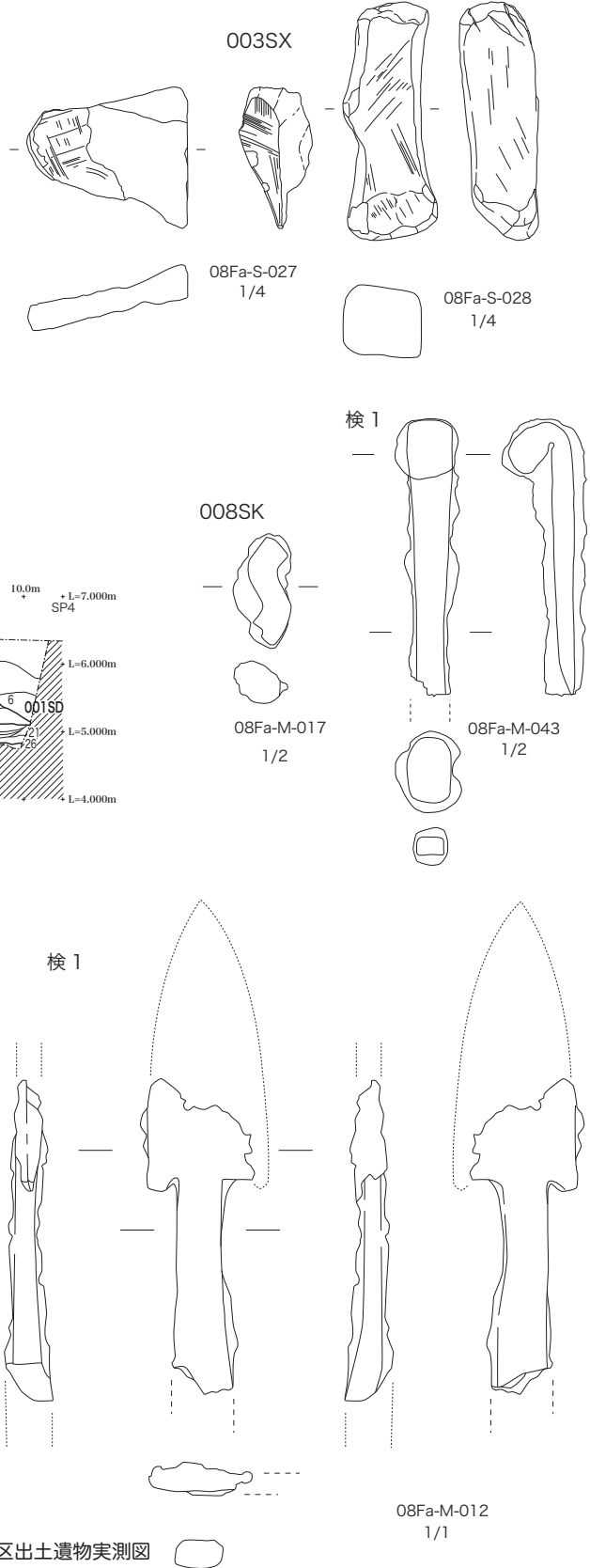
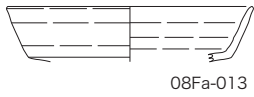


図 77 塔の越遺跡 O8Fa 区出土遺物実測図

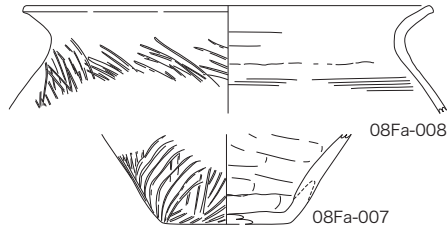
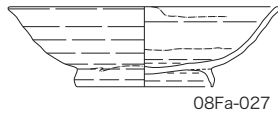
002SK



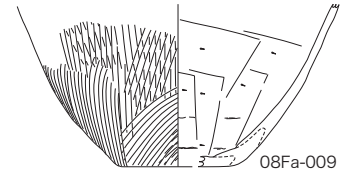
009SK



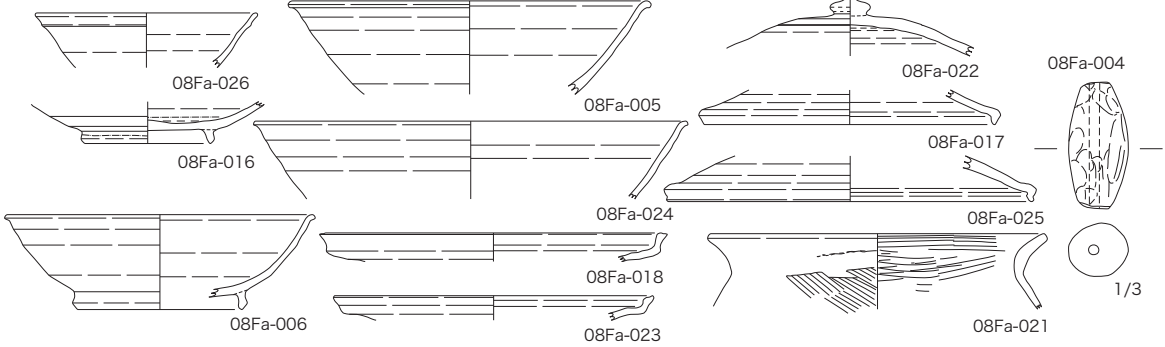
006SK



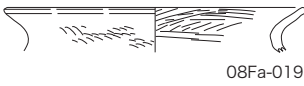
006SK/003SX



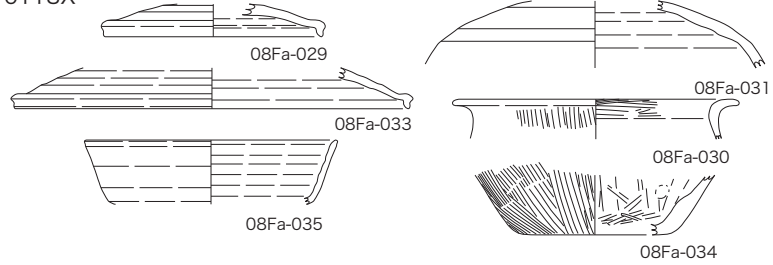
003SX



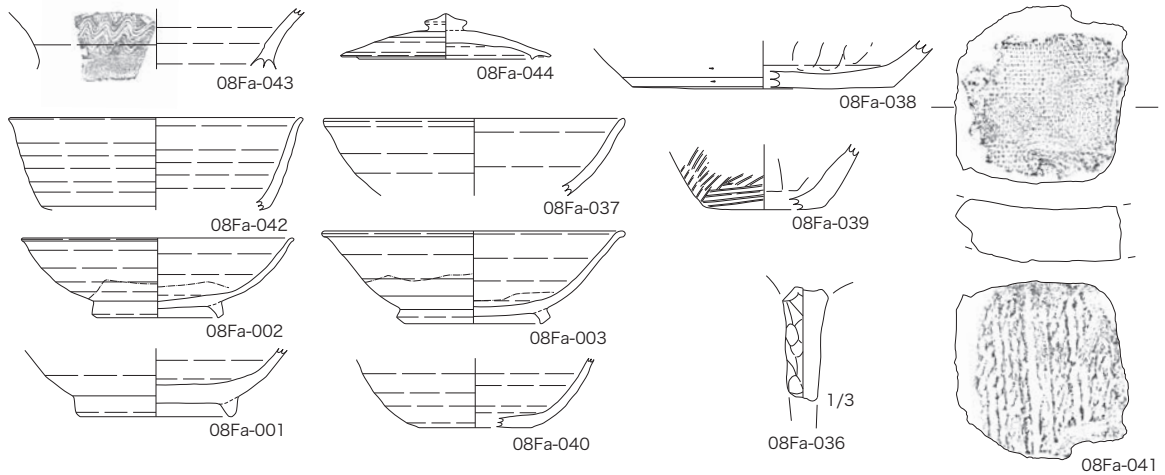
003SX 焼土・炭化物層



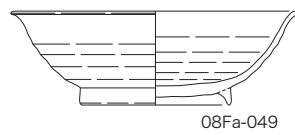
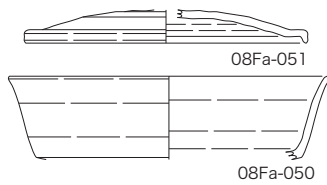
011SX



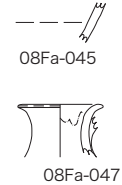
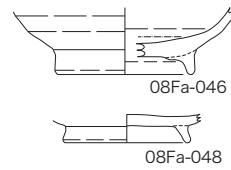
検 1



西壁 T



西壁面



表土

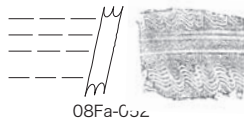
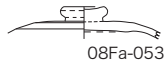


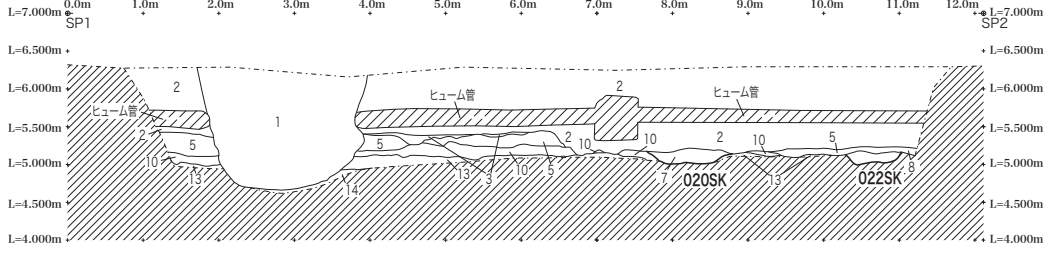
図 78 塔の越遺跡 08Fa 区出土遺物実測図

● 08Fc 区

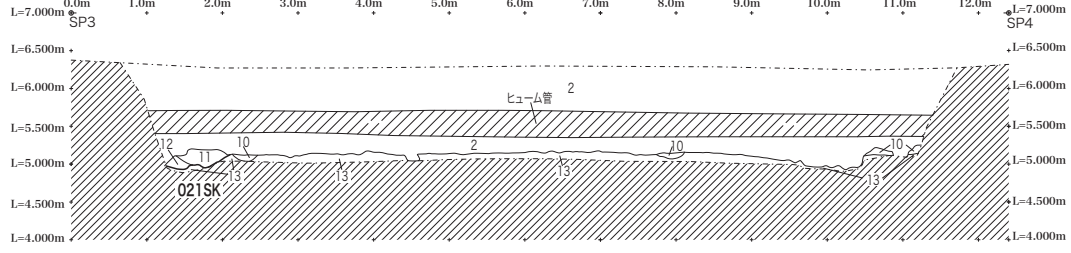
08Fa 区との間は完全に破壊されていた。08Fc 区も集合住宅の基礎でかなり破壊されていたが、かろうじて残った幾つかの遺構を調査することができた。遺物には7世紀代のものがあるが、遺構は9世紀代が中心である。

08Fc 区

北壁(西側)



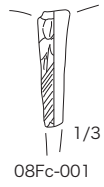
北壁(東側)



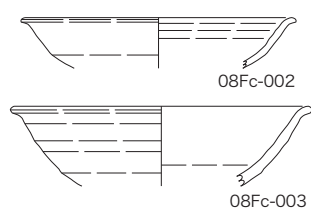
1. 下位層のブロック主体 確認調査トレンチ埋土
2. バラスト・コンクリート・客土のブロック主体 下部は、コンクリート・バラスト 表土・掘乱埋土・ヒューム管と埋設時の敷設バラスト
3. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト・2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト斑入 礫含む 現代の旧耕作土
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 主に下部に10層(東壁では9層・10層)のブロック含む 現代の旧耕作土
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト斑入 014SK埋土
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト斑入 炭化物含む 020SK埋土
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト斑入 焼土・炭化物多く含む 022SK埋土
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂斑入 炭化物・焼土少量含む 遺構埋土?
10. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 13層斑入 検出1
11. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト斑入 焼土・炭化物含む 021SK埋土
12. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト斑入(11層より斑入多い) 021SK埋土
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 基盤層
14. 0YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂(上部)～2.5Y5/3 黄褐色細粒砂(下部) 基盤層

図 79 塔の越遺跡 08Fc 区土層セクション図

018SK



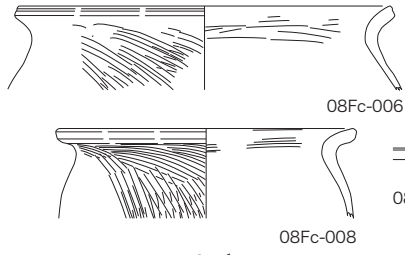
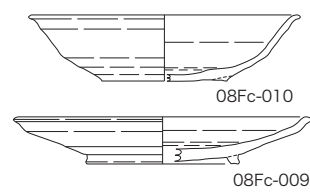
021SK



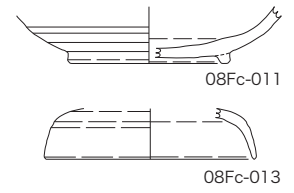
08Fc-004



022SK



023SK



検 1

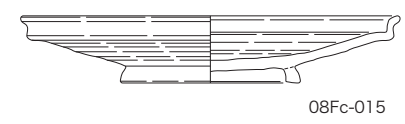


図 80 塔の越遺跡 08Fc 区出土遺物実測図

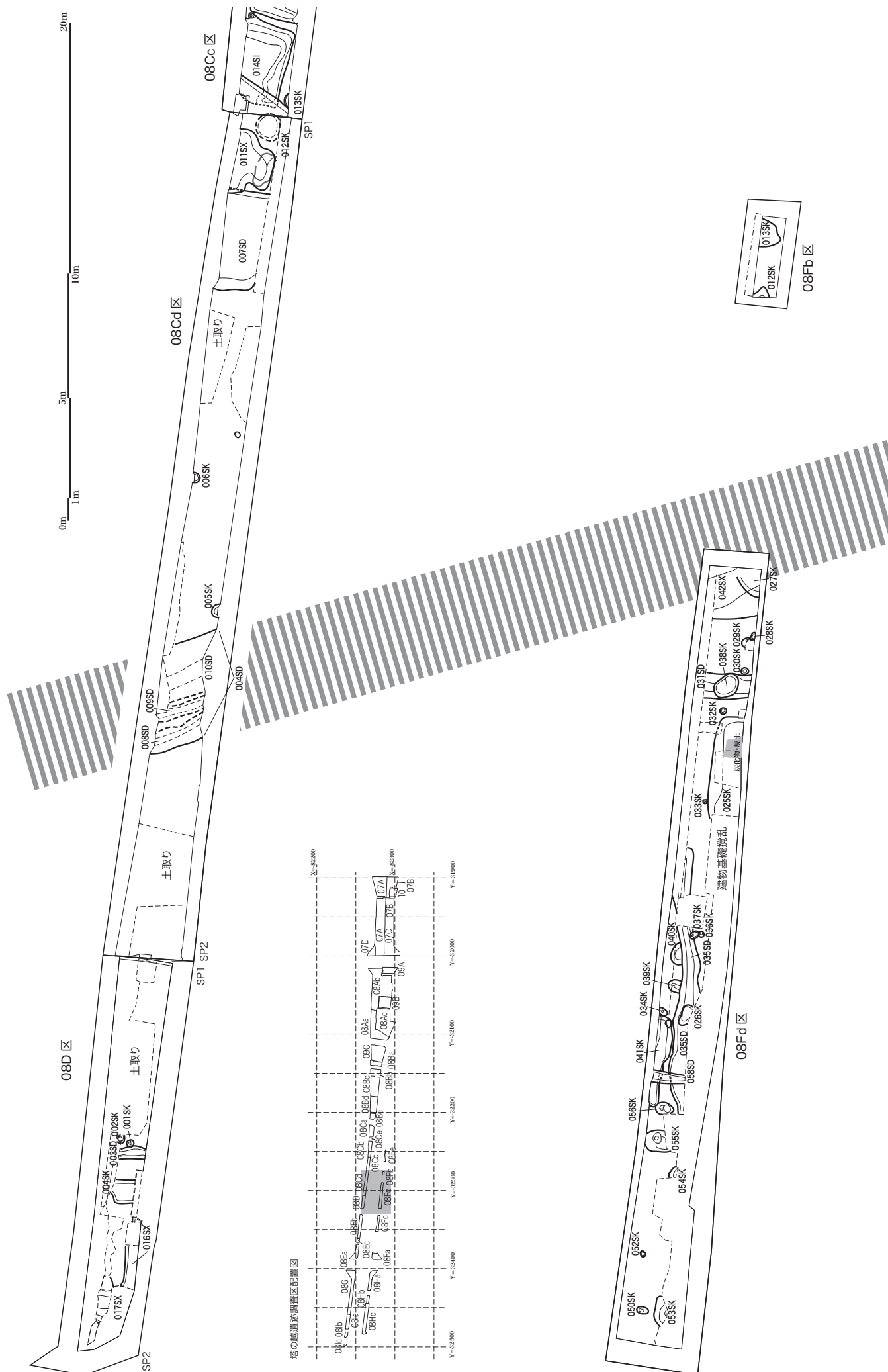


図 81 塔の越遺跡 08D・08Cd・08Cc・08Fb・08Fd区遺構図

● 08D 区

基盤は細粒砂であり、自然堤防の本体に位置していることが窺える。後述する竪穴建物群の展開とも無関係ではないだろう。ただ、土取りや天地返しによって遺構面が破壊されているために調査できた遺構も少ない中で、7世紀後半の遺構が確認できた意義は大きい。また、炭化物層を含む均平な堆積層が複数確認できたので、竪穴建物群が重複して存在する可能性は窺えた。カマド支脚片は出土したが、残念ながらカマド本体の検出には至ら

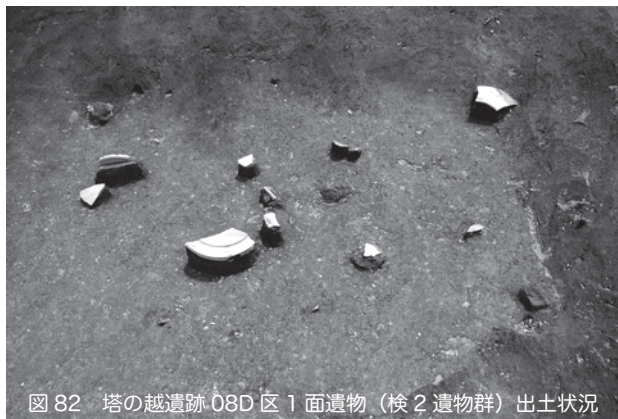


図 82 塔の越遺跡 08D 区 1 面遺物（検 2 遺物群）出土状況

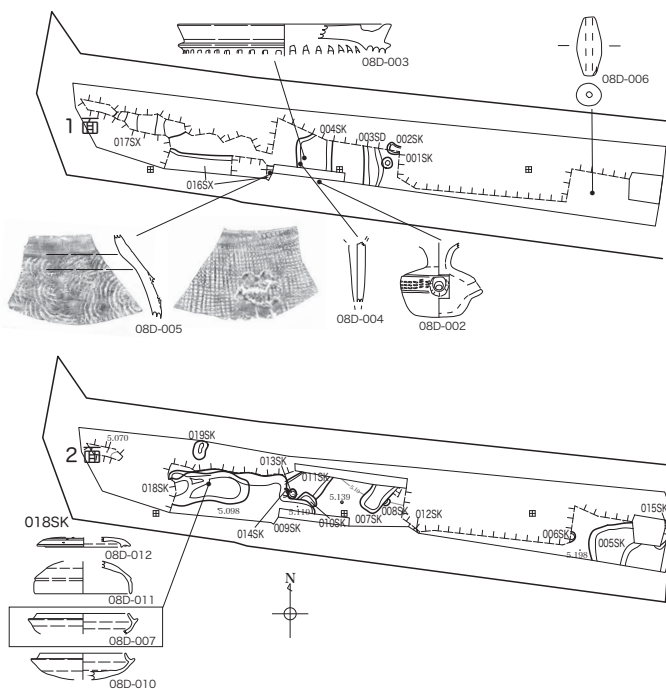


図 83 塔の越遺跡 08D 区遺物分布状況図

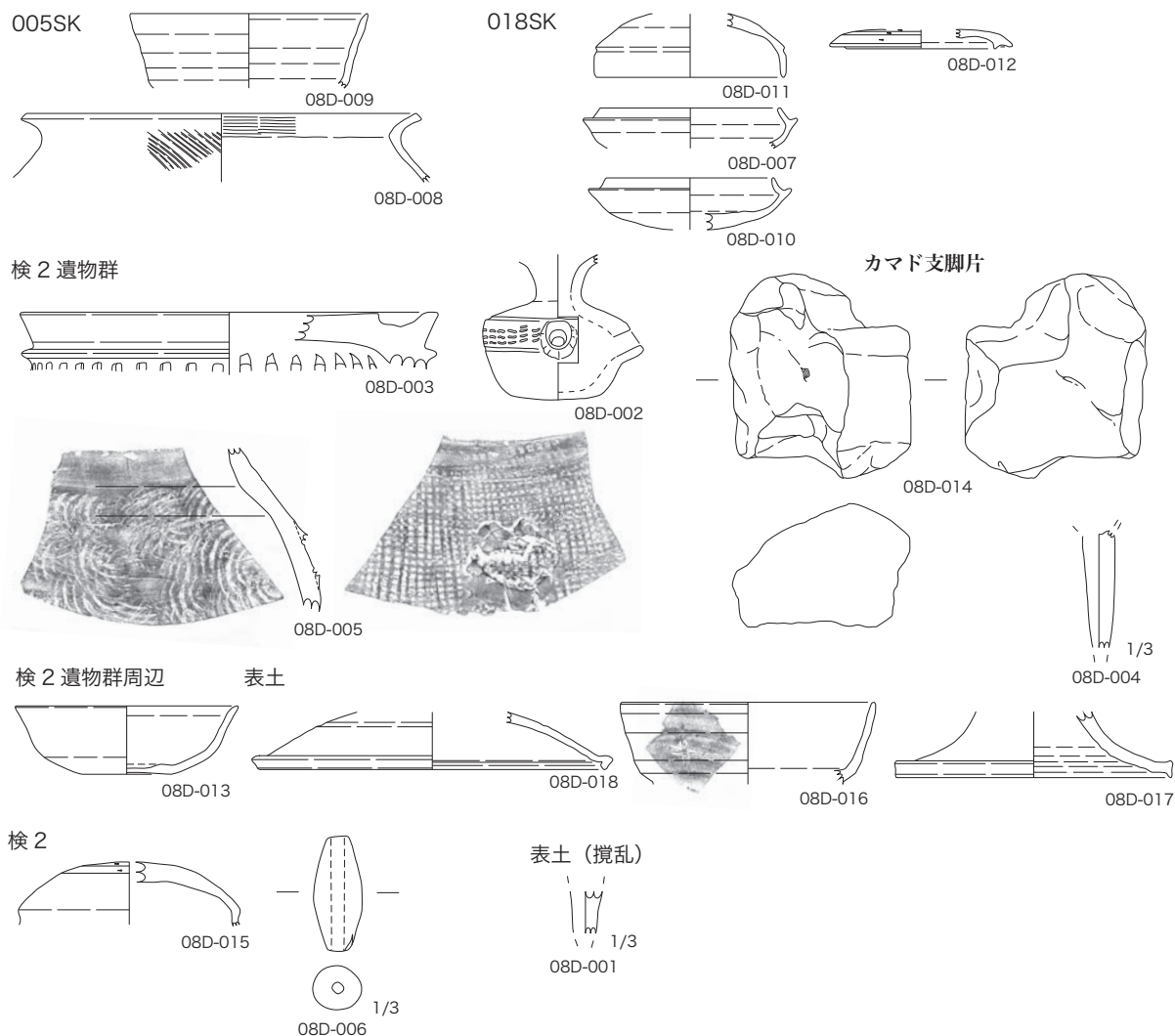


図 84 塔の越遺跡 08D 区出土遺物実測図

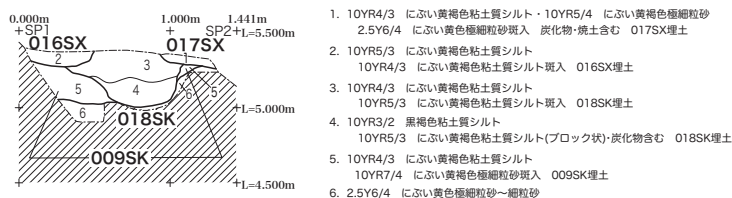
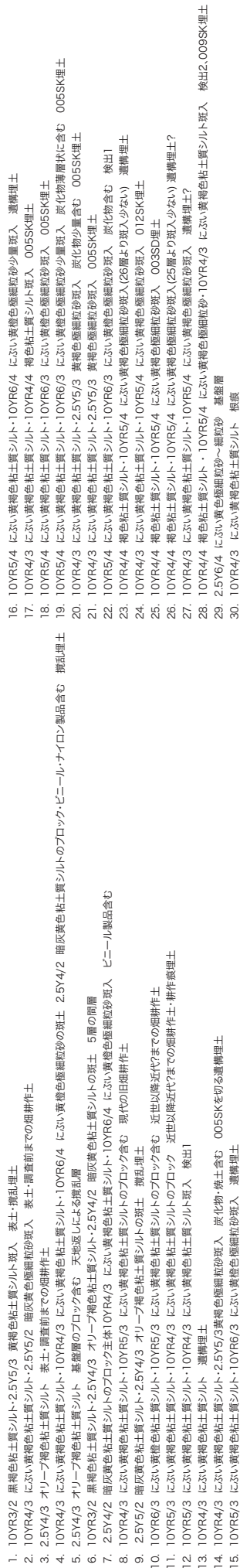
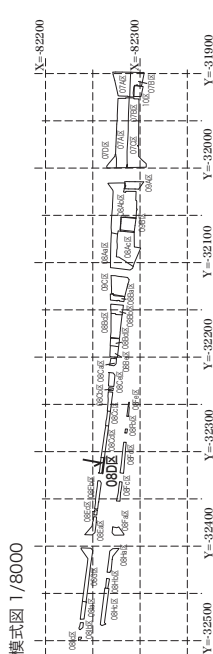
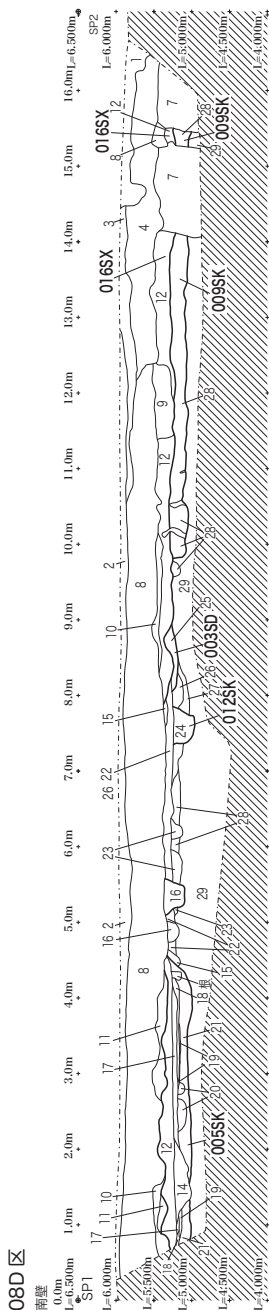


図 86 塔の越遺跡 08D 区南壁 018SK 付近土層セクション図

なかった。

1面 面的な遺物の散布状況が認められたので、「検2遺物群」として取り上げた。カマド支脚片や8世紀前半に属す大形の円面硯も含まれている。

016SX は平坦面を持つ広がり、堅穴建物の掘形の可能性がある。底面標高がほぼ同じ 017SX も同様である。いずれも 8 世紀代に属す。

2面 018SKは確実な7世紀後半の遺構である。残存長2m、幅0.7m、深さ約40cmを測る。

下部の堆積層には炭化物を含み、給源は周辺に展開した同時期の活動域であったとすれば、堅穴建物群が展開する公算も大きい。

009SK は 018SK に切られており、確実に先行する。輪郭がやや不整形ながら軸線をもって方形を呈するかのようであり、これも堅穴建物の掘形の可能性がある。他に、炭化物を含む北壁 22 層も床面覆土の可能性がある。

調査区東端に位置する 005SK は、堆積層上部に炭化物薄層が形成され、竪穴建物跡の可能性が非常に高い。8 世紀に属し、以東に展開する 9 世紀の竪穴建物群との間をつなぐ資料である。

図 85 塔の越遺跡 08D 区南壁土層セクション図

● 08Cd 区

調査区全体が大きく天地返しされて、遺構面や土層断面にはそれに使われた重機バケットの爪痕が明瞭に残されていた。そのため、011SX の輪郭については些か不明瞭さが残った。

基盤層はシルト質が強く、08D 区が砂質であったのとは明らかに異なる。基盤層下部の細粒砂上面標高も 004SD 周辺で下降しており、その上部を覆う旧地表面もやや低くなっていた可能性がある。

004SD 当初は幅 4.5m の溝状部分を一体の溝として調査を進め、遺物の取り上げも 004SD として行った。しかし、調査が進むにつれ、この 004SD は単一の溝ではなく、東側に 008SD・009SD の 2 条が伴うことも判明し、また下部には断面逆台形の 010SD が重複していることを確認した。

時系列では、010SD 埋没過程に溝上部の幅を広げることかたちで断面不整形に再掘削されたことになる。溝として再掘削したというよりは、流入土を浚えたという印

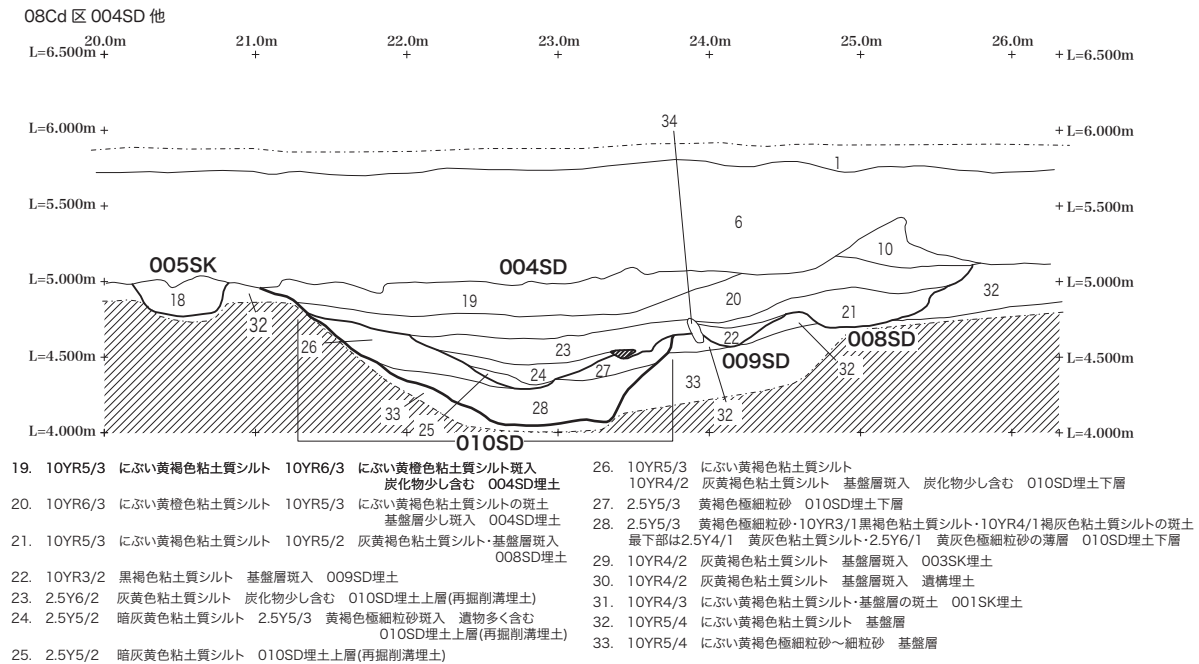


図 87 塔の越遺跡 08Cd 区南壁 004SD 付近土層セクション図

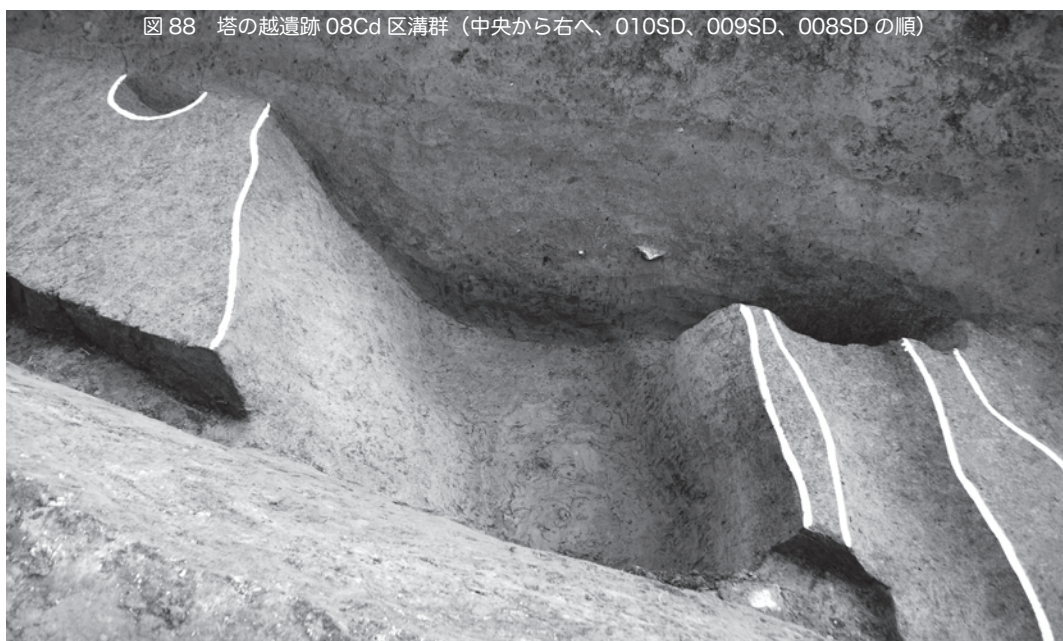


図 88 塔の越遺跡 08Cd 区溝群 (中央から右へ、010SD、009SD、008SD の順)

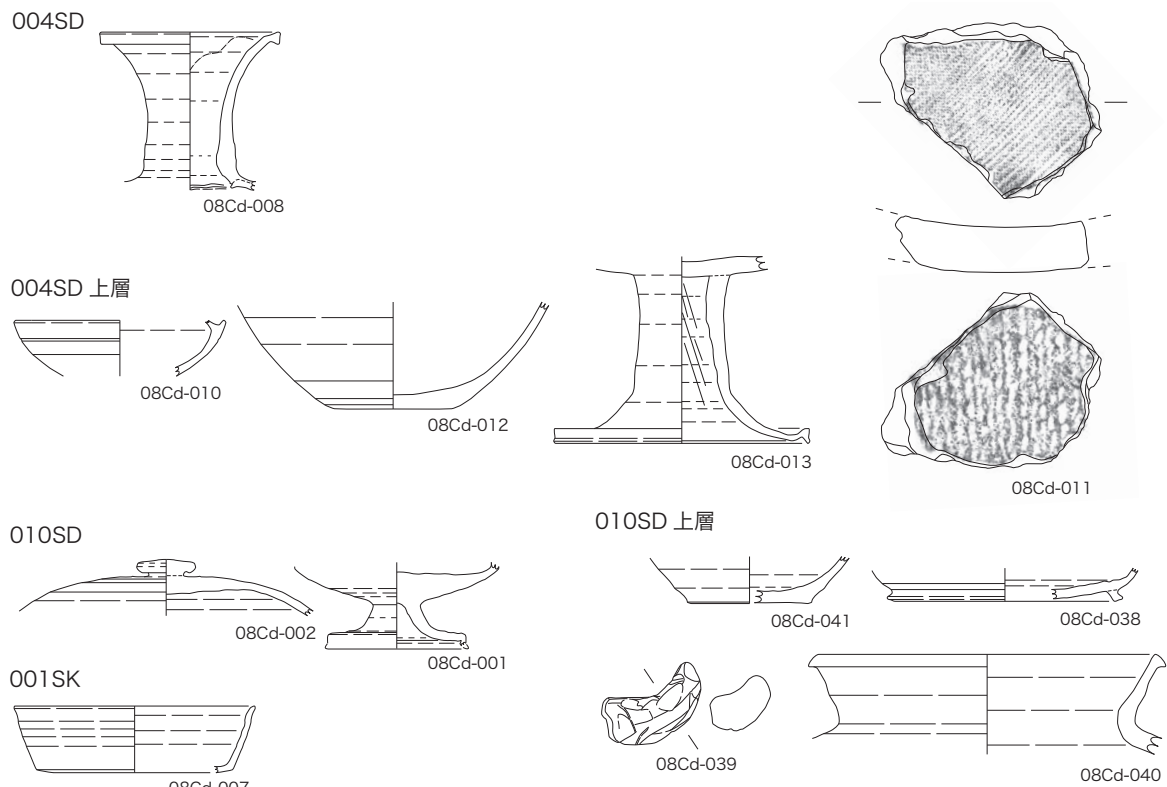


図 89 塔の越遺跡 08Cd 区出土遺物実測図

象である。

上部の溝は最深部を 004SD とし、西側のテラスに 008SD・009SD が新しく別に設けられたようにもみえるが、むしろ溝 010SD が埋積する過程で、西肩にそって溝斜面の形状を整えた印象が強い。それらの溝底面に小さな凹凸は確認されていないが、溝に沿う通路が圧力によって溝状の凹地となった可能性は排除できない。

010SD 断面逆台形で、東側壁面の傾斜は緩いが、西は急斜面になっている。最下層である 28 層の下部には極細粒砂のラミナが形成されており、水流のあったことが窺える。

なお、堆積層の中程より上部は自然の埋積のよるもので、特段整地された様相は窺えない。

007SD 08Cd 区東部で検出した遺構であり、調査時には SD 記号が付与された。しかし、断面形状やプランから「溝」というには違和感がある。底面標高も約 5m と高く「溝」といえるのかどうかは怪しい。

炭化物や焼土を部分的に密に含むとはいえ、竪穴建物跡の掘形ではないともいえず、遺構の性格は不明である。

011SX 007SD を覆うように堆積している 11 層を指標に検出されたが、08Cd 区内での輪郭は明確ではない。底面は平坦で炭化物・焼土、骨片等を含み、08Eb 区で検出された廃棄土坑と共通した様相を示す。

底面の平坦さは竪穴建物の掘り方を想像させるが、後述するように凹凸のある事例もあるのでそれだけでは判

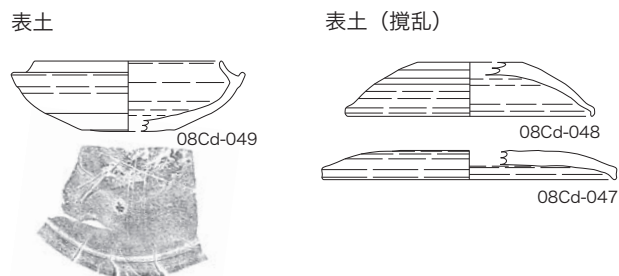
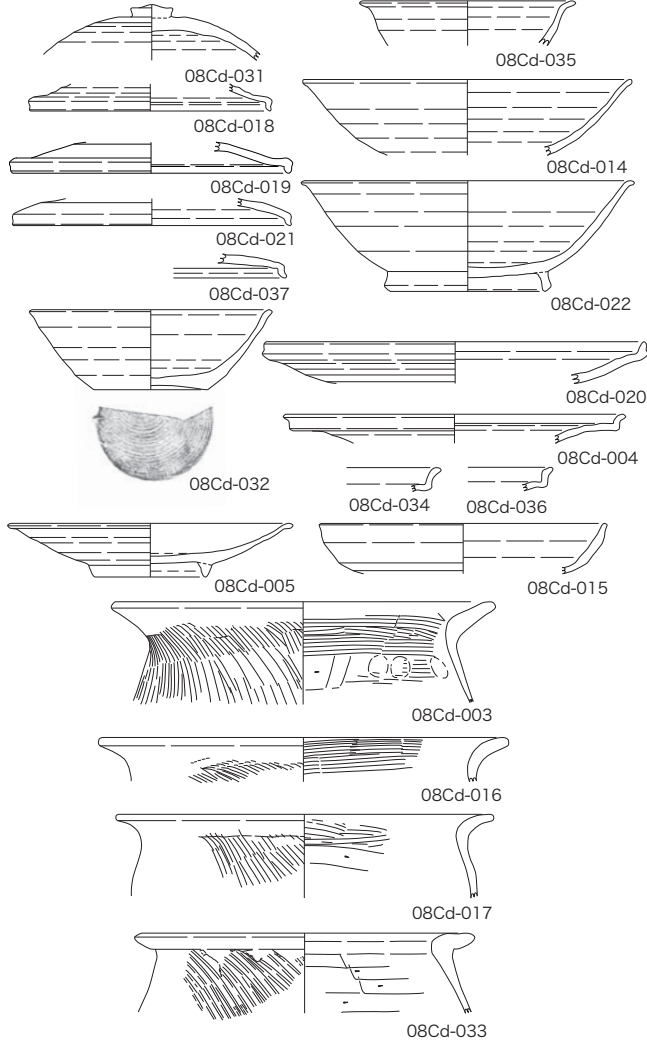


図 90 塔の越遺跡 08Cd 区出土遺物実測図

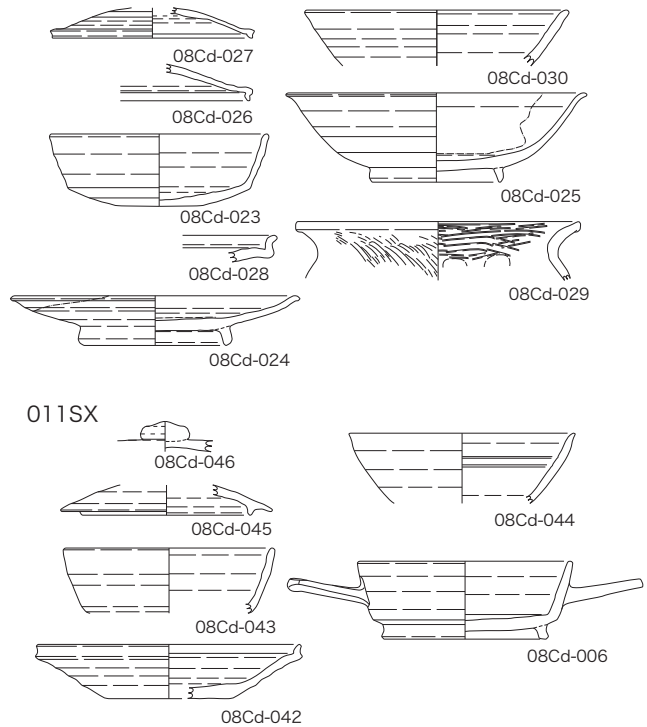
定できない。なお、骨片は焼けており碎片で、詳細は不明である。

上層にある 10 層は中世の耕作土と推測されるが、含まれている焼土や炭化物は 11 層に由来する公算が高く、11 層も本来は厚く堆積していたのであろう。

007SD



007SD トレンチ



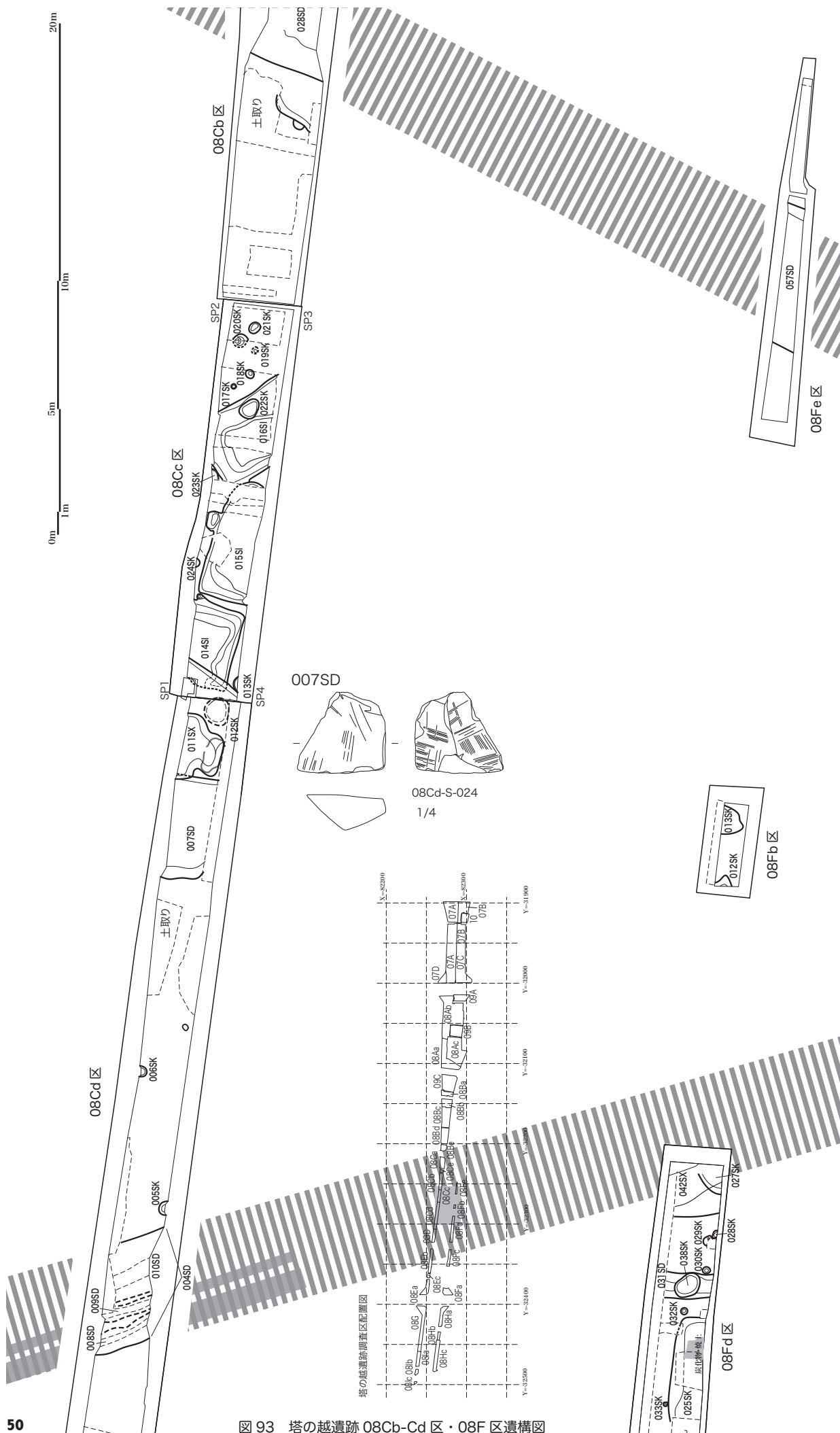
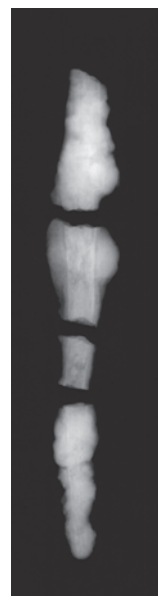
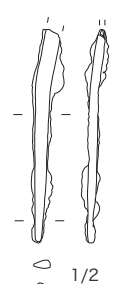


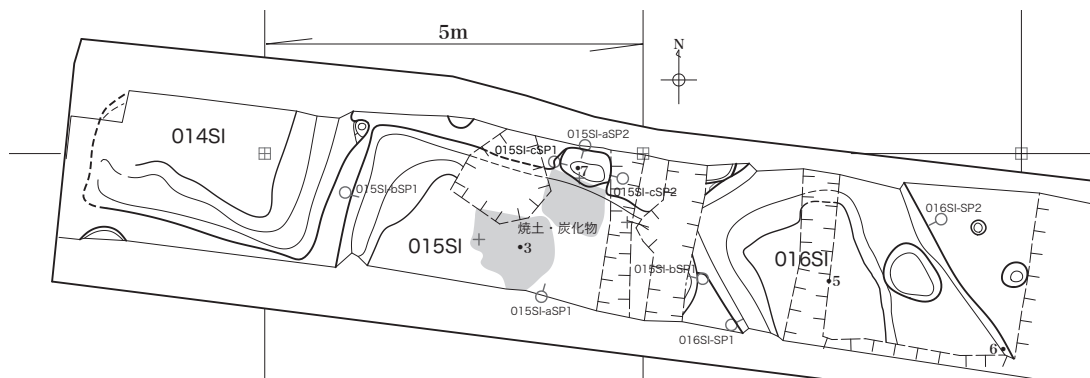
図 93 塔の越遺跡 08Cb-Cd 区・08F 区遺構図



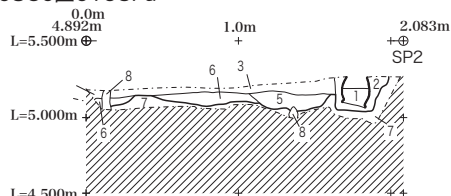
014SI 東壁溝



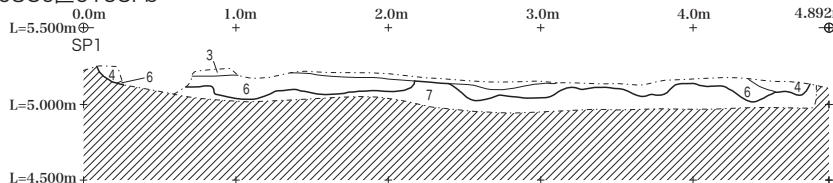
08Cc-M-012



08Cc区015SI-a

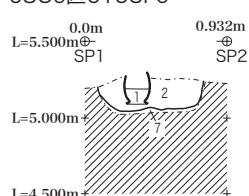


08Cc区015SI-b

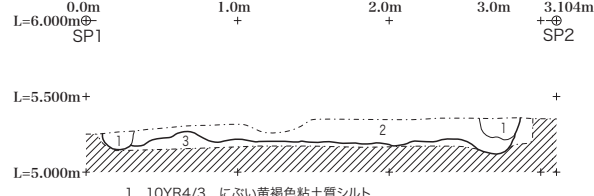


1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質粘土 015SI埋土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR4/4 褐色粘土質シルト少し斑入 焼土・炭化物少し部分的に多く含む 015SI埋土
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR4/4 褐色粘土質シルト斑入 部分的に炭化物・焼土多く含む 015SI埋土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR4/4 褐色粘土質シルト少し斑入 015SI埋土
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR4/4 褐色粘土質シルト斑入 炭化物・焼土含む 015SI埋土
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR4/4 褐色粘土質シルトの斑土 炭化物・焼土少し含む 015SI埋土
7. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 基盤層
8. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 生物擾乱

08Cc区015SI-c



08Cc区016SI



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR4/4 褐色粘土質シルト少し斑入 炭化物・焼土少し含む 016SI埋土
2. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR4/4 褐色粘土質シルトの斑土 炭化物・焼土少し含む 016SI埋土
3. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 基盤層

図94 塔の越遺跡 08Cc 区堅穴建物跡平面図及び土層セクション図、014SI 出土鉄器（鉄鏃？）実測図

● 08Cc 区

調査区全体が大きく天地返しされ、遺構検出面には重機バケットの爪痕が残されていた。それでもかろうじて堅穴建物跡を3棟検出することができたことは幸運であった。なお、土層断面観察では、016SIに切られる堅穴建物を1棟追加したが、ほんの痕跡である。軸線が揃う014SIと015SIも近接して同時並存は不可能であり、一時期1棟の累積がこれら堅穴建物群であろう。掘形充填土や床面覆土には炭化物や焼土が含まれるが、炭化物の薄層は形成されていない。本事例を参照すれば、他の調査区で「SX」や「SK」としたものに堅穴建物が含まれている可能性は高いであろうが、掘形底面の形状に差異がある点は無視できない。

基盤は褐色粘土質シルトである。

014SI 西辺を011SXに切られる。よって、011SXは堅穴建物群よりも新しいことがわかる。重複部分以外も掘り方上面まで削平されていたが、壁沿いの幅広溝は形状は安定している。。

014SIは、おそらく南北に長い長方形と推測される。床面下の掘り方底面には、東辺と南辺にそって深さ3～5cmの幅広い溝が設けられている。

柱穴は確認できなかった。

015SI 西・北・東辺を確認した。上部の3層は床面覆土と推測され、4層は壁溝の埋土である。016SIを切る。

北辺の南北中軸線交点からやや東寄りには、堅穴建物の外縁に重なって土坑が設けられ、中からは上半部に土が充填されないで空洞となった甕が倒立状態で出土した。土坑の南側堅穴床面上には焼土や炭化物が分布しており、土坑がカマドの痕跡であった可能性が高い。つまり、「伏甕」は、カマド廃棄後の意図的な行為と推測される。一宮市門間沼遺跡ではカマドの支脚として長胴甕下半部に粘土を詰めて倒立に設置した事例を検出しており、本例も一見類似しているが、粘土の充填を欠いて内部が空洞であったことから同類ではない。

床下の掘形底面には5cm程の深さの幅広溝が北西コーナー付近に認められたが、掘り方底面は全面に凹凸があるので、北東コーナー付近のみを幅広溝と認識することにそれほどの有意性は無いかもしれない。

柱穴は確認できなかった。

016SI 上2棟とは軸線を異にする。床面は削平されて遺存しない。掘形底面は比較的平坦であり、幅広溝も北・東・西の三方をめぐり、深さも10cm内外と深い。溝底の深さは一定ではなく、凹凸がある。

柱穴は確認できなかった。



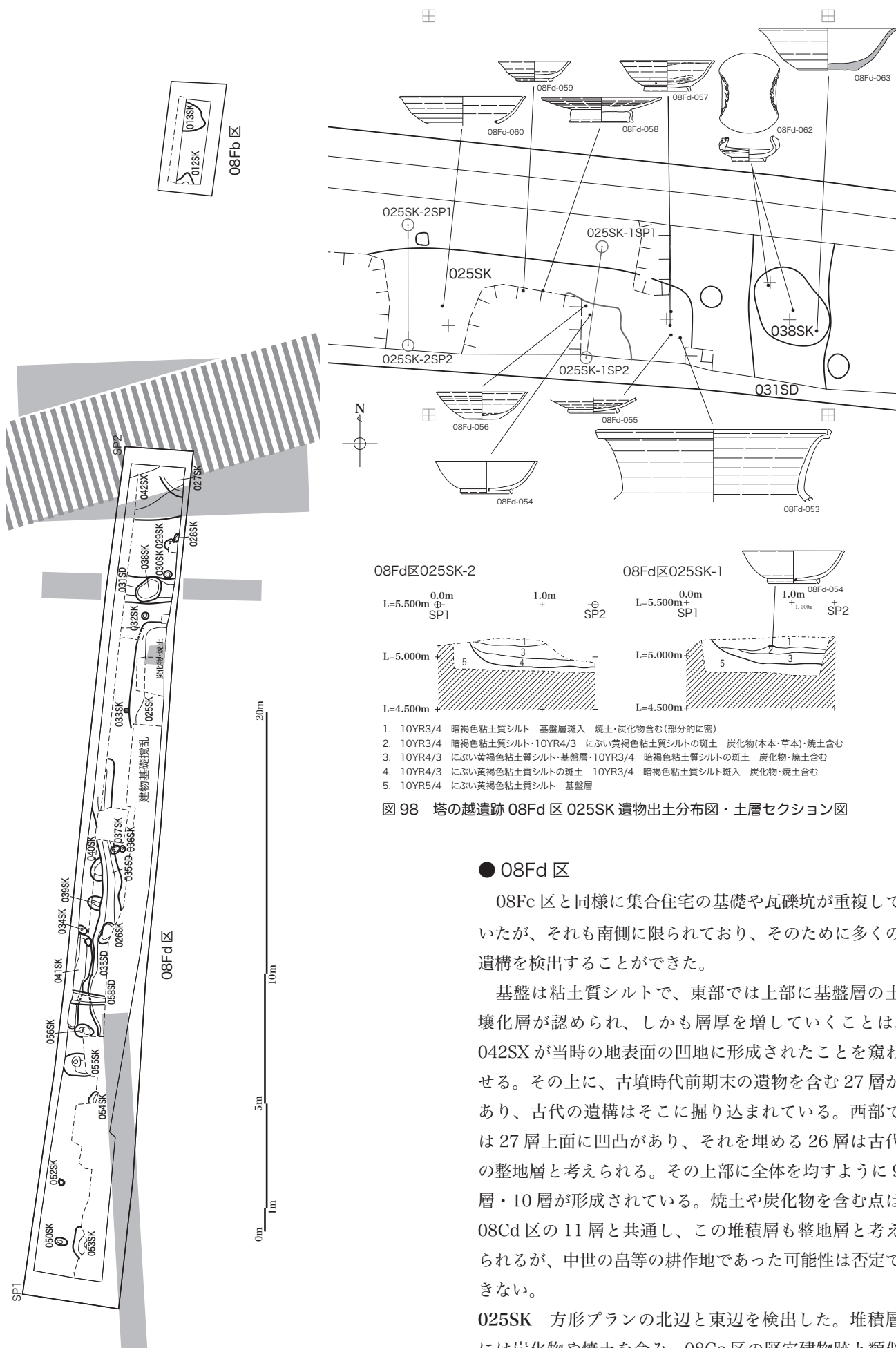


図 97 塔の越遺跡 08Fd 区遺構図

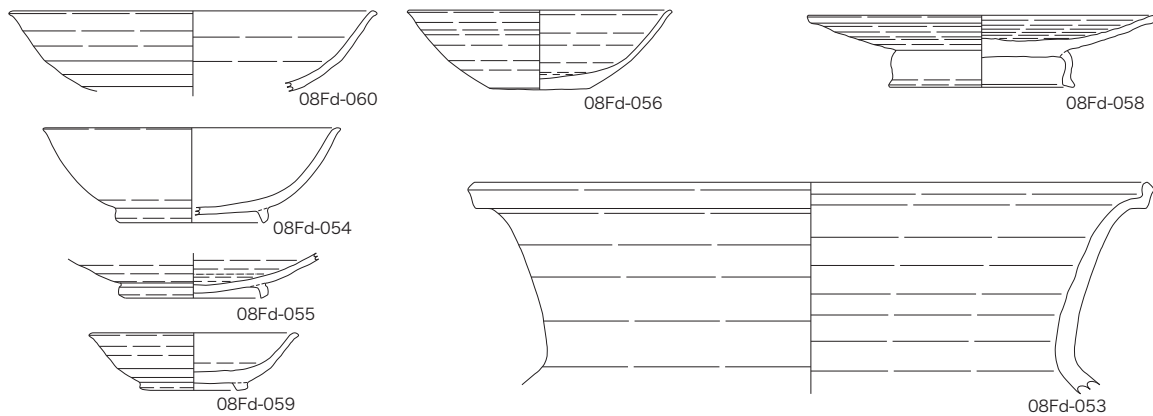
● 08Fd ☒

08Fc 区と同様に集合住宅の基礎や瓦礫坑が重複していたが、それも南側に限られており、そのために多くの遺構を検出することができた。

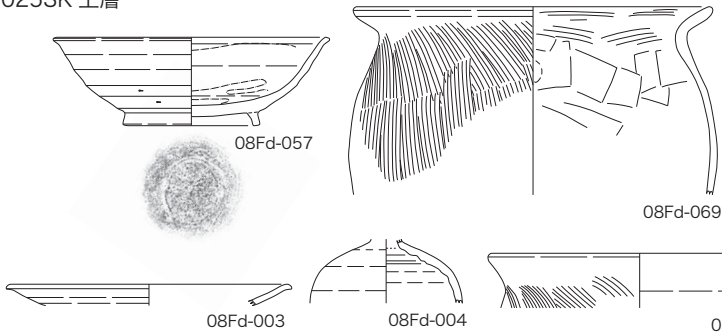
基盤は粘土質シルトで、東部では上部に基盤層の土壌化層が認められ、しかも層厚を増していくことは、042SX が当時の地表面の凹地に形成されたことを窺わせる。その上に、古墳時代前期末の遺物を含む 27 層があり、古代の遺構はそこに掘り込まれている。西部では 27 層上面に凹凸があり、それを埋める 26 層は古代の整地層と考えられる。その上部に全体を均すように 9 層・10 層が形成されている。焼土や炭化物を含む点は 08Cd 区の 11 層と共通し、この堆積層も整地層と考えられるが、中世の畠等の耕作地であった可能性は否定できない。

025SK 方形プランの北辺と東辺を検出した。堆積層には炭化物や焼土を含み、08Cc 区の堅穴建物跡と類似しているが、掘形底面は平坦である。炭化物には木本や草本を含み、燃焼物の起源を示している。とはいえ、北

025SK



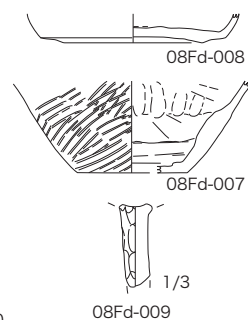
025SK 上層



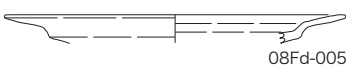
025SK 上層焼土



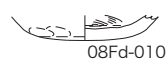
027SK



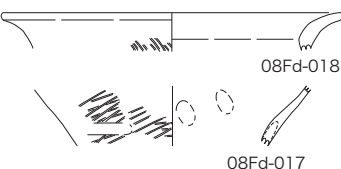
026SK



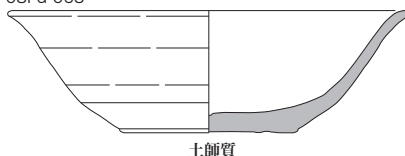
029SK



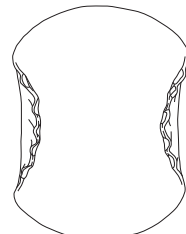
037SK



038SK
08Fd-063

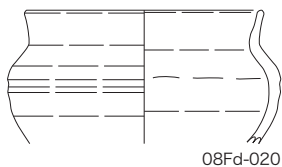
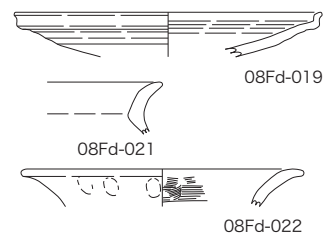


土師質



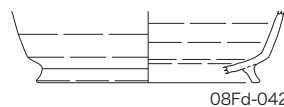
08Fd-062

041SK



08Fd-020

056SK



08Fd-042

図 99 塔の越遺跡 08Fd 区出土遺物実測図

辺にカマドは無いし、形を残す須恵器や灰釉陶器が出土しており、判断に迷う。9世紀後半に属す。

038SK 031SD に重複して設けられており、端部を細波状に摘んだ大形の耳皿が出土した。

041SK 堆積土に焼土を含み、断面形状は 025SK に類似している。

031SD 南北軸の溝で、025SK 東辺に平行する。038SK が重複する。

035SD 東西方向に掘削された溝だが、側縁は蛇行し

ており規格性は窺えない。そのため、東端が調査区壁際で終結しているとは判断できない。9世紀前半の完形の皿以外は8世紀後半の須恵器片なので、前者の時期と判断する。

042SX 調査区東端で検出した大溝で、東部は調査区外にはずれ、幅は不明である。当初は性格が不明で、「SX」記号が付された。

深さは1m程で、壁面は下部の傾斜が急であるのに対して上部は斜行しており、再掘削された可能性がある。

08Fd区 042SX

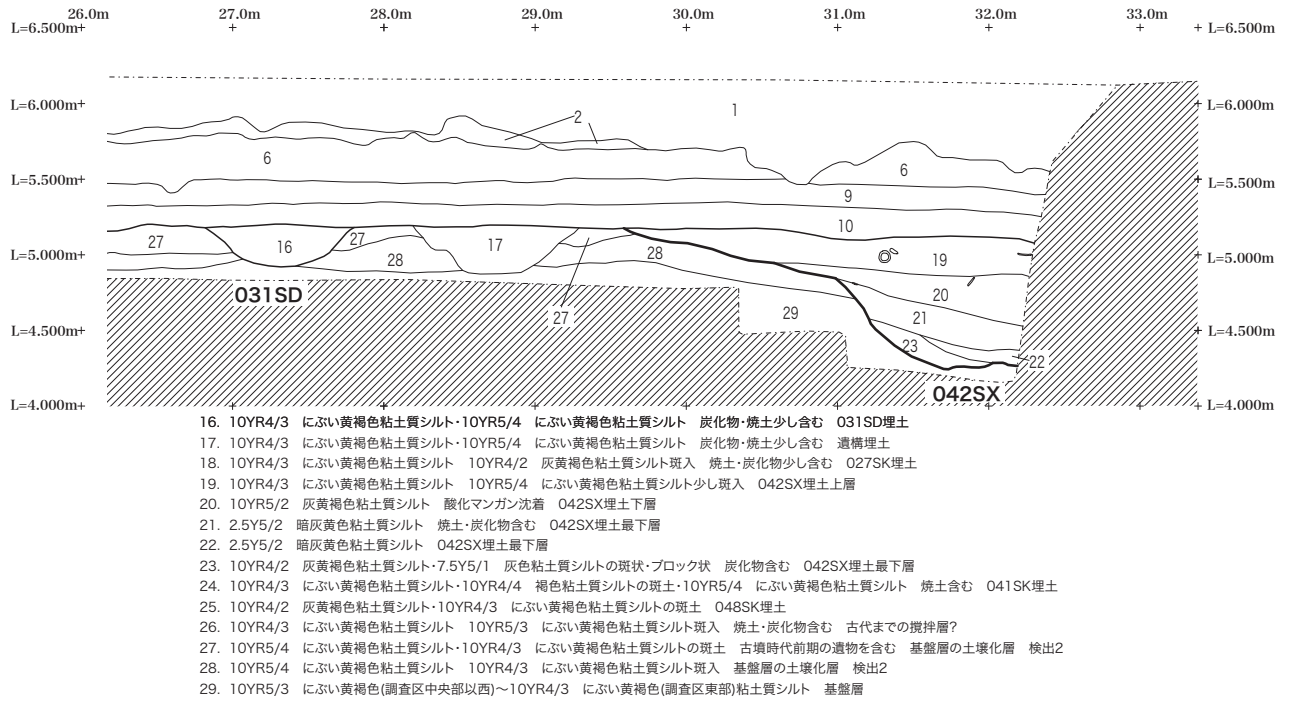


図 100 塔の越遺跡 08Fd区 042SX 土層セクション図

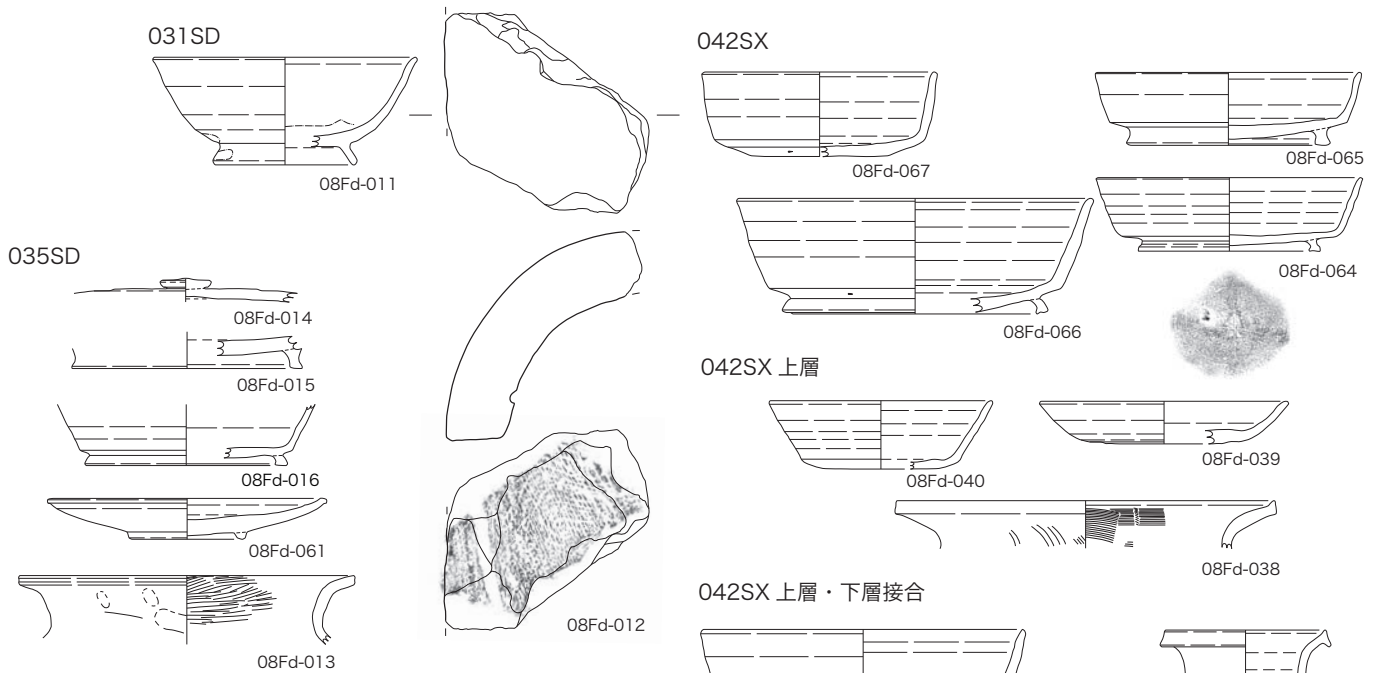
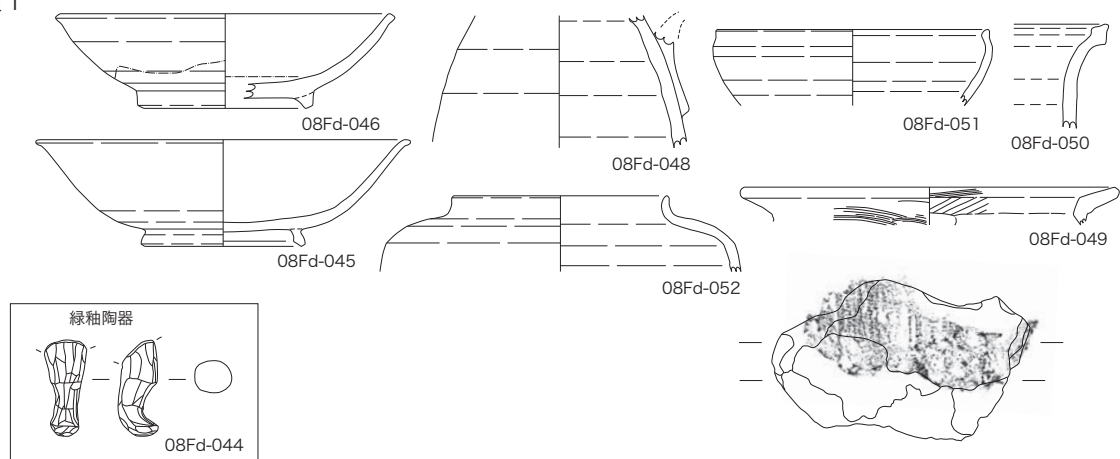


図 101 塔の越遺跡 08Fd区出土遺物実測図

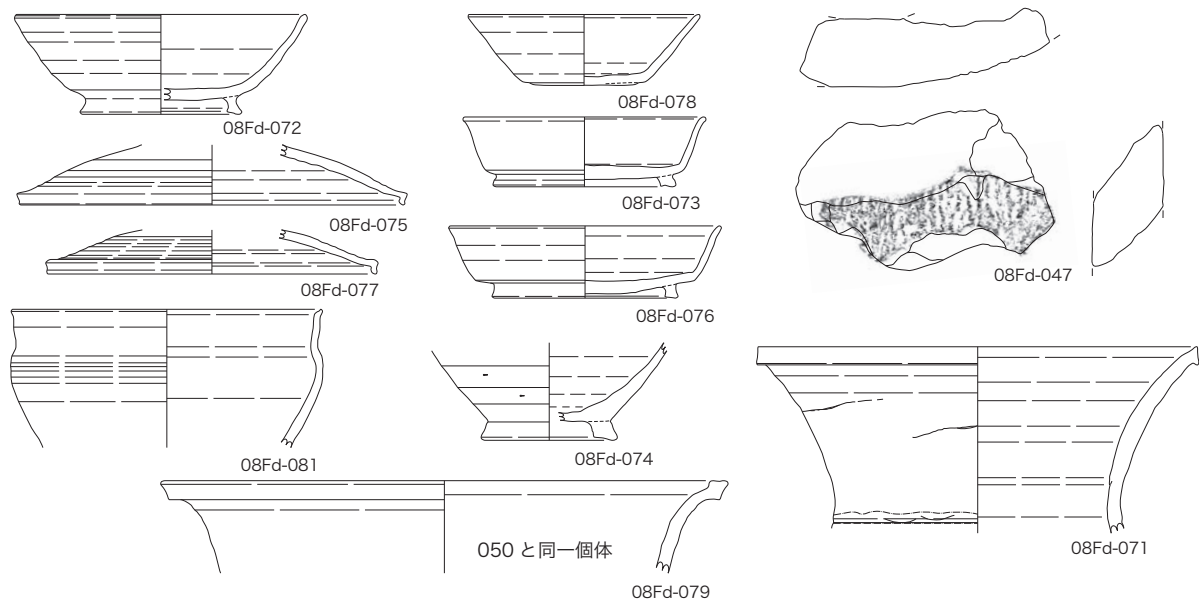
その斜行面以下の堆積層には焼土や炭化物が含まれていた。それらは居住域由来と推測されるが、出土遺物はほぼ8世紀代でおさまり、西に展開する遺構群とは調和しない。

1点灰釉陶器碗が含まれており、しかも上層と下層で接合している。出土状況は確認していないが、042SXは下層の一部までが再堆積なのかもしれない。なお、掘削時に対応するのが正方位軸の西側遺構群であり、031SDは042SXを南北軸に付け替えた際に掘削された可能性がある。下層に対応するのが8世紀代後半の遺物群であり、北側調査区08Cd区010SDと時期的に並行して、初期の区画溝として機能したと考えられる。

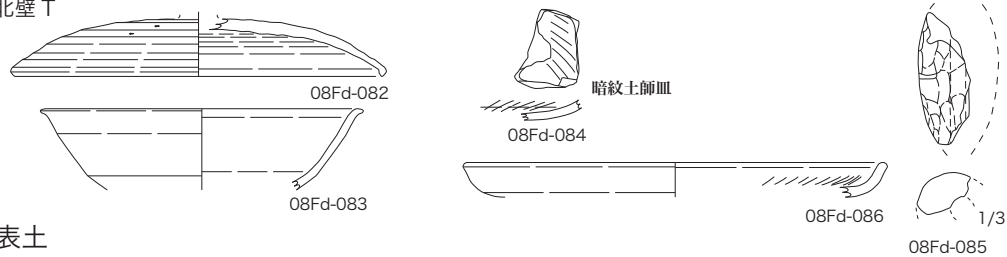
検1



東壁T



北壁T



表土

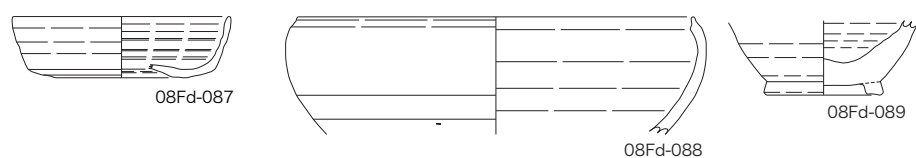
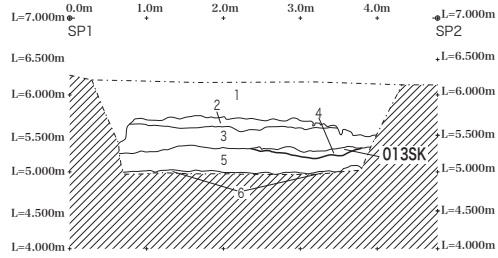


図 103 塔の越遺跡 08Fd 区出土遺物実測図

08Fb 区

北壁



1. パラスト・コンクリート片主体 表土・攪乱埋土
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 下部は10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 旧畑耕作土
3. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト混入 焼土・炭化物少量含む 検出1
4. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 灰・焼土・炭化物多く含む 013SK埋土
5. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト混入 焼土・炭化物少量含む 検出2
6. 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト～極細粒砂 基盤層

図 105 塔の越遺跡 08Fe 区北壁土層セクション図

08Fe 区

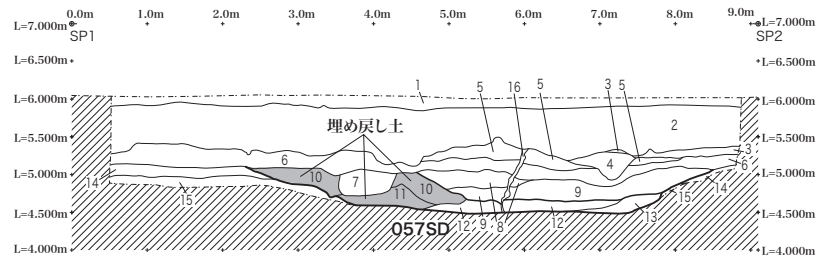
県道南側東端の調査区であり、検出面の幅は 60cm と、極端に狭い。057SD 以外に遺構は検出できなかった。掘り込んでいる 14 層は土壌化層と判断されており、08Fd 区と状況は類似している。

057SD 溝幅約 5.2m、深さ約 50cm を測り、断面逆台形と一応は言えるが、両壁の傾斜は極めて緩やかである。

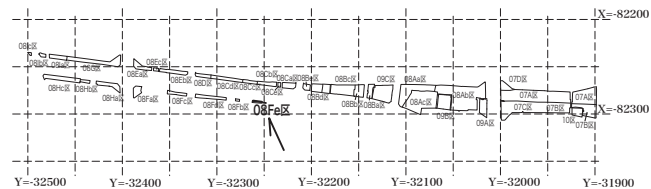
堆積層は東西で大きく異なり、西斜面では基盤土ブロックの再堆積が認められた。再堆積層は最下部の 12 層が堆積を始めてから形成されたようであり、西斜面寄りに 12 層が形成されていないのは結合の緩い土が水を含んで堆積する中、西からの土圧で移動したためと考えられる。そして、9 層以上が基盤ブロック土流入後の堆

08Fe 区

北壁



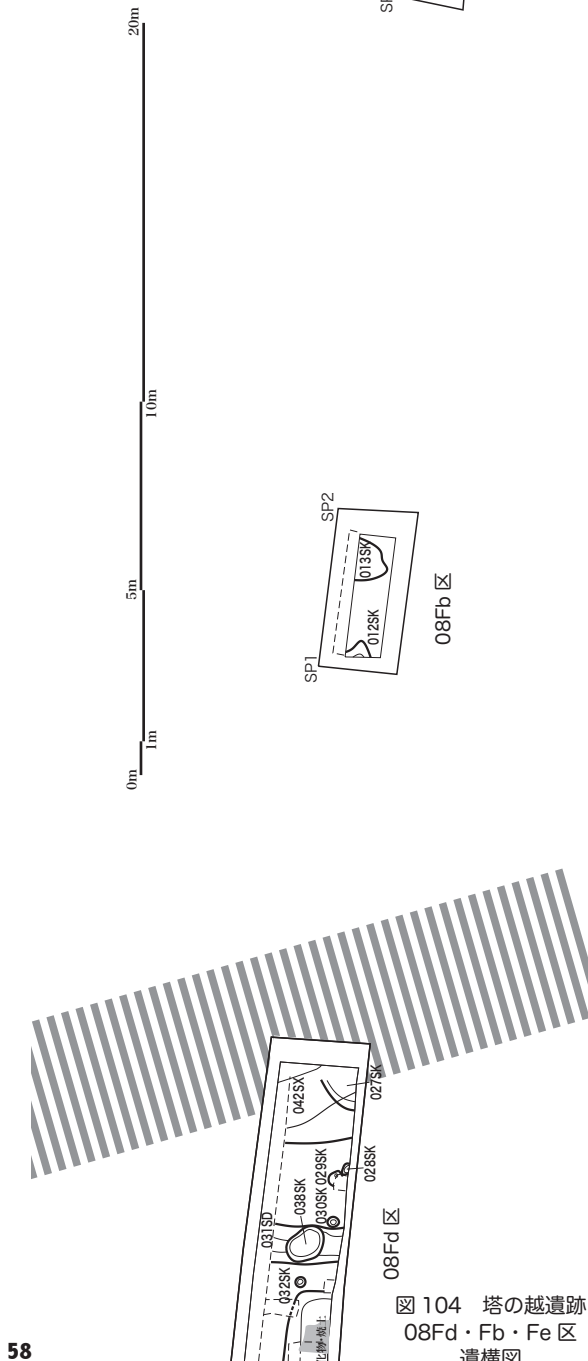
模式図 1/8000



1. パラスト主体 表土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトのブロック・パラスト・アスファルト塊・コンクリート塊の混成土 塩化ビニールパイプ含む 盛土・攪乱埋土
3. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト
4. 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト 遺構埋土
5. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト
6. 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト 下位層混入 検出1相当
7. 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト・2.5GY4/1 暗オリーブ灰色極細粒砂 ～細粒砂の斑土 遺構埋土
8. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 057SD埋土
9. 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト 遺物多く含む 057SD埋土
10. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 基盤層混入 057SD埋土
11. 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト 基盤層混入 057SD埋土
12. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 炭化物含む 遺物多く含む 057SD埋土
13. 2.5Y5/1 黄灰黄色極粘土質シルト 炭化物含む 遺物多く含む 057SD埋土
14. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 基盤層の土壌化層
15. 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト 基盤層
16. 10YR6/1 褐灰色細粒砂 砂脈

図 106 塔の越遺跡 08Fe 区北壁土層セクション図

図 104 塔の越遺跡 08Fd・Fb・Fe 区 遺構図



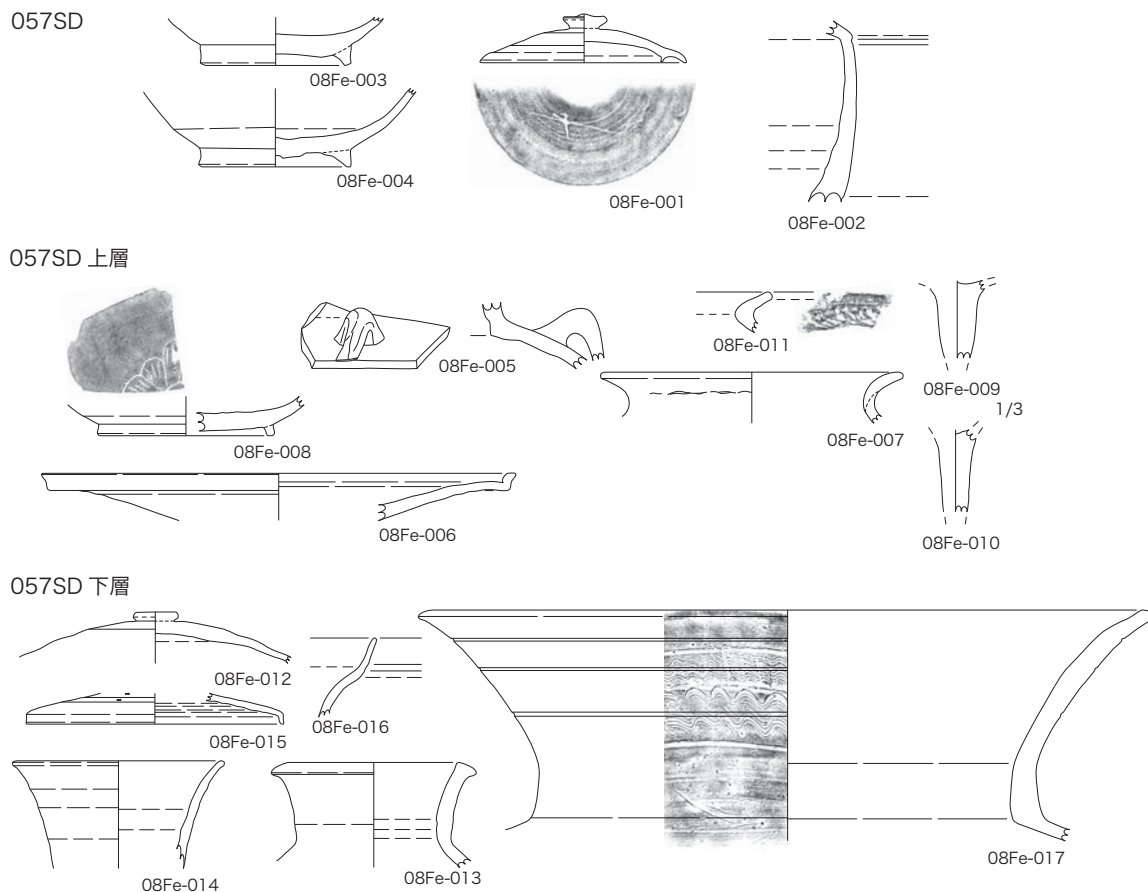


図 107 塔の越遺跡 08Fe 区出土遺物実測図

積となる。9層以下の通常堆積層には炭化物や7世紀から9世紀前半の遺物が含まれており、周辺における活動の時期幅に一致している。掘削時期については8世紀後半から9世紀前半と推測する。

なお、基盤ブロック土については、057SD 掘削時の

排出土が溝沿いに盛られており、それを埋め戻したことによると考えられる。つまり、「土手状」の高まりが溝の西側に並走していた可能性があり、この点では08Fd区の048SXと031SDも「土手」状の高まりを挟んでいたと言えるかもしれない。



図 108 塔の越遺跡 08Fe 区 057SD 近景

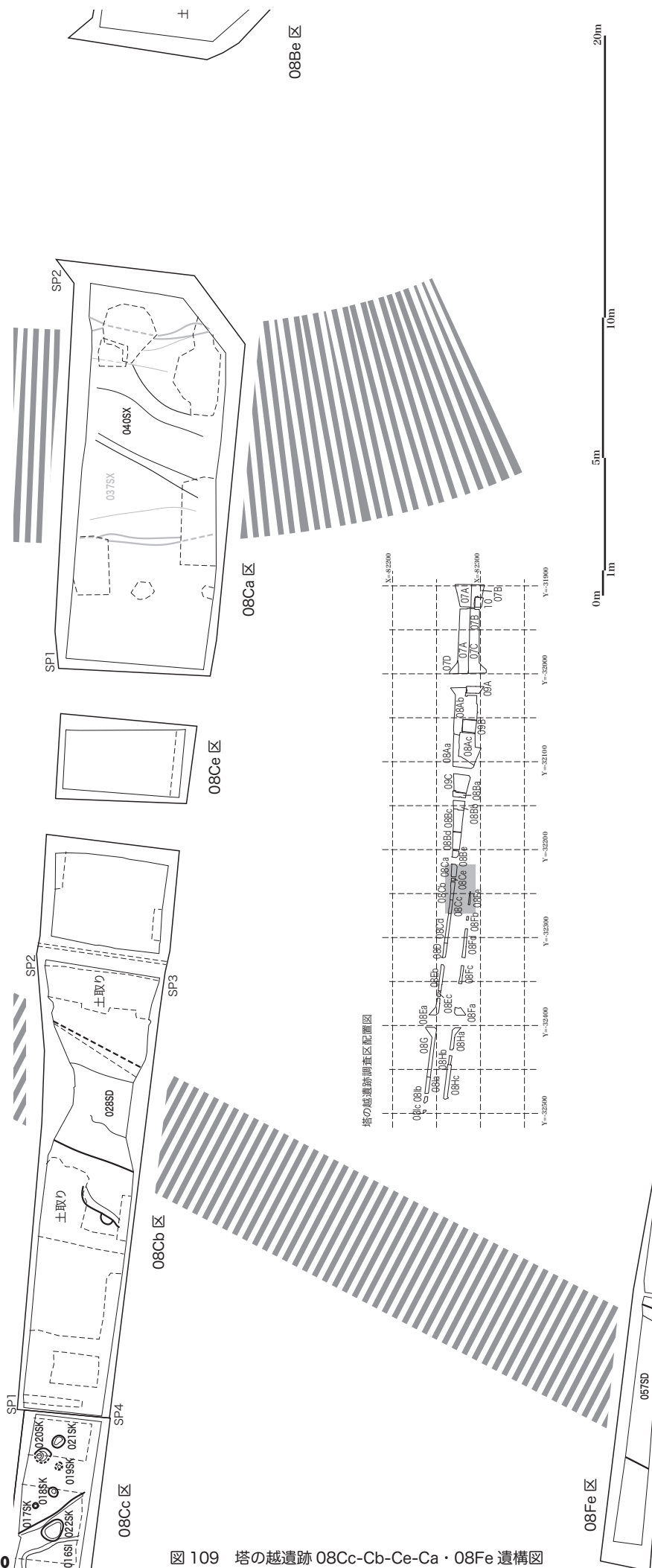


図 109 塔の越遺跡 08Cc-Cb-Ce-Ca・08Fe 遺構図

● 08Cb 区

周辺では土取りや天地返しが進んで遺構面近くまで削平が及び、多くの情報を滅失している。

028SD 幅約4m、深さ約1mを測る断面逆台形の溝で、底面標高は4m以下に達している。

堆積層は大きく3層に区分できる。

最上層は、調査時には「036SX」と把握され、埋没の最終段階である。斑土を含むので、周辺の土地利用に並行して堆積層が形成されたものと考えられる。

中層はラミナ形成層（34層）以上を堆積層とする 028SD 上層で、033SK・034SK はこの面より下で掘り込まれている。両 SK とも堆積層は斑土であり、掘削後、それほど間を置かずに埋め戻されたものである。

こうした斑土は、通常「井戸」の掘形や「柱穴」の充填土が該当するが、今回の事例については深いので後者の可能性は無い。028SDの下層上面（もしくは埋没時の上面）から掘り込まれているので、前者の可能性も低いと考える。

下部の34層から31層まで不整合面が累重し、また028SD上層堆積層にも部分的とはいえミナが含まれていることから、流水によって堆積と削剥が繰り返されたものとする。

下層は当初の溝下部であり、多少は水流もあったようだが、028SD 中層程ではない。

県道を挟んだ 08Fe 区 057SD に軸線が一致しており、時期的にも両者がつながると推測する。

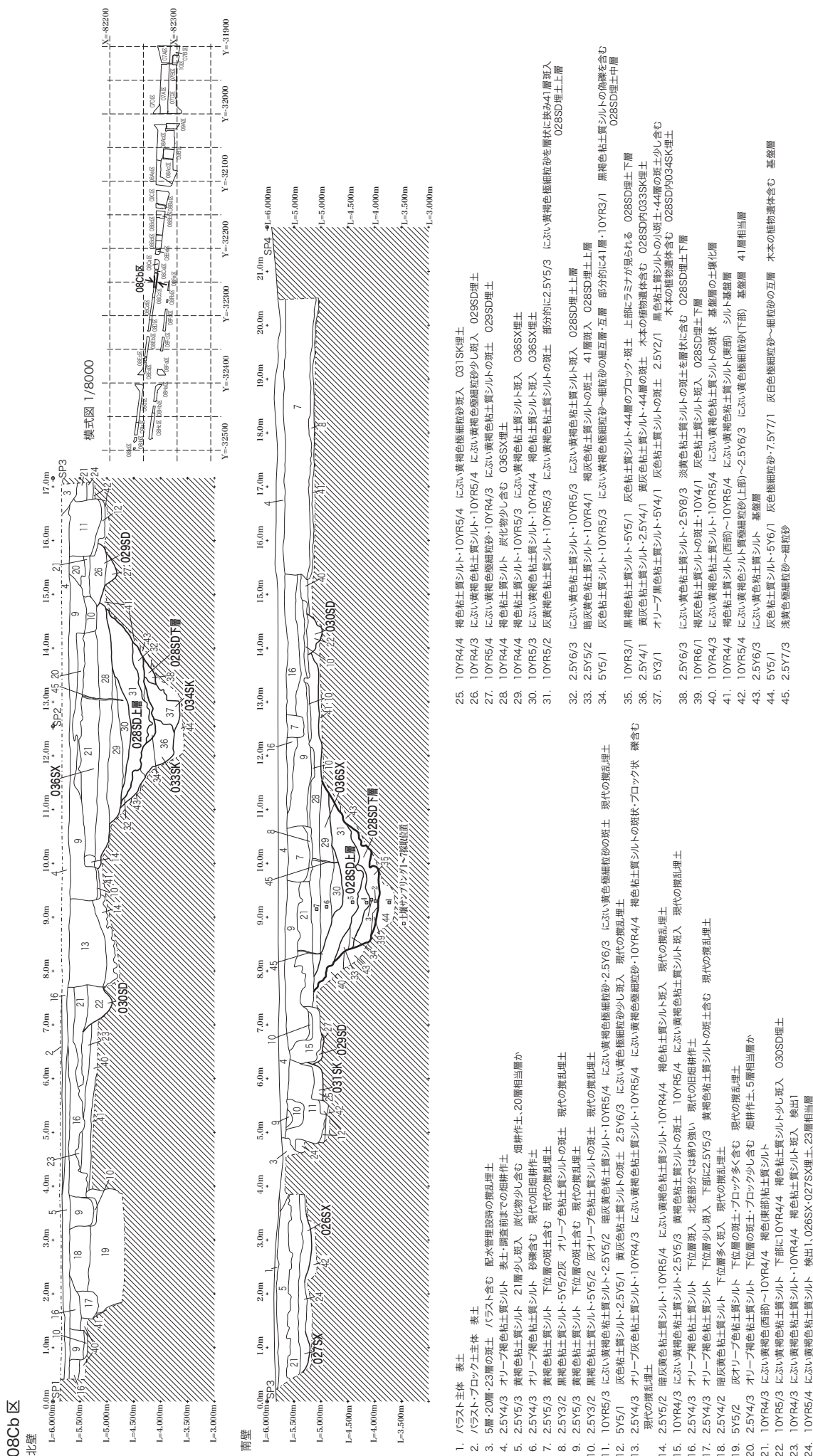


図 110 塔の越遺跡 08Cb 区北壁土層セクション図

028SD 中層

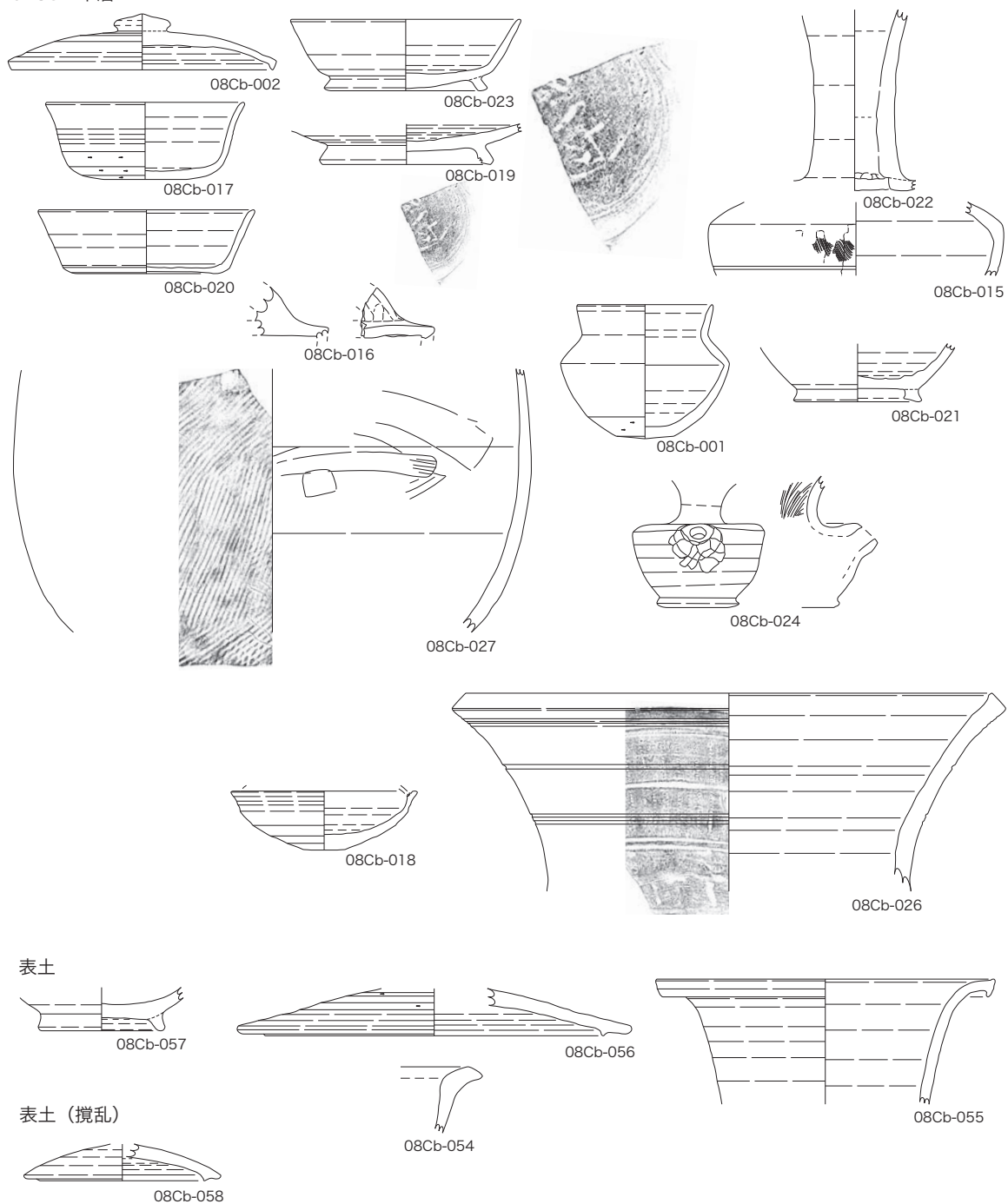


図 111 塔の越遺跡 08Cb 区出土遺物実測図

● 08Ca 区

幅約 7.5m、深さ 1.5m の流路（上層 037SX、下層 040SX）が検出された。上層の 037SX は中世に属す。040SX 底面幅は約 5m で、底面標高は 4m 程である。周辺基盤面の標高は約 5.5m であり、旧地表がそれより高いのは確実なので深さは 2m 近くに達したかもしれない。底面は一部が 10cm ほど落ち込み、平面図でも北東から南西に走る溝状のラインが示されている。重複した溝下部の痕跡とすれば、他の溝等とも軸線が共通する。

堆積状況は、両壁付近で堆積後に壁面が地滑りを起こして崩落しており、地震の影響かもしれない。堆積層はほぼ水平に累重し、最下部には植物遺体が多く含まれていたの、澱んだ状態であったのだろう。とすれば、本流とは切れていたとも推測されるが、上層である 037SX のカーブ（水流による浸食か？）をみれば自然

河川とつながっていた可能性は浮上する。

他の大溝と異なって土壌化層を掘り込んでいるわけではなく周辺の旧地表が低かった可能性を窺うこともできないし、また自然堤防の傾斜に平行するので、人工の溝（水路）であったと考える。

出土遺物は 9 世紀後半～ 10 世紀前半を中心としている。

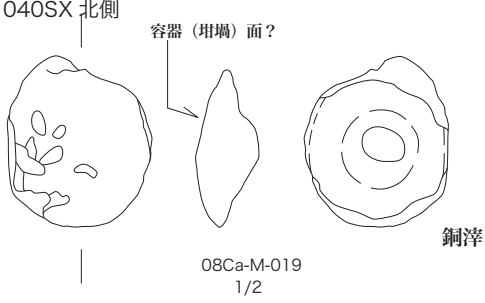
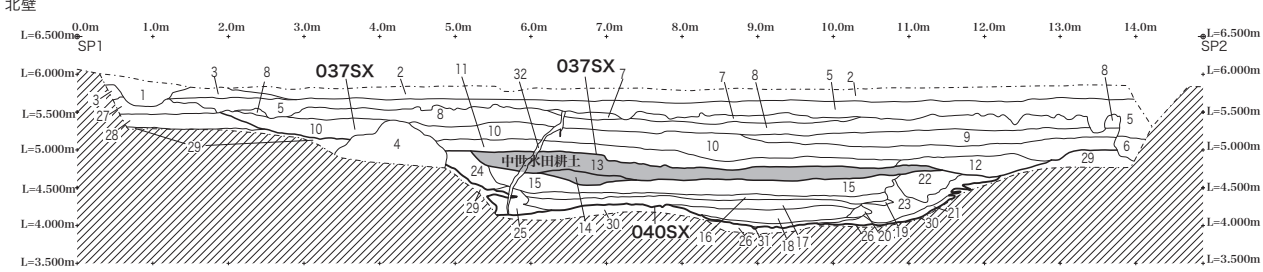
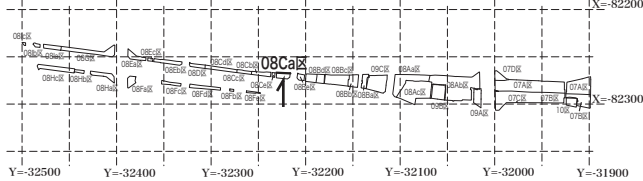


図 113 塔の越遺跡 08Ca 区 040SX 出土金属実測図

08Ca 区



模式図 1/8000



1. 下位層のブロック主体 バラスト多く含む 表土・攪乱埋土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色～2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 礫・炭化物含む 表土・調査前までの畑耕作土
3. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 現代の旧畑耕作土
4. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 下位層のブロック・斑土多く含む 攪乱埋土
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト混入 天地返しに伴う攪乱埋土
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト混入 天地返しに伴う攪乱埋土
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土 037SX埋土
8. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 037SX埋土、近世前半の整地層
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 037SX埋土、中世の整地層
10. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR3/2 黒褐色粘土質シルトのブロック含む 037SX埋土、中世の整地層
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 037SX埋土、中世の整地層
12. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 037SX埋土、中世の整地層
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 極細粒砂斑状に混じる 040SX埋土上層、中世の水田耕作土
14. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 040SX埋土上層、中世の水田耕作土
15. 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト・10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト少し混入 炭化物含む 酸化鉄(管状・層状)沈着 040SX埋土中層、中世の耕盤層
16. 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト 040SX埋土下層、古代後期の自然堆積層
17. 2.5Y4/1 黄灰色シルト質粘土 040SX埋土下層、古代後期の自然堆積層
18. 5Y4/1 灰色シルト質粘土 植物遺体(草本・木本・加工木片)多く含む 040SX埋土下層、古代後期の自然堆積層
19. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂・5Y3/1 オリーブ黒色粘土混シルトの小斑土含む 040SX埋土下層、埋積過程の基盤層の崩落
20. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト・7.5Y4/1 灰色粘土質シルト混入 040SX埋土下層、埋積過程の基盤層の崩落
21. 7.5Y4/1 灰色シルト質粘土 040SX埋土下層、古代後期の自然堆積層
22. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂・10YR2/2 黒褐色粘土質シルト・10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト少し混入 040SX埋土下層、土坑状遺構埋土か
23. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂 040SX埋土下層、埋積過程の基盤層の崩落
24. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂の斑土・10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト少し混入 040SX埋土下層、埋積過程の基盤層の崩落
25. 10YR2/1 黒色粘土質シルト・2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト・2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂の層状・斑状 040SX埋土下層、埋積過程の基盤層の崩落
26. 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト・10YR2/2 黒褐色粘土質シルト・5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルトの小斑土 040SX埋土下層、埋積過程の基盤層の崩落
27. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 検出1
28. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 29層混入 検出2相当、08Ca区041SX埋土相当層
29. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト～細粒砂 基盤層
30. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト 基盤層
31. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土 基盤層
32. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂 砂脈

図 112 塔の越遺跡 08Ca 区北壁土層セクション図



図 114 塔の越遺跡 08Ca 区 040SX 近景

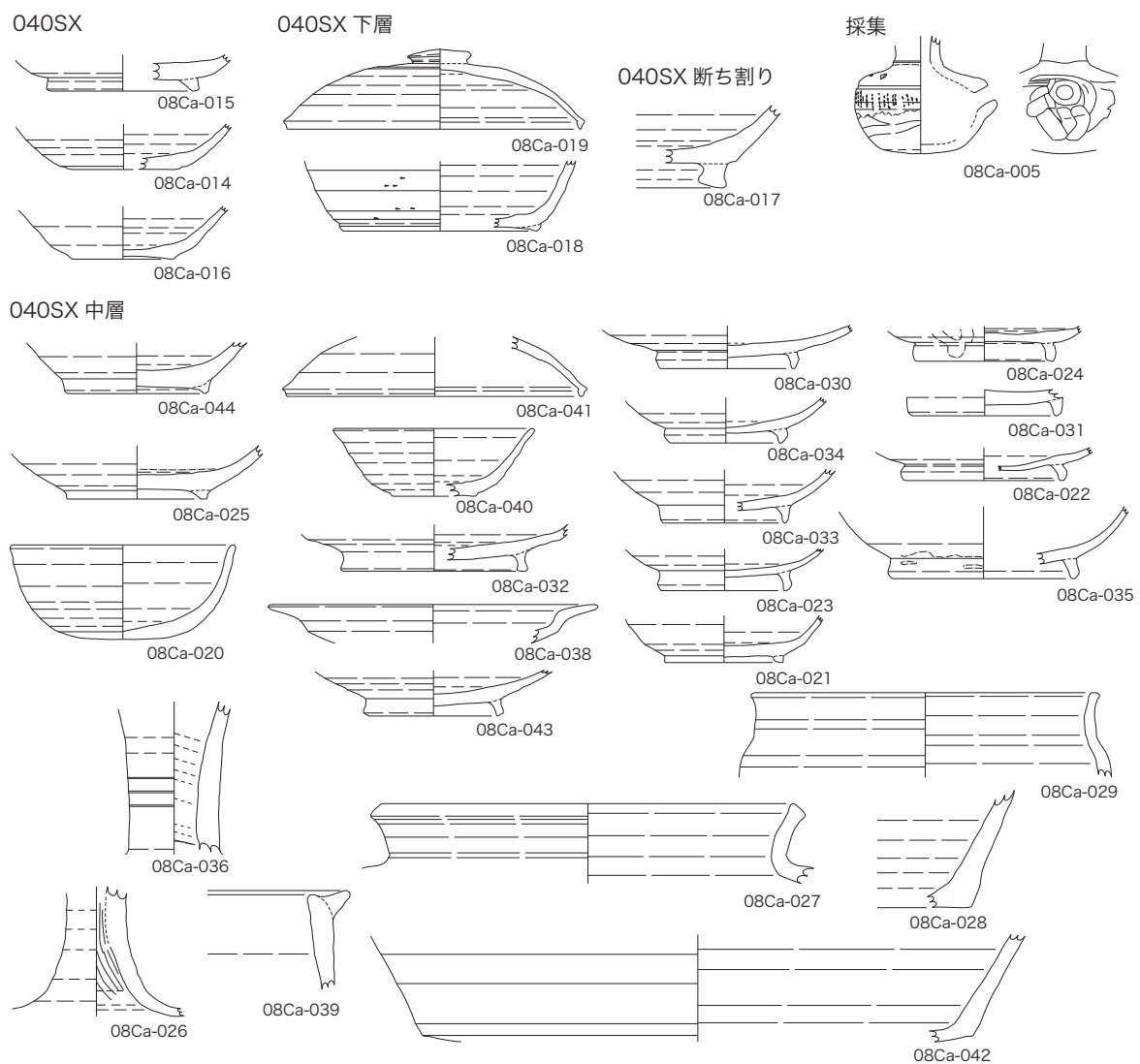


図 115 塔の越遺跡 08Ca 区出土遺物実測図

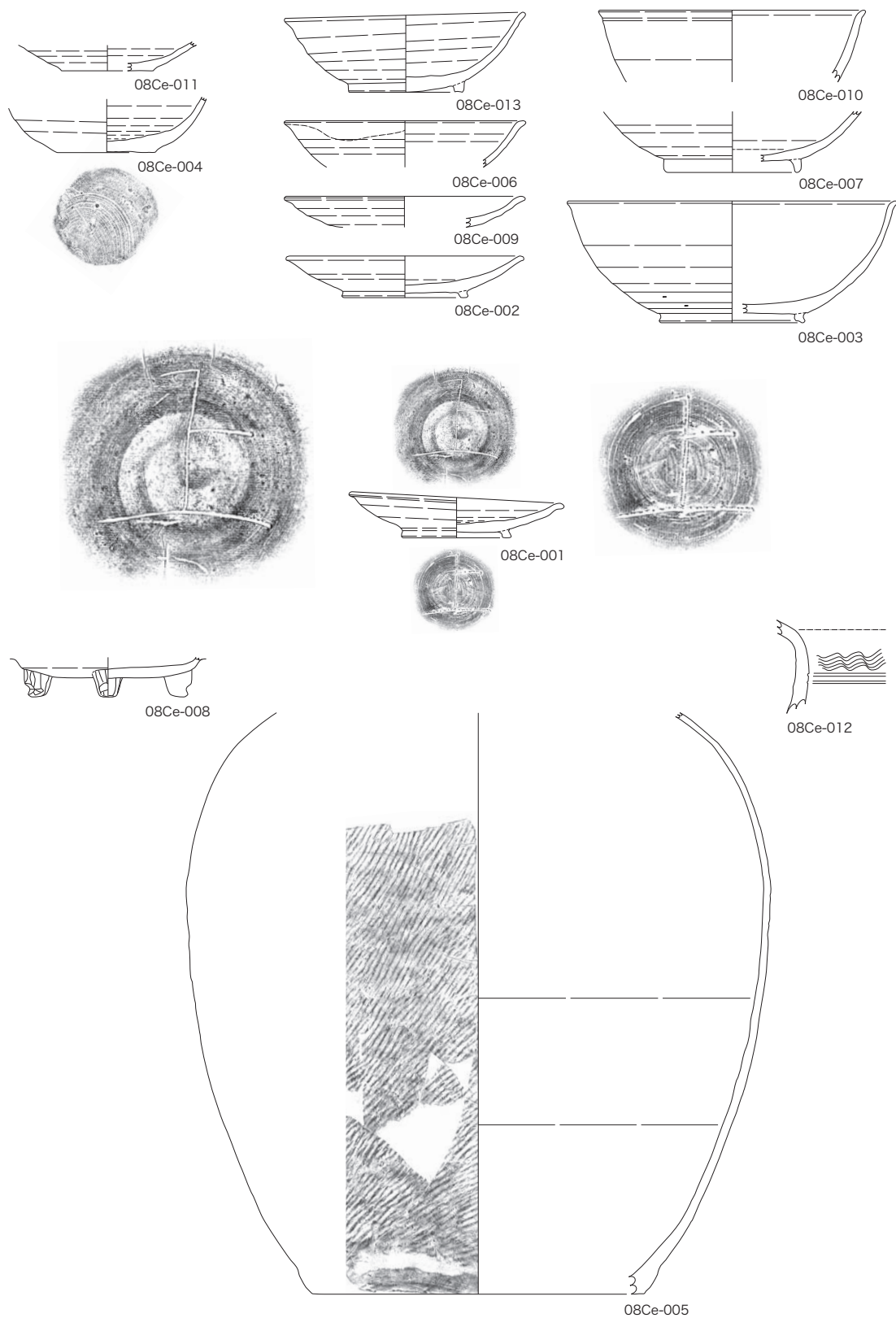
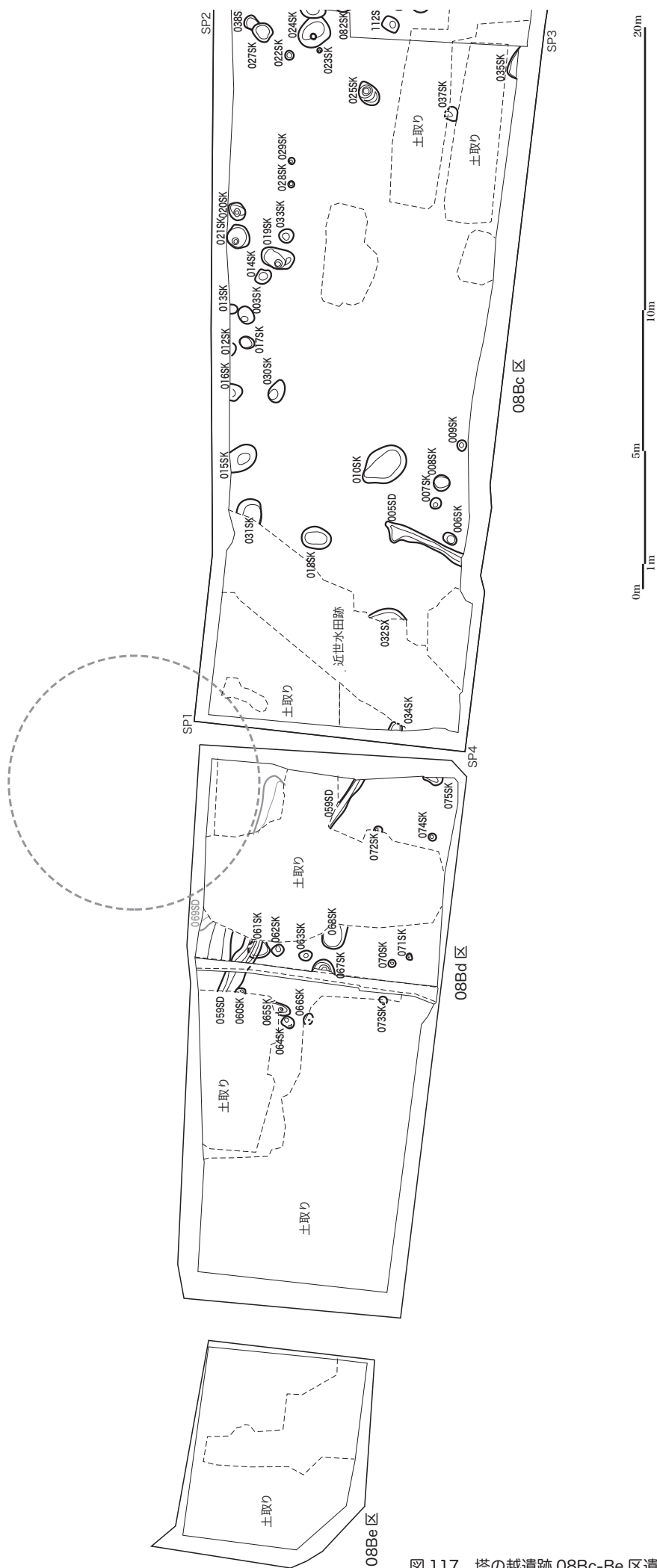


図 116 塔の越遺跡 08Ce 区出土遺物実測図



塔の越遺跡調査区配置図

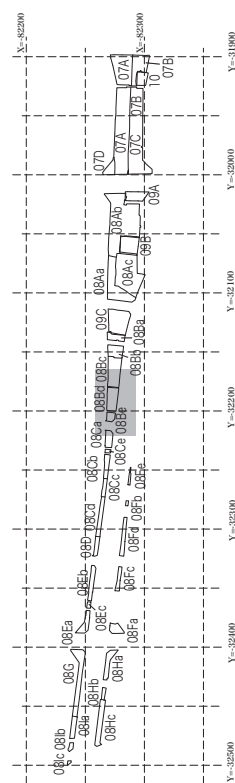


図 117 塔の越遺跡 08Bc-Be 区遺構図

● 08B 区

08B 区は東から 5 小区に区分した。このうち、08Be 区から 08Bd 区西部は土取りと瓦礫の投棄によってほぼ遺構が消失していた。その一方、以東では多数の柱穴や井戸跡を検出し、集落の一部であることが判明した。

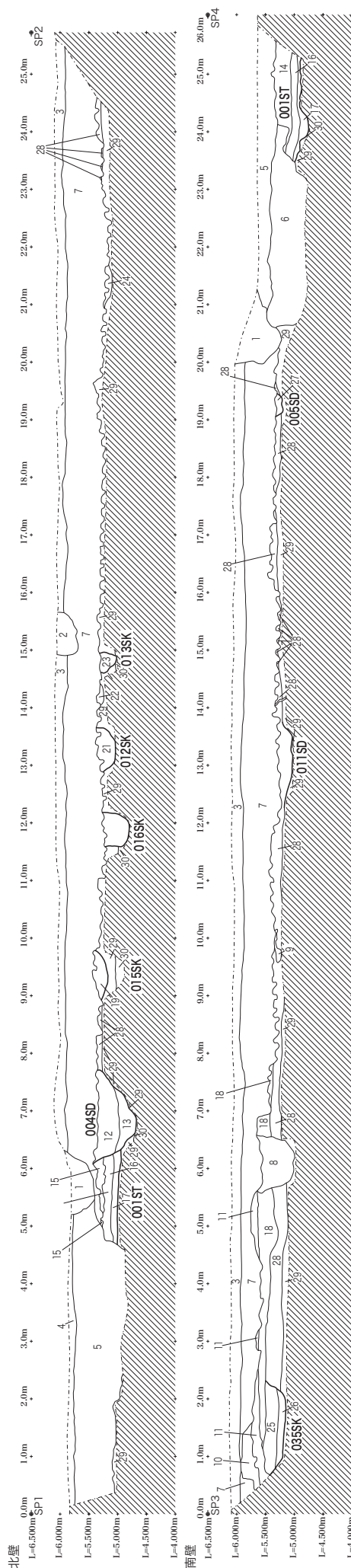
08Bd 区は基盤面の標高は約 5.5m である。西北西 - 東南東軸の 059SD の他に柱穴が多数検出されたが、消失部分が多いので建物の復元は難しい。

08Bc 区の基盤層は粘土質シルトで、上部を土壌化層（黒褐色粘土質シルト）が覆っており、古代の遺構はこの地層を掘り込んでいる。しかし、天地返しに伴う攪乱がこの地層まで及んでいる範囲が広く、浅い遺構は削平されてしまったようである。

08Bb 区の基盤層は粘土質シルトで、上部に土壌化層は認められない。やや大形の柱穴が並び、掘立柱建物の分布は明瞭である。

08Ba 区は基盤層の上部に整地層（37 層）が形成されており、その上部から掘り込む遺構も多いが、当該層の本来の厚さは不明である。井戸が 2 基検出された。

08Bc 区



模式図 1/8000

1. 015SK 埋土
2. 012SK 埋土
3. 016SK 埋土
4. 011SD 埋土
5. 005SD 埋土
6. 001ST 埋土
7. 015SK 埋土
8. 012SK 埋土
9. 016SK 埋土
10. 011SD 埋土
11. 005SD 埋土
12. 001ST 埋土
13. 015SK 埋土
14. 012SK 埋土
15. 016SK 埋土
16. 011SD 埋土
17. 005SD 埋土
18. 015SK 埋土
19. 012SK 埋土
20. 016SK 埋土
21. 011SD 埋土
22. 005SD 埋土
23. 001ST 埋土
24. 015SK 埋土
25. 012SK 埋土
26. 016SK 埋土
27. 011SD 埋土
28. 005SD 埋土
29. 001ST 埋土
30. 015SK 埋土

図 118 塔の越遺跡 08Bc 区北壁土層セクション図

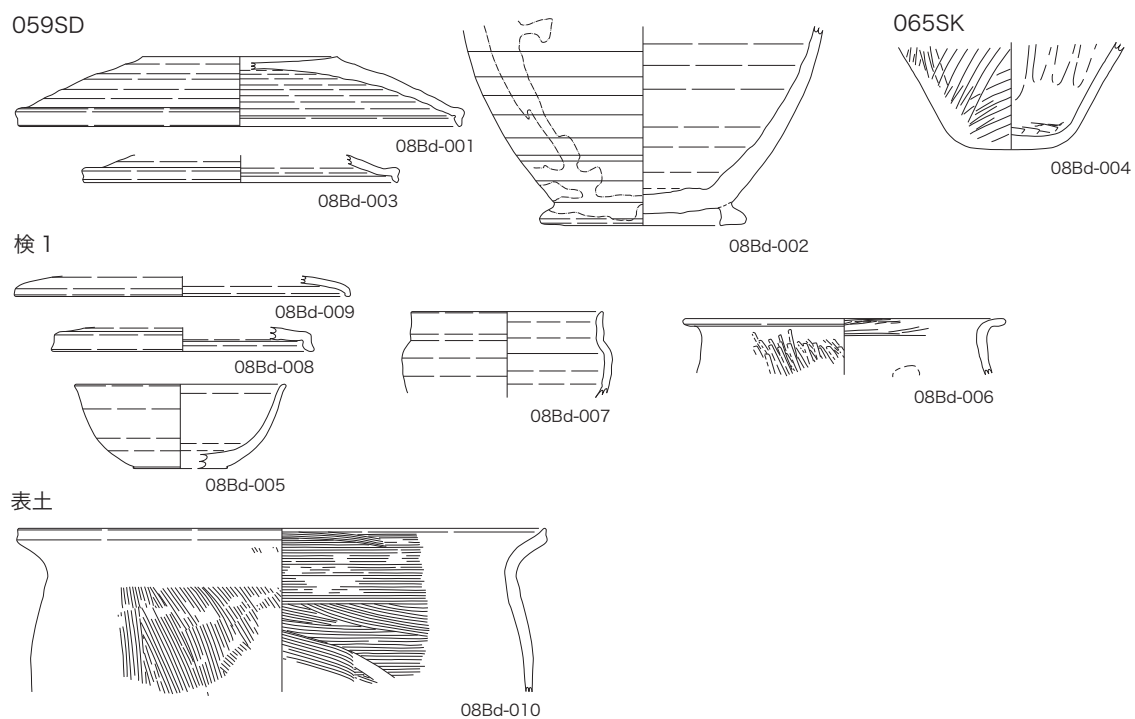


図 119 塔の越遺跡 08Bd 区出土遺物実測図

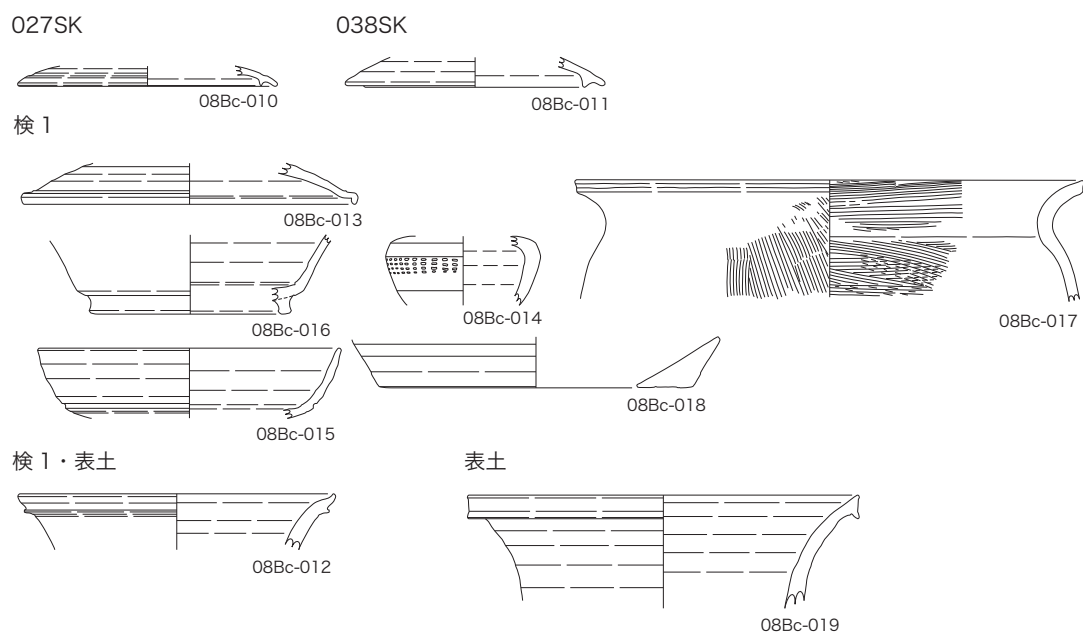
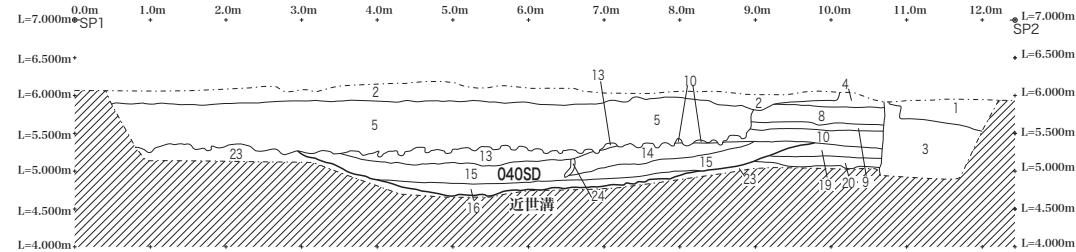


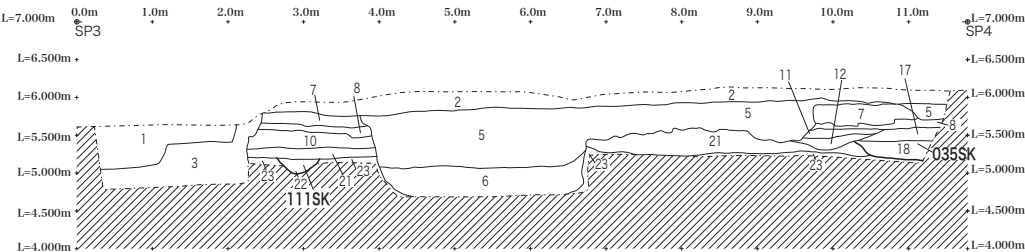
図 120 塔の越遺跡 08Bc 区出土遺物実測図

08Bb区

北壁



南壁



1. バラスト主体 表土
2. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 表土・調査前までの畑耕作土
3. 下位層のブロック主体 バラスト・コンクリート塊・ナイロン製品・塩化ビニール製品含む 攪乱埋土
4. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 表土・現代の旧畑耕作土
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 下位層のブロック・斑土含む 天地返しに伴う攪乱層
6. 5Y4/1 灰色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトのブロック主体 下位層のブロック・斑土多く含む 礫含む 攪乱埋土
7. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 下位層のブロック含む 炭化物・ビニール糸含む 現代の旧畑耕作土
8. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 下位層少し斑入 炭化物少し含む 近代?の畑耕作土
9. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 近世の畑耕作土、検出1相当
10. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 炭化物少し含む 近世の畑耕作土、検出1相当
11. 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト 炭化物少し含む 近世の遺構埋土
12. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト斑入 近世の遺構埋土
13. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトの斑土 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 040SD埋土
14. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトの斑土・ブロック多く含む 040SD埋土、15層相当層で斑土・ブロック土を多く含む
15. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 040SD埋土
16. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト少し斑入 040SD埋土
17. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 035SK埋土
18. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 035SK埋土
19. 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR7/4 にふい黄褐色極細粒砂の斑状 検出2相当
20. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 炭化物少し含む 検出2相当
21. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトの斑土 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト少し斑入 検出2相当、20層相当層か
22. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト斑入 炭化物・焼土少し含む 111SK埋土
23. 10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂の薄層を挟む シルト基盤層
24. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR7/3 にふい黄褐色極細粒砂を薄層状に含む 生物擾乱

図 121 塔の越遺跡 08Bb 区北壁・南壁土層セクション図

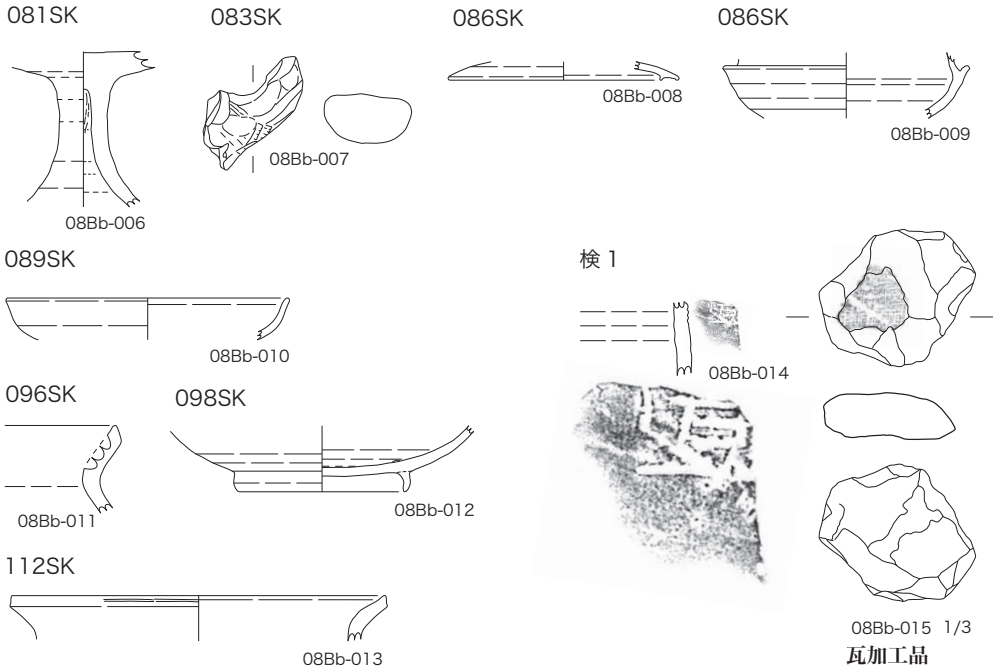


図 122 塔の越遺跡 08Bb 区出土遺物実測図

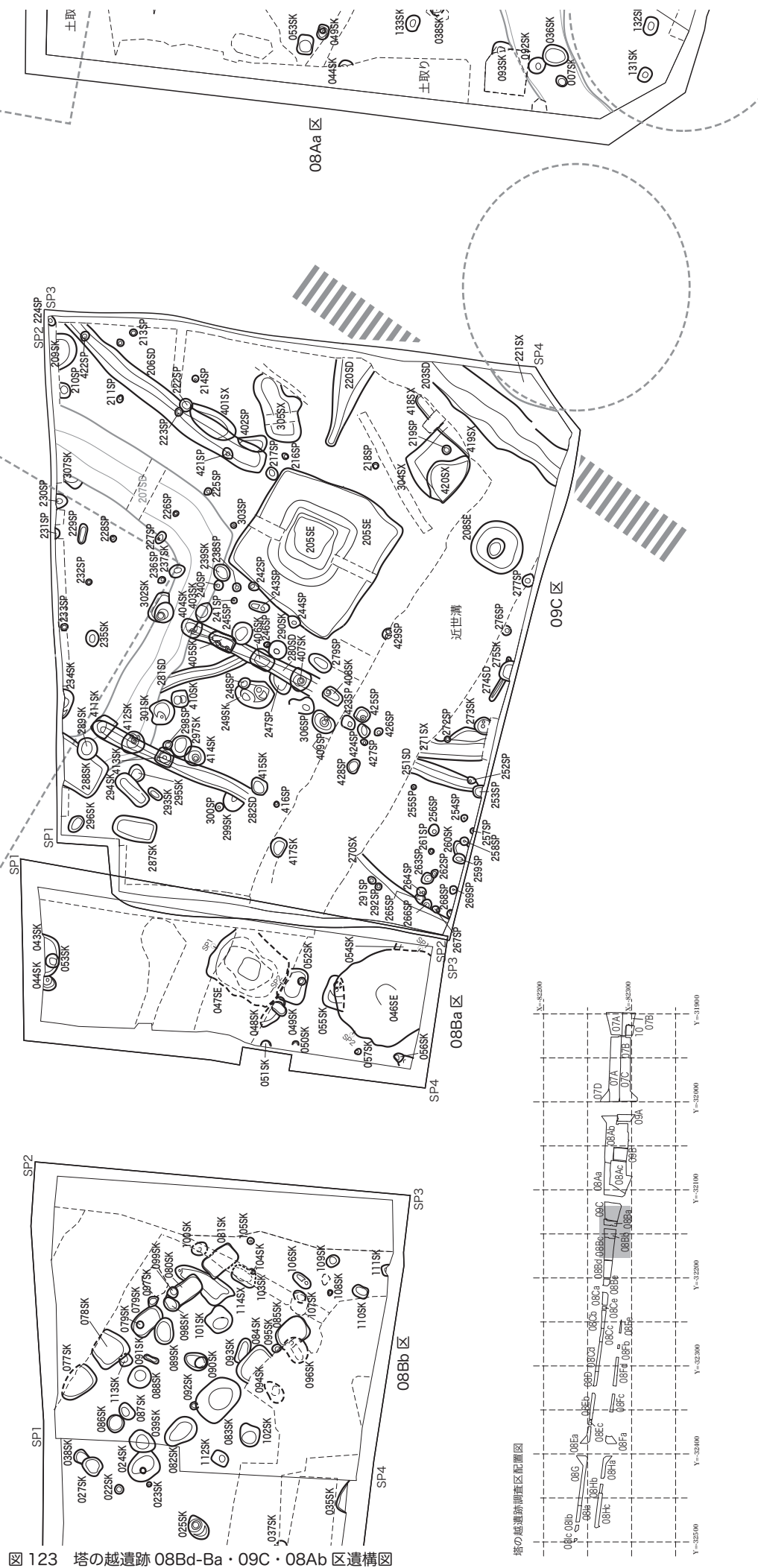
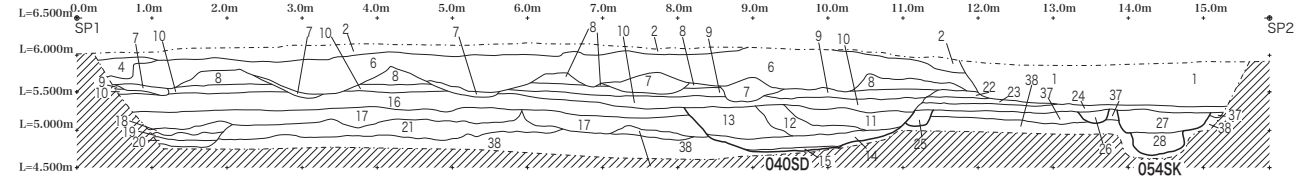


図 123 塔の越遺跡 08Bd-Ba・09C・08Ab 区遺構図

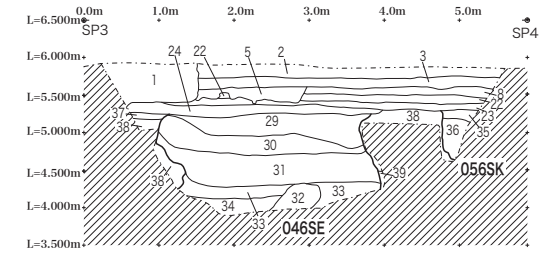
08Ba 区

東壁



- 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 下位層のブロック・斑土・礫含む 表土・攪乱埋土
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト 所により10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂斑入 表土
- 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/1 黄灰色細粒砂の薄層 現代の客土による整地層
- 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト 攪乱埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y6/4 にぶい黄褐色粘土質シルトのブロック・斑土含む 攪乱埋土
- 2.5Y5/2 黄褐色粘土質シルト 8層のブロック含む 現代の旧桑畑耕作土
- 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 下位層のブロック少量含む 現代の旧桑畑畝間溝埋土
- 10YR4/4 褐色粘土質シルト 近世～近代の畑耕作土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 近世の畑耕作土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 近世の畑耕作土
- 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 040SD埋土
- 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土
10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト斑入 040SD埋土
- 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 炭化物少し含む 040SD埋土
- 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 極細粒砂含む 040SD埋土
- 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 040SD埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 基盤層少し斑入 近世の畑耕作土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・基盤層の斑土 ブロック含む 042SX埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・基盤層の斑土・2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルトのブロック少し含む 遺構埋土
- 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトの斑土 灰・炭化物を斑状に含む 遺構埋土
- 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂・2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂斑入 遺構埋土
- 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂 基盤層少し斑入 042SX埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 検出1相当、中世後期の畑耕作土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・基盤層少し斑入
検出1相当、中世後期の畑耕作土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土 基盤層少し斑入
炭化物・焼土含む 046SE廃絶時の整地層
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 基盤層斑入(主に下部) 炭化物・焼土少し含む 遺構埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 基盤層少し斑入 炭化物・焼土含む 遺構埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土
10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト斑入 炭化物少し含む 054SK埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルトの斑土
10YR4/1 褐灰色粘土質シルト斑入 炭化物多く・焼土少し含む 054SK埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトのブロック・斑土含む 炭化物少し含む 046SE埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土 炭化物含む 046SE埋土
- 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土・ブロック多く含む 炭化物含む 046SE埋土
- 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト・5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルトのマーブル状 炭化物含む 046SE埋土
- 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト・5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルトの斑土・N2/0 黒色シルト質粘土少し斑入 炭化物少し含む 046SE埋土
- 5GY5/1 オリーブ灰色細粒砂・2.5GY3/1 暗オリーブ灰色粘土質シルトの斑土・N2/0 黒色シルト質粘土少し斑入 炭化物少し含む 046SE埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト少し斑入 056SK埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土含む 炭化物少し含む 056SK埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・基盤層の斑土・10YR3/2 黒褐色粘土質シルト斑入 炭化物少し含む 整地層
- 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 基盤層
- 2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂 基盤層

南壁



模式図 1/8000

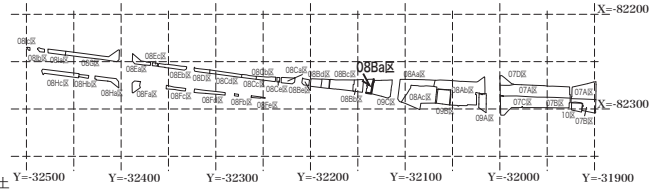


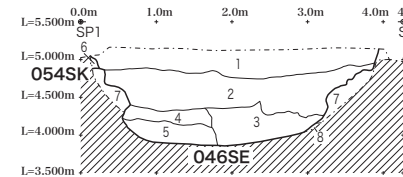
図 124 塔の越遺跡 08Ba 区東壁・南壁土層セクション図

08Ba 区 046SE 掘形の平面はやや方形を呈し、南部は調査区外に及ぶ。底面は基盤下部の黄灰色細粒砂層まで掘り抜かれ、井戸材の残片と思われる大形の板材が出土した（後述）。調査区南壁の断面では壁面が迫り出しており、井戸構築時に崩落をまねいたようだ。8世紀の遺物が出土している。

08Ba 区 047SE 掘形平面は北北東-南南西軸の長方形で、底面は黄灰色細粒砂層まで達している。堆積層の上部は抜き取り時に整地されたもので、須恵器3点が据え置かれたように埋められていた。

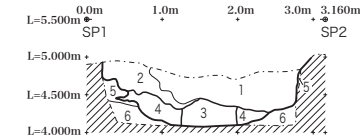
遺物群直下の堆積層中央部には灰色細粒砂が円筒状に堆積していた。地震によって砂が噴出したものとすれば、

08Ba区046SE



- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土 炭化物含む 046SE埋土
- 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土
ブロック多く含む 炭化物含む 046SE埋土
- 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト
5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルトのマーブル状 炭化物含む 046SE埋土
- 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト・5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルトの斑土
N2/0 黒色シルト質粘土少し斑入 炭化物少し含む 046SE埋土
- 5GY5/1 オリーブ灰色細粒砂・2.5GY3/1 暗オリーブ灰色粘土質シルトの斑土
N2/0 黒色シルト質粘土少し斑入 炭化物少し含む 046SE埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土 054SK埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 基盤層
- 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂 基盤層

08Ba区047SE



- 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト
2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルトの斑土 炭化物含む 047SE埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト
2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂
10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルトのブロック 047SE埋土
- 5Y6/1 灰色細粒砂 047SE埋土
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト
2.5Y6/2 灰黄色細粒砂～極細粒砂の斑土・ブロック 047SE埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 基盤層
- 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂 基盤層

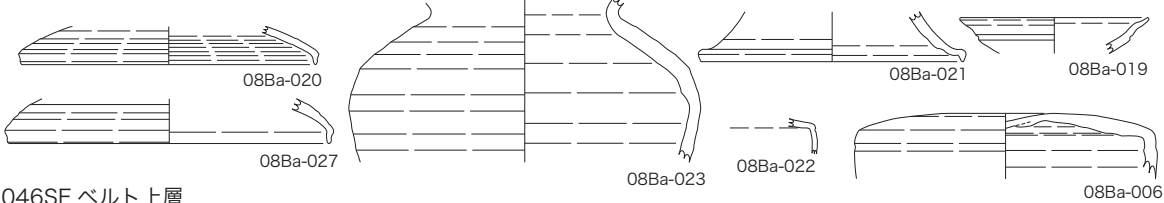
図 125 塔の越遺跡 08Ba 区 046SE・047SE 土層セクション図

井側は丸太材を刳り貫いた井筒であった可能性が高い。
 8世紀中葉の遺物が出土している。

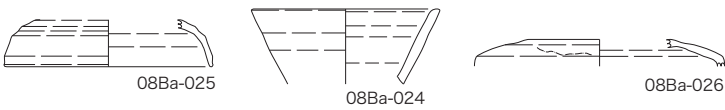


図 126 塔の越遺跡 08Ba 区 047SE 上層遺物出土状況

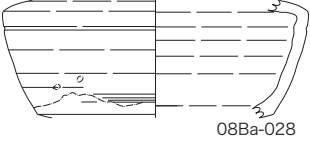
046SE



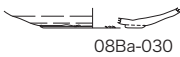
046SE ベルト上層



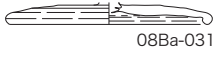
046SE ベルト下層



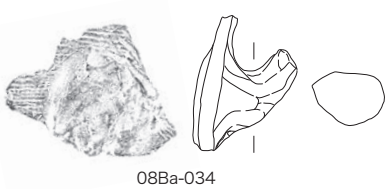
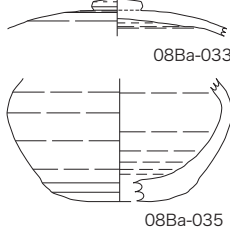
047SE



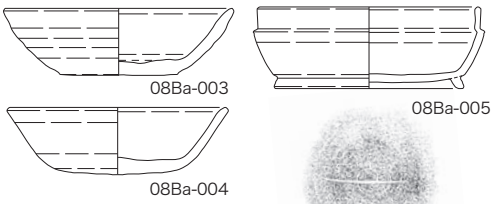
047SE 抜き取り跡



表土



047SE 上層



049SK

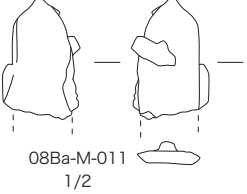


図 127 塔の越遺跡 08Ba 区出土遺物実測図

● 09C 区

本調査区における地層の堆積状況や遺構の展開状況はいささか複雑である。現代（及びそれ以前を含む）畝耕作土下には平安時代から戦国時代の遺物を含む包含層があり、さらに下部で古墳の周溝を認めた時点でも古代に属す明確な遺構が把握できないという状況で、遺構検出には大きな困難を伴った。その理由としては整地層が厚かったこと、よって整地層を掘り込む遺構群の上部埋土も同様の整地層であったために両者の識別が難しかったことがあげられる。とすれば、本来は遺構面が複数存在した可能性も考えねばならない。柱痕を見出しながらも並ばない柱穴が複数あることは、遺構の精査が十分ではなかったことを意味している。

「古墳」時代の方墳の周溝 207SD がもつ軸線は、驚いたことに近世まで続く。古代には、一部の建物群が方位を異にするけれども、井戸や溝などの主要遺構は関連性を保っている。古代の布掘溝をもつ掘立柱建物の北端が周溝までは及んでいるものの墳丘裾に達していない

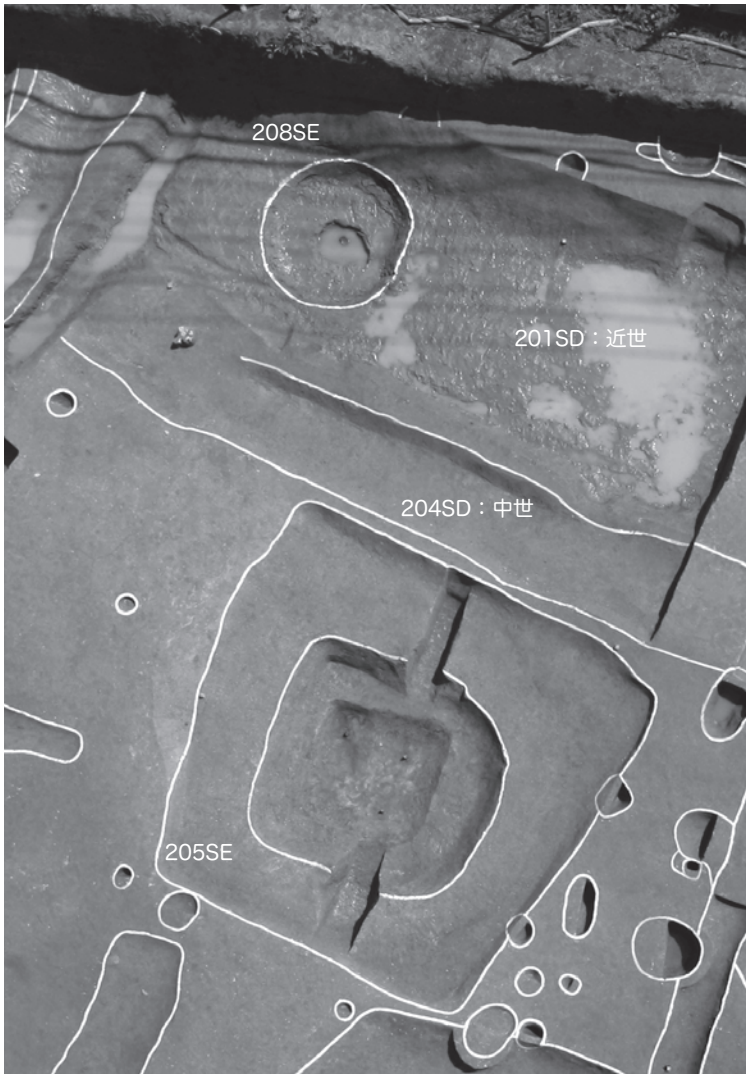
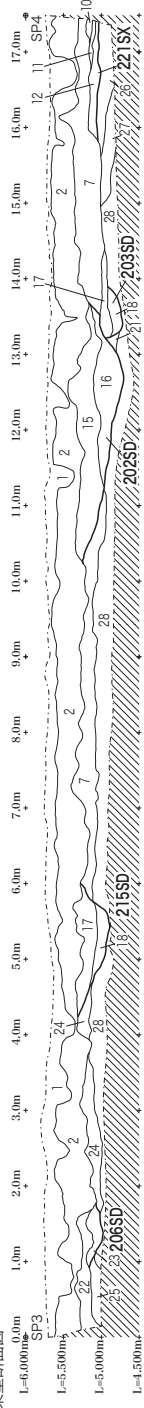


図 128 塔の越遺跡 09C 区 205SE・208SE の検出状況

のことは、恐らく 8 世紀までは墳丘が残存していたことを示すのだろうが、隣接する 08A 区と同様に 9 世紀には広範囲に地表の改変が行われて、多くが削平されたものと推測する。

09C 区

東壁断面図
L=6.000m
L=5.500m
L=5.000m
L=4.500m



09C北壁断面図

L=6.000m
L=5.500m
L=5.000m
L=4.500m

1. 25Y5/3 黄褐色シルト 表土層
2. 10YR5/3 に近い黄褐色シルト 畑耕作土
3. 25Y4/1 黄灰色シルトと 25Y4/2 暗灰黄色シルトの斑土
4. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト 沈雑多く含む 201SD・202SD埋土
5. 25Y7/1 灰白色粘質シルト 202SD埋土
6. 10YR4/4 褐色シルト 25Y8/4 淡黄色シルトブロック含む
7. 10YR4/4 褐色シルト
8. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 203SD埋土
9. 10YR3/3 暗褐色シルト 203SD埋土
10. 10YR7/1 灰白色シルト 221SX埋土
11. 10YR5/1 褐色シルト 遺物含む (221SX埋土)
12. 10YR3/3 暗褐色シルト (221SX埋土)
13. 10YR4/4 褐色シルト
14. 25Y8/4 淡黄色シルト 10YR4/4 褐色シルトブロック含む (202SD埋土)
15. 10YR5/2 灰黄色シルト (202SD埋土)
16. 10YR4/2 灰黄色シルト 202SD埋土
17. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 215SD埋土
18. 10YR4/2 灰黄色シルト 215SD埋土
19. 10YR4/2 灰黄色シルトと 25Y8/4 淡黄色シルトの斑土 288SK埋土
20. 10YR5/2 灰黄色シルト 203SD埋土
21. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 沈雑多く含む
22. 10YR4/2 灰黄色シルト 25Y8/4 淡黄色シルトブロック含む
23. 25Y8/4 淡黄色シルトと 10YR4/2 灰黄色シルトの斑土 206SD埋土
24. 25Y8/4 淡黄色シルトと 10YR4/2 灰黄色シルトの斑土
25. 25Y8/4 淡黄色シルト 10YR4/2 灰黄色シルトブロック含む 沈雑含む
26. 25Y8/4 淡黄色シルト 25Y5/1 黄灰色シルトブロック含む 盛土
27. 25Y7/3 浅黄色極細粒砂 沈雑多く含む
28. 10YR4/4 褐色極細粒砂 207SD埋土
29. 10YR3/1 黄褐色シルト 207SD埋土
30. 25Y4/1 黄灰色シルト 207SD埋土
31. 25Y4/1 黄灰色シルト 207SD埋土
32. 10YR4/2 灰黄色シルトと 25Y8/4 淡黄色シルトの斑土 288SK埋土
33. 25Y8/4 淡黄色シルト

図 129 塔の越遺跡 09C 区北壁・東壁土層セクション図

205SE 09C 区中央東寄りで検出した隅柱横板組の井戸である。

掘形は、検出面で長辺 4.8 m、短辺 3.9 m の方形をなし、深さは 2.7 m を測る。断面は二段掘りとなっている。底部は砂層に達せず、明オリブ灰色粘土層でとまっており、粘土層を透過した地下水を溜める構造である。

掘形の掘削は、まず地面を 1.1 m 以上掘り下げた後、井戸枠を組む足場を確保するため、さらに 20cm 掘り下げ、底辺が 1.7 m になる方形の穴を作る。次に平場を幅 20cm 残し、中央部をほぼ垂直に 1.4 m 掘り下げている。

井戸枠は上下二段確認した。下段の井戸枠は、平行して置かれた 2 本の角材の上に、底部に 4 ヶ所の穿孔がある上面が長方形で側面がやや台形の枡（部材は鉄釘で留められていた）を設置し、その上に井桁に組んだ板材を 2 段積んでいる。さらに支えとして井戸枠外側に角材を打ち込んでいる。

上段の井戸枠は、先端を尖らした丸太材を、下段の井戸枠の四隅の外側に打ち込んで隅柱とし、その外側に板材を積み上げている。板材は 4 段残存していた。

隅柱にはほぞ穴が 2 ヶ所確認できた。上方のほぞ穴に接続する横木は残存していなかった。下方のほぞ穴は、下段の井戸枠の頂部より深い位置にあり、横木がはめ込まれた状態で出土した。また、下段の井戸枠の頂部の位置に、短辺を円弧状に削った板材を隅柱と隅柱の間にはめ込み、隅柱が内側に傾くのを防いでいた。さらに井戸枠を取り外したところ、板材を加工したときに出た切れ端が井戸枠の裏側から出土したため、板材の加工は現地で行われたと考えられる。

井戸の堆積層は黒色粘質シルトからなり、湛水状態の中で、時間をかけて井戸が埋まっていったことがわかる。井戸の中からは、井戸の部材、曲物、櫛、ピンセット状の銅製品、灰釉陶器の手付瓶・長頸壺、銅製の、シカの骨、桃果核など、多くの遺物が出土している。（宇佐見 守）

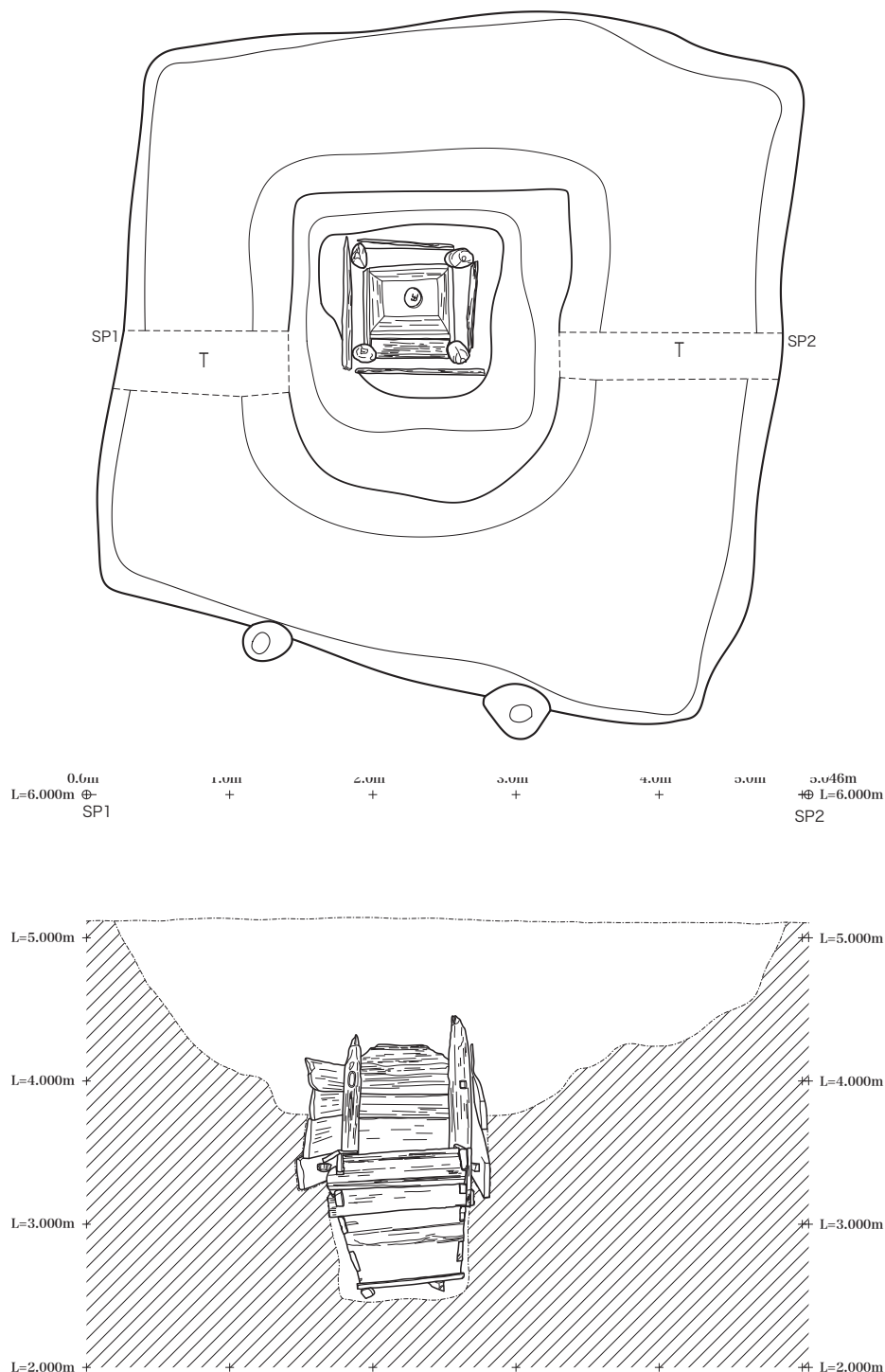


図 130 塔の越遺跡 09C 区 205SE 平面図・側面図

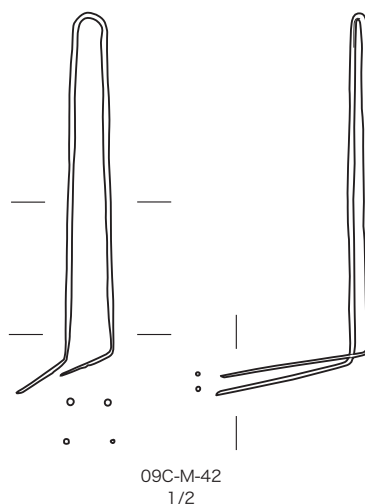


図 131 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土遺物実測図

09C区205SE 上段

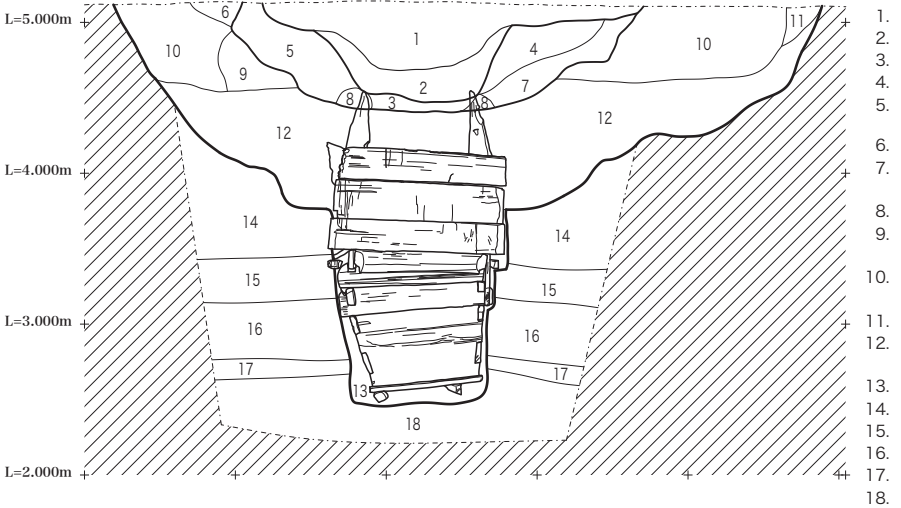
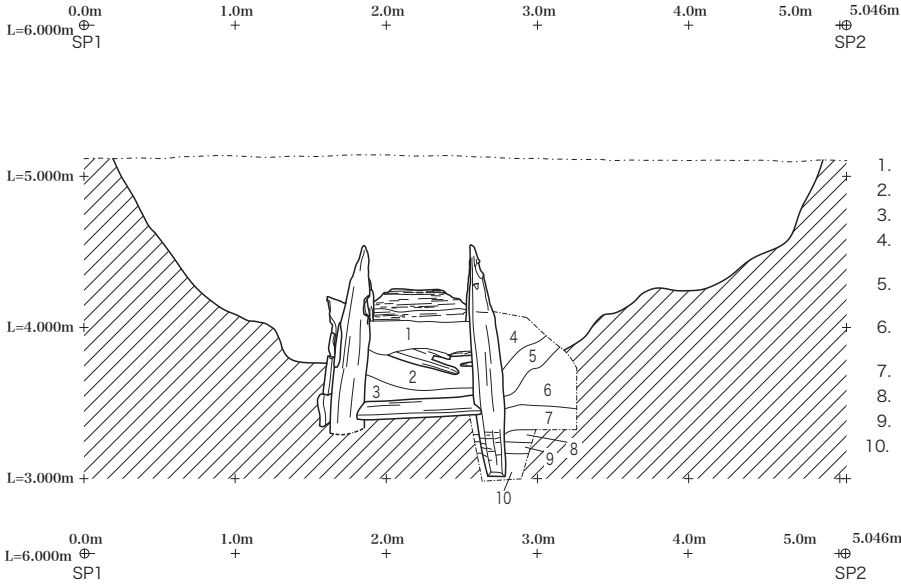


図 132 塔の越遺跡 09C 区 205SE 側面図・土層断面図

表 2 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土の動物遺体 分析：中村賢太郎（パレオ・ラボ）

調査区	遺構	位置	層位	分類群	部位	部分	左右	個数	備考
IETK09c	井戸東側	上層	ニホンジカ?	白歯	破片	?	?	1	咬耗なし
					破片	?	?	1	
	井戸主体部	中層	ニホンジカ?	頭蓋骨	破片	?	?	13	
					椎骨	?	?	1	
					肋骨	?	?	1	
					肋骨	?	?	1	
					肋骨	?	?	1	
					肋骨	?	?	1	
					肋骨	?	?	1	
					肋骨	?	?	1	
					肋骨	?	?	1	
					肋骨	?	?	1	
	井戸東側	中層～下層	ニホンジカ	上顎骨/下顎骨	破片	?	?	6	
					破片	?	?	1	
					破片	?	?	1	
					破片	?	?	1	
					破片	?	?	1	
					破片	?	?	1	
					破片	?	?	1	
					破片	?	?	1	
					破片	?	?	1	
					破片	?	?	1	
					破片	?	?	1	
					破片	?	?	1	
	井戸	下層	ニホンジカ?	上顎骨/下顎骨	破片	?	?	3	白歯
					破片	?	?	6	
	井戸内	下層	哺乳類(大型)	機骨	骨幹近位部	左	?	1	近位端未癒合
					骨幹近位部	右	?	1	近位端未癒合

表 3 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土の大型植物遺体(括弧は破片数を示す)

	調査区	IETK09C											
	遺構名	205SE											
	種別	井戸											
	時期	古代											
	位置	井戸内		井戸						井戸主体部			
	層位			下層の下						中層		桶内	
分類群	部位/No.	98		99		100		101		102		103	
クリ	果実								(2)				
ナラガシワ	果実			1									
モモ	核			(1)		5 (3)				2		2 (1)	
エノキグサ属	種子												
ヒョウタン仲間	果実	(2)											



図 133 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土の大型植物遺体
報告：佐々木由香・バンダリ スタルシャン
(パレオ・ラボ)

09C-205SE 出土木製品

205SE は、井戸枠を据えるために掘られた方形の堀方の一辺が5mにも達する巨大な井戸である。調査時の土層断面図をみる限り、堀方は再掘削されている。そして、太い丸太の隅柱をもつ上半部の井戸枠は再掘削時に据えられたもので、それより下の井籠組みの井戸枠が築造当初のものと考えられる。

下層 築造当初の井戸枠は大型の桁と井籠組み2段分からなっている。最下段には76×53cmの底板(120)の上に逆台形の側板4枚(093・096・118・120)を組み合わせた大型の桁を据えつけている。底板には湧水を取るために4カ所方形の穿孔をほどこし、側板を載せるために溝を切っている。底板と側板は、鉄釘2本で固定されており、側板同士は指物構造の仕口で結合している。底板・側板ともに木取りは板目。非常に精巧なもので、当初から井戸の水溜として作られたものではなく、別の用途からの転用品である可能性が高い。

この桁の上に井籠組みの井戸枠2段(142・100・104・089・097・111・099・091)が載る。この2段分の井戸枠もまた、指物構造の仕口で固定されている。木取りはすべて板目で、最下段の桁に合わせて南北の側板を短く、東西の側板を長く作る。おそらく築造当初は、この井籠組みの井戸枠が地表面まで組み上げられていたものとおもわれる。このほか108・127も下層の井戸の部材である。

最下段の桁内からは、完形の曲物(133)のほか、曲物底板3点(135・137・140)、横櫓(138・139)、板(136)が出土している。

上層 築造当初の井戸枠のうち、前述の桁と井籠組み2段分を残してそれより上が取り払われ、新たに隅柱構造の井戸枠が設置されている。

最大径が約20cmを測る巨大な隅柱(132・130・131・129)は丁寧に面取りをほどこし、下端部を尖らせている。それぞれに穿孔や柄孔はあるが、これら隅柱を相互につなぐ横棧は存在していない。それゆえ、この隅柱もまた転用材であり、穿孔は建築部材(柱か?)として使用されていた当初の細工である可能性が高い。木取りはいずれも芯持ち材。

側板は北(103・105・106・098・115)、西(123・113・114・117・116)、南(101・107・102・126・112)、東(110・141・090・095・094)で、それぞれ5段分出土している。このうち北と西の最下段(第1段)については短辺側に隅柱を受けるような細工をほどこし、寝かせた状態で使用されていた(103・123)。また、北第2段(105)・北第3段(106)・南第2段(107)

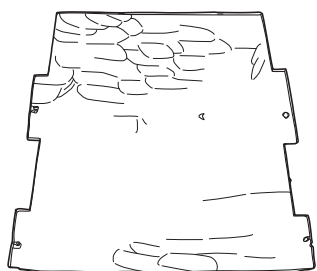
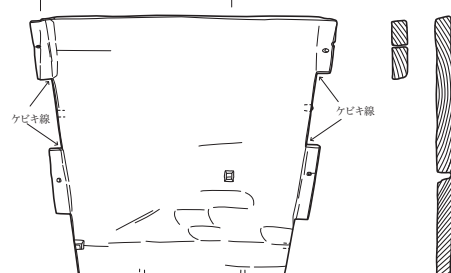
には赤彩の痕跡が残っていることから、これら側板についても転用材である可能性が高い。木取りはすべて板目である。このほか124・125も上層の井戸の部材である。

この上層の井戸枠内からは122のような建築部材のほか、板状の木製品が7点(062・086・087・088・092・121・128)が出土している。

(樋上 昇)

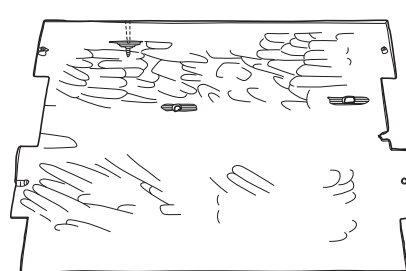
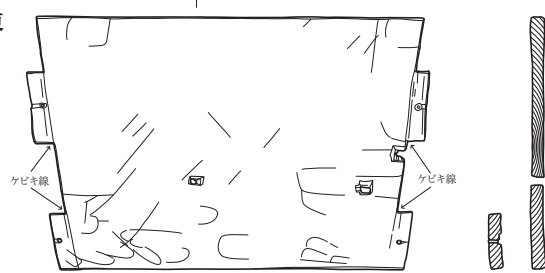
塔の越 09C 205SE 下層

北



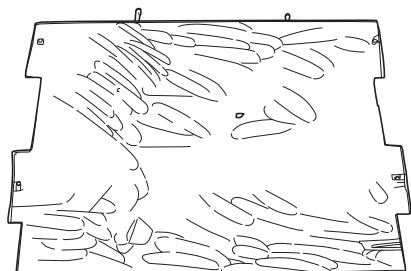
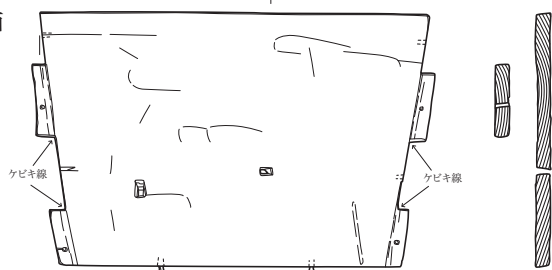
093

東



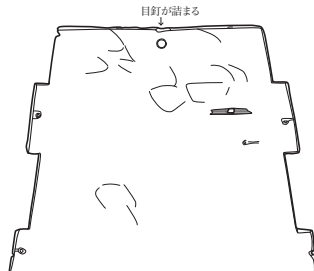
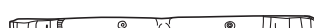
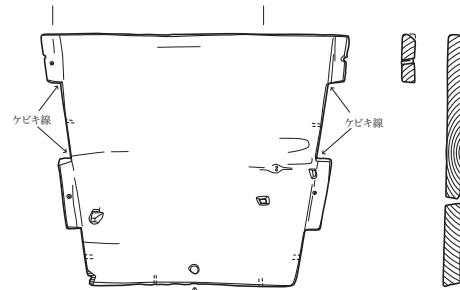
119

西



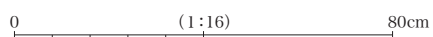
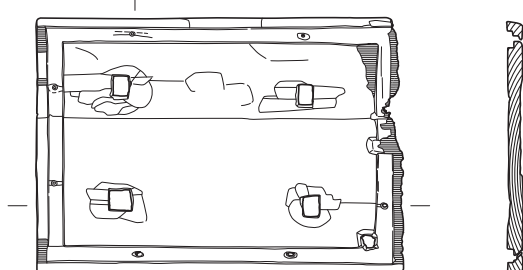
118

南



096

底板

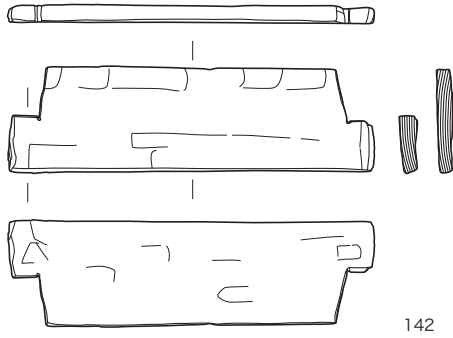


120

図 134 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (1)

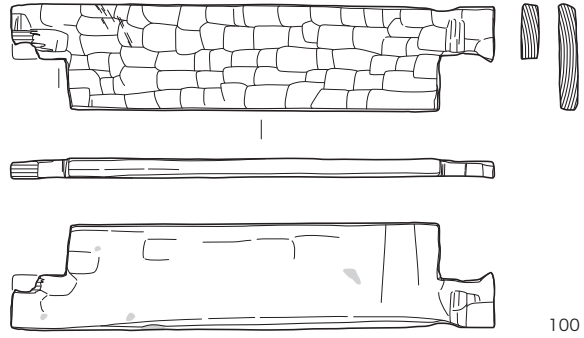
塔の越 09C 205SE 下層

北上段



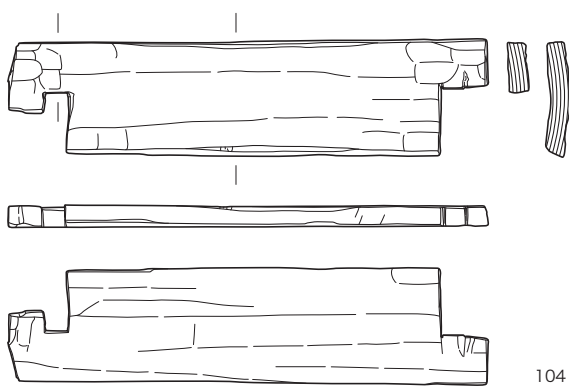
142

東上段



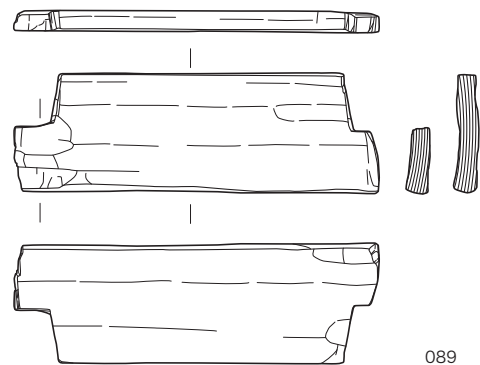
100

西上段



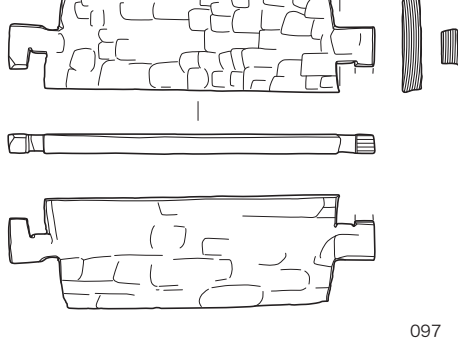
104

南上段



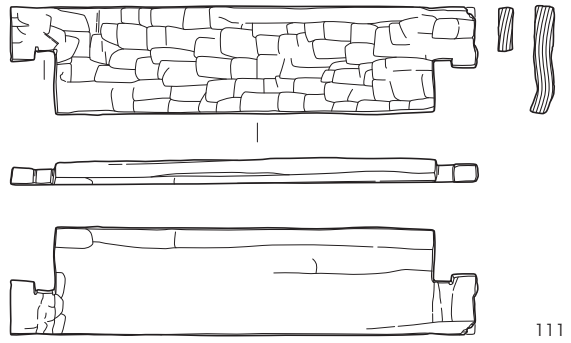
089

北下段



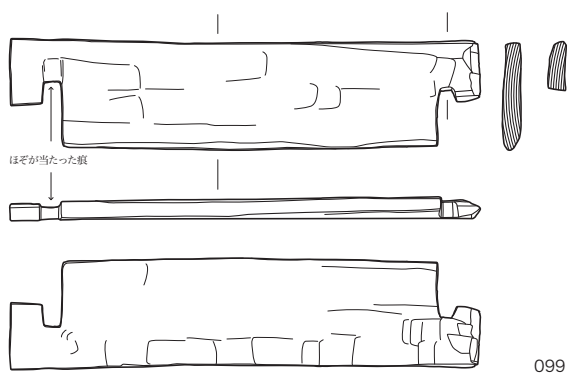
097

東下段



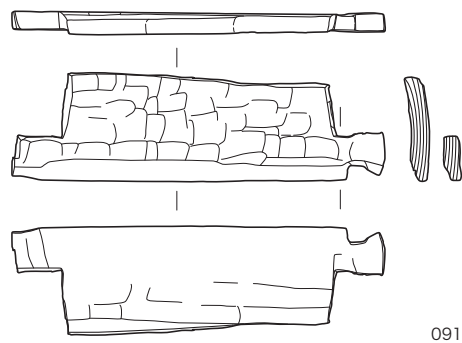
111

西下段



099

南下段



091

0 (1:16) 80cm

図 135 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (2)

塔の越 09C 205SE 下層 井戸枠内

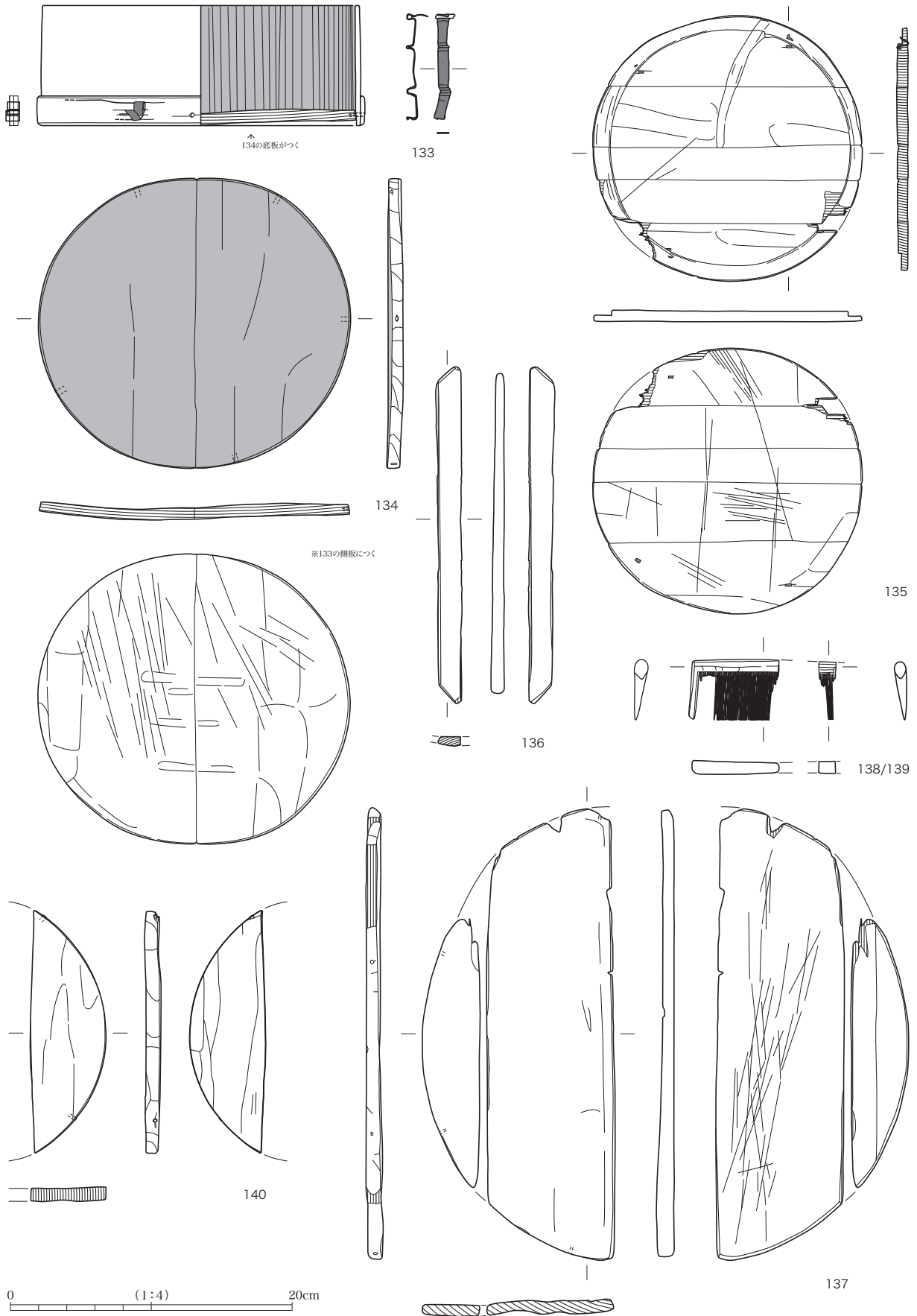
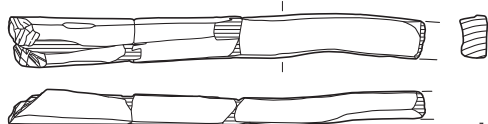


図 136 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (3)

塔の越 09C 205SE 下層

不明部材

0 (1:16) 80cm



108/109



127

塔の越 09C 205SE 上層

北西隅柱

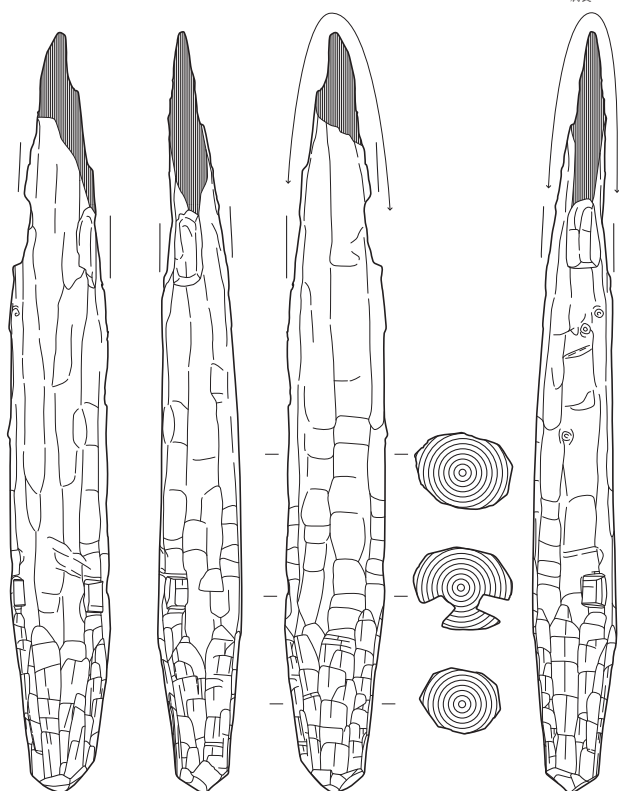
腐食

腐食

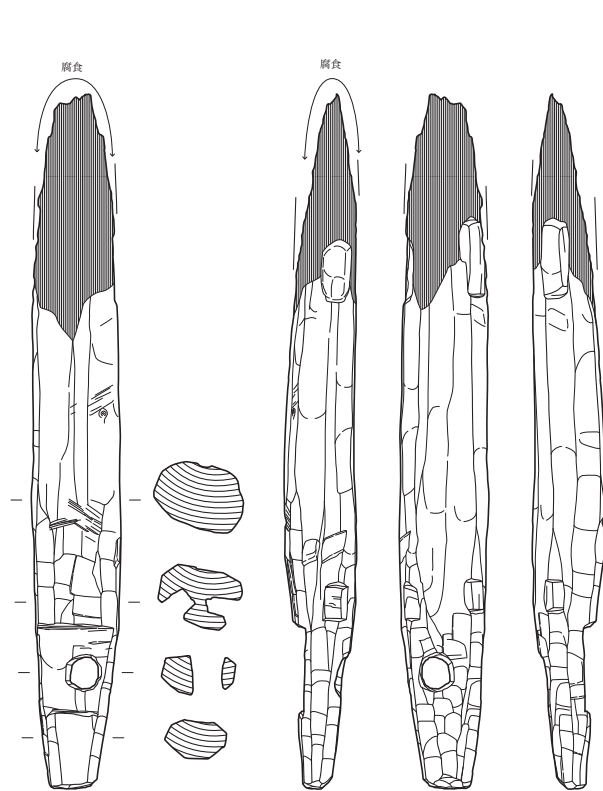
北東隅柱

腐食

腐食



132



130

南西隅柱

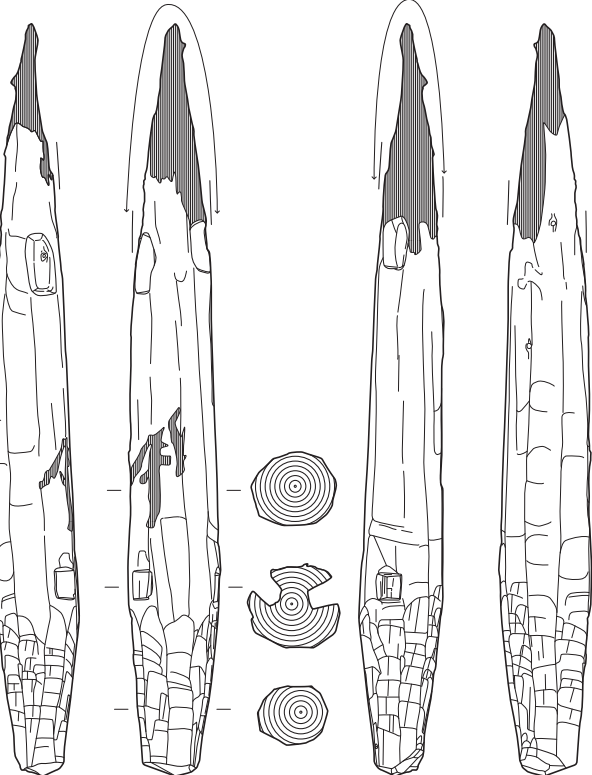
腐食

腐食

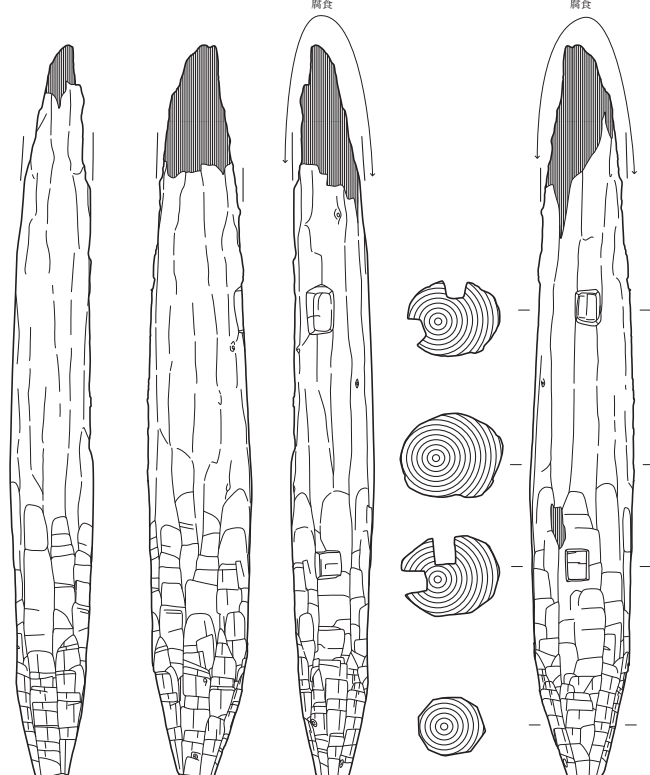
南東隅柱

腐食

腐食

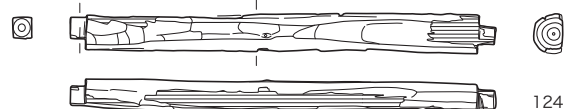


131

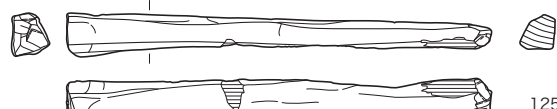


129

不明部材



124

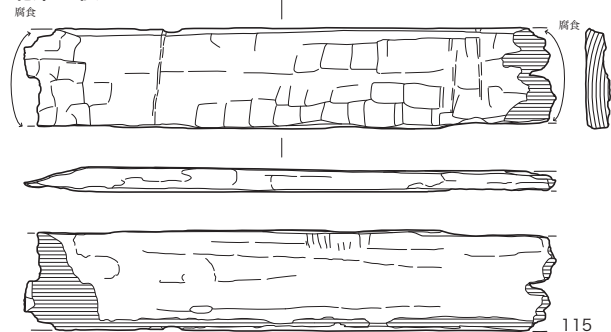


125

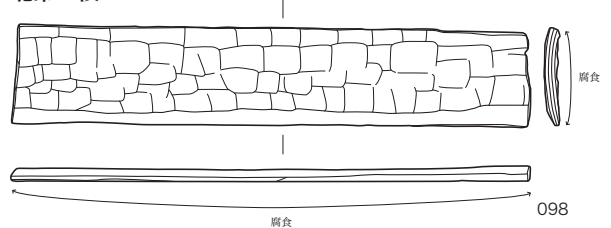
図 137 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (4)

塔の越 09C 205SE 上層

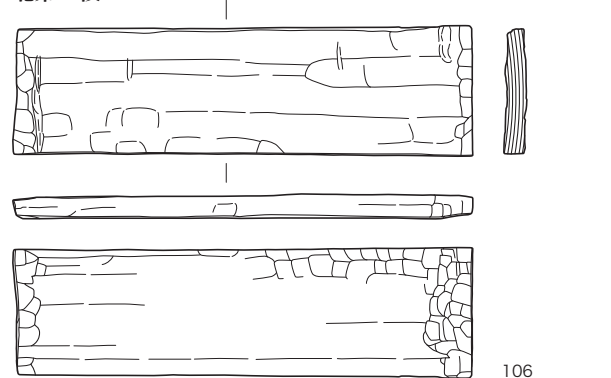
北第5段



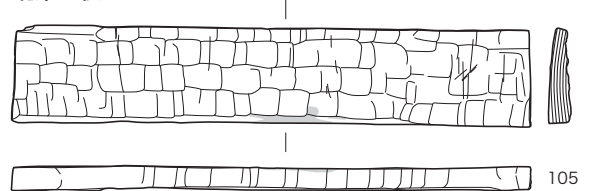
北第4段



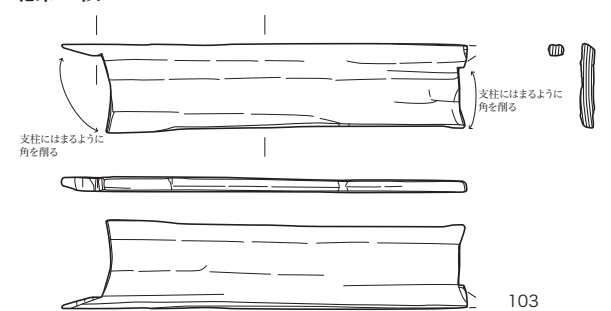
北第3段



北第2段



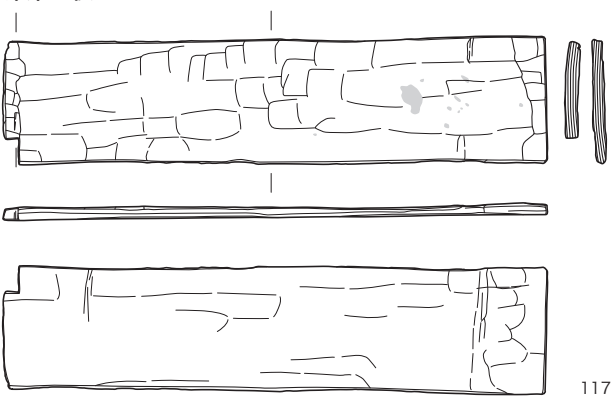
北第1段



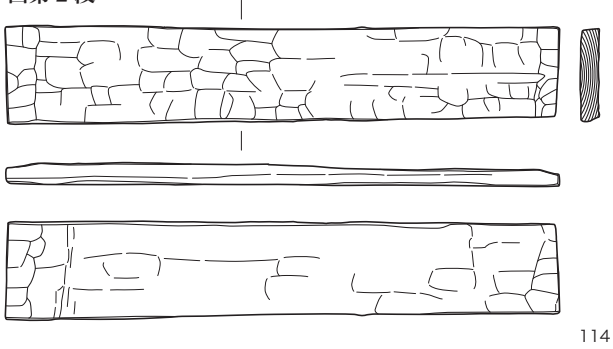
西第5段



東第4段



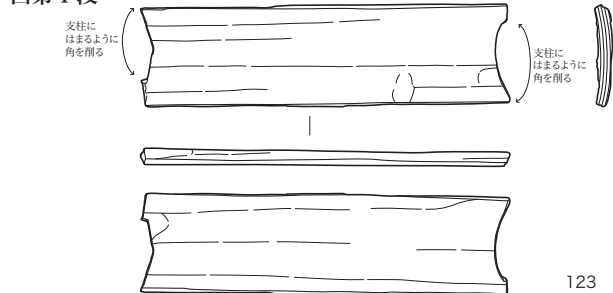
西第2段



西第2段



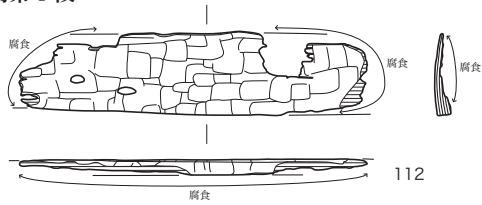
西第1段



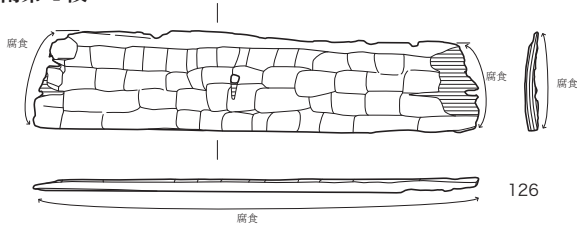
0 (1:16) 80cm

図 138 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (5)

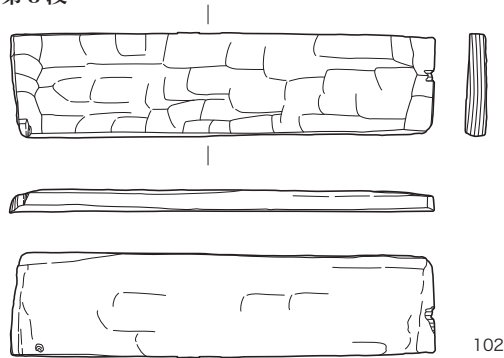
塔の越 09C 205SE 上層
南第 5 段



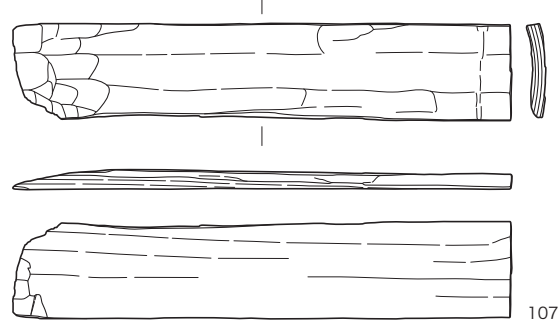
南第 4 段



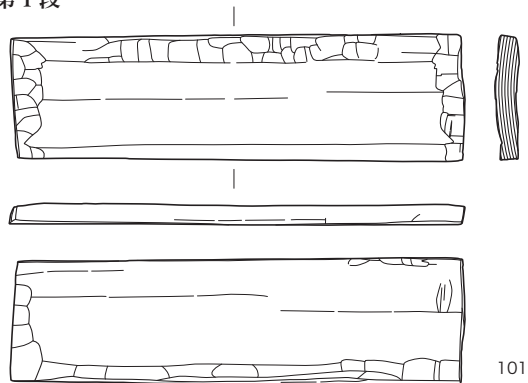
南第 3 段



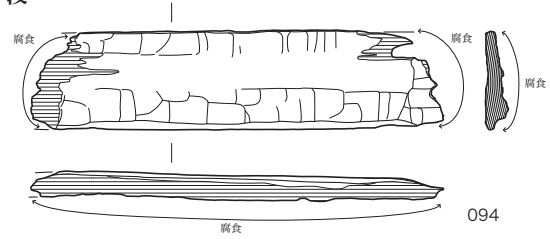
南第 2 段



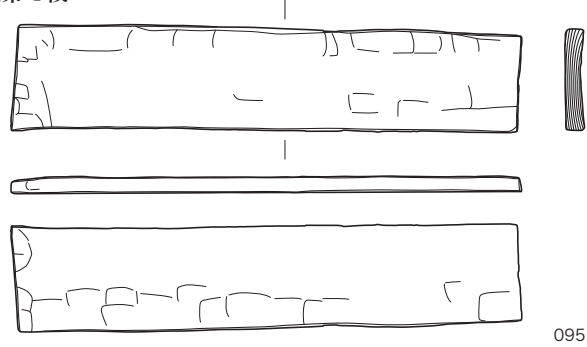
南第 1 段



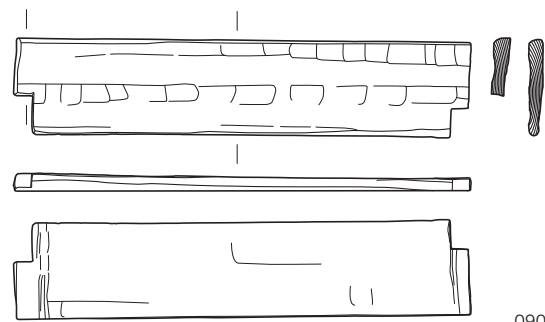
東第 5 段



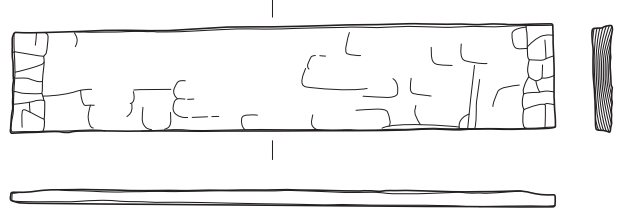
東第 4 段



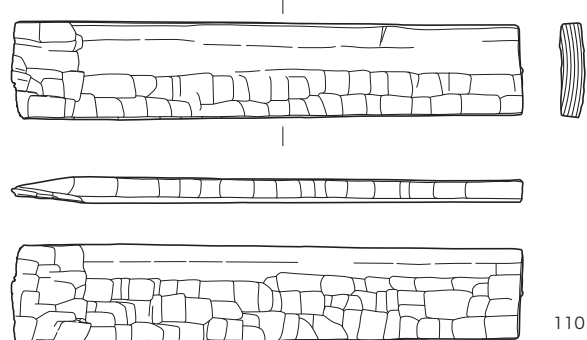
東第 3 段



東第 2 段



東第 1 段



0 (1:16) 80cm

図 139 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (6)

塔の越 09C 205SE 上層 井戸枠内

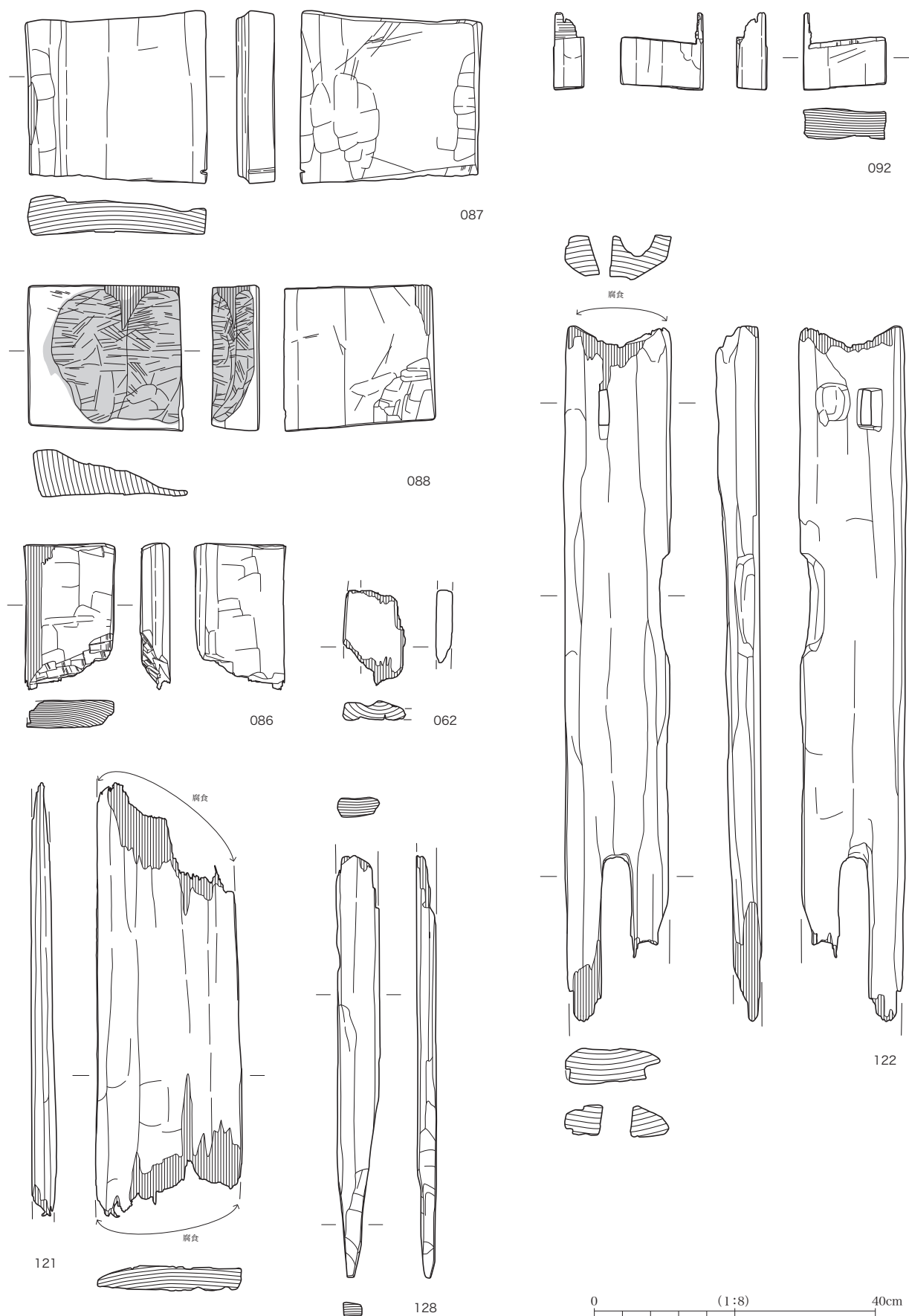


図 140 塔の越遺跡 09C 区 205SE 出土木製品実測図 (7)

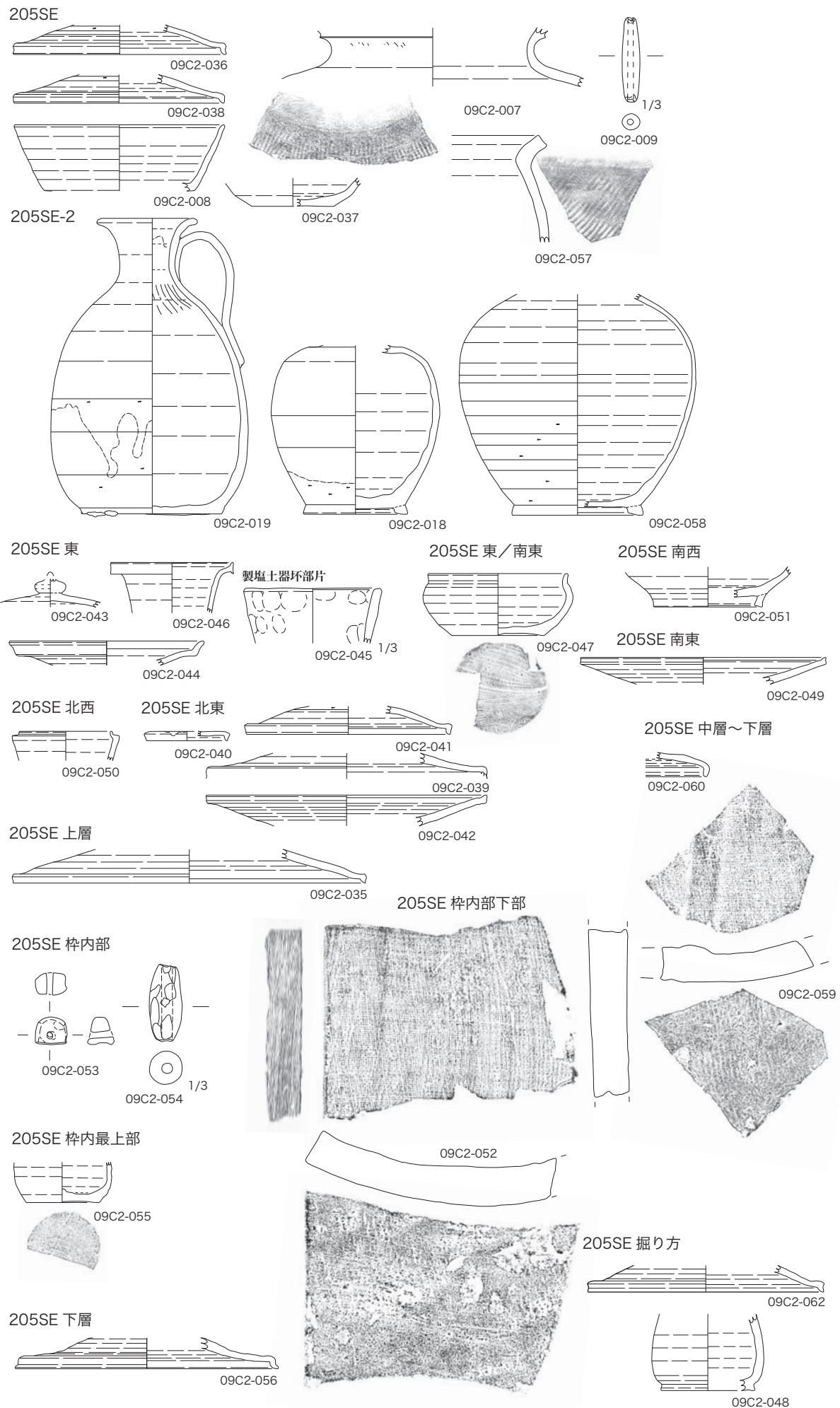


図 141 塔の越遺跡 09C 区出土遺物実測図

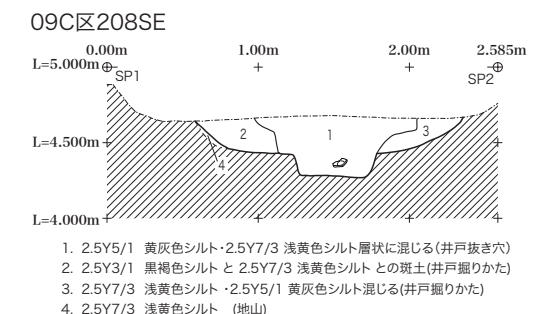
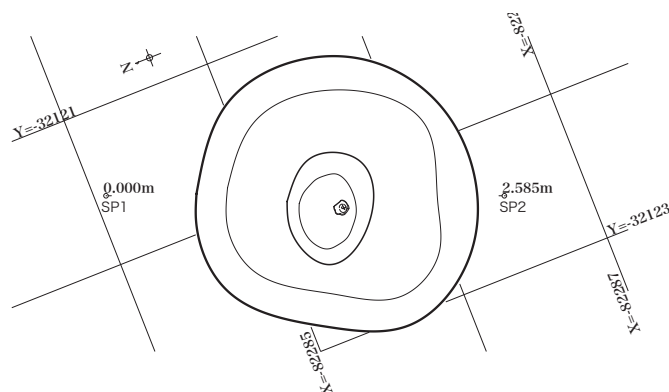


図 142 塔の越遺跡 09C 区 208SE 平面図・土層断面図

208SE 近世から近代に属す 201SD と重複しており、その下部から検出されたために、上部は大きく削平されていた。掘形平面はやや楕円形で、中央に漏斗（ろうと）状の抜き穴が認められた。抜き穴下部からは 7 世紀前半の高杯が出土した。当該期の井戸なのか、抜き取り時の混入なのか、判断に迷うところである。

抜き取り穴の径は約 1m であり、井側が削り貫きの井筒であった可能性を窺わせる点は 08Ba 区 047SE と同じだが、掘形の平面も方形ではないので 047SE に先行する公算が大きい。

203SD 近世から近代に属す 202SD が重複しており、厳密な形状は不明である。残存部で幅約 1.6m、深さ約 30cm を計測した。底面は西へ傾斜しており、溝としては不定型である。8 世紀代の遺物が出土している。

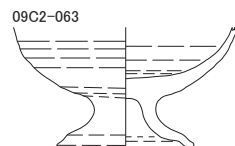


図 143 塔の越遺跡
09C 区 208SE 出土遺物

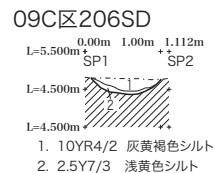


図 144 塔の越遺跡
09C 区 206SD 土層断面図

206SD 断面は皿状で、幅約 0.9m、深さ約 30cm である。南端は 217SP 直前で終わっており、205SE や周辺の遺構群と強い関連性が窺える。遺物はほとんど出土していない。

220SD 203SD や 206SD に直行する。東に向かって幅広くなっており、あたかも排水溝のように 203SD につながっているかのようである。

251SD 形状は布掘溝に類似して、軸線も共通しているが、下部から柱穴は検出されなかった。

280SD 桁行 302SK-408SK 柱穴列に重なる布掘溝である。下部の柱穴群とは別に調査された。

北端は 207SD に重複するが、墳丘には至っていない。7 世紀代の坏蓋は、おそらく 207SD が埋没する過程で流入した遺物が、それに重複して掘削された 208SD に移動したものであろう。

282SD 桁行 411SK-413SK 柱穴列に重なる布掘溝である。北端は 207SD に重複して、墳丘には至っていない。

7 世紀代の高杯脚は 280SD と同様に混入したもので、8 世紀後半が本遺構の時期と推測する。

340SX 北辺と西辺を検出した。深さは 10cm 程であり、灰白色シルトの単一層で埋まっていたので、竪穴建物跡の条件は整わない。廃棄土坑の一種であろう。出土遺物はほぼ 8 世紀後葉でまとまっている。

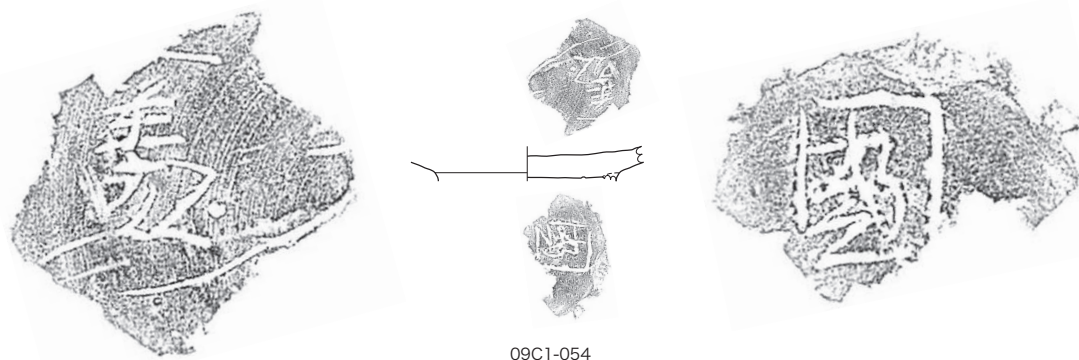


図 145 塔の越遺跡 09C 区出土刻書須恵器実測図

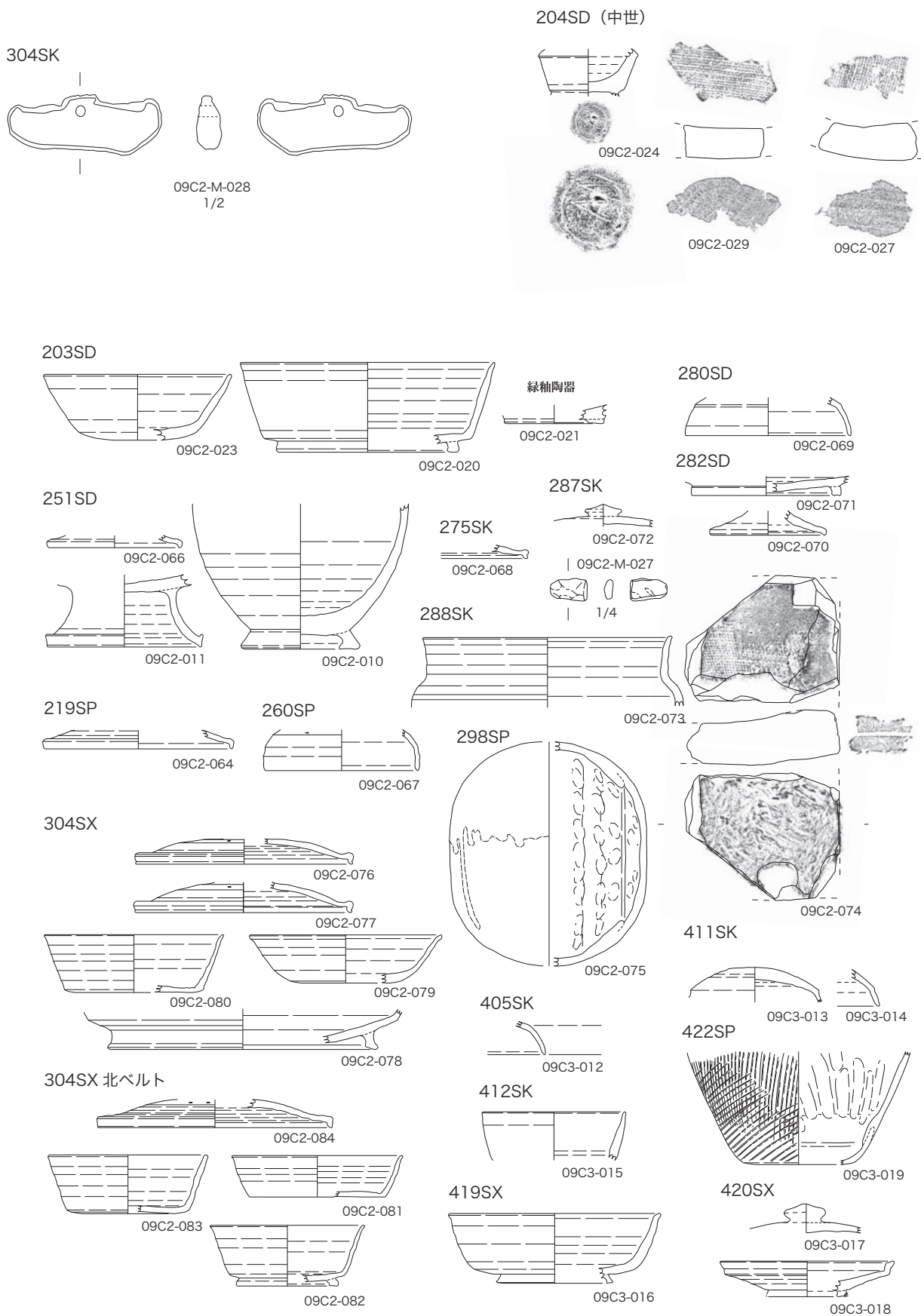


図 146 塔の越遺跡 09C 区出土遺物実測図

[08B 区建物 1]

08Bb 区 033SK を南東隅にして、北に 020SK、西に 014SK・003SK・012SK の 1 棟を想定した。

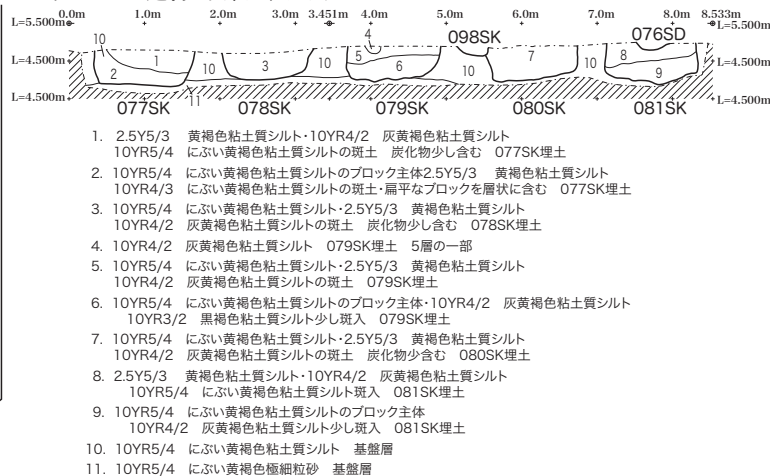
[08B 区柵 1]

柱痕も確かな 019SK・021SK については関連する柱穴群が不明で、南北軸の柵列になるのかもしれない。

[08B 区建物 2]

08Bb 区 077SK-081SK 桁行に長軸を揃

08Bb区ライン:建物2北東辺柱穴列



08Bb区Jライン:建物2南西辺柱穴列

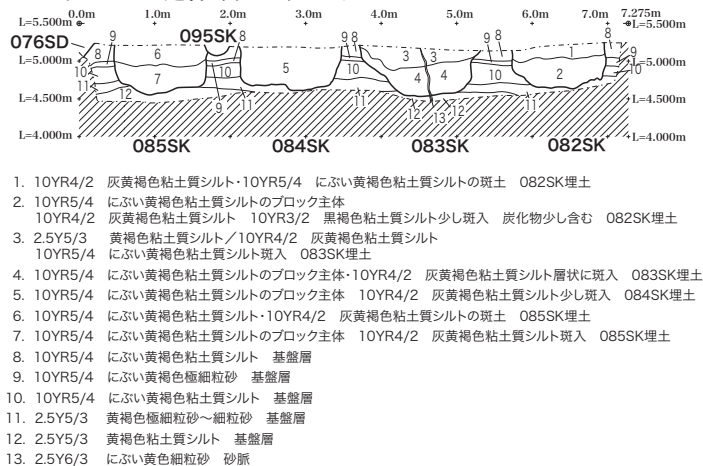


図 148 09C 区掘立柱建物柱穴土層セクション図

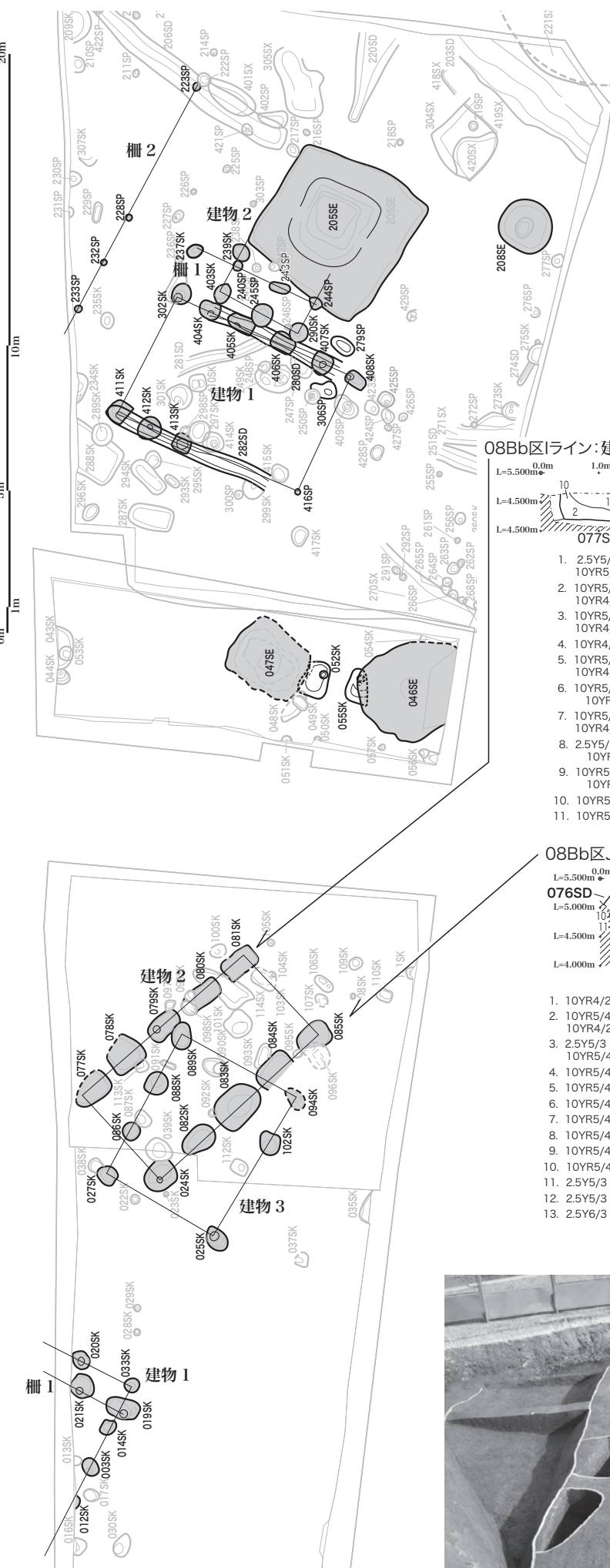


図 147 塔の越遺跡 08B 区・09C 区掘立柱建物等配置図



図 149 塔の越遺跡 08Bb 区建物 2・3 南西から

えて整列している。柱痕は 079SK のみ検出された。

08Bb 区 024SK-085SK 桁行に長軸を揃えて整列している。柱痕は 024SK のみ確認した。

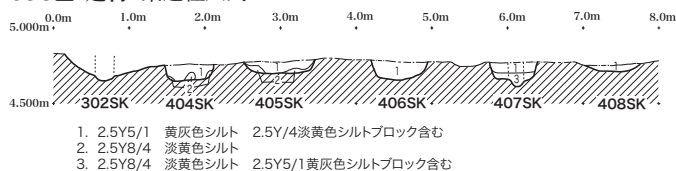
[08B 区建物 3]

08Bb 区 027SK-089SK 楕円形から円形の柱穴が並ぶ。柱痕は確認されていない。

08Bb 区 025SK-094SK 西寄りの 1 つを欠く。025SK のみ柱痕を確認した。

08Ba 区 052SK・055SK 井戸に切られる 2 本の柱穴を近接して検出した。柱痕はどちらも東寄りであり、配置が南北軸なら東側に建物が位置すると推測されるが、08Ba 区の幅は狭く、いずれになろうとも調査区をまた

09C区:建物1東辺柱穴列



09C区:建物1西辺柱穴列

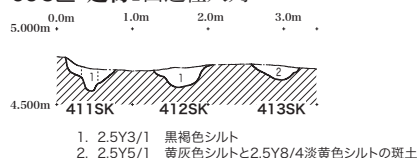


図 150 09C 区掘立柱建物柱穴土層セクション図



図 151 塔の越遺跡 09C 区建物 1 布掘溝と 207SD



図 152 塔の越遺跡 09C 区建物 1 東辺布掘溝下部の柱穴列 (手前が 302SK、最奥は 408SK)

がり詳細は不明である。

[09C 区建物 1]

09C 区 302SK-408SK・425SP 掘立柱建物の東桁に該当する。302SK・404SK・407SK・408SK から柱痕を検出した。

09C 区 411SK-416SP 掘立柱建物の西桁に該当する。南側寄りの 2 本分は検出されなかったが、布掘溝の底面を掘り下げることなく柱が設置されていたためであろうか。412SK・413SK の 2 本から柱痕を検出した。

[09C 区建物 2]

09C 区 403SK・406SK・290SK・239SK 桁行は東西と推測される。

[09C 柵 1]

09C 区 237SK・239SK・243SP・244SP 09C 区建物 2 と重複関係にある。

[09C 区柵 2]

09C 区 233SP・232SP・228SP・223SP 228SP と 223SP の間は未検出である。穴は小径なので、杭列かもしれない。

検1

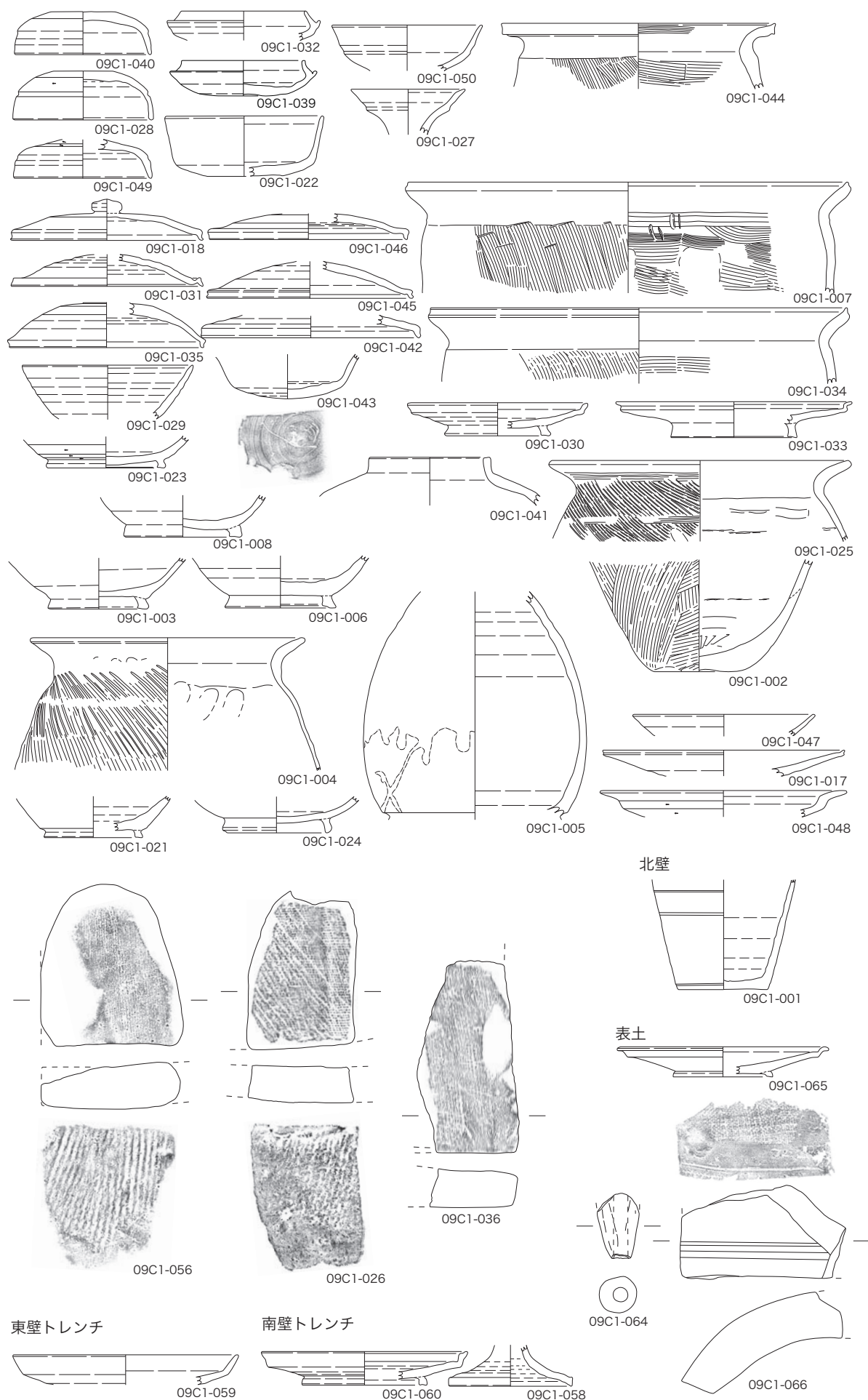
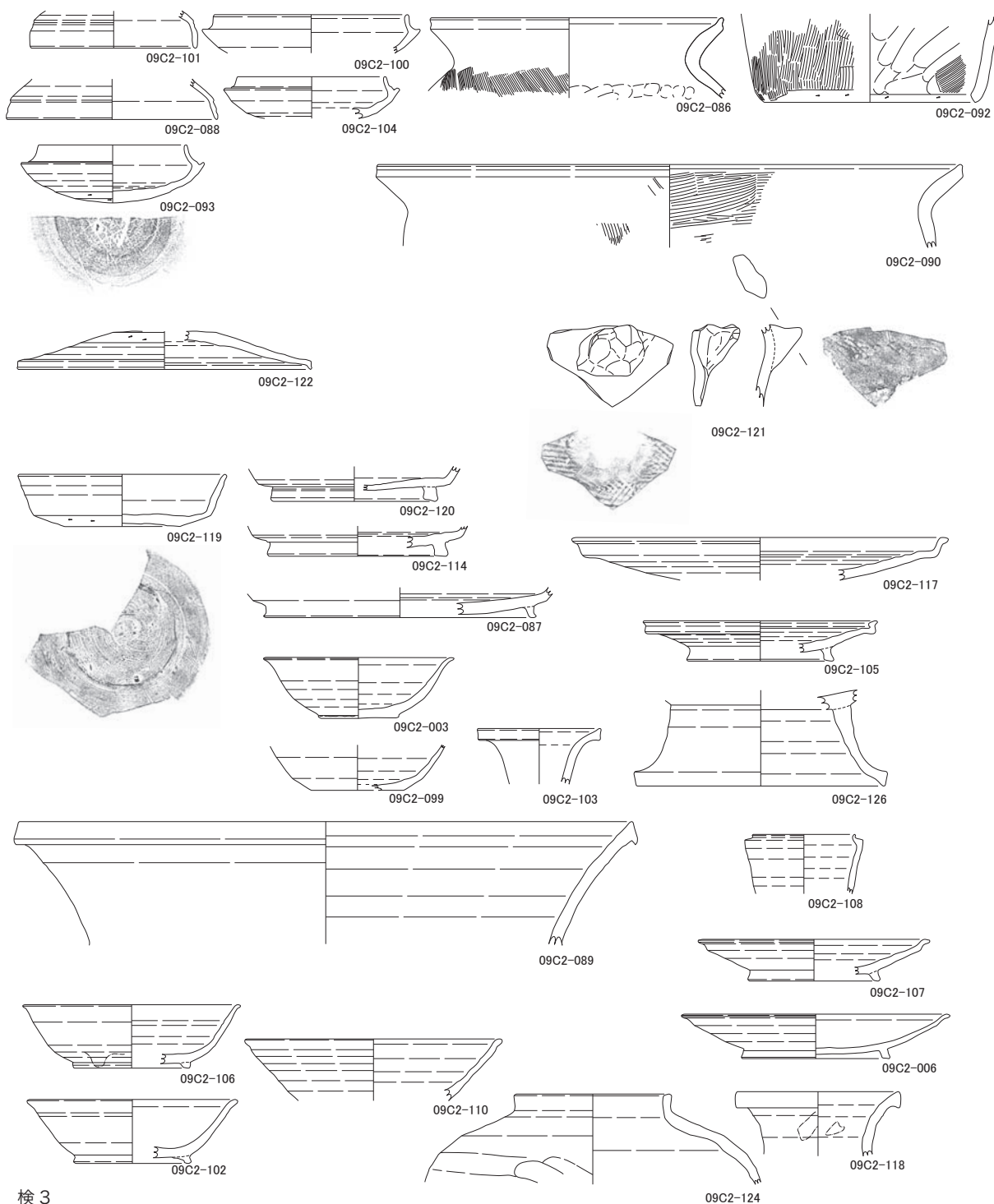


図 153 塔の越遺跡 09C 区遺構外出土遺物実測図 (1)

検 2



検 3

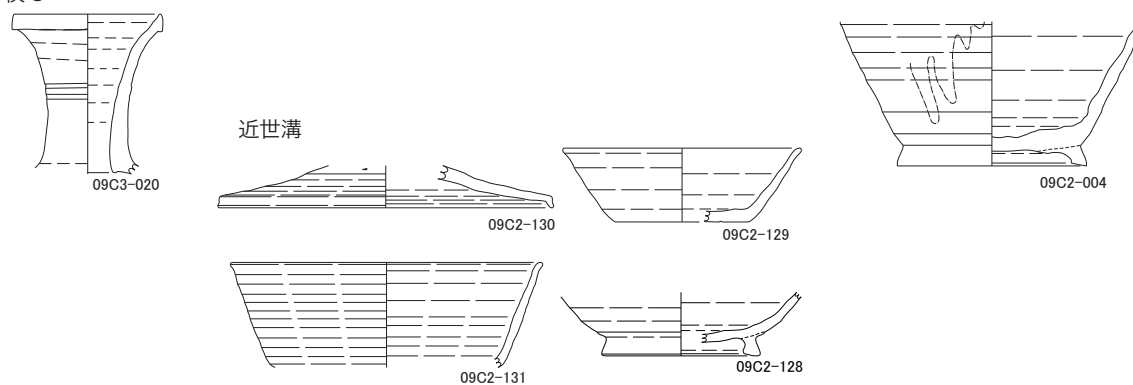


図 154 塔の越遺跡 09C 区遺構外出土遺物実測図 (2)



図 155 塔の越遺跡 08Aa-b-c 区・09B 区遺構図

08Ac区257SX

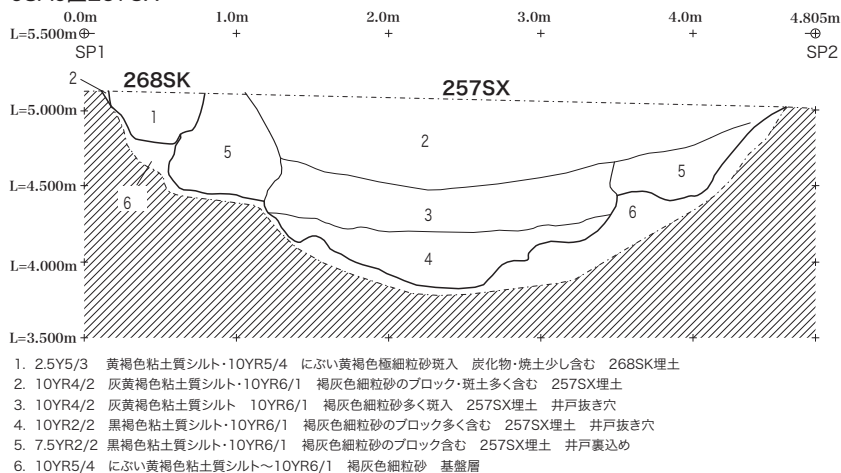


図 156 08Ac 区 257SX 土層セクション図

257SX

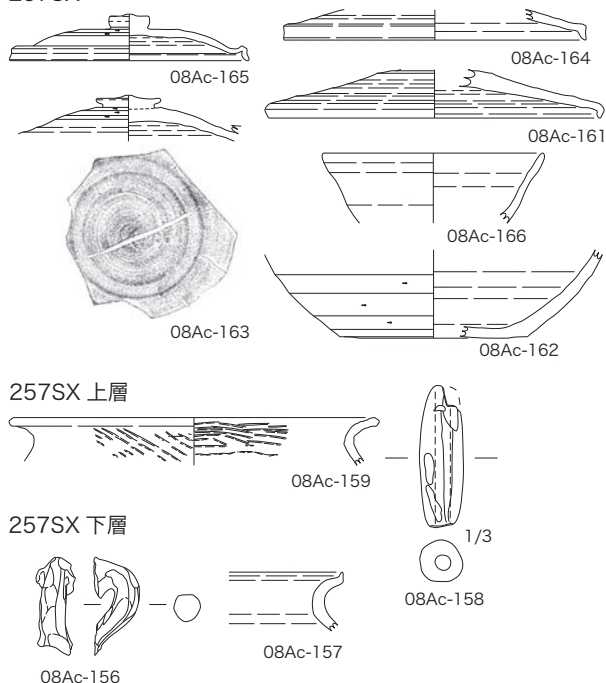


図 157 塔の越遺跡 08Ac 区 257SX 出土遺物実測図

● 08Aa 区・08Ac 区

08A 区は、出入口や作業ヤード確保等の都合上、極めて変則的な 3 小区分 (Aa・Ab・Ac) での調査となった。また、08Aa 区の西部と隣接する 08Ac 区はちょうど掘立柱建物群が密集する部分であったが、残念ながら住宅建設に際して地盤改良のために硬化作業が丁寧に加えられて堅固な地層となっており、遺構の検出が全く不可能であった。当該の硬化面は重機での掘削もままならず、隣接する飲食店等への振動によって被害を与える恐れがあり、そのためにやむなく調査対象から外した。そのために肝心な部分を逃したことは否めない。

両調査区の東部から 08Aa 区東部、09C 区にかけては近世から近代の開田によって地盤が大きく掘り下げられ、水田域における古代遺構の遺存は極僅かにとどまった。ただ、それでも掘立柱建物の柱穴に大きな深度差がなければ見つかるはずであり、むしろ軽微な建物の展開、もしくは空白域の存在を強く示唆するものと考えられる。

08Aa 区西部における古代の遺構群は、近世の区画溝や畝溝に著しく寸断されたが、中世から近世の柱穴は分布していないのでほとんどが古代に属すと判断する。

08Ac 区 333SE 円墳の周溝 149SD に重複して設けられている。堆積層の上層は自然埋没であり、その上部には整地層からなる 334SX が重複している。形状や堆積状況から古代でも古い時期に属すると推測され、7 世紀代に遡る可能性がある。

08Ac 区 257SX 径が 5m 近い大形の土坑である。堆積層は斑土からなり、一応、部材と思われる大形の板材が出土しているので「井戸」跡と推定している。遺構記号は「SX」だが、土層断面の注記は井戸を前提に記載している。周辺の建物群に先行する最古の遺構で、8 世紀後半に属す。

08Aa 区 075SD 東西に走り、西部では方墳の周溝 090SD 手前で北に折れる。幅は東では広いが西に向かって狭くなり、一定しない。断面も東部では逆台形だが、西部では円くなる。底面標高は北壁断面で高く、東で低くなる。

08Ac区 333SE

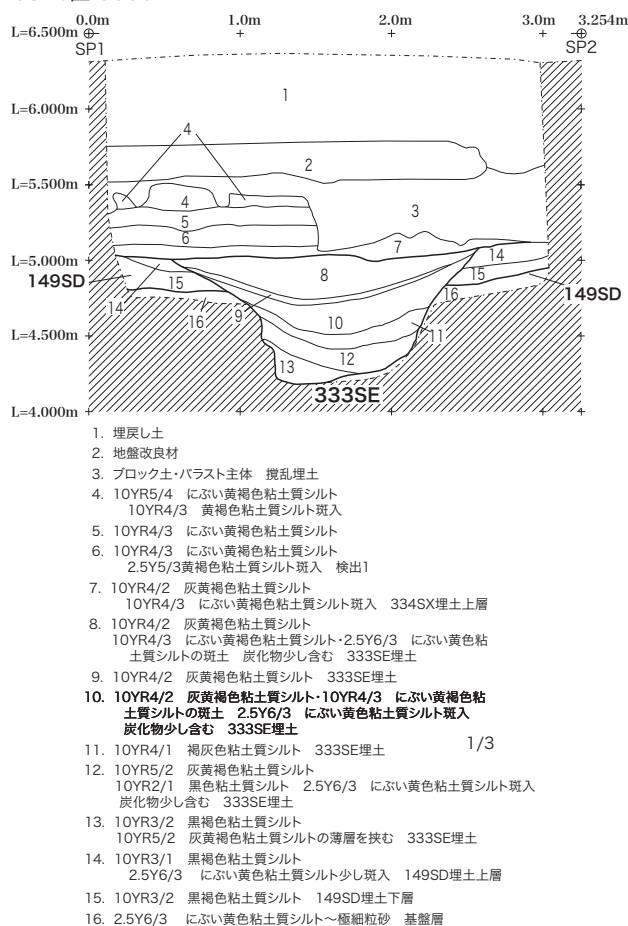


図 158 08Ac 区 333SE 土層セクション図

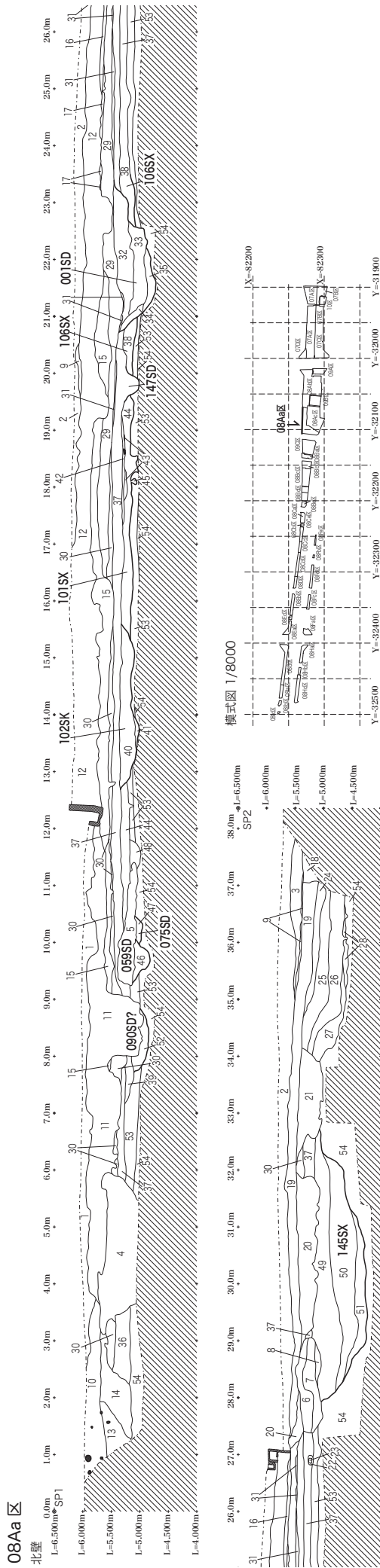


図 159 08Aa 区北壁土層セクション図

- | | | | | | | | | | |
|-------------|----------------|-------------------------|--------------------|-----------------------|--------------------|----------------|----------------|-----------------------|-------------|
| 1. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土質シルト | バラスト・ビニール製品・多く含む | 表土 | 27. 2.5Y5/2 | 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y4/1 | 黄灰色粘土土質シルトの斑土 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂 | 水田 |
| 2. 2.5Y5/3 | 黄褐色粘土質シルト | 10YR4/3にぶい黄褐色粘土土質シルトの斑土 | 表土 | 28. 5Y5/1 | 灰色粘土質シルト | 10YR5/4 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 水田 | |
| 3. 2.5Y5/3 | 黄褐色粘土質シルト | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルトの斑土 | 2層と一連 | 29. 10YR5/4 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR6/4 | にぶい黄褐色粘土土質シルトの斑土 | 炭化物少量含む |
| 4. 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘土質シルト | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色極細粒砂～細粒砂の細互層 | 表土・バラスト・塩化ビニール製品・水片含む | 30. 10YR5/4 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR7/4 | にぶい黄褐色粘土土質シルトの斑土 | 部分的に10YR4/3 |
| 5. 2.5Y4/1 | 黄灰色粘土土質シルト | 2.5Y3/1 | 黒褐色粘土土質シルト・多く含む | 掘乱埋土 | 31. 10YR7/3 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルトの細互層 | 洪水堆積層 |
| 6. 10YR5/4 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 2.5Y5/3 | 黄褐色粘土土質シルトの斑土 | 掘乱埋土 | 32. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 2.5Y6/2 |
| 7. 10YR5/4 | 黒褐色粘土土質シルト | 2.5Y5/3 | 黄褐色粘土土質シルトの斑土 | 掘乱埋土 | 33. 2.5Y5/2 | 暗灰黄色粘土土質シルト | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト・2.5Y6/3 | 炭化物少量含む |
| 8. 2.5Y4/3 | オレンジ褐色粘土土質シルト | 10YR5/3 | 黄褐色粘土土質シルトの斑土 | 掘乱埋土 | 34. 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 2.5Y6/2 | 炭化物極細粒砂の斑土 | 0.01SD埋土 |
| 9. 2.5Y7/3 | 淡黄褐色極細粒砂 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色極細粒砂の細互層 | 掘乱埋土 | 35. 2.5Y5/2 | 暗灰黄色粘土土質シルト | 10YR5/4 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 0.01SD埋土 |
| 10. 10YR5/4 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 2.5Y5/3 | 黄褐色粘土土質シルト | 掘乱埋土 | 36. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR5/4 | にぶい黄褐色極細粒砂の斑土 | 遺構埋土? |
| 11. 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR7/3 | 黒褐色粘土土質シルト | 掘乱埋土 | 37. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR5/4 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR6/4 |
| 12. 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR7/3 | にぶい黄褐色極細粒砂・10YR3/1 | 黒褐色粘土土質シルト | 38. 10YR4/2 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR5/1 | 褐色極細粒砂 | 10YR6/4 |
| 13. 10YR3/1 | 黒褐色粘土土質シルト | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色粘土土質シルトのブロック | 掘乱埋土 | 39. 10YR4/2 | 炭化物を含む | 深い部分 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色極細粒砂 |
| 14. 10YR4/4 | 褐色粘土土質シルト | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 2.5Y6/3 | 40. 10YR4/2 | 炭化物粘土土質シルト | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR6/4 |
| 15. 10YR4/4 | 褐色粘土土質シルト | 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 掘乱埋土 | 41. 10YR3/2 | 黒褐色粘土土質シルト | 10YR6/4 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 10YR6/4 |
| 16. 2.5Y7/3 | 淡黄褐色極細粒砂 | 2.5Y4/3 | オレンジ褐色粘土土質シルトの薄層 | 掘乱埋土 | 42. 10YR3/2 | 黒褐色粘土土質シルト | 10YR5/1 | 褐色極細粒砂 | 10YR5/1 |
| 17. 2.5Y7/2 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 2.5Y5/3 | 黄褐色粘土土質シルトの細互層 | 掘乱埋土 | 43. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR5/1 | 褐色極細粒砂 | 10YR5/1 |
| 18. 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘土土質シルトの斑土 | 掘乱埋土 | 掘乱埋土 | 44. 10YR2/1 | 黒色粘土土質シルト | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR5/1 | 褐色極細粒砂 |
| 19. 10YR5/4 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 2.5Y5/3 | 黄褐色粘土土質シルトの斑土 | 掘乱埋土 | 45. 10YR2/1 | 黒色粘土土質シルト | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR5/1 |
| 20. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色極細粒砂 | 掘乱埋土 | 46. 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 2.5Y6/3 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 0.05SD埋土 |
| 21. 2.5Y4/3 | オレンジ褐色粘土土質シルト | 10YR5/4 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 掘乱埋土 | 47. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR6/4 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 0.07SD埋土 |
| 22. 2.5Y5/3 | 黄褐色粘土土質シルト | 掘乱埋土 | 掘乱埋土 | 48. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 10YR6/4 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 10YR6/4 | 遺構埋土 |
| 23. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 遺構埋土 | 遺構埋土 | 49. 2.5Y5/1 | 黄灰色粘土土質シルト | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘土土質シルトの斑土 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色極細粒砂 |
| 24. 2.5Y5/2 | 炭化物粘土土質シルト | 5Y4/1 | 灰色粘土土質シルト | 2.5Y6/3 | 50. 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘土土質シルト | 10YR5/4 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 1.45SD埋土 |
| 25. 2.5Y5/2 | 炭化物粘土土質シルト | 5Y5/2 | 灰オレンジ色粘土土質シルト | 水田 | 51. 10YR3/2 | 黒褐色粘土土質シルト | 10YR5/4 | にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂のブロック | 1.45SD埋土 |
| 26. 2.5Y5/1 | 灰色粘土土質シルト | 2.5Y4/1 | 黄灰色粘土土質シルト | 水田 | 52. 10YR3/1 | 黒褐色粘土土質シルト | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色極細粒砂 | 0.90SD埋土? |
| 27. 5Y5/1 | 黄灰色粘土土質シルト | 2.5Y4/1 | 黄灰色粘土土質シルト | 水田 | 53. 10YR5/4 | にぶい黄褐色極細粒砂 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘土土質シルト | 掘乱埋土 |
| 28. 5Y5/1 | 黄灰色粘土土質シルト | 2.5Y4/1 | 黄灰色粘土土質シルト | 水田 | 54. 10YR5/4 | にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂 | 遺構埋土 | | |

08Aa区075SD

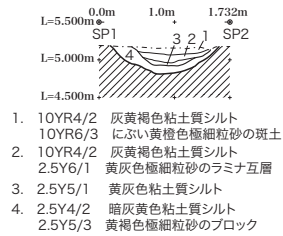


図 160 塔の越遺跡
08Aa 区 075SD
土層セクション図

075SD

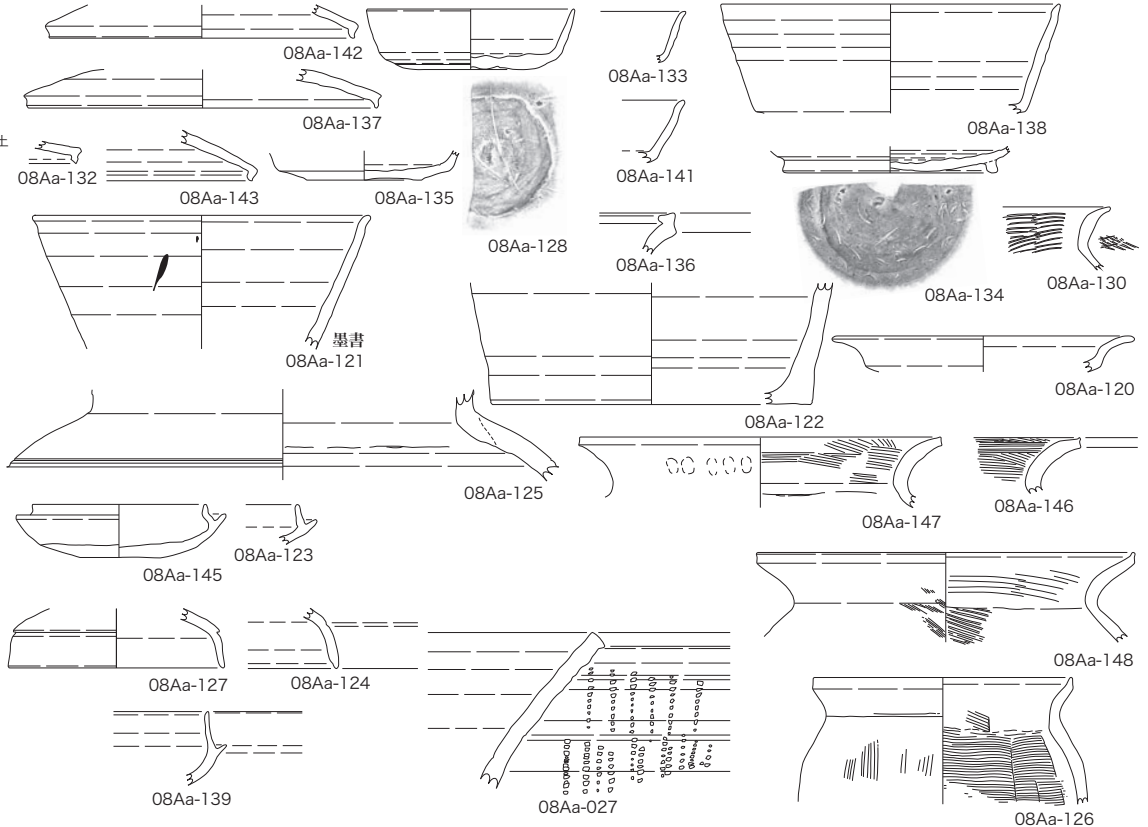


図 161 塔の越遺跡 08Aa 区 075SD 出土遺物実測図

堆積層は再掘削の様相を示し、再掘削後の中層にはラミナも形成されているので、北から東に流れるような水流があったとすれば、調査区北側エリアの旧地表面標高が高かったことを示す。8 世紀後半に属す。

08Ac 区 271SK・208SX 柱穴群の下部で検出された溝状と皿状の落ち込み群から構成される。271SK は長方形の輪郭は明瞭で、底面も平坦だが、208SX は起伏があり、輪郭は不定形で一定しない。

08Ac区Fライン

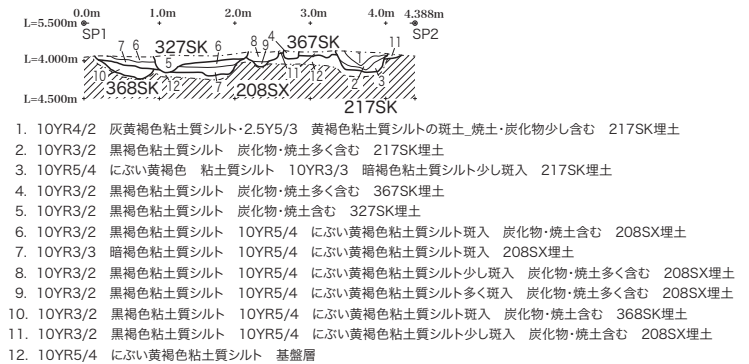


図 162 塔の越遺跡 08Ac 区 F ライン土層セクション図

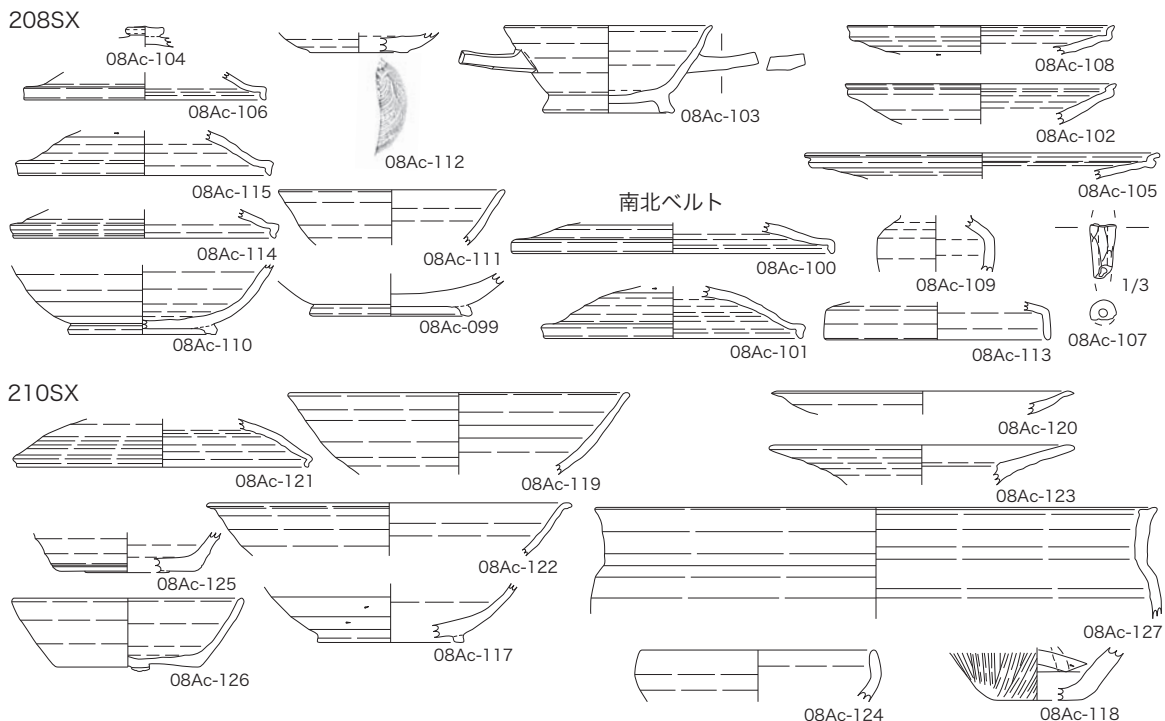


図 163 塔の越遺跡 08Ac 区 208SX・210SX 出土遺物実測図

堆積層は炭化物や焼土を含む斑土からなり、重複している土坑群も同様である。8世紀後半に属する。

08Ac区 210SX 東西に長い方形の落ち込みで、底面には凹凸があり、堆積層も含めて208SXに共通している。

08Ac区 334SX 円墳の周溝149SDの上部を整えた深さ約30cmを測る溝状の遺構で、北側は墳丘にも及んで、幅は4mほどである。堆積層は斑土で、炭化物等は含まない。円墳の墳丘裾の整形を含めた、周辺の建物群構築に伴う整地跡の可能性が高い。

08Ac区 270SX 焼土の詰まった土坑で、出土した須

08Ac区149SD・334SX・335SK

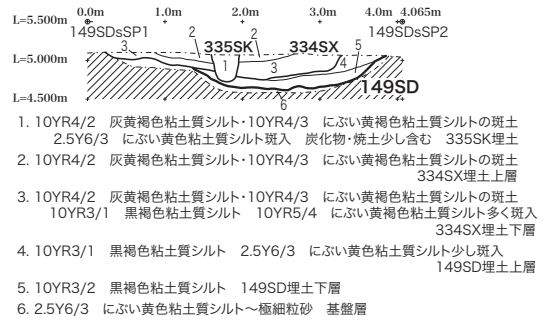


図164 塔の越遺跡 08Ac区 334SX 他土層セクション図

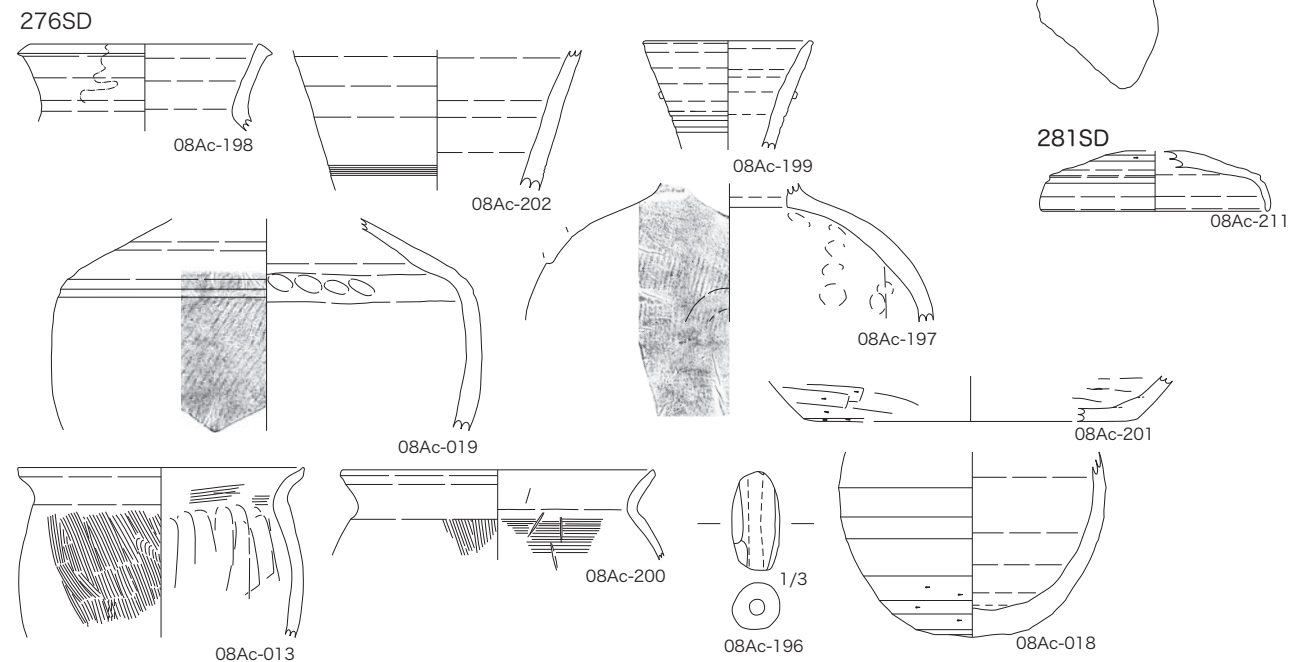


図165 塔の越遺跡 08Ac区 266・276・281SD 出土遺物実測図

恵器類も疲熱して変色していた。推定復元ではあるが[建物1]の南面廂の柱穴の位置にあり、柱を抜き取った後に何らかの行為が行われたものと判断する。8世紀後半に属する。

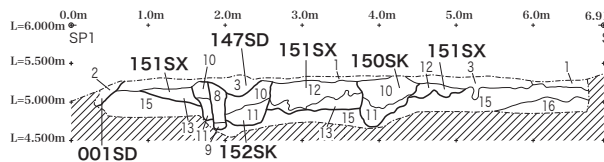
08Ac区 266SD 北西から南東に走る溝で、カマドの支脚片が出土している。灰釉陶器碗が出土しているが小片で、混入であろう。多くの遺構に切られており、8世紀代に属すであろう。

08Ac区 276SD 断面は、中央付近は逆台形だが、南部では円くなる。257SX付近で屈曲して終息する。7世紀に属すとすれば最古段階で、古墳周溝も埋ま

り切らないで、痕跡を残している時期である。

08Ac区 281SD 北西から南東に走る溝である。出土

08Aa区Bライン



- 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトのブロック既存建物建設時の攪乱埋土
- 10YR5/3 にふい黄褐色粘土質シルト・2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂斑土 001SD埋土
- 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト斑土 炭化物少量含む 検出1 147SD埋土
- 10YR5/1 褐灰色極細粒砂・10YR4/3・にふい黄褐色粘土質シルト・10YR6/4 にふい黄褐色極細粒砂斑土 炭化物少量含む 101SX埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR5/3 にふい黄褐色極細粒砂の斑土・10YR3/2 黒褐色粗粒砂～細粒斑土 075SD埋土
- 10YR6/2 灰黄褐色極細粒砂・10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト斑土 粗粒砂～細粒斑土 075SD埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂の斑土・10YR3/2 黒褐色粗粒砂～細粒斑土 075SD埋土
- 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 10YR6/2 灰黄褐色極細粒砂斑土 遺構埋土
- 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト・2.5Y7/1 灰白色極細粒砂のラミナを挟む 遺構埋土
- 5Y6/1 灰色粘土質シルト・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト斑土 150SK・152SK埋土
- 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト・2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂のブロック含む 150SK・152SK埋土
- 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 151SX埋土
- 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 151SX埋土
- 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト・10YR5/1 褐灰色極細粒砂 10YR6/4 にふい黄褐色極細粒砂斑土 検出2
- 2.5Y6/3 にふい黄色粘土質シルト 基盤層
- 10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂～細粒砂 基盤層

08Aa区Cライン

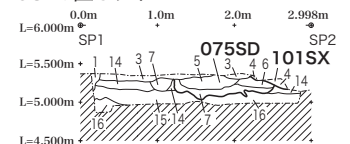
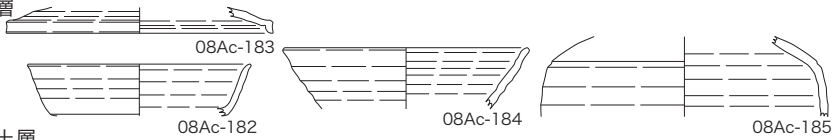
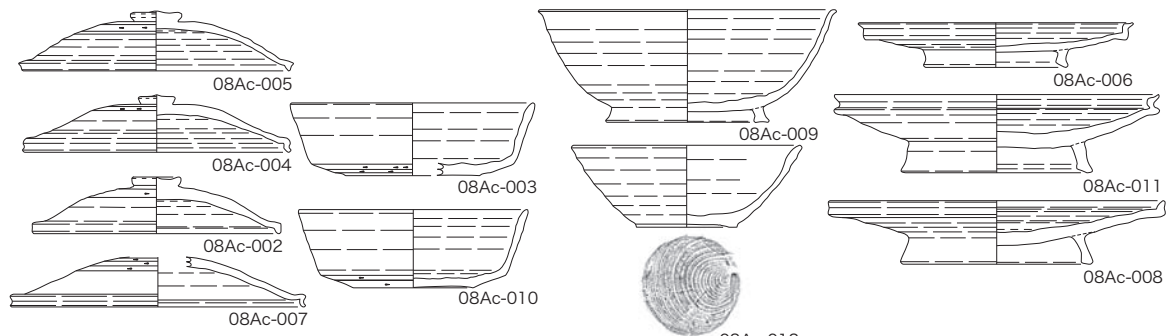


図166 塔の越遺跡 08Aa区 B・Cライン土層セクション図

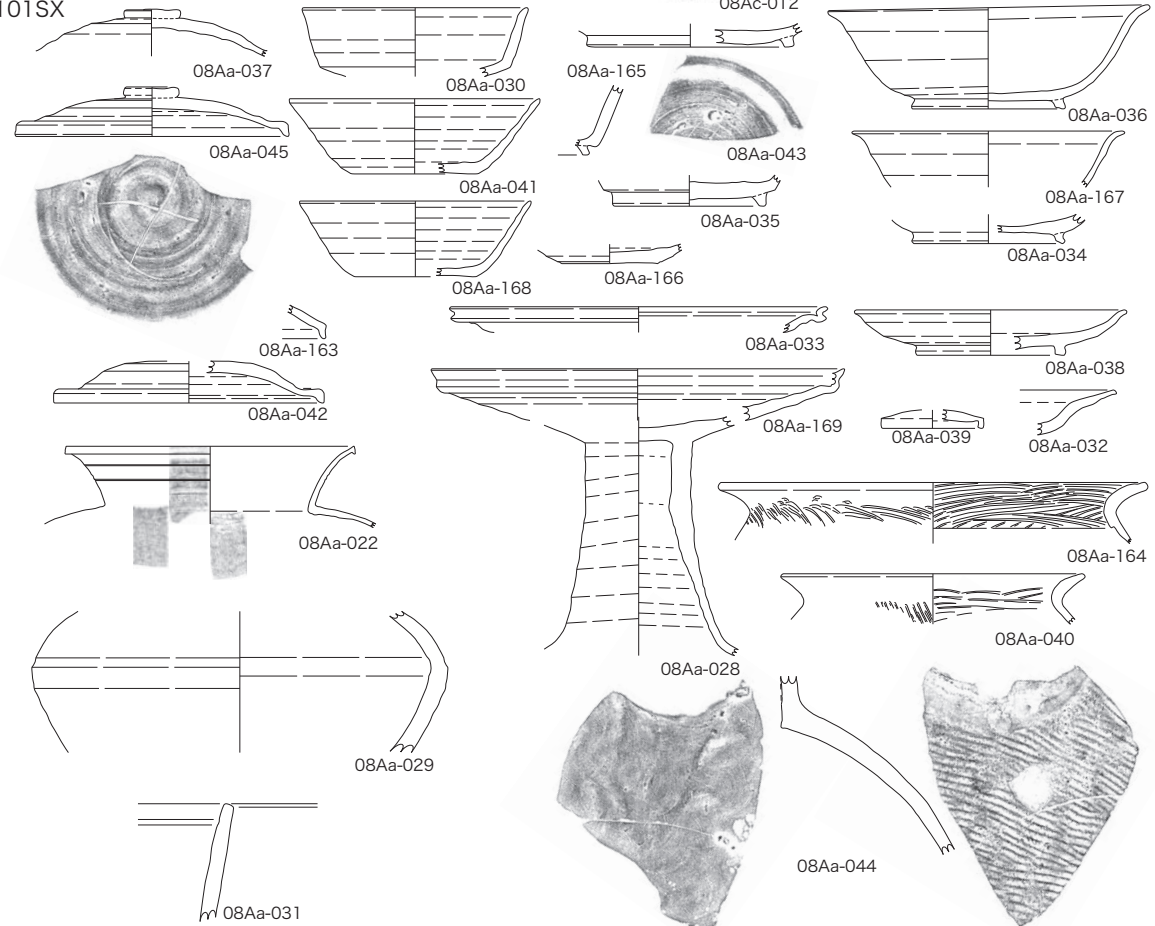
270SX 上層



270SX 焼土層



101SX



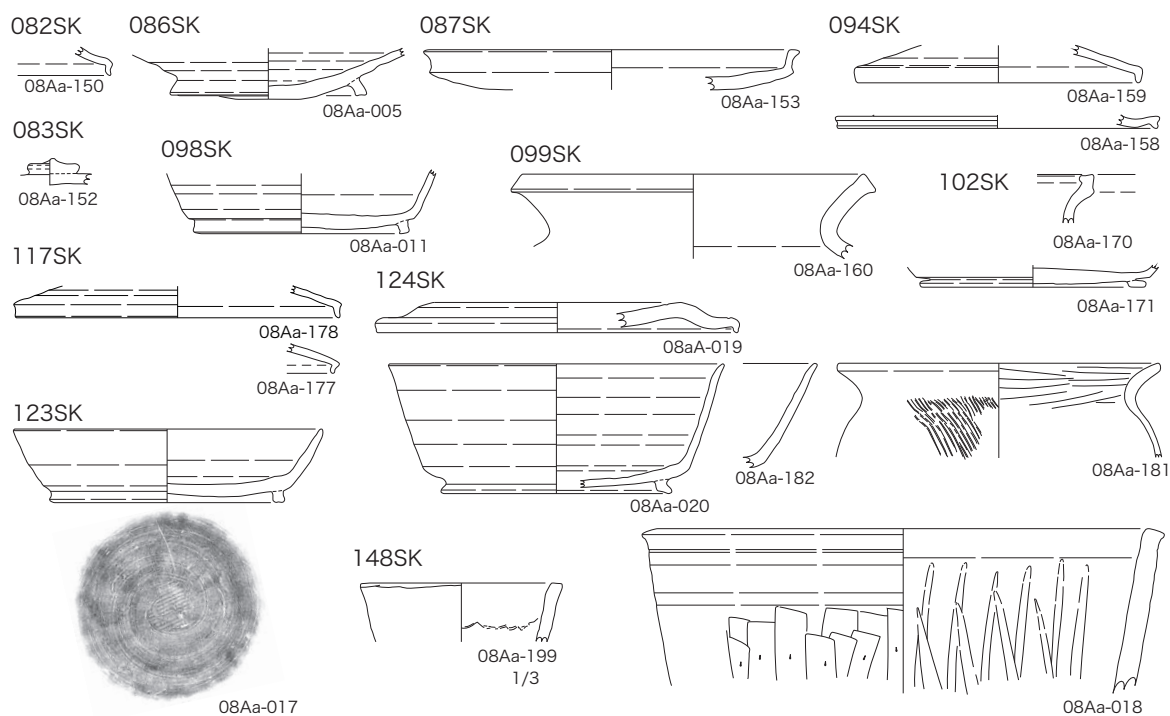


図 168 塔の越遺跡 08Aa 区出土遺物実測図

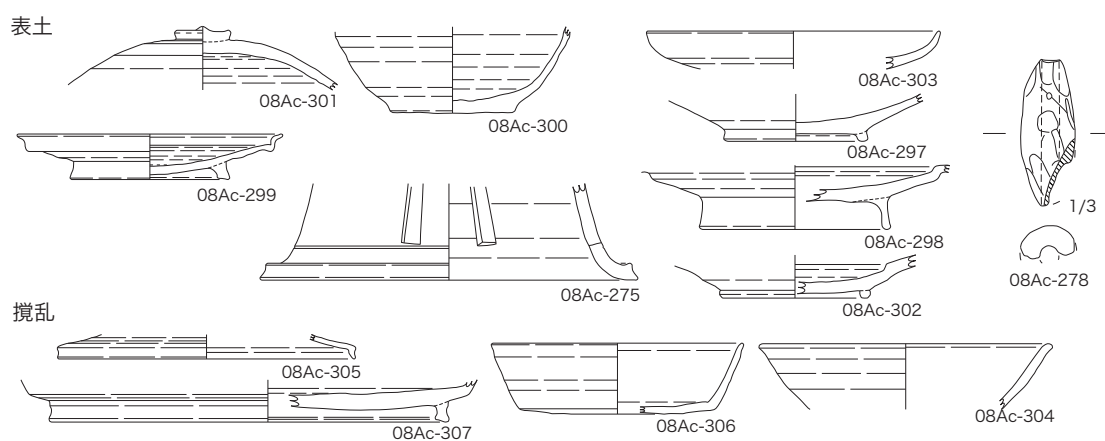


図 169 塔の越遺跡 08Ac 区出土遺物実測図

遺物は7世紀中頃だが、266SDと並走する点が気にかかる。

08Aa 区 101SX 08Aa 区の北部で、南辺が075SDと重複するように検出された。東部のプランは方形を呈し、底面も平坦であり炭化物の薄層を伴い竪穴建物跡の堆積層に類似するが、南西隅は西に突出して、とても竪穴建物の輪郭にはならない。

須恵器や灰釉陶器の破片が炭化物や焼土塊とともに幾つかのまとまりに分かれて集積していた。上部の削平を考慮すれば、廃棄土坑の底面付近を調査したことになるのかもしれない。

なお、大形甕は7世紀に属し、隣接する円墳の最終段階に伴うものであり、それが平安時代の造成に際して墳丘が削平されて出土した際に片付けられた可能性がある。

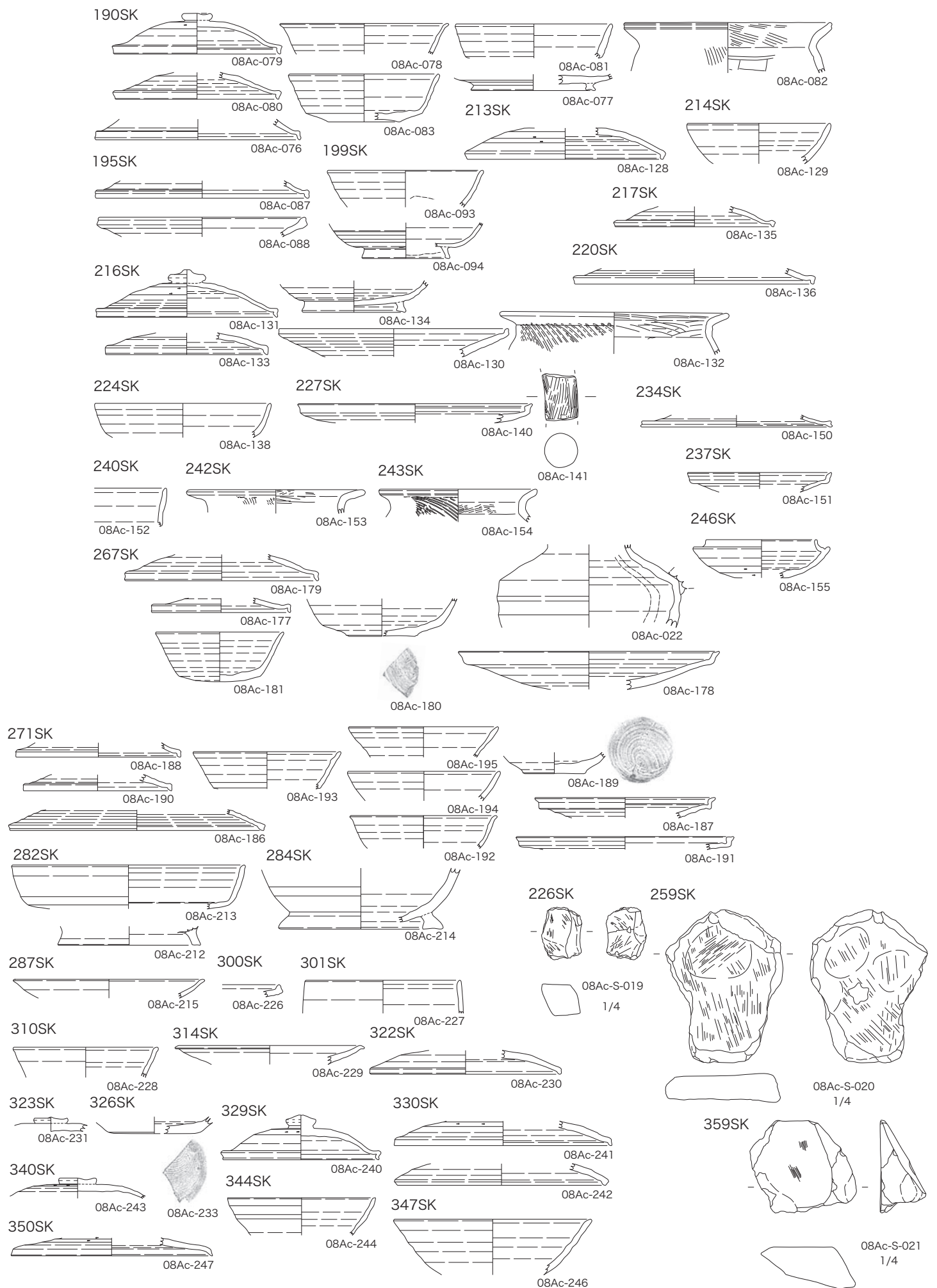
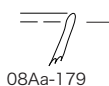


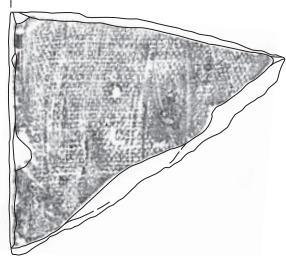
図 170 塔の越遺跡 08Ac 区出土遺物実測図

08Aa 区

121SD

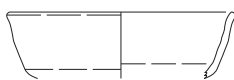


08Aa-179



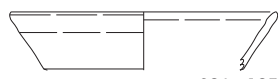
08Aa-180

129SD

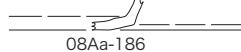


08Aa-183

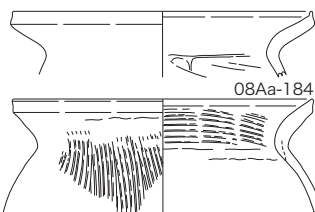
130SD



08Aa-185



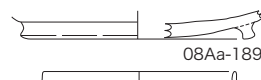
08Aa-186



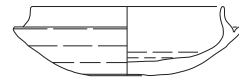
08Aa-184

08Aa-187

141SD



08Aa-189



08Aa-188

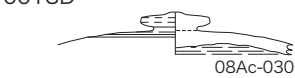
143SD



08Aa-191

08Ac 区

001SD



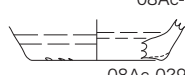
08Ac-030



08Ac-024



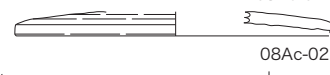
08Ac-028



08Ac-029



08Ac-027



08Ac-025

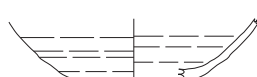


08Ac-026

147SD



08Ac-042



08Ac-039

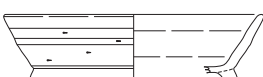


08Ac-041

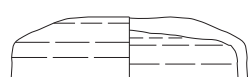


08Ac-040

183SD



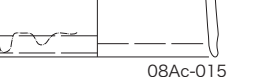
08Ac-074



08Ac-015



08Ac-071



08Ac-065



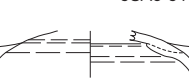
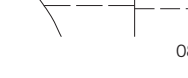
08Ac-067



08Ac-072



08Ac-066



08Ac-062



08Ac-014



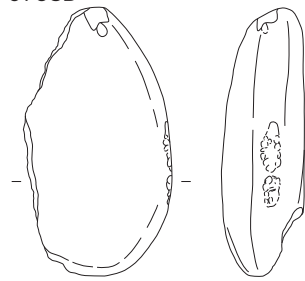
08Ac-069



08Ac-068

図 171 塔の越遺跡 08Aa 区・Ac 区：近世以降の遺構から出土した古代遺物実測図

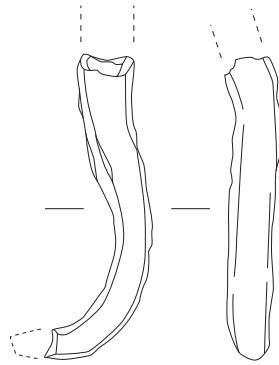
075SD



08Aa-S-014

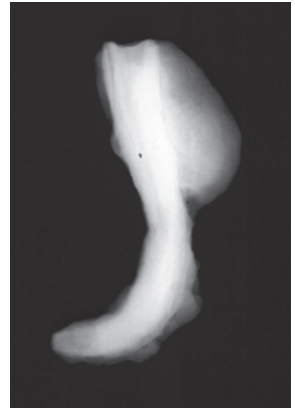
1/4

検 2

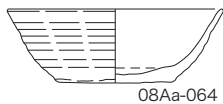


08Aa-M-002

1/1



001SD

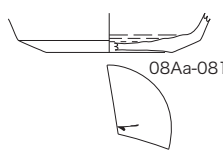


08Aa-064

003SD

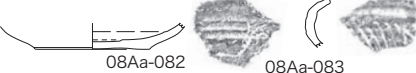


011SD



08Aa-081

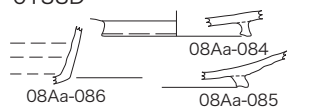
012SD



08Aa-082

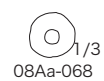
08Aa-083

013SD



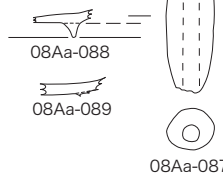
08Aa-086

08Aa-085



08Aa-068

014SD

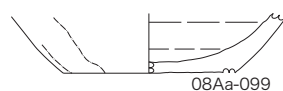


08Aa-088

08Aa-089

08Aa-087

027SD



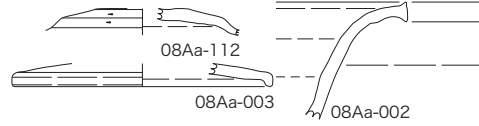
08Aa-099

037SD



08Aa-102

055SD

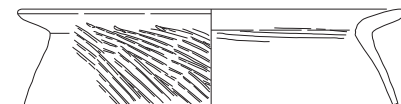


08Aa-112

08Aa-003

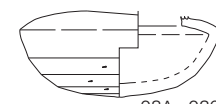
08Aa-002

043SD



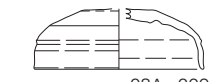
08Aa-006

059SD



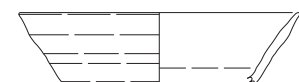
08Aa-026

067SD



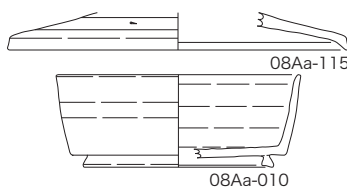
08Aa-009

068SD



08Aa-116

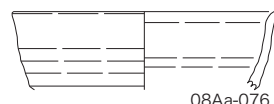
064SD



08Aa-115

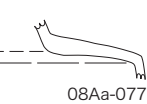
08Aa-010

004SK



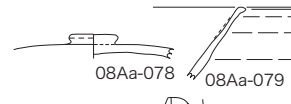
08Aa-076

006SK



08Aa-077

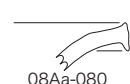
007SK



08Aa-078

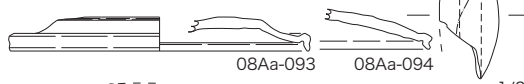
08Aa-079

010SK



08Aa-080

016SK

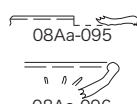


08Aa-093

08Aa-094

1/3

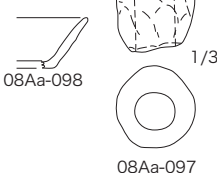
022SK



08Aa-095

08Aa-096

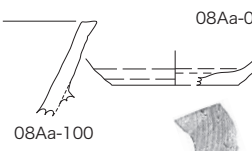
025SK



08Aa-098

08Aa-097

032SK

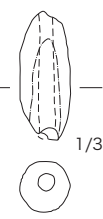


08Aa-092

08Aa-100

1/3

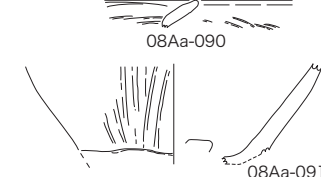
038SK



08Aa-091

08Aa-103

018SK



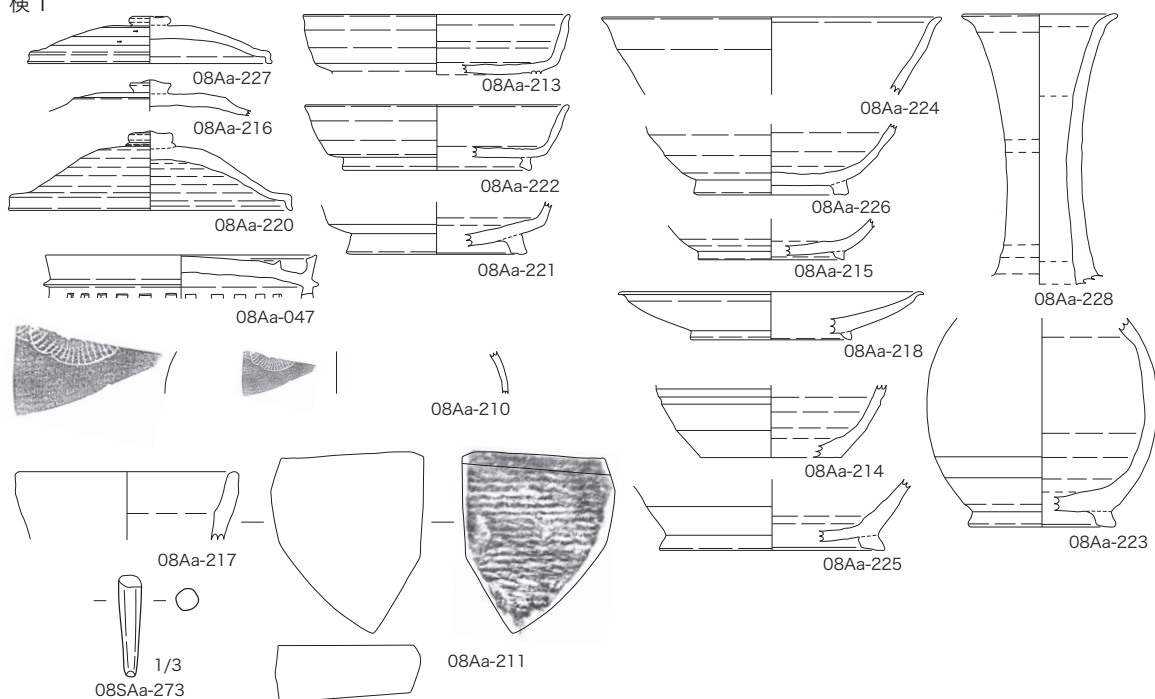
08Aa-090

08Aa-091

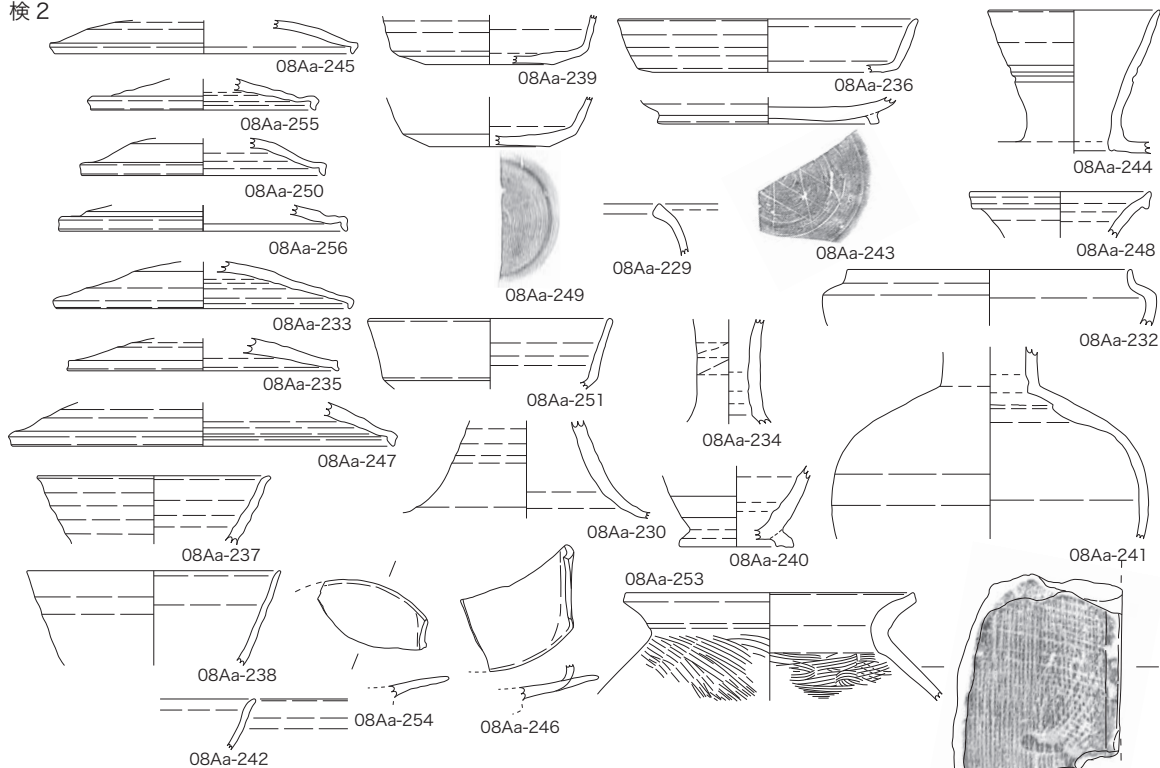
08Aa-101

図 172 塔の越遺跡 08Aa 区：近世以降の遺構から出土した古代遺物実測図

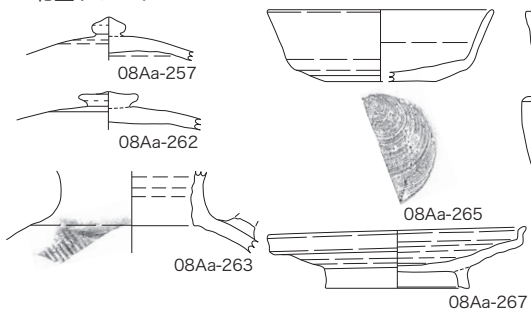
検1



検2



北壁トレンチ



製塩土器坏部片

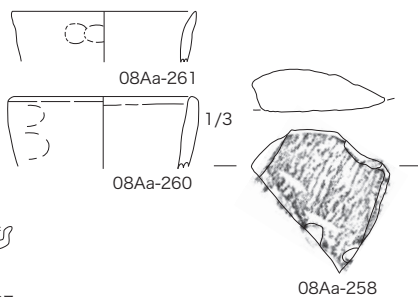


図173 塔の越遺跡 08Aa 区遺構外出土遺物実測図

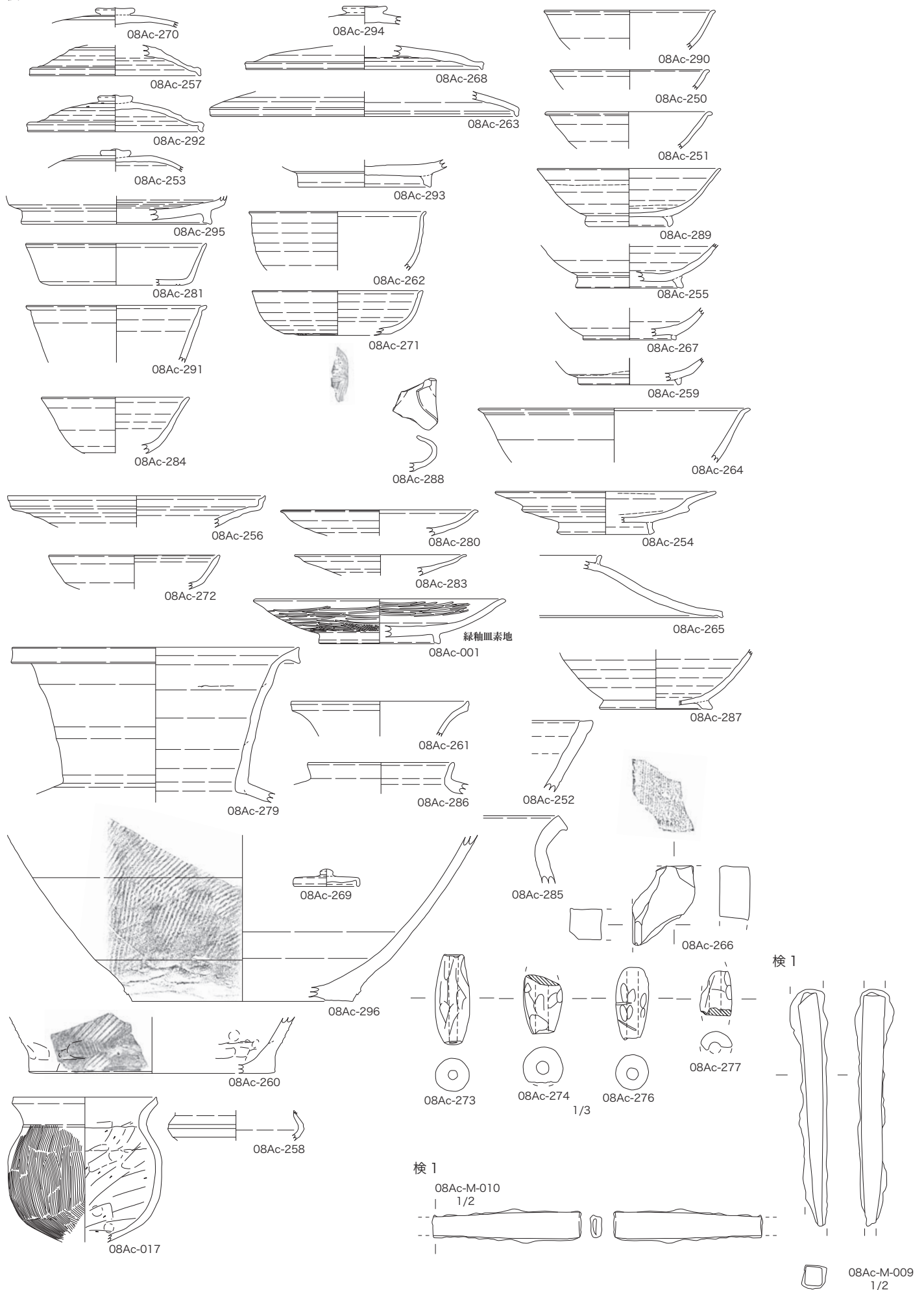


図 174 塔の越遺跡 08Ac 区遺構外出土遺物実測図

● 09B 区

遺構は近現代の開田と天地返しによる土坑群によって大きな破壊を蒙っている。

112SE 調査区南壁際で検出した。最下部は一段深く落ち込み、滬斗状断面に類似する。しかし、

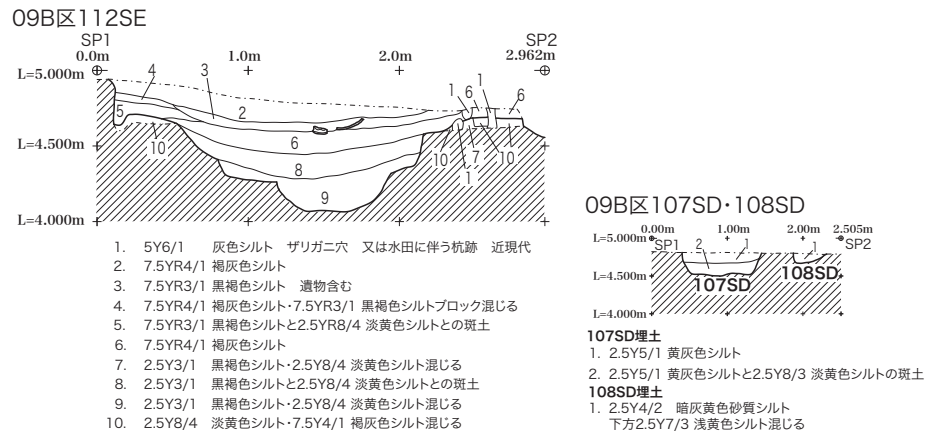


図 175 09B 区遺構土層セクション図

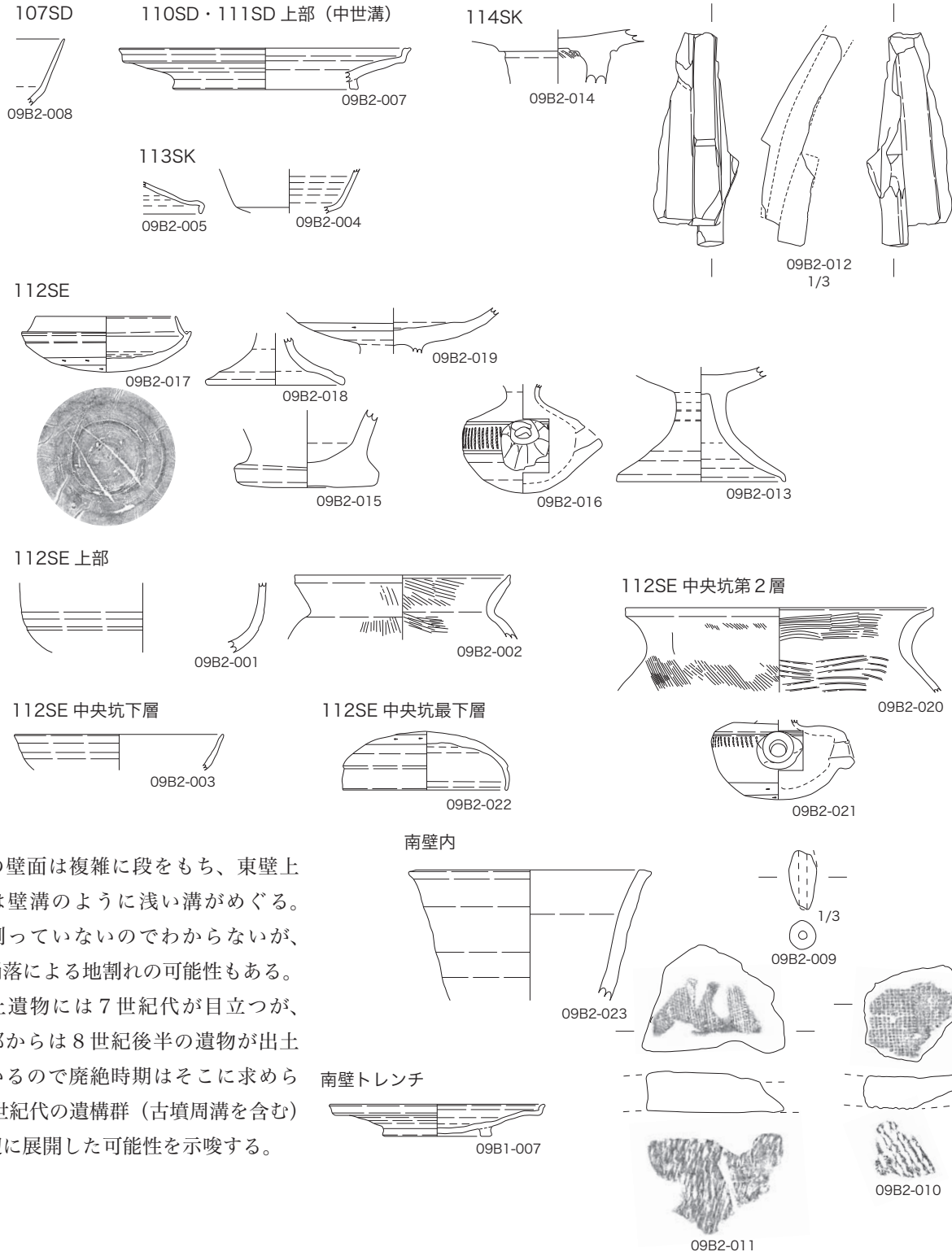


図 176 塔の越遺跡 09B 区出土遺物実測図

周囲の壁面は複雑に段をもち、東壁上段には壁溝のように浅い溝がめぐる。断ち割っていないのでわからないが、壁面崩落による地割れの可能性もある。

出土遺物には7世紀代が目立つが、最下部からは8世紀後半の遺物が出土しているので廃絶時期はそこに求められ、7世紀代の遺構群（古墳周溝を含む）が周辺に展開した可能性を示唆する。



図 177 塔の越遺跡 08Aa 区・Ac 区掘立柱建物等配置図

[08A 区建物 1] 08Ac 区西端に位置する。257SX より新しく、270SX が柱穴に重複する。東西長軸の 2 間 × 3 間で、棟持柱はやや北にずれている。そのまわりにも東西辺で東西軸の柱通りを揃え、南北両辺では微妙にずれる柱穴列があったが、四面廂付掘立柱建物に復元した。棟持柱を結ぶラインの柱穴は東柱と推測する。

柵 1・2・4、建物 2、建物 5、柵 5・6 と軸線を共有する。

270SX は後述するように焼土と須恵器類がまをもって出土した土坑であり、直接「柱穴」と認定できる要件は満たさないが、位置関係から柱を抜いた後の行為に関わるものと推測する。

[08A 区建物 2] 建物 1 の東に接する東西長軸の 1 間 × 2 間の小規模な建物である。南東隅の柱穴は近現代溝と重複して不明である。

[08A 区建物 3] 建物 1 の北側に位置する。08Ac 区

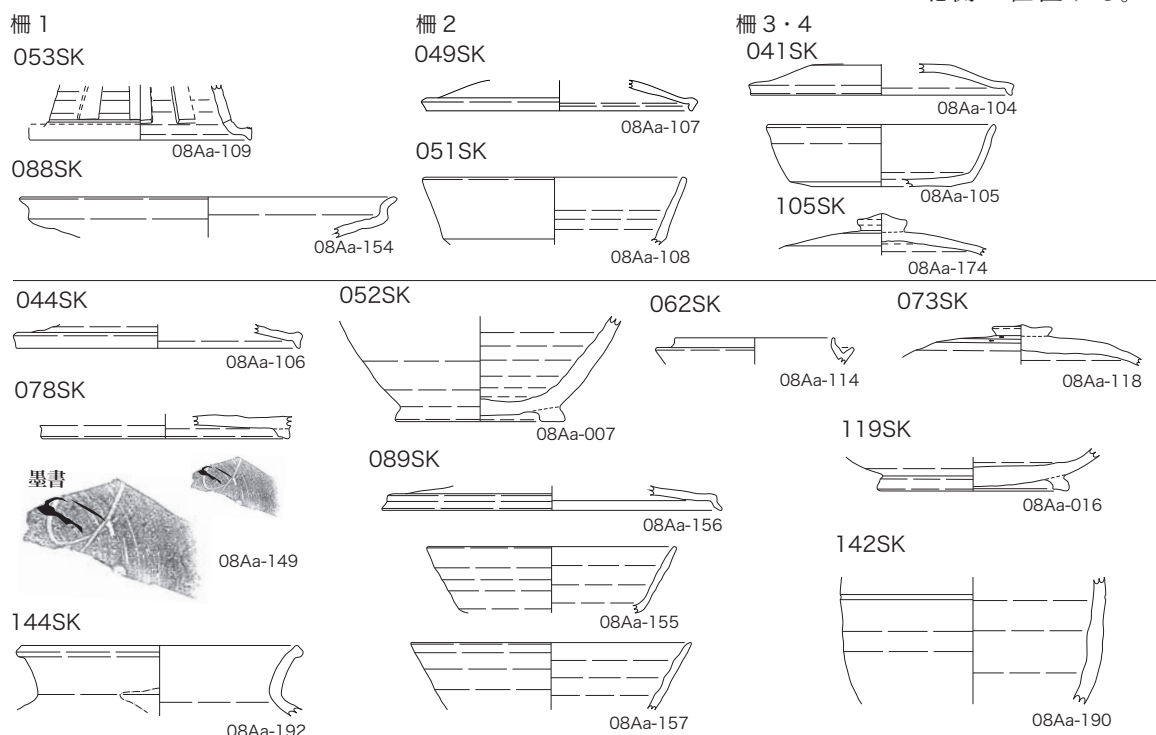
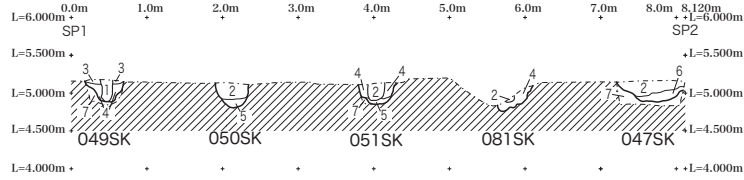


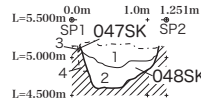
図 178 塔の越遺跡 08Aa 区柱穴出土遺物及び遺構出土遺物実測図

08Aa区Aライン：柵2



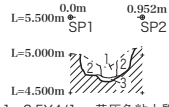
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂の斑土 049SK埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂斑入 炭化物少量含む 050SK・051SK・081SK・047SK埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂斑入 049SK埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂の斑土 049SK・051SK・081SK埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂斑入 050SK・051SK埋土
- 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂～細粒砂 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトのブロック含む 047SK埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂 基盤層

08Aa区048SK



- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂斑入 炭化物含む 048SK埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂の斑土 炭化物少量含む 048SK埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂斑入 炭化物少量含む 047SK埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂 基盤層

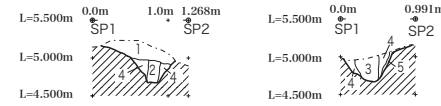
08Aa区108SK：柵4



- 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂斑入
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂・2.5Y5/3 黄褐色細粒砂斑入 炭化物含む
- 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂斑入

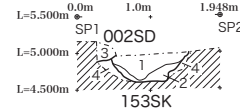
柵3・4

08Aa区041SK-東西1 08Aa区041SK-東西2



- 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土質シルト・2.5Y6/3 にぶい黄褐色極細粒砂の斑土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・5Y4/1 灰色極細粒砂斑土
- 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3・黄褐色極細粒砂の斑土
- 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂斑入
- 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂

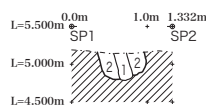
08Aa区153SK



- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂斑入 炭化物含む 153SK埋土
- 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂のブロック主体 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂斑入 153SK埋土
- 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂斑入 002SD埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂 基盤層

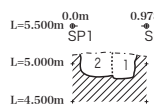
図 179 塔の越遺跡 08Aa 区遺構土層セクション図

柵5 08Ac区226SK



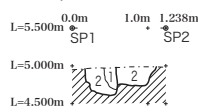
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂斑入 炭化物含む 226SK埋土
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルトの斑土 226SK埋土

08Ac区229SK



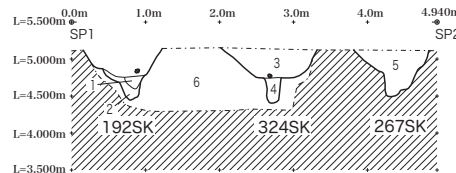
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト斑入 炭化物・焼土含む 229SK埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土 229SK埋土

08Ac区286SK



- 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト・10YR4/1 褐灰色粘土質シルトの斑土 炭化物含む 286SK埋土
- 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルトの斑土 炭化物多く含む 286SK埋土

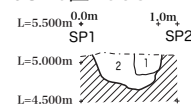
08Ac区Hライン：建物3



- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト 192SK埋土
- 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト 192SK埋土
- 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルト少し斑入 324SK埋土
- 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト 324SK埋土
- 2.5Y5/3 黄褐色シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂斑入 炭化物・焼土少し含む 267SK埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト～2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂 基盤層

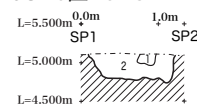
建物5

08Ac区295SK



- 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト 2.5Y6/3 にぶい 黄色粘土質シルト少し斑入 炭化物少し含む 295SK埋土
- 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y6/3 にぶい 黄色粘土質シルトの斑土 炭化物・焼土含む 295SK埋土

08Ac区297SK



- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・10YR2/1 黒色粘土質シルトの斑土 炭化物・焼土含む 297SK埋土
- 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y6/3 にぶい 黄色粘土質シルトの斑土 炭化物多く含む 297SK埋土

図 180 塔の越遺跡 08Ac 区遺構土層セクション図

324SK・265SK は上部の大規模な掘形から一段下がつて柱穴が設けられている。柵3と軸線を共有する。

[08A 区建物4] 北辺の4本を確認したのみである。軸線を共有する建物は他に無い。

[08A 区建物5]4本柱の建物である。柱痕は明確だが、その底面は掘形から浮いており、根石も無いので、上屋に重量があった形跡はない。掘形の大きさからみて堅穴建物の支柱とも思えない。「祠堂」のような簡易な建物であったろう。

[08a 区柵1・2] 東西軸で隣接する。柱穴には切り合いがあり、順序は柵1→柵2となる。

[08A 区柵3・4]08Aa 区153SKを共有し、軸線が振れ

る。柵3は建物3と軸線が共通する。105SK・041SK・153SKは掘形が大規模である。105SKは掘形に明らかな重複が認められ、041SKは2つの柱痕を確認したが先後は確認できなかった。

[08A 区柵5・6] 東西軸の柵列で、軸線は建物5に一致する。柵6は建物5と柵5の間にあって、小径の309SKを中央に228SKと227SKが建物5の東西辺と柵5の286SKと229SKを結ぶ位置にあり、三者の関連性を示している。柵6の309SKに注目すれば、両開きの扉をもつ「門」を想定できるかもしれない。

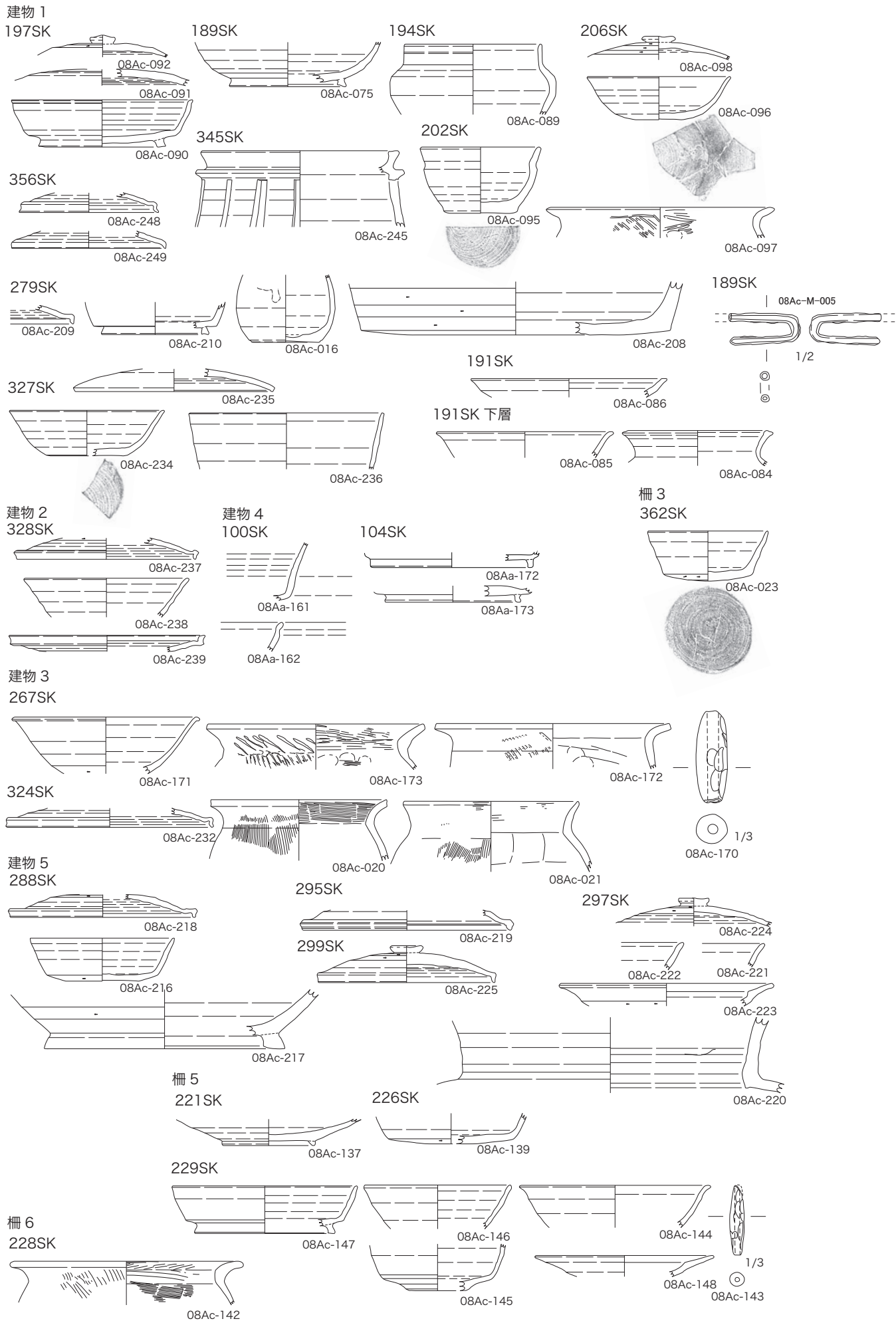


図 181 塔の越遺跡 08Ac 区建物・柵等柱穴出土遺物実測図

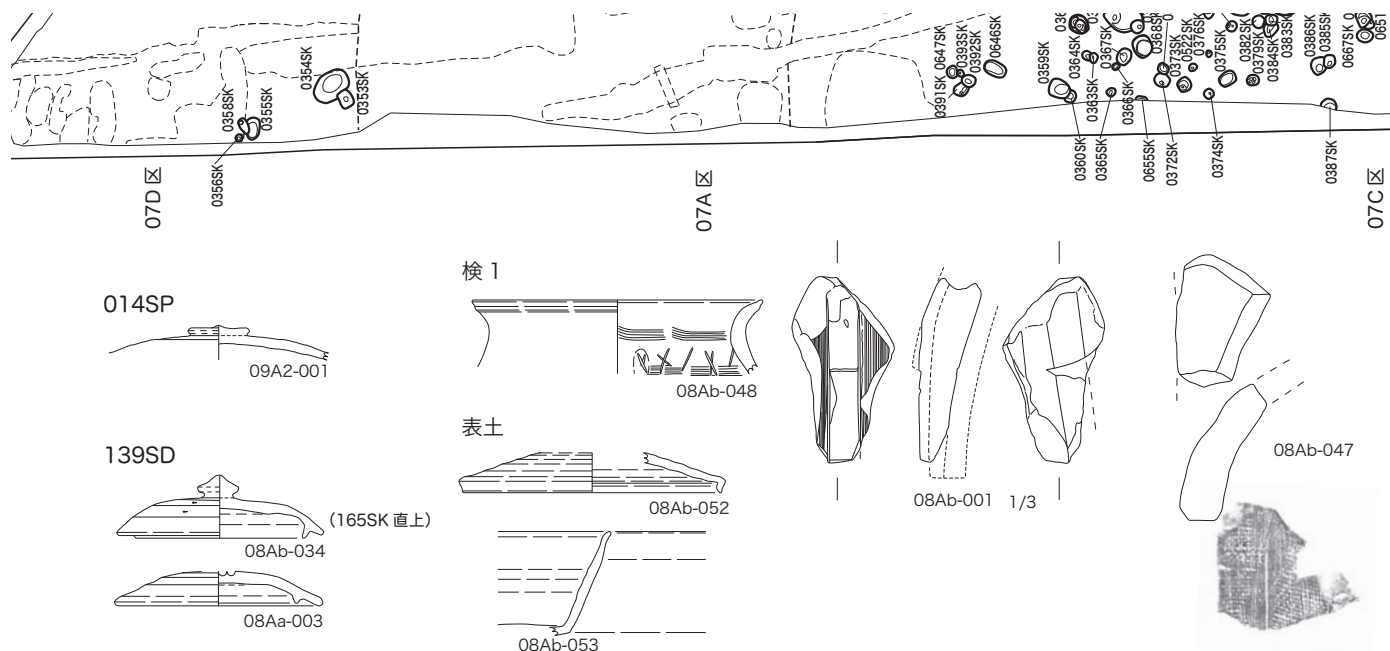


図 182 塔の越遺跡 08Ab 区・09A 区出土遺物実測図

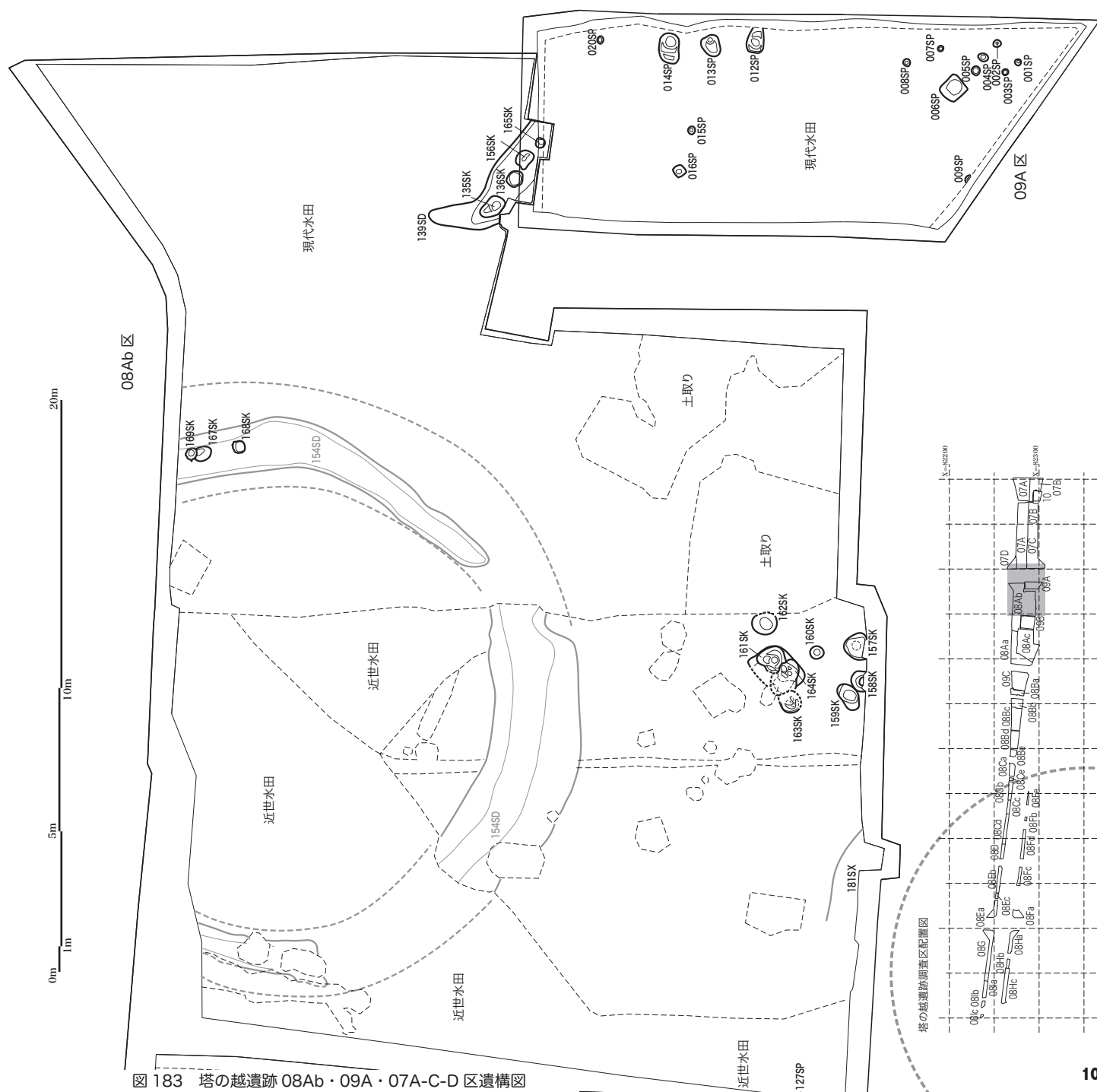
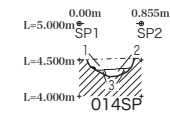
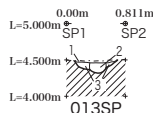


図 183 塔の越遺跡 08Ab・09A・07A-C-D 区遺構図

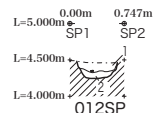
09A区012SP・013SP・014SP



1. 5Y4/1 灰色シルトと2.5Y7/4浅黄色シルトとの斑土
2. 5Y4/1 灰色シルト 2.5Y8/3 淡黄色シルト混じる
3. 2.5Y7/4 浅黄色シルト 5Y4/1 灰色シルト混じる



1. 2.5Y7/4 浅黄色シルトと5Y4/1灰色シルトとの斑土
2. 5Y4/1 灰色シルト 2.5Y8/3 淡黄色シルト混じる
3. 2.5Y7/4 浅黄色シルト 5Y4/1 灰色シルト混じる



1. 5Y4/1 灰色シルトと2.5Y7/4浅黄色シルトとの斑土
2. 2.5Y7/4 浅黄色シルト

● 08Ab 区・09A 区

08Ab 区から 09C 区は近世以降の開田によって、古墳時代と同様に古代の遺構面も大幅に削平されて、整った遺構配置を把握することはできなかった。その中で注目されるのは、円墳の周溝 154SD に重複する 167SK ～ 168SK で、このうち 169SK は柱穴の輪郭が多角形であり、周溝上部と類似した堆積層で埋積していた。柱の抜き穴痕跡は認められなかったので、掘削時の掘形であった可能性が高い。

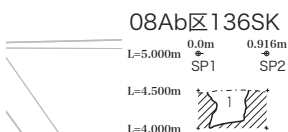
なお、放射性炭素年代測定では、08Ab 区 168SK 出土炭化材：432-561 cal AD、139SD 出土炭化材：579-648 cal AD の測定値を得た。

[08Ab 区建物 1・2]08Ab 区南部で北東隅を検出した。

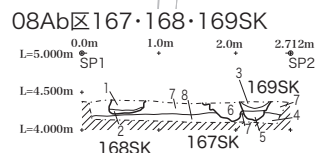
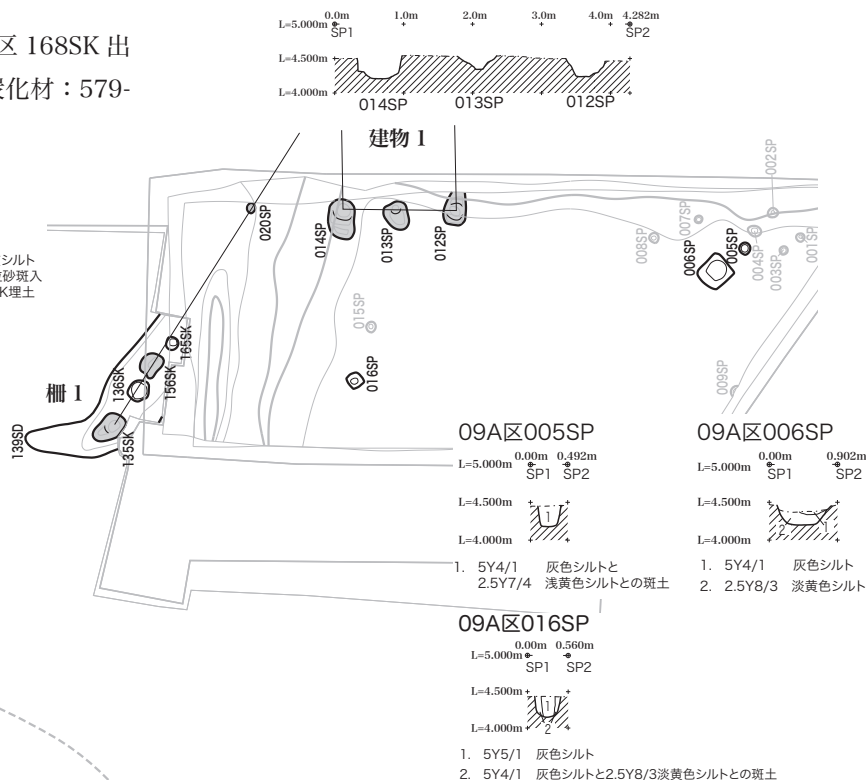
柱穴の切り合いから建物 1 → 建物 2 となる。

[08Ab 区柵 1] 上部は削平され、断面皿状の底部を検出した 139SD の下部で検出された柱穴群からなる。7 世紀後半に属す。

[09A 区建物 1] 東西軸の西辺（2 間）を検出した。柱穴は東西軸に長軸をもつ楕円形の掘形で、中央が浅いのは近接棟持柱だからであろう。

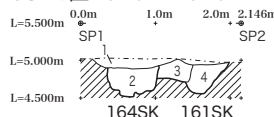


1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂斑入炭化物少し含む 136SK埋土



1. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト・10YR2/1 黒色粘土質シルトの斑土 168SK埋土
2. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト・10YR2/1 黒色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂の互層 168SK埋土
3. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト・10YR2/1 黒色粘土質シルトの斑土 169SK埋土
4. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト・10YR2/1 黒色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂の互層 169SK埋土
5. 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂・10YR3/1 黒褐色粘土質シルト・10YR2/1 黒色粘土質シルト斑入 169SK埋土
6. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂斑入 167SK埋土
7. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 基盤層
8. 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂～細粒砂 基盤層

08Ab区161SK・164SK



1. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂斑入 整地層
2. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト・10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂のブロック炭化物少し含む 164SK埋土
3. 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルトのブロック 10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト斑入炭化物少し含む 161SK埋土
4. 10YR5/4 にふい黄褐色極細粒砂のブロック 10YR4/3 にふい黄褐色粘土質シルト 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト斑入 炭化物少し含む 161SK埋土

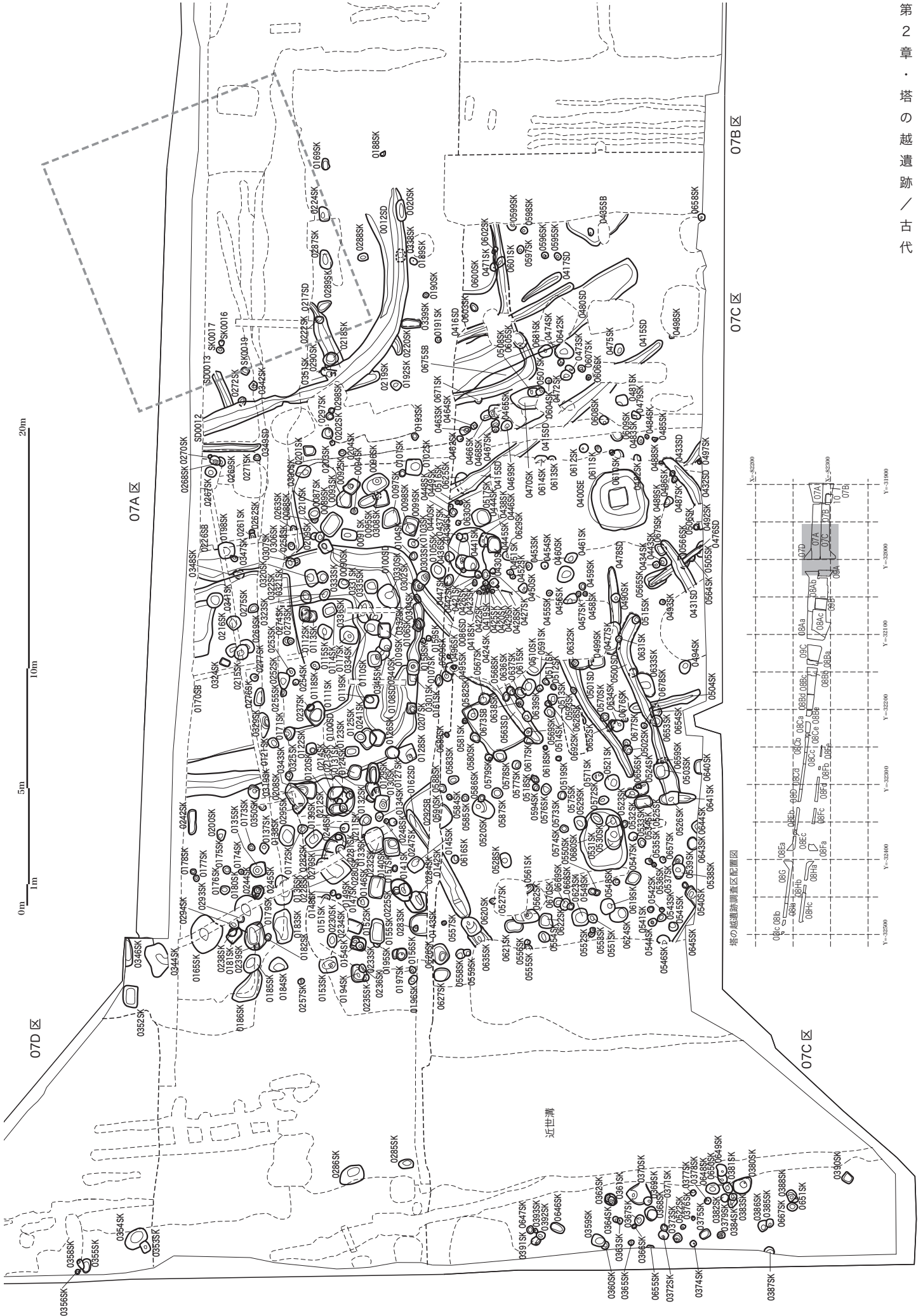


図 185 塔の越遺跡 07A-B-C-D 区遺構図

● 07 区

古代の遺構は中近世以降の耕作土である北壁 30 層の下部で検出されたが、包含層は薄く、全体に大きく削平を受けており、柱穴や土坑以外の遺存状況はけっして良くなかったが、それでも多くの掘立柱建物群を検出できたことは大きな成果であった。なお、掘立柱建物群や柵は東西軸の a 群と北北西 - 南南東軸の b 群に分かれる。

掘立柱建物群は、切り合い関係から a 群→b 群となり、b 群は 2 時期に分かれる。ほぼ 8 世紀後半代に収まるようである。

07A 区 170SB・226SB 両遺構ともに上部はほとんど

07A区170SB・226SB

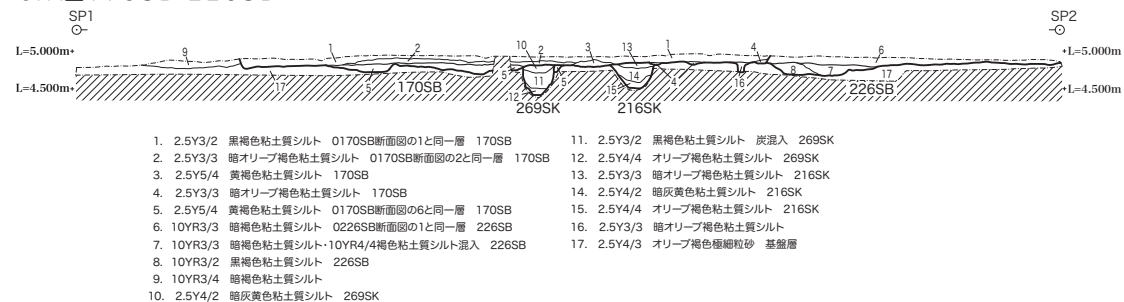
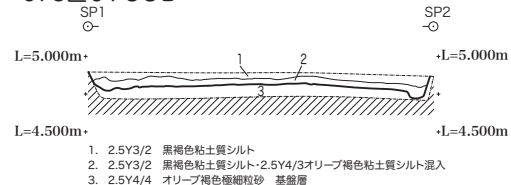


図 186 塔の越遺跡 07 区 SB 土層セクション図

07C区673SB



削平されて、掘形の形状を検出したものである。どちらもカマドの有無は不明である。

このうち 170SB は、出土遺物が 8～9 世紀と幅があり、出土量も豊富で、堆積層の一部には焼土や炭化物は含まれているが、竪穴建物跡である確証はない。

一方、SB226 は 7 世紀の坏蓋以外ほとんど遺物が出土していないが、性格は同様である。

07A 区 292SB 07A 区と 07C 区にまたがる。北東隅を検出したが、07C 区側では検出できなかった。カマドの有無は不明。

07C 区 435SB 西半分を検出した。北端で壁が曲がり始めているが、それでは幅 2m にも満たない規模となる。出土遺物は 8 世紀後半に属す。

07C 区 673SB 東西長約 2.3m のやや菱形を呈する。カマドの有無は不明である。

07C 区 675SB L 字に屈曲する溝を検出し、周溝と判断して SB 番号を付与した。

以上のように 07 諸区で検出された「SB」については、

削平を考慮してもカマド痕跡が皆無である点は、竪穴建物の展開について検討の余地があることを示している。

07C 区 400SE 4 本の丸太を黄灰色粘土層まで打ち込んで隅柱とし、その外側に東西南北一枚づつ厚板を並べて側方の土留めとしている。東側は腐食が進み、一枚板かどうか不明。

底面は灰色細粒砂層まで掘り込まれ、側板の下部より深い位置に隅円長方形の曲物を置いている。

検出時には掘形と井戸材の間は斑土で充填され、廃絶時の抜き取りに伴う再掘削が底部に及んでいる様子は窺えなかった。

調査時には掘形から中世陶器片が出土したことから年報では 12 世紀に属す井戸として報告している。今回の報告においては井戸の形状や出土遺物の様相を考慮して古代の可能性を強調しておくが、なお判然としない点があることを明記しておく。

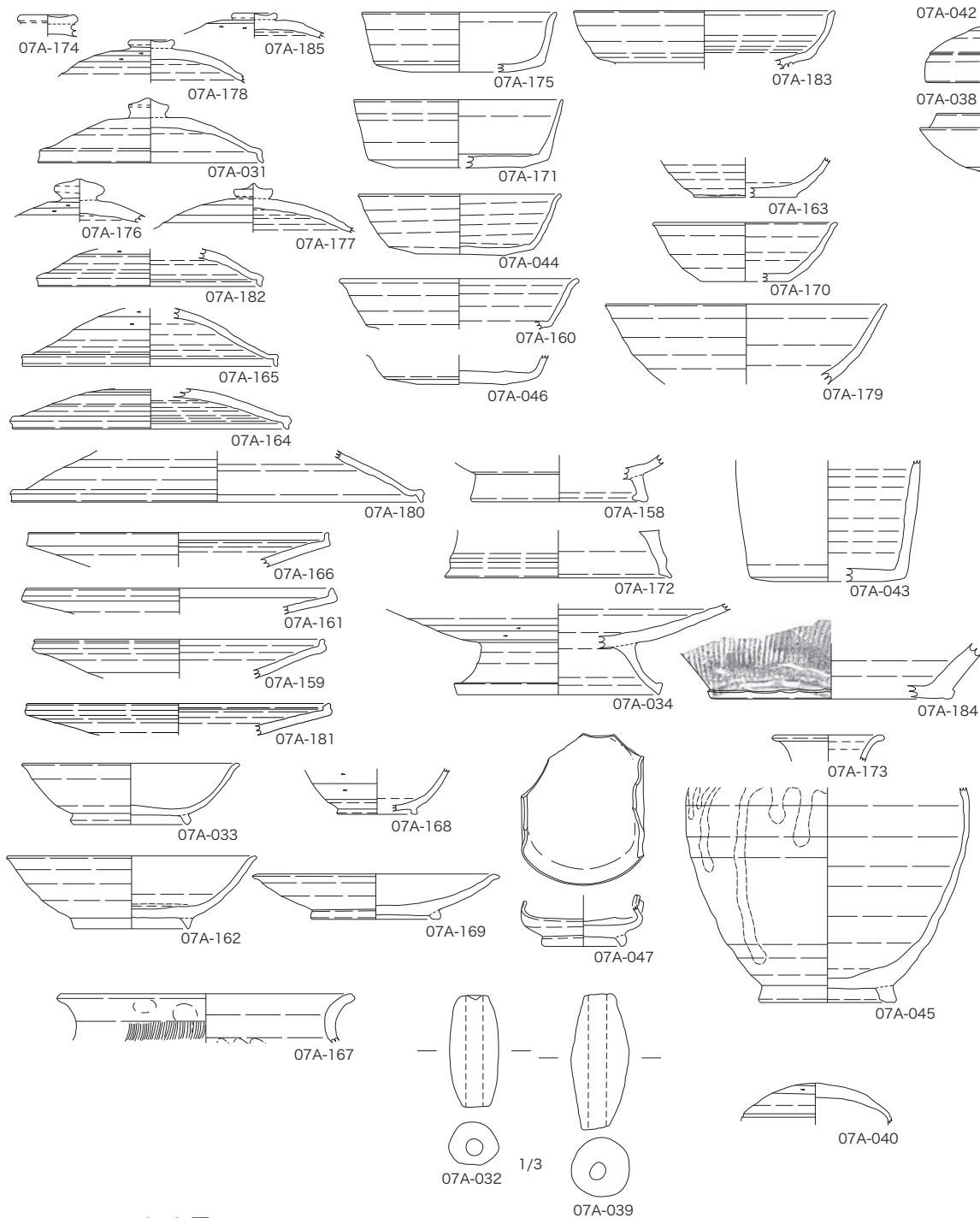
なお、南東及び南西の隅柱について放射性炭素年代測定を実施した結果、前者は 1 σ 暦年代範囲において 670-695 calAD (56.4%) および 756-765 cal AD (11.8%)、2 σ 範囲において 666-717 cal AD (74.4%) および 749-771 cal AD (21.0%)、後者は 1 σ 暦年代範囲において 674-698 calAD (53.6%)、2 σ 範囲において 669-718 cal AD (72.2%) および 750-771 cal AD (23.2%) であった。概ね遺構・遺物から想定される年代に沿うものである（年代測定：パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ）。

07A 区 012SD 方位は 07C 区 675SB に共通するが、南西隅は緩やかにカーブする。上部は削平のため、幅は一定しない。深さは約 20cm で、底面標高は 100SD に近い。この溝の北東側では古代の遺構がほとんど展開しないこと、また付近から須恵質埴輪片が出土していることから、削平された墳墓の裾を画する溝であった可能性がある。

07A 区 100SD 北に開くやや歪んだコ字状の溝で、幅

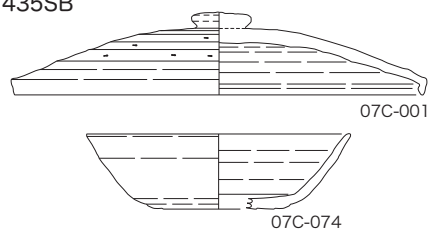
07A 区

170SB



07C 区

435SB



675SB

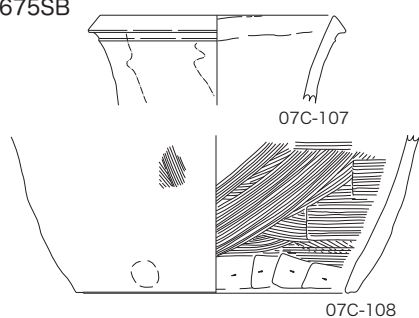


図 187 塔の越遺跡 07 区 SB 出土遺物実測図

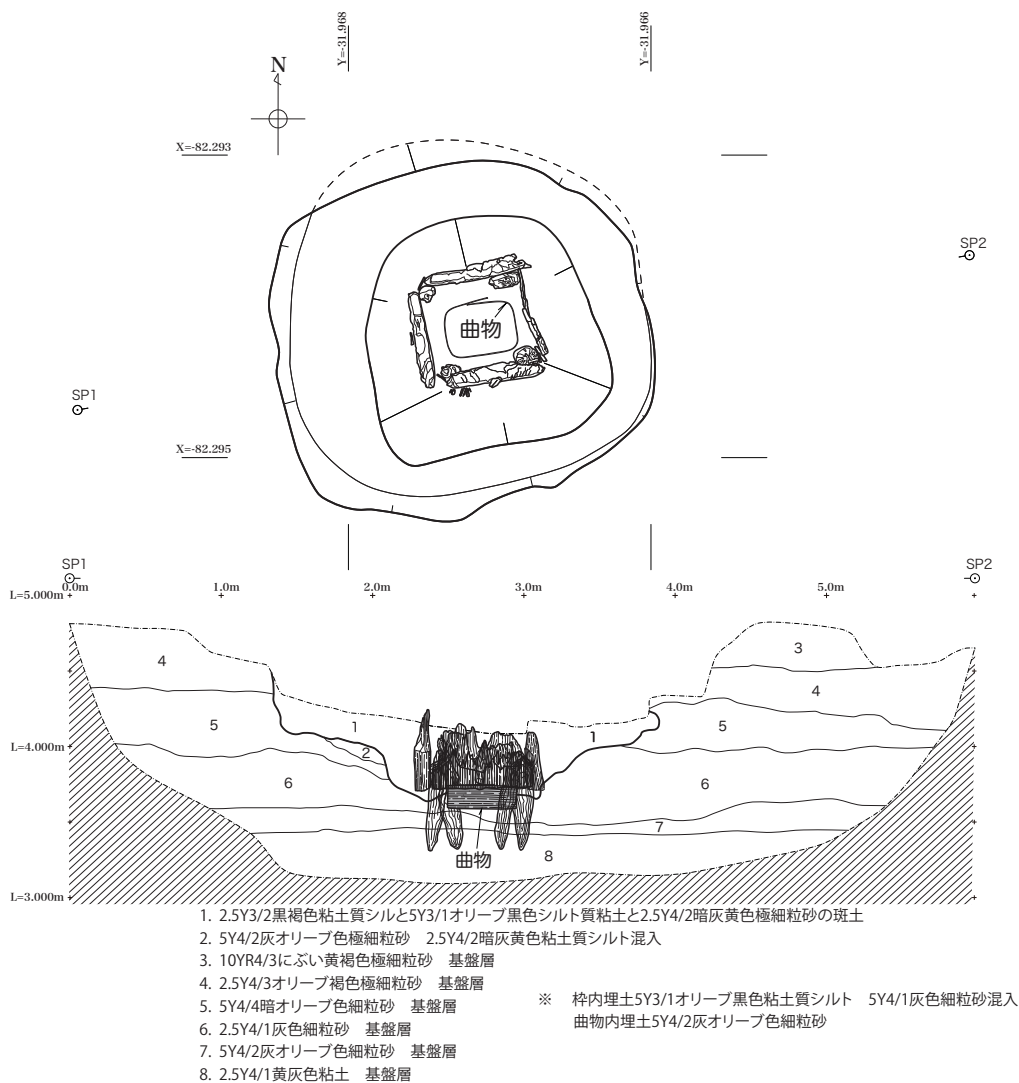


図 188 塔の越遺跡 07C 区 400SE 平面図・側面図・土層セクション図

は 2～2.5m、深さは 20～30cm を測る。検出状況は、浅く平坦で、外周にそって部分的に深くなる部分がある。堆積層には炭化物や焼土を含む部分もある。

07A 区北壁土層断面では、直上に炭化物や焼土を含む人為的な堆積層があり、上部に竪穴建物が重複した可能性がある。床面下部の掘形に周溝をめぐる竪穴建物が古代にも少なくないことから言えば、深さはあるものの 100SD は竪穴建物の掘形の可能性も残る。

170SB や 226SB を含めて、ほとんどの遺構に切られるので、8 世紀前半まで遡るかもしれない。

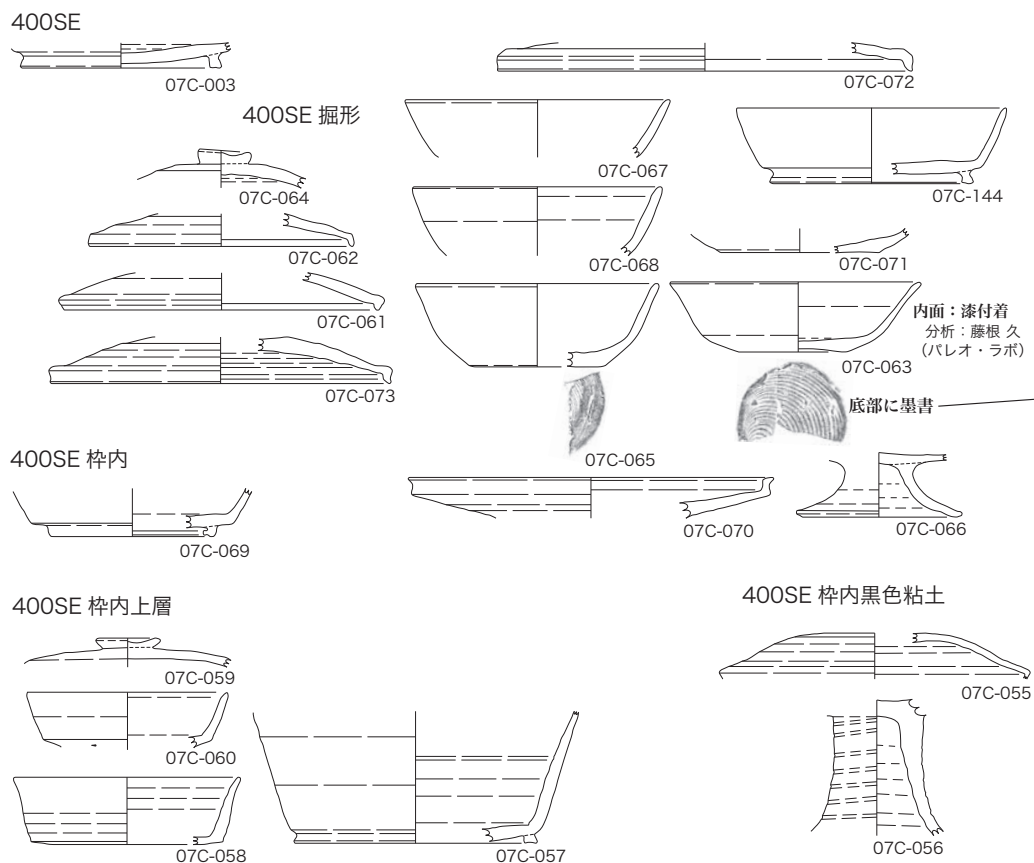
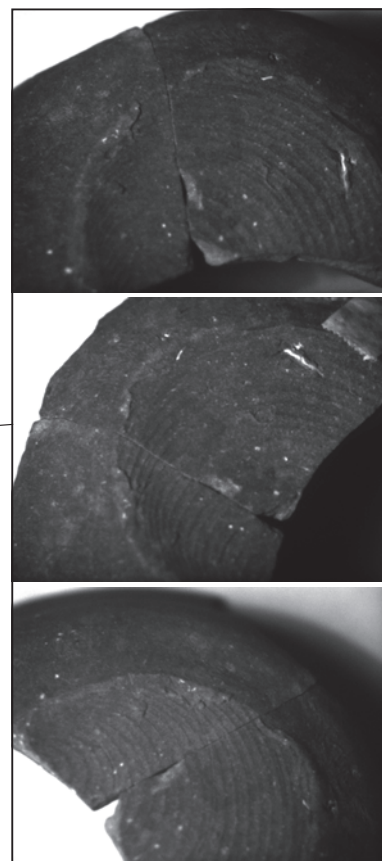
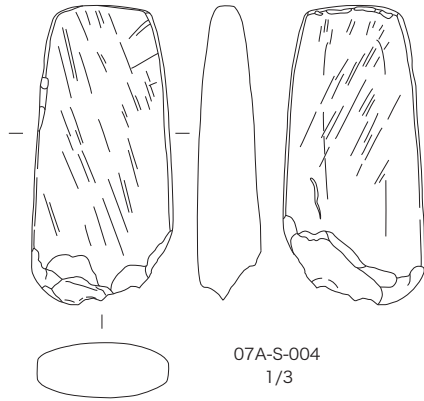


図 189 塔の越遺跡 07C 区 400SE 出土遺物実測図

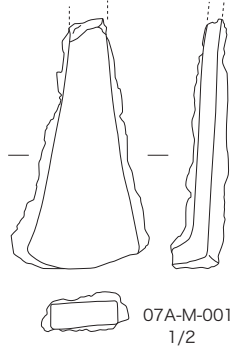


170SB

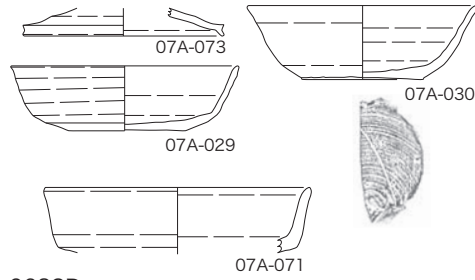


※縄文時代の定角式石斧がどのような経緯で塔の越遺跡にもたらされたのか興味深い。井戸の設置によるのであれば下層に包含層の存在を想定する必要もあるが、確認調査では黒色粘土質シルト層を検出したのみで、遺物はともなっていなかった。ただ、同層上面が縄文晩期から弥生前期の旧地表であった可能性が高いことは、周辺における遺跡の存在を疑うのに十分である。

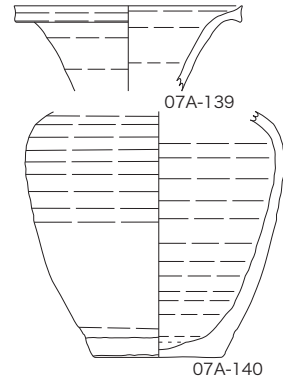
086SD



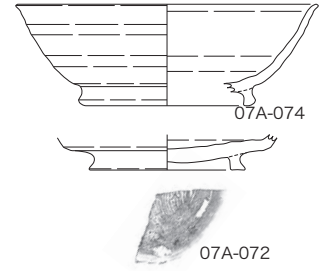
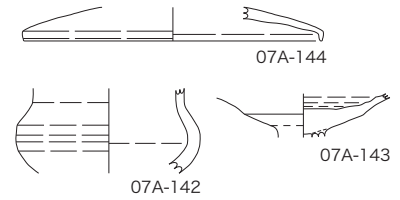
012SD



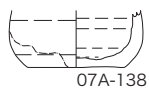
068SD



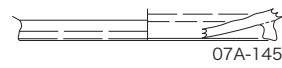
100SD



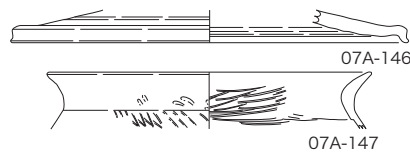
060SK



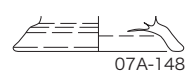
107SK



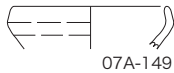
110SK



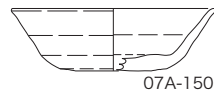
122SK



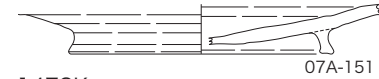
123SK



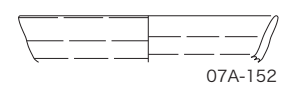
124SK



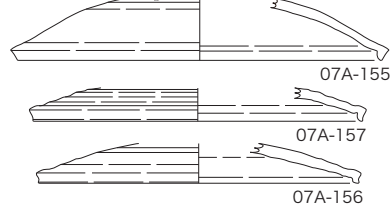
127SK



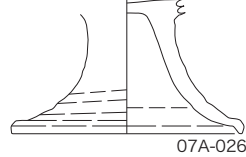
131SK



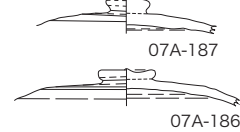
138SK



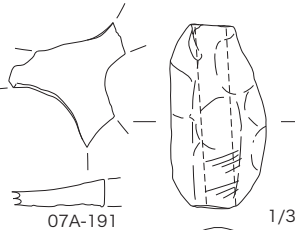
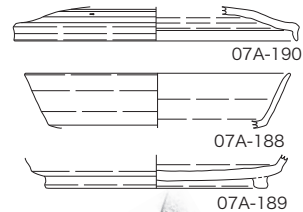
147SK



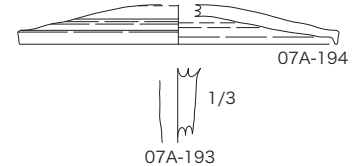
179SK



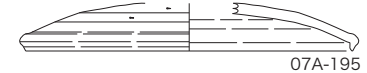
183SK



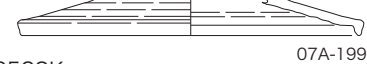
185SK



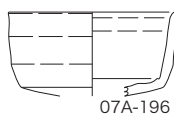
208SK



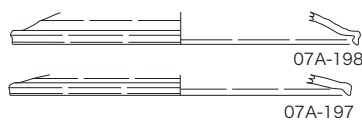
245SK



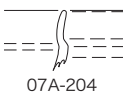
236SK



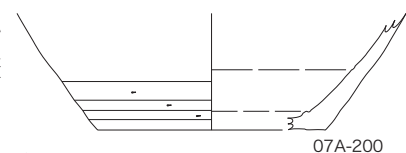
238SK



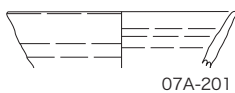
325SK



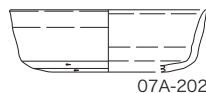
252SK



278SK



295SK



301SK

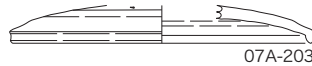
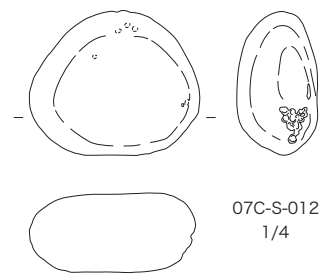
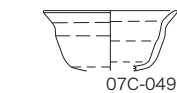


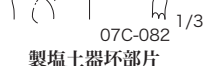
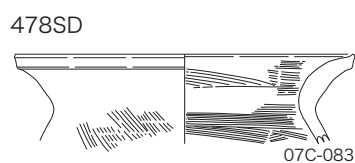
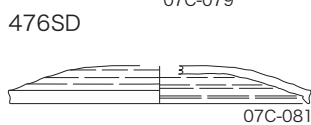
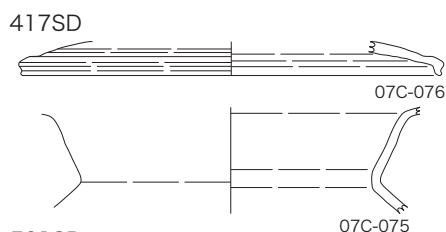
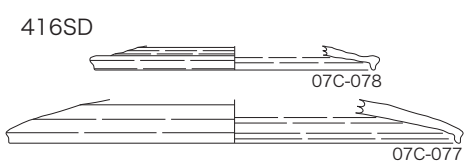
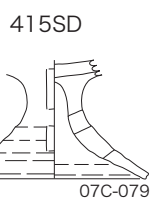
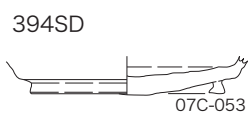
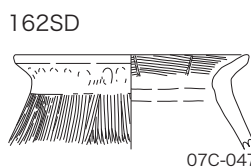
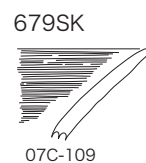
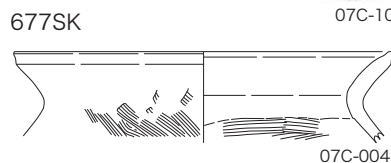
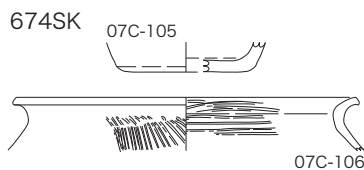
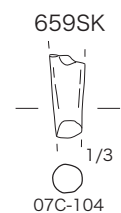
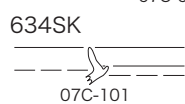
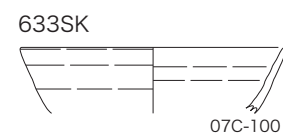
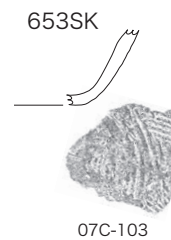
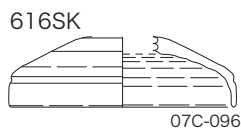
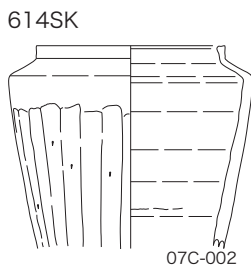
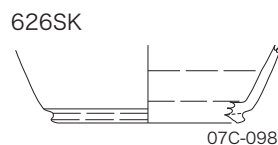
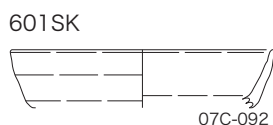
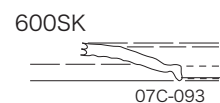
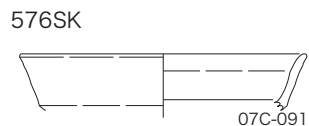
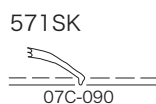
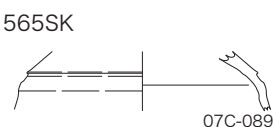
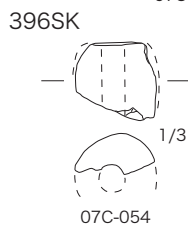
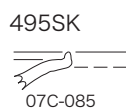
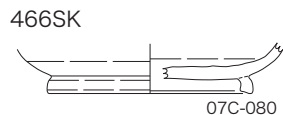
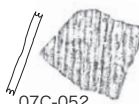
図 190 塔の越遺跡 07A 区遺構出土遺物実測図



360SK



380SK



製塩土器坏部片

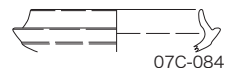


図 191 塔の越遺跡 07C 区遺構出土遺物実測図

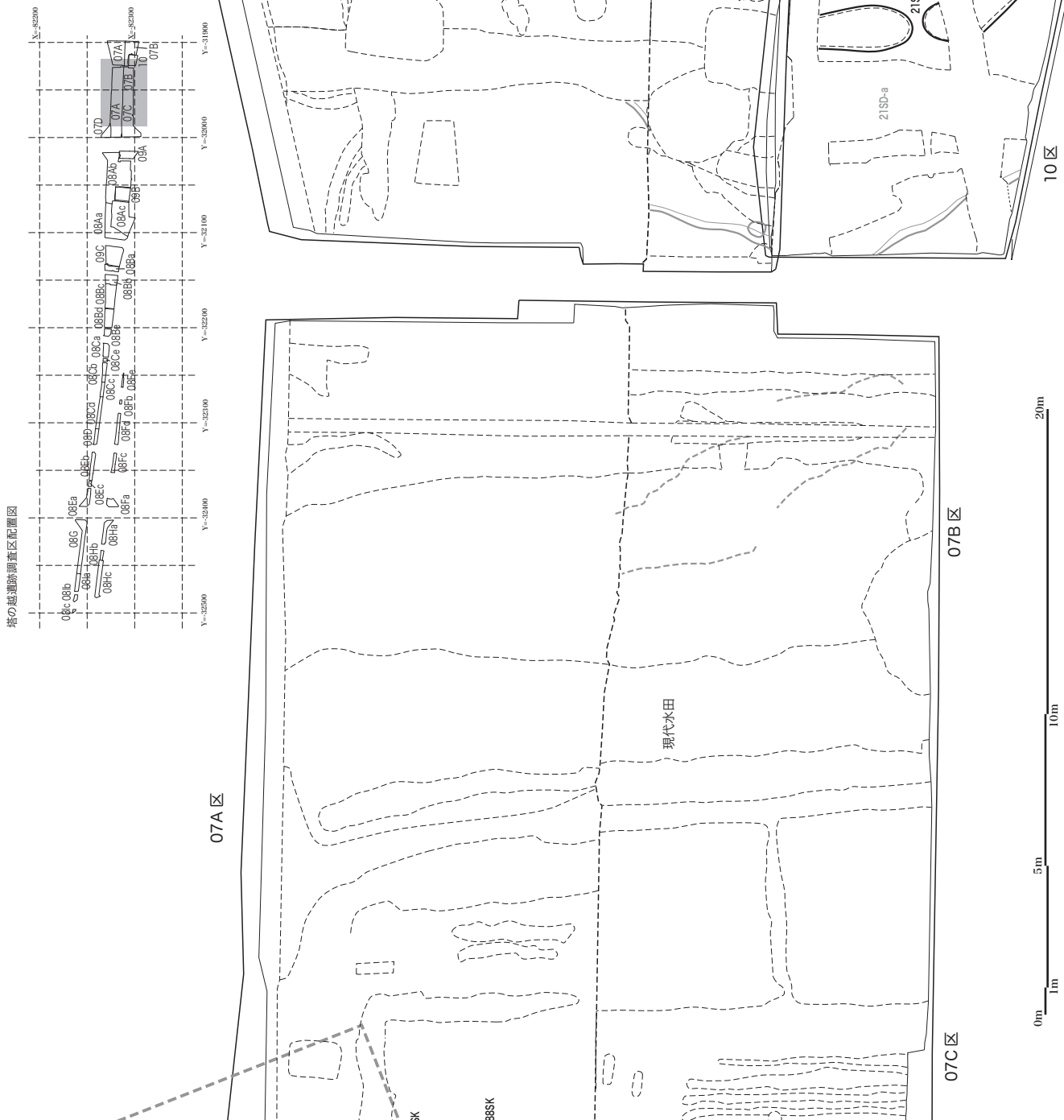


図 192 塔の越遺跡 07A-B-C 区遺構図

050SD

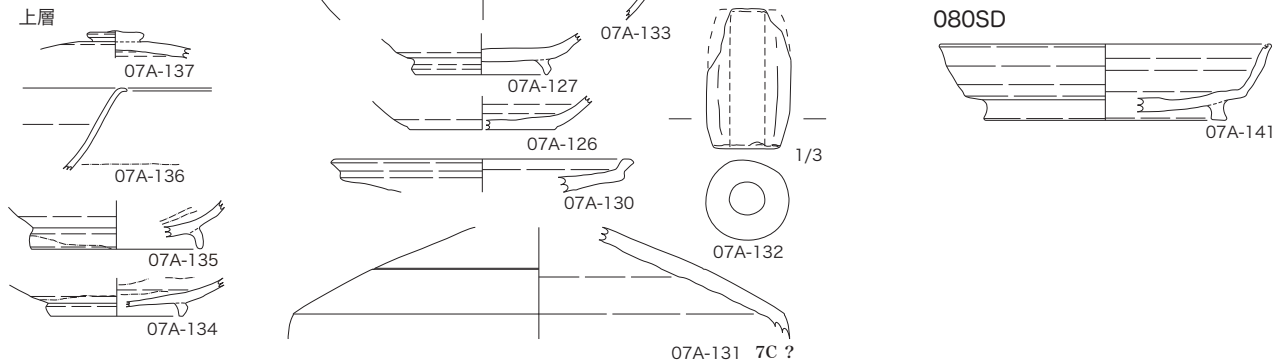
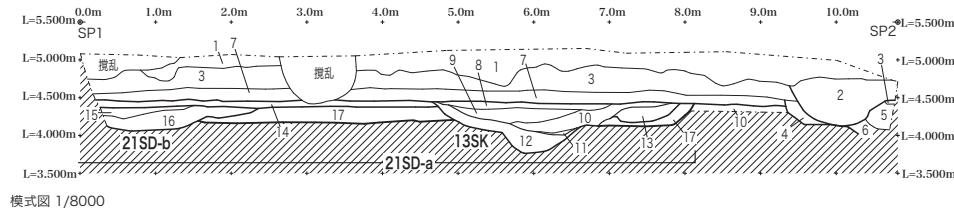


図 193 塔の越遺跡 07A 区東部遺構出土遺物実測図

10 区

南壁断面図



模式図 1/8000

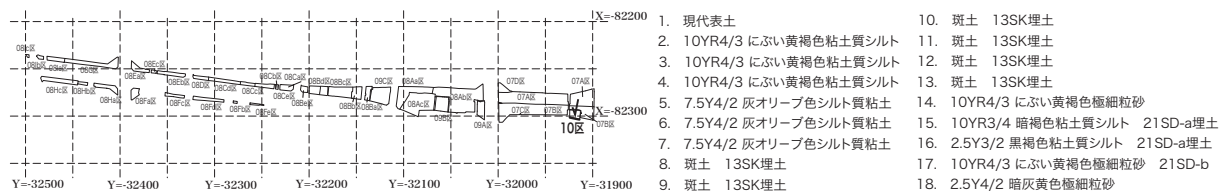


図 194 塔の越遺跡 10 区南壁土層セクション図

07A・B 区 050SD、10 区 21SD-b 07A 区と 07B 区を南北に貫いて近現代に開田された水田があり、そのために多くの古代遺構を滅失した可能性もあるが、その東側には古墳前期の円墳周溝である 050SD の痕跡と、その北側に不定形な溝 080SD が存在するのみで、意外な程古代の遺構をみる事が無いことから、むしろこのエリアでは古代の建物遺構が激減する境界域であった可能性の方が高い。

つまり、掘立柱建物群が展開する理由には旧地表面高度の低さ、つまりこのエリアが集水、もしくは湛水地区であり、古墳前期の墳墓の存在もそのことと無関係ではなく、土地利用の上からも主要な日常生活の活動域外であった可能性を窺わせる。考えられるのは水田域であるが、平面的にも、土層観察からもそうした痕跡は確認で

きていない。

07A・B 区 050SD および 10 区 21SD-b は、上部に黒褐色から暗褐色粘土質シルトが堆積しており、西方に展開する長野北浦遺跡でも同様の遺構・堆積層に 7～8 世紀の遺物を含むことから、これらも同様と考えられたが、10 区の調査では周溝の内側に再掘削痕 (21SD-b) を確認したので、自然の埋没過程で単純に古代の遺物が堆積するわけではないことが明らかになった。何より、050SD の上層からは灰釉陶器もまとまって出土しており、08Aa 区・08Ac 区 149SD 同様に、整地が行われた可能性も推測される。

ただ、9 世紀以降には塔の越遺跡から長野北浦遺跡にかけて墳丘が削平される事態に多くの墳墓がみまわれた中で、050SD で囲まれた「高まり」のみ削平を免れて

近世末まで墳丘を維持したことは特筆されるが、現在その姿を見ることがないのは残念である。

07A 区 080SD 050SD 北縁に平行してのびるが直進性には欠ける。西側は途切れ、東側も拡張が分岐かわからないが終息するので、北東方向にのびることは確かなようだ。その先については、050SD も溝中央が一段深く掘られて東へ深くなる様相を示してお

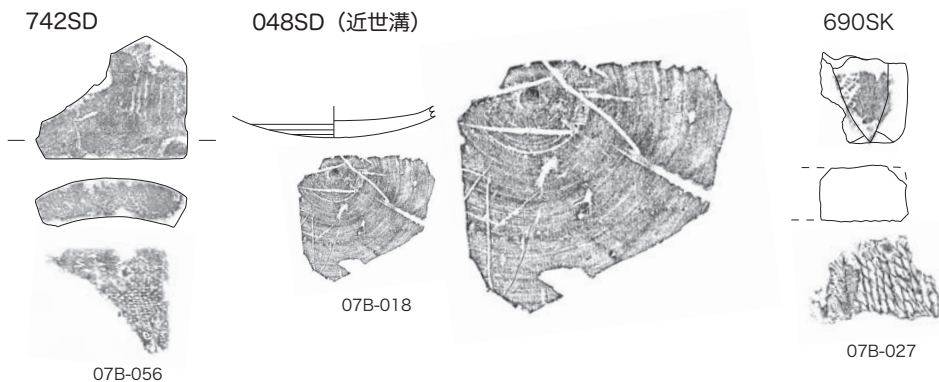


図 195 塔の越遺跡 07B 区出土遺物実測図

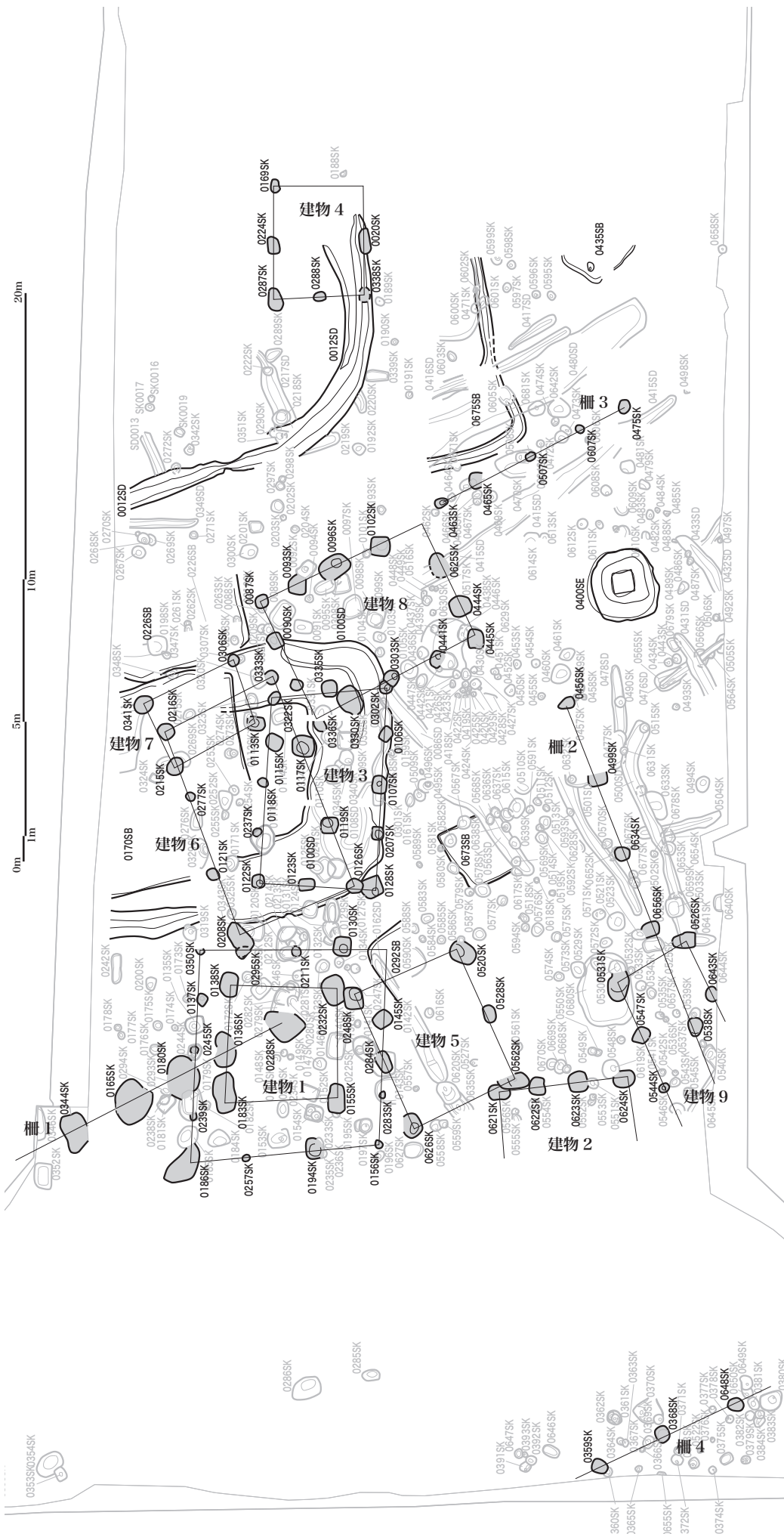


図 196 塔の越遺跡 07 区掘立柱建物等配置図

り、調査区外となる東側の市道に南北方向の凹地が存在した可能性があるとするれば、地表水を排水する機能を備えていたのかもしれない。

[07 区建物 1] 掘形の大きな 4 本柱の不整形な配置で、そのまわりに掘形の一定しない柱穴がやはり台形状にめぐる。不整形なプランだが四面廂付建物と考えられる。柱間 1 間の建物は 07Ac 区でも検出しており、本例も同様に軽微な建物であろう。a 群。

[07 区建物 2] 東辺の 4 本柱を検出した。主軸線は不明である。柱痕派認められない。621SK のみやや浅い。a 群。

[07A 区建物 3] 07A 区 100SD に重複する。西辺の棟持柱の位置は北にずれ、南辺の柱の間隔は北辺より広く、平面は台形を呈する。a 群。

[07A 区建物 4] 07A 区 012SD に重複する。338SK は 012SD に切られ、020SK は 012SD を切るが、調査上の誤認と考える。a 群。

[07A 区建物 5] 北東隅の柱穴と南西隅の柱穴は a 群建物群を切る。1 間×2 間の建物だが、梁間は広いので棟持柱が検出できなかった可能性がある。b 群。

[07A 区建物 6] 1 間×3 間の、建物 3 と同様にやや台形のプランを呈する。梁間が広いので、棟持柱が未検出の可能性はある。b 群。

[07A 区建物 7] 1 間×1 間だが、やや長台形を呈する。竪穴建物の主柱穴である可

07A区大形柱穴列:柵1

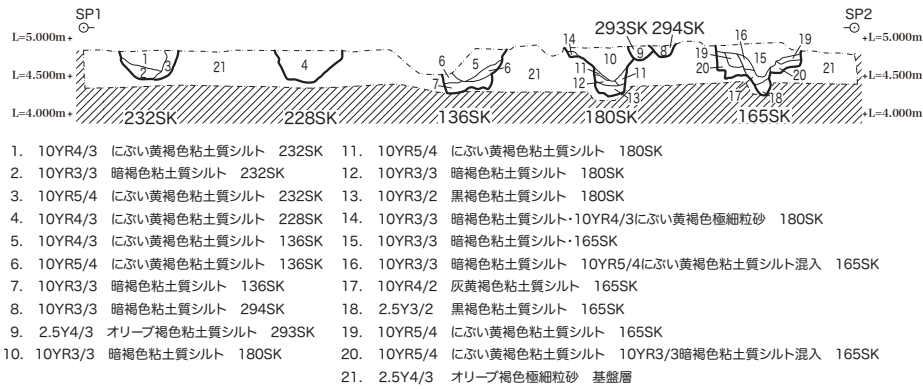


図 197 塔の越遺跡 07A 区柵 1 柱穴土層セクション図

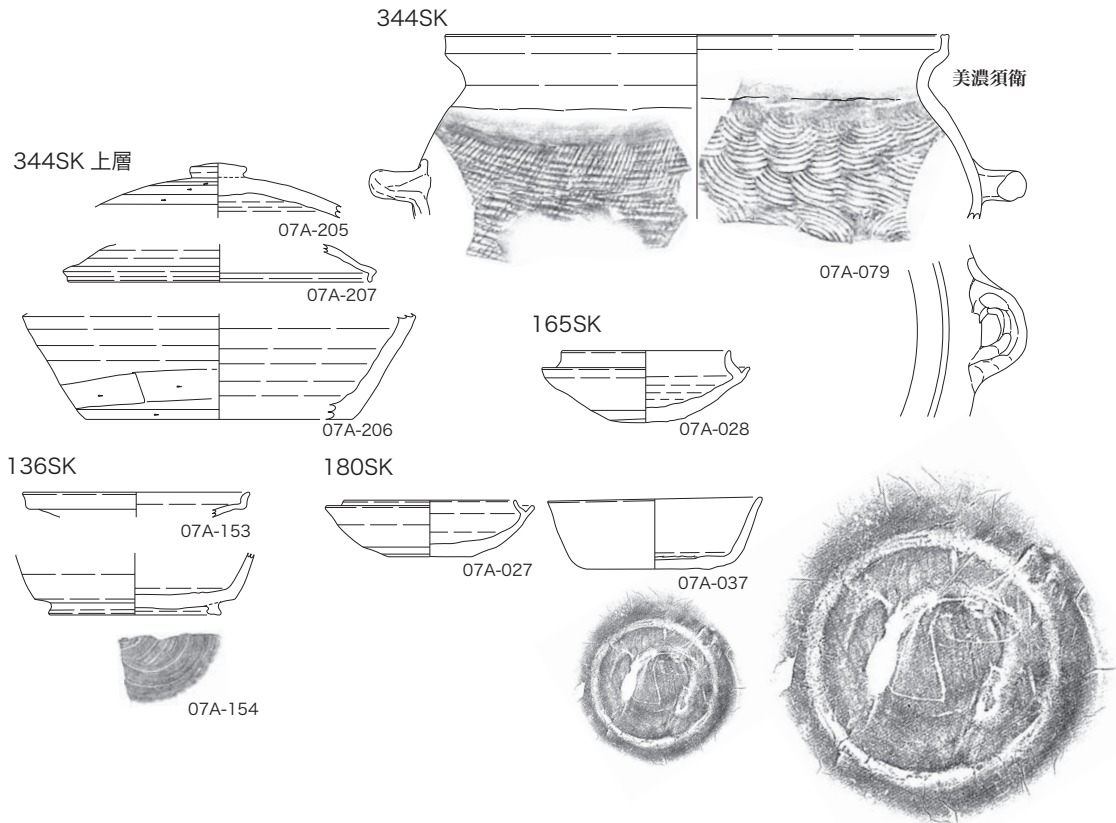
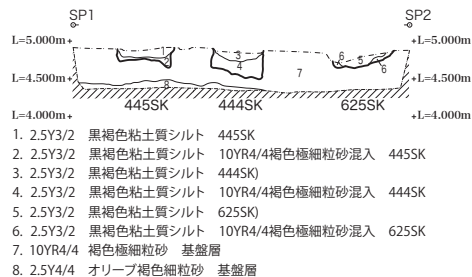


図 198 塔の越遺跡 07A 区柵 1 柱穴出土遺物実測図

07C区444SK・445SK・625SK:建物8



07C区621SK・622SK・623SK・624SK:建物2

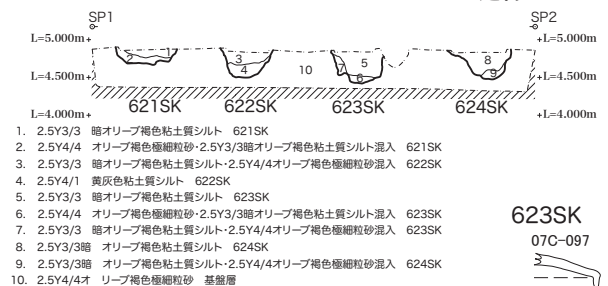


図 199 塔の越遺跡 07C 区掘立柱建物柱穴土層セクション及び出土遺物実測図

能性是否定できない。b 群。

[07A 区建物 8] 3 間×4 間の建物で、建物 3 に重複する。
[07A 区柵 1] 調査当初には「大形土坑列」と認識されたもので、大規模な掘形をもつ柱列である。1 列しか見つかっていないので掘立柱建物になる可能性は低い。180SK と 165SK は掘形が二段になり、前者は径約 40cm の、後者は径約 25cm の柱痕を底面に残す。b 群。

[07A 区柵 2] 建物 9 に重複するが、先後関係は不明である。建物 9 と軸線は合わないが建物 6 とは合うので、b 群内での時期差ということになる。

[07A 区柵 3] 建物 8 東辺と軸線を合わせている。

[07A 区柵 4] 調査区西端で検出した。軸線は b 群に含まれるが、柵 2 とは直交しない。

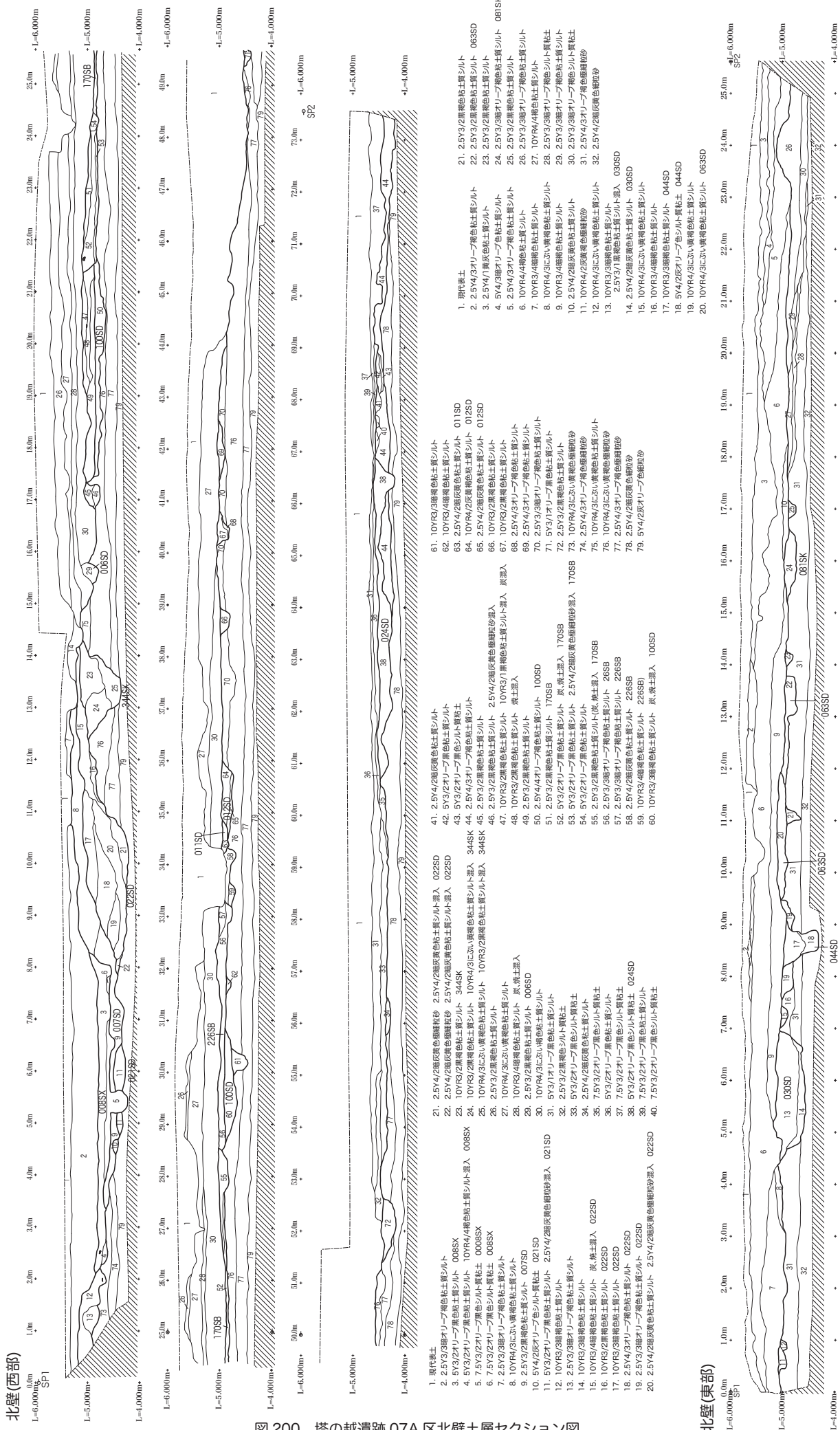


図 200 塔の越遺跡 07A 区北壁土層セクション図

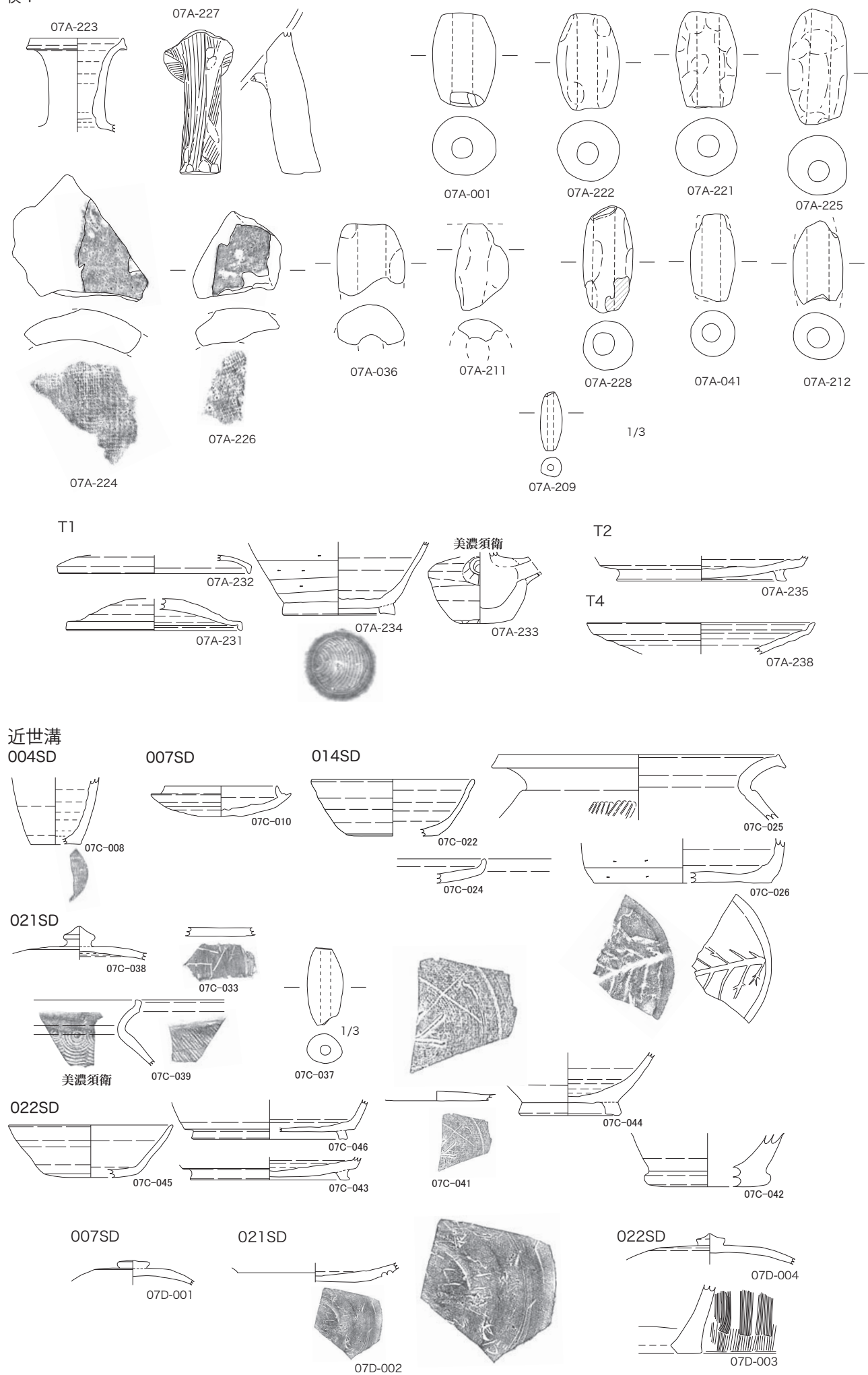
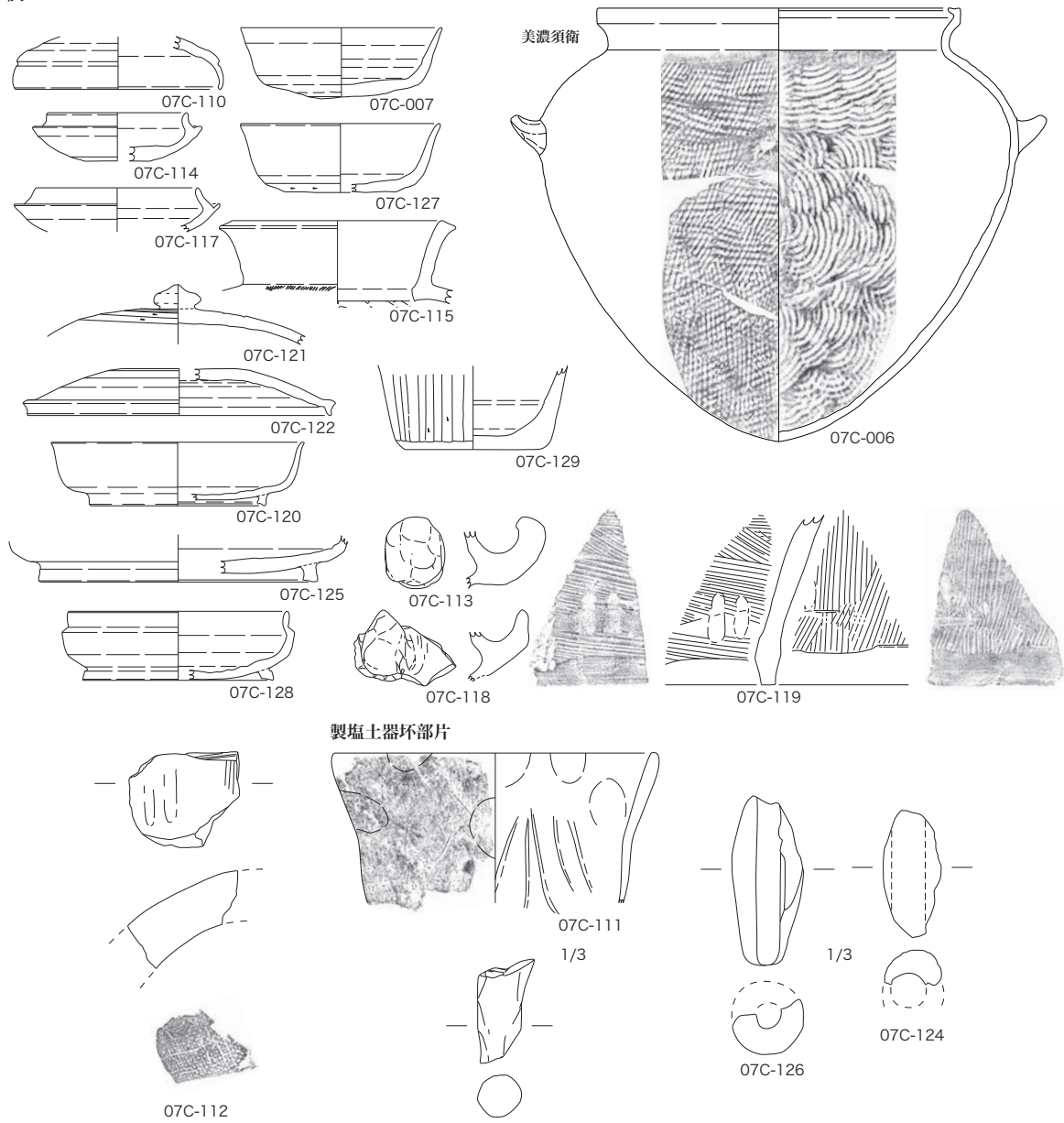


図 201 塔の越遺跡 07Ac 区・07D：遺構外及び近世以降の遺構から出土した古代遺物実測図

検1



検2

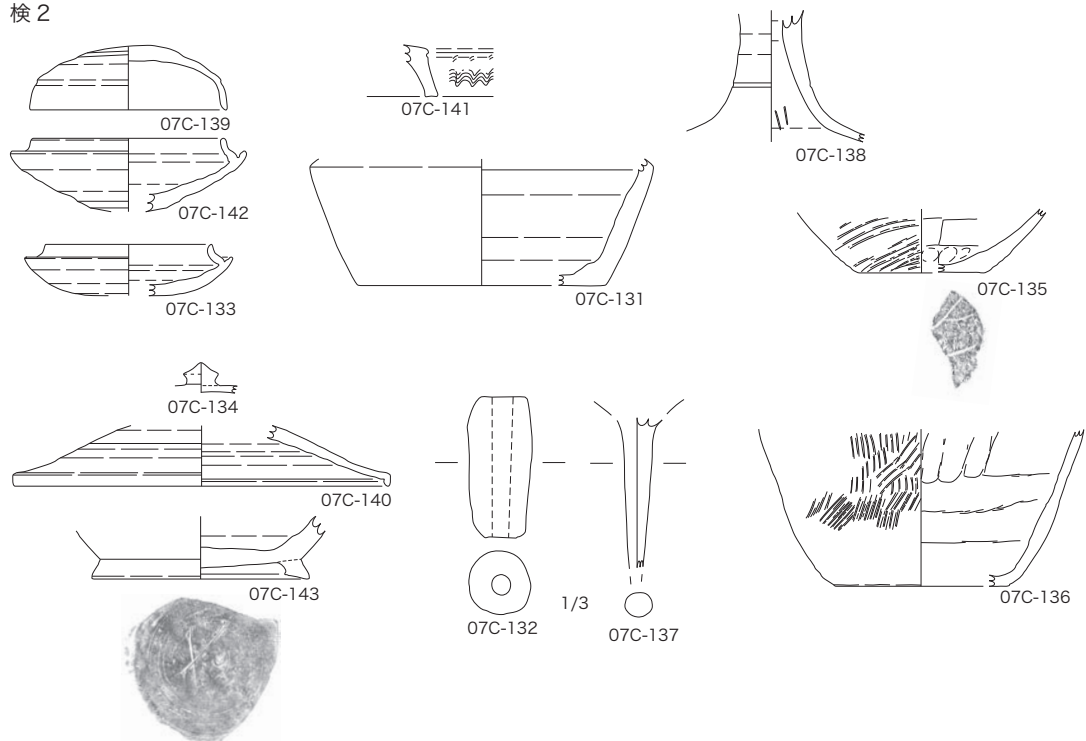


図 202 塔の越遺跡 07C 区遺構外出土遺物実測図

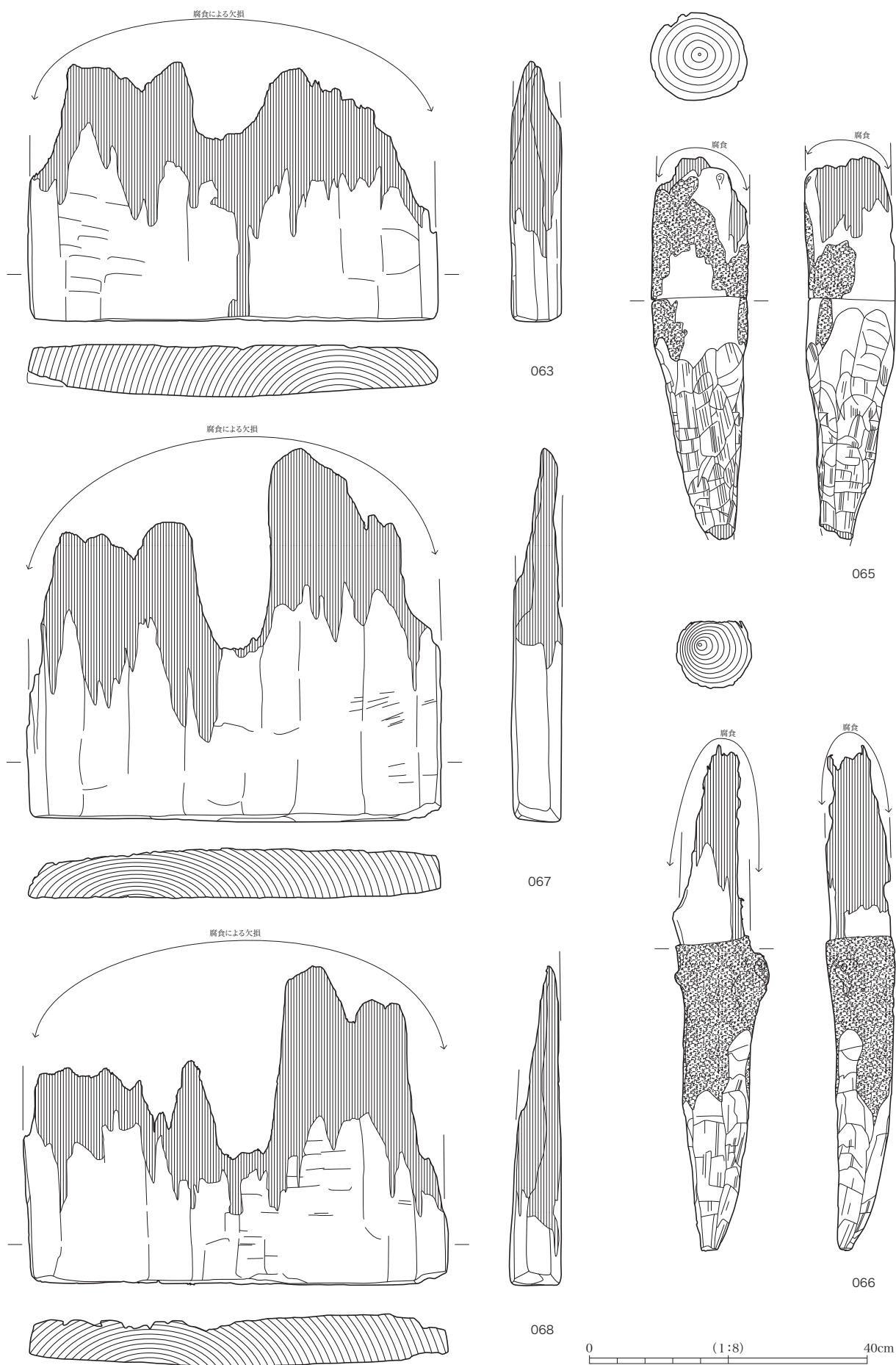


図 203 塔の越遺跡 07C 区 400SE 出土木製品実測図

●塔の越遺跡各区出土古代木製品

07C区 400SE

063～069は井戸400SEからの出土。うち、063が南、067が西、068が北の側板。065は南東、066は南西の隅柱。064は最下部の水溜か。

063・067・068は、幅約60cm、厚さ約7cmもある巨大な一枚板で、上端部が腐食している。いずれも板目

材を用いる。

065・066は樹皮付きの芯持ち丸木で、下端部を尖らせる。

064は隅丸方形の曲物側板で、樺皮綴じが二重にほどこされている。

069は板目にとった板に2カ所穿孔をほどこしており、樺皮が残る。北の側板の一部。

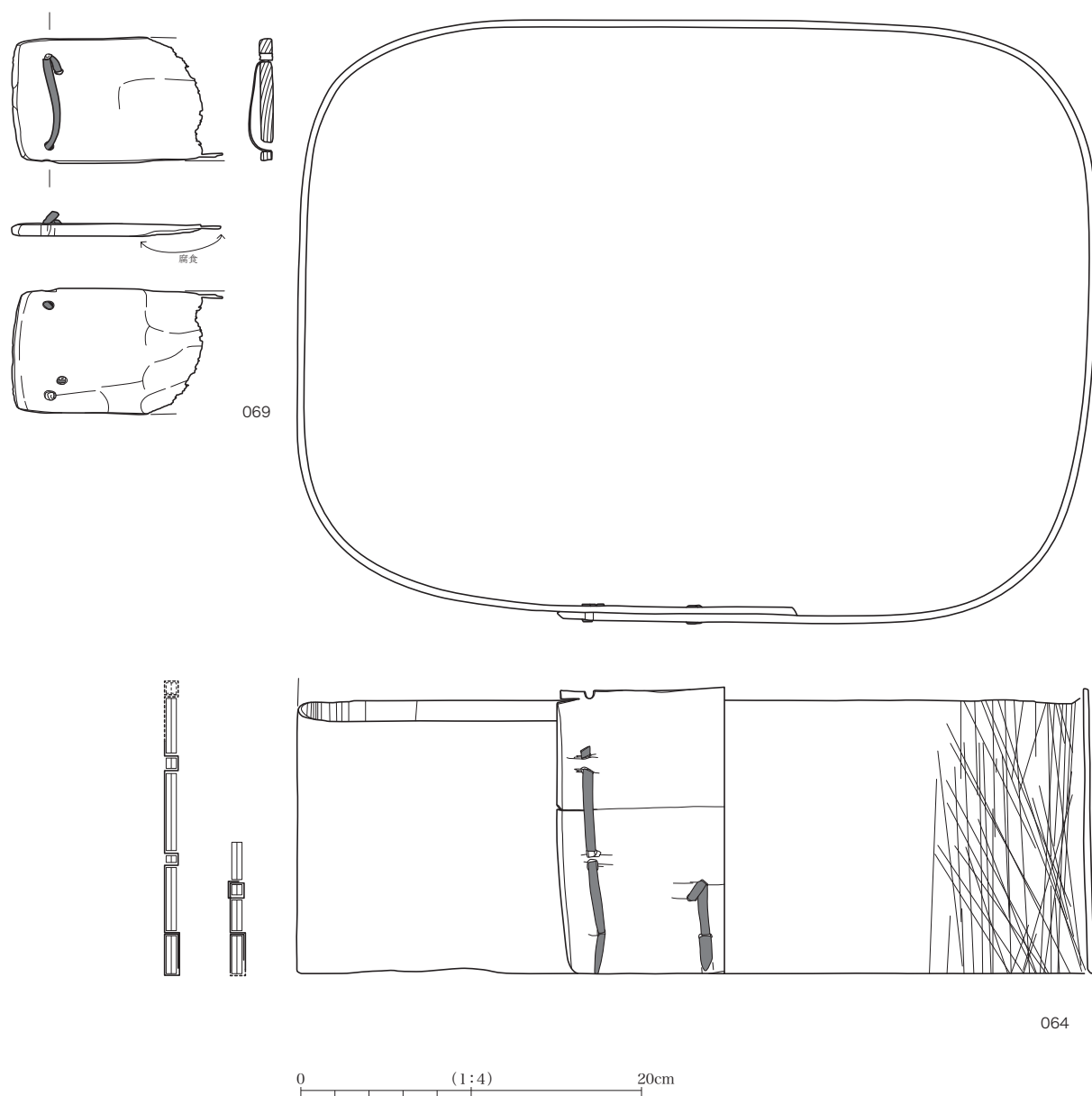


図204 塔の越遺跡 07C区 400SE 出土木製品実測図

08Ba-046SE

070 は井戸 046SE の底板で、湧水を引くために 2 カ所の穿孔をほどこす。一辺が約 75cm、厚さ約 5cm もある巨大な板目材で、両面に多数の刃物傷をとどめることから、別の用途からの転用材である可能性が高い。

08Ca-032SK

072 は棒状品。途中で段を設けて、図面上の上半部を細くする。下半部は断面が六角形、上半部は四角形に面取りをほどこす。

(樋上 昇)

塔の越 08Ca 区 032SK

塔の越 08Ba 区 046SE

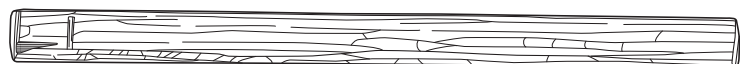
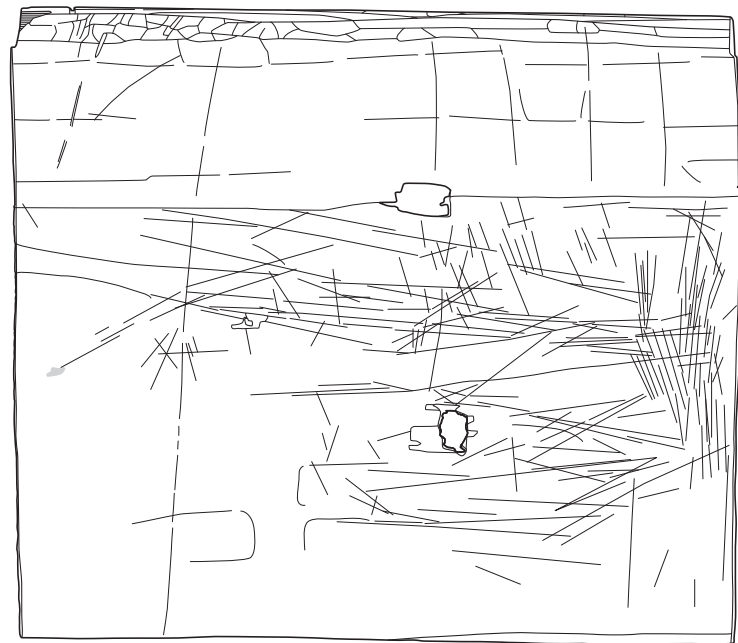
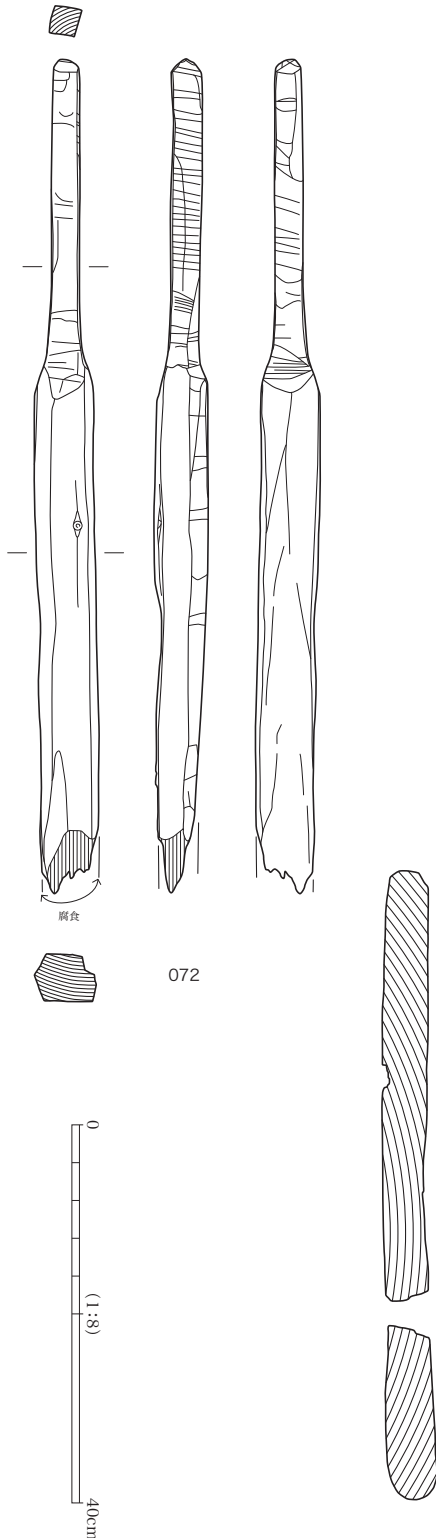


図 205 塔の越遺跡出土土木製品実測図

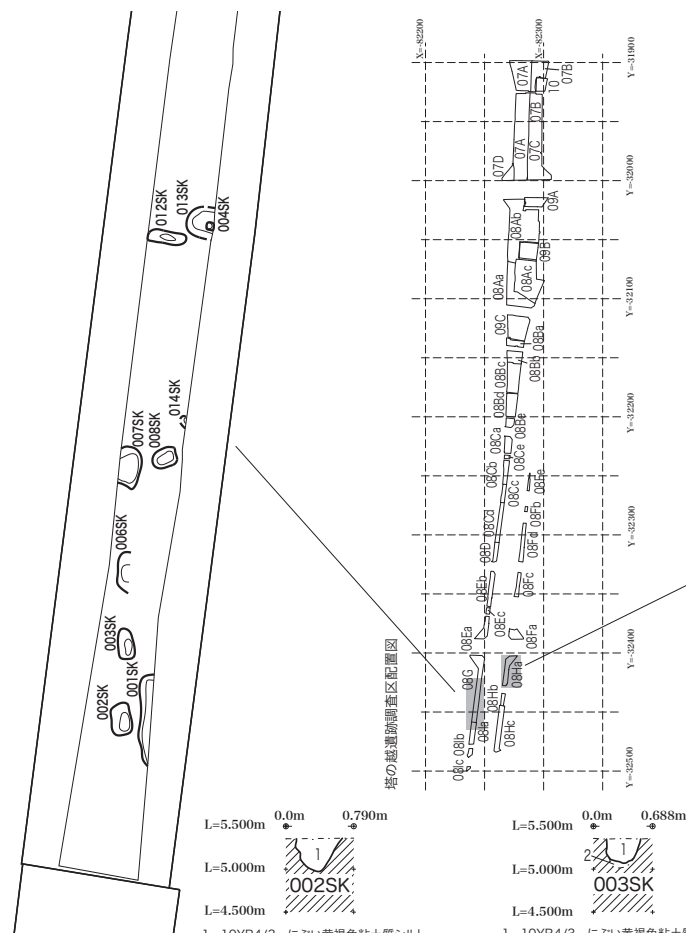


図 206 塔の越遺跡
08G 区遺構平面図

塔の越遺跡調査区配置図

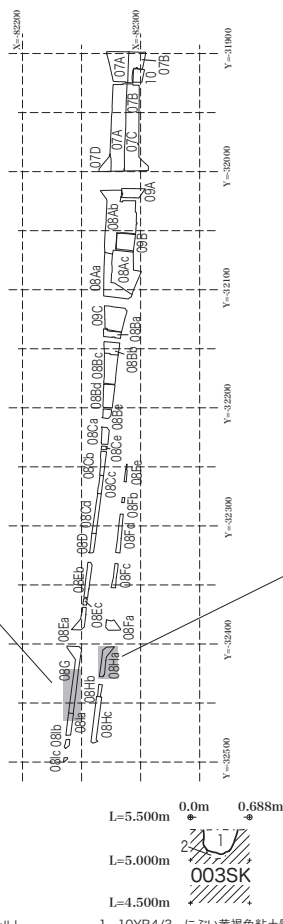


図 207 塔の越遺跡 08G 区土坑土層セクション図

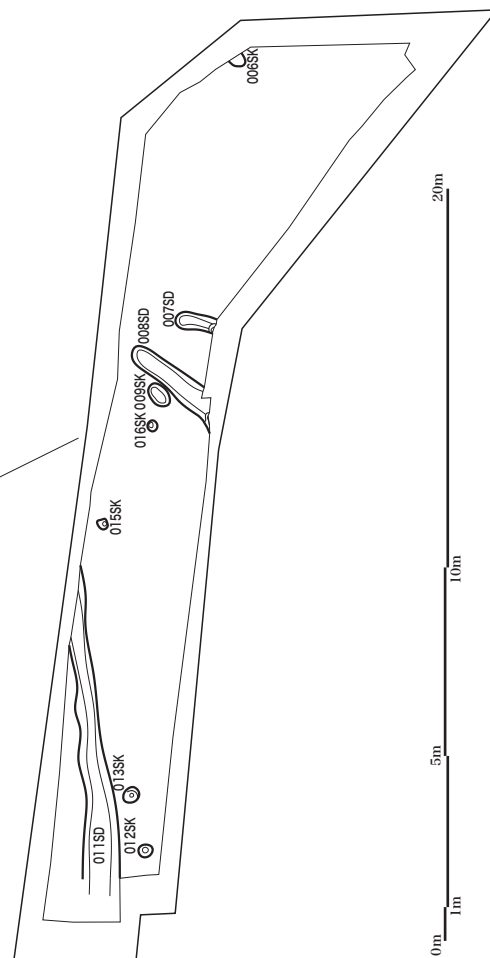


図 209 塔の越遺跡 08Ha 区遺構平面図

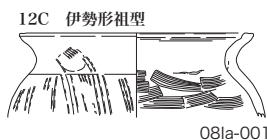


図 208 08Ic 区
出土遺物実測図 検 2

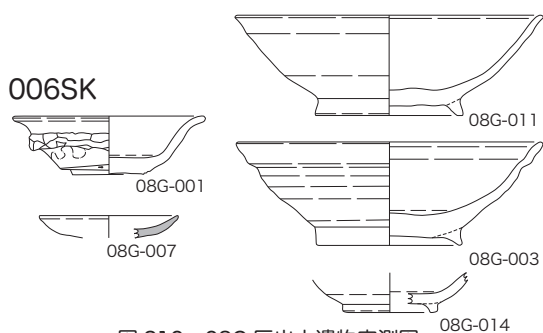


図 210 08G 区出土遺物実測図

(1) 中世

A. 概要

中世の遺構は 07 区でまとまっている以外は散漫で、遺物の分布も同様である。以下では主要な遺構・遺物について述べる。

B. 遺構・遺物

● 08I・G 区

08I 区では東端に土坑群があるが、時期は不明で、

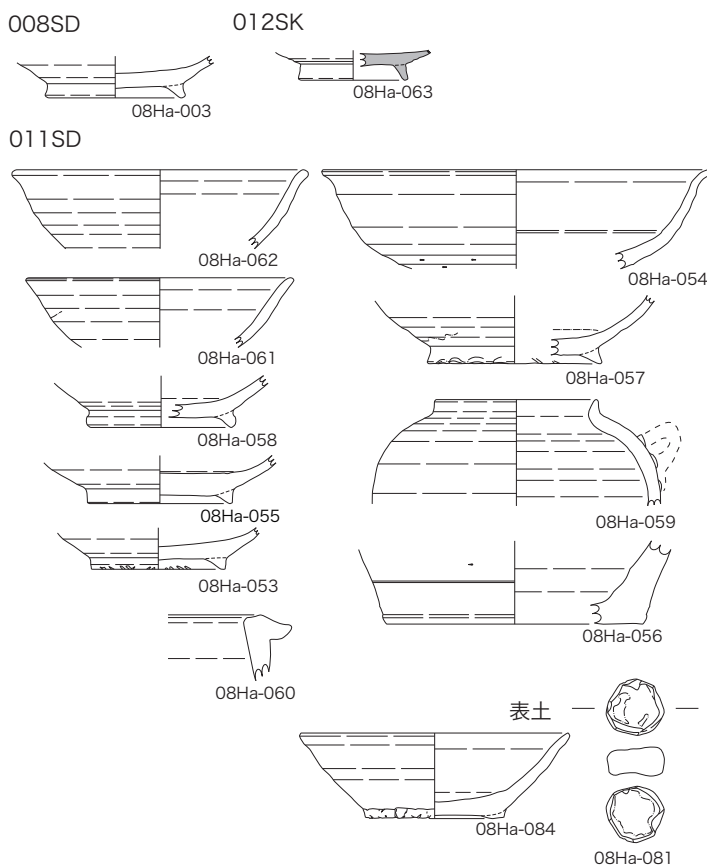


図 211 08Ha 区出土遺物実

08G 区との関連でいえば、中世に属す可能性がある。

08G 区西部では東西と南北の長軸をもつ土坑群が展

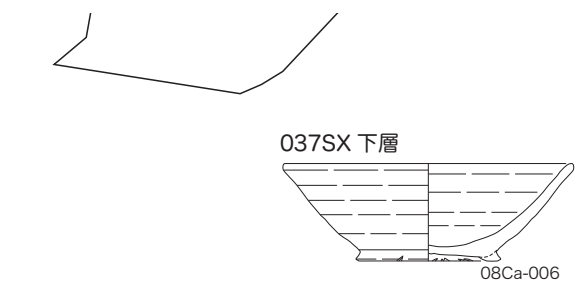


図 214 08Ca 区出土遺物実測図

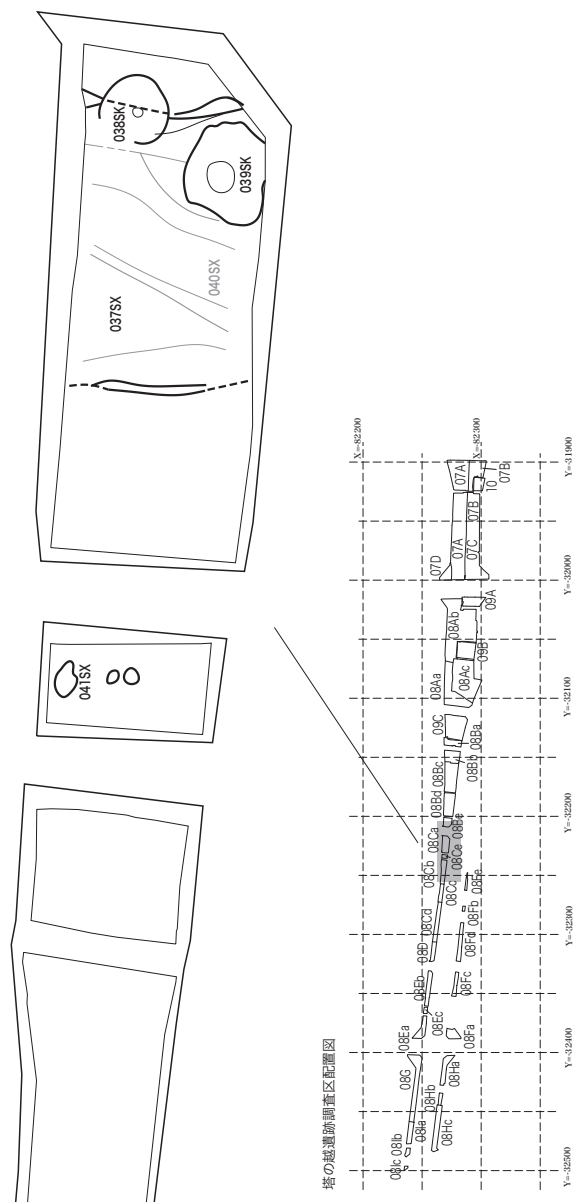
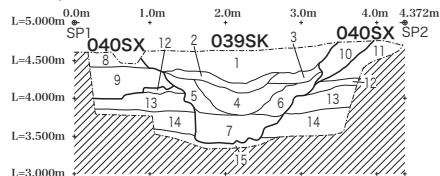


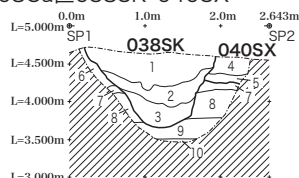
図 212 塔の越遺跡 08Ca 区遺構平面図

08Ca区039SK・040SX



- 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルトの斑土 039SK埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土 7.5Y4/1 灰色シルト質粘土の層状 中間に植物遺体(草本)の薄層を挟む 039SK埋土
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト 2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルトのブロック・斑土 039SK埋土
- 10Y4/1 灰色シルト質粘土 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土 中間に植物遺体(草本)の薄層を挟む 039SK埋土
- 10Y4/1 灰色シルト質粘土・2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト斑入 039SK埋土
- 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト・2.5GY5/1 オリーブ 灰色粘土質シルトの斑土 5Y2/1 黒色シルト質粘土斑入 039SK埋土
- 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土・5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土のブロック含む 039SK埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂の斑土 10YR3/2 黒褐色粘土質シルトの小斑土含む 040SX埋土
- 5Y4/1 灰色シルト質粘土 植物遺体(草本・木本・加工木片)多く含む 040SX埋土
- 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂・2.5Y2/1 黒色シルト質粘土の斑土・ブロック 040SX埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂 基盤層
- 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト 基盤層
- 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土 基盤層
- 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土 基盤層
- 10YR2/1 黒色シルト質粘土(泥炭) 基盤層

08Ca区038SK・040SX



- 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルトの斑土 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト斑入 炭化物少し含む 038SK埋土
- 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂の斑土(層状)・10YR2/1 黒色粘土質シルト斑入 038SK埋土
- 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂・10Y5/1 灰色細粒砂の互層 038SK埋土
- 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂の斑土 10YR3/2 黒褐色粘土質シルトの小斑土含む 040SX埋土
- 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂・2.5Y2/1 黒色シルト質粘土の斑土・ブロック 040SX埋土
- 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂 基盤層
- 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト 基盤層
- 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土 基盤層
- 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土 基盤層
- 10YR2/1 黒色シルト質粘土(泥炭) 基盤層

図 213 08Ca 区遺構土層セクション図

開し、006SK には古瀬戸灰釉小皿が伴ない、墓坑の可能性はある。

● 08Ha 区

溝や小穴が検出されたが、性格は不明である。

011SD 010SE 廃絶後に設けられた上部の土坑に重複して掘削されており、明らかな時期差がある。

● 08Ba・09C 区

近世の溝に並行する 08Ba 区 045SD と 09C 区 204SD は一連で、そこに 08Ba 区 041SX が重複している。

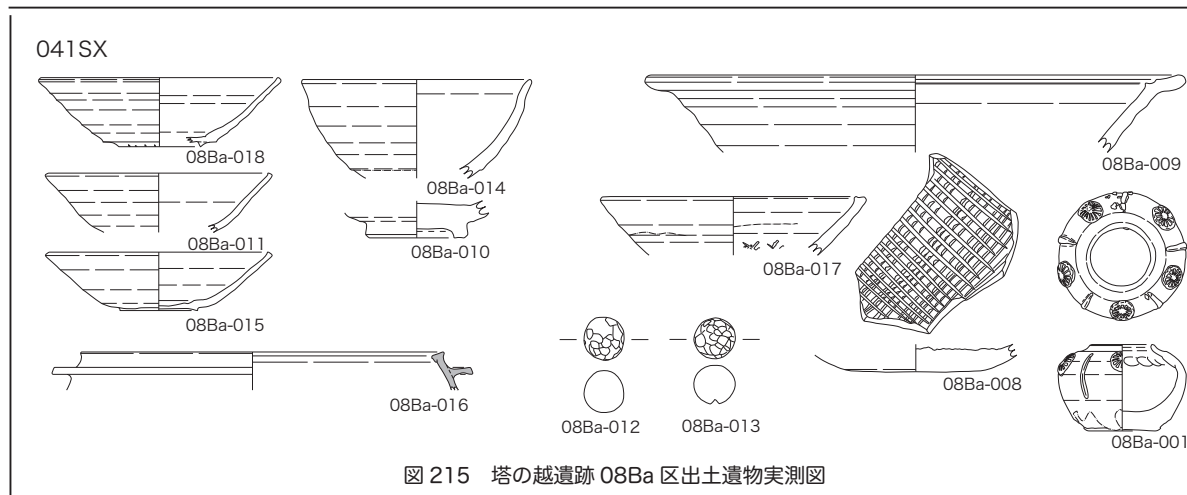


図 215 塔の越遺跡 08Ba 区出土遺物実測図

204SD 断面では北側が一段浅くなっているが、時期の異なる溝が重複した形跡は無い。これが屋敷地の区画溝かどうかについて、09C区250SPも近い時期であるが溝肩に接しており同時存在とはならないこと、また対応する柱穴は無いので建物が展開する可能性は低いと判断する。

これらの遺構は、いずれも山茶碗10型式から11型式(脇之島)が出土しており、15世紀前半に属す。

09C区204SD

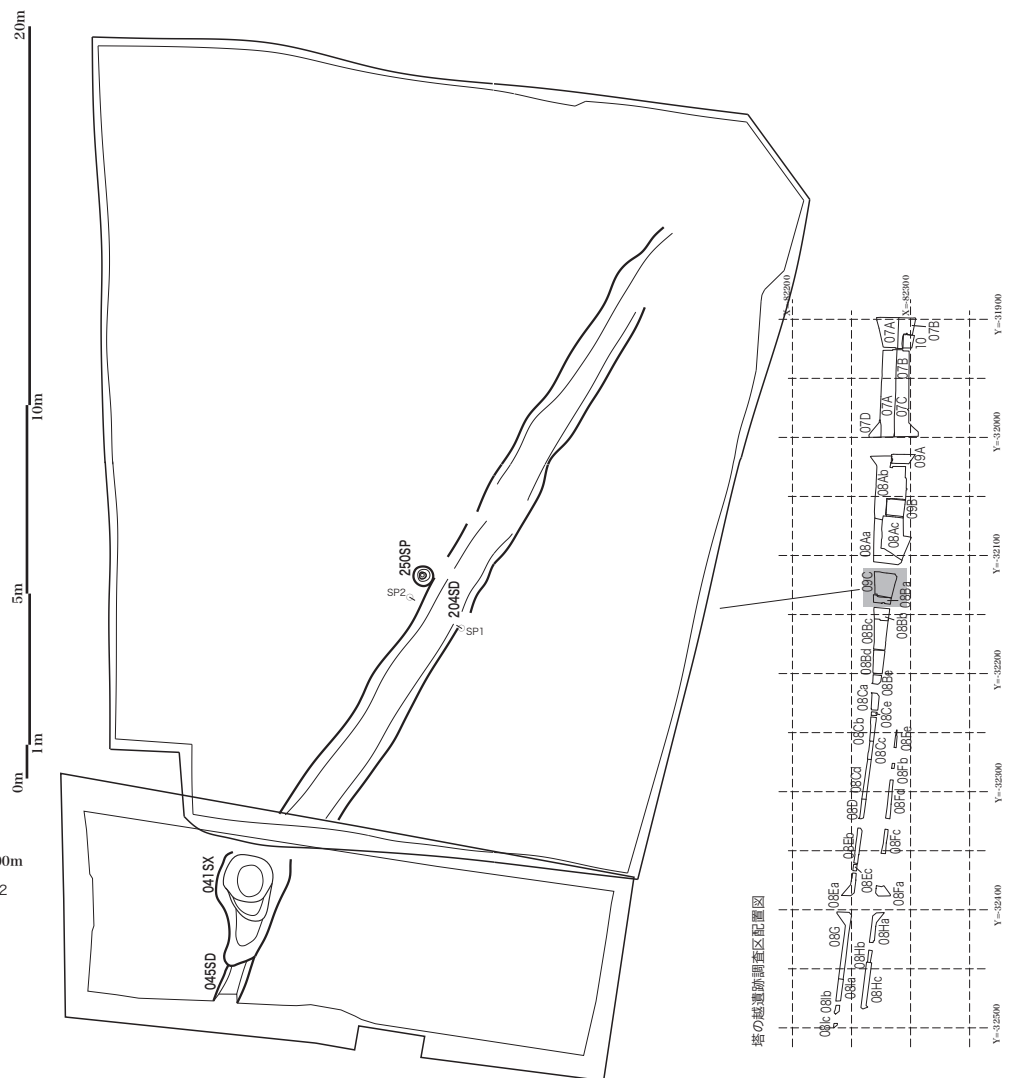
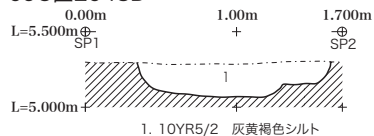


図 216 塔の越遺跡09C区遺構平面図、204SD土層セクション図

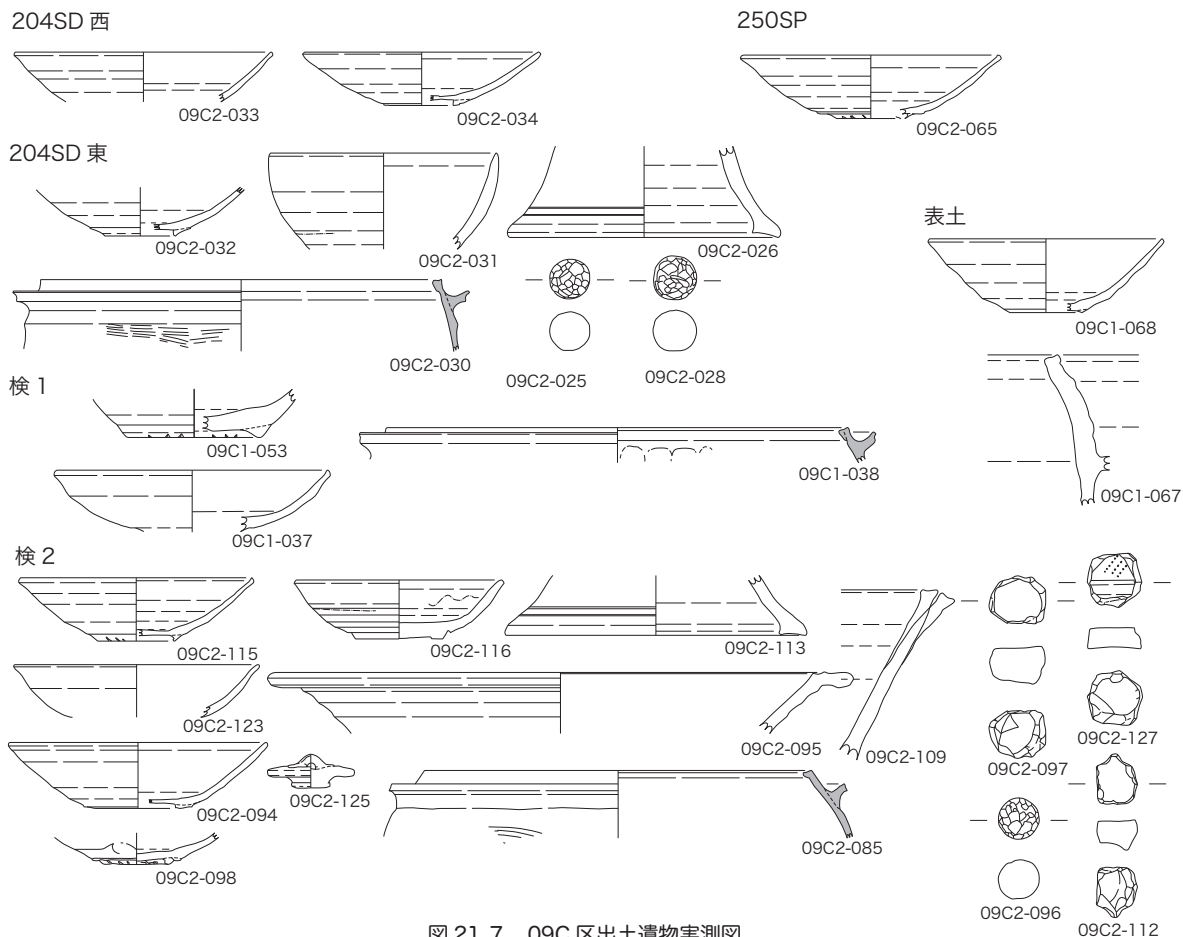


図 217 09C区出土遺物実測図

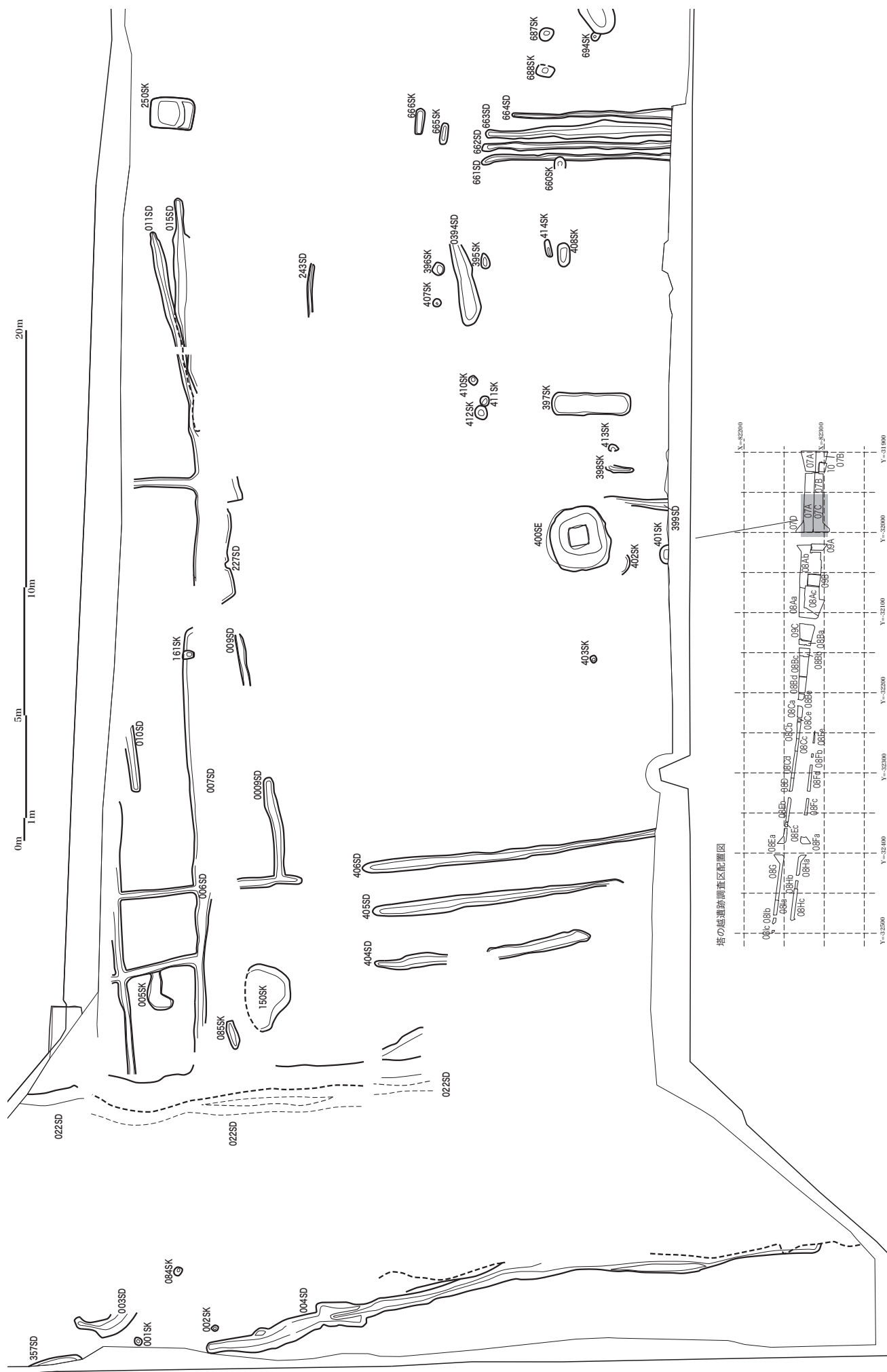


図 218 塔の越遺跡 07A・C 区遺構平面図

● 07 区

調査区西端の南北に走る 004SD は微妙に屈曲している他は南北軸、東西軸ともに直線的、もしくは明らかに屈曲する。

近世溝と重複する 022SD 以東では、東西に走る 009SD 以北で方角に直交する溝群があり、畠の区画の可能性もある。以南では、404～406SD、661～664SD のように南北軸を基調に溝が掘削されている。

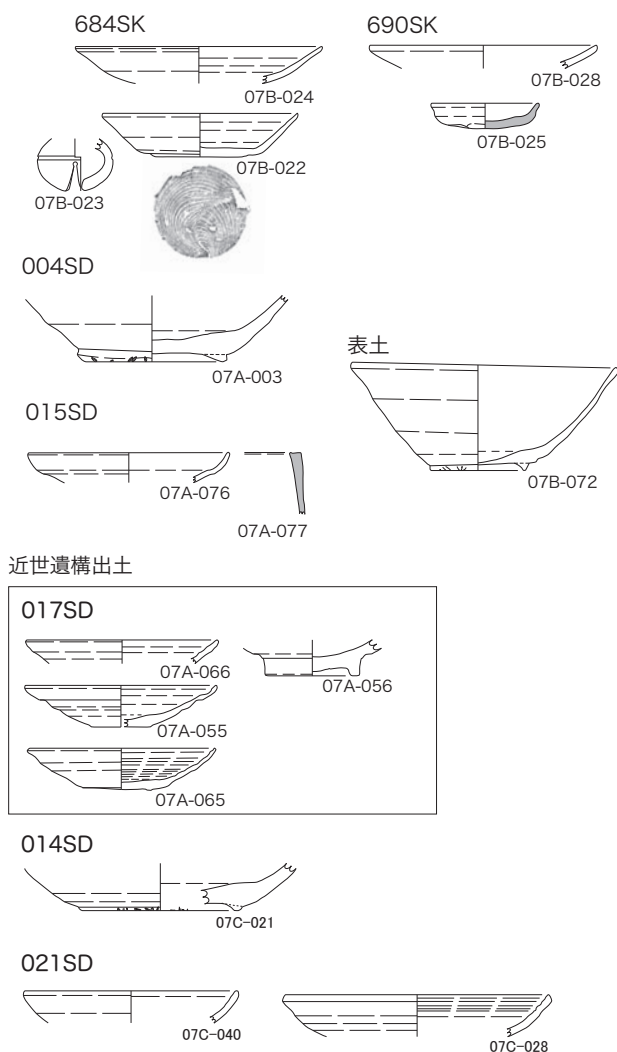


図 219 塔の越遺跡 07A・B・C 区出土遺物実測図

畝溝というには広がりもないので、それとは異なるのだろう。

その中で問題になるのが 400SE であるが、周辺に屋敷地を窺わせる遺構配置は認められない。むしろ、南北平行溝群を挟んで東に位置する 690SE 周辺で柱穴群や大小の土坑が展開していること、東の 030SD・10 区 05SD が幅 2～2.5m を測り、断面逆台形のしっかりした溝であることとの関連の方に注意が引かれる。

030SD や 10 区 05SD の西側にある 067SD・720SD・10 区 09SD はいずれも斑土が堆積し、掘削後にほとんど埋め立てられたものと推測される。部分的には溝状の土坑が連続したものともいえるが、性格は不明である。

なお、07A 区北東端には南北軸の小溝が平行する様子が認められ、これらのほうが畝溝である可能性が高いと考える。

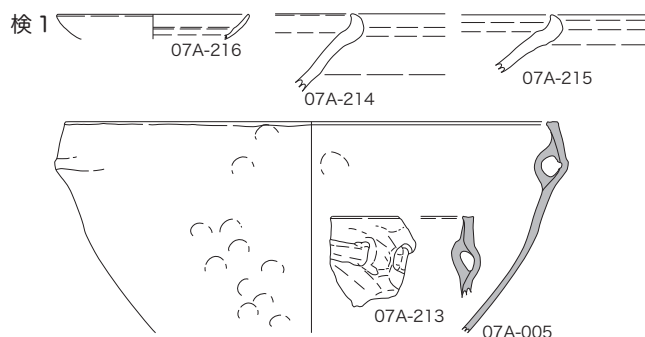


図 220 塔の越遺跡 07 区遺構外出土遺物実測図

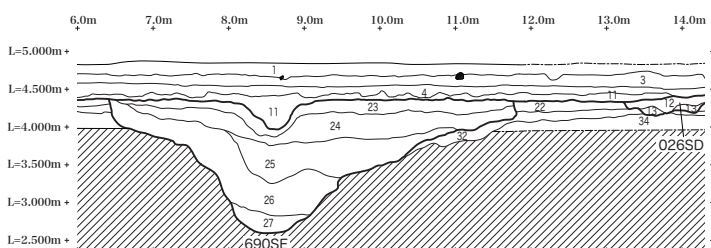


図 221 塔の越遺跡 07B 区 690SE 土層セクション図

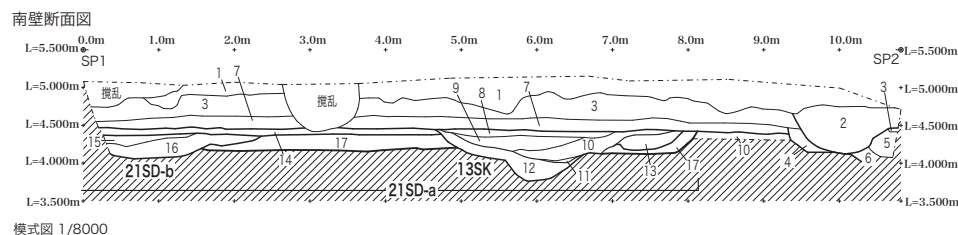
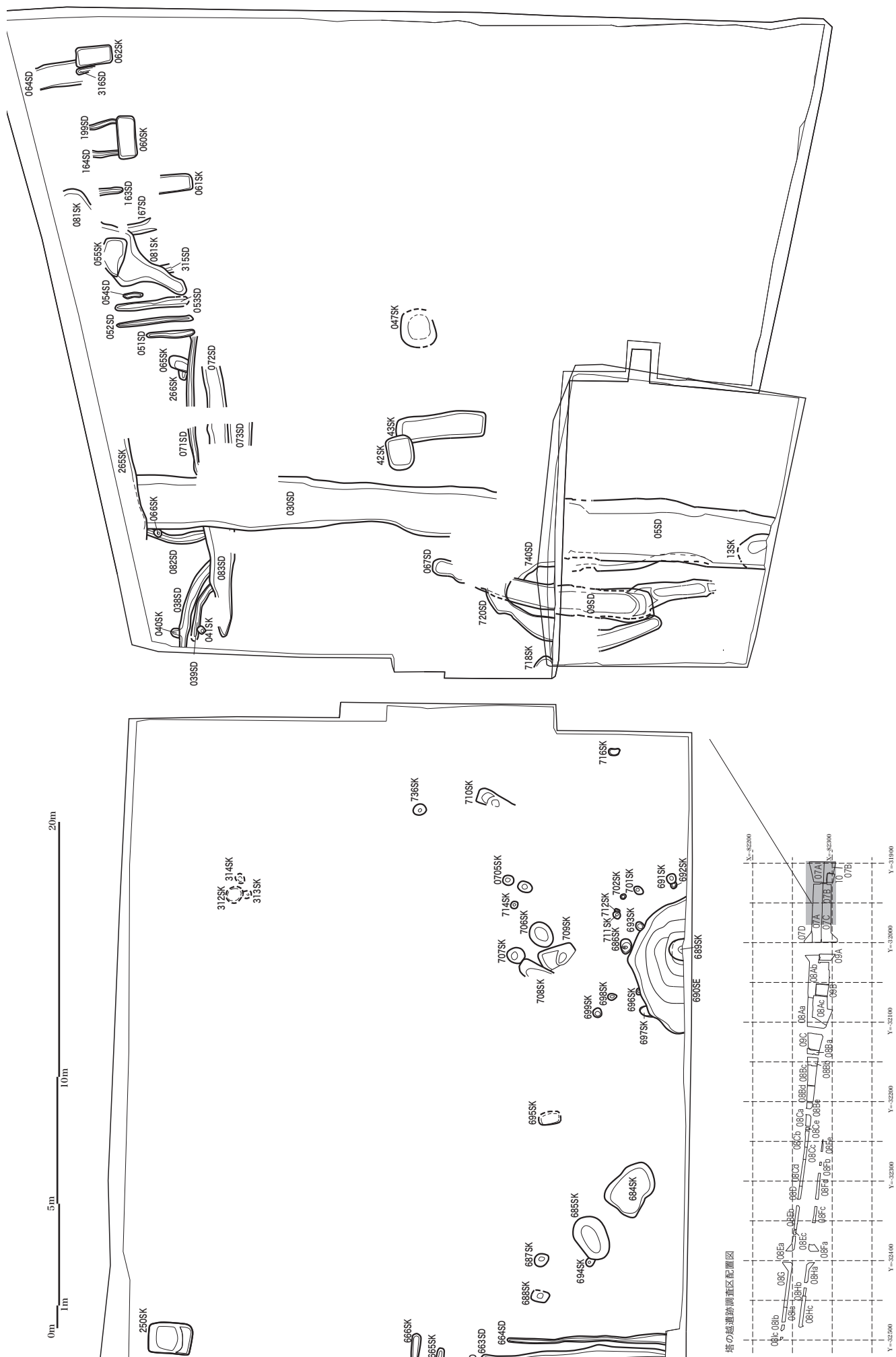


図 222 塔の越遺跡 10 区南壁土層セクション図

図 223 塔の越遺跡 07A・B 区、10 区遺構平面図



(4) 近世

A. 概要

調査区全体でも中世と同様に 07 区・10 区を除いて遺物の分布は散漫で、遺構も耕作地？に関わるものがほとんどである。井戸は 07B 区で 1 基検出した以外は皆無であった。以下では主要な遺構・遺物について述べる。

B. 遺構・遺物

● 08Eb・Ec 区

市道を挟んで調査した Eb 区西端、Ec 区東端には 033SD があり、それに切られるかたちで 08Ec 区で 034ST が検出されている。前者の幅は 3.5m、深さは約 90cm である。土層断面では再掘削の痕跡が認められたが、堆積層に水流は窺えない。後者は 033SD より 30cm 程浅い。底部付近に酸化鉄・酸化マンガン斑の沈着が認められたことから「ST」記号を付したが、島畠地帯によく認められる水路兼用の带状水田の可能性が高い。

● 08Fa 区

調査区の南北端で東西方向の溝を検出した。畠の区画溝であろう。

● 08Ba・Bb・Bc 区、09C 区

08Bc 区 001ST 幅は 2.7m 前後の带状の水田である。両縁に沿って一段深くなり、溝状の凹地が続く。底面には凹凸がある。

なお、001ST と軸線が一致する 004SD は 001ST 埋没後に掘削されたもので、途中で終わっている。掘削時期は近現代である。

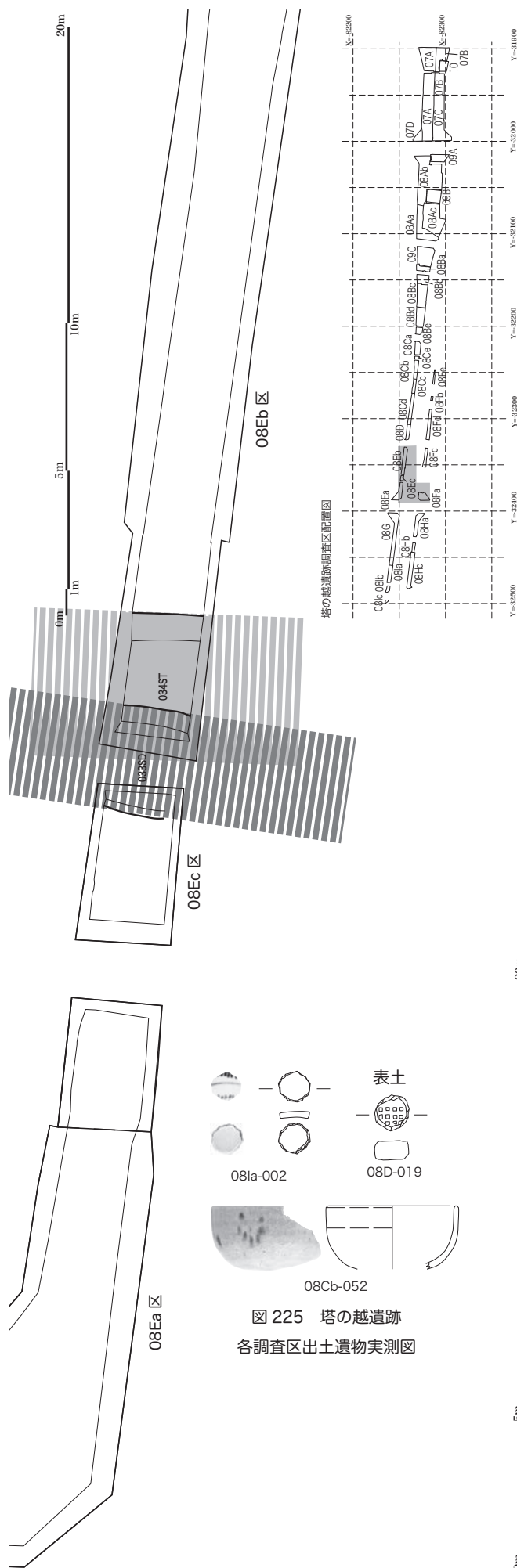


図 225 塔の越遺跡
各調査区出土遺物実測図

図 224 塔の越遺跡 08Ea・08Ec-Eb・08Fa 区遺構図

08Bb 区 040SD・08Ba040SD、09C 区 201SD 直線的にのびる溝で、幅 3～3.5m、深さは約 50cm を測る、幅広い逆台形の断面形を呈する。底面標高は 08Bc 区から 09C 区にかけて 5cm ほど下降し、08Bb 区では堆積層の最下部にラミナも認められたので水流のあったことが窺える。上部堆積層は斑土からなり、廃絶に伴ない埋め立てられたようである。

09C 区 202SD 幅 1～1.3m、深さ約 60cm を測る。201SD とは底面が連続せず、10cm ほど深くなっている。201SD とは異なって斑土の堆積層は認められないので、埋め立てられることなく溝として存続している。常時ではないにしても、排水機能がかったものと推測する。

09C2156SD 幅 30cm、深さ約 40cm の溝で、南は切れて、北へ深くなる。08Bb 区 076SD を含めて畠の区画溝であろう。

● 08Aa 区

東西に小溝群があり、それを南北軸の溝や土坑が切るが、中には小溝に切られている土坑もあるので、大きくは 3 時期に分かれる。小溝については畠の畝溝の可能性があり、南北軸の土坑も耕作に伴うものであろう。

001SD 08Aa 区から 08Ac 区を南北に貫く。幅 2～2.5m、深さは約 70cm を測る。西側が少し深くなり、底面は平ではない。最上層の西寄りに洪水砂の堆積が認められ、類似層は 001SD 以西にも及んでいるが、この溝が洪水で埋積したわけではない。近代に属するであろう。

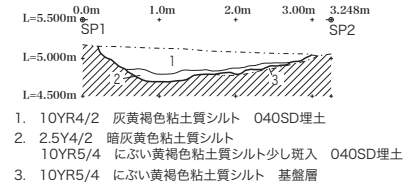
002・003SD 両者には切り合い関係があり、後者が新しい。002SD は断面逆台形のしっかりした溝で、再掘削されている。最下層にはラミナが形成されて還元

状態でもあるので、水流がかったのであろう。

147SD 001SD に先行する。121SD と平行しており、「道」の側溝かもしれない。

183SD 147SD を切るが、001・002SD には切られる。003SD につながる可能性がある。

08Bb区040SD



08Bc区001ST

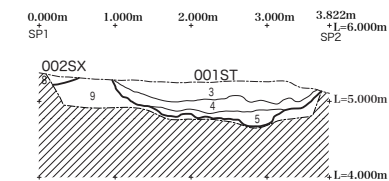
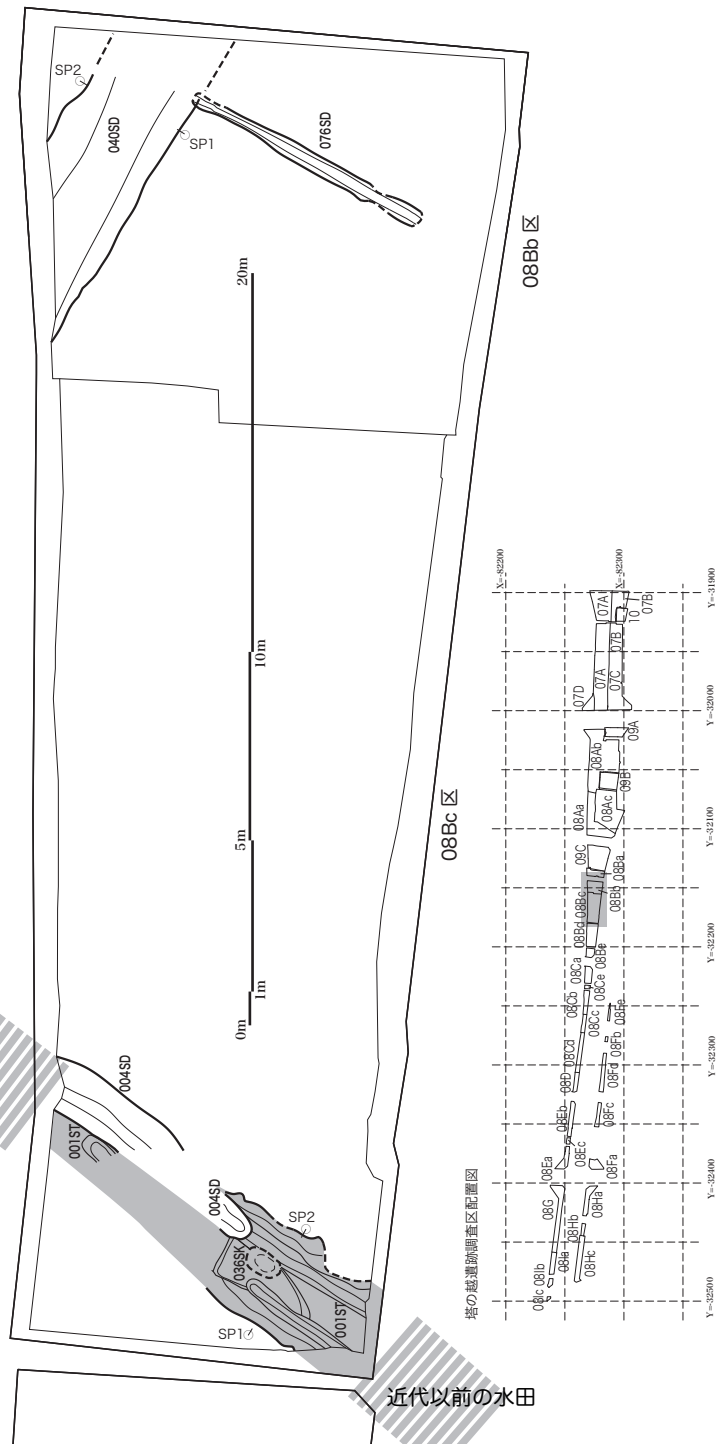
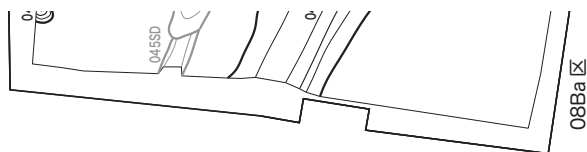


図 227 塔の越遺跡 08B 区各遺構土層セクション図



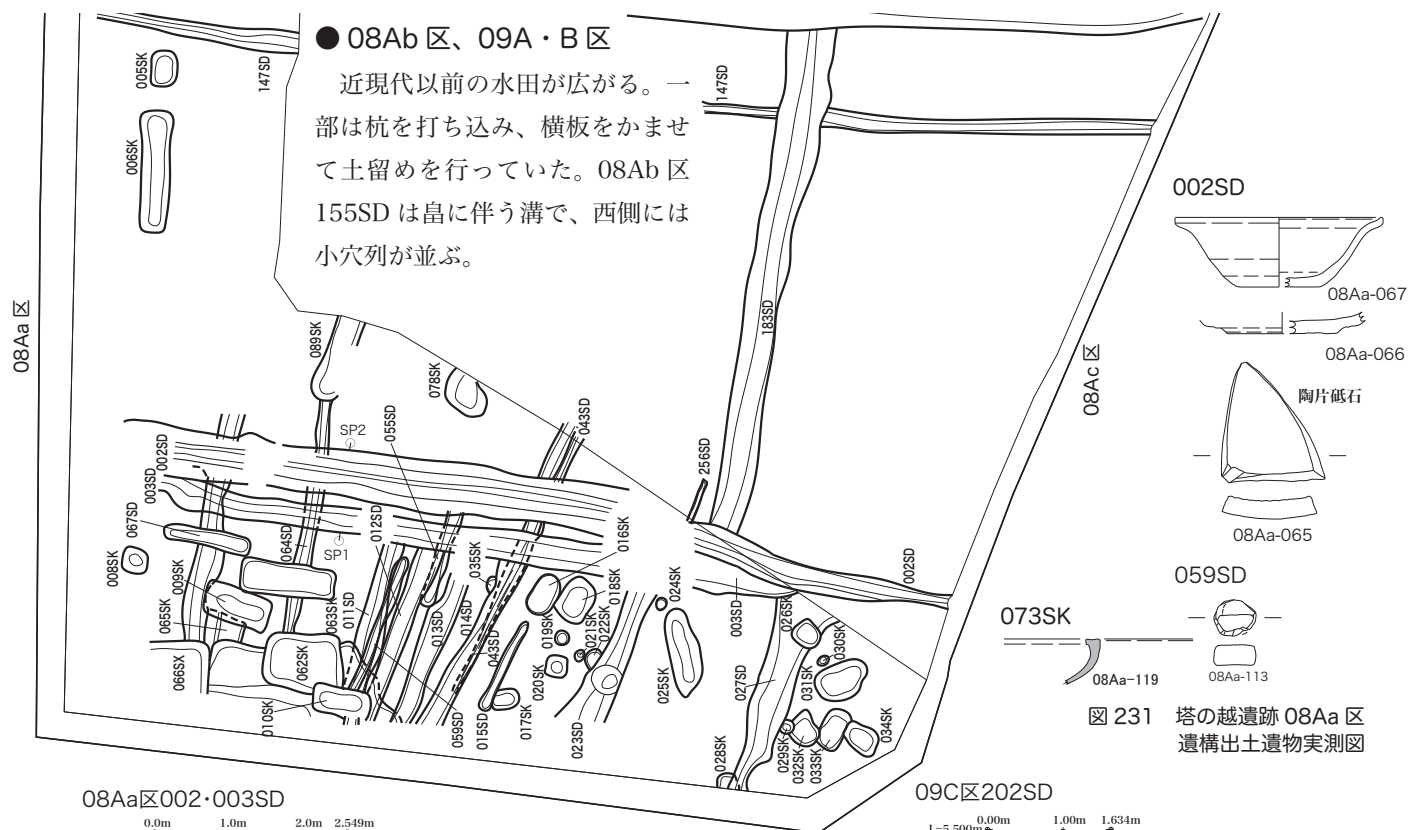


図 231 塔の越遺跡 08Aa 区
遺構出土遺物実測図

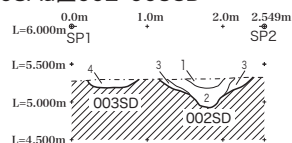


図 230 塔の越遺跡
08A 区遺構土層セクション図

1. 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト・2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂(斑状・層屑状)含む 002SD埋土
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂斑入 002SD埋土
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂斑入 002SD埋土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂斑入(3より斑入少) 003SD埋土

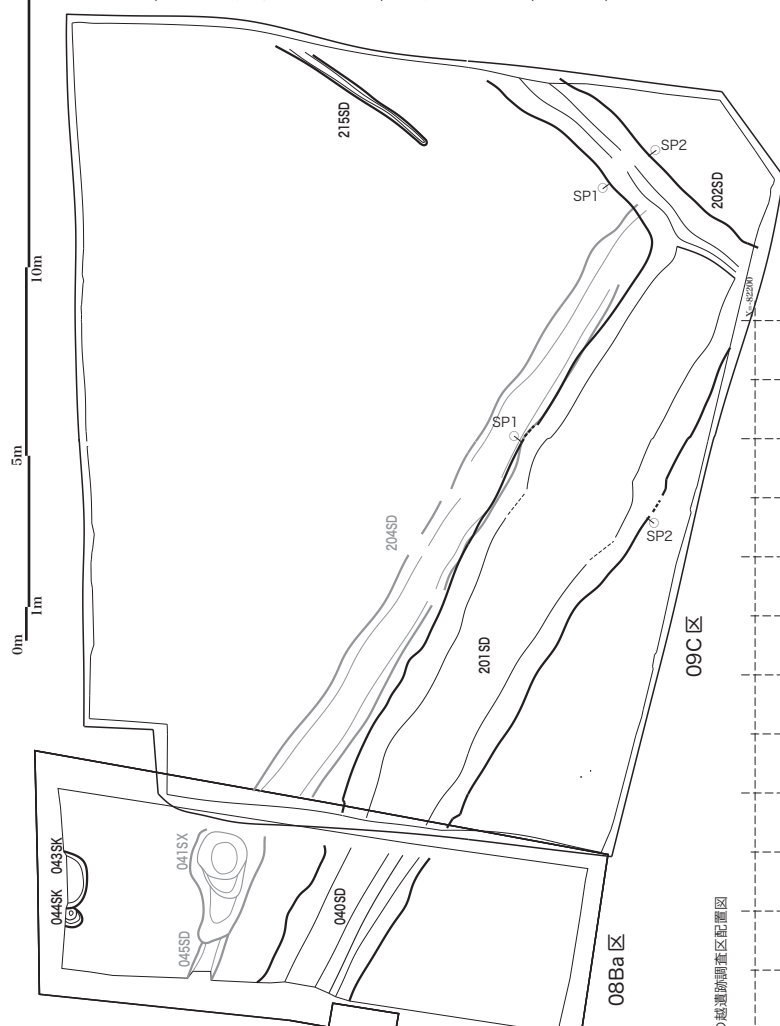
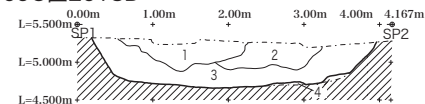


図 229 塔の越遺跡 08Ba・09C・08Aa-c 区遺構図



1. 7.5YR4/3 褐色シルト
2. 5Y6/1 灰色粘質シルト
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細粒砂



1. 5Y6/1 灰色粘質シルトと 10YR6/3 にぶい黄橙色シルトとの斑土
10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック含む
2. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルトと 5Y6/1 灰色粘質シルトとの斑土
1層より10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロックを多く含む
3. 5Y6/1 灰色粘質シルトと 10YR6/3 にぶい黄橙色シルトとの斑土
4. 10YR6/4 にぶい黄橙色極細粒砂(地山)

図 232 塔の越遺跡 09C 区遺構土層セクション図

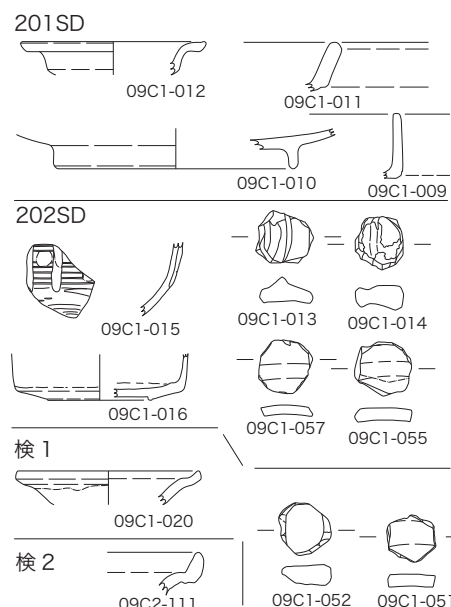
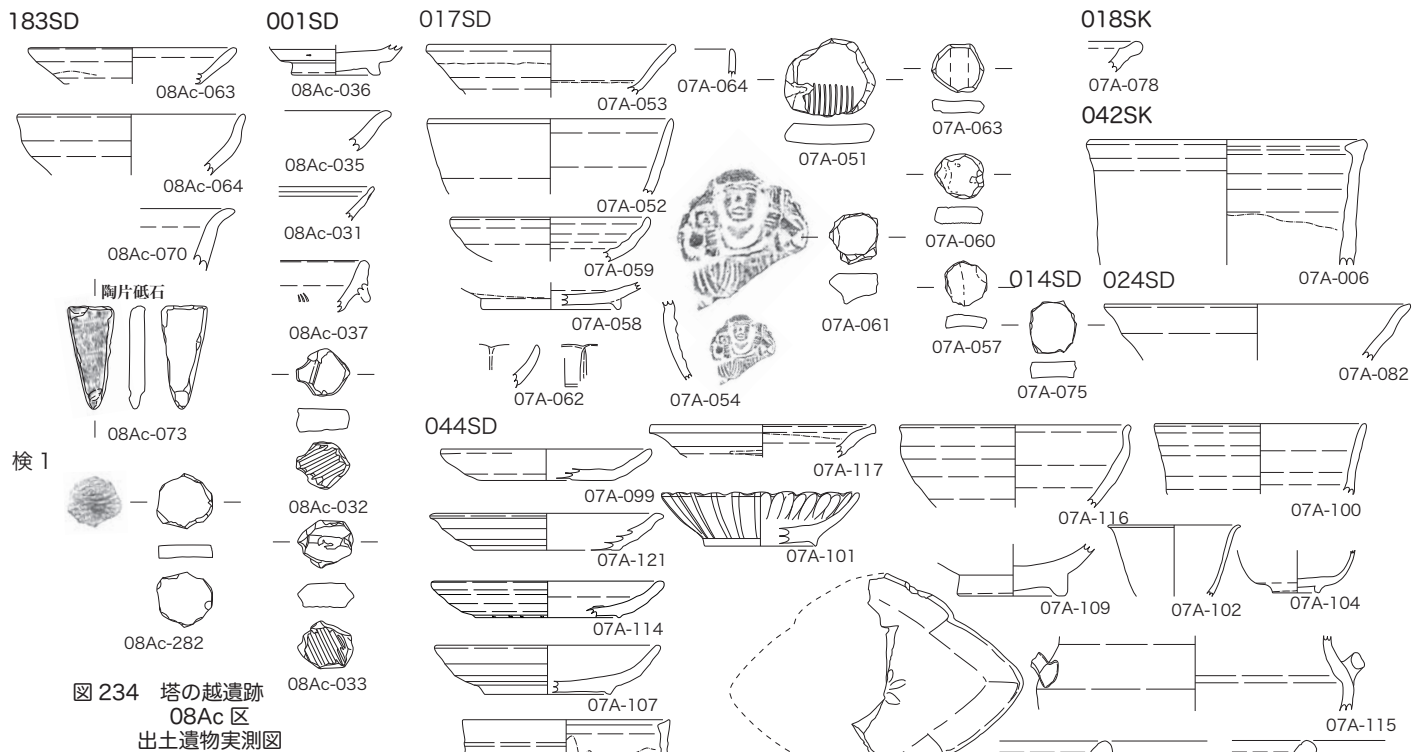


図 233 塔の越遺跡 09C 区遺構出土遺物実測図

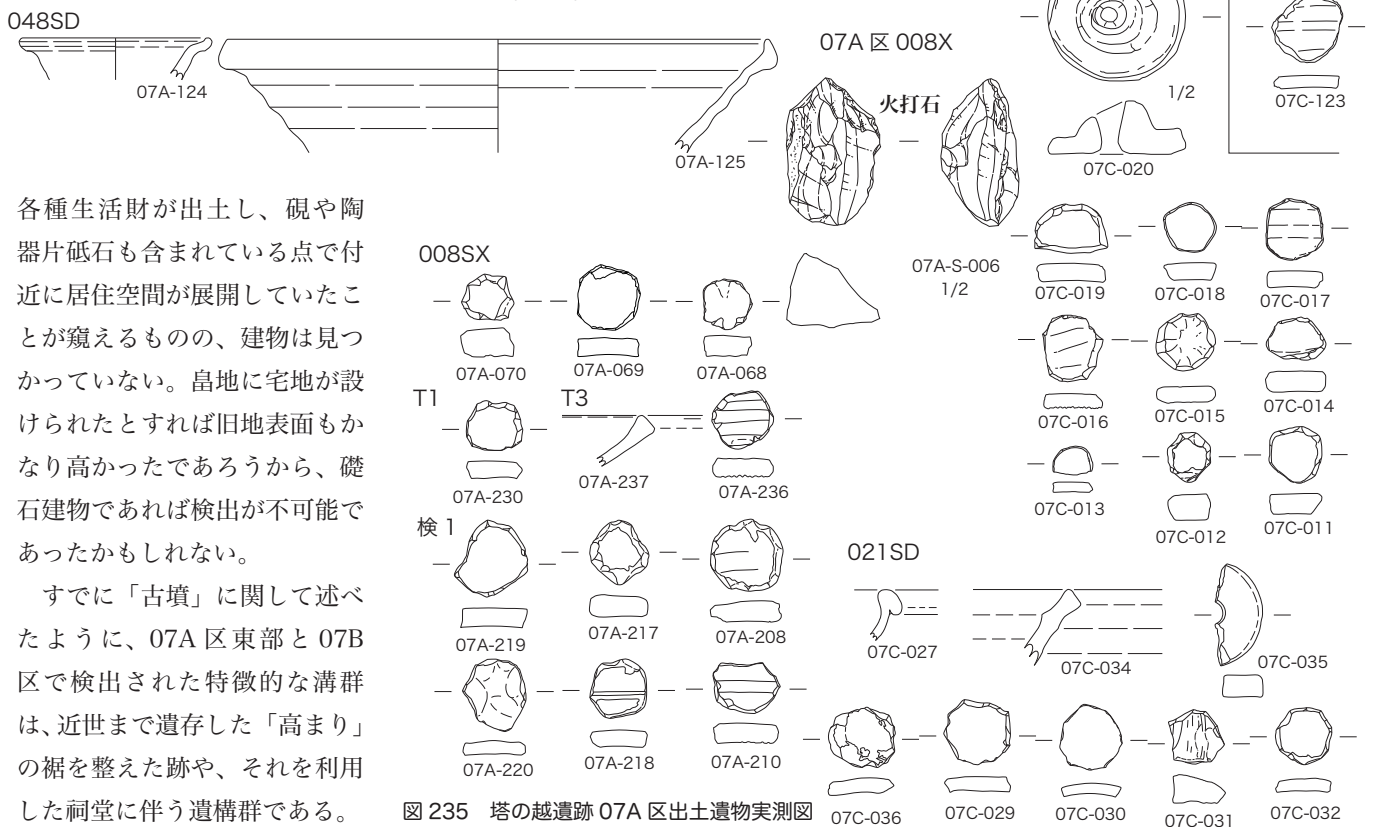


● 07 区

07A 区西部や 07C 区には耕作に伴う溝が展開する。

井戸 (07B 区 700SE) は 07B 区東部に位置し、付近では溝が複雑に走って、耕作地の様相は窺えない。

それに対して、07A・B 区を南北に走る 044SD からは



各種生活財が出土し、硯や陶器片砥石も含まれている点で付近に居住空間が展開していたことが窺えるものの、建物は見つからない。畠地に宅地が設けられたとすれば旧地表面もかなり高かったであろうから、礎石建物であれば検出が不可能であったかもしれない。

すでに「古墳」に関して述べたように、07A 区東部と 07B 区で検出された特徴的な溝群は、近世まで遺存した「高まり」の裾を整えた跡や、それを利用した祠堂に伴う遺構群である。

最終的には 07B 区 725SD・

図 235 塔の越遺跡 07A 区出土遺物実測図

図 236 塔の越遺跡 07C 区出土遺物実測図

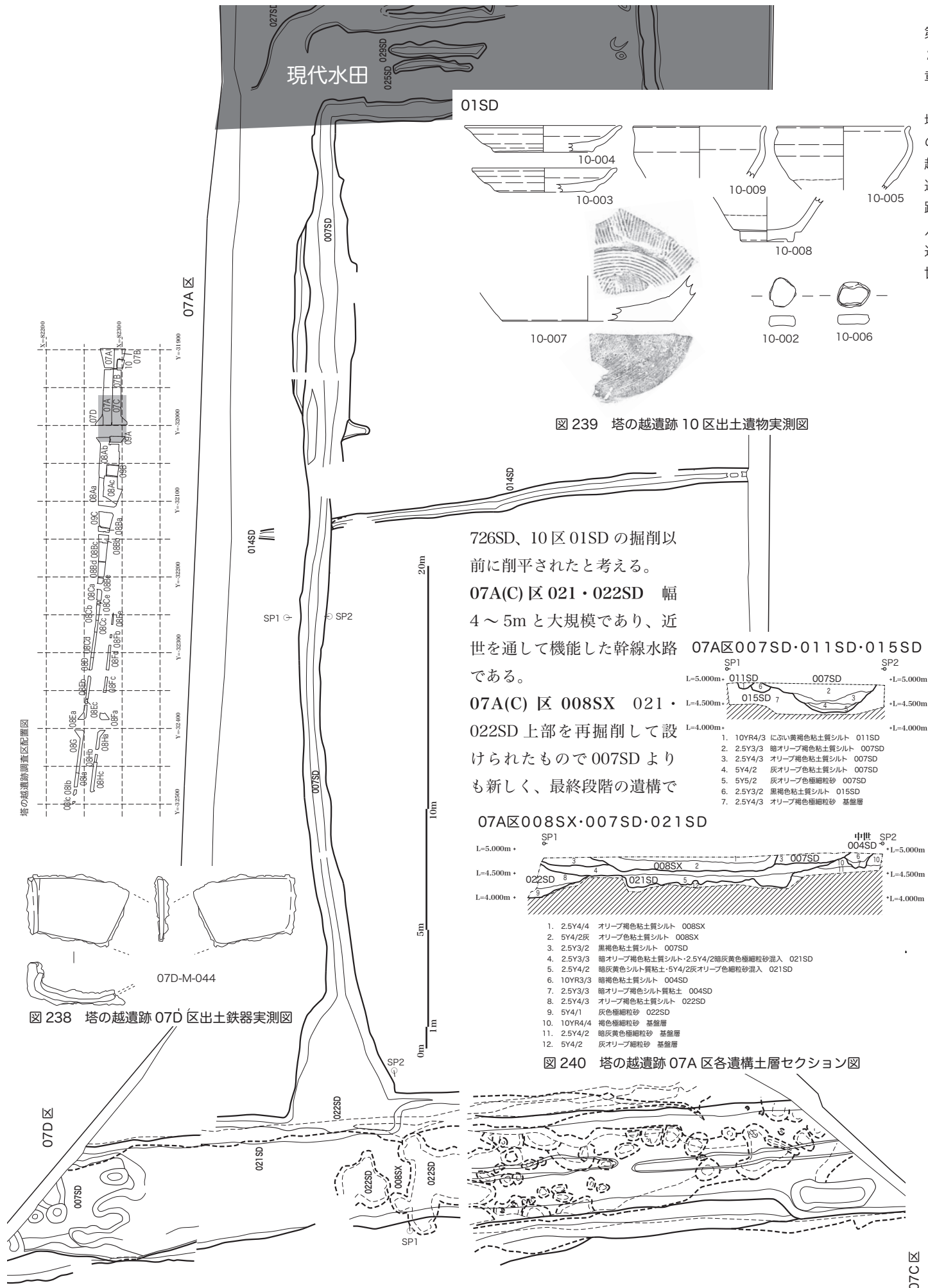
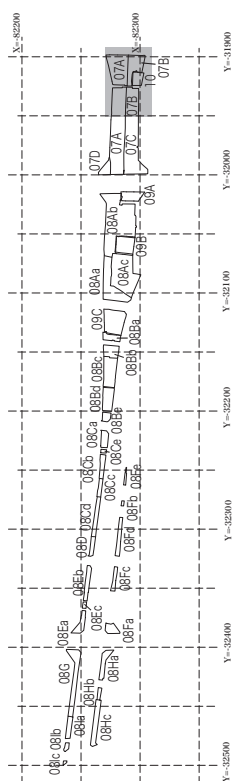


図 237 塔の越遺跡 07A-C-D 区遺構図



07A 区

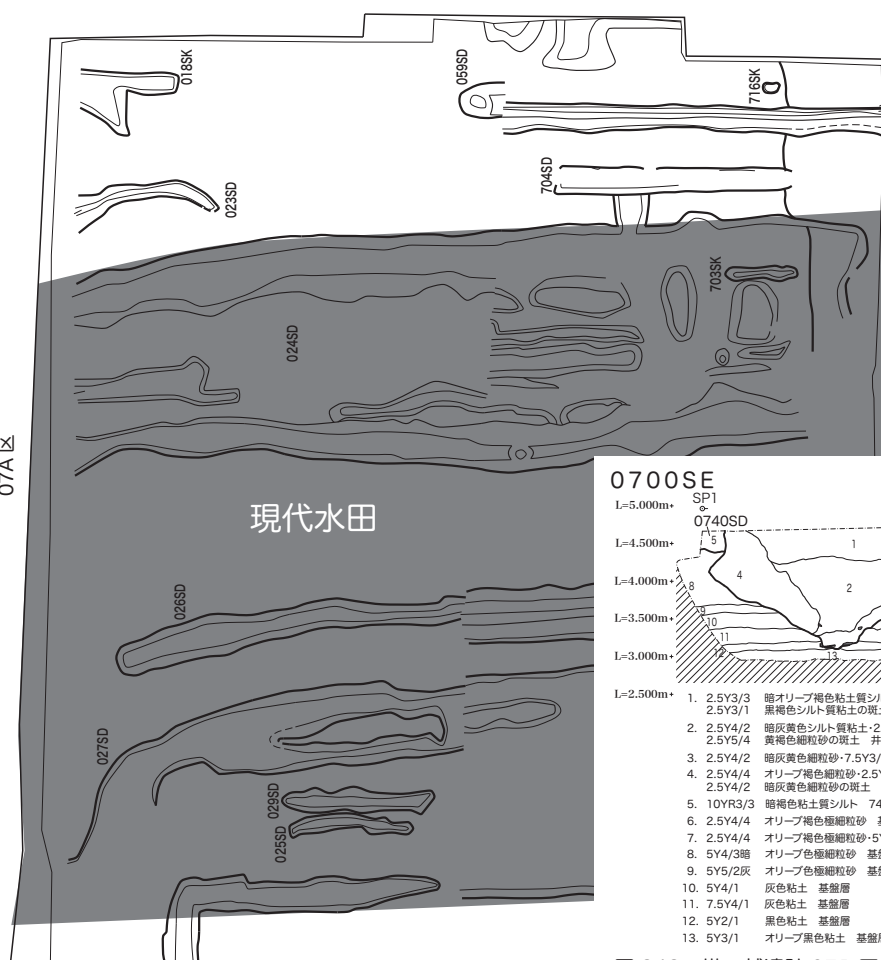


図 241 塔の越遺跡 07A-B・10 区遺構図

ある。加工円盤が集中する点で、注意を引く。火打石も 1 点出土している。

07A 区 007SD 幅 2.5m、深さ約 60cm の断面逆台形を呈する溝である。西は 021SD と切り合うが、プランがバチ状に広がることから、021SD に後続する溝につながって、導水していた可能性がある。

07A 区

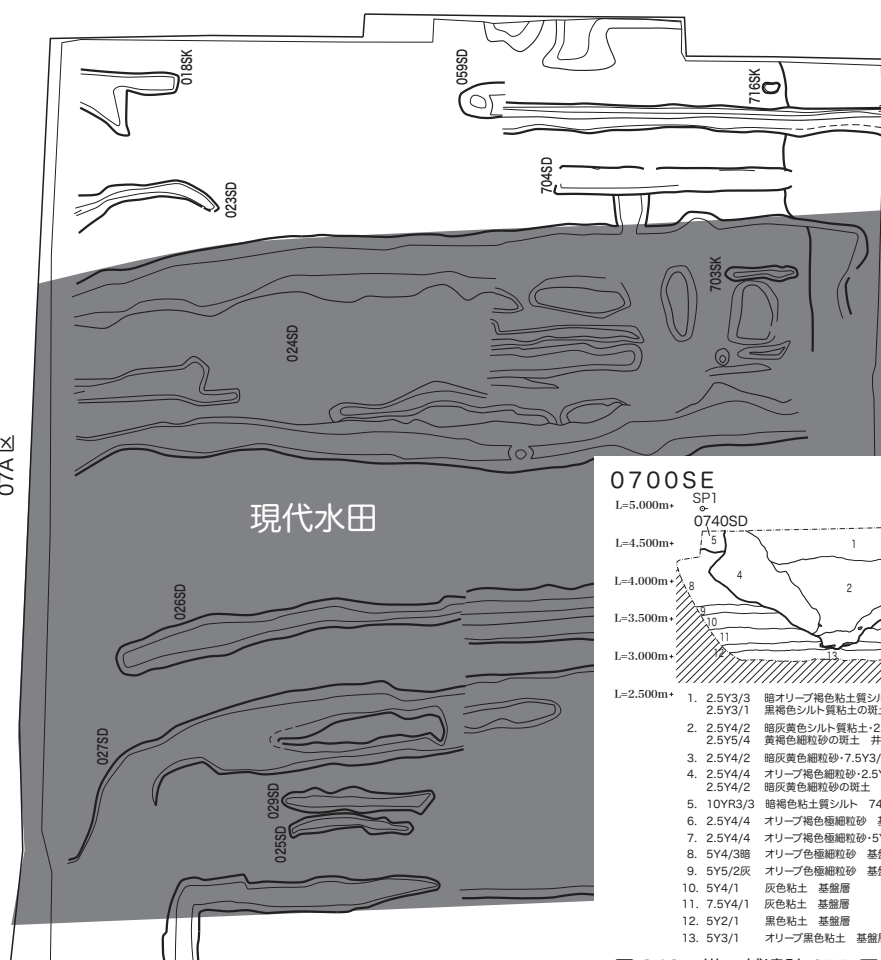


図 241 塔の越遺跡 07A-B・10 区遺構図

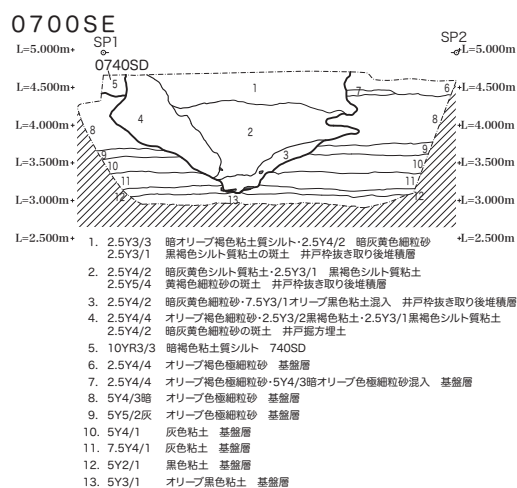


図 242 塔の越遺跡 07B 区 700SE 土層セクション図

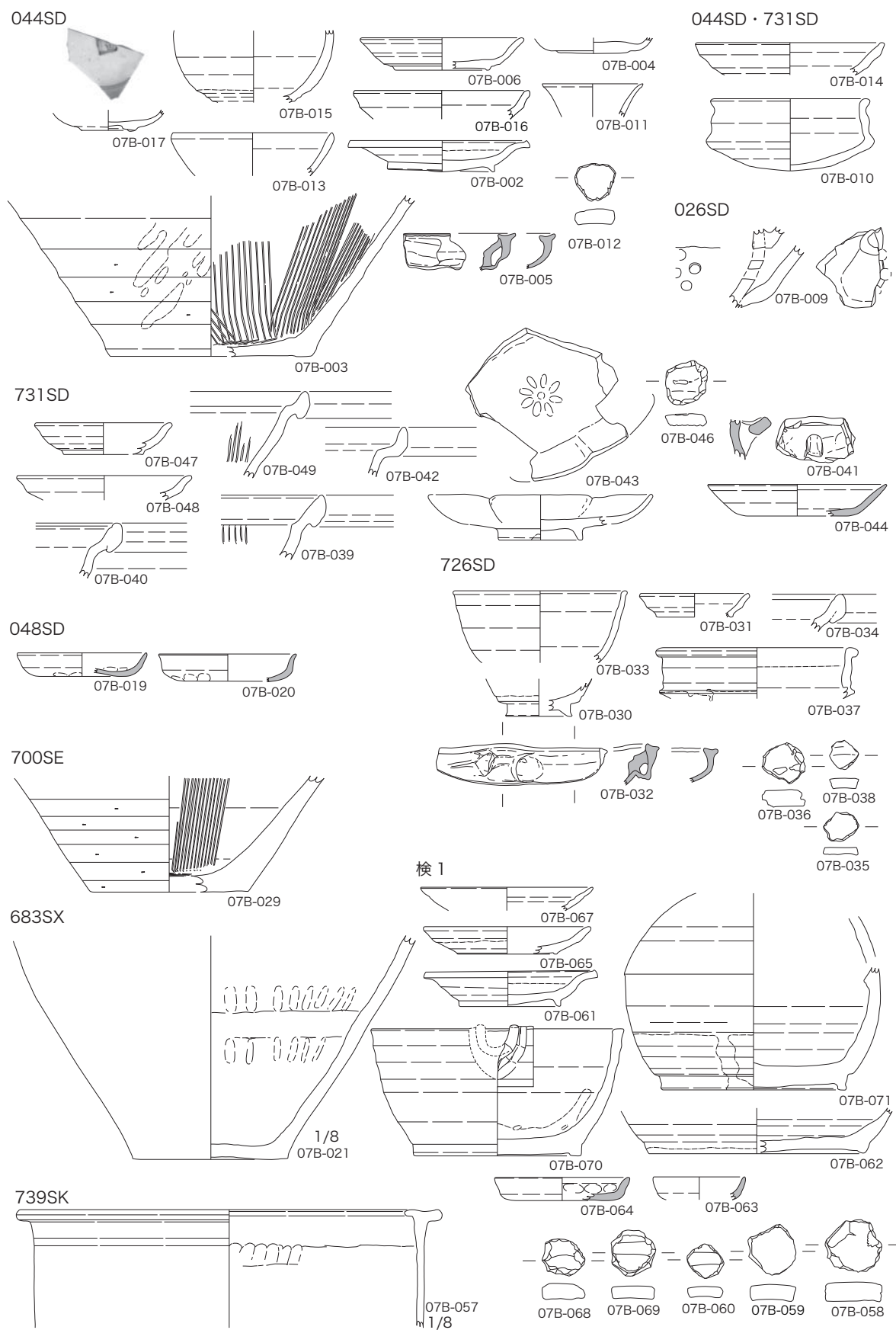


図 243 塔の越遺跡 07B 区出土遺物実測図

東部では南に折れ、その東に現代水田が南北に設けられていることは、その屈折が近世に先行する水田の存在を示すのであろう。

07A (C) 区 014SD 007SD に切られる規模の劣る溝である。畠の区画溝であろう。このあたりは出土遺物もわずかで、耕作地と推測する。

07A(B) 区 044SD・731SD・10 区 08SD いわゆる「古墳」の裾を通っており、墳丘を避けていることは明らかである。「古墳」が未だ存続していた時期に掘削された溝である。

07A 区 044SD では不明であったが、南部の 07B 区 731SD と 10 区 08SD には切り合い関係があるので 2

時期存在する。その南へは貫通せず、途中で終わっている。柱穴とは限らないにしても、小穴群が井戸（700SE）周辺に集まって、044SD 以東には広がらないことは、044SD が宅地の東を画する溝であったことを示すものとする。

07A 区 045SD・046SD・048SD、07B 区 730SD すでに述べたように、残存する「高まり（＝古墳）」の裾をめぐる溝であり、北では3条が重方形に重なるが、南は不明である。3条の溝に直接の切り合い関係は無いが、名古屋市高蔵遺跡の事例を参考にすれば外側から内側へという順序が想定される点で、「高まり」の裾がしだいに削られ縮小した様子が窺える。

さて、北側の3条は南へ折れて後、再び西へ折れる。東西方向も3条認められるので両者は整合している。この屈折が「高まり」へ至る斜路（階段）の存在を暗示しているとは、想像に過ぎるであろうか。

しかし、南北対称で南側も同形なのかわからないにしても、調査区内で「前方後方形」を匂わせるのはいかにもである。「前方部」と「後方部」の境を切断する 044SD・731SD は「高まり」の存在を否定しないものの、以前の場所の性格が途切れたことは示しているのだろう。10 区 07SD 下部に認められる溝が東で南に折れて 044SD の延長に一致しているのは、溝の配置が新たな段階にはいったことを示しているのだろう。

08B 区 725SD・726SD、10 区 01SD 前者では重複する2条の溝が確認されているが、10 区では不明である。「高まり」中心からやや南に寄っているとはいえ、東西に貫通していることは、とうに「高まり」が失せたことを示している。

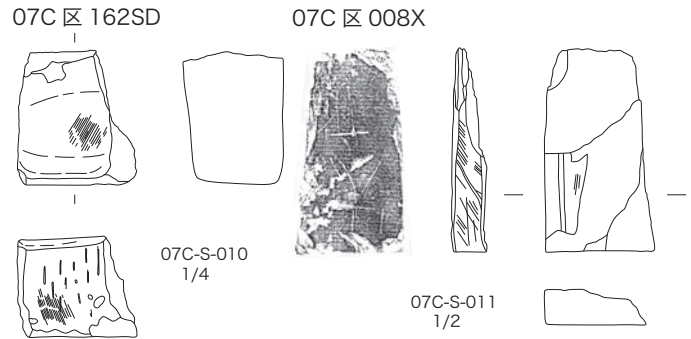


図 244 塔の越遺跡 07 各区出土石製品実測図

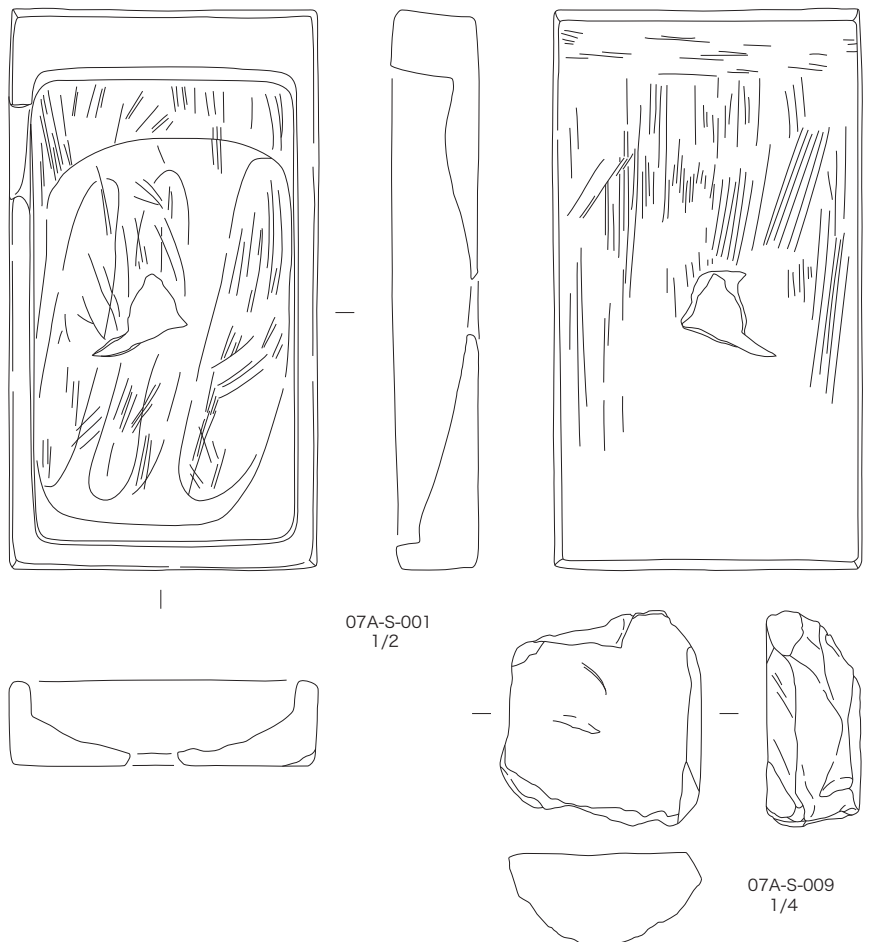
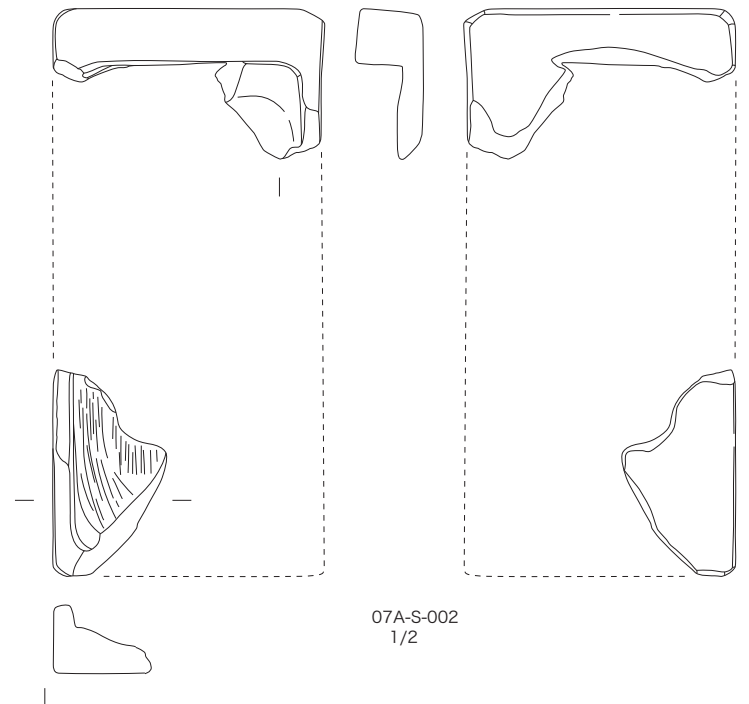


図 245 塔の越遺跡 07A 区 044SD 出土遺物実測図

第3章 長野北浦遺跡

1. 調査の概要

(1) 遺跡の状況

長野北浦遺跡は、東を JR 東海道線に区切られ、西は市道を挟んで塔の越遺跡に接する。北には住宅地を挟んで稲沢東小学校がある。

調査直前には、用地買収も終って住宅が立ち退いた跡の草地となっていた。南北には住宅地がひろがり、南方には屋根をこえて万徳寺の樹林が臨めた。そして、西部には水田が存在していたが、それが地表を大きく削って造成されたことは調査の結果明らかになった。

長野北浦遺跡の事前情報はほとんどなく、遺跡の内容についても不明であった。天保年間の村絵図によれば、東西に配された神社の位置関係から、万徳寺北側の家屋が散在するあたりに相当すると思われる。調査結果でも近世の建物群が検出され、ある程度は裏付けられた。

そして、万徳寺が真言宗の古刹であり、鎌倉時代末期の文献にも登場することから中世以降の遺構・遺物が展開する可能性が高いとの調査前の予想はある意味で当たったが、先の水田の存在が遺跡の遺存状況に大きく影響を与えて、肝心な部分が欠落することになった。

むしろ、意外であったのは、中世に加えて古代も致命的な影響をこうむる中で、古墳前期後半の遺構・遺物がまとまって検出されたことである。もちろん、上部は大きく削平を受けており、遺構の深さも浅いものとなっていたが、それでも重要な成果を得ることができた。

このように、長野北浦遺跡の存続時期は塔の越遺跡にほぼ併行するとはいえ、古代はきわめて薄く、それに対して古墳・中世・近世が濃密であった。

以下の記述は上記の時期区分を中心に、調査区西部から進める。

(2) 作業工程

発掘調査は平成 19 年度と平成 20 年度の 2 ケ年実施した。

当初は都市計画道路の跨線橋橋脚工事と道路敷設に関わる部分に限定されて、発掘調査は平成 19 年度で終了する予定であった。しかし、JR 東海道線を横断する橋脚の建設工事に伴ないクレーン等の重機等を設置する工事ヤードの地盤を強化する必要が生じたため、平成 20 年度に該当する範囲の追加調査を実施することになった。つまり、平成 19 年度には対象外として空白になっていた 6 ケ所のうち、東寄りの 4 ケ所（調査区配置図のスクリーントーン部分）の調査が必要になったわけで、結果的に東半部強は全面調査となった。

平成 19 年度は 07A 区から 07D 区、平成 20 年度は 08A 区から 08D 区の調査を行った。平成 19 年度は生活道路やガス管の埋設部分の存在から調査区の細分が必要となった。平成 20 年度は狭い調査区と工事の進捗に伴う制限のためにやむを得ず分割調査になった調査区があり、また基礎工事に際して打ち込まれた鉄矢板によって引き起こされた地層の沈下で地層に乱れを生じた箇所もあった。

なお、調査区配置図にある記号は、頭の数字が調査年度（西暦 2000 年以降の下二桁）、アルファベットが調査区の大（小）区名である。

表 4 長野北浦遺跡調査工程表

	平成19年度												平成20年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
07A	■	■	■																					
07Ba				■	■	■																		
07Bb				■	■	■																		
07C				■	■	■																		
07D										■														
08A																		■						
08B															■	■								
08C																	■	■	■					
08D																■	■							

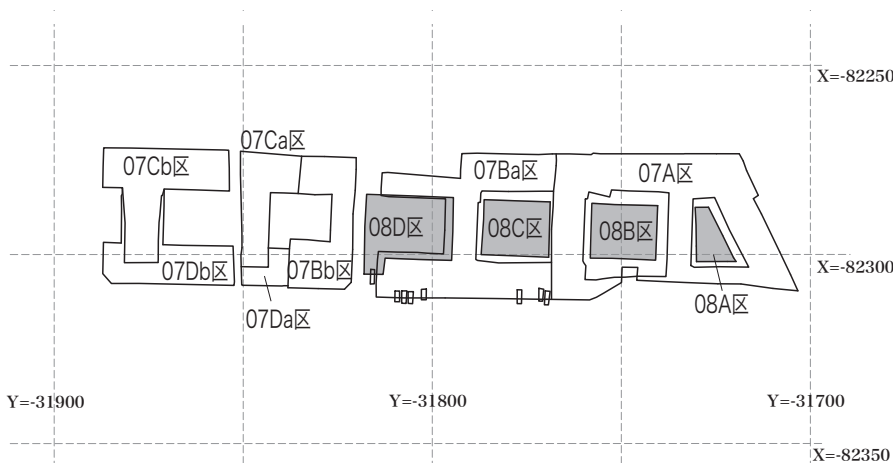


図 246 長野北浦遺跡調査区配置図

2. 遺構・遺物の各説

(1) 古墳

A. 概要

古墳時代の遺構は、まず東半部を中心に竪穴建物群や土坑群が展開し、後に中央部に方形周溝が少なくとも1基造営される。そして、おそらく6世紀以降に東端の円形周溝が掘削されるという順序である。

北と東西辺を検出した方形周溝(07Ba区024SD・08D区048SD・08C区167SD)の堆積層は、下部が基盤土の斑土で、掘削時の整地層と推測される。そして上部には黒褐色シルトが堆積していた。それに対して、円形周溝は下部まで黒褐色シルトで埋積しており、様相が異なる。

この黒褐色シルトには7世紀後半の須恵器が含まれており、堆積時期はかなり下る。黒褐色シルト層はカーボンの含有量の高い土層で塔の越遺跡とも共通して、周辺の草原化を窺わせるものである。

東半部を中心に展開する竪穴建物群は、床面直上に炭化物の薄層を伴う事例について「竪穴建物跡」の可能性が高いといえるが炉跡は検出されず、地床炉と異なる「火処」を想定しなければ「住居跡」とは断定できない。検出が不十分な柱穴については、濃尾平野では弥生時代に限らず古墳時代以降も竪穴建物跡の柱穴はなかなか検出

できない状況があり、それほど大した問題ではないのだが、しかし、小規模、不定形な方形の堀形?のみが検出されたものについて、竪穴建物跡である確証はない。

一方で土坑群には遺物集積を伴うことは少なく、いわゆる廃棄土坑の様相を呈するものは僅かである。竪穴建物群が展開すれば即座に居住域をイメージさせるあり方とは異なるものである。もちろん方形周溝と時期差はあるが、極めて短期で隣接する点を合わせて、古墳前期における遺跡の性格を考える上で注意が必要である。

その他、地盤の掘削に人為性は窺えるものの、不定形な落ち込みについては「SX」記号を付与した。竪穴建物跡としての確実性が乏しいにも関わらず「SI」記号を付与した遺構との相違については、輪郭が不整形であることや底面の凹凸が著しいこと、認識がまだ定まっていなかった調査初期の事例が該当する。

その他、「溝」とは堆積状況が異なっておりラミナが発達したものについては「NR」記号が付与された。しかし、基本的には自然堆積であるので、先行するものについては遺跡形成以前の基盤の堆積状況を個別に検出した可能性もあり、遺跡概念に含まれるものであるのかどうか検討の余地を残す。

以上のように、長野北浦遺跡における古墳時代遺構については多くの不確かな部分を含んでいる。本報告では個別遺構についての評価は最小限にとどめ記述を進める。

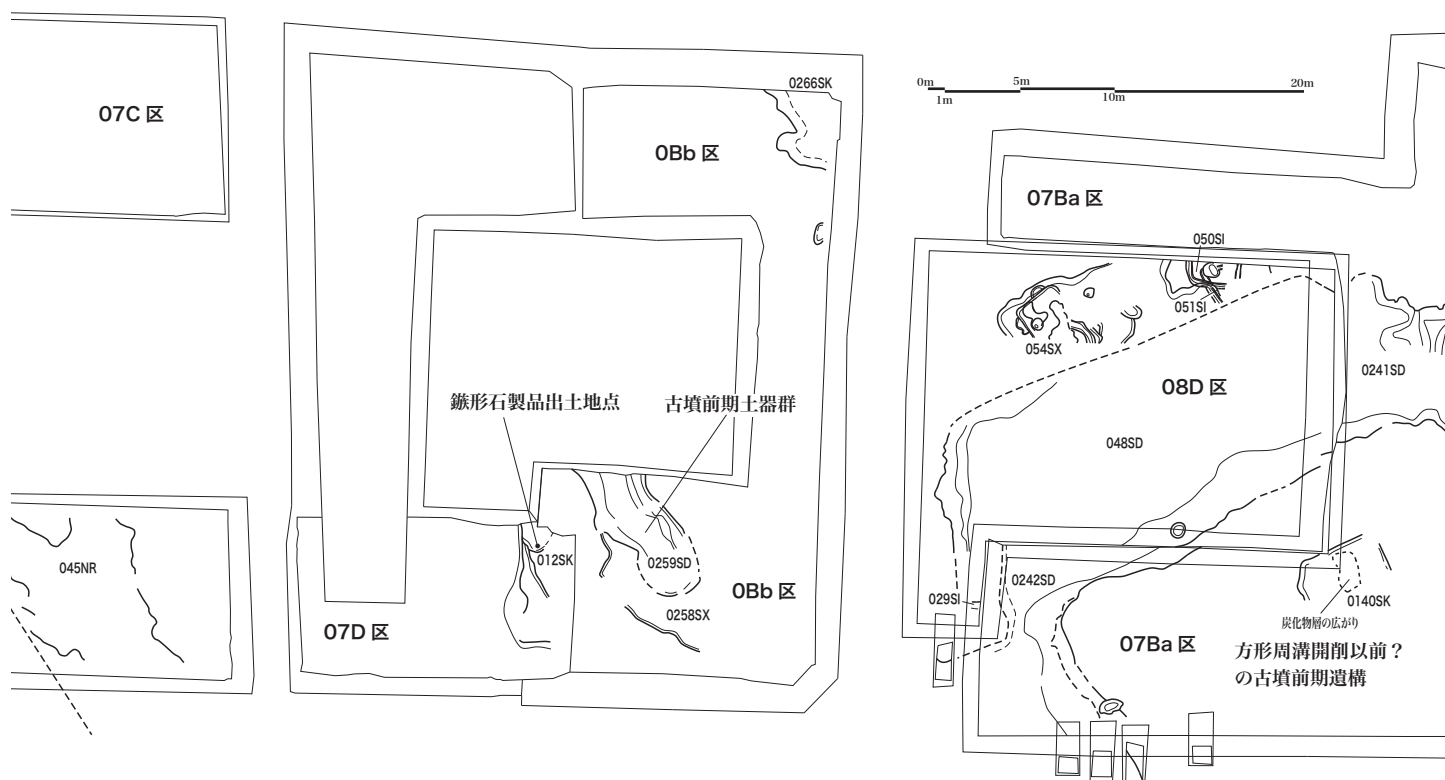


図 247 長野北浦遺跡古墳前期後葉遺構全体図



図 248 長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 北から



図 249 長野北浦遺跡 07A 区北部縦穴建物跡群 北から

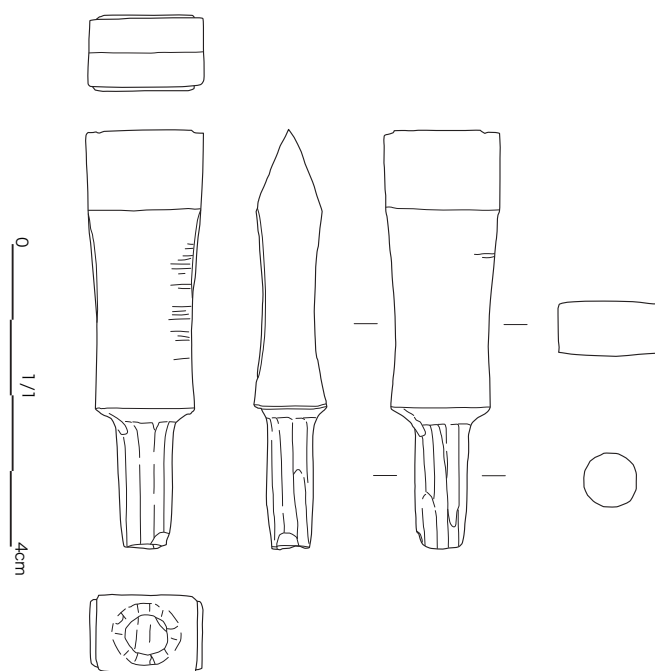
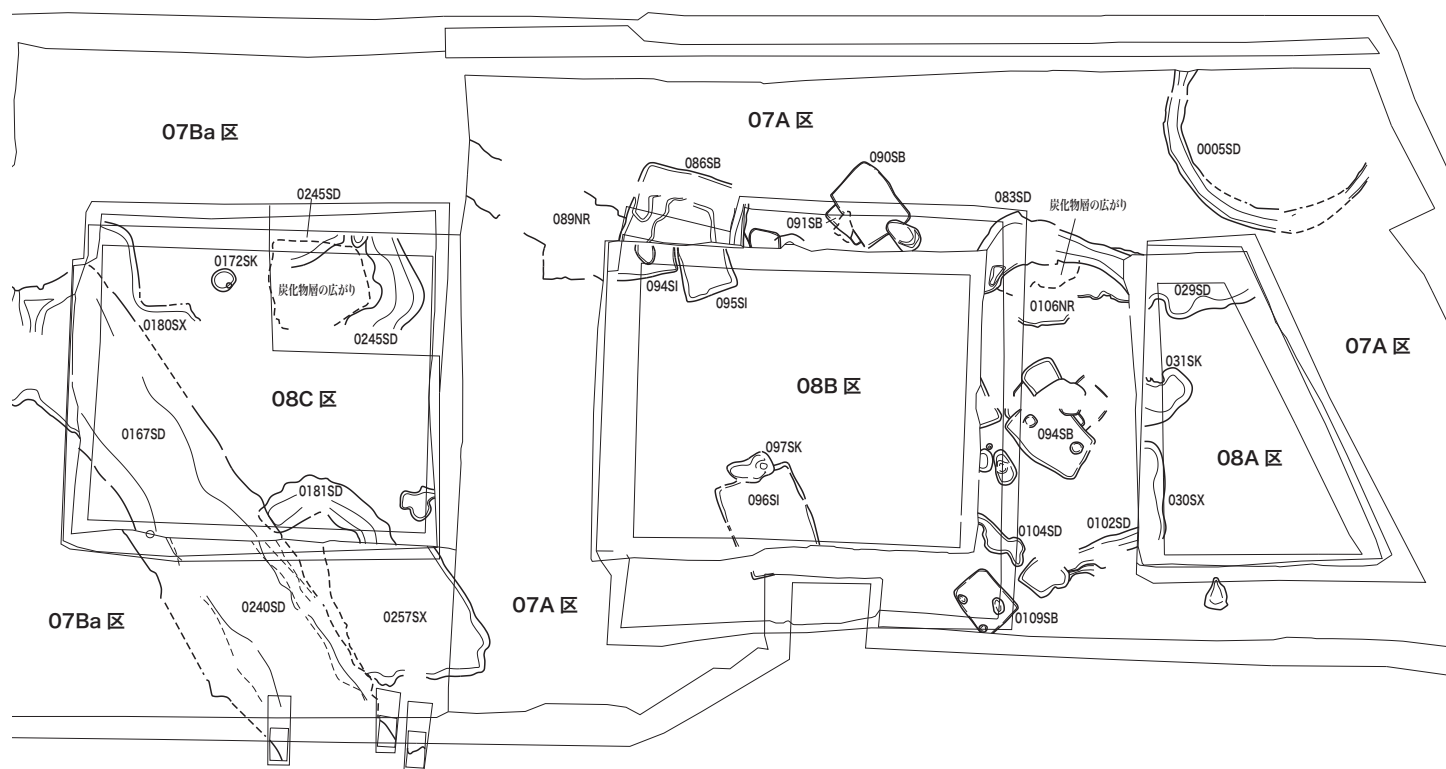


図 250 長野北浦遺跡 07D 区 012SK 出土鏃形石製品実測図

※鏃形石製品が出土した 07D 区 012SK は、黒褐色シルトが堆積する土坑であり、古墳前期に属す遺構ではない。同層が堆積する遺構は基本的に古代以降であり、中世も含まれる。よって、出土遺構との関連はむしろ当初鏃形石製品が属していた環境が大きく変化したことを示すものである。



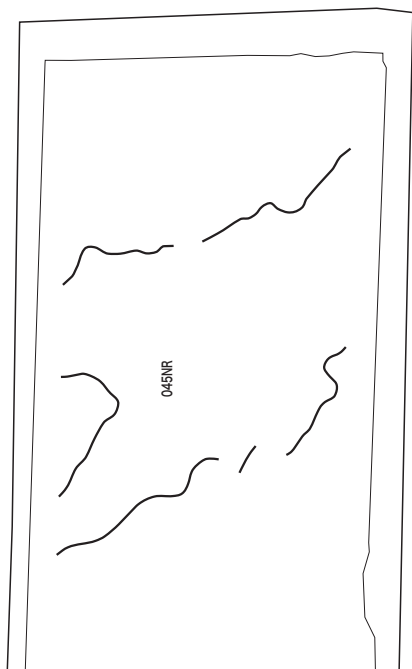
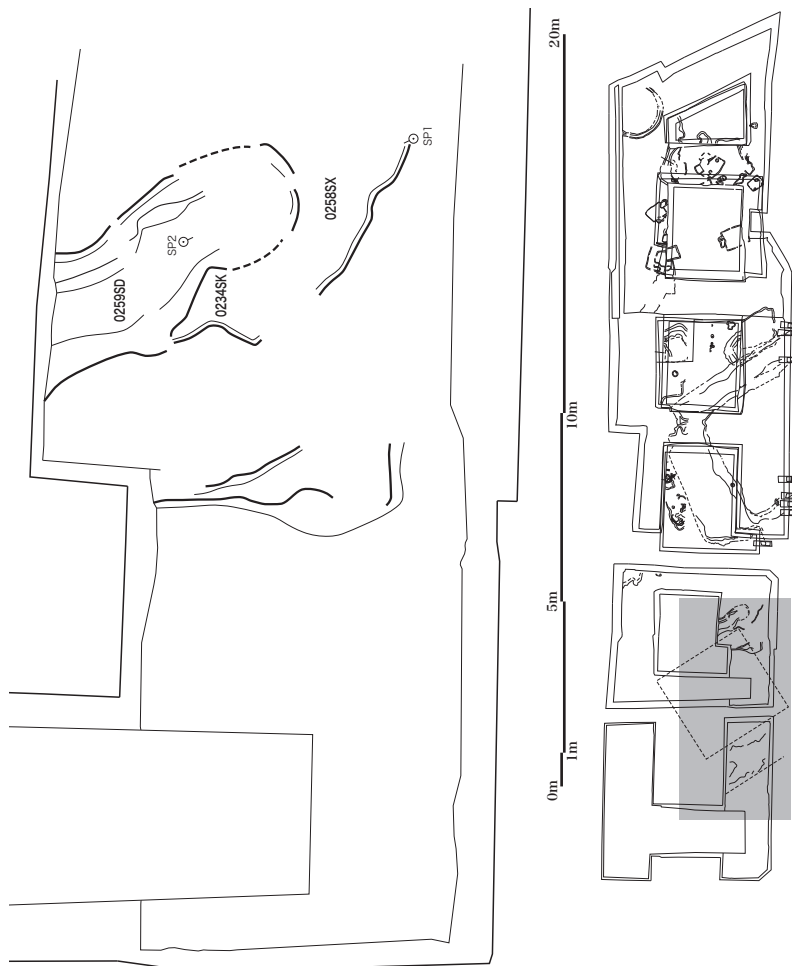


図 251 長野北浦遺跡西部古墳前期遺構図

B. 遺構・遺物

07Bb 区 0259SD 上部は近世以降の水田に大きく削られており、溝は南東で浅くなつて切れているが、本来は続いていたものと考えられる。検出面での幅約 3m、深さは約 30cm を測る。堆積層は最上部に黒褐色粘土質シルトがわずかに残存しており、本来は上部に堆積していたのであろう。

出土遺物は土器群が主であり、黒褐色粘土質シルト層の下部にあり、底面から約 25cm ほど浮いて出土した。器種は甕、高杯、器台を主に、壺が若干含まれている。下部から出土した 257～266 は残存状況が比較的良好であり、原位に近いと推測される。浅鉢と器台がセットになるようだが、数量は器台が多く非対称である。

0259SD の延長部分で検出された 0234SK や 0258SX についてはほとんど遺物の出土がない。0234SK は黒褐色シルトが堆積しており、0259 最上部に残存していた層位につながるとすれば、年代は 7 世紀代まで下る可能性がある。

07D 区 045NR 基盤面で検出した北西から南東に向かう帯状の落ち込みであり、遺物は出土



図 252 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 土層セクション図

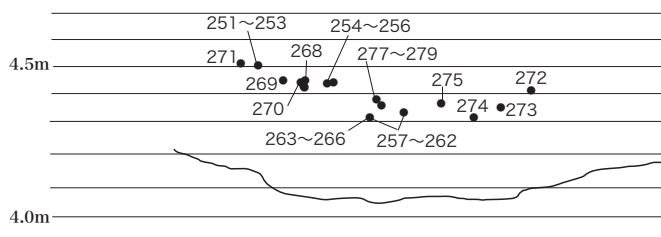


図 253 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 遺物出土分布図 - 短軸

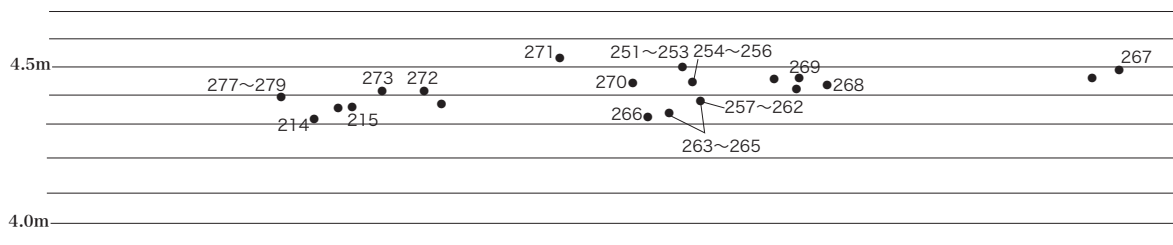


図 254 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 遺物出土分布図 - 長軸

していない。斑土の堆積が認められないことから「NR」と表記されているのであれば異なるが、0259SDに平行する点が気になる。

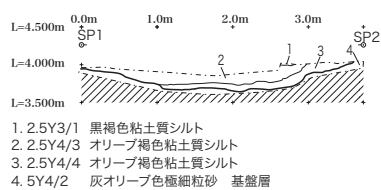


図 255 長野北浦遺跡 07Bb0259SD 土層セクション図

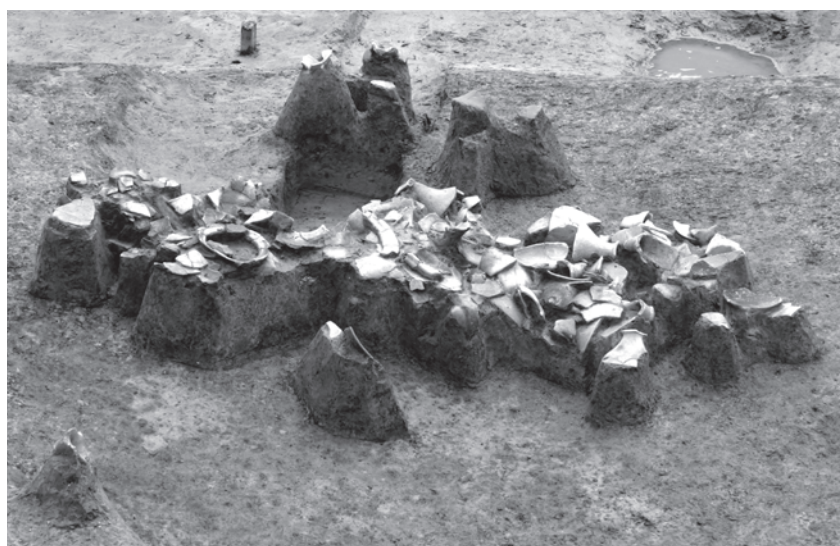


図 256 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 土器群出土状況 北西から

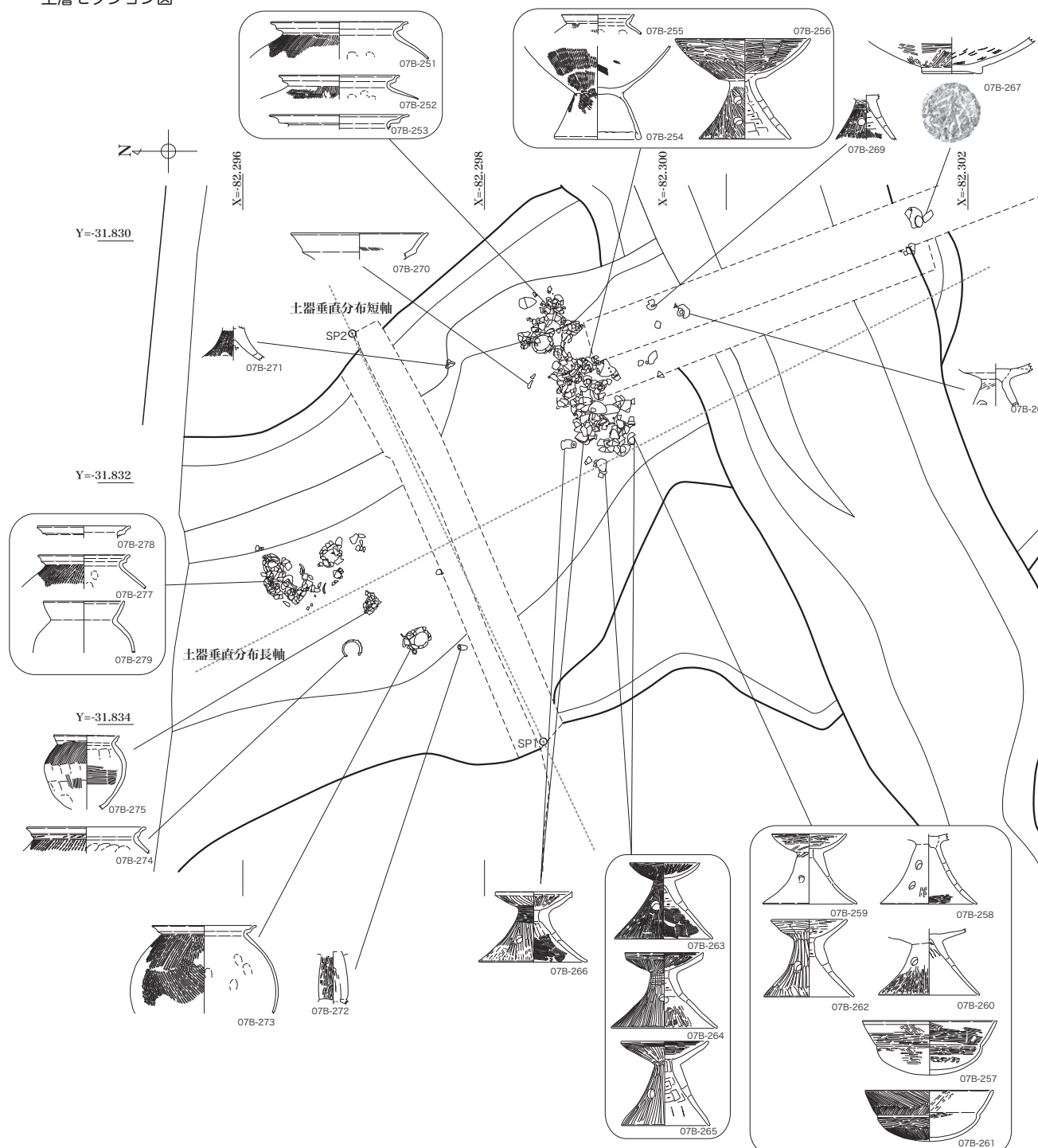


図 257 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 土器群出土状況図

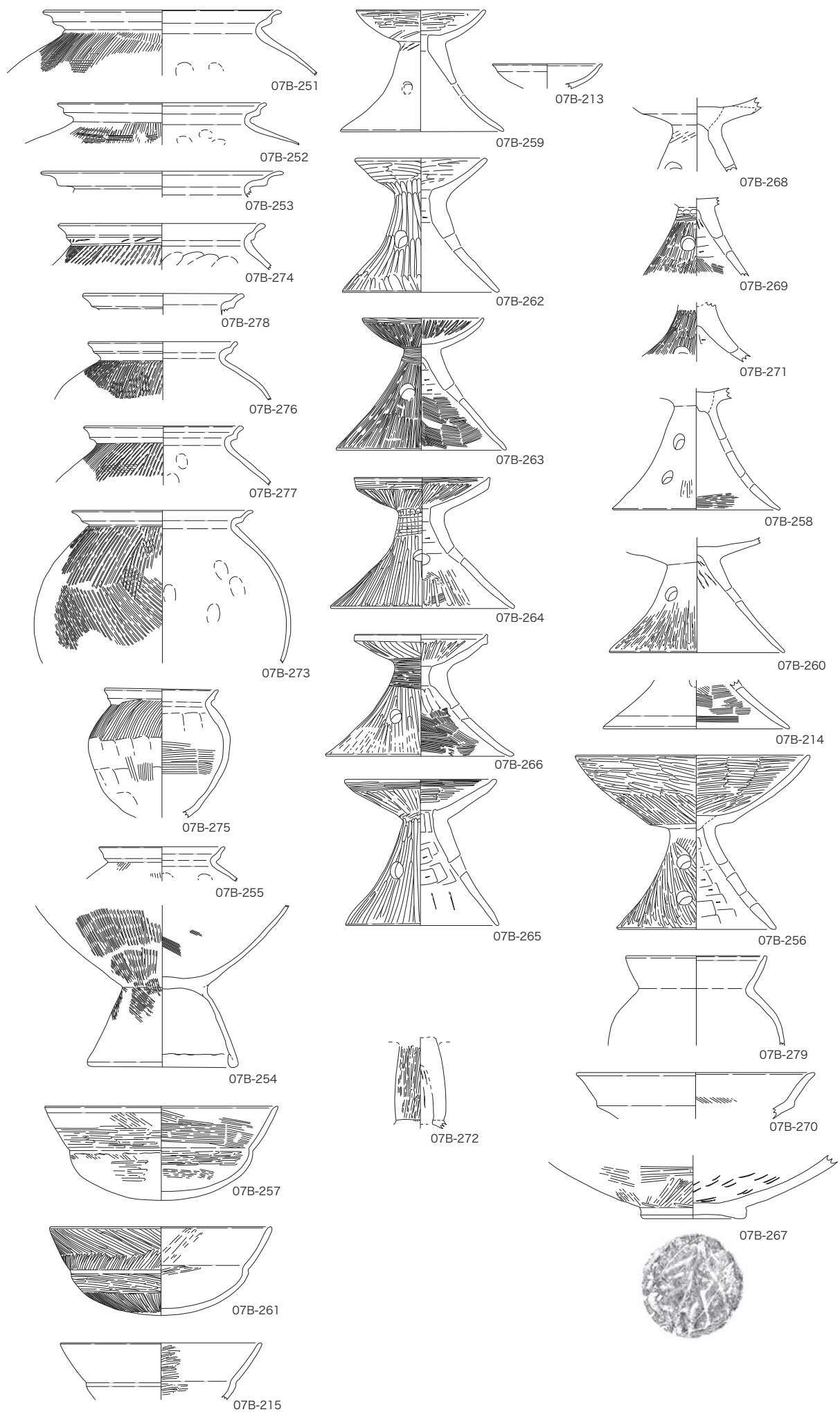


図 258 長野北浦遺跡 07Bb 区 0259SD 出土土器実測図

07Ba 区 0240SD・0241SD、08C 区 0167SD、08D 区 048SD 方形周溝の北・東・西部を検出し、周溝内側の上端間は約 24m を測る。溝幅は北が 10m、東が 6m である。深さは検出面の上端から約 90cm を測る。

周溝内縁は明確な方形を呈するのに対して、外縁は 08C・D 区で中世の溝に切られて不鮮明であり、また外北部と西部のコーナー部分で内側に突出して括れるとともに、底面も少し上昇するようであるが、陸橋部にはならずやや浅くなるといった程度である。

底面から溝の両上端へは、いずれも底面から緩やかに上昇し、はっきりした法面をもたない。ただ、内側下端付近は一部で少し深くなっている箇所もある。また上端付近では傾斜の変換が認められるところもあるが、上部の削平を考慮すれば傾斜が急になるともいえない状況である。

堆積層は、最下部が基盤土の斑土である。掘削時に浮いた土を均したと推測される層位で、いわゆる整地層である。その下面は加工面、上面が機能面である。その上部に黒褐色シルト質粘土が堆積するのを基本とするが、周溝全体を通して一様ではない。

08D 区 048SD では、最下部の整地層の上部に黒褐色シルト質粘土層が平均厚層 25cm ほどで堆積している。さらにその上には黄橙色極細粒砂ブロックが堆積し、内側に盛り上げられた土（基盤土）の再堆積と推測されるが、この堆積層は他では認められない。

南東部の 07Ba 区 0240SD では、溝の最下部に整地層相当が認められるが、その上部には溝の両縁まで黒色粘土質シルトが堆積しており、外縁（東側）では下部にまで黒色粘土質シルト層が堆積していた。この点は 08D 区 048SD とは明らかに異なるもので、この部分が再掘削された可能性を強く示している。溝の内縁寄り出土した 7 世紀後半の坏蓋はそれに伴うものだろう。

溝の外縁近くに集積して出土した古墳前期の土器

群は黒色粘土質シルト層の下部にあり、整地層の上面（機能面）に散布して出土したと判断される。08Bb 区 0259SD と異なり破片が主で、出土場所と遺物を関係づける人為的行為は窺えない。

07Ba 区 0242SD では、最下層まで黒色粘土質シルトが堆積しており、様相は 07Ba 区 0240SD に類似している。問題となるのは 0242SD に東肩が二つあることで、土層セクションでは整地層を伴う 0242SD 下層が西側で一段深く掘り込まれて黒色粘土質シルト層が堆積している。このことは、やはり再掘削が行われたことを示し

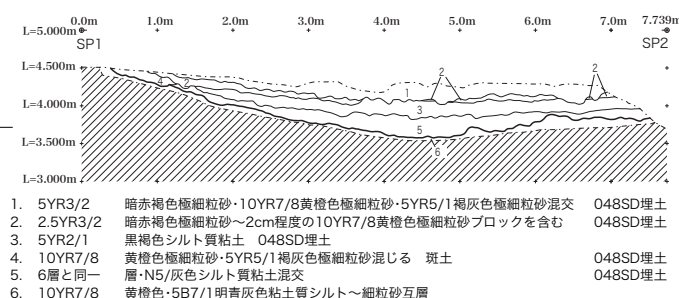


図 259 長野北浦遺跡 08D 区 048SD 土層セクション図

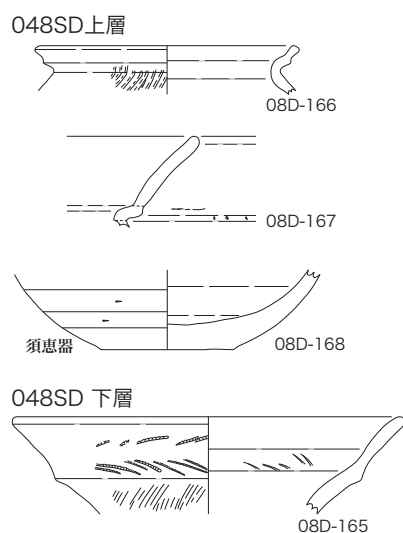


図 260 長野北浦遺跡 08D 区 048SD 出土土器実測図

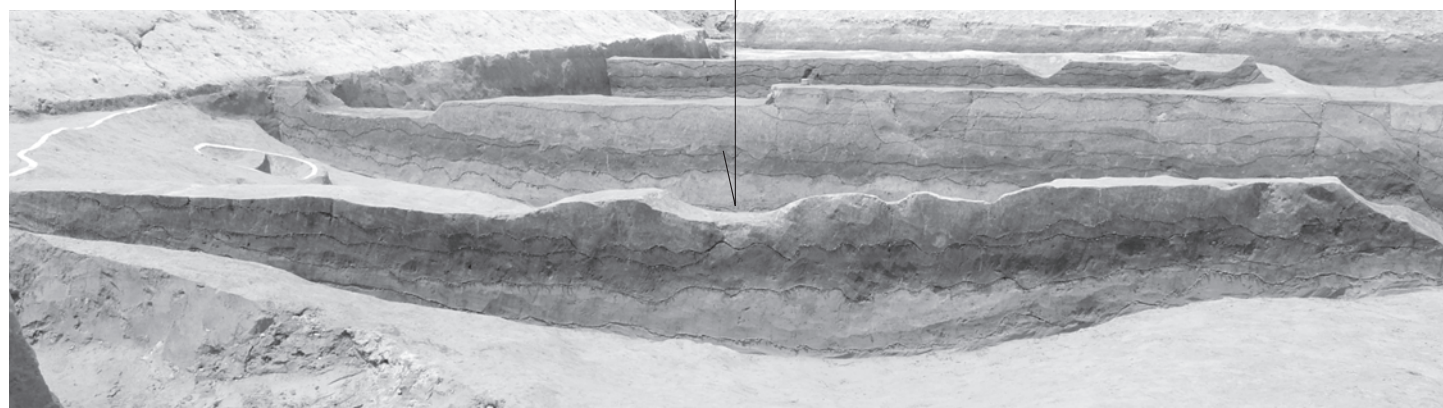


図 261 長野北浦遺跡 08D 区 048SD 土層断面

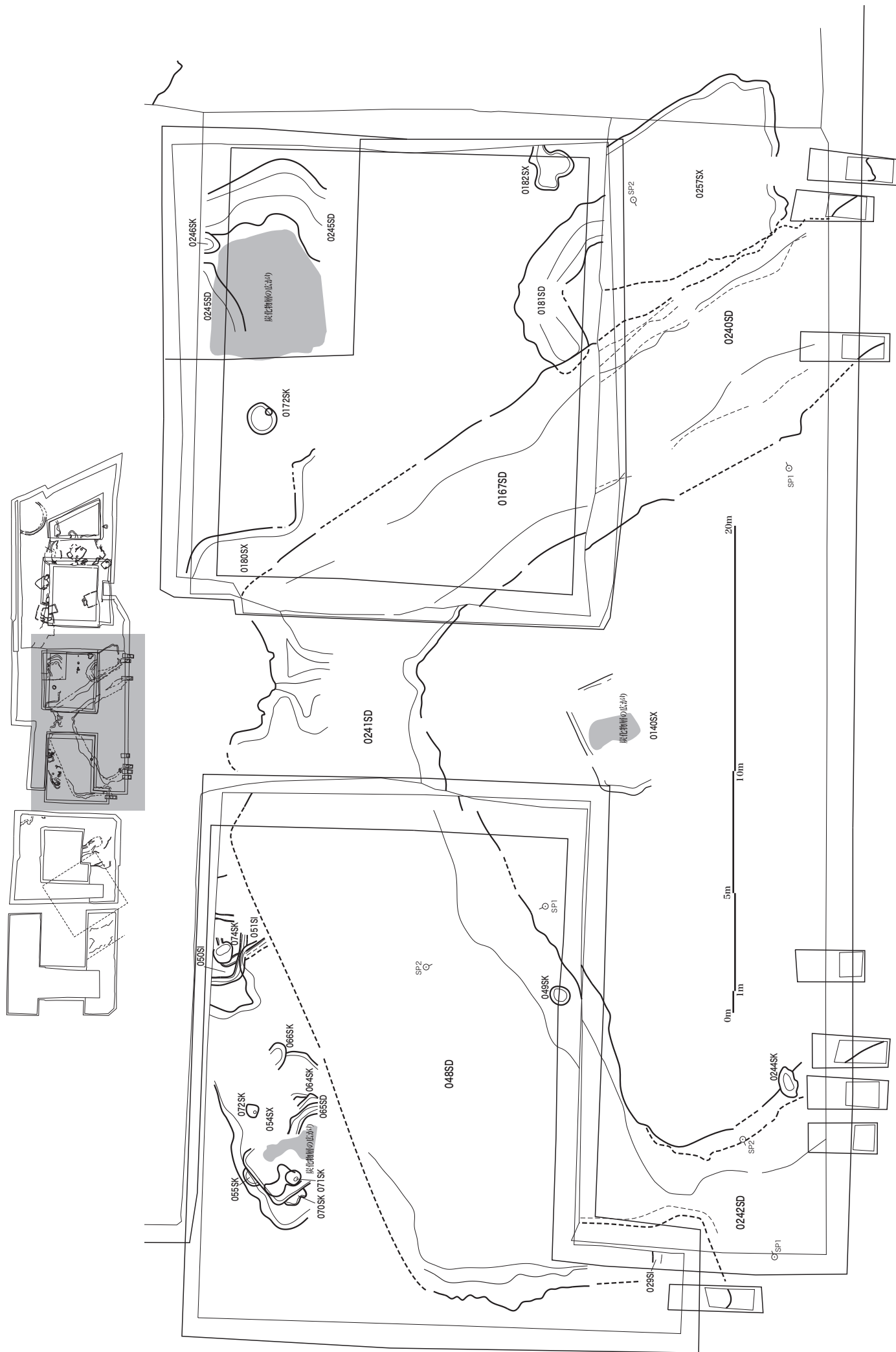


図 262 長野北浦遺跡中央部古墳前期遺構図

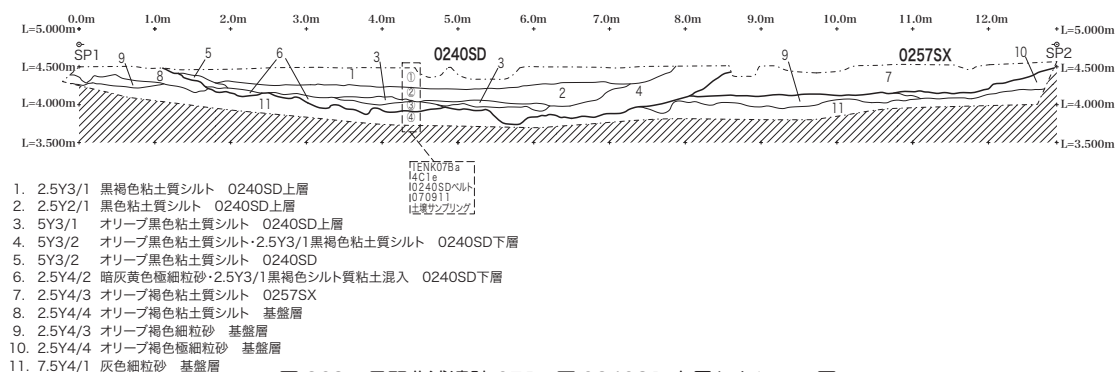


図 263 長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 土層セクション図

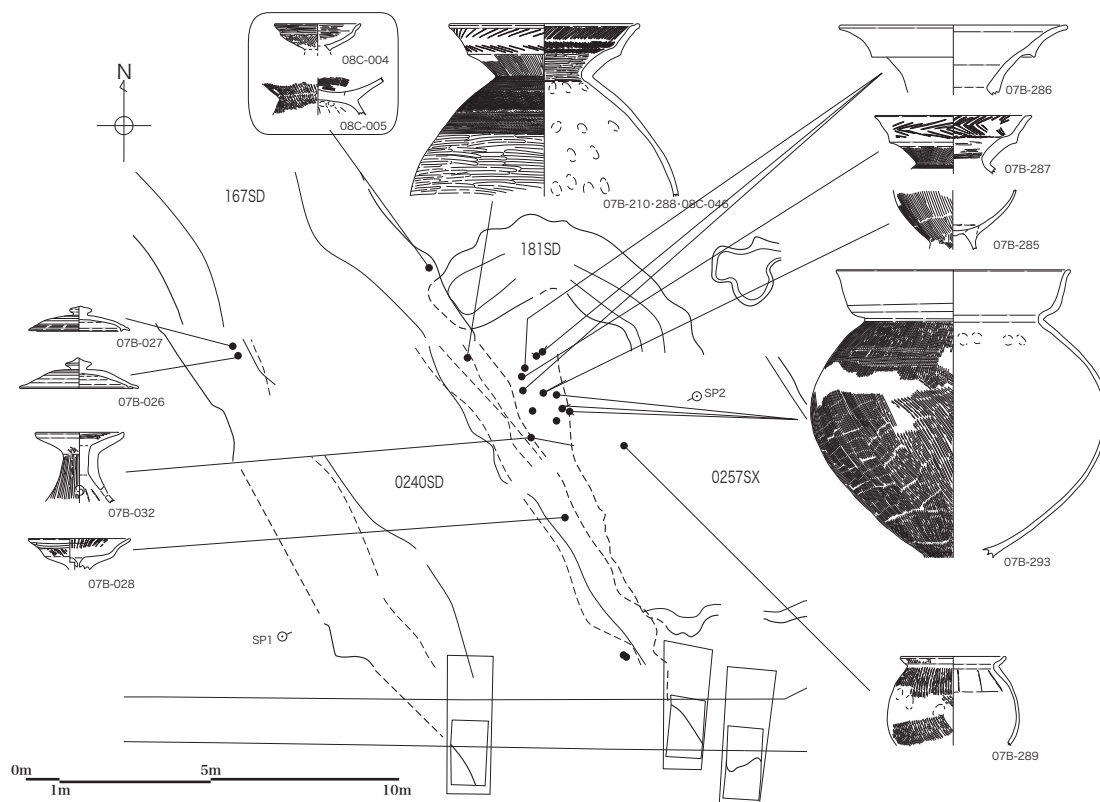


図 264 長野北浦遺跡 08C 区 0167SD・07Ba 区 0240SD 周辺遺物出土分布図

ている。その点は 08D 区 048SD において不明確であったが、周溝の再掘削も方形両縁の内側を整えるばかりではなかったことは、むしろ再掘削の照準が周溝にはなかったことを示して興味深い。

08Ba 区 0241SD は上端が南に突出する延長に、08C 区 0167SD との間に浅いテラス状の高まりがあり、この部分で僅かだが土器が出土した。この東には 0180SX があるが、性格は不明である。

以上のように、方形周溝は再掘削後に黒色粘土質シルト層が堆積し、その時期は 7 世紀後半以降の可能性が高いということになるのだが、そうするとコーナー部分で底面が浅くなるのも、むしろさら



図 265 長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 土器群分布状況・土層断面 南西から

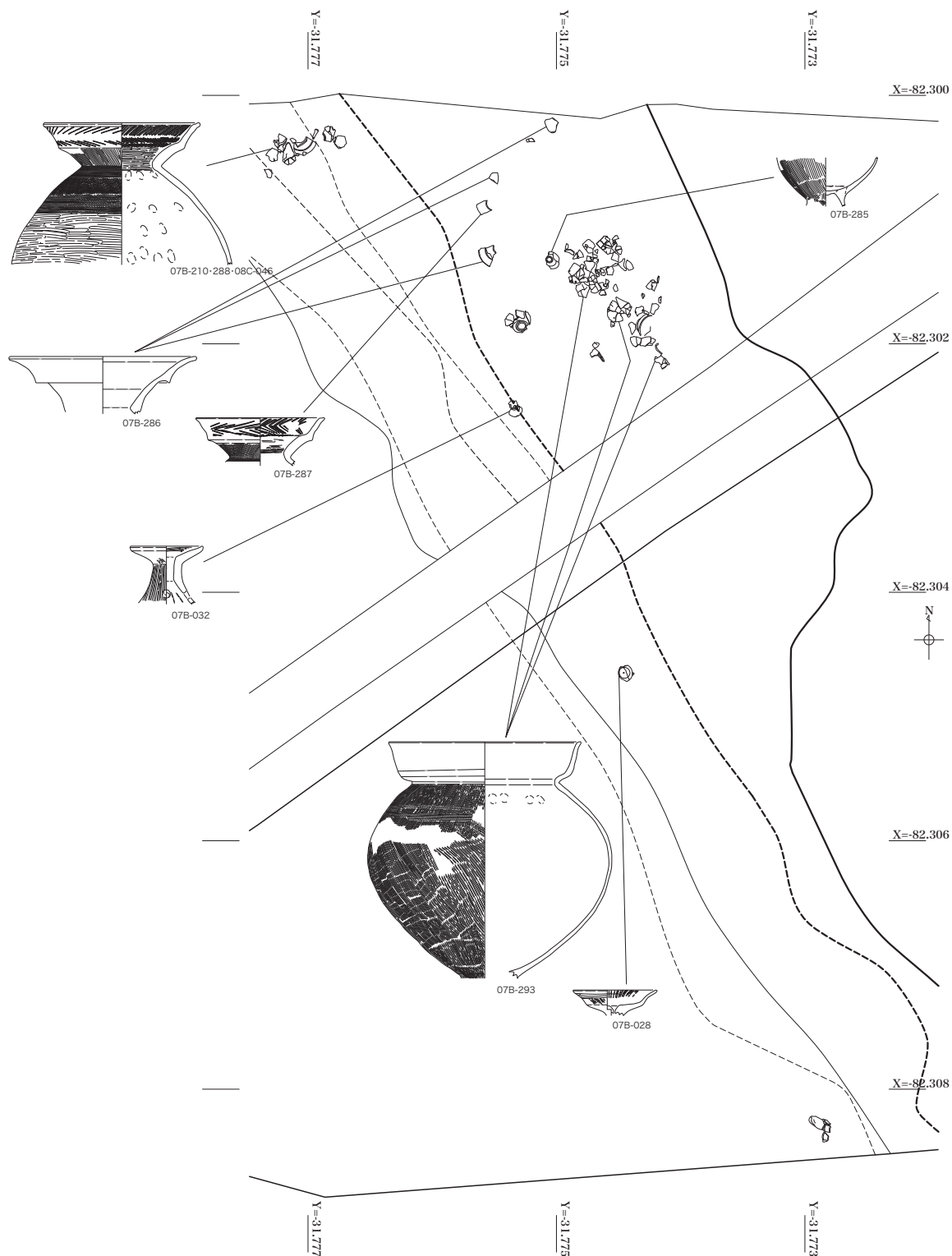


図 266 長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 土器群出土状況図

に浅かったのが再掘削のために深くなった可能性を考慮する必要がある。コーナー部分で周溝が切れていたとはいわないまでも、同じ幅で整ったプランで周溝がめぐっていたわけではなかったことも想定しておかなければならない。

08D 区 029SI 西側のコーナー付近で東側に突出する部分で土器群が出土し、南へ一段落ちて平坦面を作って

いることから「SI」記号を与えた。部分的な調査で判断は難しいが、竪穴建物跡である可能性は低く、0242SDに伴う可能性も排除できない。

08C 区 181SD 屈曲する溝で、南側は 0257SX に重なるが、調査年度が異なり、未検出である。西側は 0167SD に切られており、先行する。

07Ba 区 0257SX 08Ba 区 0240SD の再掘削には切ら

0240SD

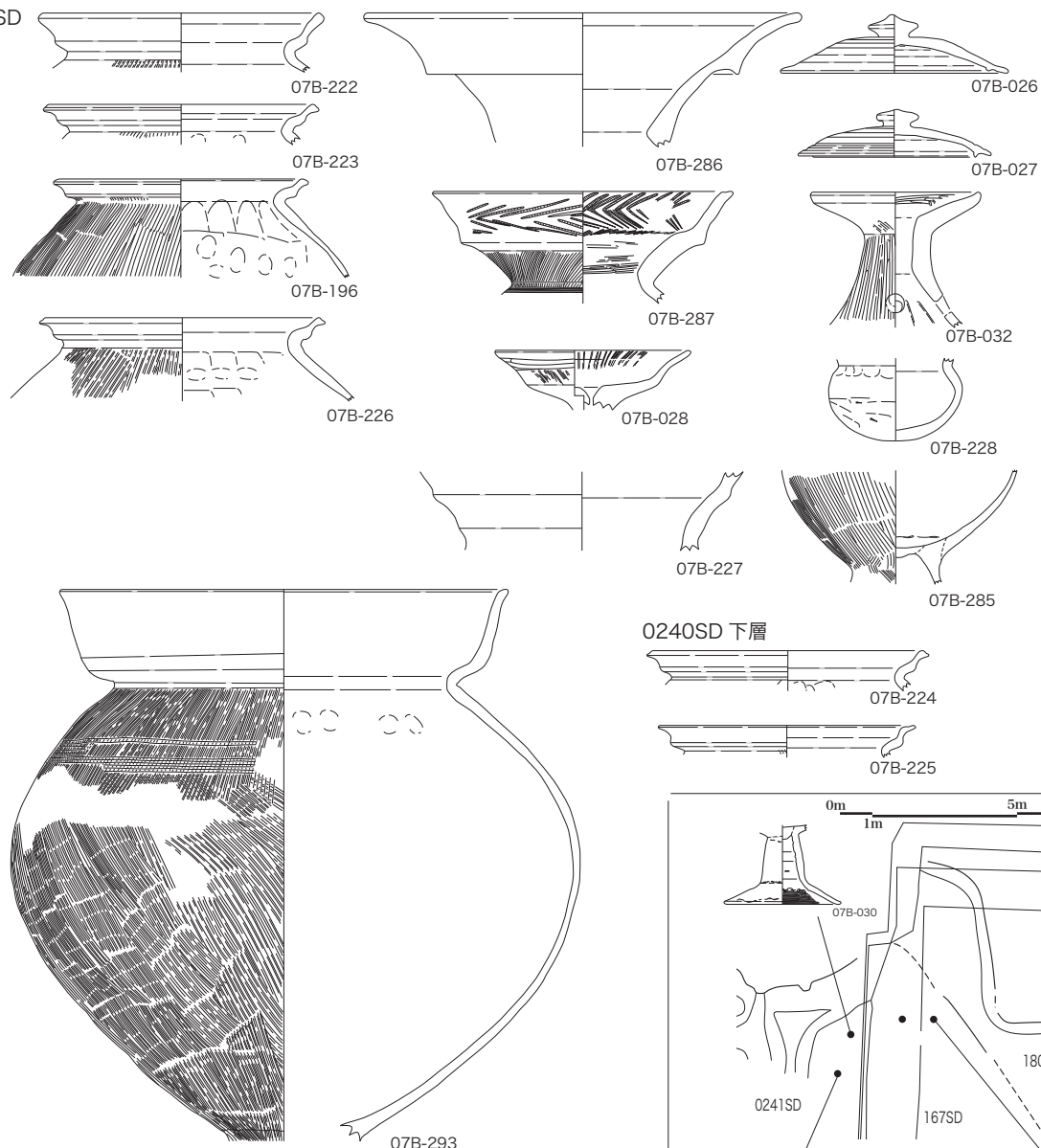


図 267 長野北浦遺跡 07Ba 区 0240SD 出土土器実測図

0240SD 下層



図 269 長野北浦遺跡 07Ba 区
0241SD・08C 区 167SD 土器分布図

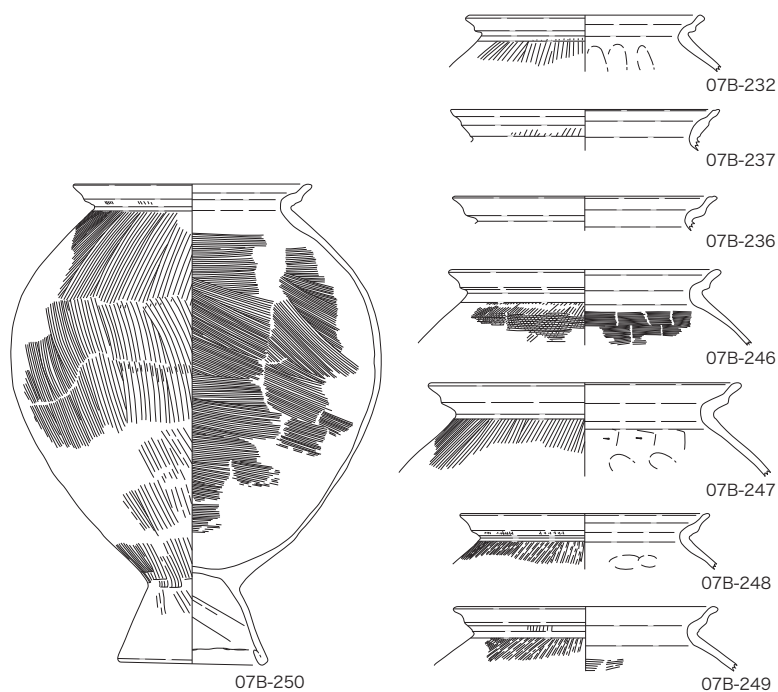


図 268 長野北浦遺跡 07Ba 区 0242SD 下層出土土器実測図

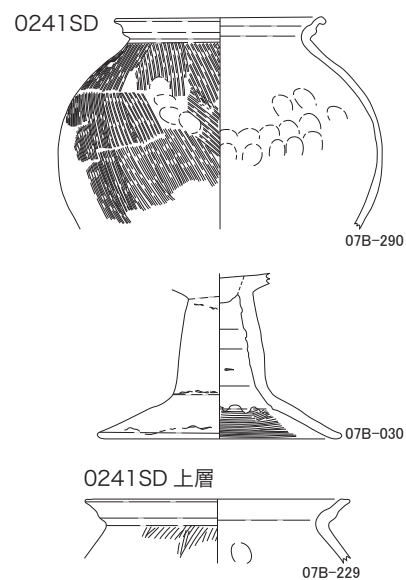
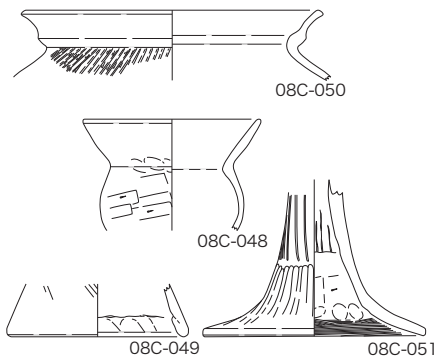
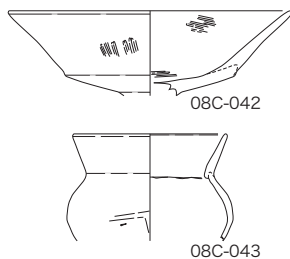


図 270 長野北浦遺跡 07Ba 区
0241SD 出土土器実測図

0167SD



167SD 最上層



0167SD 下層

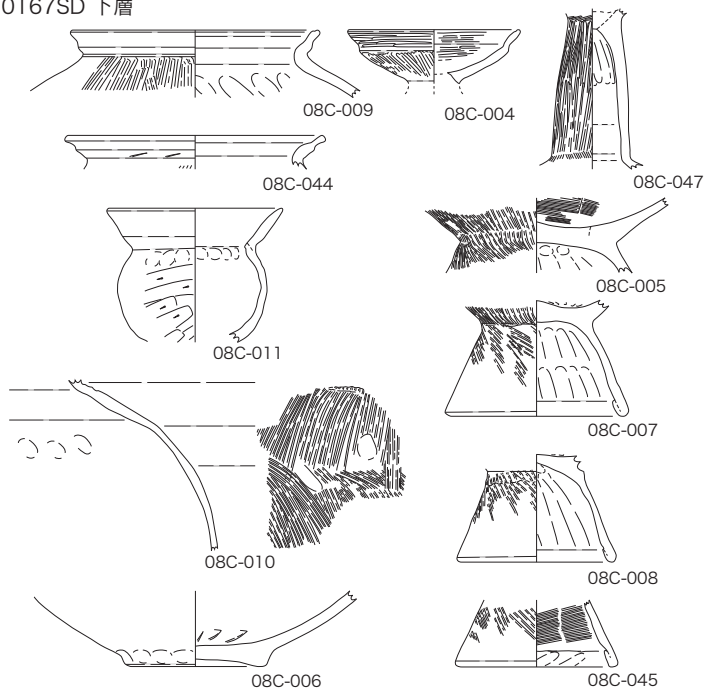


図 271 長野北浦遺跡 07Ba 区 0241SD 出土土器実測図

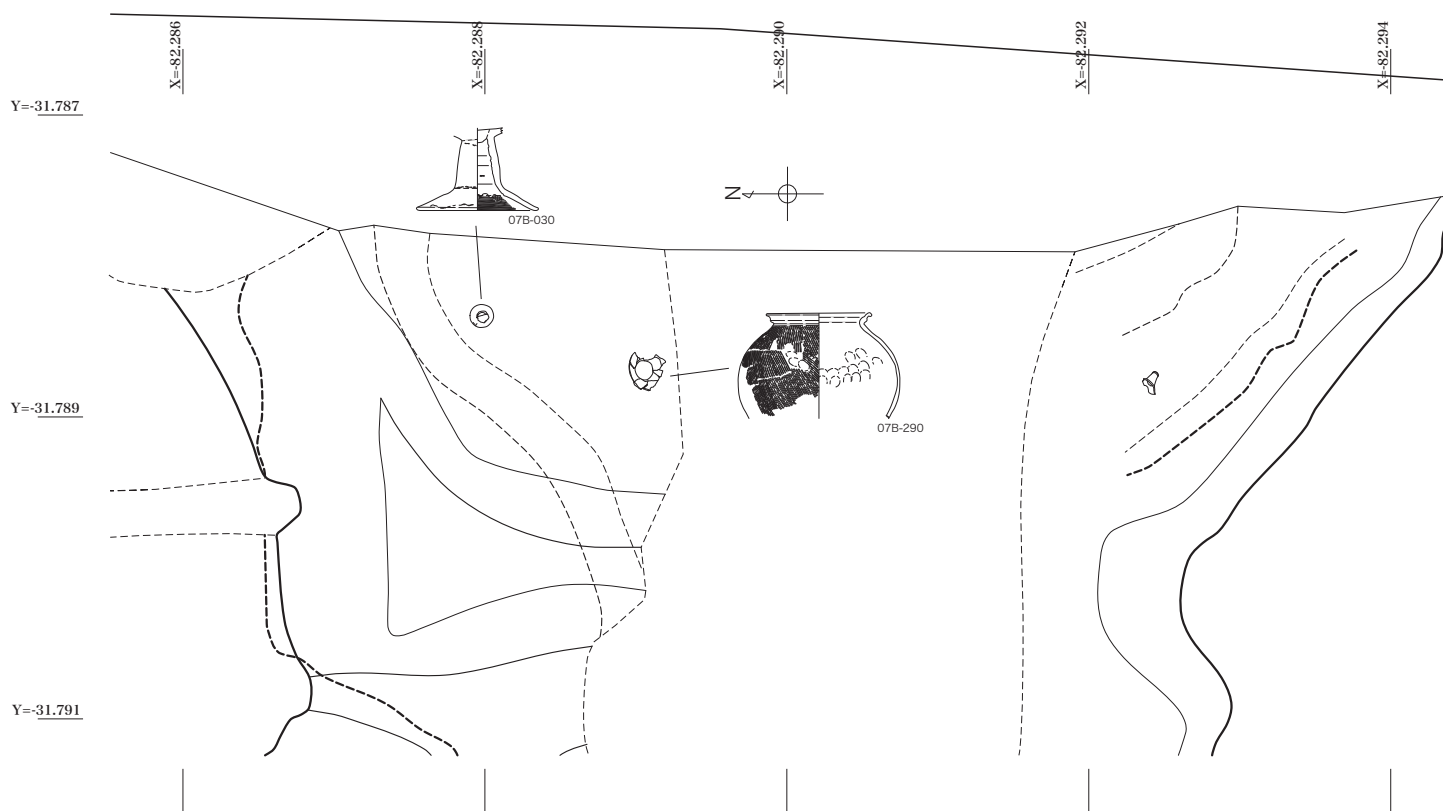


図 272 長野北浦遺跡 07Ba 区 0241SD 土器出土状況図

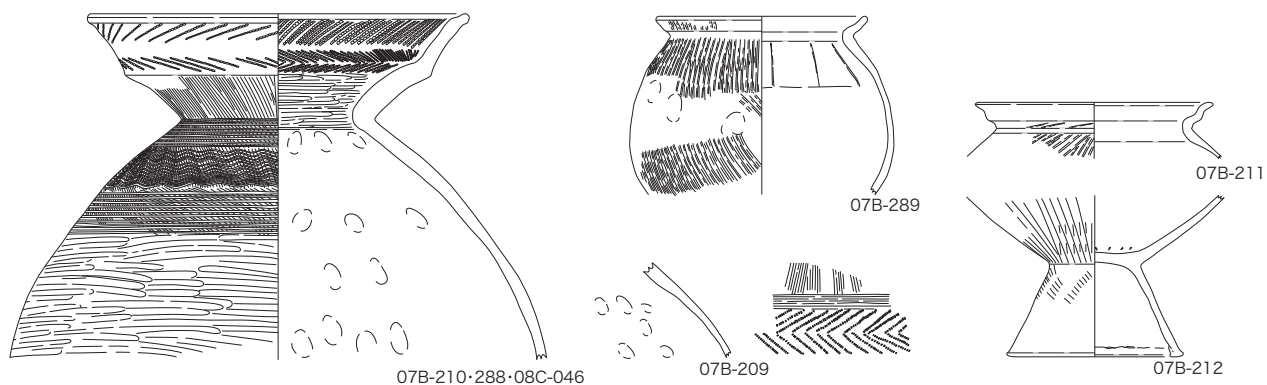


図 273 長野北浦遺跡 07Ba 区 0257SX 出土土器実測図

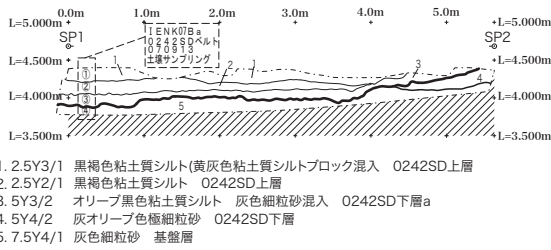


図 274 長野北浦遺跡 07Ba 区 0242SD 土層セクション図

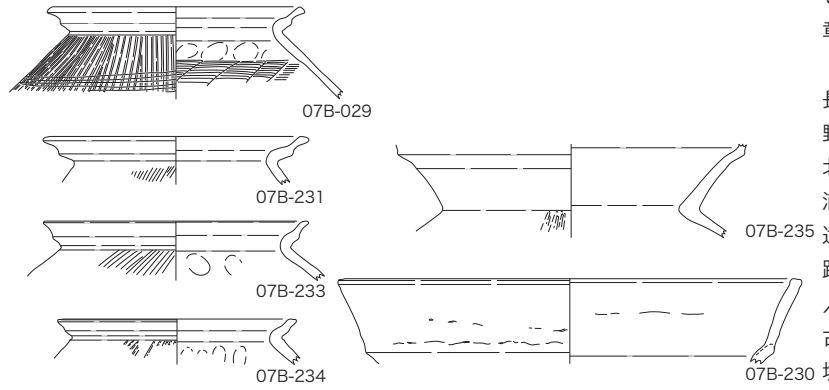


図 275 長野北浦遺跡 07Ba 区 0242SD 出土土器実測図

08D 区 028SD (近世溝)

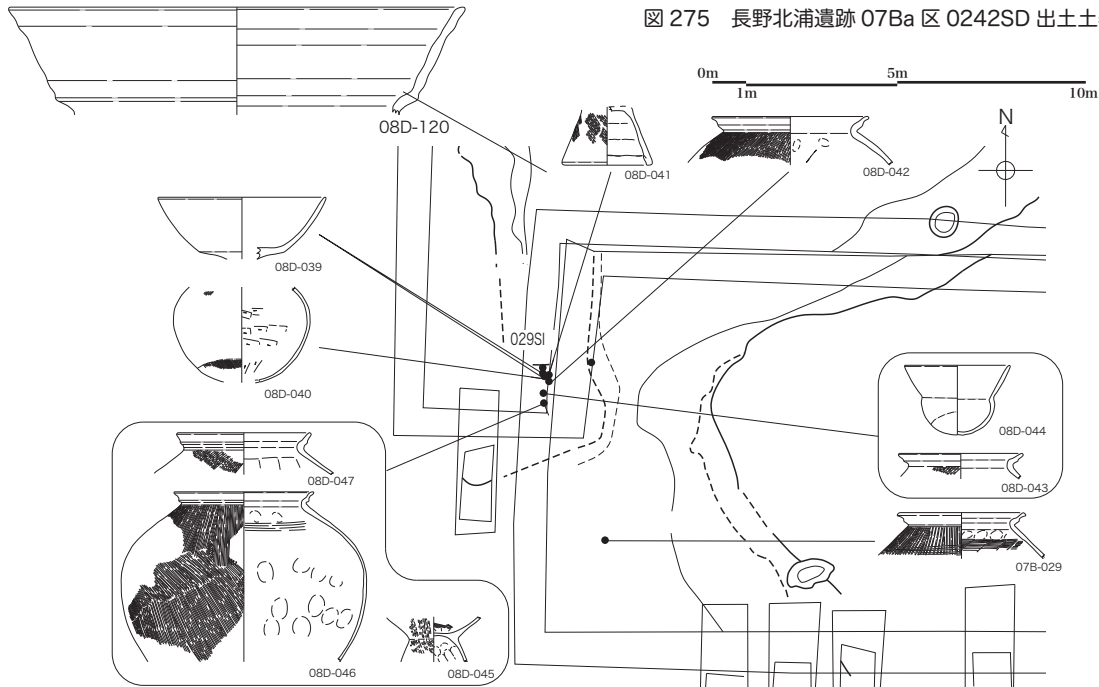


図 276 長野北浦遺跡 08D 区 029SI・07Ba 区 0242SD 土器出土分布図

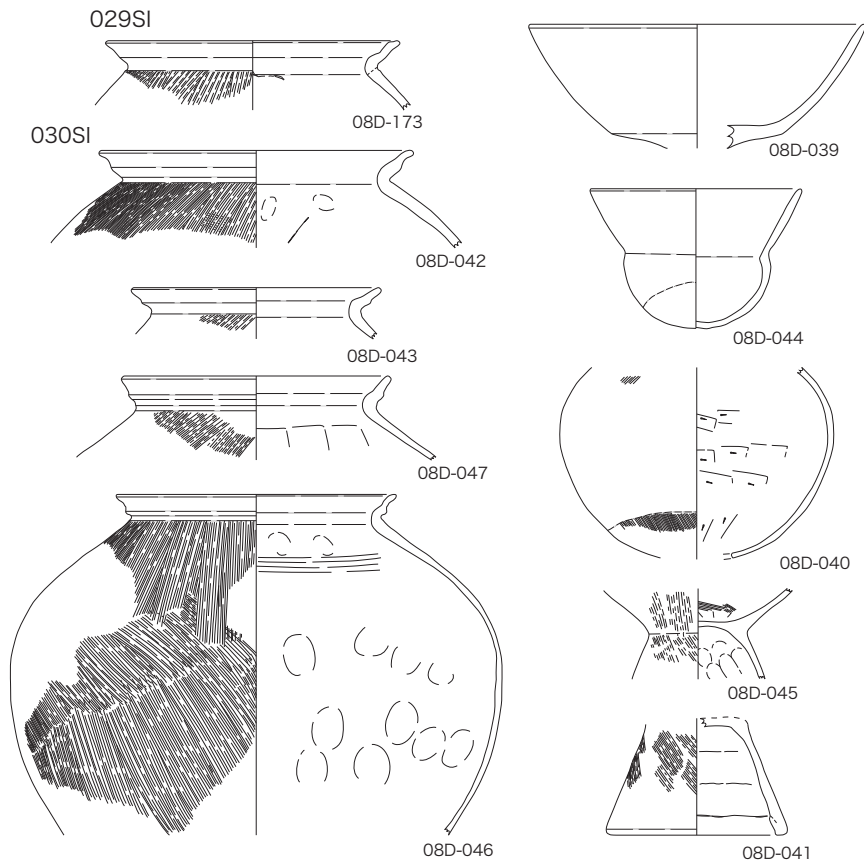


図 277 長野北浦遺跡 08D 区 029・30SI 出土遺物実測図

れるが確実に方形周溝に先行するという確証は無い。もともとは方形周溝の一部で、外縁が張り出す部分となるのかもしれない。この点は、08C区180SXや08D区054SXなども方形周溝外縁に沿う不定形な落ち込みであり、無関係ではないのかもしれない。

08D区050SI・051SI 外縁に沿って溝がめぐる落ち込みを検出したので竪穴建物跡と判断した。どちらもコーナー付近の部分的な検出にとどまった。炭化物層や焼土面は検出されていない。

なお、調査区北壁土層断面では050SIの床面は東へ傾斜して水平を保っていない。

050SIには土器が遺存しており、床面遺物と判断した。西側は054SXに、南側は048SDに切られるが、初期の方形周溝との関係は微妙である。

08D区054SX 炭化物層の広がりを追跡して、北辺に相当するL字状プランの輪郭を検出したが、調査区北壁断面でも見るように底面には高低差がある。内部は凹凸が著しく、土坑や溝も重複しており、重複する複数の遺構が的確に検出できなかったに過ぎないという印象が強い。

とはいえ、西部では安定した炭化物層が2層確認でき、確かに下層の炭化物層は水平に近い堆積で安定して竪穴建物の床面を思わせる。

それに対して上層の炭化物層は底面が一定せず、竪穴建物の床面といえる整然さはない。焼土面（炉跡）も見つかっていないことから言えば、上部構造をもつ構築物以外の遺構も考慮する必要があるかもしれない。

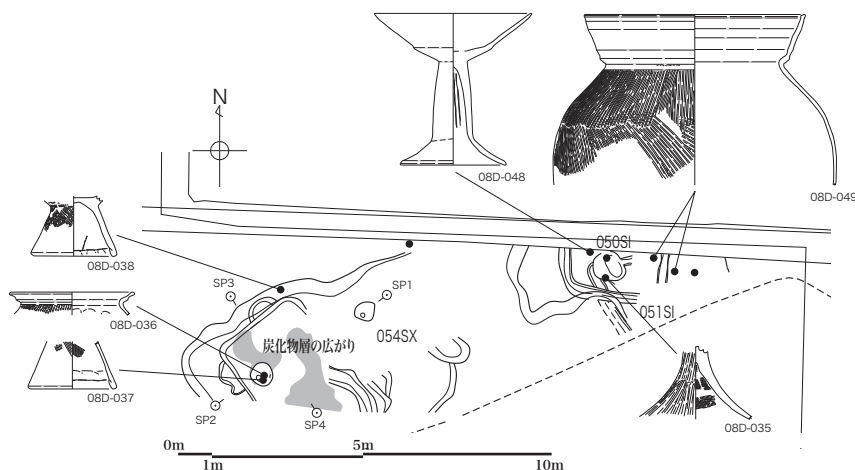


図 278 長野北浦遺跡 08D区 050SI 051SI 054SX 土器出土分布図

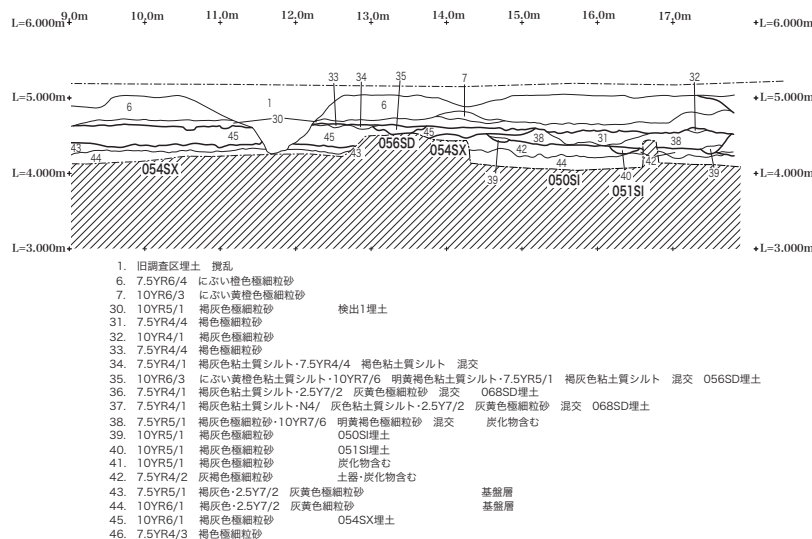


図 279 長野北浦遺跡 08D区北壁土層セクション図

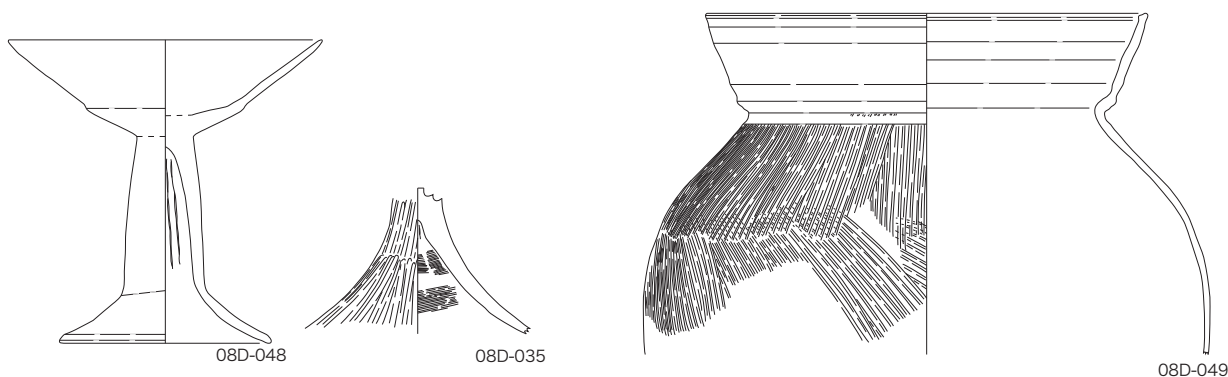


図 280 長野北浦遺跡 08D区 050SI 出土土器実測図

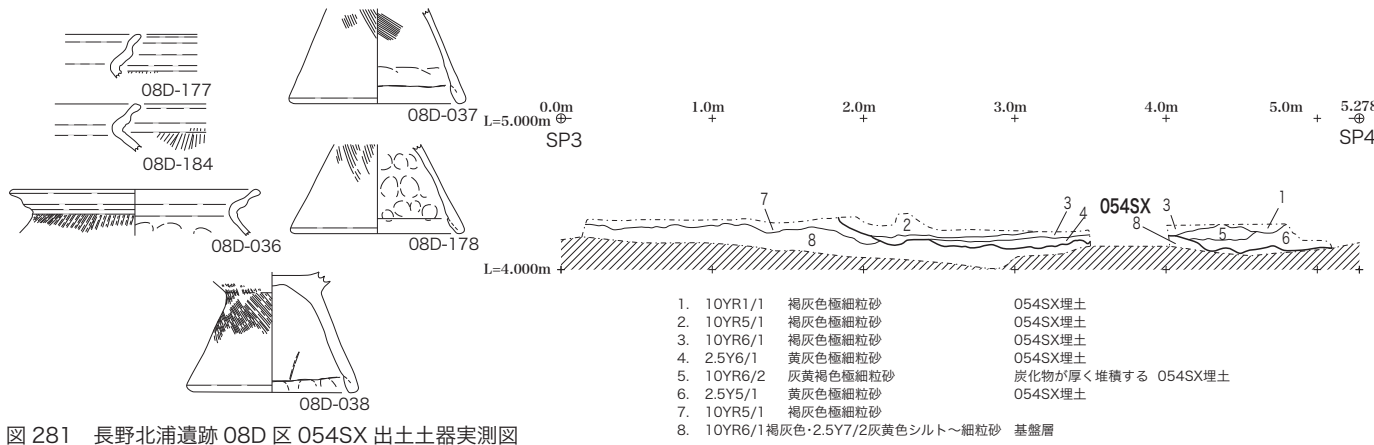


図 281 長野北浦遺跡 08D 区 054SX 出土土器実測図

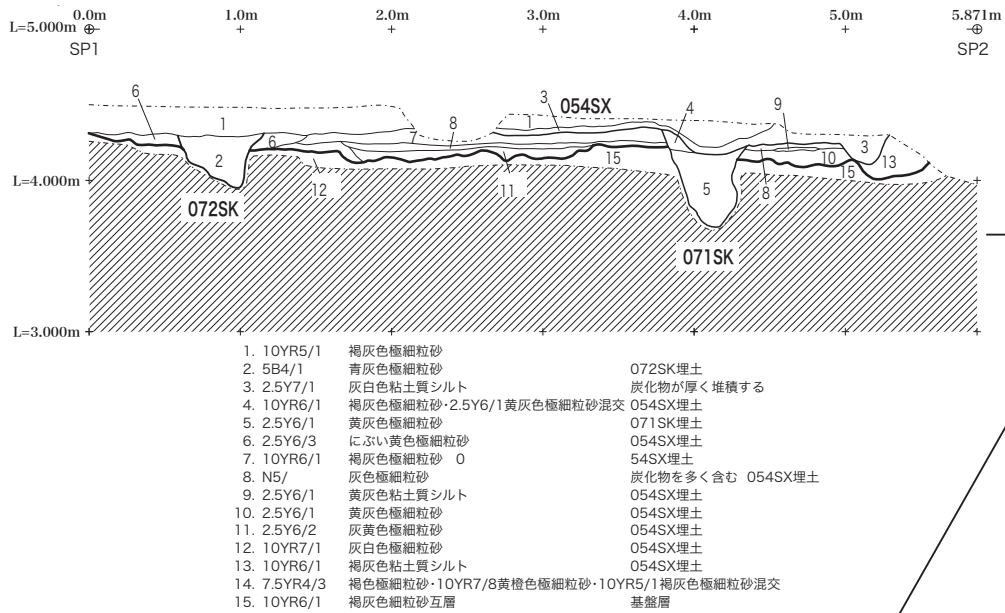


図 282 長野北浦遺跡 08D 区 054SX 土層セクション図



図 283 長野北浦遺跡 08D 区 054SX 土層断面 北西から

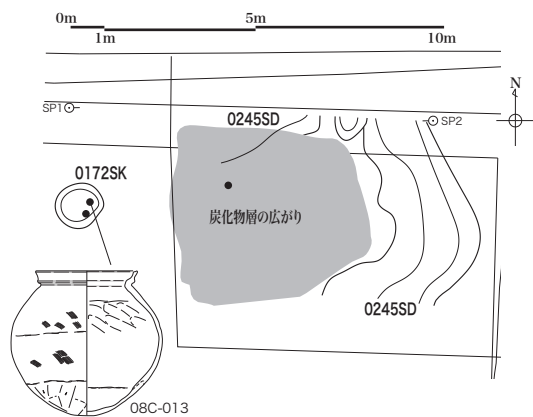


図 284 長野北浦遺跡 08D 区 0245SD 周辺プラン

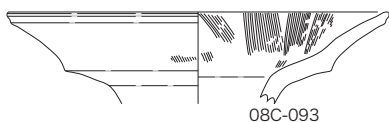


図 285 長野北浦遺跡 08D 区 0245 出土土器実測図



図 286 長野北浦遺跡 08D 区 0245SD 北から

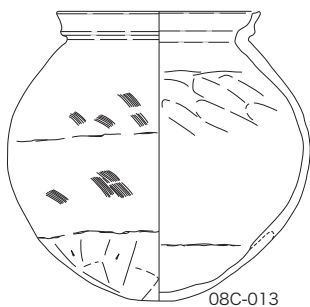


図 287 長野北浦遺跡 08D 区
0172SK 出土土器実測図

08C 区 0245SD 西に開くコ字に屈曲する溝であり、幅約2m、深さは約40cmである。溝の上端間では約3.5mを測る。溝で区切られた範囲に重なる炭化物層の広がり
は溝内部にも及んでいる。炭化物を含む堆積層は一定期間の開口状態を示しているので、堅穴建物の床面下に設けられた掘形が溝状を呈したものではない。

プランでは北溝と東側のL字溝は分離しており、また土層断面でも部分的に切り合いがあるので、同一番号は付されているがそもそも同一の溝ではないようだ。堆積層の状況も北側は炭化物薄層が何層も重なっており、東のL字溝が単純な堆積を示しているとは大きく異なる。そして、炭化物層の直下に焼土があるので火を伴う

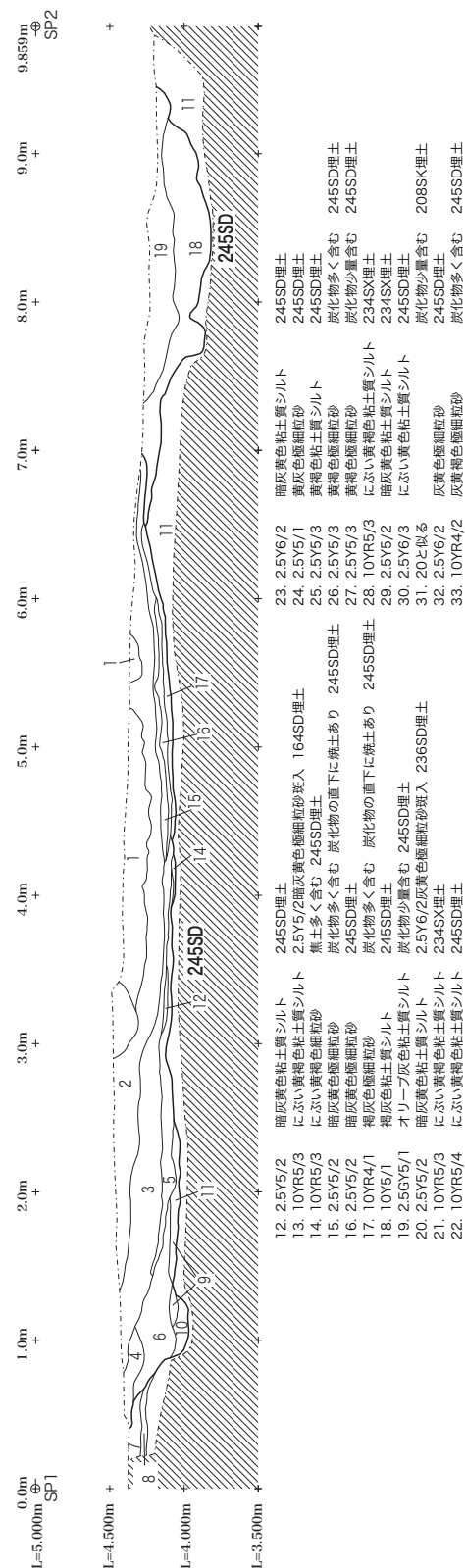


図 288 長野北浦遺跡 08D 区
0245SD 土層セクション図

廃棄行為が行われたとすれば、堆積層が湾曲している点を含めて竪穴建物跡を想定する根拠は弱くなる。

08D 区 0172SK 08D 区 245SD の西側で検出された土坑で、内部からは丸底の受け口状口縁甕が出土した。煤等は付着せず、疲熱痕跡も認められない。

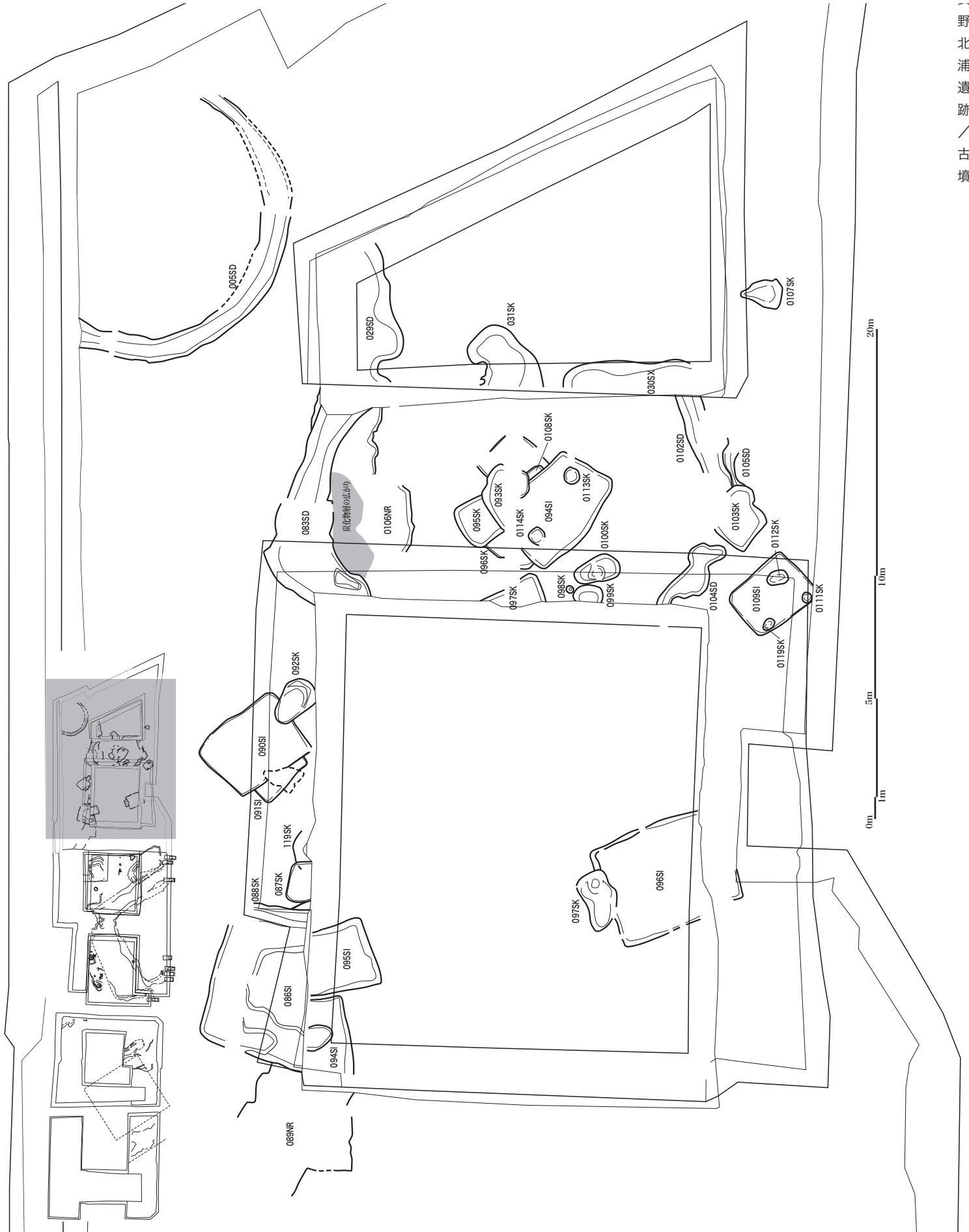


図 289 長野北浦遺跡東部古墳前期遺構図

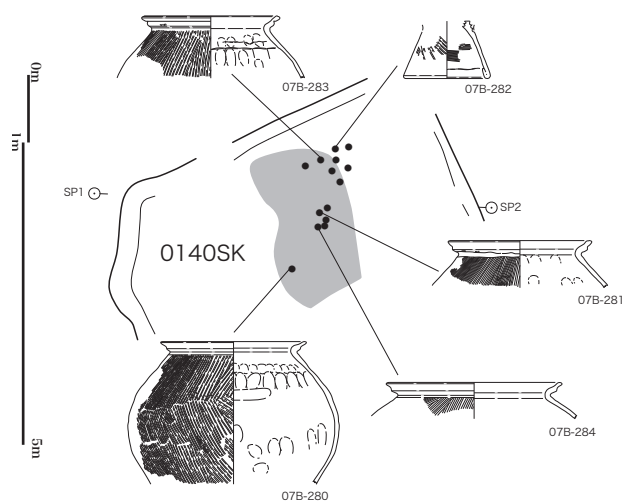


図 289 長野北浦遺跡 07Ba 区 140SK 土器出土分布図

07Ba区140SX

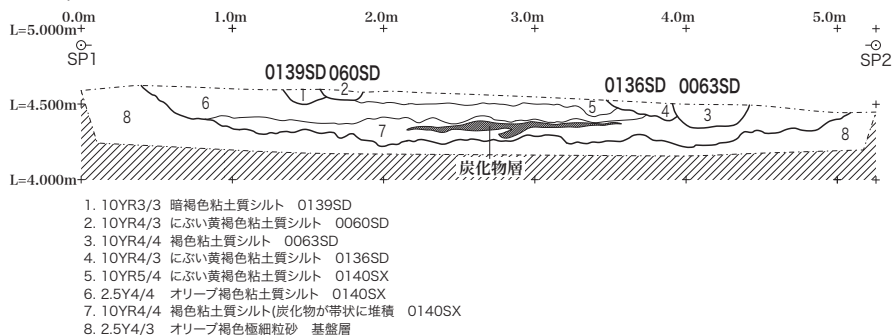


図 291 長野北浦遺跡 07Ba 区 SK140 土層セクション図

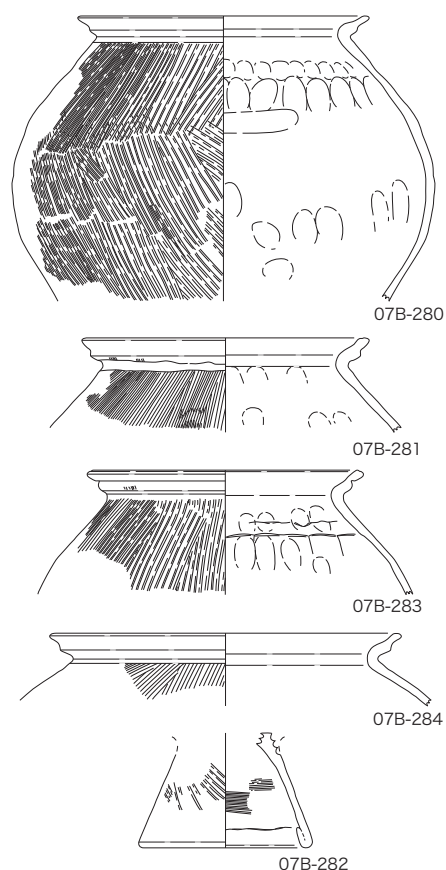


図 292 長野北浦遺跡 07B 区
0140SK 出土土器実測図

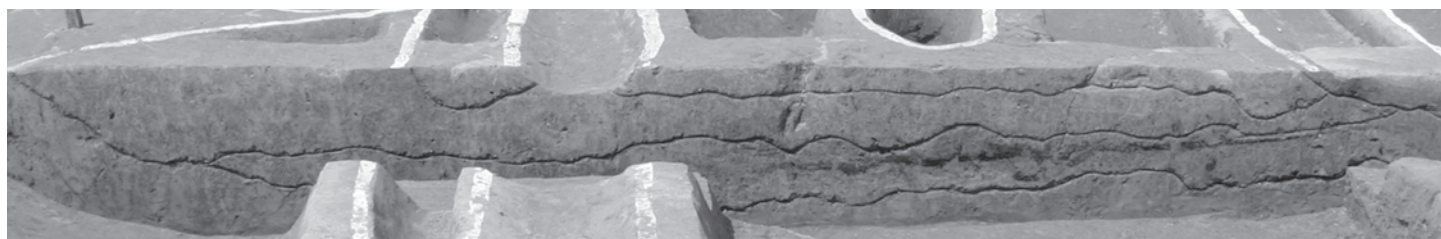


図 293 長野北浦遺跡 07Ba 区 140SK 土層断面

07Ba 区 140SK 中世以降の遺構検出面として調査された 1 面で検出された。不整形形で、東西軸は 4.8m

を測る。断面は底面に小さな凹凸があり、下層堆積層の上部に炭化物層が形成されている。上下 2 層の堆積層界面はその上部にあり、炭化物層も層界に一致せず、竪穴建物跡の床面とは認識されていない。炭化物層は多少の厚みをもって堆積しており、また焼土面も見つかっていないので、竪穴建物跡の床面と判断することはむづかしい。

なお、本遺構は方形周溝に先行する可能性が高い。

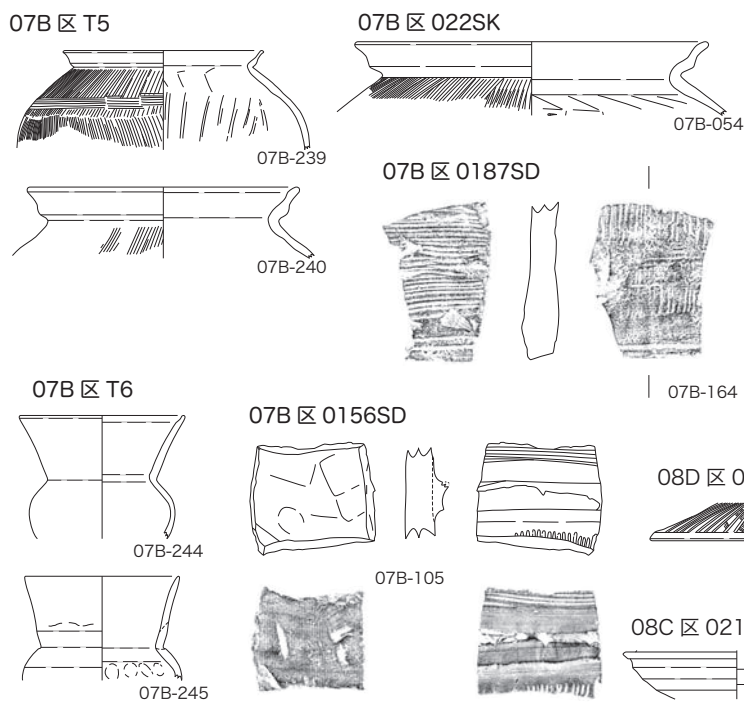


図 294 長野北浦遺跡各調査区出土遺物実測図

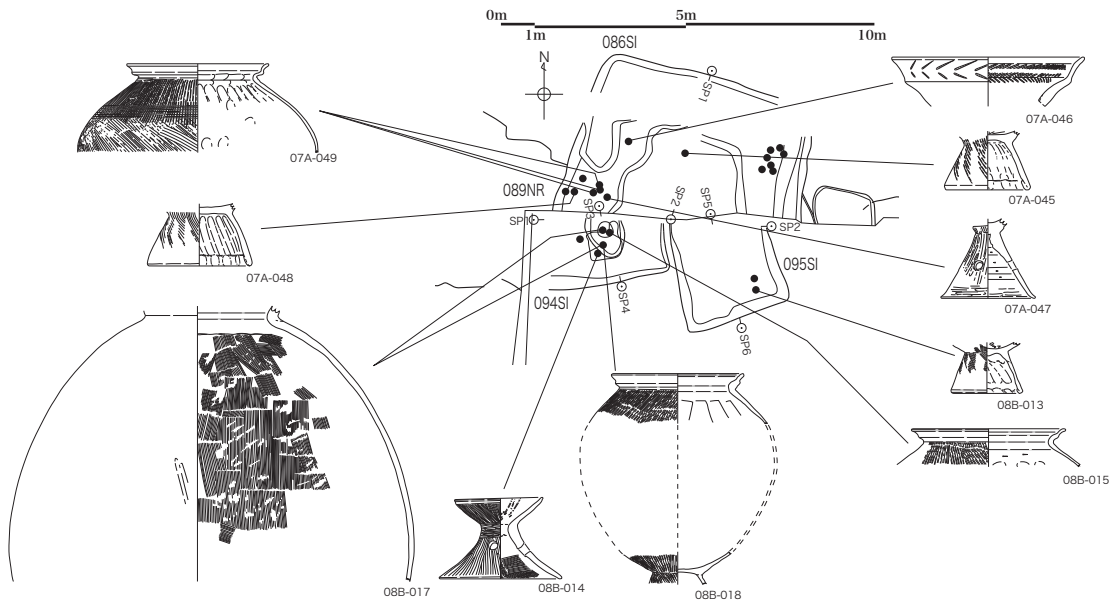
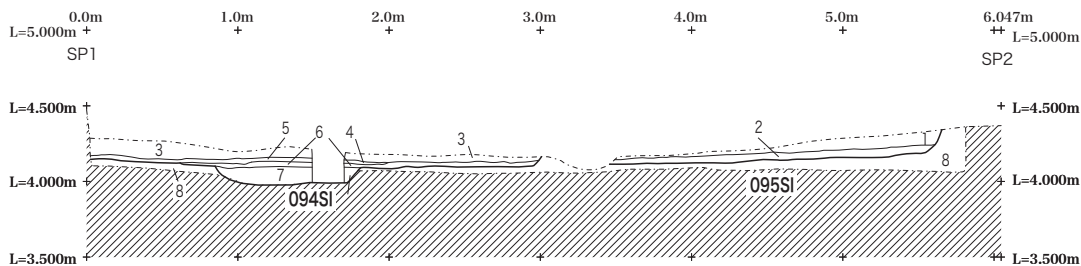


図 295 長野北浦遺跡 07A 区 086SI、08B 区 094SI・095SI 出土状況図

08B区094・095SI



調査区	IETK08B
遺構	094SI
時期	古墳時代
分類群	部位/No. 炭化物サンプル
モモ	炭化核 1
タデ属	炭化果実 (1)

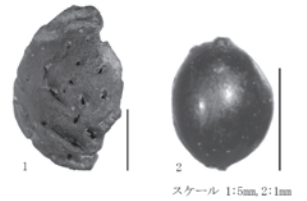
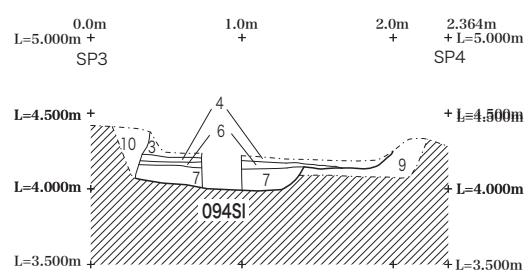


図 297 長野北浦遺跡 08B 区 094SI 出土種子
分析：佐々木由香・パンダリ スタルシャン (パレオ・ラボ)

08B区094SI



08B区095SI

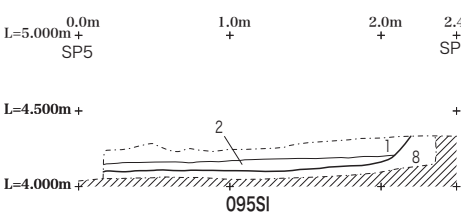


図 296 長野北浦遺跡 07A 区 086SI 土層セクション図

図 298 長野北浦遺跡 08B 区 094SI・095SI 土層セクション図

07A 区 086SI、08B 区 094SI・095SI

07A 区 086SI は東西軸で 6m を測る。周壁に沿う掘形は浅く溝状に窪むが、底面にも凹凸がある。炭化物層を伴う床面は無いけれども、出土した土器群が床面上に遺存していた可能性はある。

南の 08B 区では 2 つの竪穴建物跡が東西に並び、094SI は東西軸 3m 以上、095SI は約 2.6m である。094SI では明確な炭化物薄層があるのに対して 095SI には認められない。調査所見では両者に切り合いは無いので堆積状況が異なることに矛盾は無い。問題は南北「SI」の関係だが、検出面の違いであった可能性を残すが判然としない。

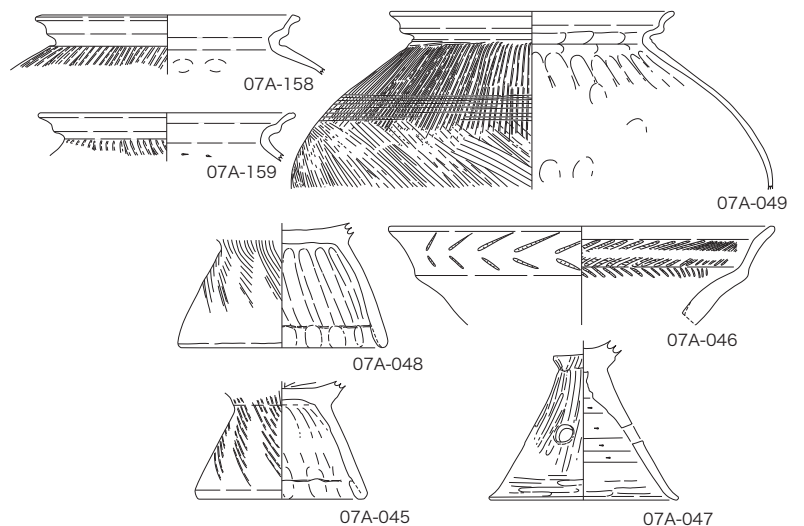


図 299 長野北浦遺跡 07A 区 086SI 出土土器実測図

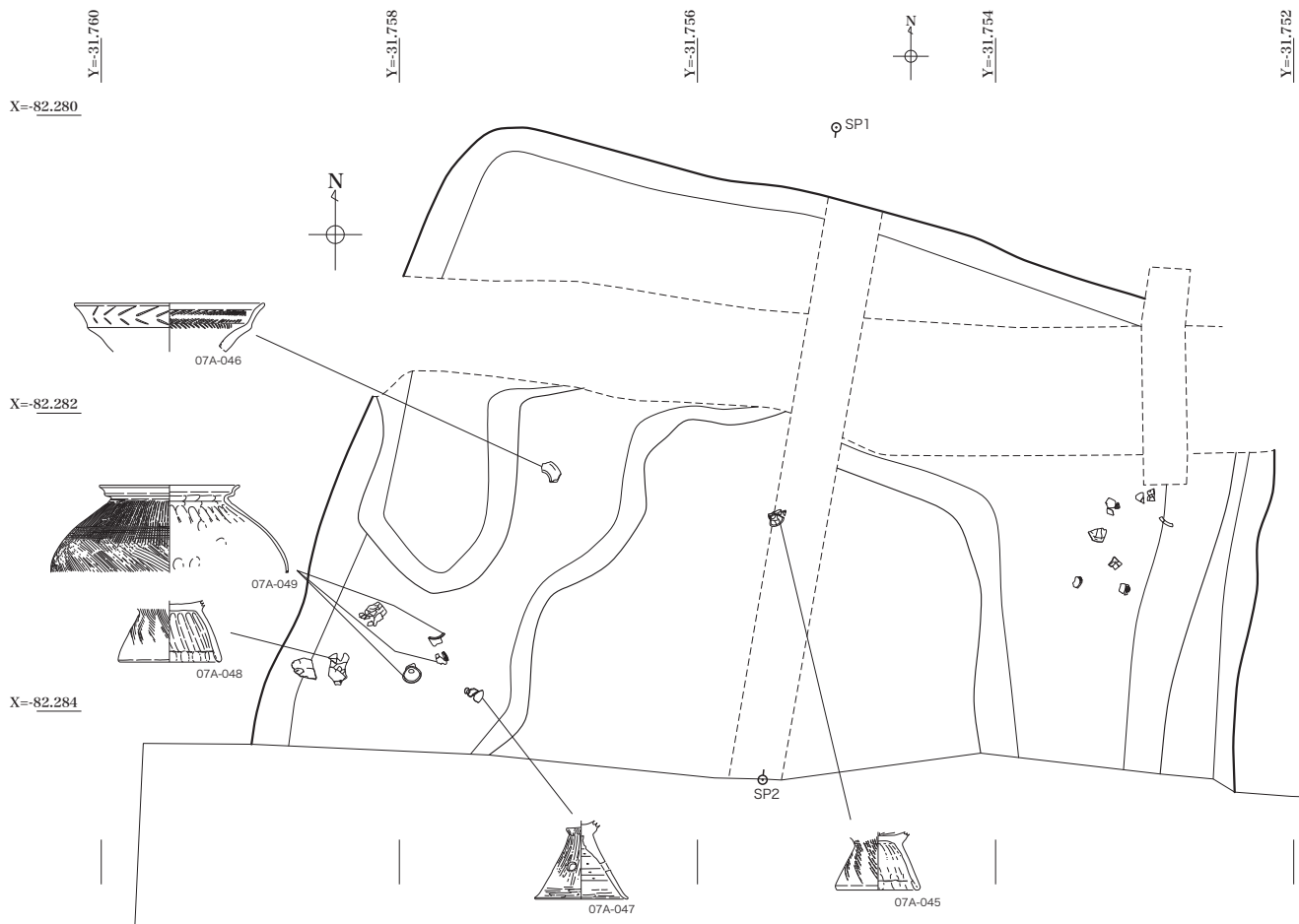


図 300 長野北浦遺跡 07AB 区 086SI 遺物分布状況図

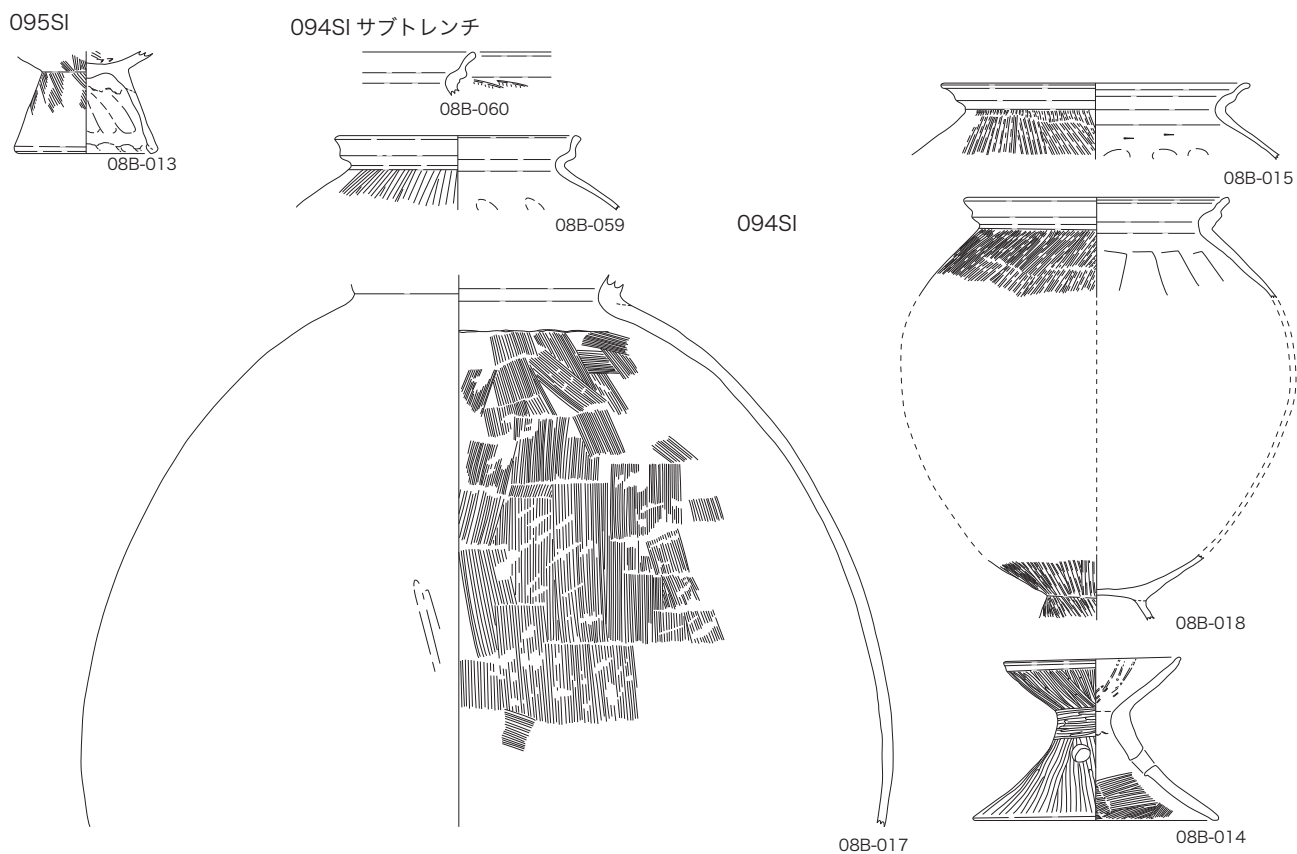


図 301 長野北浦遺跡 08B 区 094SI・095SI 出土土器実測図

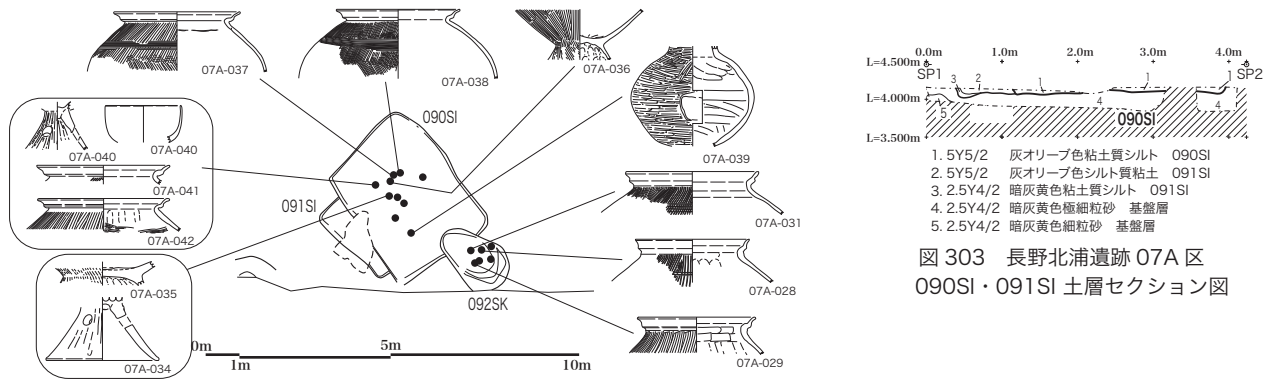


図 302 長野北浦遺跡 07A 区 090SI・091SI・092SK 土器群出土状況図

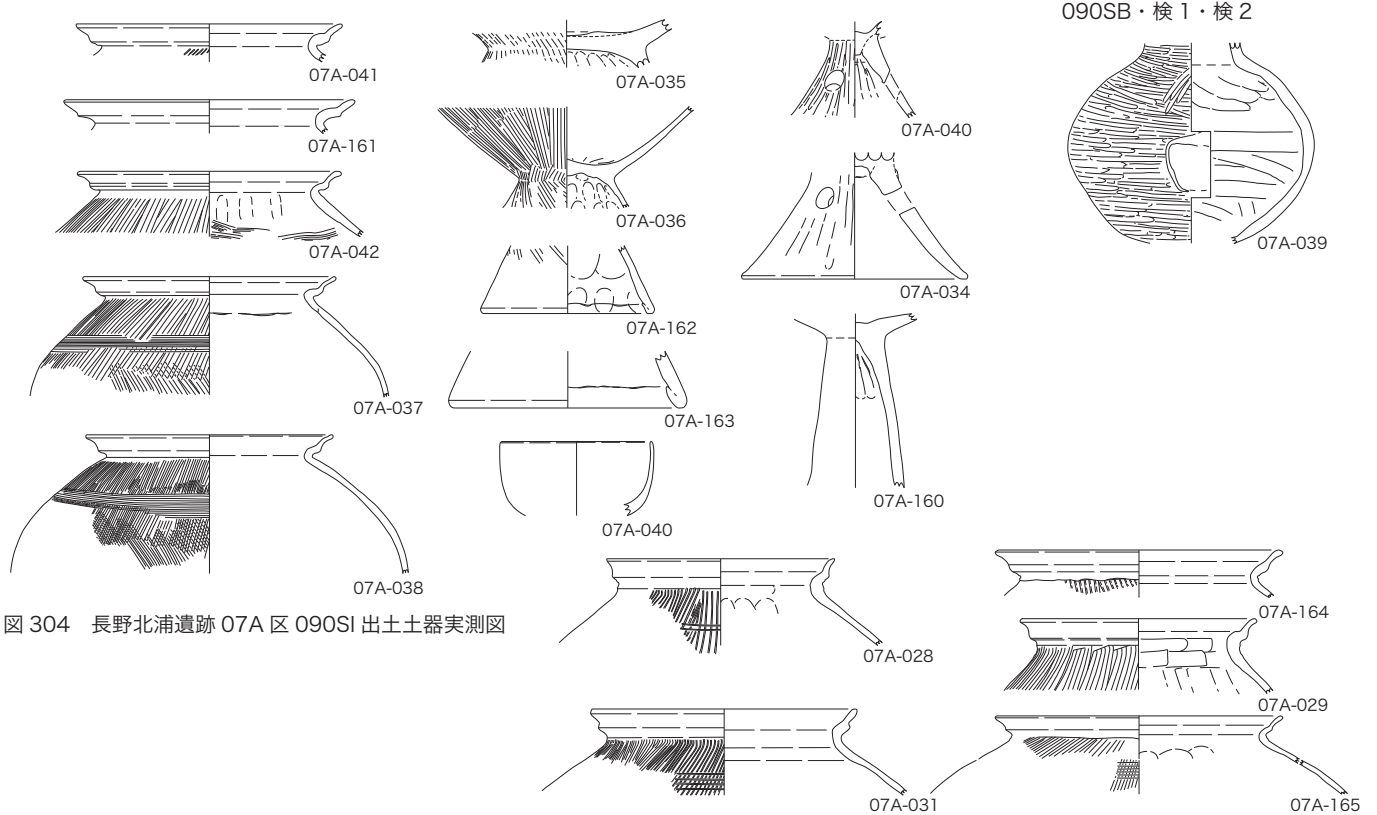


図 304 長野北浦遺跡 07A 区 090SI 出土土器実測図

図 305 長野北浦遺跡 07A 区 092SK 出土土器実測図

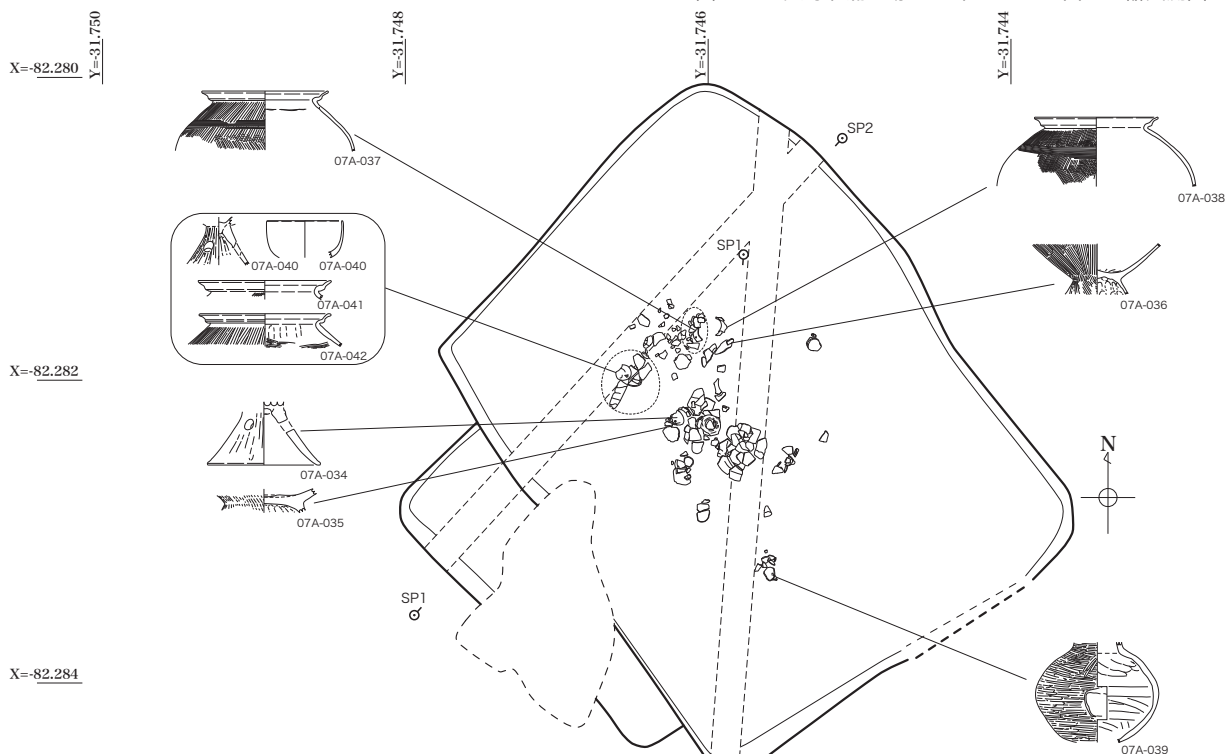


図 306 長野北浦遺跡 07A 区 090SI 土器群出土状況図

07A区 090SI 上部は削平されており、炭化物層は未確認だが、土器群が遺存していた。長軸3.7m、短軸3mを測る。091SIを切る。

08B区 096SI 炭化物層を床面の指標として、輪郭を検出した。南北約5m、東西約4.5mを測る。南北軸の床面高度はほぼ水平なのに対して、東西軸ではトレンチを挟んだ東側で7cmほど高くなっている。段差があればいわゆる「ベッド状遺構」との関連も生じるが、それは竪穴建物であることを前提にしていることであるが、焼土面は未検出であり、生活痕は無い。プランには表現されていないが、土層断面東端では床下掘形の凹地が認められる。

08B区 097SK 096SIの北端に重複して設けられている。胴部に焼成後穿孔をもつほぼ完全な形のS字甕が横位で出土した。土層で見る限り単一の遺構ではないようで、東側の一段深くなっている部分や堆積状況からも複数回の再掘削が窺われる。上部には炭化物層が認められるので、最終的には廃棄土坑になったようだが、S字甕も本遺構の形成過程における一つの段階を示すものだろう。

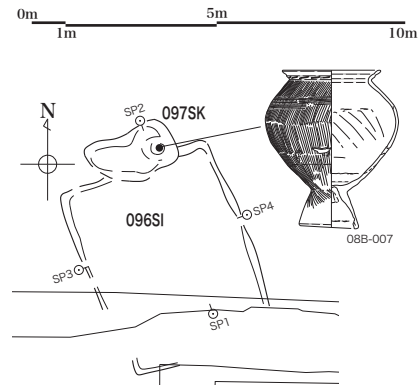


図 307 長野北浦遺跡 08B 区 096SI・097SK 出土土器分布図

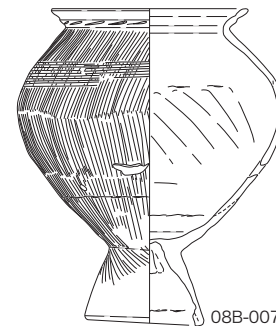


図 308 長野北浦遺跡 08B 区 097SK 出土土器実測図

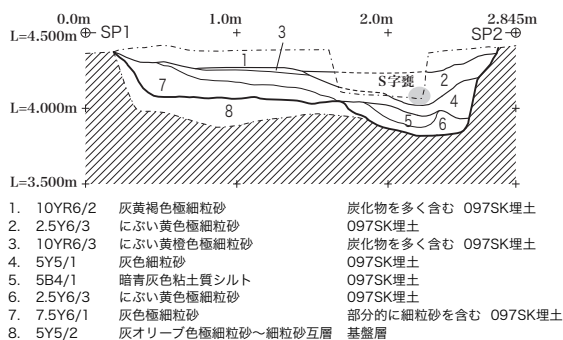


図 309 長野北浦遺跡 08B 区 097SK 土層セクション図

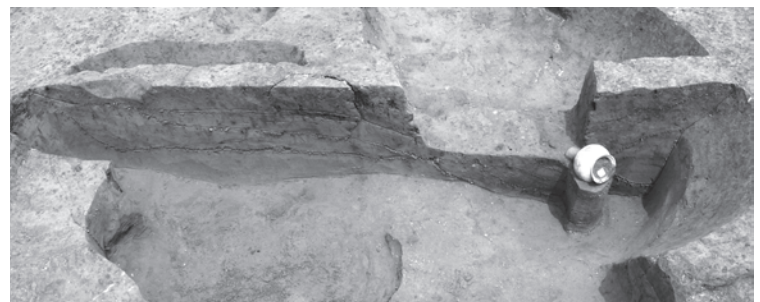
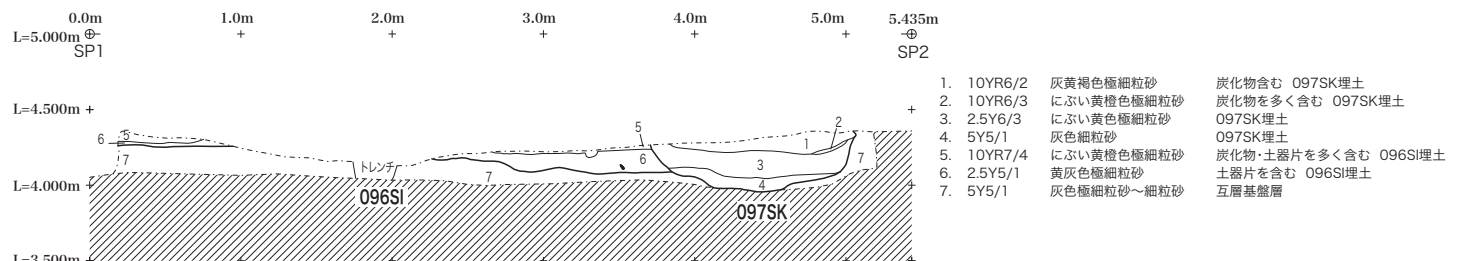


図 310 長野北浦遺跡 08B 区 097SK 断面 南から

08B区096SI-A



08B区096SI-B

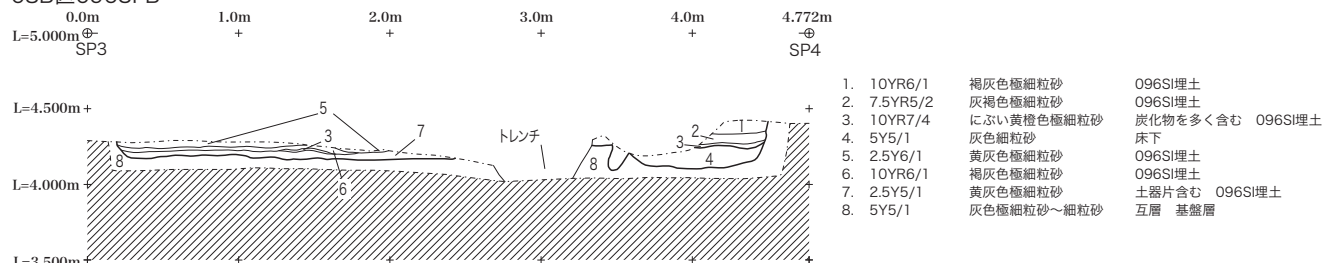


図 311 長野北浦遺跡 08B 区 096SI 土層セクション図

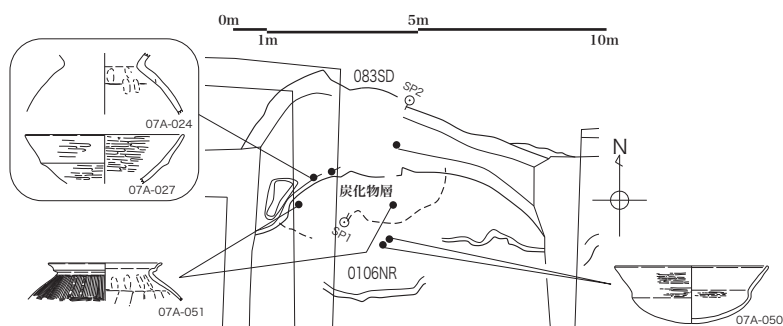


図 312 長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 出土器出土分布図

07A 区 083SD・0106NR 083SD は幅 20～30cm の L 字に曲がる溝である。

一見したところ、溝の南側には炭化物薄層が水平に堆積しており、竪穴建物跡の床面と掘形周溝の組み合わせと推測される。ところが調査記録では当該層を「0106NR」としている。炭化物層の上には粘土質シルトが堆積しているが、ラミナの形成は認められない。にもかかわらず何故「NR」表記なのかは不明である。他の土層セクションでは「NR」遺構は 083SD の下部にあって先行するので、誤記とすれば矛盾は無い。なお、083SD は、最上部の 3 層が下層と不整合面をもつので、竪穴建物堆積層の一部である可能性も残る。

と推測を重ねたところで再び調査記録に戻れば、炭化物層に関して右写真のキャプションでは「竪穴床面炭化物層」となっていた。その後、炭化物層の広がりを追究する中で、炭化物層が安定かつ整然とした水平堆積をなさないこと、落ち込みの輪郭が不明確なことから最終的に「NR」との表記に至ったらしい。これまで土器と炭

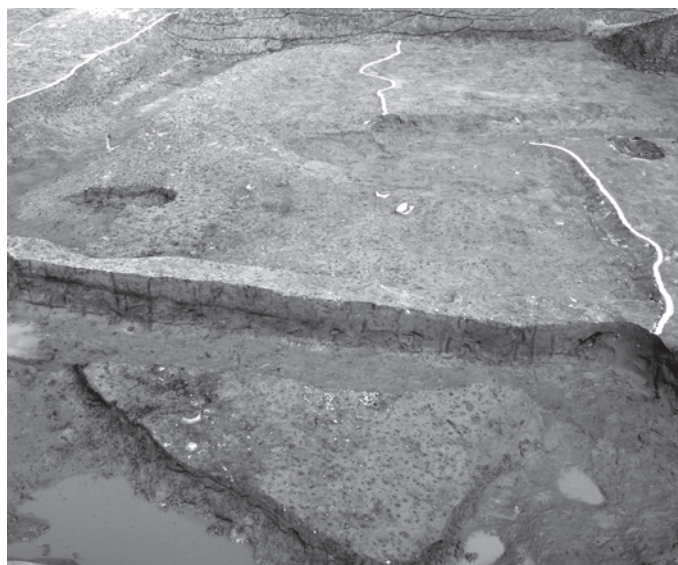


図 314 長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 掘り下げ状況 西から

化物層の組み合わせからみれば「竪穴建物跡」と推測しがちであったが、本遺跡ではそのように単純には評価できないようだ。焼土面（火処）が伴わないことがそのように評価できない大きな要因でもあるのだが。

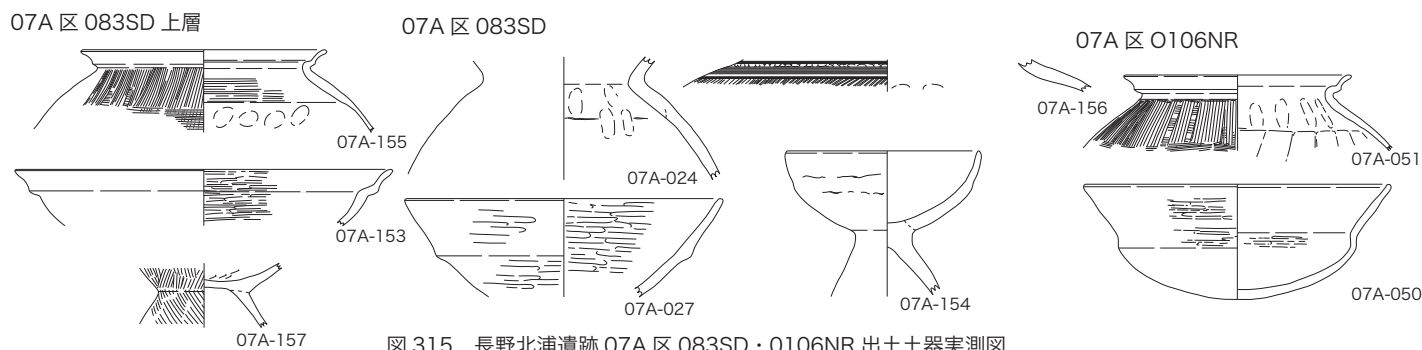


図 315 長野北浦遺跡 07A 区 083SD・0106NR 出土土器実測図

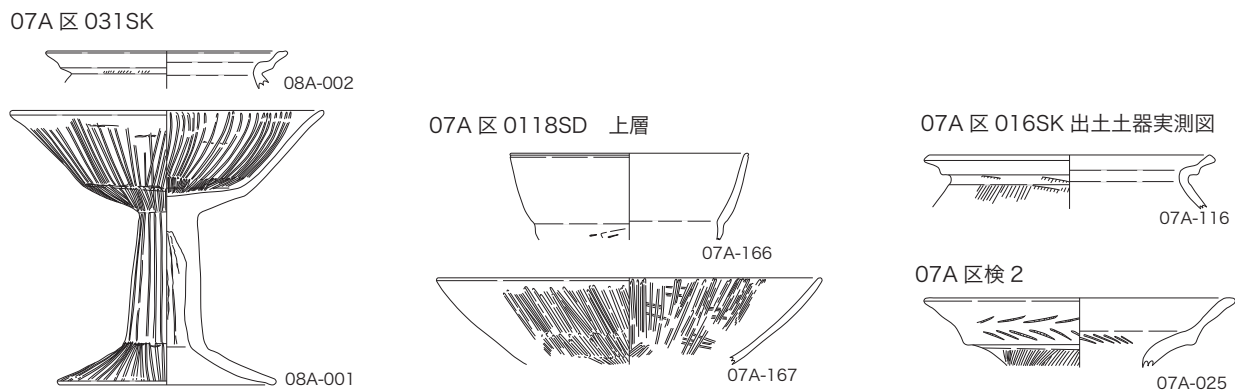


図 316 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土土器実測図



07A 区 005SD 07A 区北東隅で検出した径約 10m の円形周溝である。溝の断面は逆台形の整った形状で、幅に比べて深い印象を受けた。

堆積層は下部まで黒色粘土質シルトであり、最下層はその影響を受けて暗色の堆積層となっていた。出土遺物は無いので年代推定の手掛かりに乏しいが、長野北浦遺跡や塔の越遺跡における類似層の堆積状況からみて、005SD の掘削時期は世紀後半以前で、6 世紀前半まで遡ることは無いと推測される。

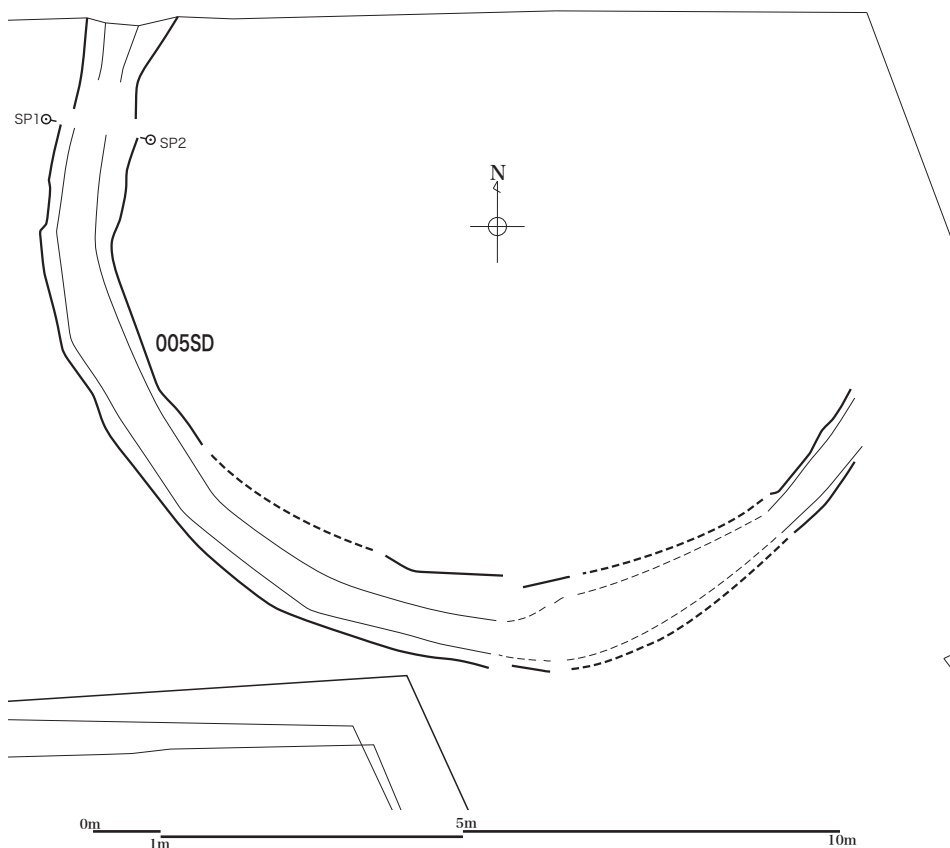


図 319 長野北浦遺跡 07A 区 005SD 掘り下げ状況 北西から

(2) 古代

A. 概要

長野北浦遺跡における古代の様子はことのほか不鮮明で、塔の越遺跡とは極めて対照的である。古代の遺物は散漫で、遺構も古墳前期の方形周溝の北に平行する溝群を除けば古代に限定できるものは少ない。

おそらく、そこに近世から近現代に至る開田事業が大きく影響していると考えられ、そのために古代の遺跡が滅失したと思われる。

B. 遺構・遺物

方形周溝の改変 古墳前期の方形周溝（07B区 241SD・242SD、08C区 167SD・08D区 048SD）は中層以上に黒色粘土質シルト層が堆積し、その上部からは7世紀後半の須恵器も出土している。黒色粘土質シルト層について当初は自然堆積層と判断されたものの、土層断面等の観察から不整合面の存在が明らかとなり、周溝で区切られた内側の整備に関わる再掘削の後に堆積したものと推測された。明確な時期決定の材料には欠けるものの、7世紀前半代に（もしくは6世紀代まで遡って）再掘削

されたものと考えられる。

平行する溝群 方形周溝の北西外縁をかすめるように08D区 068SDが掘



図 322 長野北浦遺跡 07Ba 区
0240SD 黒色粘土シルト層上部
返り蓋出土状況

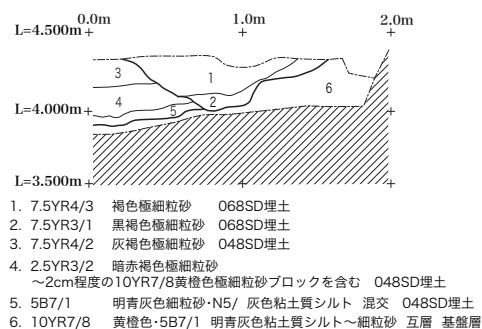


図 321 長野北浦遺跡 08D 区
068SD 土層セクション図

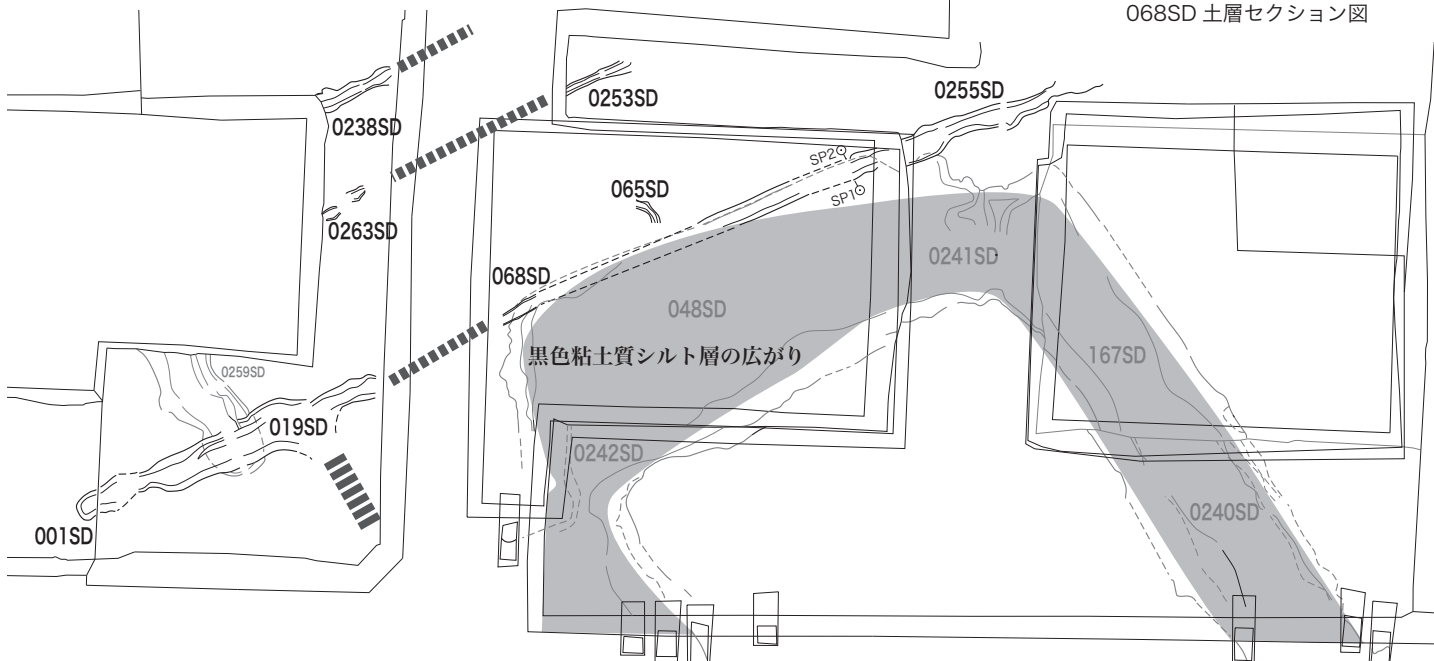


図 320 長野北浦遺跡古代遺構図

削され、南西の延長には 07Bb 区 001SD・019SD があり、続く可能性が高い。001SD は南西で切れているが、近世以降の開田による削平を考慮すれば、さらに続いていたものと考えられる。019SD からは南南東に溝が分岐する可能性もあり、これらは方形周溝の北と西を画する溝といえる。098SD ラインの北側には、やはり平行して 07BA 区 0253SD と 08Bb 区 0263SD、07Bb 区 238SD があり、性格は不明だが、軸線を共有する地割りの存在が窺える。

08D 区 068SD は幅 1.3m、深さ約 35cm を測り、北側にテラスをもつ。最下層は黒褐色極細粒砂が堆積している。同層は南側の方形周溝上部を埋めている黒色土層に類似しており、周辺に黒色土層が形成されて後に溝が掘り込まれたとすれば、掘削年代は 7 世紀後半以降ということになる。

少ない遺物 長野北浦遺跡から出土した遺物の量は極めて少ないが、それでも瓦塔片、軒平瓦片、暗紋土師器が出土し注目される。前の二つは中世の区画溝、最後は近世の溝（廃棄土坑）から出土したものだが、瓦塔片は約 100m 西の地点から出土した塔の越 07A 区出土資料と接合関係にある。



08C-109

07B-033

0043SR

0238SD

0263SD

019SD

0015SD



07B-195

07B-207

07B ☒ 0108SK

07B-066

長野北浦遺跡
07B-221

(3) 中世

A. 概要

長野北浦遺跡の中世は、東西長約 80m の正方位をとる方形区画と東端の南北溝を基本的な地割りとしつつ、それに先行する古代以来の軸線を共有する遺構群が展開するが、近世以降の開田や地表面の改変によって掘立柱建物等の検出には至らず、空間利用の詳細までは把握できなかった。また、調査時に想定された中世水田については、その存在を積極的に示す資料は認められなかった。

B. 遺構・遺物

方形区画 1 方形区画の構成は、07C 区 010SD を西辺の南北溝、07Bb 区 0204SD (→ 0205SD: 矢印は先後を示す、以下同じ)、08D 区 035SD (→ 036SD)、07Ba 区 0243SD (→ 0152SD)、08C 区 0164SD (→ 0191SD → 103SD)、07A 区 077SD を北辺の東西溝、07A 区 082SD を東辺の南北溝として構成される。

溝は断面逆台形を呈し、概ね 2.5 ～ 3.5m の幅で深さは 1.3m を測る。旧地表面を標高 5m とすれば深さ 1.8m、幅は 5m に及び、屋敷地の区画溝として十分な規模を備

える。

溝は少なくとも 1 回は改修されており、部分的には 2 回の掘削も認められるので、幾度かの改修を経たものと推測する。しかし、それが方形区画全体に及ぶものであったのかどうかについては定かではない。

例えば、08C 区では調査区東壁の土層断面を見る限りでも 163SD → 191SD → 103SD という順序があり、いずれも溝の埋没途中ではなく、埋没後に切り合っている。そして 164SD も最下層にはラミナが形成されているが他には認められないという差異があり、一様ではない。

08C 区 164SD の断面形は底面が幅広い逆台形であり、

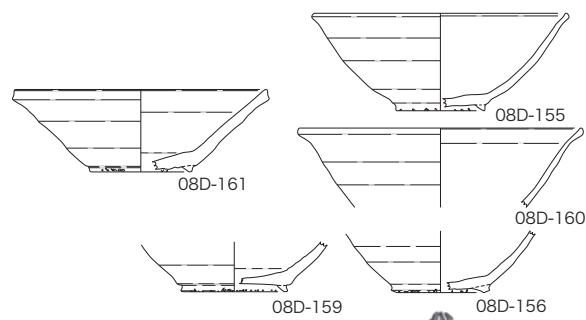


図 326 長野北浦遺跡 08D 区 036SD 出土遺物実測図

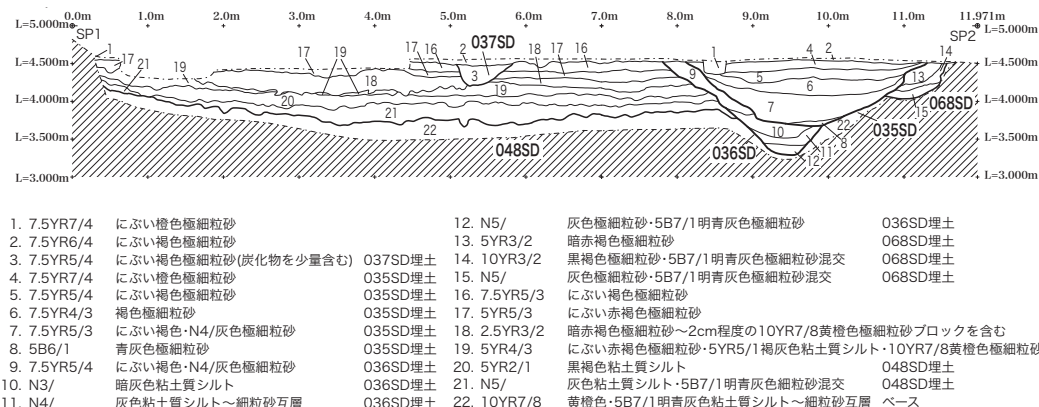


図 324 長野北浦遺跡 08D 区南北土層セクション図 1

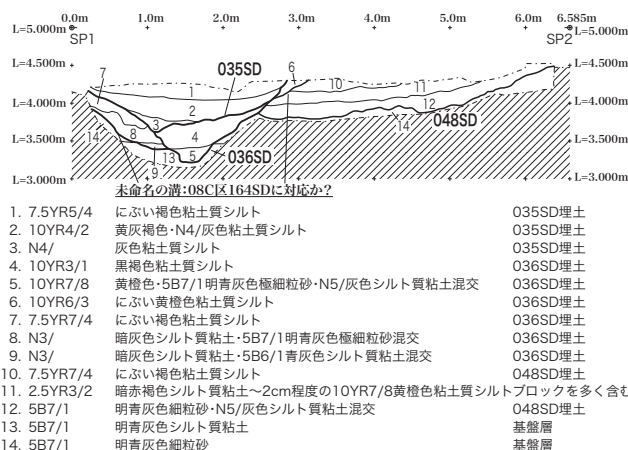


図 325 長野北浦遺跡 08D 区南北土層セクション図 2

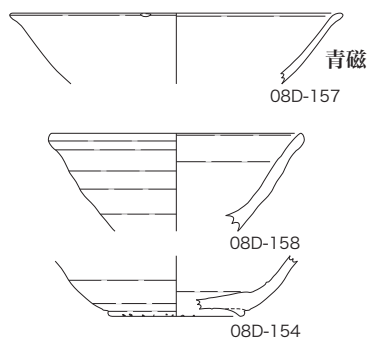
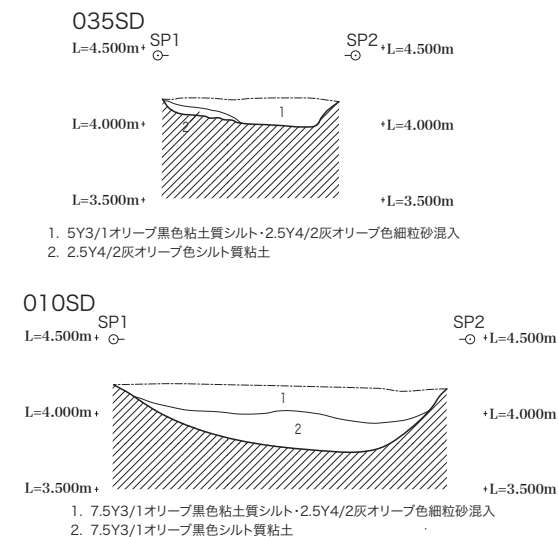
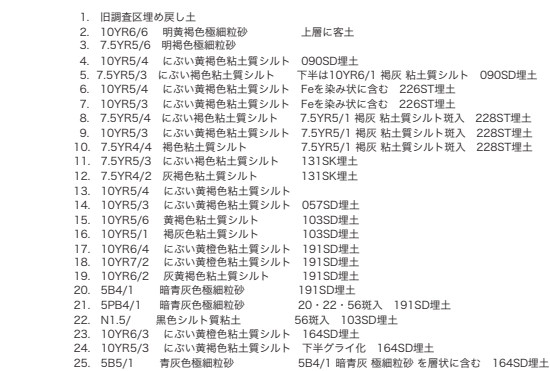
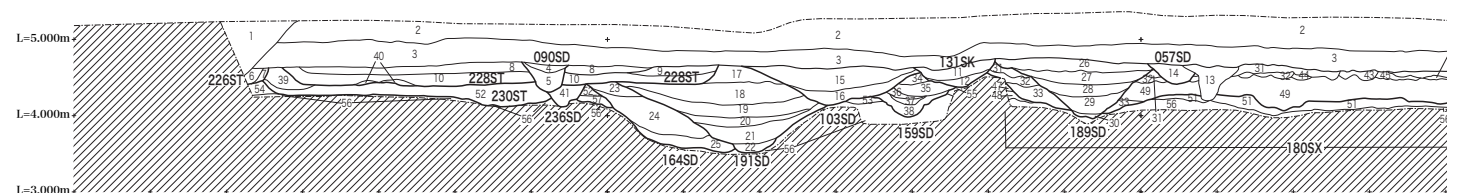
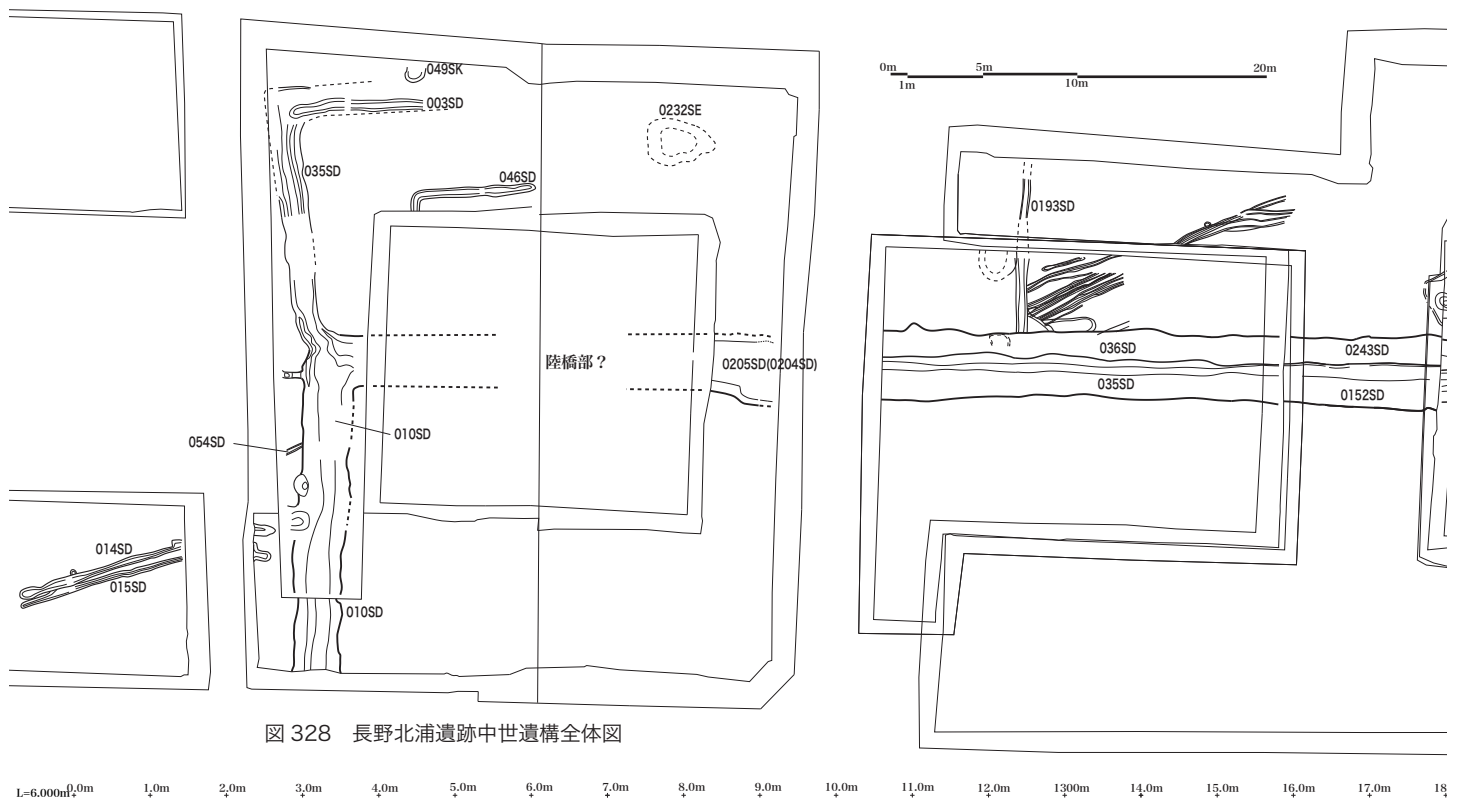
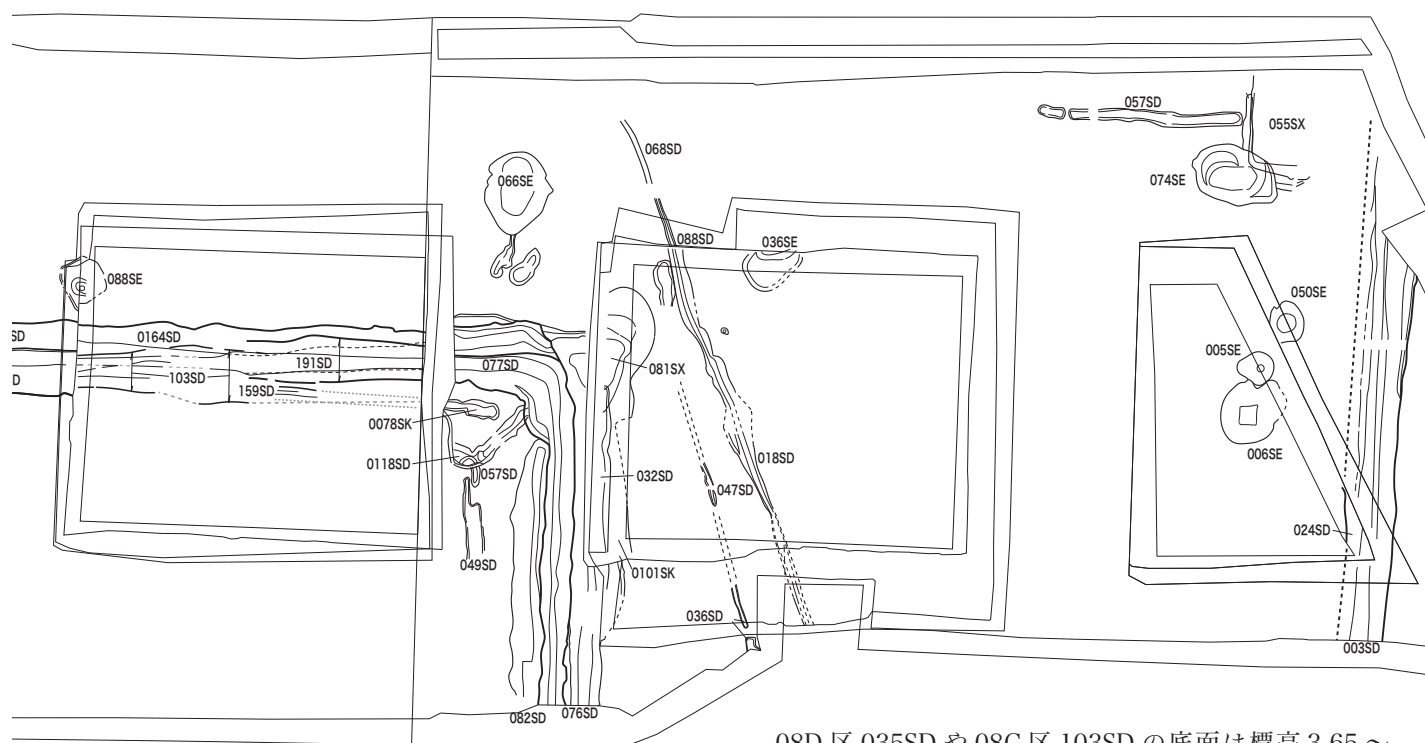


図 327 長野北浦遺跡 08D 区 036SD 最下層出土遺物実測図

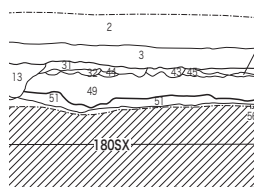
08D 区 036SD とは形状が異なる。むしろ、08C 区 191SD と共通し、上部に重なる 103SD は 08D 区 035SD と共通している。そして、08D



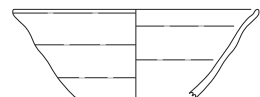


15.0m 16.0m 17.0m 18.0m

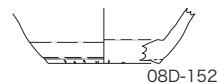
O8D 区 038SK



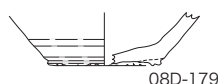
O8D 区 036SD 内土坑



O8D-153



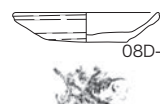
O8D-152



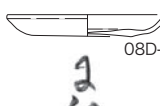
O8D-179



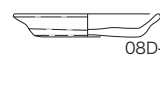
O8D-185



O8D-150

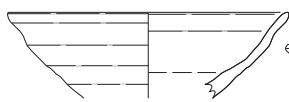


O8D-176

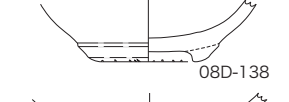


O8D-151

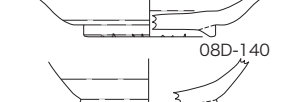
O8D 区 035SD



O8D-026



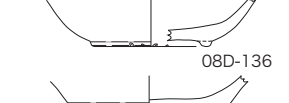
O8D-138



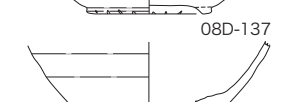
O8D-140



O8D-141



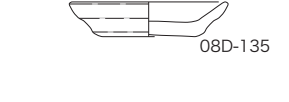
O8D-025



O8D-136



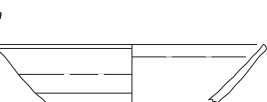
O8D-137



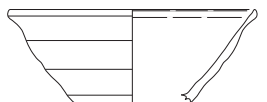
O8D-146



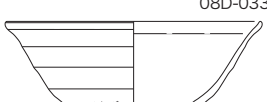
O8D-148



O8D-144



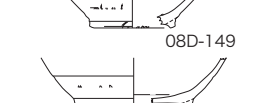
O8D-033



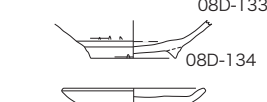
O8D-027



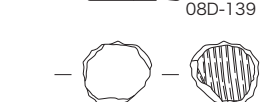
O8D-149



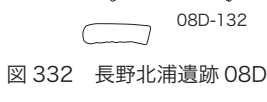
O8D-133



O8D-134



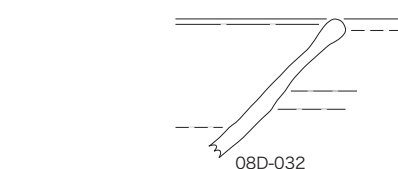
O8D-139



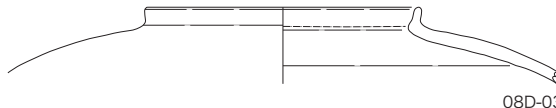
O8D-132



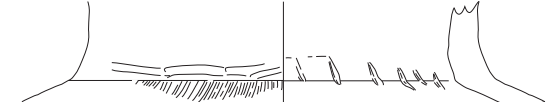
O8D-147



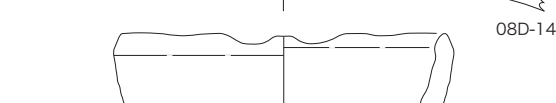
O8D-032



O8D-031



O8D-143



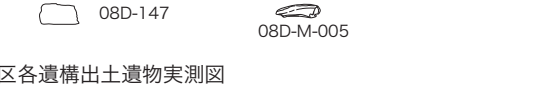
O8D-145



O8D-142



O8D-M-005



O8D-M-005

O8D 区 035SD や O8C 区 103SD の底面は標高 3.65 ～ 3.7m であり、O7C 区 010SD に近い。

つまり、断面形状や底面標高の近さ、そして再掘削が窺えない点から、O7C 区 010SD に対応するのは③であって、到底①②に相当するとは考えられない。よって、方形区画北辺の東西溝は①②の段階では西側の未調査部分で連続せず、陸橋部を有する可能性も否定できない。③に至っては果たして連続していたのかどうかさえ疑わしい。

方形区画の西辺溝は単純、北辺では複数の溝が重複、それに対して東辺では区画溝を挟んで両側に溝が並列しているというように、区画として一体であると思われる溝がこのように一様でないことをどのように評価するのか、大きな課題である。

方形区画 2
O7C 区で検出された 035SD を南北溝、東に折れる 003SD を東西溝として構成される。方形区画を構成する 010SD に対して 035SD は角度を違い、また溝幅を半減している。東への

図 332 長野北浦遺跡 O8D 区各遺構出土遺物実測図

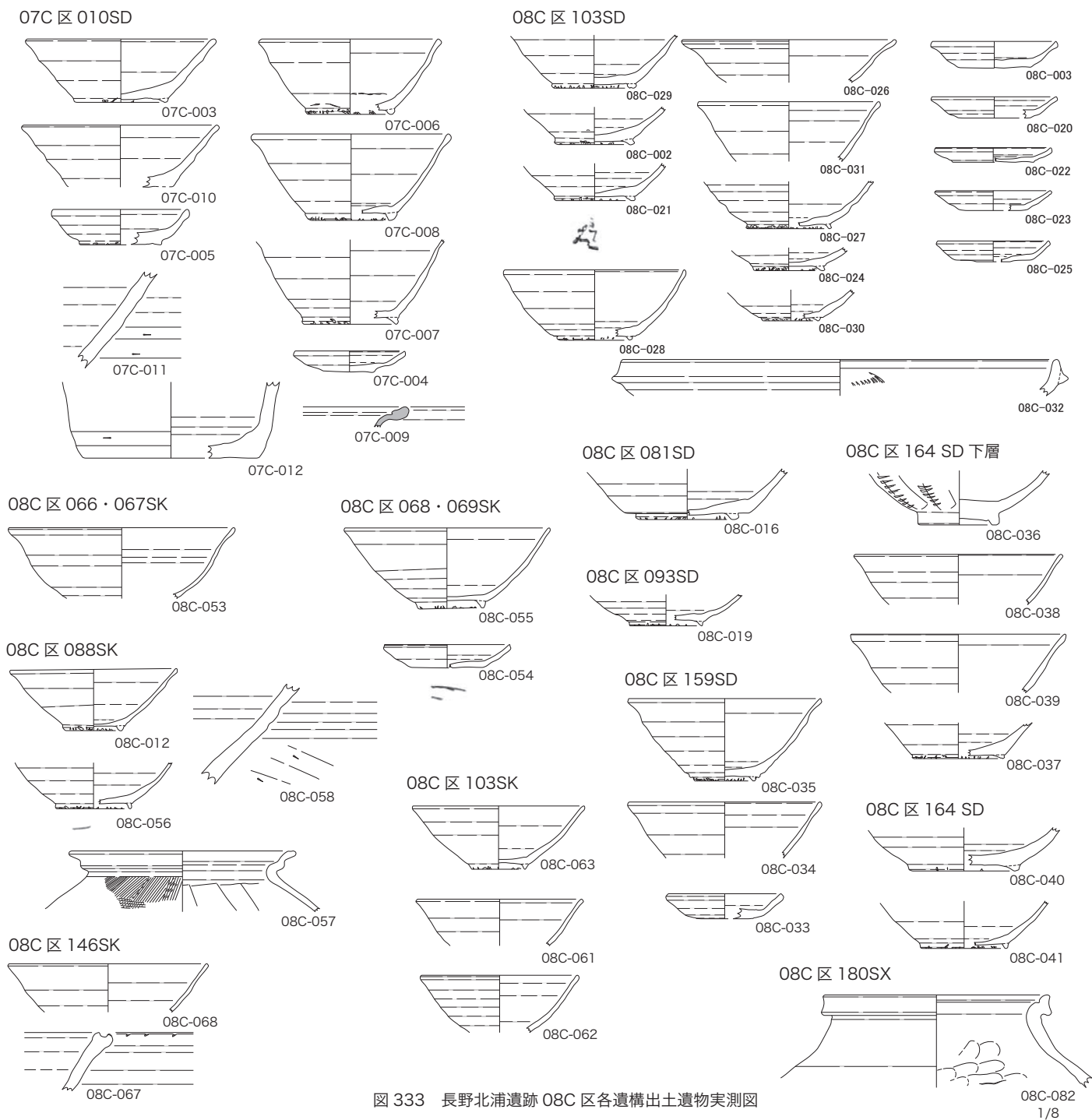


図 333 長野北浦遺跡 08C 区各遺構出土遺物実測図

延長で途切れていることは、上部の削平を考慮しても浅くなることは明らかで、010SD への流下が基本であつたろう。

この区画内にはさらに 046SD が小区画を構成するようで、柱穴は未検出だが、井戸の存在から居住域である可能性は高い。

長野北浦 07B 0232SE

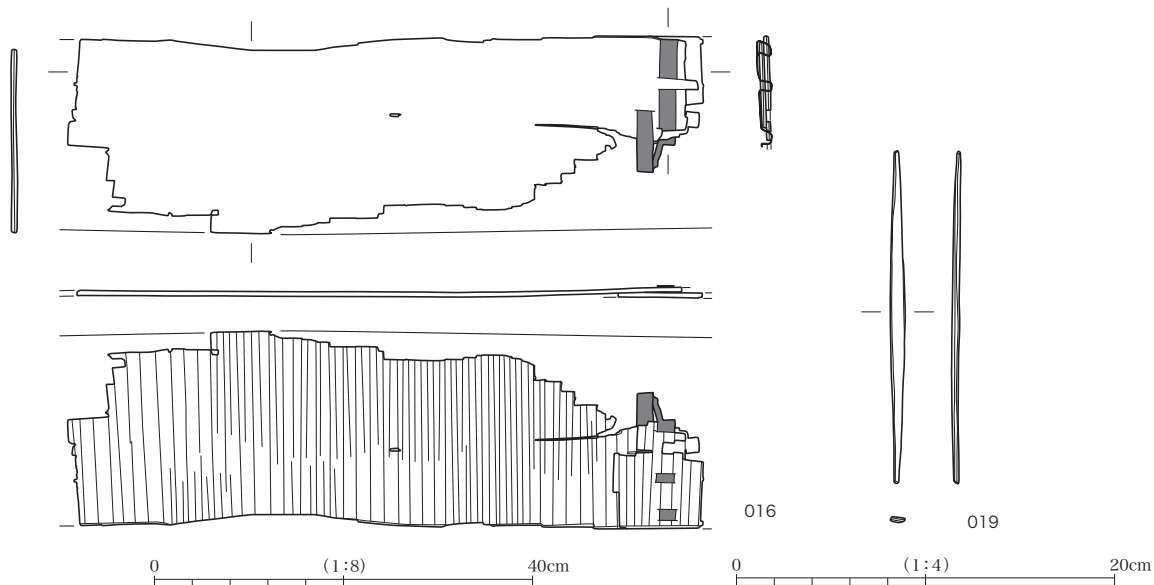


図 334 長野北浦遺跡 08C 区 0232SE 出土木製品実測図

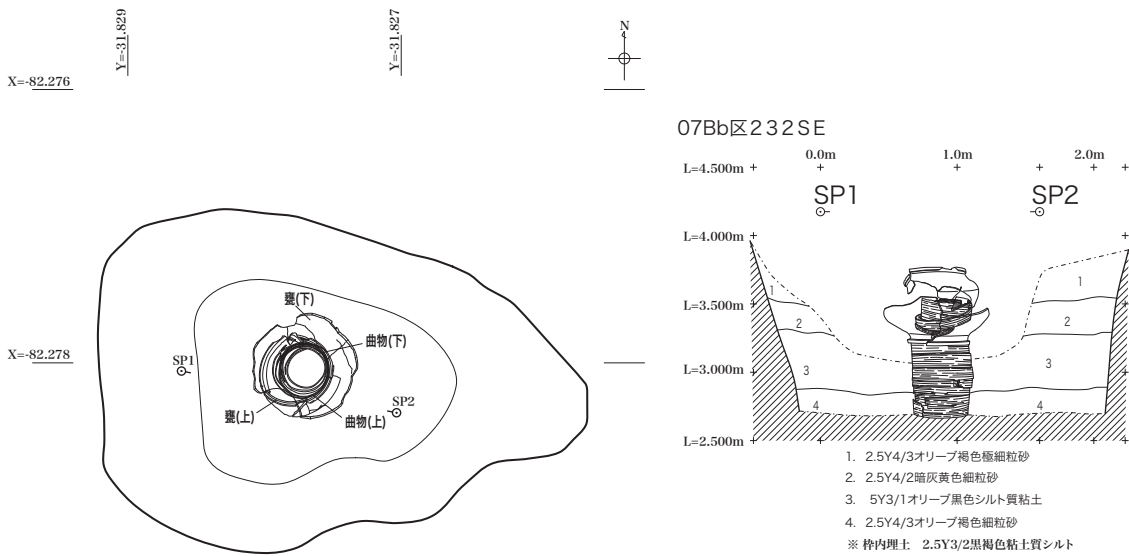


図 335 長野北浦遺跡 07Ba 区 232SE プラン・土層セクション図

07Bb 区 232SE 上部には廃棄土坑のように井戸材が投棄されていた。下写真の手前にみえるのは曲物の破材である。

井戸の掘形は、プランが長径 2.8m、短径 2.5m のやや不整形で、断面は壁面が急傾斜である。最下部は湧水のため確認できなかった。

井側は下から曲物を 6 段積み上げ、その上に大甕の上半部を逆さに伏せて 1 段目としている。その上には再び曲物を積み上げて大甕の上半部を正位にして 2 段目としているが、曲物は崩れており、大甕も破損しているため、この部分で抜き取りが行われ、曲物の残骸もこの段階のものであろう。



図 336 長野北浦遺跡 07Ba 区 0232SE 南西から

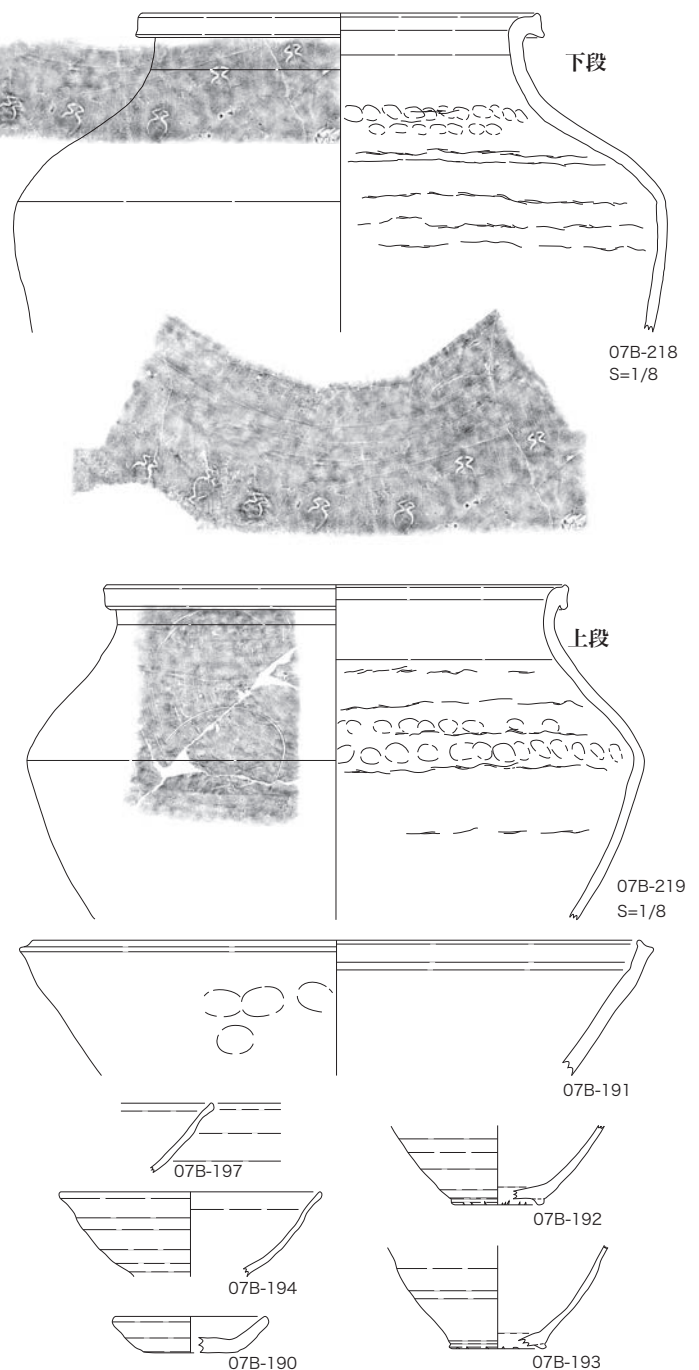
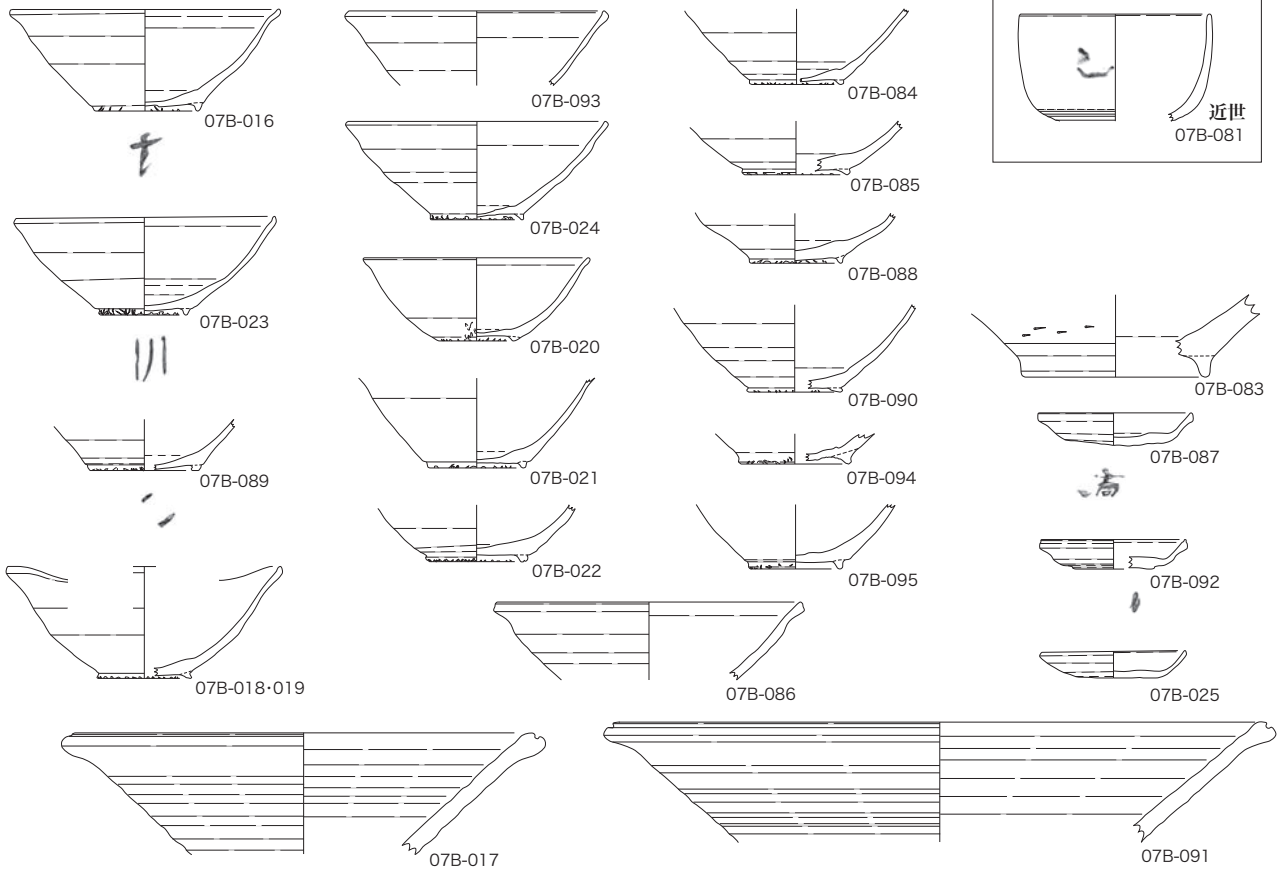
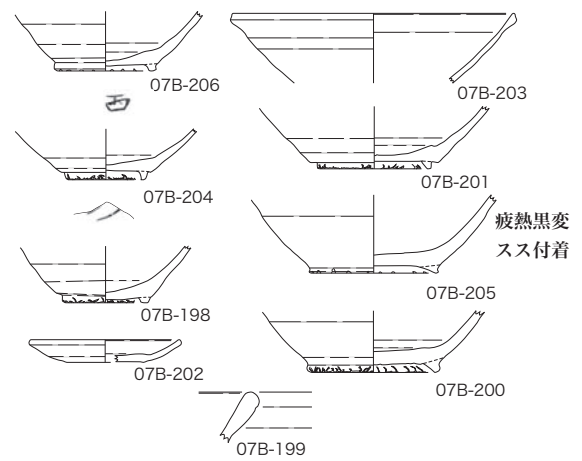


図 337 長野北浦遺跡 07Ba 区 0232SE 出土遺物実測図

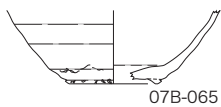
0152SD



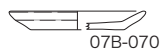
0243SD



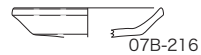
076SK



0134SK



0266SK



0197SK

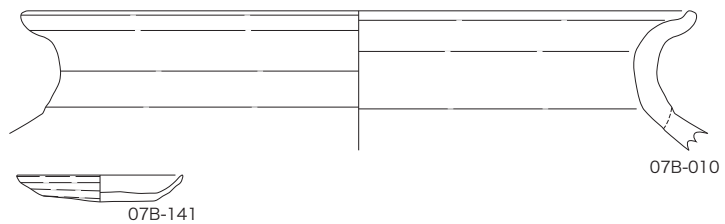


図 338 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図

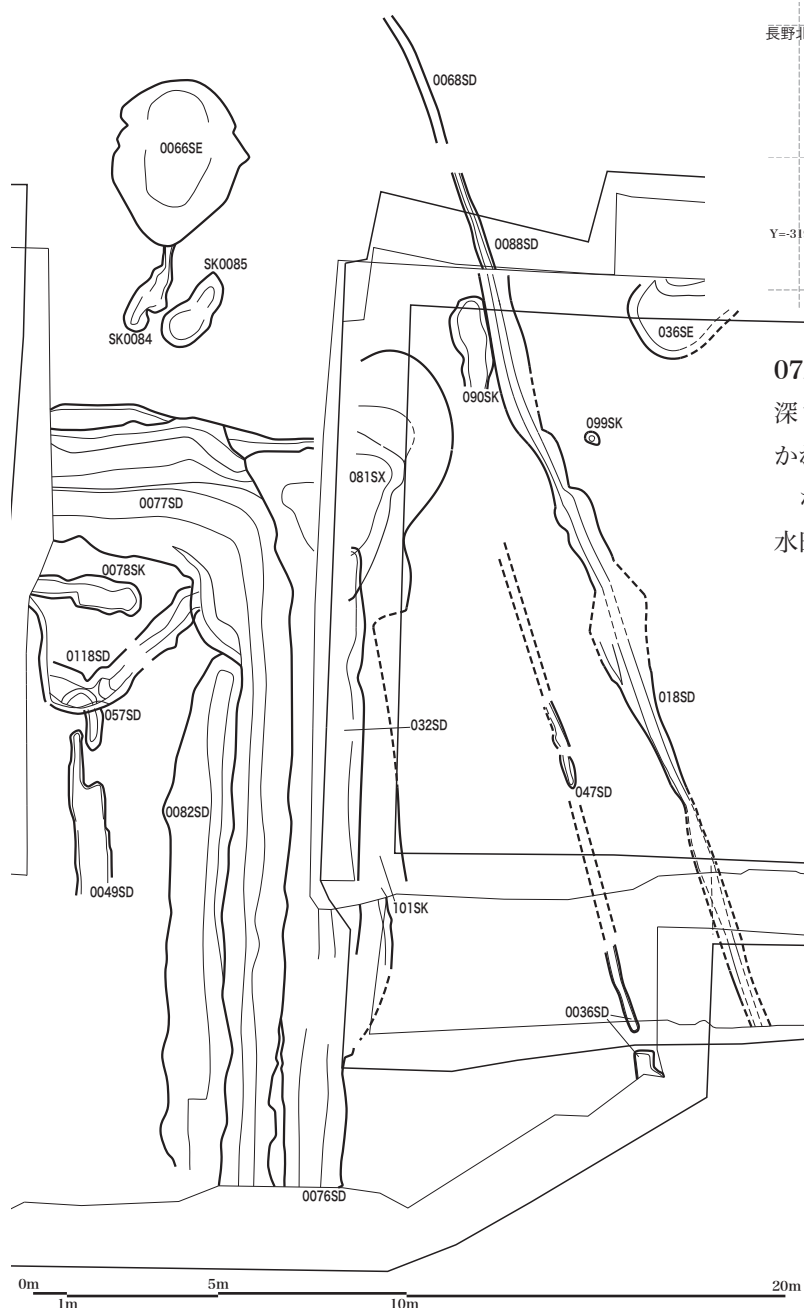
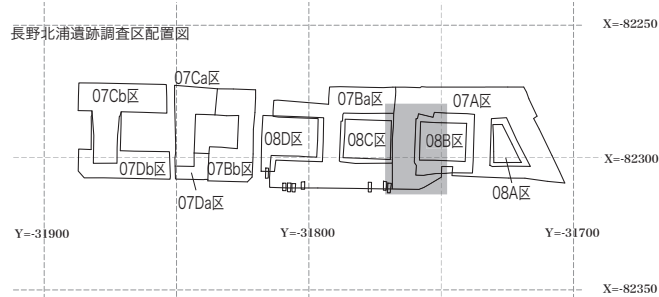


図 339 長野北浦遺跡区画溝東部遺構図



07A 区 077SD 方形区画東部の南北溝で、幅約 2m、深さ約 90cm を測る。断面は逆台形で、上下 2 層に分かれる点は西・北辺の方形区画溝に対応する。

なお、上部に広く重複する 034SX は近世の再掘削で、水田造成に伴う可能性が高い。

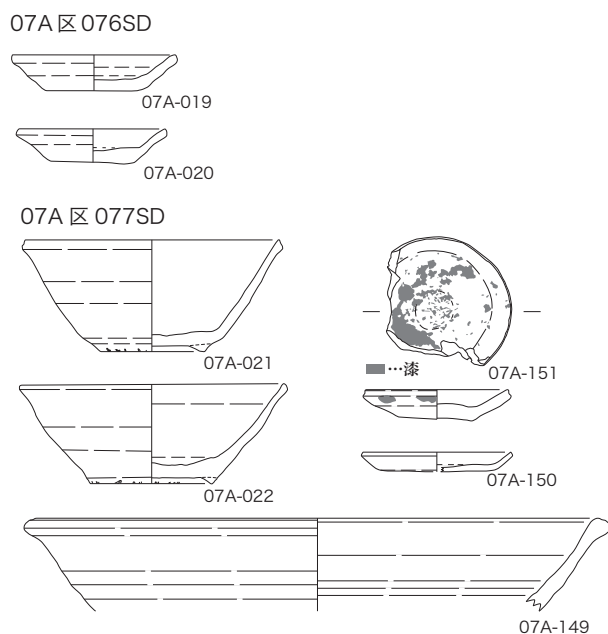


図 340 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土遺物実測図

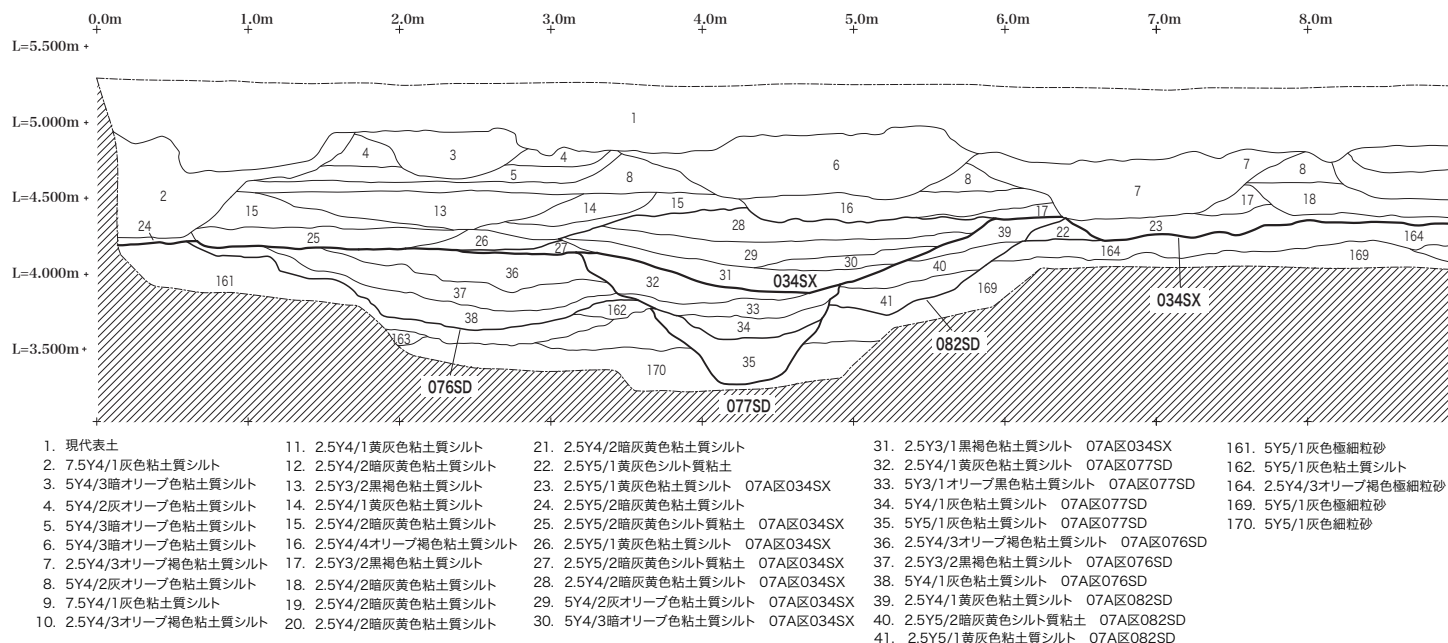


図 341 長野北浦遺跡 07A 区南壁土層セクション図

08B区081SX

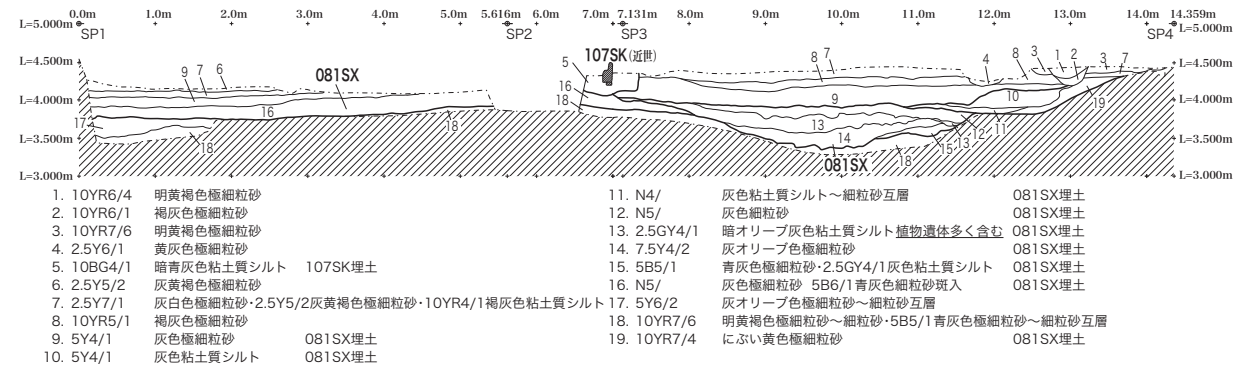


図 342 長野北浦遺跡 08B 区 081SX 土層セクション図

08B 区 081SX

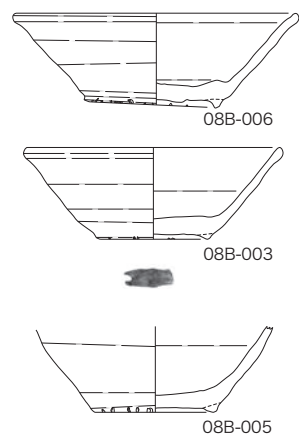
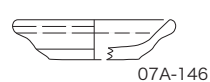
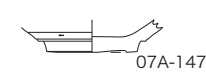


図 343 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図

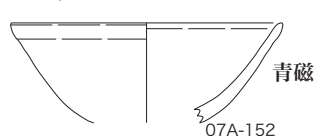
07A 区 071SK



07A 区 074SK



07A 区 078SK



07A 区 055SX

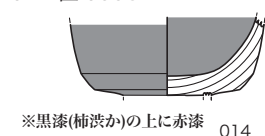


図 344 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土遺物実測図

07A 区 076SD・08B 区 032SD 07A 区と 08B 区にまたがる幅約 3m、深さ約 1m の南北溝で、方形区画溝 077SD に先行する。西・北・東辺を連続する方形区画以前に、陸橋部をもって断続する区画溝が存在した可能性を示唆する資料である。

08B 区 081SX 07A 区 076SD・08B 区 032SD 北端に設けられた南北 6m、東西 5m を測る不整形で、池状に広がる遺構である。北部の堆積層下部には植物遺体層が

07A区002SD・003SD・004SD

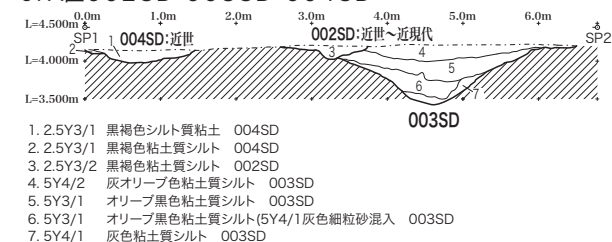


図 345 長野北浦遺跡 07A 区北西壁土層セクション図

形成されており、止水環境であったことが窺える。遺物の出土はわずかで、人々の活動環境に近いとは思われない。

● 07A 区・08A 区

調査区東端には 07A 区 003SD が南北に走る他、001SD も中世に遡る可能性もあるが、不確かである。08A 区 005SE では下部に曲物が遺存し、その下に「砂止め」として編笠が敷かれていた。「砂止め」が出土すること自体が希有なのに、カゴではなく編笠が用いられていたことも珍しい。ただ、残念なのは調査時に半截されてしまったことである。

006SE は方形縦板組の井戸枠が出土した。

07A 区ではほとんどが水田造成のために削平されていたが、北東部でプランは 5×2m 以上、深さ約 30cm の方形土坑 055SK が検出された。性格は不明である。



図 346 長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸検出状況 北西から



図 347 長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸底編笠出土状況 北西から

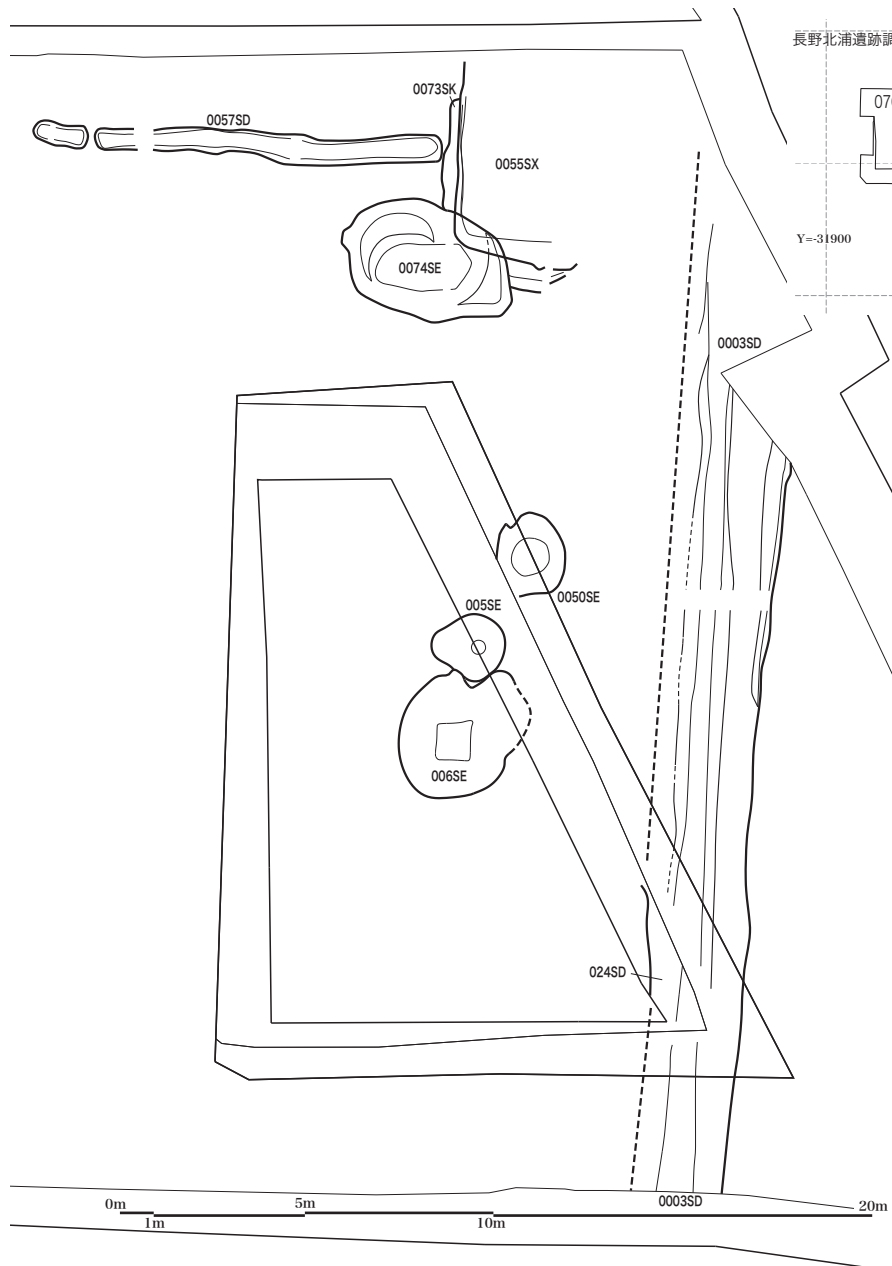
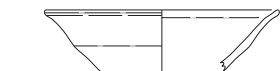


図 348 長野北浦遺跡中世東部プラン

006SE 上層



08A-007

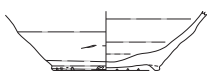


08A-008

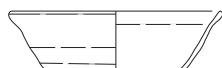
006SE



08A-004



08A-003

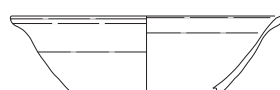


08A-009



08A-005

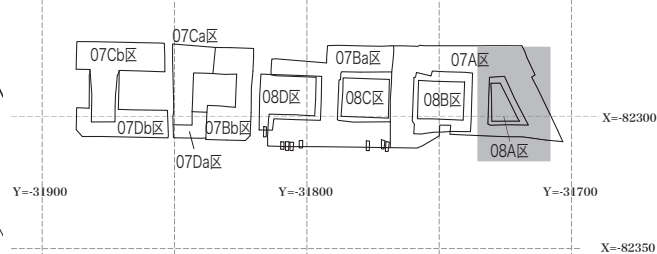
006SE 下層



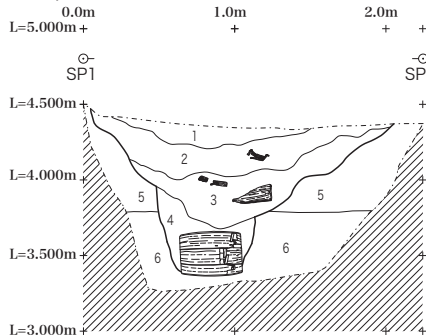
08A-006

図 349 長野北浦遺跡 07A 区 006SE 出土遺物実測図

長野北浦遺跡調査区配置図



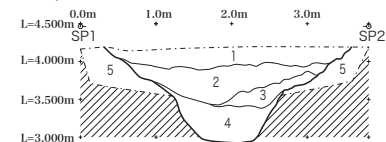
07A区050SE



※ 曲物内埋土 7.5Y4/1 灰色極細粒砂

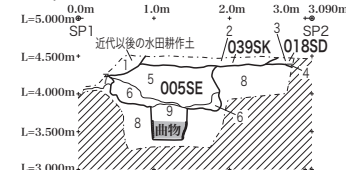
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトと2.5Y3/1シルト質粘土の斑土 井戸枠抜き取り後堆積層
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルトと2.5Y3/1シルト質粘土の斑土 井戸枠抜き取り後堆積層
3. 5Y4/1 灰色シルト質粘土と2.5Y3/1シルト質粘土の斑土 井戸枠抜き取り後堆積層
4. 5Y3/1 オリーブ黒色極細粒砂と2.5Y3/1シルト質粘土の斑土
5. 5Y4/1 灰色質粘土 基盤層
6. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土 基盤層

07A区066SE



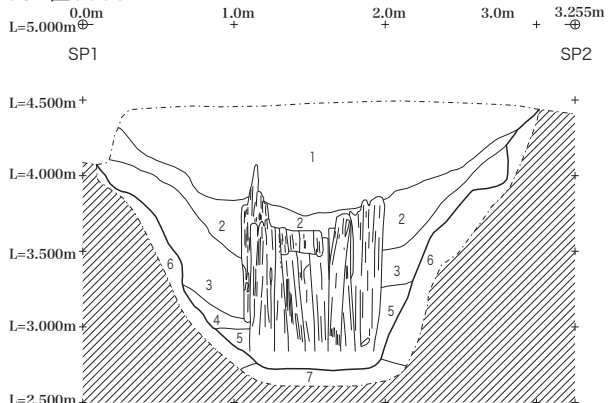
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトと5Y4/1 灰色シルト質粘土の斑土
2. 5Y4/1 灰色極細粒砂と7.5Y2/1 黒色粘土の斑土
3. 7.5Y4/1 灰色極細粒砂と7.5Y2/1 黒色粘土の斑土
4. 5Y4/1 灰色極細粒砂
5. 5Y4/2 灰オリーブ細粒砂 基盤層

08A区005SE



1. 7.5YR5/6 明褐色粘土質シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
2.5YR8/4 浅黄色極細粒砂混濁 近代以後の水田耕作土
2. 1 に似る 039SK 埋土
3. 7.5YR6/3 にぶい褐色粘土質シルト
4. 3 + 2.5Y6/1 灰黄色極細粒砂混濁
5. 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト + 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト + 2.5Y8/4 淡黄色極細粒砂混濁
7. 2.5Y7/4 浅黄色極細粒砂
8. 2.5Y6/1 灰黄色極細粒砂～10YR3/1 黒褐色シルト質粘土
9. 5B5/1 青灰色極細粒砂

08A区006SE



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 10YR3/2 黒褐色粘土質シルトブロック含む 006SE埋土
2. 5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト・10YR3/1 黒褐色シルト質粘土
10Y4/1 灰色シルト質粘土 + 2.5Y7/4 浅黄色極細粒砂混濁 006SE埋土
3. 10Y4/1 灰色粘土質シルト + 10GY4/1 緑灰色極細粒砂 + 10BG6/1 青灰色極細粒砂混濁 006SE埋土
4. 5BG7/1 明青灰色細粒砂～中粒砂 006SE埋土
5. 10BG4/1 暗青灰色細粒砂 + 10Y4/1 灰色粘土質シルト + 7.5Y5/2 灰オリーブ細粒砂混濁 006SE埋土
6. 2.5Y7/4 浅黄色極細粒砂～細粒砂・10Y4/1 灰色シルト質粘土 基盤層
7. 10YR3/1 黒褐色シルト質粘土 基盤層

図 350 長野北浦遺跡 07A 区各井戸土層セクション図

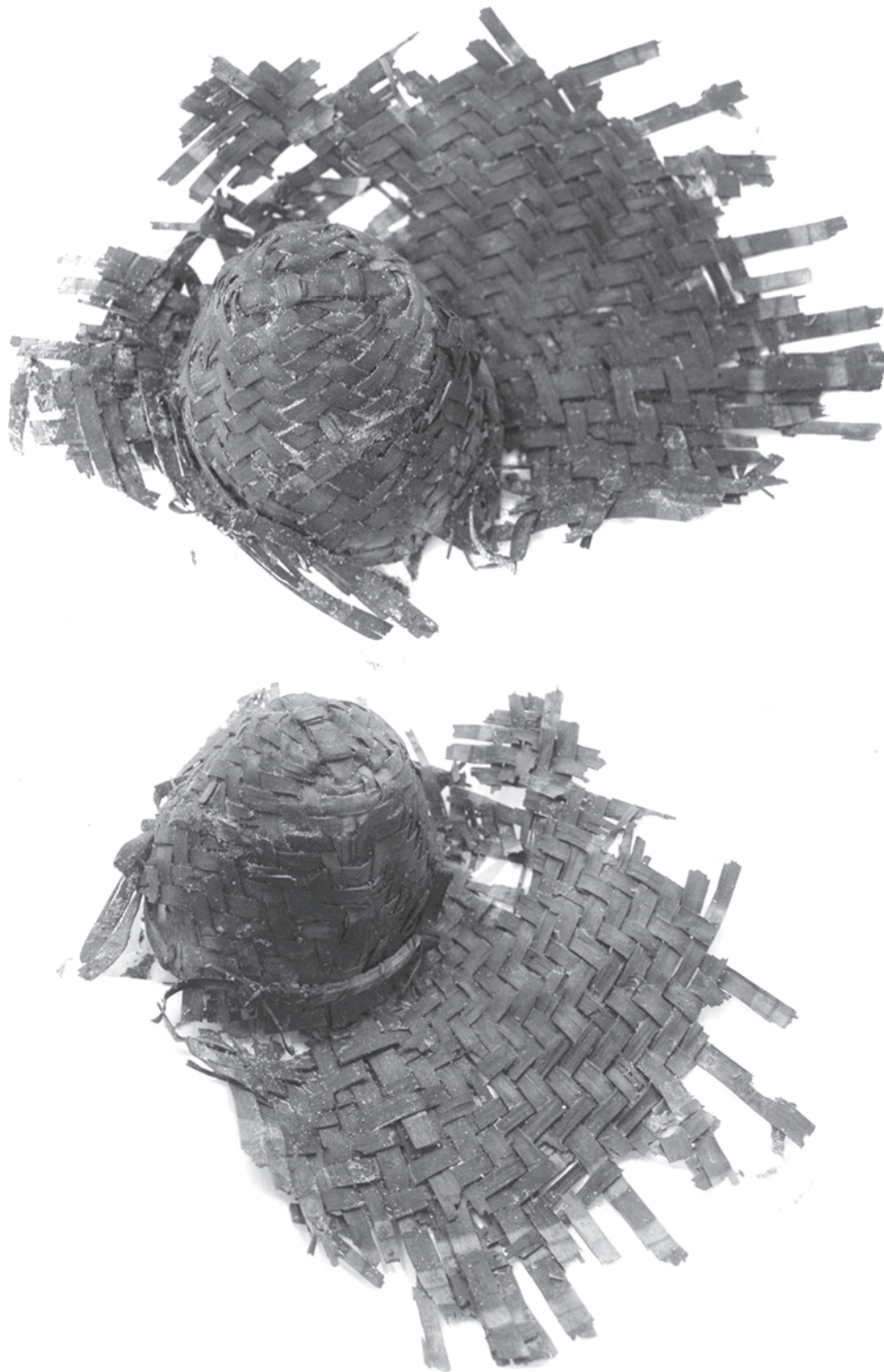


図 351 長野北浦遺跡 08A 区 005SE 井戸底編笠洗浄後の状況

08A-006SE 出土井戸材

031 ～ 053 は方形縦板組みの井戸杵材。

031・032・035・036 は隅柱で、各面に 3 ないし 4 本の横棧を挿入するためのホゾ孔があく。いずれも 2 分の 1 分割材を用いる。

033・034・037 ～ 044 は側板およびその補助材の一部。

045-1・045-2・045-3・046 と、048 ～ 053 は横棧。このうち、045-1 ～ 045-3 と、049 ～ 053 は、それぞれ同じ丸太材を分割して用いている。このことから、井戸杵材の製作は現場作業として行われていたことがわか

る。

047 は小型の曲物底板とおもわれる円形の板で、木取りは柂目材。
(樋上 昇)

長野北浦 08A 006SE

07

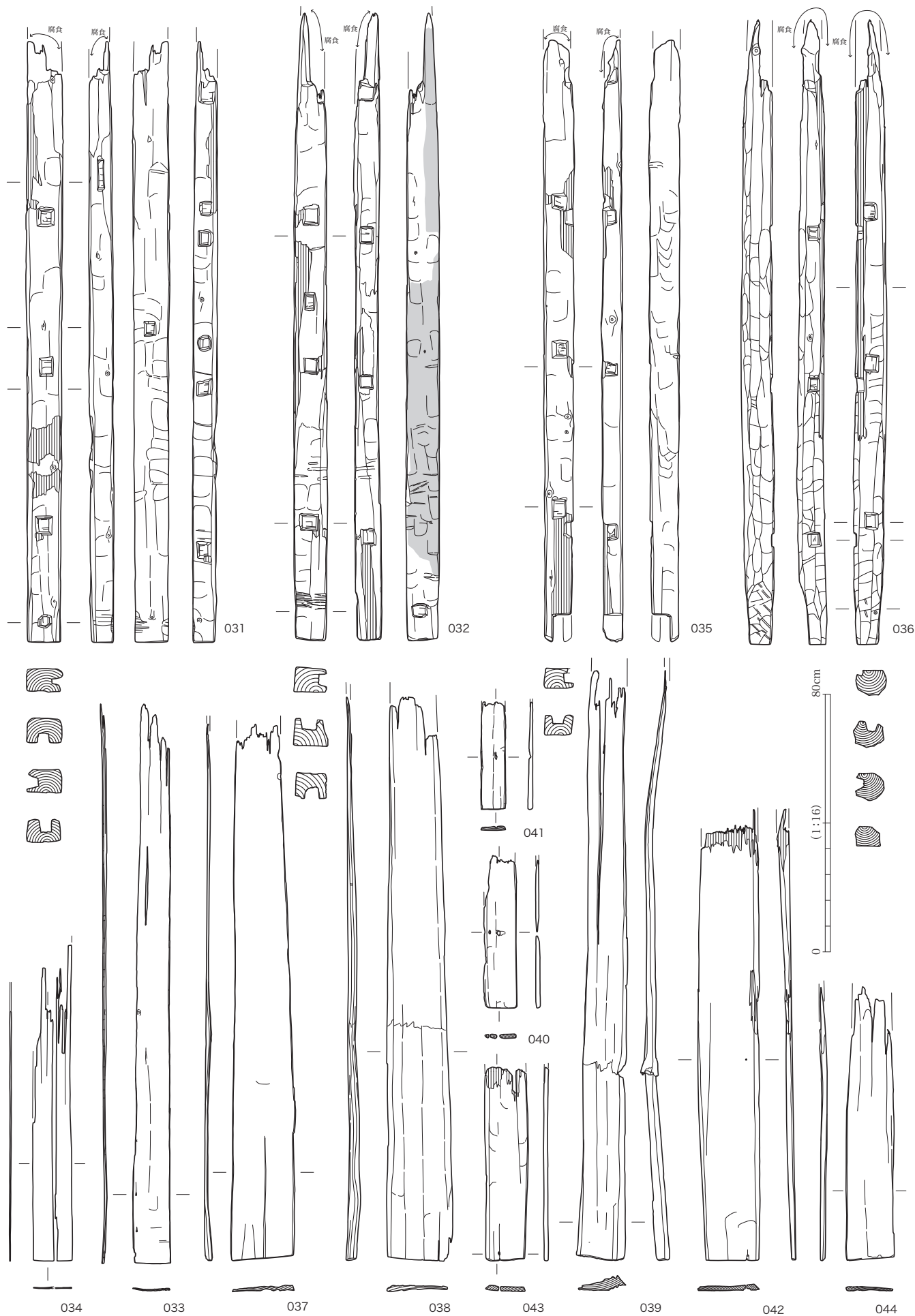


図 352 長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸材実測図 (1)

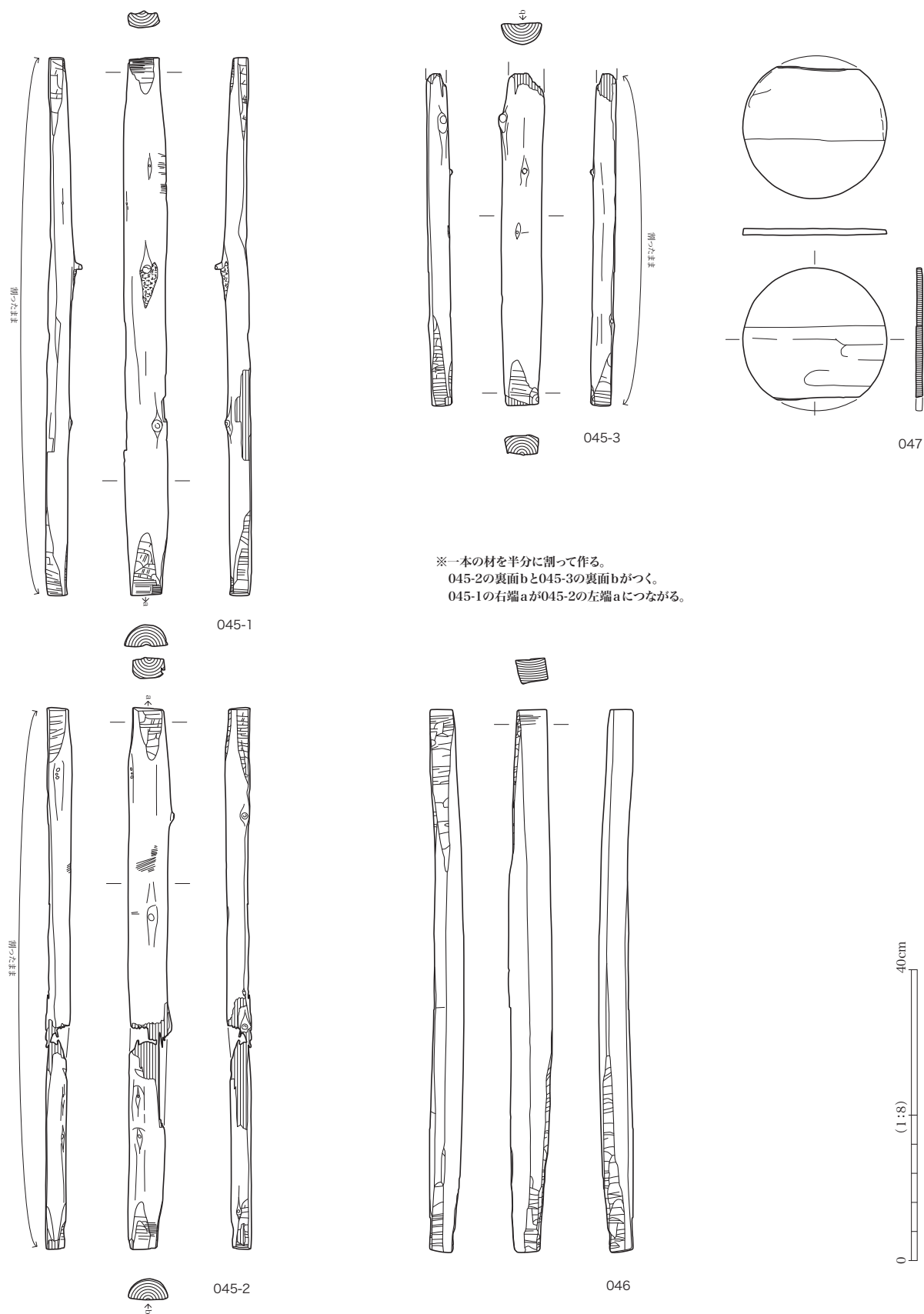
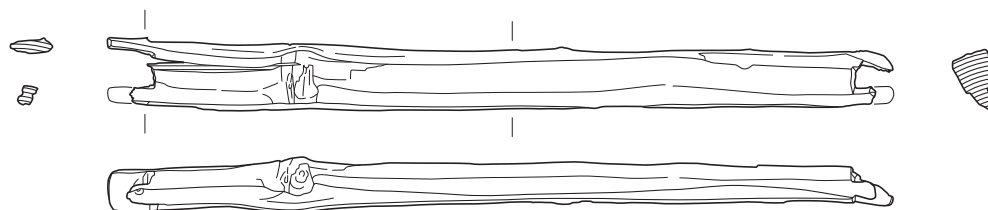


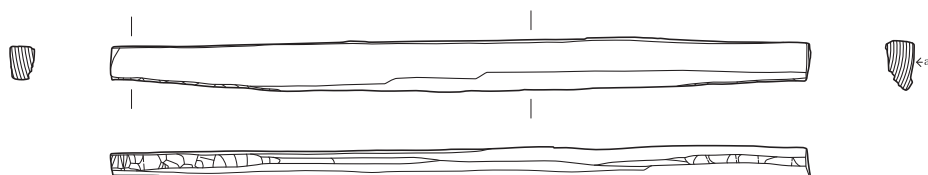
図 353 長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸材実測図 (2)

長野北浦 08A 006SE

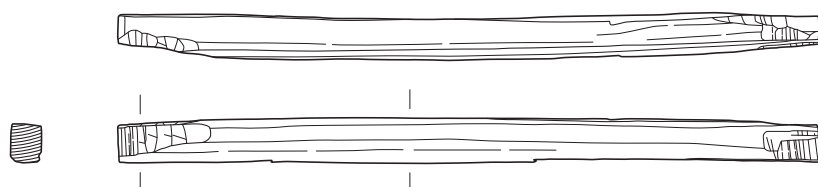
09



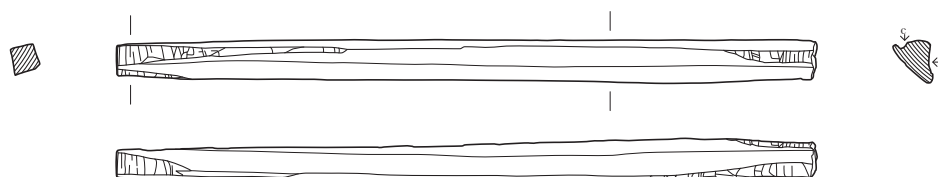
048



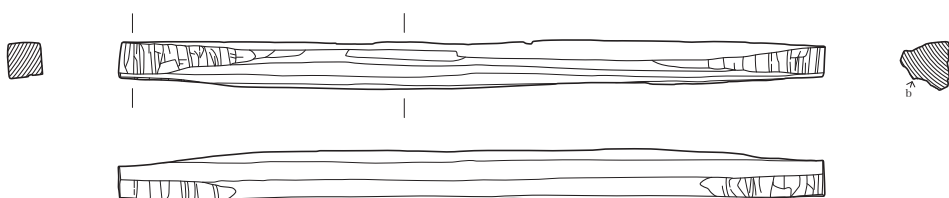
049



050

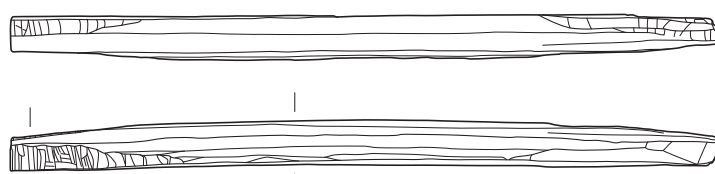
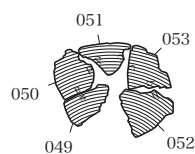


051



052

※049～053
一本の材を割って作る



053

0 (1:8) 40cm

図 354 長野北浦遺跡 08A 区 006SE 井戸材実測図 (3)

(4) 近世以降

A. 概要

長野北浦遺跡では近世になって水田が拡大する。中世の方形区画溝が水田開発に影響を与えたとすれば、方形区画北東部が畠として残った点に、周辺よりは地表面高度が高かったらしいことが何がしかの作用をしたと言えることぐらいで、それ以外では遺構群の展開との相関は不明である。

水田化からはずれたエリアでは、特に 08C 区以東で礎板をもつ掘立柱建物群が展開しており、屋敷地の拡大（もしくは新設）が認められる。礎板の中には基盤層に貫入しているものもあり、もともと不安定な地盤であったところに、地震による基盤の液化化も加わって沈下を引き起こされた可能性も考える必要がある。

さて、長野北浦遺跡における近世以降の変遷過程については、最終段階は近・現代まで下るものの大きく見て、全域の水田造成：近世 1 期、掘立柱建物群の展開：近世 2 期、閑散期：近世 3 期（近世末～近代）に区別できる。

近世 1 期 14 世紀前半をもって中世屋敷地は廃絶し、近世までは閑散とした状況であったと考えられる。17 世紀になると畠地を削減する方向で水田造成が始まる。現状では水路は不明で用排水系も明確ではないが、現道下に埋もれている可能性は残る。

近世 2 期 17 世紀末から 18 世紀前半には水田造成が及ばなかった畠地（要は高所）を核に周辺の埋め立ても行われて新たに屋敷地が造成される。土地環境を反映してか、礎板をもつ掘立柱建物群が展開する。礎石や根石は未確認であるが、石材入手の困難な濃尾平野であれば、木材利用が現実的ではある。ただ、礎石建物が無かつと断定できる状況にもないので、建物の基礎構造については不確定要素を含む。

建物群は、08C 区を中心とする西部グループと 08B 区を中心とする東部グループがあり、両者は軸線をわずかに異にし、周囲を画する小溝もそれぞれの軸線に合わせていることから、これらが一体に変遷している可能性は高い。現状では、両者を区分する小溝があるのかどうかは不明であり、1 単位なのか 2 単位に分かれるのか不確かである。西部グループには柱穴列が幾つも認められるので、屋敷地内が柵（板塀）で区画された可能性もある。

しかし、これらが一つの屋敷地を構成する建物群であると想定した場合に、調査区内に明確な中心建物は存在しない。

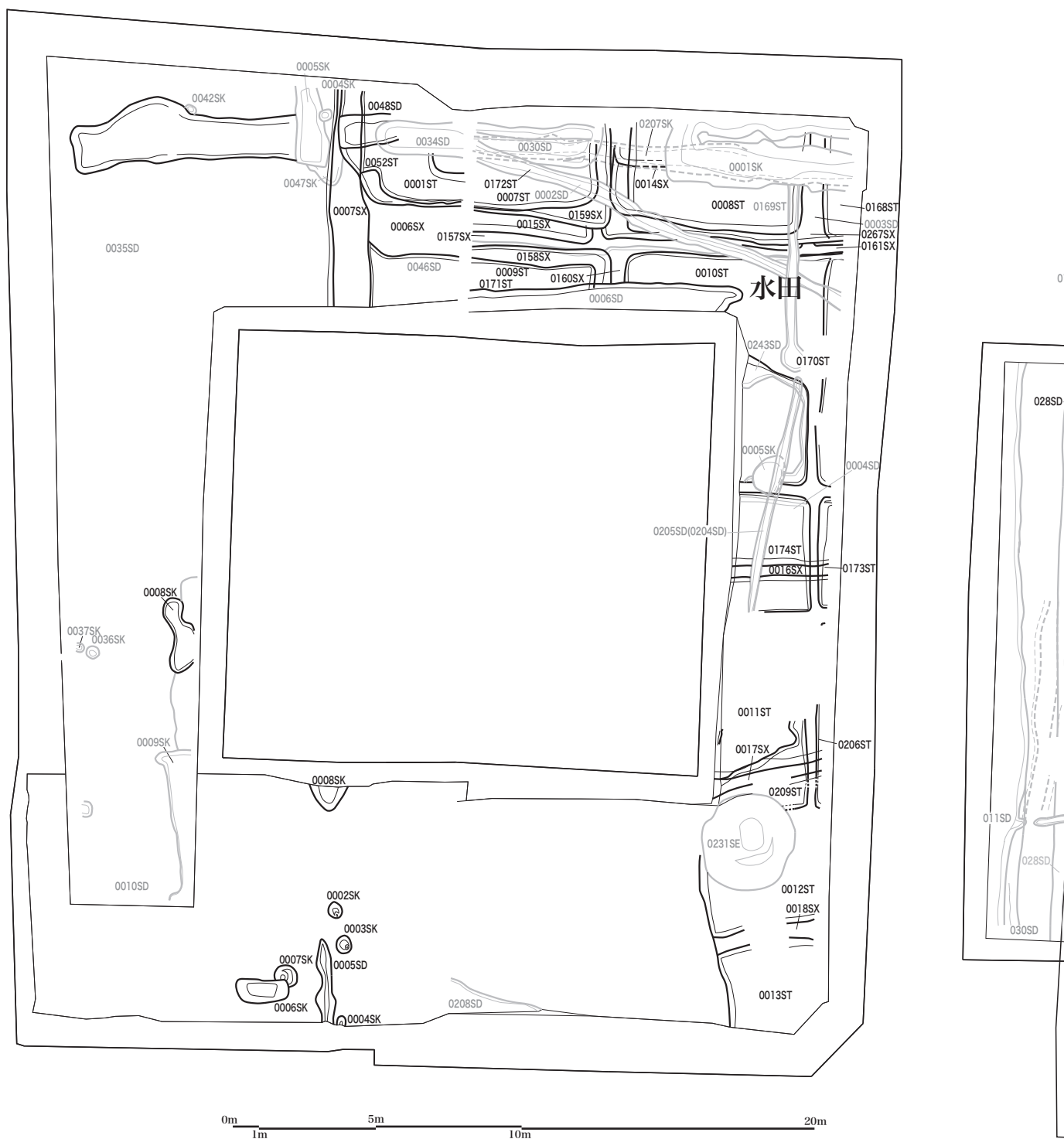
西部グループには 10×8m ほどの井戸を取り込んだ建物が復元できるが、井戸が中心を占めて小部屋が周囲に展開する状況なので、居住施設としては違和感がある。北西隅という位置関係やプランからみて特定作業に関わる建物の可能性がある。その東に 12×7m 以上で、縁側をもつ建物があり、棟持ち柱の通りも窺えるので、これが主屋、あるいはそれに次ぐ建物であった可能性がある。

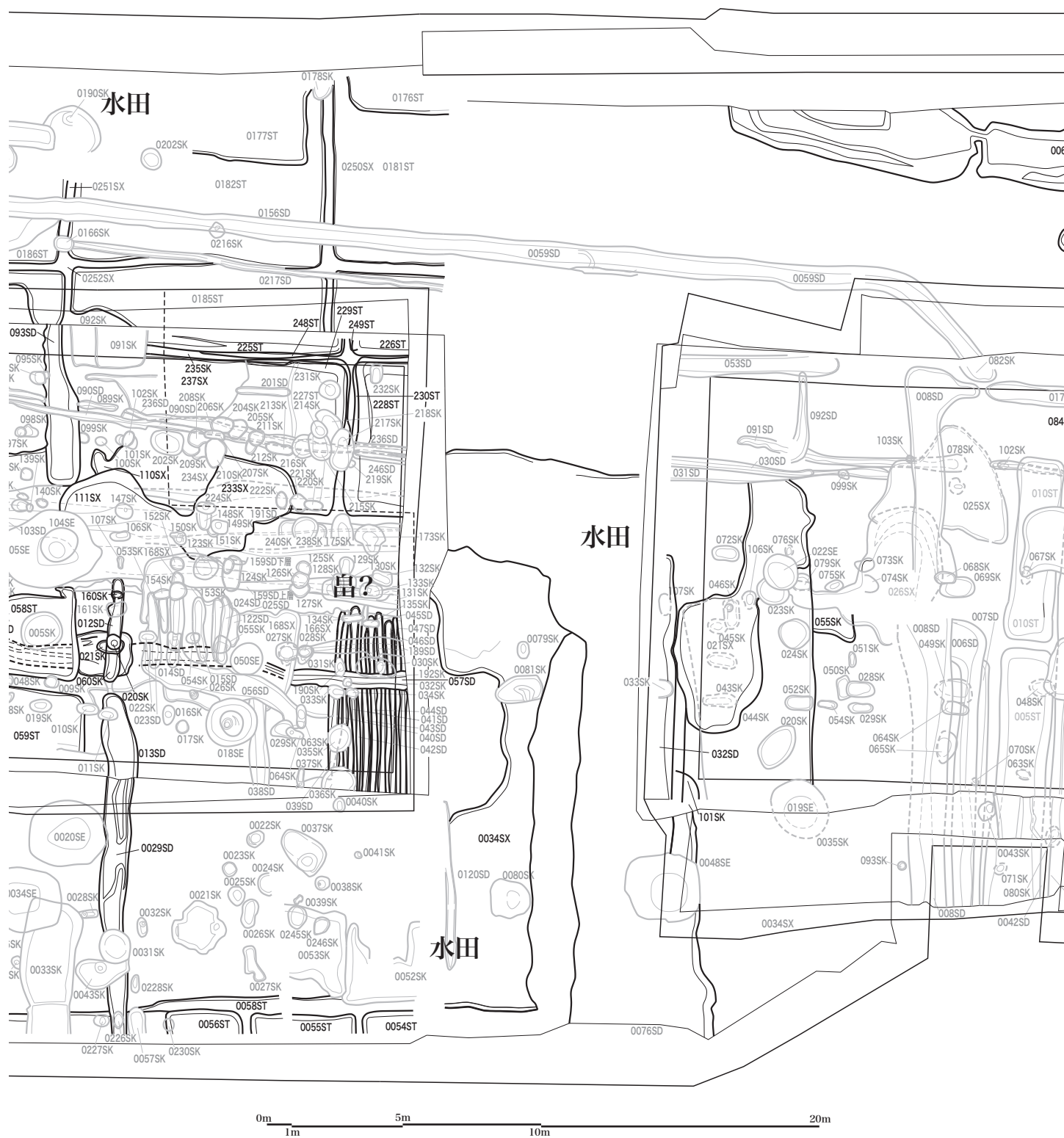
東西グループの建物群には一例も礎石（根石）建物がなく、いずれも軽微な礎板である点をみれば、大形建物の建築環境として決して適的な場所ではなかったであろう。もし、大規模な主屋があるのであれば調査区の南に存在するか、そもそもこの屋敷地そのものが小規模建物群が展開する限定的なものであった可能性もある。

近世 3 期 19 世紀以降が当てられるが、建物の配置は明確ではない。ただ、近世の建物が 100～150 年続くのであれば、最終段階は 20 世紀に下ってもなんら不思議は無い。東端では、07A 区 002SD の東肩を削って平坦地が造成される。近代以降のことであろうと推測されるが、水田ではないようだ。



図 356 長野北浦遺跡東端の南北溝群 北から





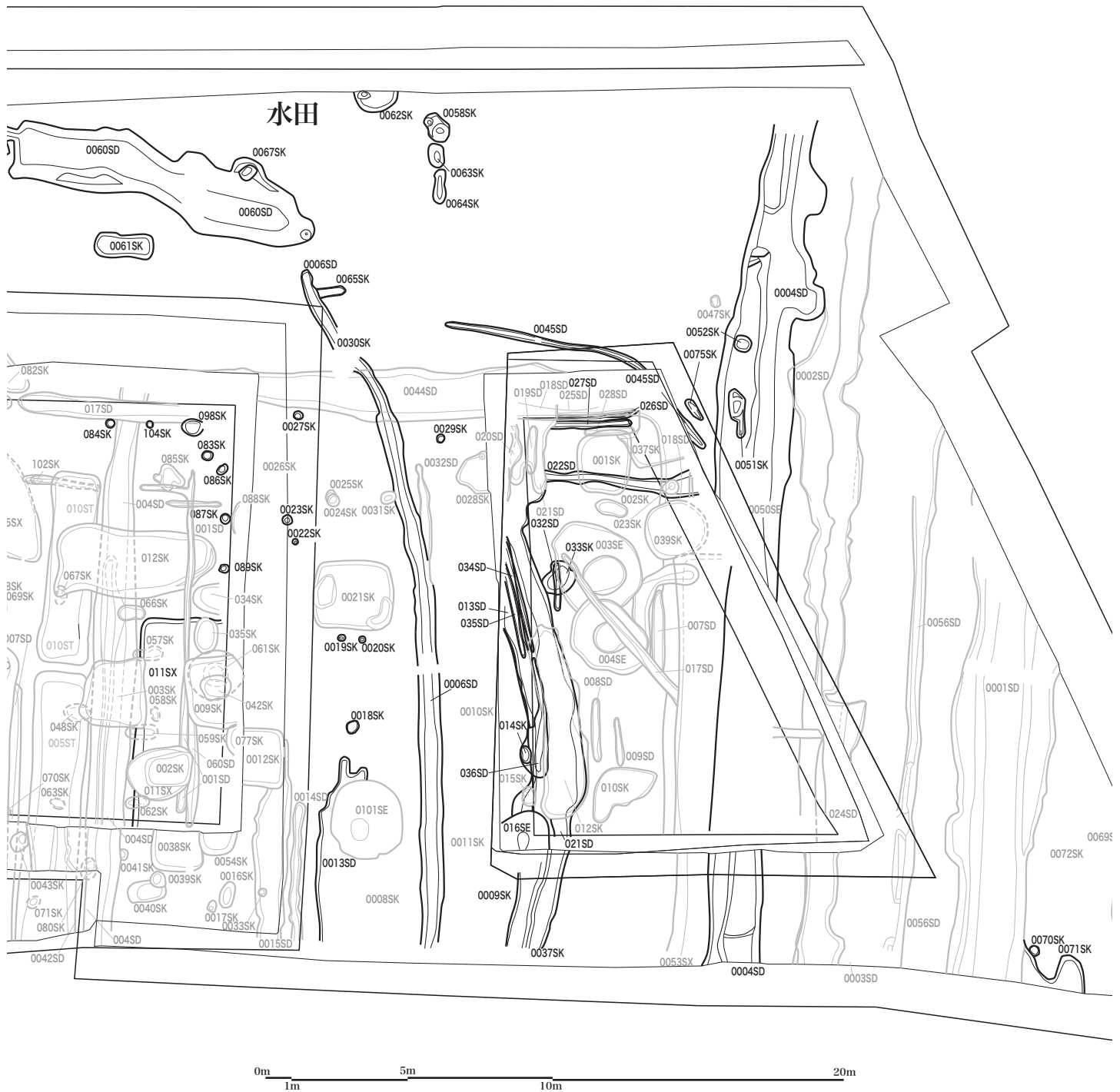


図 359 長野北浦遺跡近世 1 期遺構図

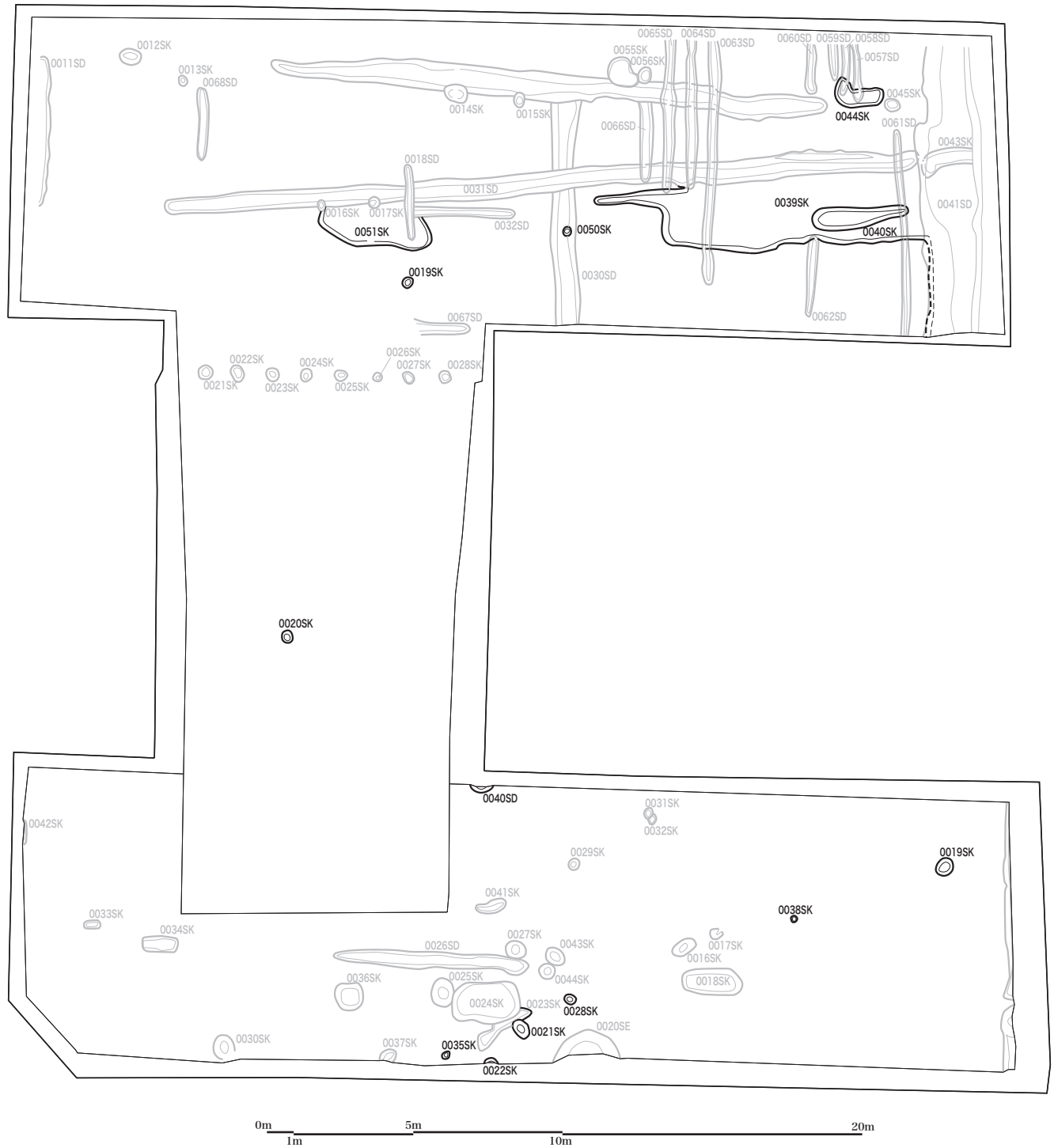
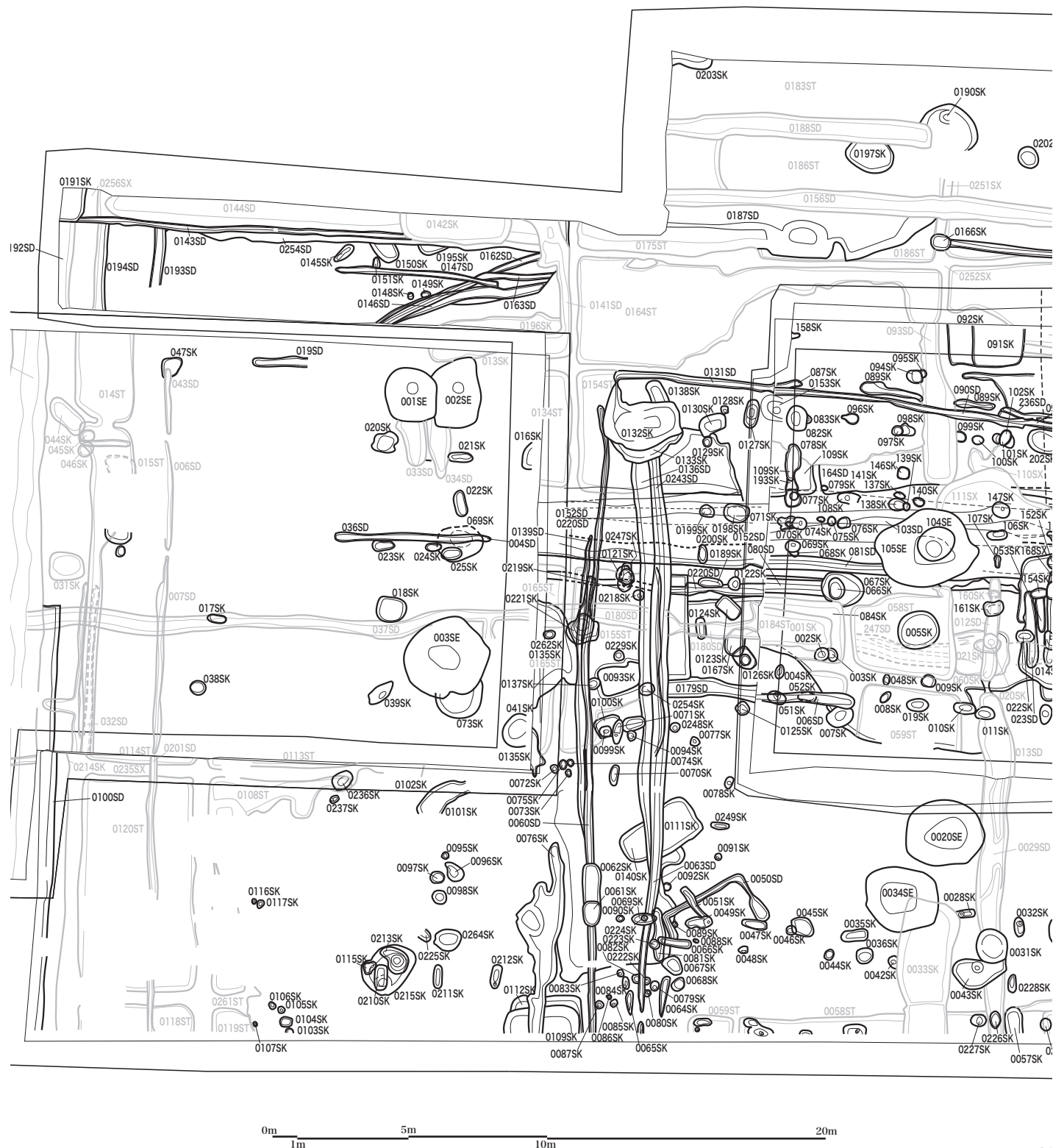
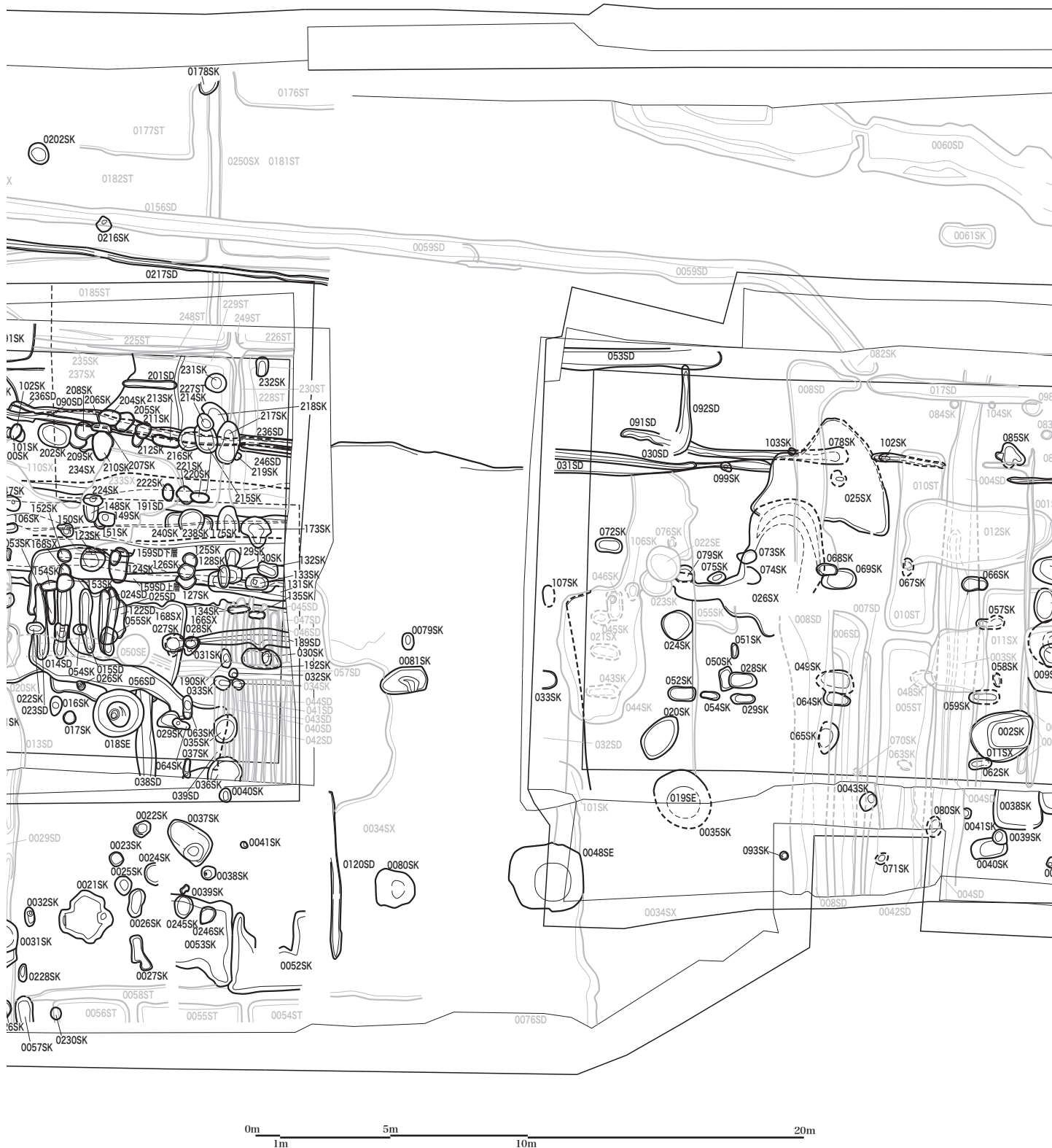
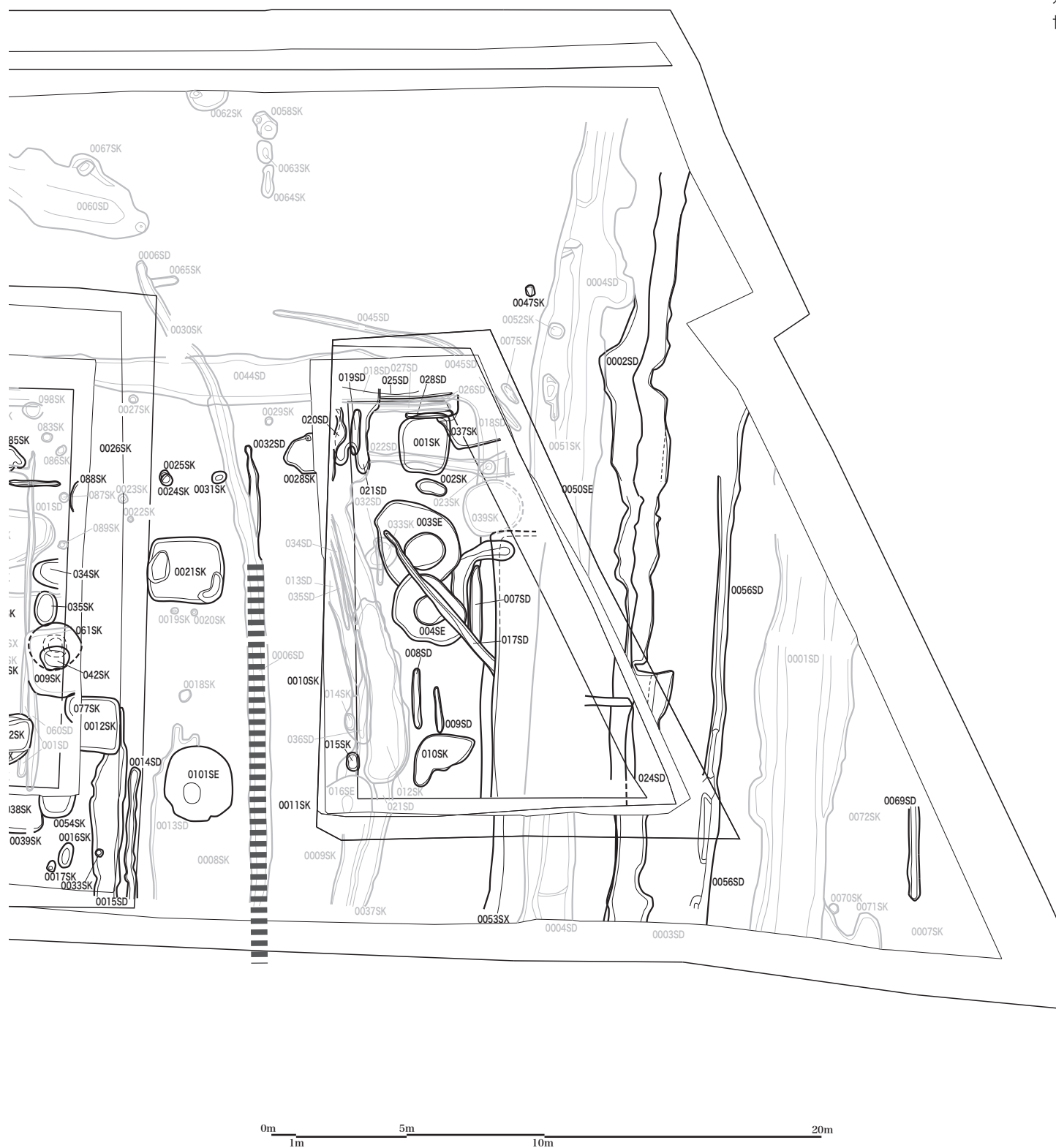
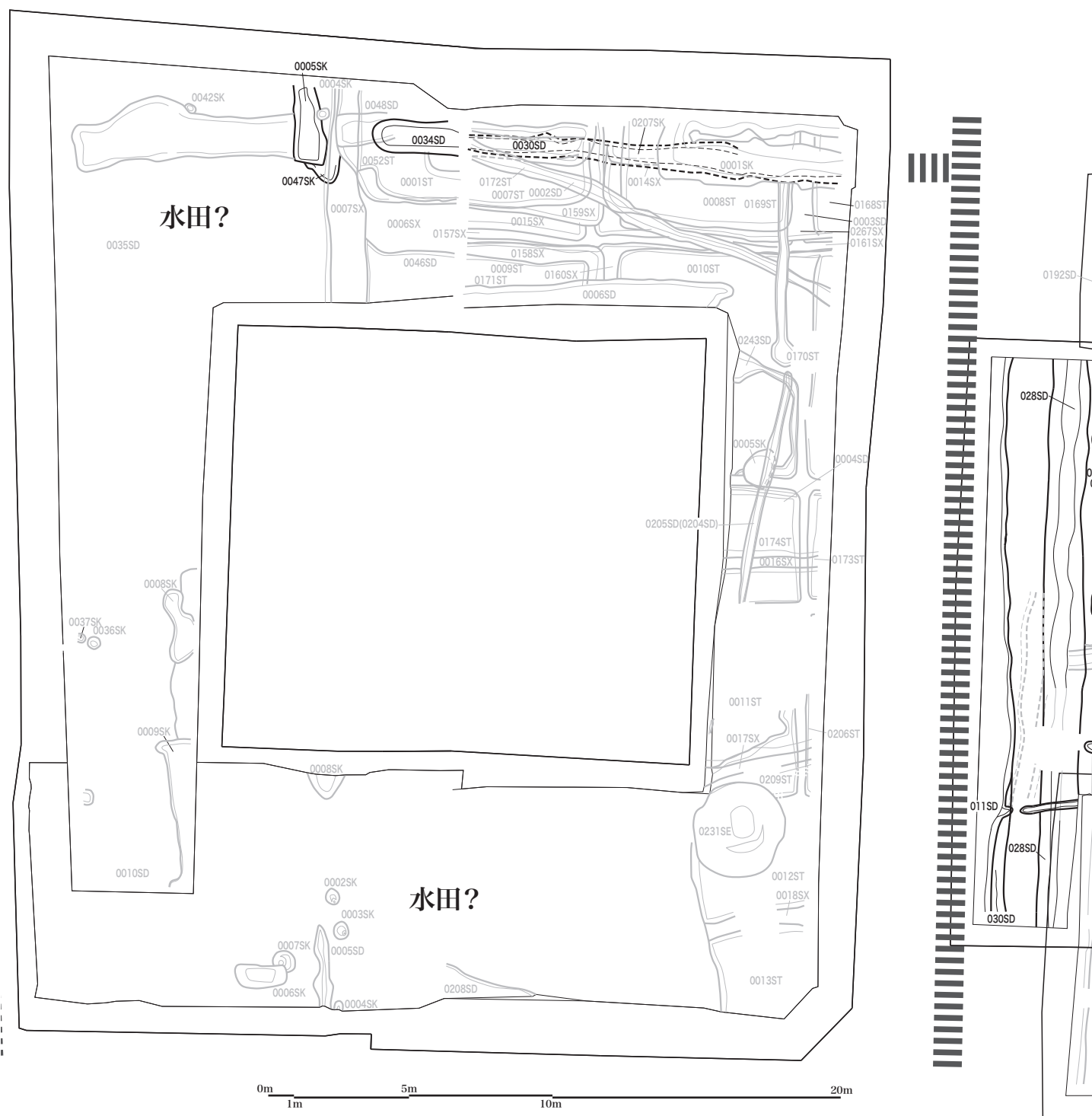


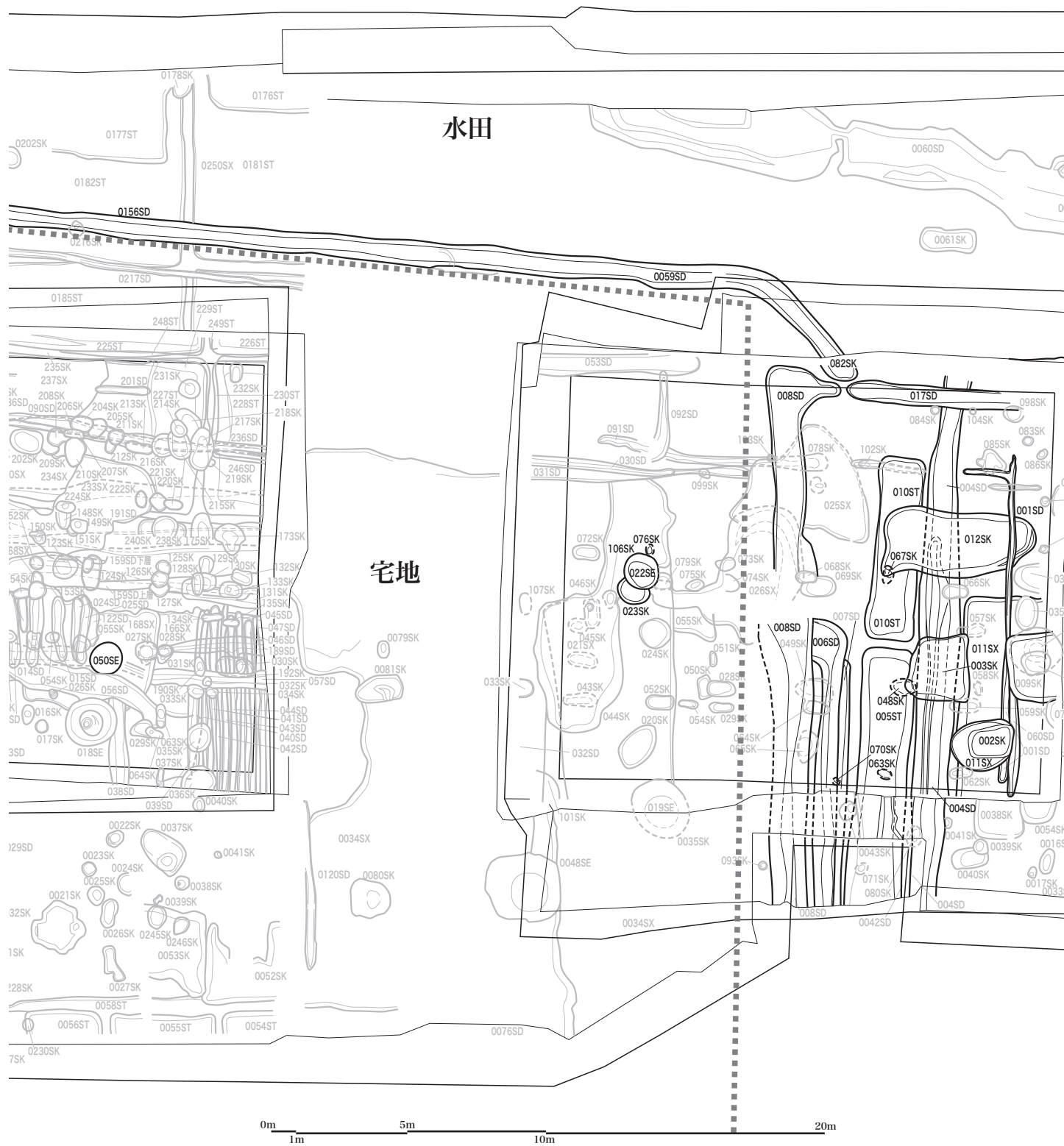
図 360 長野北浦遺跡近世 2 期遺構図











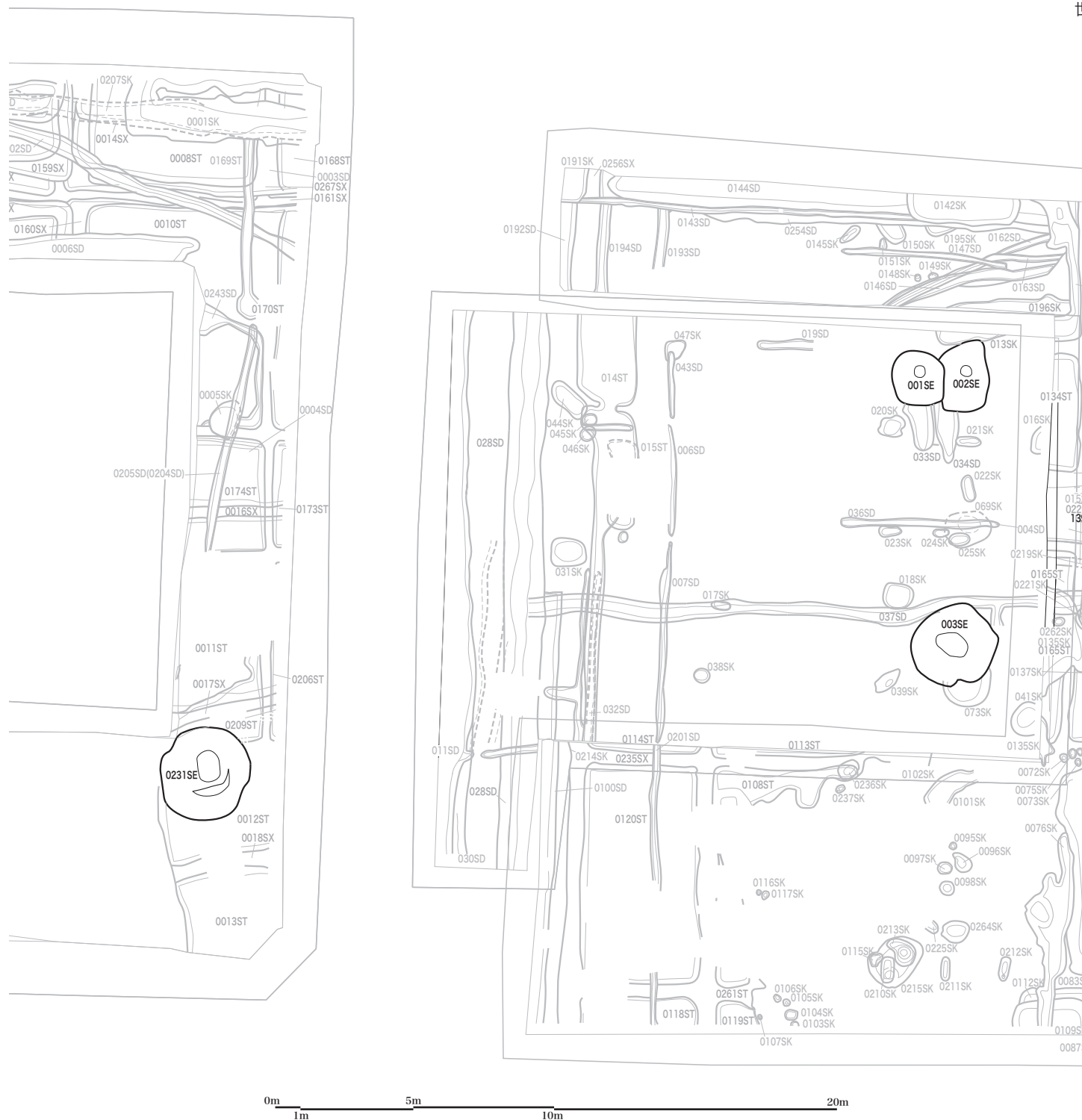


図 366 長野北浦遺跡近世建物・井戸分布図

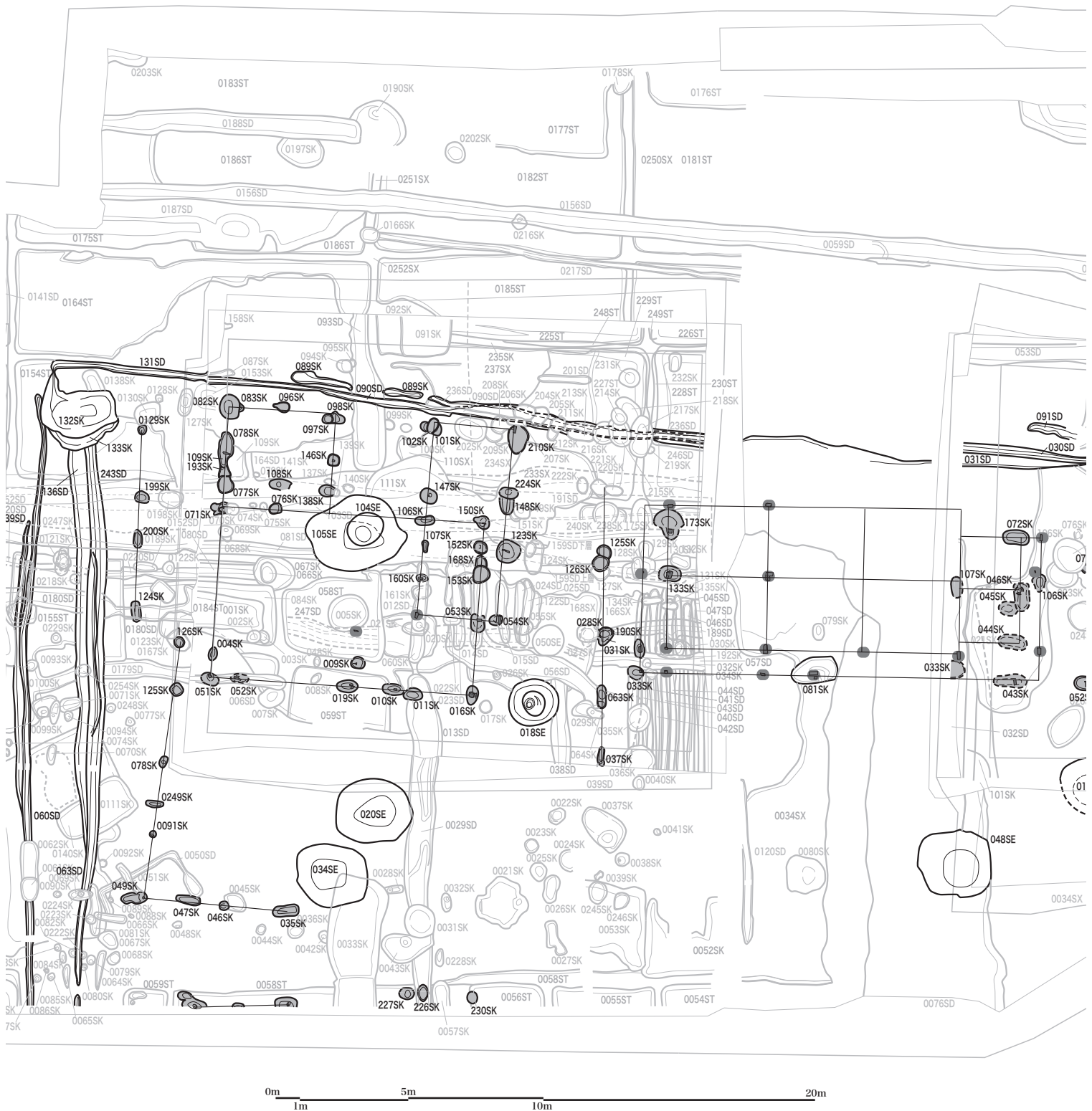
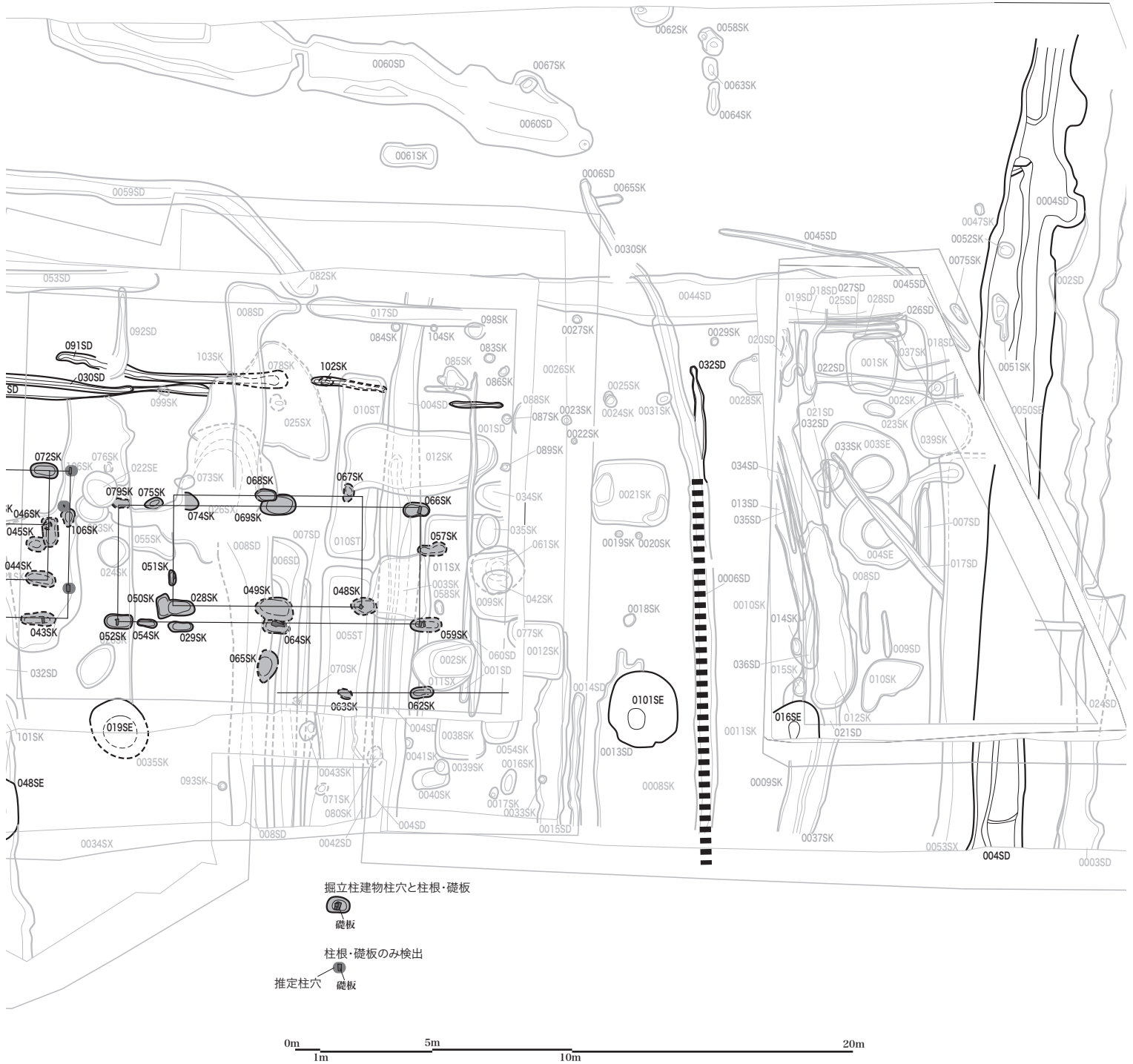


图 367 長野北浦遺跡近世建物・井戸分布図



07Ba区034SE

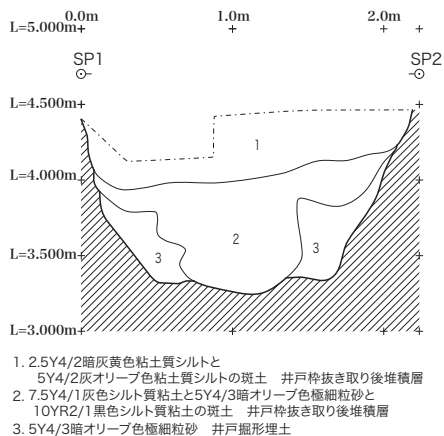


図 368 長野北浦遺跡 07Ba 区
034SE 土層セクション図

07Ba区020SE

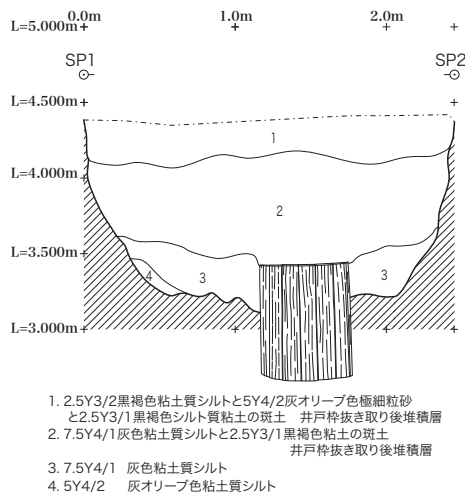


図 369 長野北浦遺跡 07Ba 区
020SE 土層セクション図

B. 遺構・遺物

● 07 区井戸

近世の井戸は、構造物が遺存していたもののほとんどが「桶組み」である。近世末から近・現代には陶製や素焼き製円筒が地上部に据え置かれるようだが、それ以前には木製枠が設置されていたのであろう。

07B 区 020SE からは小刀が出土しており、廃絶にともない投棄されたものであろう。煙管や櫛も同様であらうか。

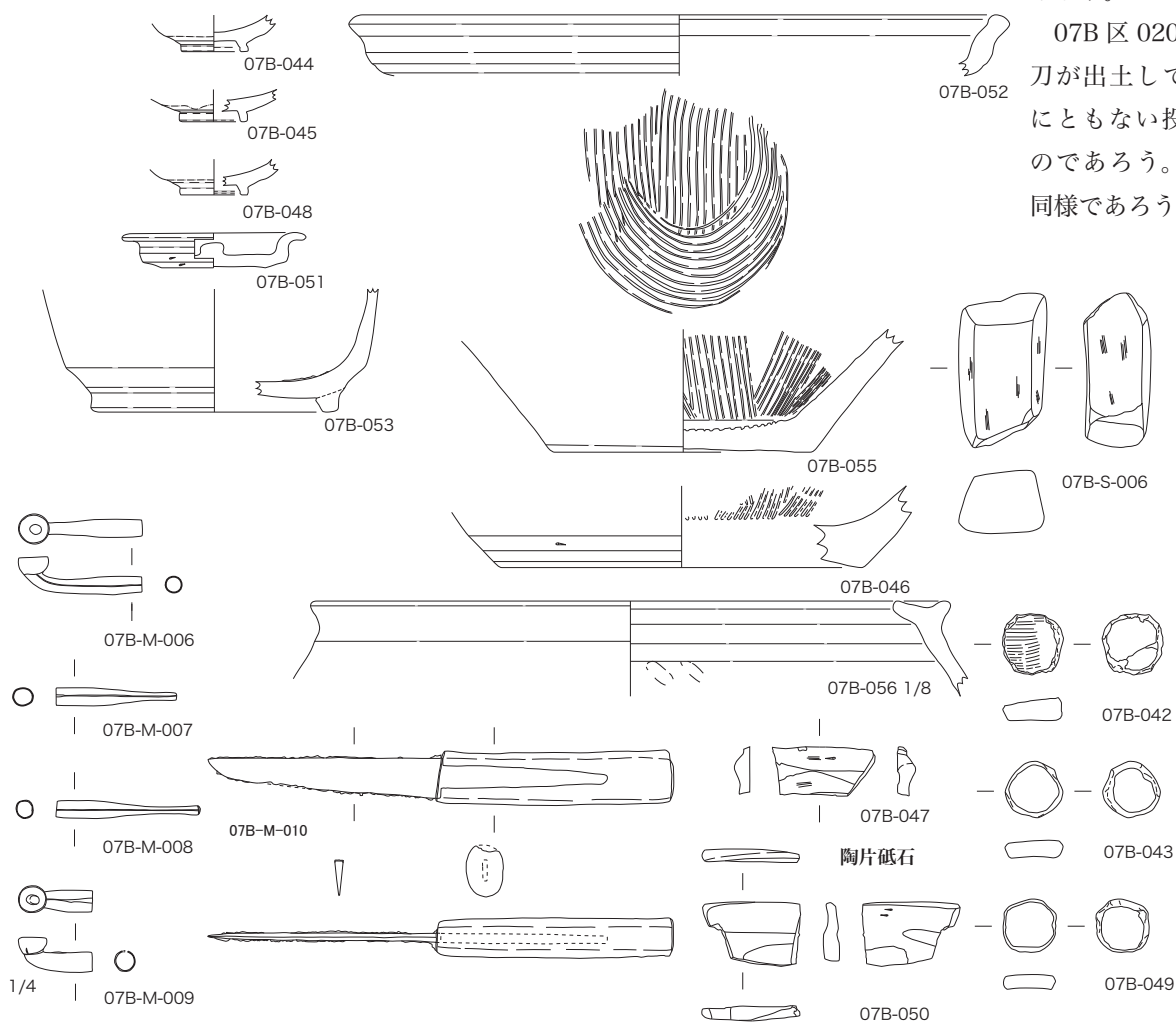


図 370 長野北浦遺跡 07Ba 区 020SE 出土遺物実測図

● 07 区水田

水田からは、古代から近世までの幅広い時期の遺物が出土している。つまり、それ以前の包含層を攪拌したということだ。調査時には中世水田の存在も想定されたが、近世遺物が含まれることから近世を遡ることはないであろう。

畦畔は、北部では東西長軸、南部では南北長軸のそれほど広くない区画が検出されている。地形の傾斜はほ

とんどないので、古代以降の長地型のようにもう少し大区画なら違和感も無いが、とにかく形状については比較資料が無いので判断を保留しておく。

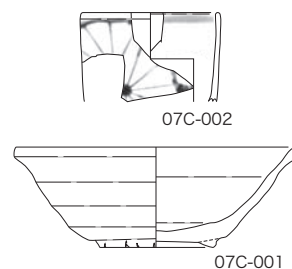


図 371 長野北浦遺跡 07C 区
001ST 出土遺物実測図

長野北浦 07B 020SE

01

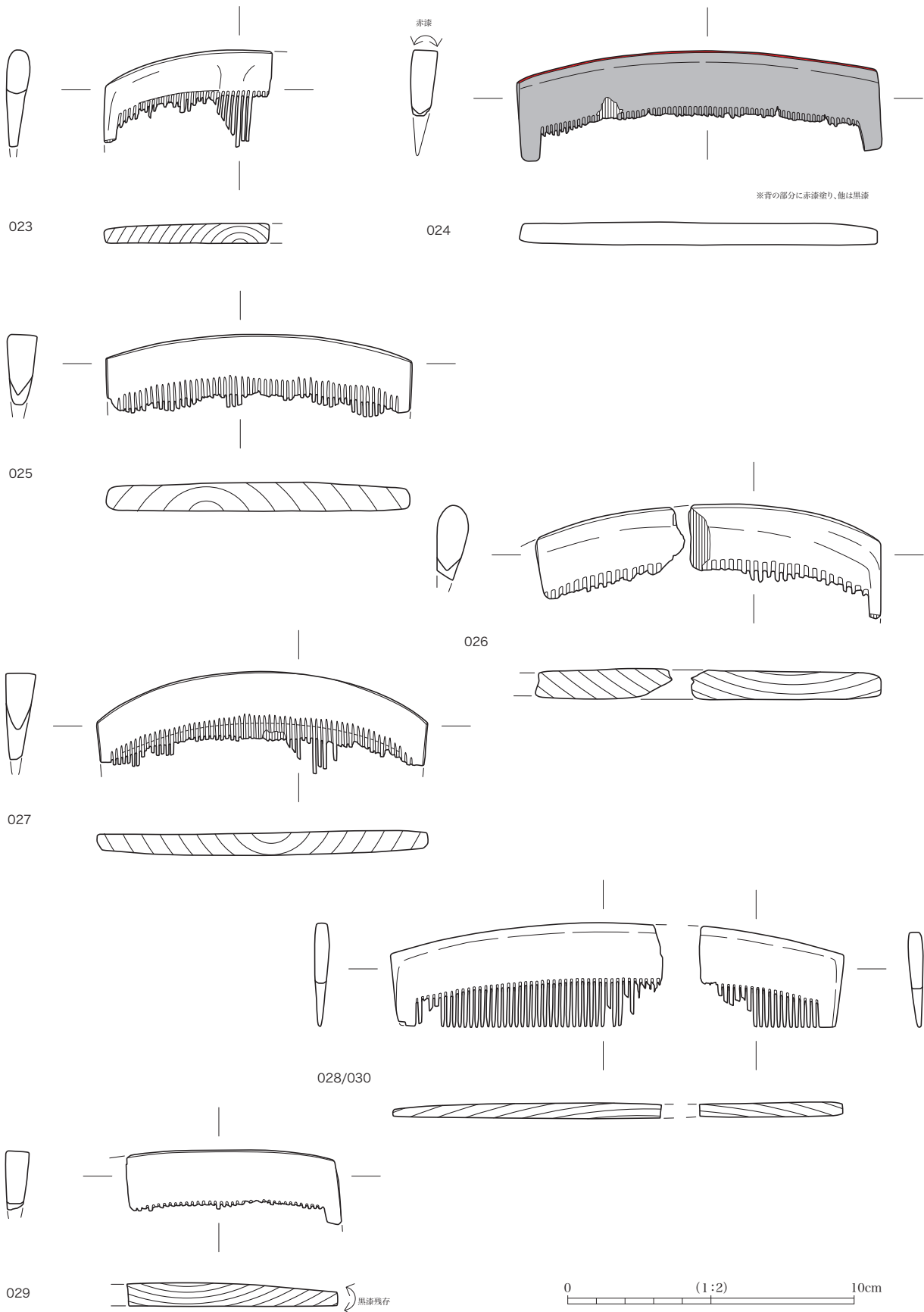


図 372 長野北浦遺跡 07Ba 区 020SE 出土木製品実測図

07B-020SE 木製品

横櫛が7点出土している(023～029)。うち024は背の部分に赤漆、それ以外の面には黒漆をほどこす。他

はすべて白木のままである。木取りはいずれも、樹芯に近い部分を用いた板目材。(樋上 昇)

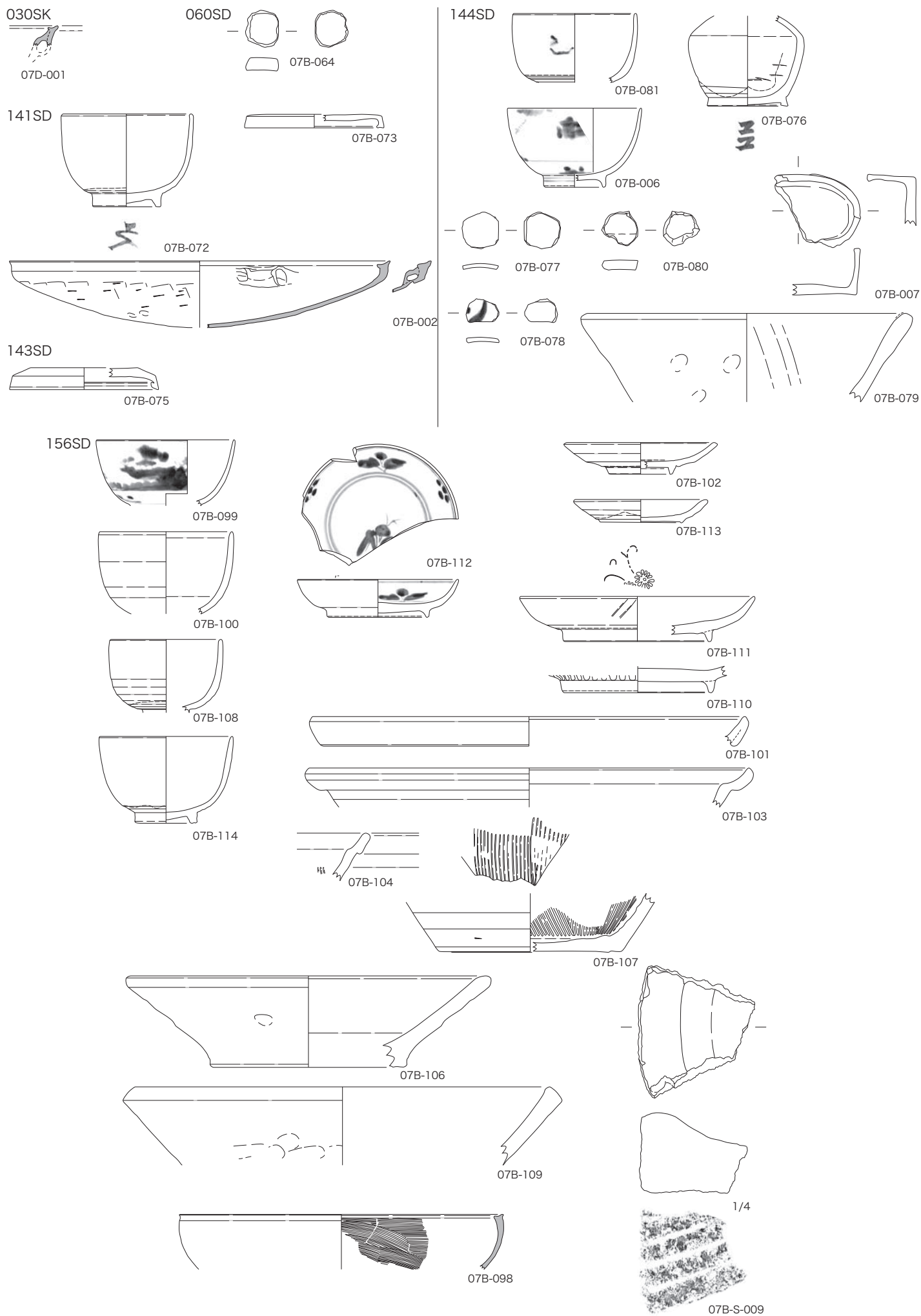


図 373 長野北浦遺跡 07B 区各遺構出土遺物実測図

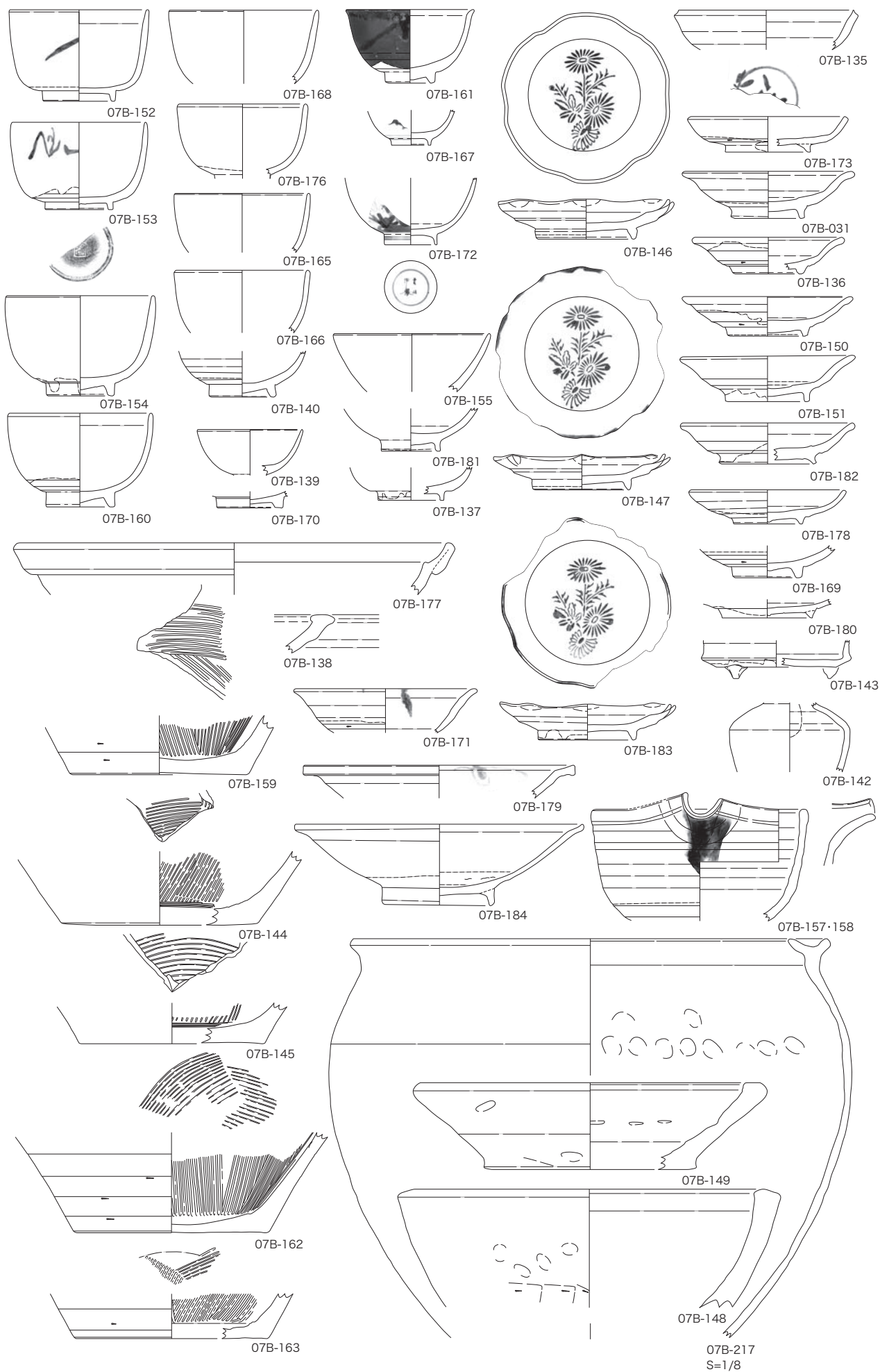
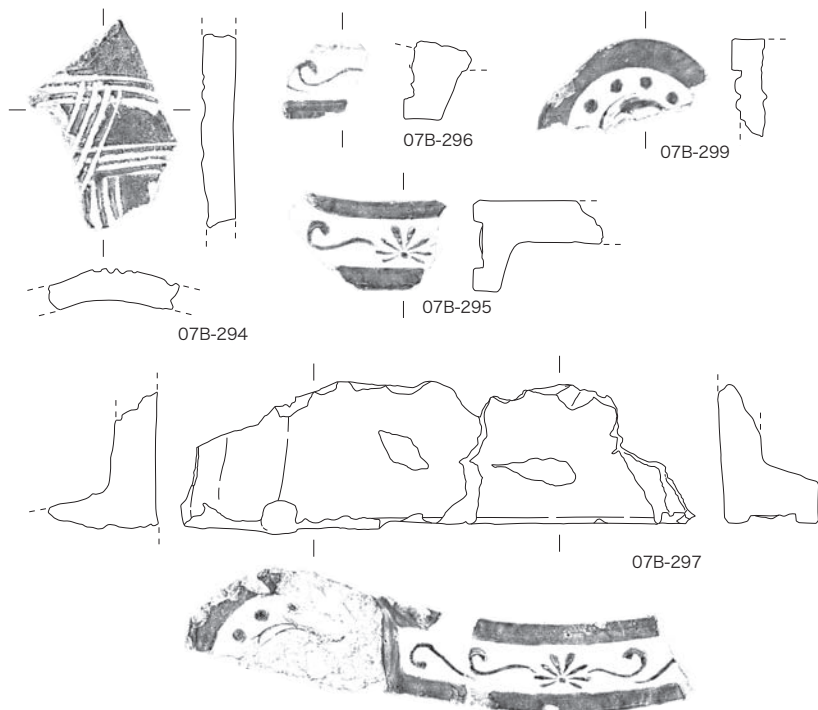


図 374 長野北浦遺跡 07B 区 187SD 出土遺物実測図 (1)

187SD



07B区 187SD 屋敷地を画する小溝の北にある東西に長い土坑である。多量の遺物が出土しており、廃棄土坑として利用されたものと推測される。

本遺跡の屋敷地内から廃棄土坑は見つかっておらず、屋敷地内で処理が行われた「町」とは廃棄パターンが異なるのであろう。瓦を含むことは、屋敷地の建物の中には瓦葺きが含まれていたことを示すが、礎板を基礎とする掘立柱建物が相応しいとも思えない。

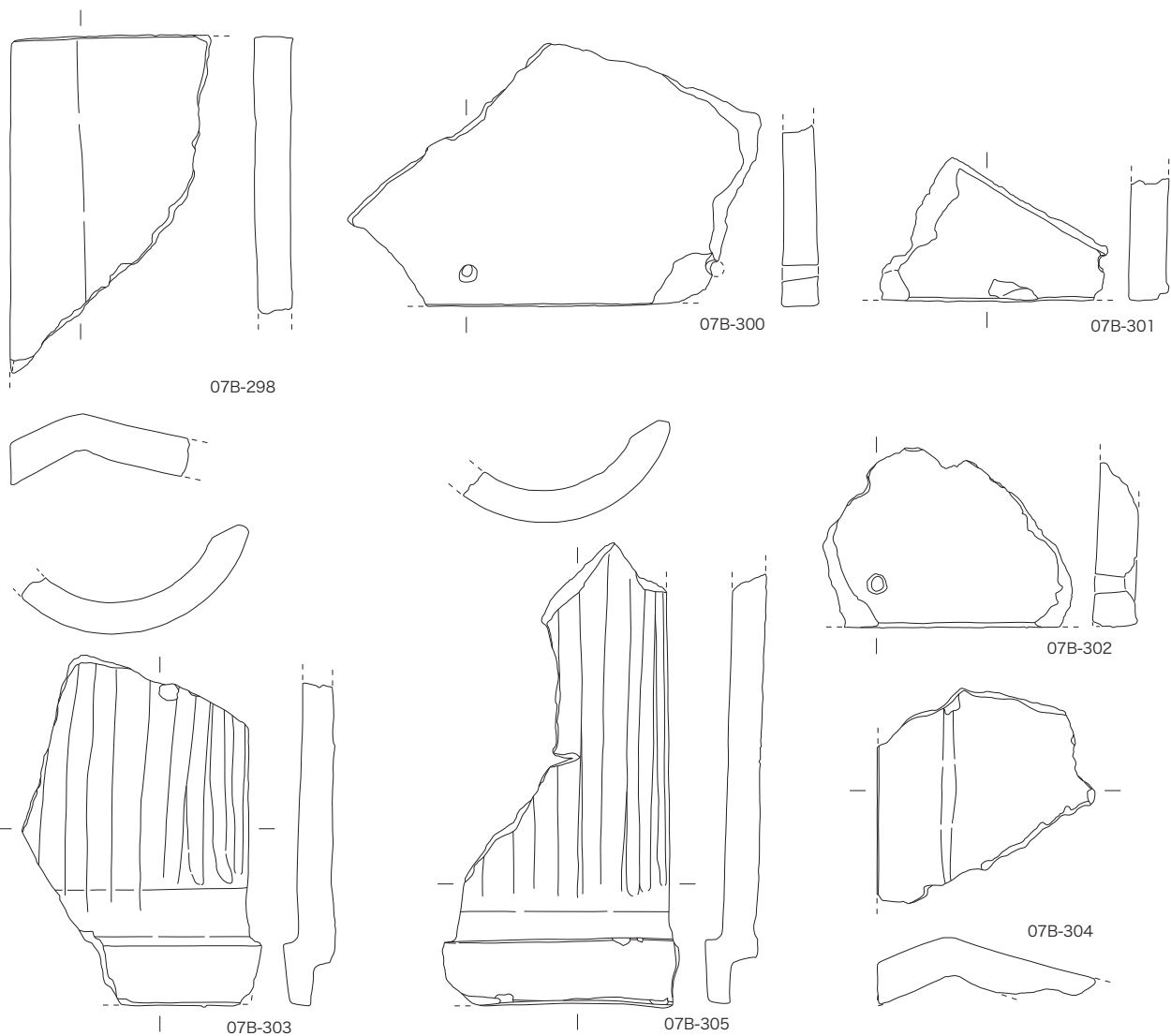


図 375 長野北浦遺跡 07B 区 187SD 出土遺物実測図 (2)

長野北浦 07B 187SD

長野北浦 07B 156SD

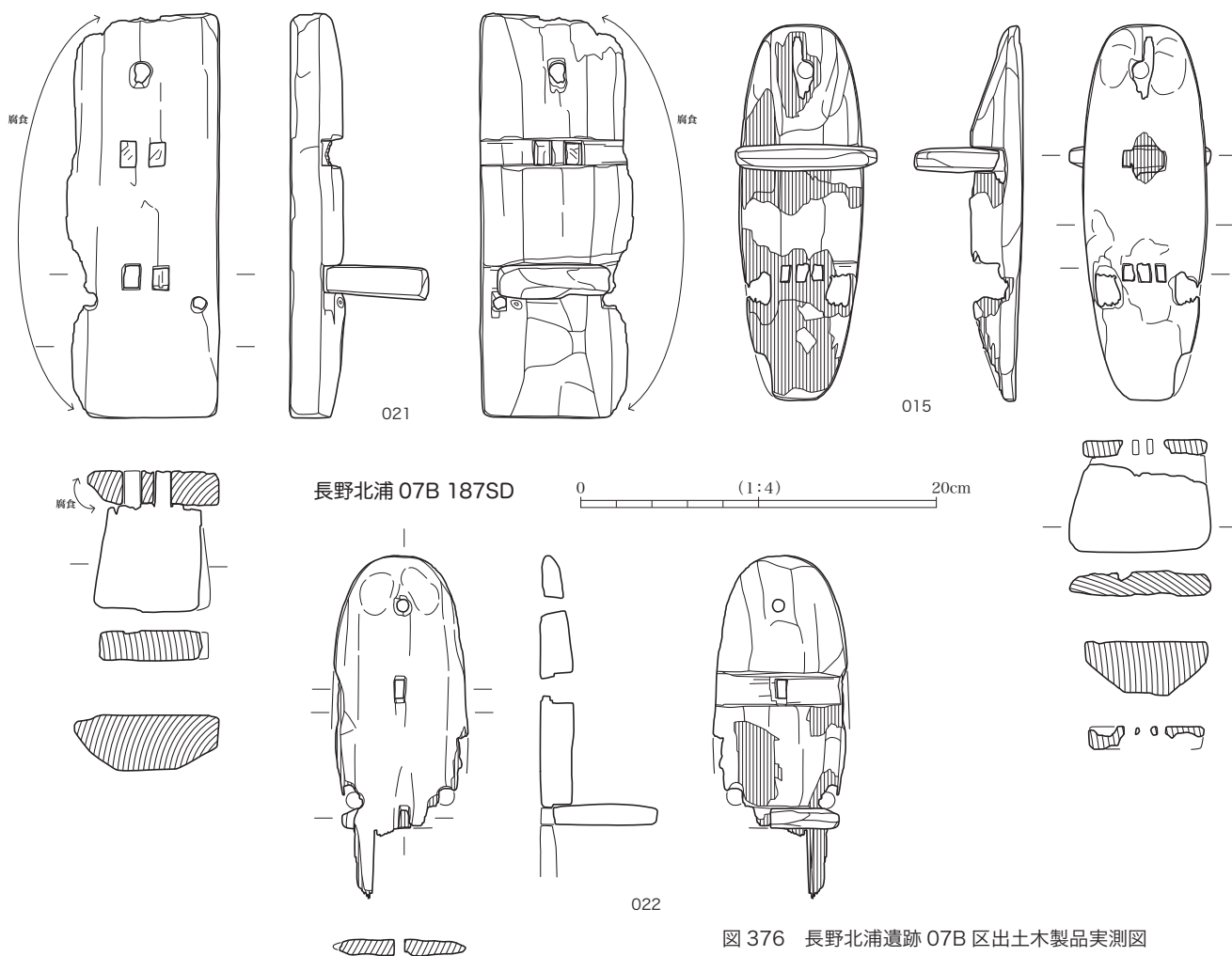


図 376 長野北浦遺跡 07B 区出土木製品実測図

07B-187SD 出土木製品

差し歯式の下駄が2点出土。021 は台の平面形が長方形で、022 は長楕円形。021 は差し歯の柄孔が前後2カ所ずつで、022 は1カ所ずつ。022 は右足用で、023 は不明。木取りは021・022 のいずれもが、台・歯ともに柾目材。

(樋上 昇)

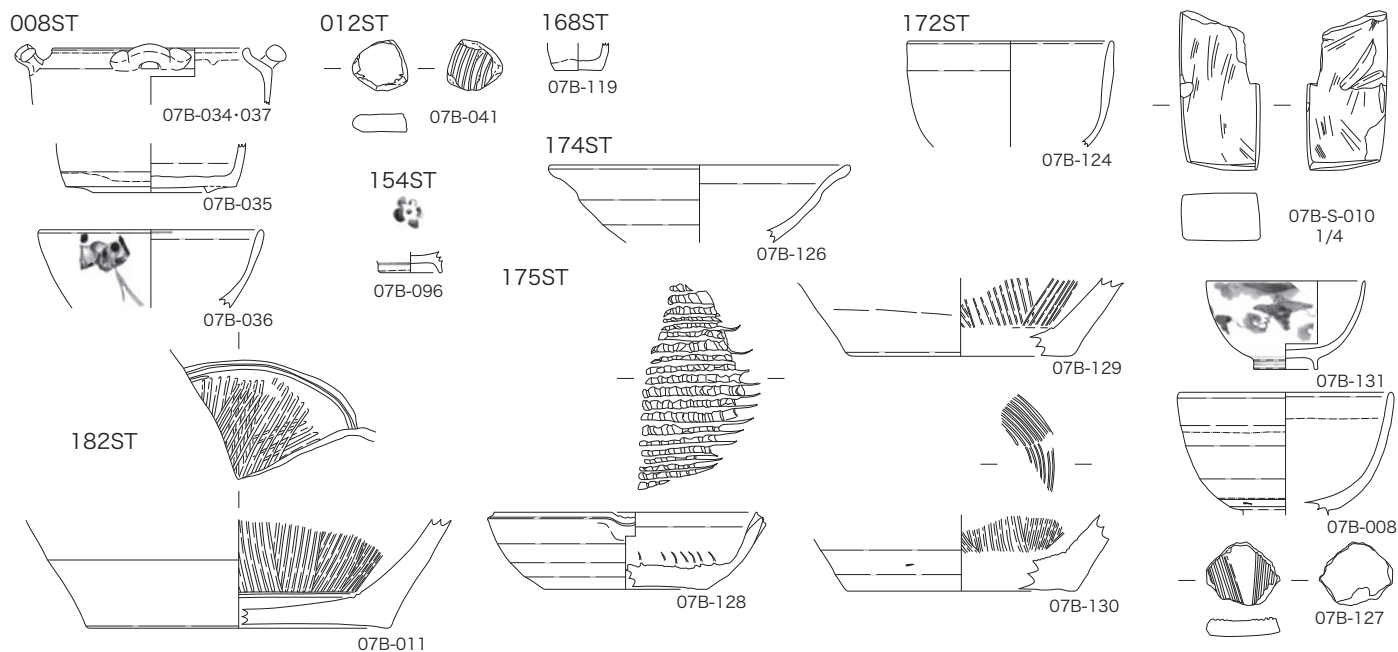


図 377 長野北浦遺跡 07B 区水田関係遺構出土遺物実測図

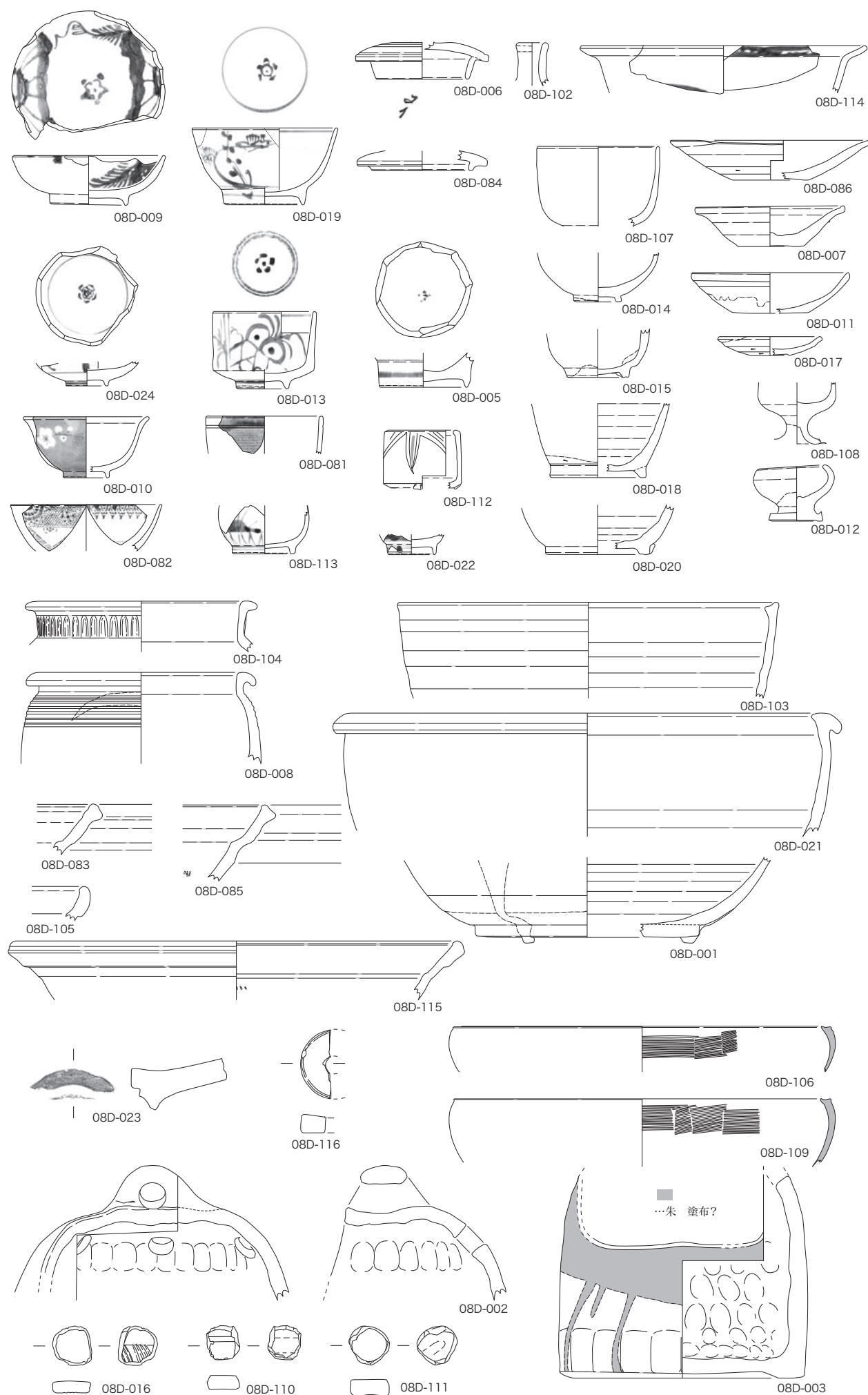


図 382 長野北浦遺跡 08D 区 011SD 出土遺物実測図

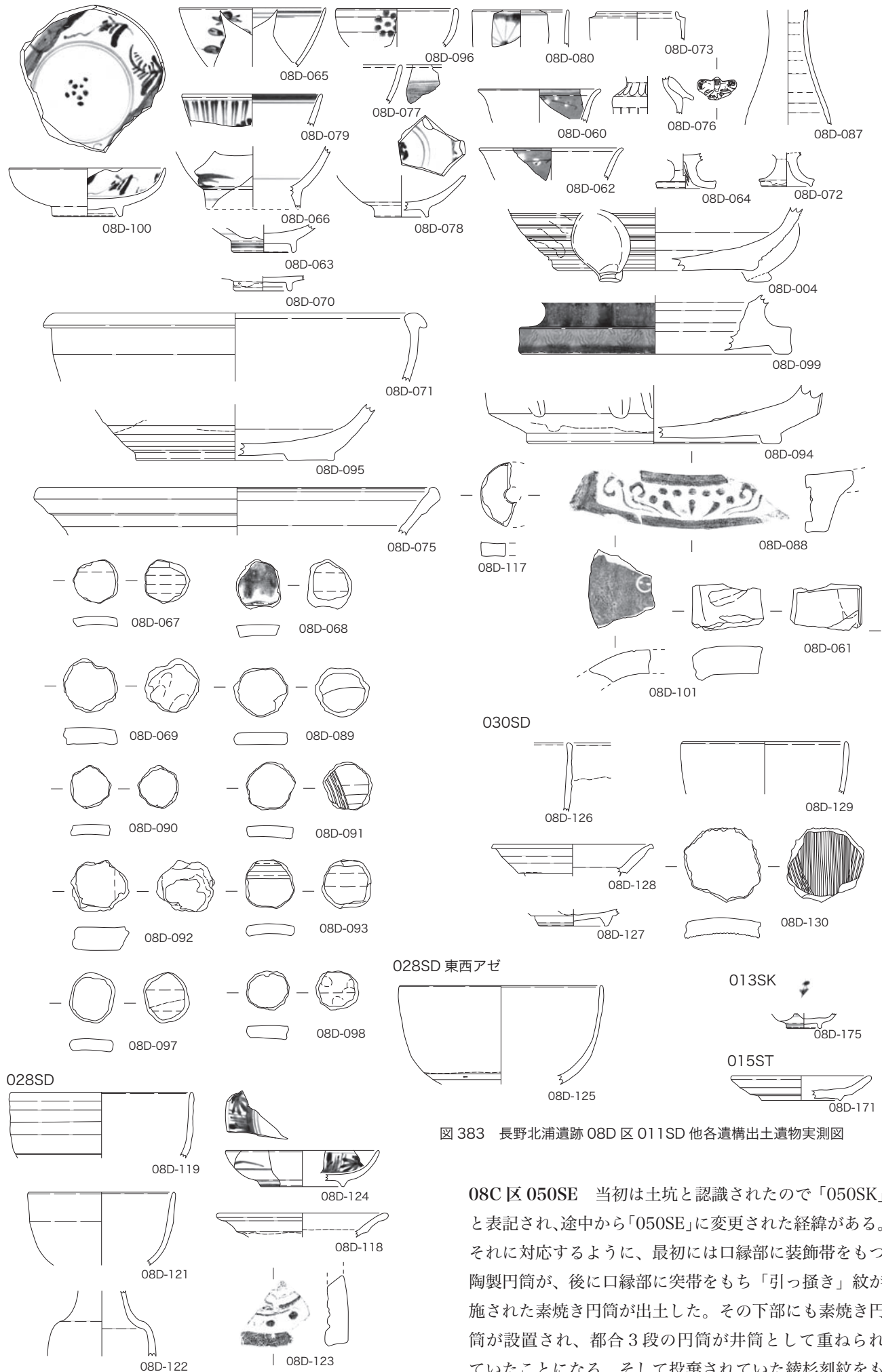


図 383 長野北浦遺跡 08D 区 011SD 他各遺構出土遺物実測図

08C 区 050SE 当初は土坑と認識されたので「050SK」と表記され、途中から「050SE」に変更された経緯がある。それに対応するように、最初には口縁部に装飾帯をもつ陶製円筒が、後に口縁部に突帯をもち「引っ掻き」紋が施された素焼き円筒が出土した。その下部にも素焼き円筒が設置され、都合3段の円筒が井筒として重ねられていたことになる。そして投棄されていた綾杉刻紋をも

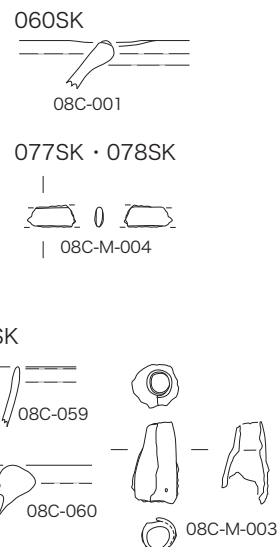
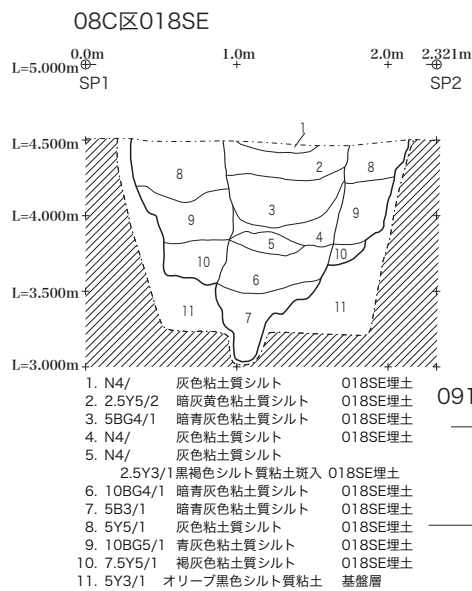
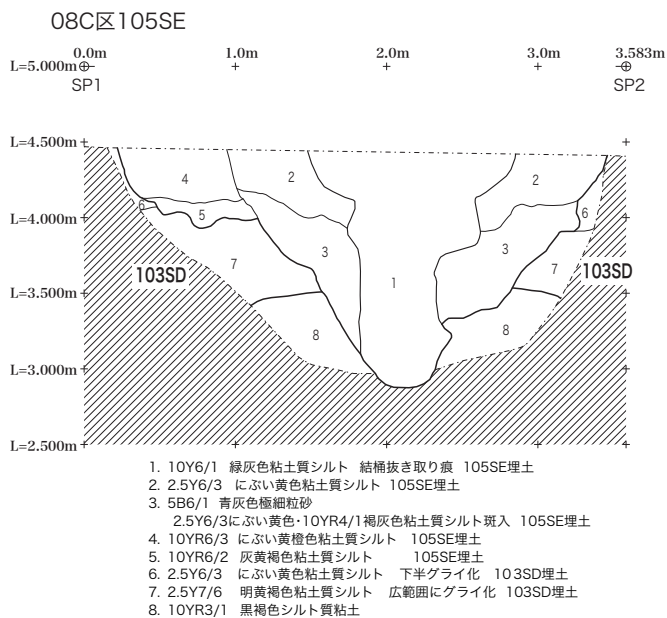


図 387 長野北浦遺跡 08C 区井戸土層セクション図

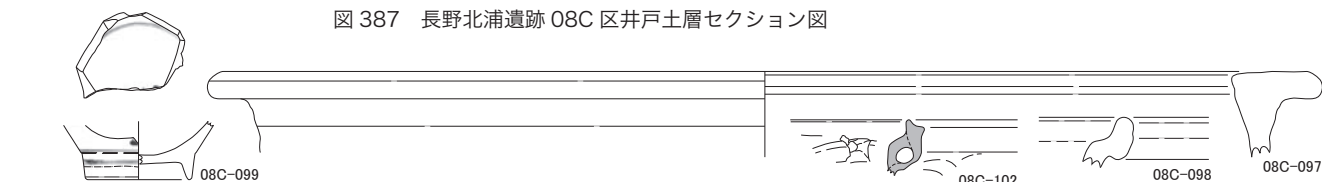


図 388 長野北浦遺跡 08C 区 104・105SE 出土遺物実測図

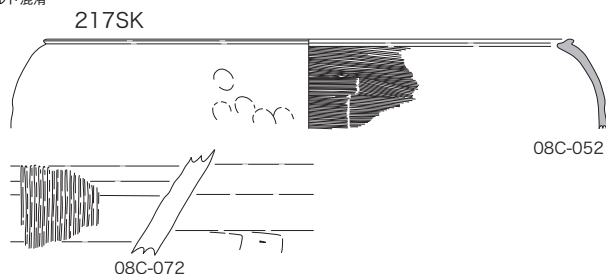
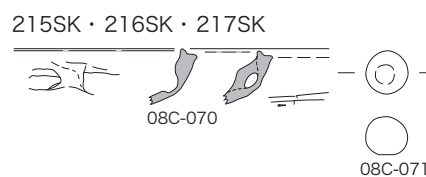
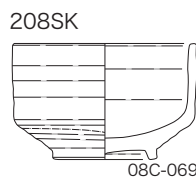
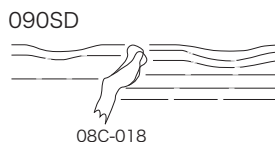
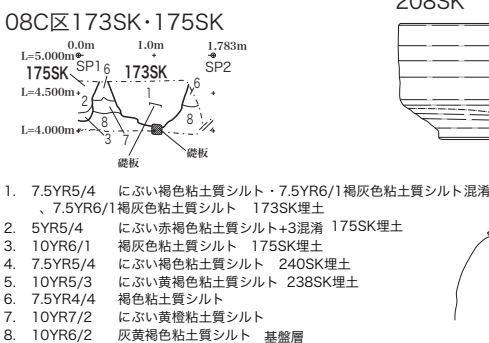
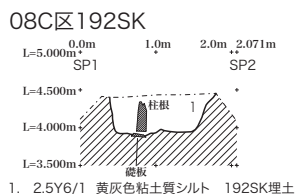
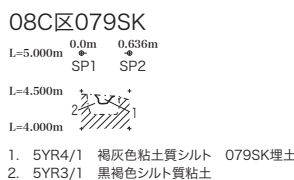
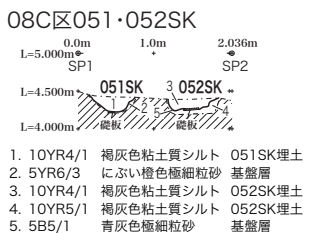
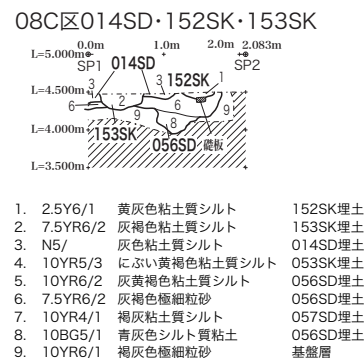
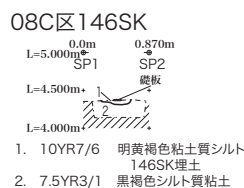
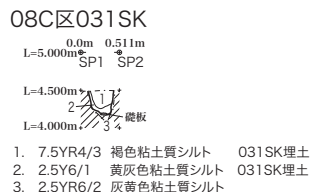
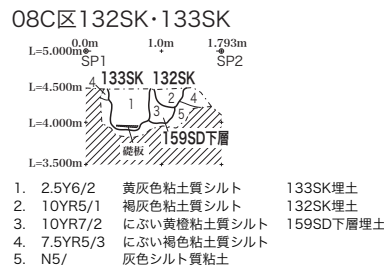
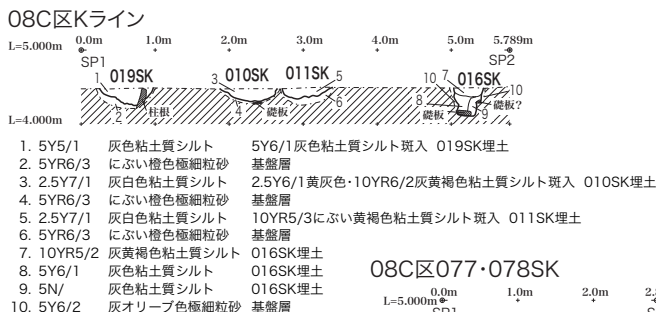


図 389 長野北浦遺跡 08C 区柱穴土層セクション図・その他遺構出土遺物実測図

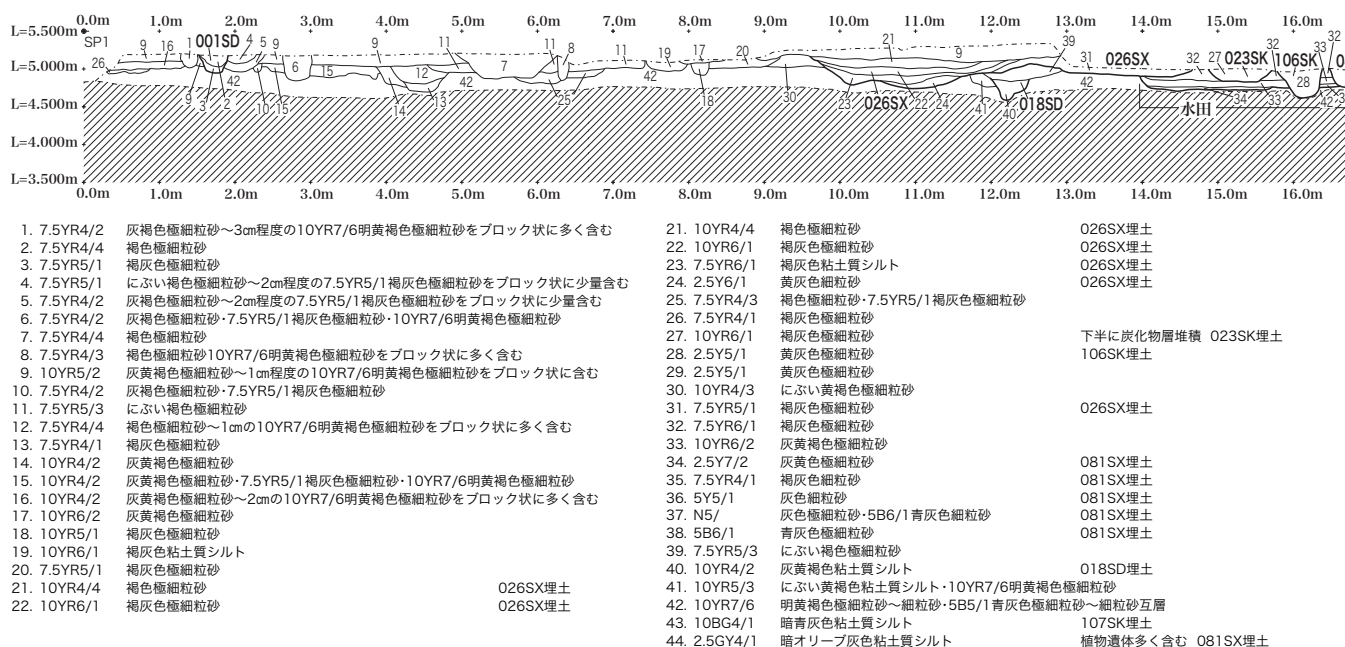


図 390 長野北浦遺跡 08B 区東西土層セクション図

● 08B 区

整地が繰り返されて土地利用形態はめまぐるしく変わる。調査区の西側は、水田が造成されて後に整地されて建物群が展開し、026SX のよ

うな水溜遺構も設けられる。東側ではプランと土層セクションとの整合性も保てない程遺構の重複が激しく、検出面を下げる度に新たな遺構が姿を現す状況であった。最上面には島島地帯特有の幅狭い水田が造成されて

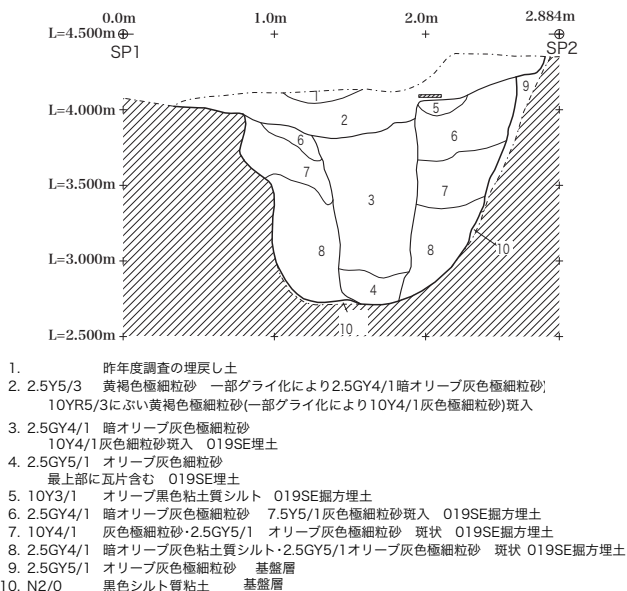
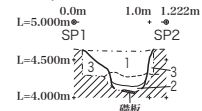


図 391 長野北浦遺跡 08B 区 019SE 土層セクション図

08B区048SK



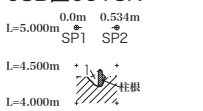
- 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂斑入 048SK埋土
 - 2.5Y5/1 灰色極細粒砂 048SK埋土
 - 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂 基盤層
- ※ 破線部より下 グライ化により10Y5/1 灰色を呈する

08B区Bライン



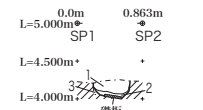
- 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂斑入 一部グライ化 049SK埋土
- 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 2.5Y6/4にぶい黄色極細粒砂斑入 064SK埋土
- 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂 一部グライ化 基盤層

08B区051SK



- 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂斑入 051SK埋土

08B区052SK

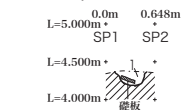


- 10Y4/1 灰色極細粒砂 斑状 2.5GY6/1オリブ灰色極細粒砂斑入 052SK埋土
- 2.5GY6/1 オリブ灰色極細粒砂 基盤層崩落土 052SK埋土
- 2.5GY6/1 オリブ灰色極細粒砂 基盤層

052SK

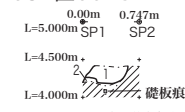


08B区059SK



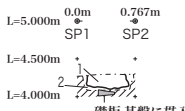
- 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂斑入 059SK埋土

08B区064SK



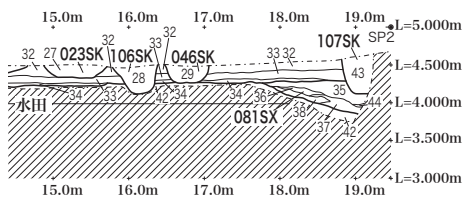
- 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 2.5Y6/4 にぶい黄色極細粒砂斑入 064SK埋土
- 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂 一部グライ化 基盤層

08B区066SK



- 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂・10Y6/1 灰色極細粒砂(斑状) 066SK埋土
- 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂～中粒砂 基盤層

図 393 長野北浦遺跡 08B 区柱穴土層セクション図



08B区061SK

- L=5.000m SP1
 L=4.500m
 L=4.000m
 L=3.500m
- 2.5Y5/3 黄褐色極細粒砂
2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂斑入 060SD埋土
 - 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細粒砂 2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂斑入
2.5Y7/2灰黄色極細粒砂(ラミナ状)・植物遺体(木本)含む 061SK埋土
 - 2.5GY6/1 オリーブ灰色極細粒砂
2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト(ブロック状)含む 061SK埋土
 - 2.5GY6/1 オリーブ灰色極細粒砂
2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト(ブロック状)含む 061SK埋土
 - 2.5GY7/1 明オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂 基盤層

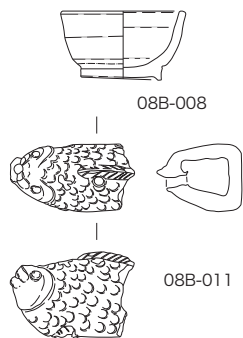
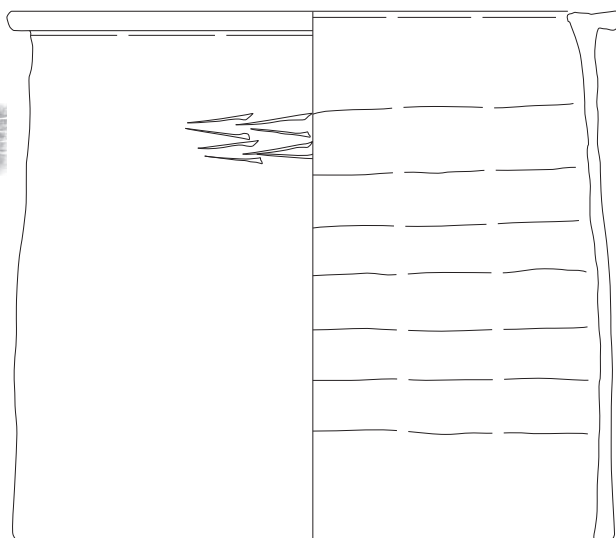


図 394 長野北浦遺跡 08B 区 061SK
 土層セクション図・出土遺物実測図

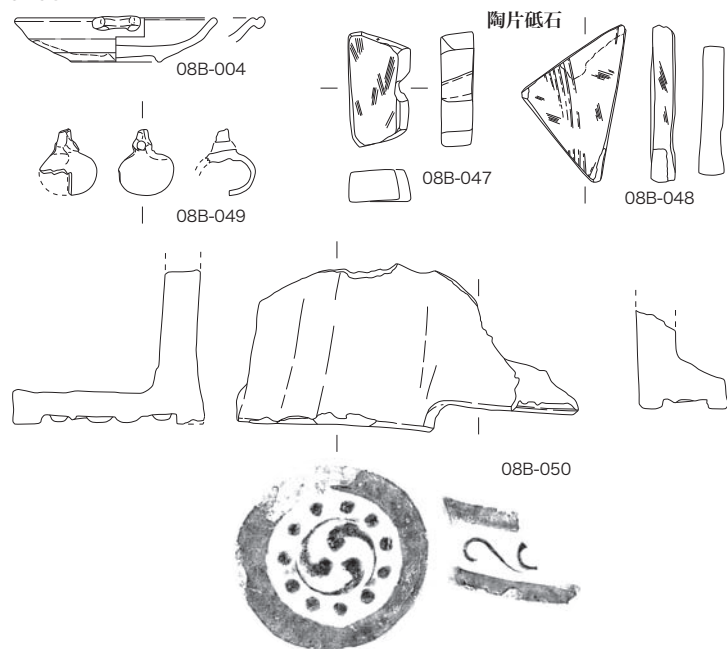
おり、周辺には畠が存在したと考えられる。なお、08B
 区 022SE からは 08C 区 050SE と同型の素焼き円筒が
 出土したが、井戸専用瓦の出土はない。



08B-054
 1/8

図 395 長野北浦遺跡 08B 区 022SE 出土遺物実測図

026SX



021SX

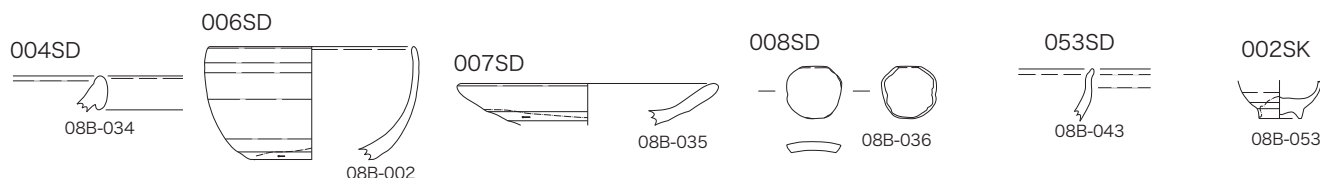
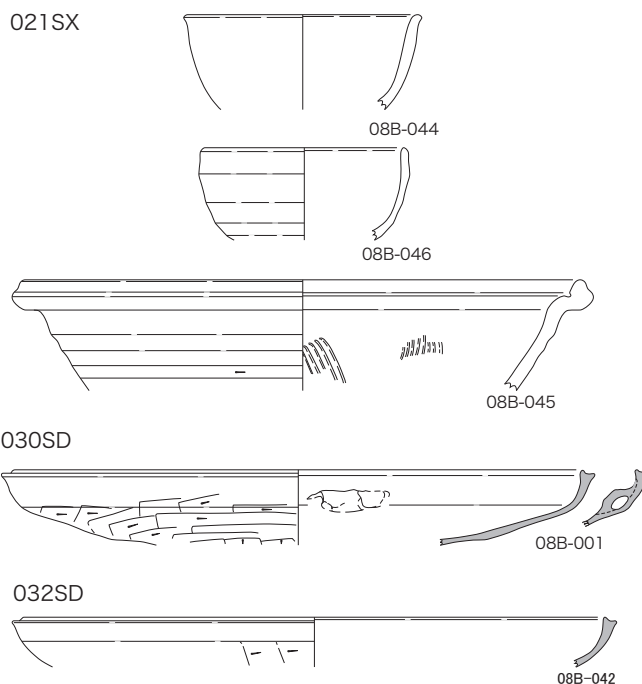


図 396 長野北浦遺跡 08B 区各遺構出土遺物実測図

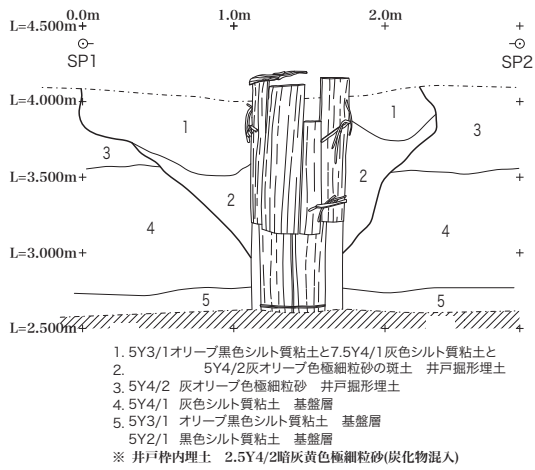


図 397 長野北浦遺跡 07A 区 101SE 土層セクション図



図 398 長野北浦遺跡 07A 区 101SE 検出状況 南から

● 08A 区・07A 区東端

南北溝が平行して掘削されている。002SD は 003SD (中世) 上部に設けられており、004SD とは切り合い関係がある。現代まで下る最も新しい遺物が出土しているのが 002SD だが、掘り返しの頻度から、初期は近世末から近代初期まで遡る可能性がある。001SD からは中世遺物が出土しており、中世に遡る可能性もある。よって、001SD → 004SD (= 056SD) → 002SD の順で掘削されたと判断する。

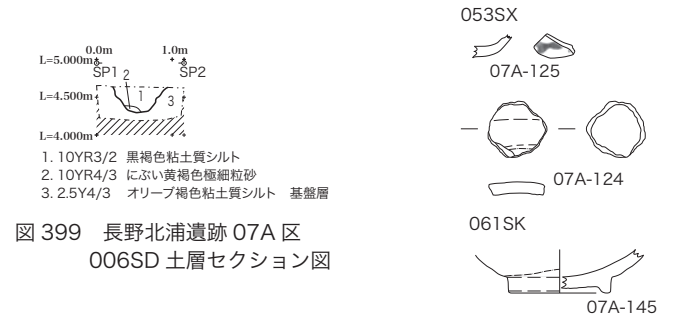


図 399 長野北浦遺跡 07A 区 006SD 土層セクション図

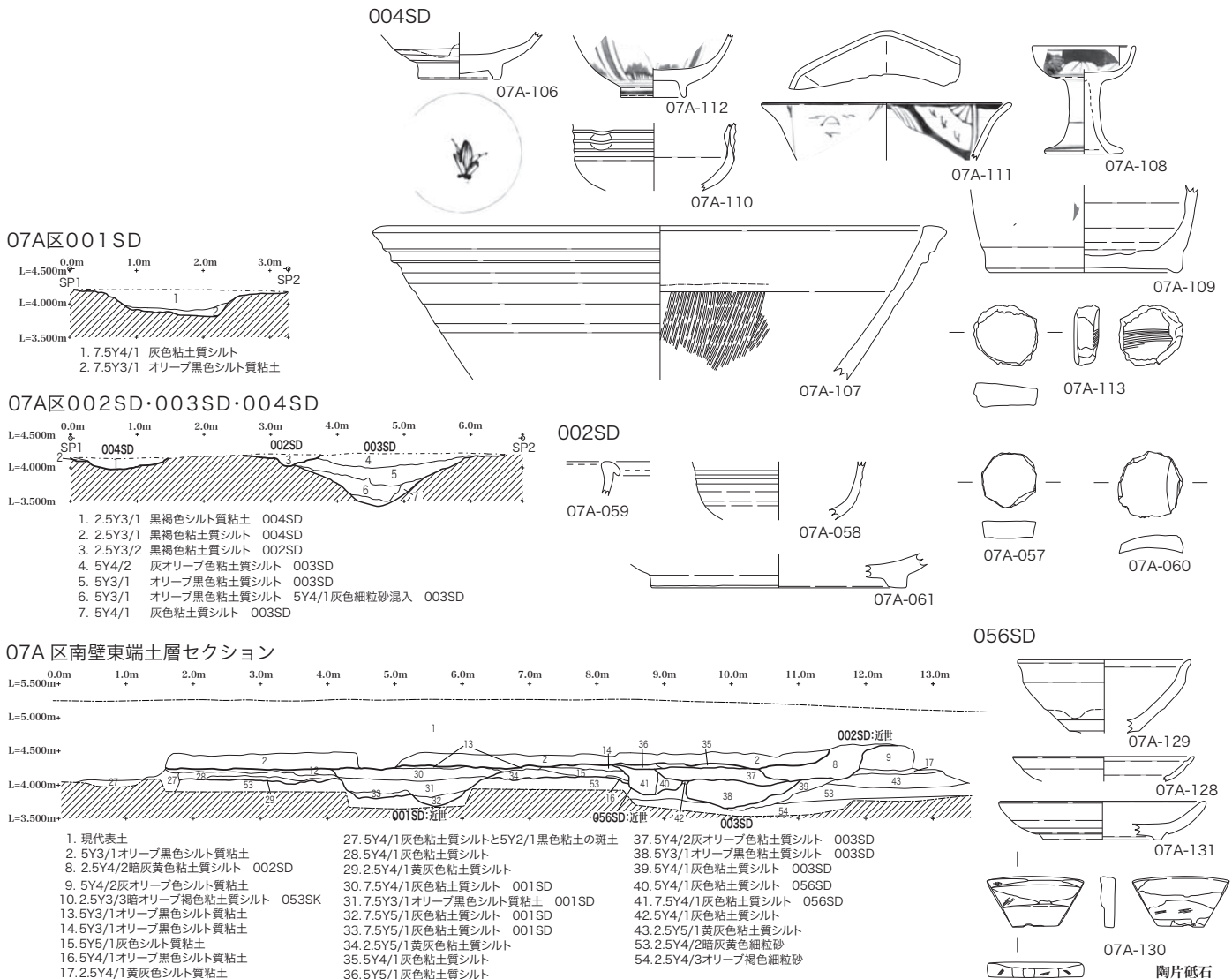
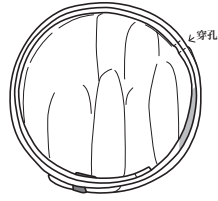
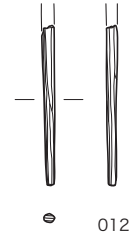


図 400 長野北浦遺跡 07A 区東端溝群土層セクション図・出土遺物実測図

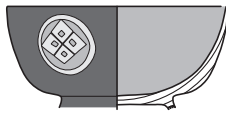
長野北浦 07A 050SE



長野北浦 07A 074SK

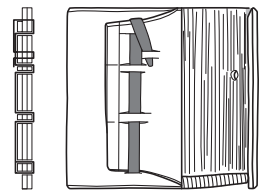


長野北浦 07B 156SD

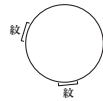


※内面 黒漆(柿渋か)の上に赤漆
※外面 黒漆に金の紋あり(3ヶ所か)

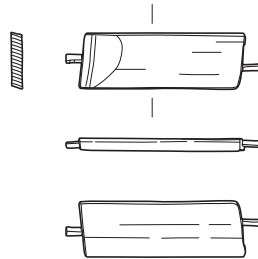
020



002

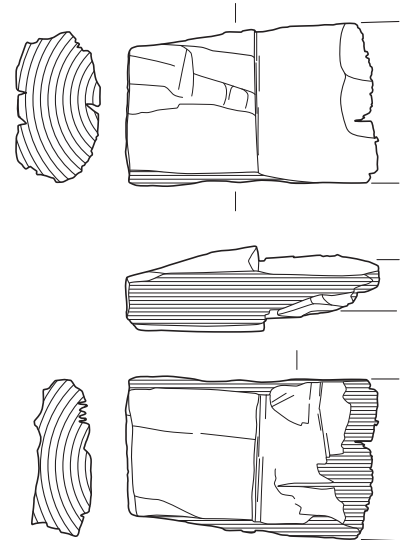


長野北浦 07A 050SE



001

長野北浦 07A 081SK



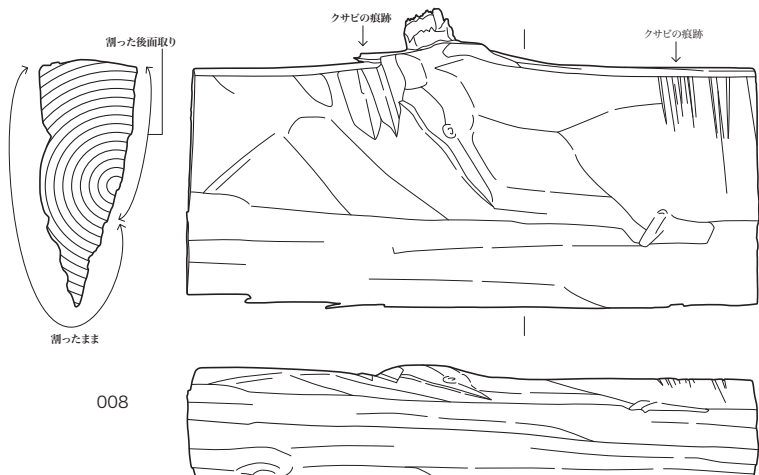
009

長野北浦 07A 118SD



013

長野北浦 07A 081SK

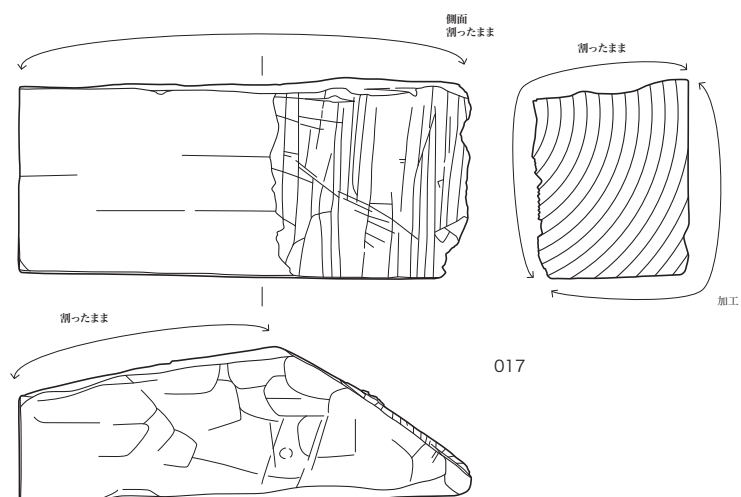


008

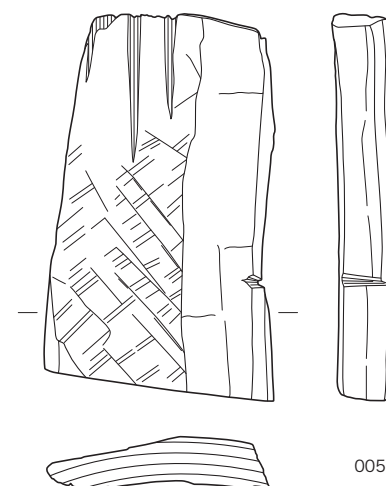
0 (1:4) 20cm

図 401 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土木製品実測図 (1)

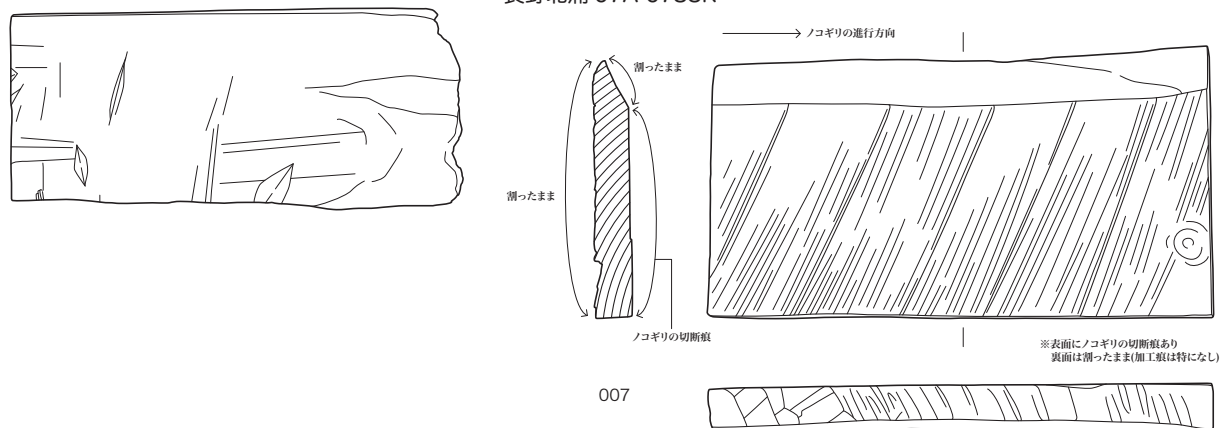
長野北浦 07B 226SK



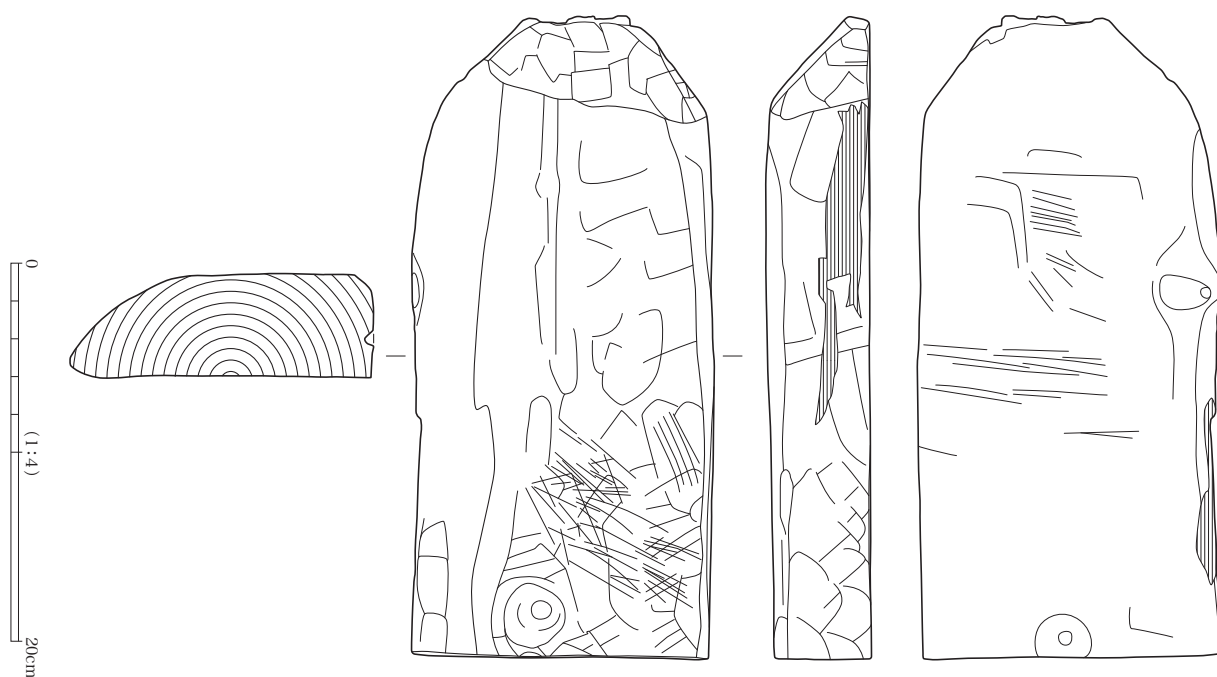
長野北浦 07A 034SD



長野北浦 07A 078SK



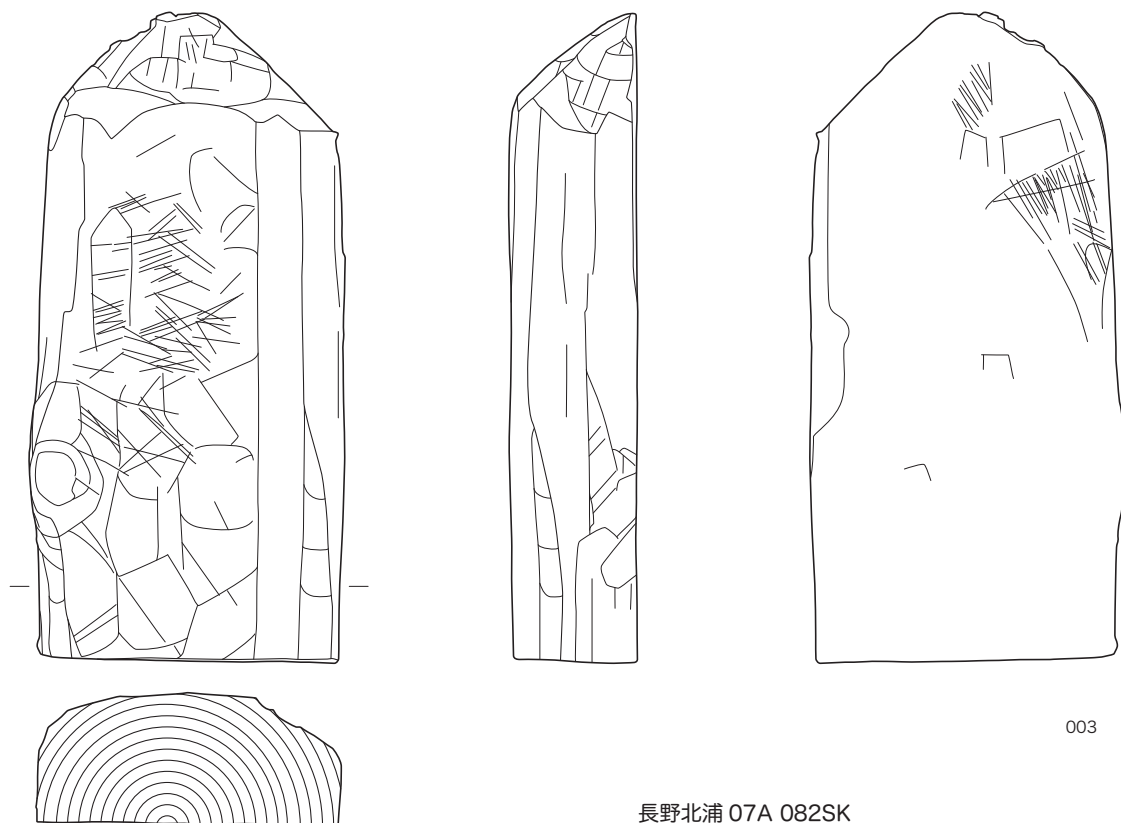
長野北浦 07A 078SK



006

図 402 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土木製品実測図 (2)

長野北浦 07A 060SD



003

長野北浦 07A 082SK

長野北浦 07A 082SK

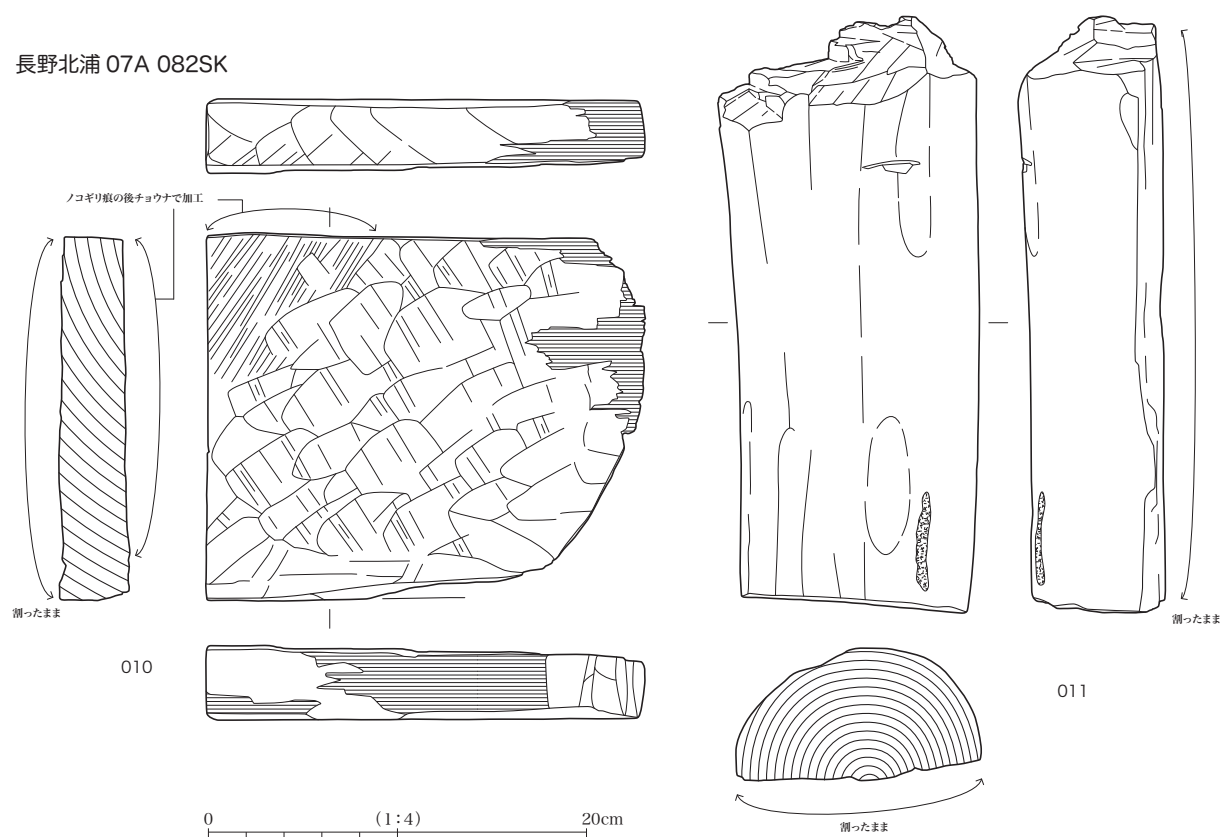


図 403 長野北浦遺跡 07A 区各遺構出土木製品実測図 (3)

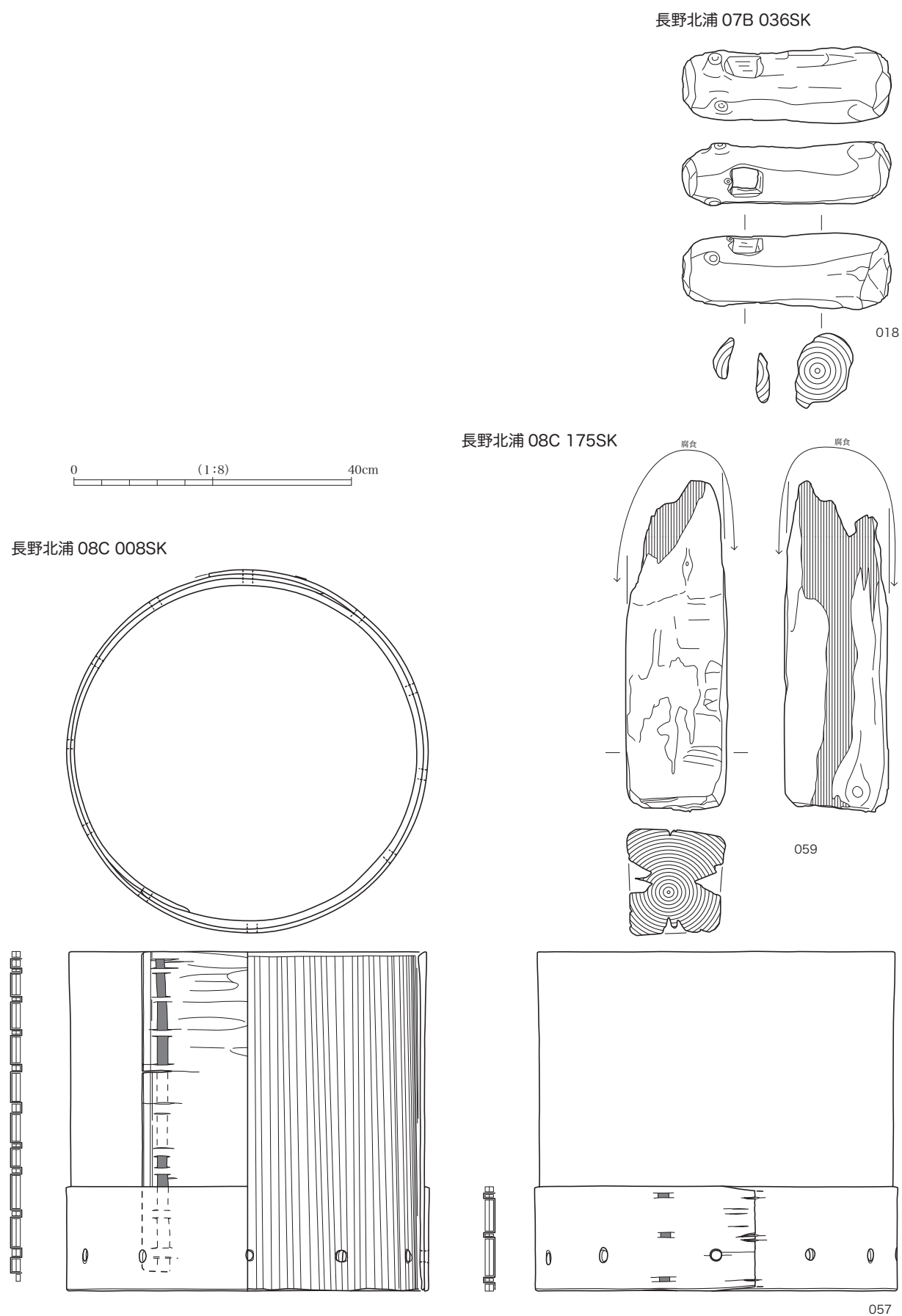
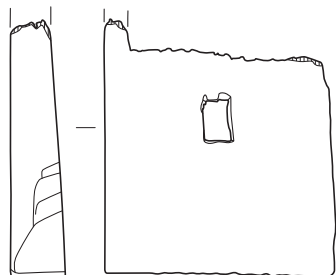
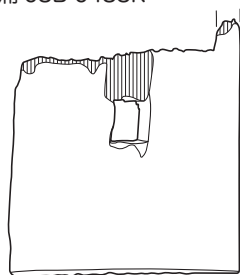


図 404 長野北浦遺跡各区出土木製品実測図 (1)

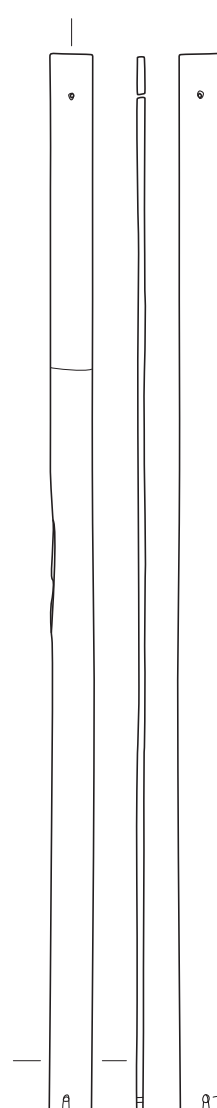
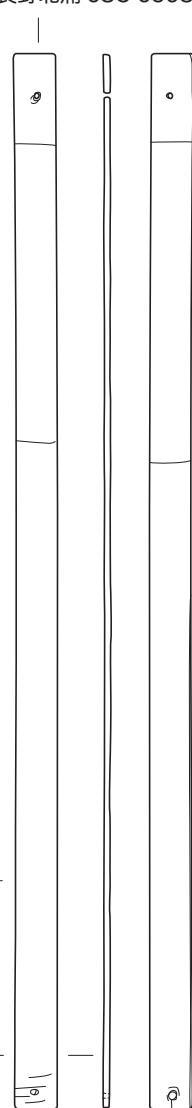
長野北浦 08B 048SK



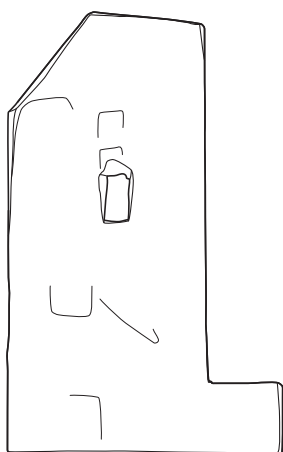
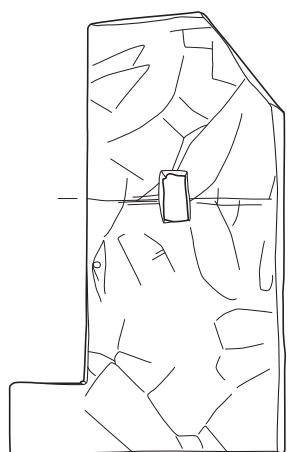
054



長野北浦 08C 050SE



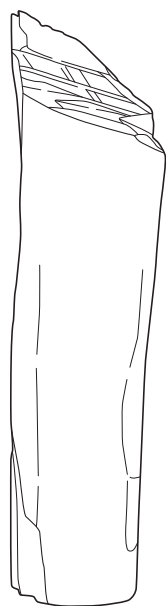
長野北浦 08B 052SK



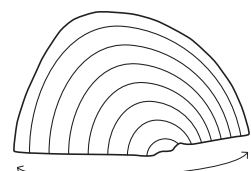
055



長野北浦 08C 133SK

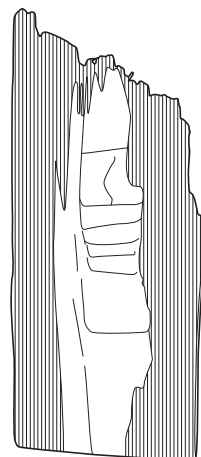
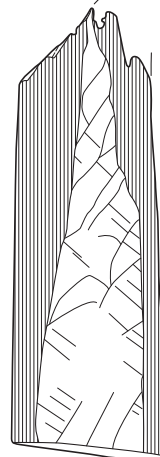
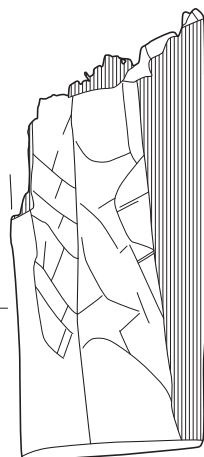


058

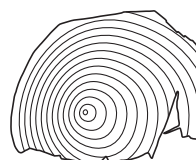


割ったまま

長野北浦 08B 081SX



056



060

061

0 (1:4) 20cm

図 405 長野北浦遺跡各区出土木製品実測図 (2)

第4章 自然科学分析

1. 昆虫化石を用いた長野北浦遺跡の古環境復元

(1) 試料および分析方法

A. 分析遺跡

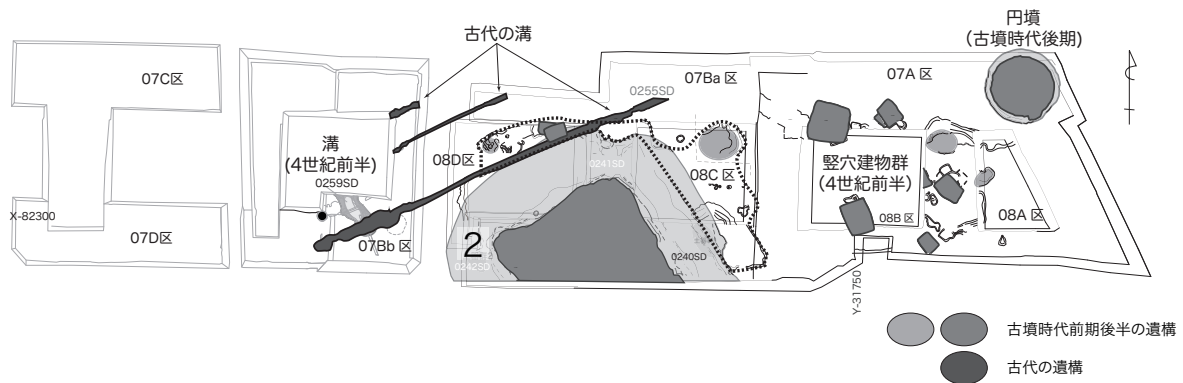
長野北浦遺跡は稲沢市東部に所在する古墳時代～近世の集落遺跡である。地形的には三宅川左岸の後背湿地上に位置しており、遺構検出面での標高は約4m程度である(樋上 2008)。

長野北浦遺跡の発掘調査は、都市計画道路稲沢西春線の建設に伴って平成19年から20年にかけて愛知県埋蔵文化財センターによって行われた。遺跡からは古墳時代の竪穴建物群や溝、中世の区画溝・井戸・水田遺構、近世の屋敷地などが確認されており、当遺跡周辺が古墳時代から近世にかけて当地が人々の生活の場として利用さ

れていたことが明らかとなっている。

長野遺跡の西には、古墳時代・古代・中世～近世の複合遺跡である塔の越遺跡が隣接している。塔の越遺跡の調査区西半分からは古代、東半分からは中世～近世を主体とした遺構が見つかった。遺跡の西半分に展開する古代の遺構に関してみると、7世紀から9世紀にかけて掘立式建物を中心に構成される建物群が展開していたと推定されており、塔の越遺跡が遺跡の西に隣接する尾張国府と密接な関係にあったことが指摘されている。遺跡の東半分に展開する中世～近世の遺構については井戸や区画溝が検出されており、これらは長野北浦遺跡から連続する遺構群であると推定されている。

古墳時代～古代



中世

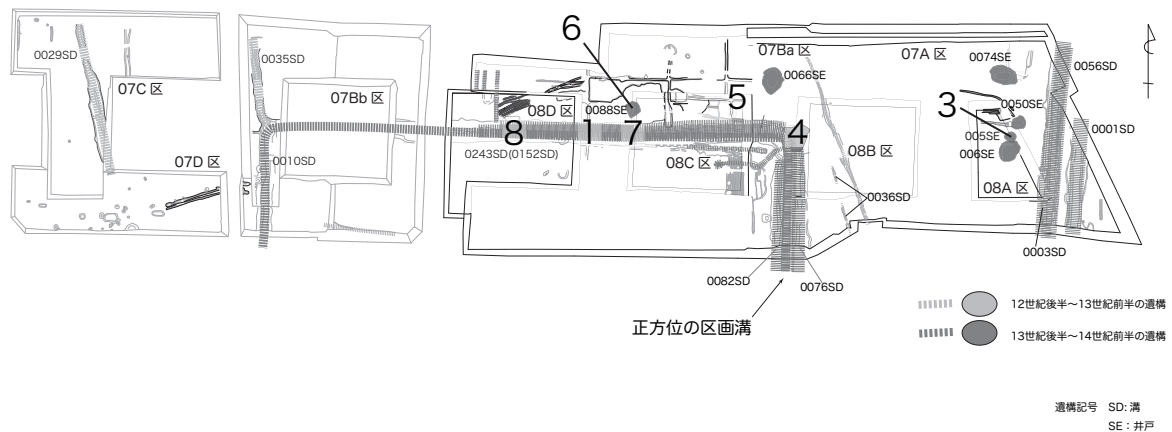


図 406 試料採取位置平面図(奥野・蔭山 2009 を改変)

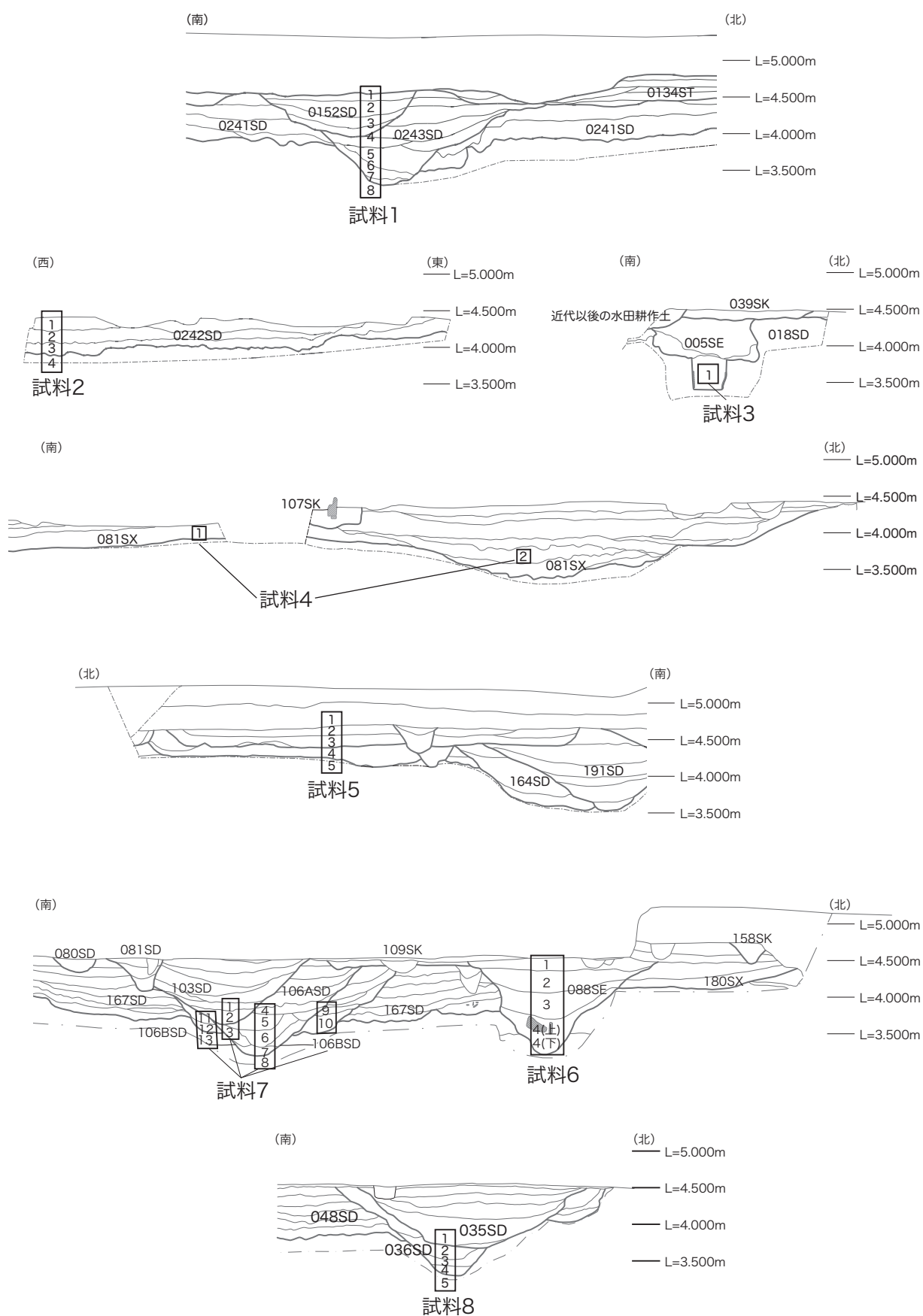


図 407 試料採取位置断面図 (奥野・蔭山 2009 を改変)

B. 分析試料 (図 406・図 407・表 5 参照)

昆虫化石分析に用いた試料は、平成 20 年 4 月から 10 月までに行われた発掘調査に際して主に蔭山誠一氏 (愛知県埋蔵文化財センター) によって採取されたものである。

採取地点は合計 8 地点 43 カ所で、試料は主にコラムサンプリング方法によって採取した。所属時期ごとに分析試料を見ると、4 世紀前半および 7 世紀後半のものが 1 試料 (試料 2)、12 世紀後半～14 世紀前半のものが 7 試料 (試料 1・3・4・5・6・7・8) であった。以下、所属時期と遺構の種類ごとに試料採取地点について述べる。

a. 4 世紀前半 (古墳時代前期後半) および 7 世紀後半 (古代)

・溝

(試料 2: 07Ba 区 0242SD)

溝 0242SD で試料を採取した。1 および 2 番の層が 7 世紀後半 (古代)、3 および 4 番の層が 4 世紀前半 (古墳時代前期後半) に属するものである。試料は 08D 区の西セクションから採取した。

b. 12 世紀後半～14 世紀前半 (中世)

・正方位区画溝

(試料 1: 07Ba 区 0152SD・0243SD (試料 7: 08C 区 103SD・106ASD・106BSD) (試料 8: 08D 区 035SD・036SD))

遺跡の中央を東西に横断する正方位の区画溝から試料を採取した。採取地点は試料 1 の 1～4 番の層が 07Ba 区 0152SD・5～8 番の層が 07Ba 区 0243SD の下層部分、試料 7 の 1～3 番の層が 08C 区 103SD の下層部分・4～8 番の層が 08C 区 106SD の下層部分・11～13 番の層が 08C 区 106SB、試料 8 の 1 番の層が 08D 区 035SD の最下層・2～5 番の層が 08D 区 036SD である。

この区画溝は、本遺跡の南約 100m に所在する真言宗の古刹万徳寺が弘長 3(1263) 年に再興された時期に掘削され、その後再掘削を繰り返されながら機能し続けたと推定されるものである (樋上 2008)。おおよそ 13 世紀前後に属する溝である。遺跡の西側から東にかけて試料 8、試料 1、試料 7 の順に位置している。

遺構の切り合い関係が非常に複雑であるため、溝が掘削された時期を詳細に明らかにするのは困難であるが、区画溝の時期は大きく分けて次の 2 つのグループに区分することができる。①つ目は、「各地点の溝の中

で切り合いが一番上位に位置しており、掘削時期が最も新しいグループ (試料 1: 0152SD、試料 7: 103SD、試料 8: 035SD)」、②つ目は「①の溝を掘削する際に平面形が削られており、切り合い関係からみて①よりも古い時代に掘削されたことが明らかなグループ (試料 1: 0243SD、試料 7: 106ASD・106BSD、試料 8: 036SD)」である。グループ①の 0152SD・103SD・035SD については同じ一本の区画溝であることが明らかであるが、グループ②の各溝の対応関係は明らかではない。溝の中に含まれる遺物から、グループ①の時期は含まれる考古学遺物からおおよそ 13 世紀後半頃と考えられる。グループ②の時期は、グループ①よりも古く、最大で 12 世紀後半まで遡る可能性もあるが個別の溝の詳細な時期は定かではない。

・井戸

(試料 3: 08A 区 005SE / 試料 6: 08C 区 088SE)

正方位区画溝の北に近接する曲物井戸 008SE (試料 6) と、遺跡の東部に位置する井戸群のうちの曲物井戸 005SE (試料 3) で試料を採取した。遺構の所属時期は 12 世紀後半から 13 世紀前半頃である。

・不明遺構

(試料 4: 08B 区 081SX)

不明遺構 081SX では下層の 2 カ所で試料を採取した (ともに試料 2)。区画溝のすぐ東に位置しているが、区画溝との新旧関係は不明である。遺構の所属時期は 14 世紀前後である。形状は幅約 4m の大型土坑状をとり、埋土には多量の植物質を含んでいる。人為的に掘削された遺構であると考えられている。

・北東部北壁中央セクション中～近世地層

(試料 5: 08C 区北壁中央セクション)

08C 区の北東部に位置する北壁中央セクションで試料を採取した。1～3 番の層が近世の遺物を含む地層、4 番が中世の遺物を含む地層、5 番が基盤層である。中世の遺物を含む地層については、12 世紀頃に属すると思われる。

C. 分析方法

採取した試料はコンテナに密封して愛知県埋蔵文化財センターの水洗作業室に持ち帰り、昆虫化石の抽出作業を行った。分析の手順を以下に略述する。まず、ブロック割り法 (森 1994) を用いて肉眼で昆虫化石の検出をおこなった。さらにその後、ブロック割りが終わった試料の中からより細かい化石を検出するために、目の大きさが $0.25 \mu\text{m}$ の篩を用いて 1 試料につき 300g ずつ水洗浮遊選別法 (フローテーション法) にかけた。見つ

表 5 長野北浦遺跡採取試料一覧

試料番号	調査区	遺構	層番号	土層注記	湿潤重量 (kg)	フローテ ーション量(kg)
1	07Ba	0152SD	1	10YR3/2黒褐色砂質シルト・腐植物ごく微量に含む	2.8	0.03
			2	10YR3/2黒褐色砂質シルト・炭化物ごく微量に含む	3.8	0.03
			3	10YR3/2黒褐色砂質シルト	5.4	0.03
			4	10YR3/2黒褐色シルト・炭化物微量に含む	5.8	0.03
			5	10YR3/2黒褐色砂質シルト・炭化物微量に含む	4.3	0.03
			6	10YR2/1黒色粘土・炭化物・腐植物含む	6.8	0.03
			7	10YR2/1黒色粘土・炭化物多量に含む	6.6	0.03
			8	10YR4/1褐灰色砂・シルトブロック含む	4.2	0.03
2		0242SD	1	2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト	4.4	0.03
			2	2.5Y2/1黒色粘土質シルト	5.4	0.03
			3	2.5Y6/2黄灰色粘土質シルト	5.2	0.03
			4	2.5Y6/2黄灰色細粒砂混じり	4.5	0.03
3	08A	005SE		2.5Y4/1黄灰砂・シルトブロック含む	23.8	0.03
4	08B	081SX	1	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	13.8	0.03
			2	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	14.0	0.03
5		北東部 北壁中央 セクション	1	10YR4/3鈍い黄褐色シルト質砂	2.8	0.03
			2	10YR4/3鈍い黄褐色シルト質砂	3.2	0.03
			3	10YR4/3鈍い黄褐色砂質シルト・植物質・炭化物微量含む	3.1	0.03
			4	10YR4/3鈍い黄褐色砂質シルト	3.3	0.03
			5	10YR4/3鈍い黄褐色砂	0.6	0.03
6		088SE	1	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト	0.7	0.03
			2	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト	0.7	0.03
			3	2.5Y3/1黒褐色粘土・植物および炭化物少量含む	0.7	0.03
			4(上)	10YR3/1黒褐色砂まじりシルト・植物および炭化物少量含む	28.0	0.03
			4(下)	10YR3/1黒褐色砂まじりシルト	6.3	0.03
7		08C	1	2.5Y2/1黒色シルト・植物炭化物微量	3.2	0.03
			2	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト・炭化物微量含む	3.0	0.03
		106ASD	3	10YR3/1黒褐色砂まじり粘土・植物含む	2.8	0.03
			4	10YR3/1黒褐色粘土	3.0	0.03
			5	2.5Y2/1黒色粘土・植物含む	3.1	0.03
			6	10YR3/1黒褐色シルト質粘土・植物含む	3.0	0.03
			7	10YR3/1黒褐色砂質シルト	1.8	0.03
			8	10YR3/1黒褐色シルト	2.4	0.03
		106BSD	9	10YR2/1黒色シルト・植物含む・炭化物ごく微量に含む	1.6	0.03
			10	10YR2/1黒色シルト・炭化物ごく微量に含む	3.3	0.03
			11	10YR2/1黒色シルト・炭化物ごく微量に含む	2.4	0.03
			12	5Y3/2オリーブ黒砂	1.0	0.03
			基盤層	5Y3/2オリーブ黒細粒砂	2.0	0.03
8	08D	036SD	1	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト・炭化物ごく微量に含む	9.8	0.03
			2	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト・炭化物ごく微量に含む	10.2	0.03
			3	5Y3/2オリーブ黒・シルト質砂	8.2	0.03
			4	7.5Y5/2オリーブ黒・砂質シルト	7.2	0.03
			5	7.5Y5/2オリーブ黒・粘土・砂含む・炭化物微量に含む	7.0	0.03

かった昆虫化石はクリーニングを行ったのち、顕微鏡下で現生標本と1点ずつ比較しながら同定作業を行った。得られた昆虫化石は昆虫の食性および生息環境別に分類し、リスト化した(表6)。分析後の昆虫化石はシャーレに密封し、愛知県埋蔵文化財センターに保管している。

(2) 分析結果

A. 昆虫化石検出状況

分析の結果、長野北浦遺跡の試料から合計443点の昆虫化石群集を得た。ただしこの昆虫化石の点数はいずれ節も片ないし破片数であり、生息していた昆虫の個体数を示したものではない。なお、古墳時代および古代の試料(試料2)から昆虫化石を得ることはできなかった。よって見つかった昆虫化石はすべて中世に所属するものである。

昆虫が認められた遺構は試料1の07Ba区0152SD(計

147点)が最も多く、続いて試料7の08C区103・106SD(計136点)、試料4の08B区081SX(計86点)、試料7の08D区103・106SD(計30点)、試料5の08C区北壁セクション古代地層(計4点)、試料8の08D区035・036SD(計1点)である。なお、試料2の07Ba区0242SDおよび試料3の08A区005SE、試料6の08C区088SEでは昆虫化石を得ることは出来なかった。

昆虫化石が見つかった試料の土質についてみると、黒色粘土層から見つかった昆虫の数が最も多く(6地点213点)、続いて砂質シルト層(6地点122点)、シルト層(4地点35点)、砂層(1地点4点)であった。全体的な傾向として昆虫化石が多産する試料ほど、種子等の植物遺体が多く含まれる傾向にあった(奥野・蔭山2009参照)。

B. 昆虫化石群集

正方位区画溝で採取した3試料(試料1・試料7・試料8)と、不明遺構081SXで採取した1試料(試料4)から昆虫化石が認められた。以下、試料ごとに見つかった昆虫化石について述べる。

・区画溝

(試料1: 07Ba区0152・0243SD)

正方位区画溝0152SD・0243SDの下層部分(番号6～7)で採取した試料から昆虫化石が合計147点認められた。この6～7番の層は溝0243SDの下層部分に該当しており、区画溝の中で掘削時期が古いグループ(グループ②)のものである。出土した昆虫化石の食性・生息環境別出現率をみると、出現率が最も高かったのは陸生の食植性昆虫82.0%(118点)であり、続いて地表性の食糞・食屍性昆虫が68.3%(11点)、地表性の食肉・雑食性昆虫が6.2%(9点)、水生の食肉性昆虫が0.6%(1点)、その他不明甲虫が2.8%(4点)であった。

主な出現種を見るとヒメコガネ *Anomala rufocuprea*(104点)など、食植性のコガネムシ科の昆虫の出土が最も多かった。ヒメコガネの成虫は、ダイズやアズキなどマメ科植物やクリ・ブドウなど果樹の葉を食料としており(日本応用動物昆虫学会 編 1987)、サクラコガネ属 *Anomala* sp.(9点)と同様に人為的な干渉を受けた植生二次林下に生息する昆虫である。地表性歩行虫については、食肉・雑食性のオサムシ科 Carabidae(5点)・アオゴミムシ属 *Chlaenius* sp.(2点)・ハネカクシ科 Staphylinidae(2点)の他、人糞や獣糞に集まるマグソコガネ属 *Aphodius* sp.(9点)・コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*(1点)・エンマコガネ属 *Onthophagus* sp.(1点)、腐敗動物質や糞便に飛来するエンマムシ科 Histeridae(1点)が認められた。これらの食糞・食屍性昆虫は人工的な生息環境を指標する汚物集積の指標昆虫(森 1994)である。

(試料7: 08C区103SD・106SD)

試料7には、103SD・106ASD・106BSDの3本の溝が切り合って存在している。掘削時期が古いものから並べると、(古)106BSD・(中)106ASD・(新)103SDの順になる。このうち、103SDの下層部分(番号1～2)・106ASDの下層部分(番号3～7)・106BSDの下層部分(番号9～12)から合計136点の昆虫化石が認められた。103SDが掘削時期が新しい区画溝(グループ①)、106A・106BSDが掘削時期が古い区画溝(グループ②)である。

出土した昆虫化石の食性・生息環境別出現率をみると、

陸生の食植性昆虫の出現率が72.8%(99点)と最も高く、続いて地表性の食糞・食屍性昆虫が5.1%(8点)、地表性の食肉・雑食性昆虫が19.1%(26点)、その他不明甲虫が6.8%(1点)、水生の食肉性昆虫が2.2%(3点)であった。

主な出現種を見ると、陸生の食植性昆虫については試料1と同様にヒメコガネ(84点)の出土が最も多く、植物の葉を食べるハムシ科 Chrysomelidae(7点)や花や果実などを食べるゾウムシ科 Curculionidae(1点)の昆虫も認められた。地表性歩行虫についてはオサムシ科 Carabidae(17点)をはじめ、トックリゴミムシ属 *Lachnocrepis* sp.(4点)、オオゴミムシ *Lesticus magnus*(1点)、ゴミムシ科 Harpalidae(1点)、ミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.(2点)など、食肉および雑食性の種群が認められた。このうちトックリゴミムシ属やミズギワゴミムシ属は日本各地の遺跡の水田耕作土から頻繁に発見される昆虫である(森 1996)。

(試料8: 08D区035SD・036SD)

正方位区画溝035SDの最下層(番号1)・036SDの下層(番号3～4)から合計30点の昆虫化石が認められた。035SDが掘削時期が新しい区画溝(グループ1)、036SDが掘削時期が古い区画溝(グループ2)である。

出土した昆虫化石の食性・生息環境別出現率についてみると、陸生の食植性昆虫70.0%(21点)の出現率が最も高く、続いて地表性の食糞・食屍性昆虫が6.7%(2点)、地表性の食肉・雑食性昆虫が13.3%(4点)、その他不明甲虫が6.7%(2点)、水生の食肉性昆虫が3.3%(1点)であった。

主な出現種を見ると、先に述べた試料1および7と同じくヒメコガネ(14点)の出土が多かったのをはじめ、クワやコウゾの葉を食べるクワハムシ *Fleutiauxia armata*(3点)も含まれた。全体として人里周辺に生息する食植性昆虫の出土が多かったが、ミズナラやカエデ類の葉を食べる山地性のツノアオカメムシ *Pentatoma japonica*(2点)も出土した。

・不明遺構

(試料4: 08B区081SX)

081SXの下層部分(番号1～2)からは、合計86点の昆虫化石が認められた。時期はいずれも14世紀前後のものである。出土した昆虫化石の食性・生息環境別出現率についてみると、陸生の食植性昆虫69.8%(60点)の出現率が最も高く、続いて水生昆虫が61.5%(9点)、地表性の食肉・雑食性昆虫が9.4%(8点)、食糞・食屍性昆虫が9.4%(8点)、その他不明甲虫が0.9%(2点)

表 6 長野北浦遺跡から出土した昆虫化石

生 態		和 名	学 名	試料1			試料4		試料5		試料7			
				07Ba区0152SD			08B区081SX		08C区北壁セクション		08C区北103SD		08C区北106SD	
				6	7	8	1	2	3	4(下)	1	2	3	4
水生	食 肉 性	オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> Modeer		E1									
		ガムシ科	Hydrophilidae				P3 E1 L3	P1 T1						
	食 植 性	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky											
		セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)								E1			
地表性	食 糞 性	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.		P1		T1							E1
		コブマルエンマコガネ	<i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse		P1									
		マグソコガネ属	<i>Aphodius</i> sp.	E1 L1	E3 A1 L3		P1 E2 A1	T1						
		マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)									E1 A1		
		エンマムシ科	Histeridae		L1		E2							
	食肉・ 雑食性	オサムシ科	Carabidae	T1 L1	E3		L1	E1		O1	E1	E8 A5		
		トックリゴミムシ属	<i>Lachnocrepis</i> sp.				E1						H1 E1	
		オオゴミムシ	<i>Lesticus magnus</i> (Motschulsky)								P1			
		ゴミムシ科	Harpalidae				E1				E2			
		ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.											
		アオゴミムシ属	<i>Chlaenius</i> sp.		E2									
		ツヤヒラタゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.											
		ハネカクシ科	Staphylinidae		P2		H1 P2 E1							
陸 生	食 植 性	コガネムシ科	Scarabaeidae								H1 A2		H2	
		サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.		P3 E3 A1	A2	E2 A1							
		ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	P3 E38 T2 L6	P6 E40 A4 L2 O1	H1 E1	H1 P15 E4 T2 A10 L5	P6 E2 T1 L4 O1	E1	S1	E3 L4 L3	H4 P1 E5 L4	E2 L2	H1 E2 L1 O1
		カミキリムシ科	Cerambycidae		T2									
		ハムシ科	Chrysomelidae		E1		E4 T1				E2			E1
		クワハムシ	<i>Fleutiauxia armata</i> Baly											
		ゾウムシ科	Curculionidae		E2									
		ツノアオカメムシ	<i>Pentatoma japonica</i> Distant											
その他	不明甲虫	Coleoptera		T1 L1 O2		A1 L1			E1		L1			
合 計				53	90	4	68	18	1	3	20	30	8	7

生態		和名	学名	試料7						試料8			合計
				08C区106BSD						08D区035SD		08D区036SD	
				5	6	7	9	10	12	1		3	
水生	食肉性	オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> Modeer									E1	2
	食植性	ガムシ科	Hydrophilidae										12
		ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky				E1						
地表性	食糞性	セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)				E1						32
		エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.				H1						
		コブマルエンマコガネ	<i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse										
		マグソコガネ属	<i>Aphodius</i> sp.				P1 E1		E1		E1		
	食屍性	マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)		E1								4
		エンマムシ科	Histeridae		E1								
	食肉・雑食性	オサムシ科	Carabidae	A1 L1		A1				E1		L2	49
			トックリゴミムシ属	<i>Lachnocrepis</i> sp.		E2							
			オオゴミムシ	<i>Lesticus magnus</i> (Motschulsky)									
			ゴミムシ科	Harpalidae									
ミズギワゴミムシ属			<i>Bembidion</i> sp.				E1						
アオゴミムシ属			<i>Chlaenius</i> sp.										
ツヤヒラタゴミムシ属			<i>Synuchus</i> sp.										
陸生	食植性	ハネカクシ科	Staphylinidae						P1			333	
		コガネムシ科	Scarabaeidae	E1									
		サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	A1							L1		
		ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	H2 P2 E18 A2 L11	H1 E3 L4		E3	H1	P4 E1	H1 P2 E7 L1	L1 L2		
		カミキリムシ科	Cerambycidae										
		ハムシ科	Chrysomelidae	P1 E1	E1						E1		
		クワハムシ	<i>Fleutiauxia armata</i> Baly								H2 E1		
		ゾウムシ科	Curculionidae	L1									
		ツノアオカメムシ	<i>Pentatoma japonica</i> Distant							H2			
その他	不明甲虫	Coleoptera								H1 E1	11		
合計			42	13	1	9	1	5	14	3	13	443	

(検出部位凡例)

H(Head):頭部 An(Antenna):触角 M(Mandible):大腮 S(Scutellum):小楯板 P(Pronotum):前胸背板 C(Chrysalis):蛹

E(Elytron):鞘翅 W(Wing):上翅 T(Thorax):胸部 A(Abdomen):腹部 L(Leg):腿脛節 O(Others):その他

であった。区画溝の試料と同様にヒメコガネ(51点)を中心として、サクラコガネ属(3点)やハムシ科(5点)など食植性昆虫の出土が多かった。地表性歩行虫についてはエンマコガネ属(1点)やマグソコガネ属(5点)・エンムシ科(2点)など地表性の食糞・食屍性の昆虫、オサムシ科(2点)など食肉・雑食性昆虫の昆虫が認められた。水生昆虫についてはガムシ科 Hydrophilidae(9点)が認められた。

・北東部北壁中央セクション地層

(試料5:08C区ST)

東壁に古代(12世紀頃)の地層からは合計4点の昆虫化石が見つかったのみであった。見つかったのは、ヒメコガネ(1点)・オサムシ科(2点)・不明甲虫(1点)である。

まとめ

今回、長野北浦遺跡で行った分析の結果、合計443点の昆虫化石を得た。13世紀頃の正方位区画溝の3試料(試料1・7・8)と14世紀前後の不明遺構081SX(試料4)から多くの昆虫化石が認められた。正方位区画溝からは、ヒメコガネをはじめとする食植性の人里昆虫が

多く認められた。長野北浦遺跡の13世紀頃の方形区画溝周辺は、畑作物や果樹などの植物が植栽された人家の近くや村はずれの草地・林縁のような場所であったことが推定できる。一方、不明遺構081SXでは区画溝と同様に食植性の人里昆虫が多く認められたほか、水生・湿地性の昆虫も認められた。081SXとその周辺に浅い水域が存在していた可能性が指摘できる。

引用文献一覧

- 奥野絵美・蔭山誠一 2010「中世下津を考える(その2)-自然科学的古環境解析とその評価-」『愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要』11、pp. 66-67。
蔭山誠一 2010「(4)植物化石 中世下津を考える(その2)-自然科学的古環境解析とその評価-」『愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要』11、pp. 61-72。
日本応用動物昆虫学会編 1987『農林有害動物・昆虫図鑑』日本植物防疫協会、379p。
森 勇一 1994「昆虫化石による先史～歴史時代における古環境変遷の復元」『第四紀研究』33、pp.331-349。
森 勇一 1996「稲作農耕と昆虫」『季刊考古学』56、pp.59-63。
森 勇一 1998「勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と

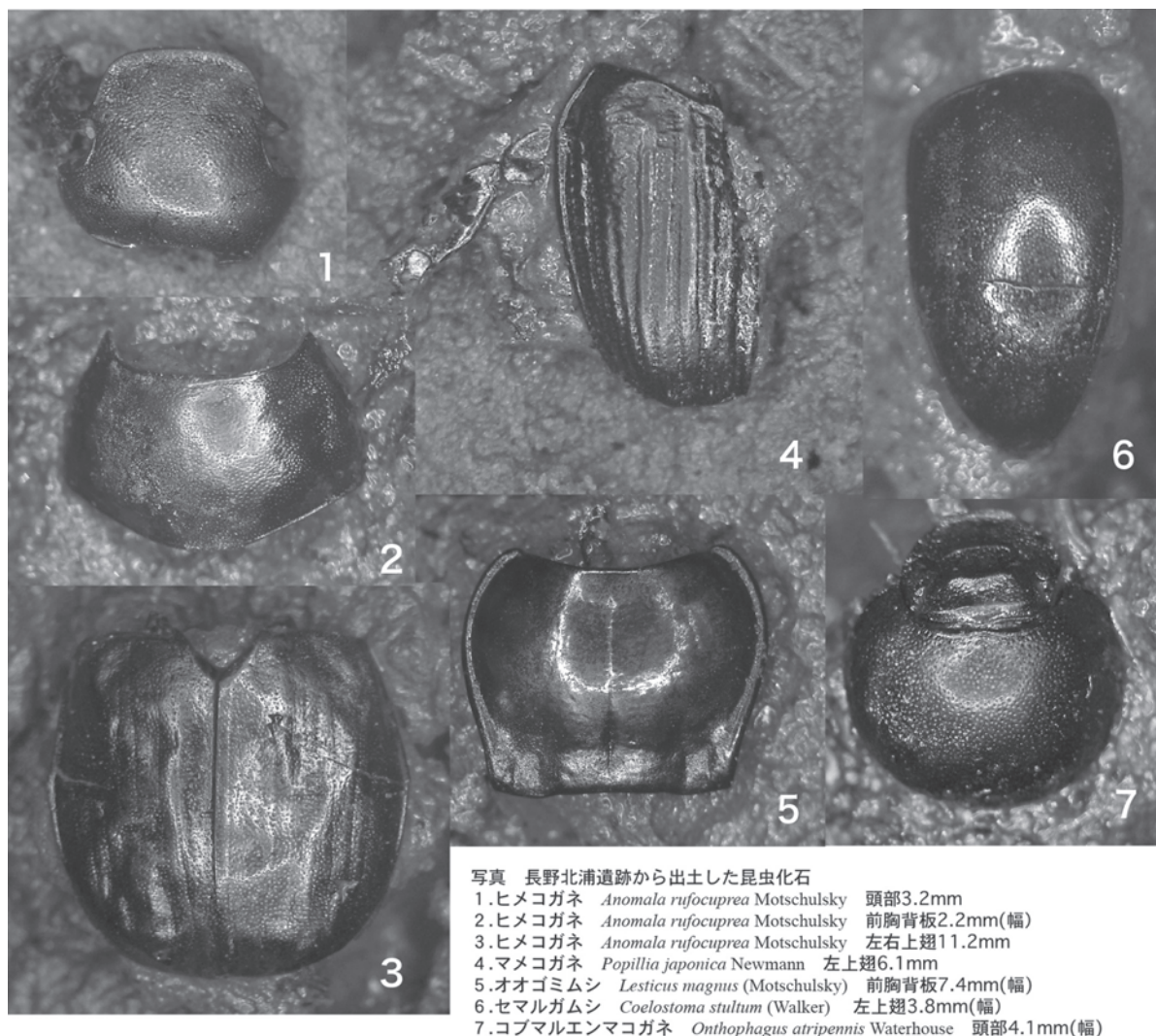


図 408 長野北浦遺跡から出土した昆虫化石

古環境」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報』pp.118-137。

森 勇一 2010 「時代を彩った昆虫たち」『坪井清足先生卒寿記念論文集 - 埋文行政と研究のはざままで -』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会、pp.365-371。

樋上 昇 2008 「長野北浦遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター平成19年度年報』pp.18-23。

謝辞

本遺跡の試料の採取・分析に際しましては、愛知県埋蔵文化財センターの蔭山誠一氏に大変お世話になりました。なお、本稿は蔭山氏との共同執筆である 奥野絵美・蔭山誠一 2010 「中世下津を考える (その 2)- 自然科学的古環境解析とその評価 -」『愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要』11、pp. 61-72 を改訂したものです。平面図・断面図につきましては、蔭山氏作成のものを使用させて頂きました。

また本稿を執筆するにあたりましては、愛知県埋蔵文化財センターの石黒立人氏に多くのご助言を頂きました。心より御礼申し上げます。

(奥野絵美 愛知県埋蔵文化財調査センター)

2. 長野北浦・塔の越遺跡の地下層序と表層地形解析

はじめに

長野北浦・塔の越遺跡の地形・地質環境を調べるため表層地形解析から現在の地形情報を、また各調査区にて実施した深掘および試錐調査によって地下層序を観察する機会を得た。それらの結果から新たな知見を得たので報告する。

(1) 試料および分析方法

調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。作成には愛知県稲沢市発行の「稲沢市都市計画基本図(1/2500)」にプロットされた標高値を用いた。都市計画基本図には平成7年(1995年)7月に撮影された空中写真により修正されたとの記載がある。

地下層序解析のため、各調査区において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し地層断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。10地点の層序断面から放射性炭素年代測定用試料を採取した。

試錐調査は2008年(平成20年)に2地点で実施した。塔の越遺跡08Aa区では株式会社東海環境エンジニアに、塔の越遺跡08Hc区では応用地質株式会社に依頼し、ロータリー式オイルフィールド・ボーリングマシンを用いてオールコアで実施した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析(AMS)法により測定を行なった。加速器質量分析法は125 μ mの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製1.5SDH)にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: INTCAL04)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して産出された放射性炭素年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。測定は株式会社パレオ・ラボ(Code No.; PLD)に依頼した。

(2) 分析結果

遺跡周辺の等高線図

東西約4.0km、南北約2.3kmの範囲全体では等高線間隔0.2mで標高3.2mから標高6.8mまでの等高線が描かれ、解析範囲全体では北東方向で標高が相対的に高く、南側で低い傾向がある(図409・410)。解析範囲の現在の状況は、中央部を大江川が北から南へ軽微な蛇行をしながら流れており、北東方向に青木川が南流する。図の西には名古屋鉄道名古屋本線が、東には東海道本線が通る。

標高がもっとも高いのは北の稲沢市下津牛洗町に標高7.0mが見られ、本地点も含めて北東の一宮市丹陽町九日市場にかけて標高6.0mを超えるところが認められる。いっぽう、標高のもっとも低いのは南の稲沢市高御堂町から長束町にかけて標高3.5m以下の低い地域が広がる。

さらに詳しく地形要素をみても、図の中央部には北から南へ大江川が流れているが、この流路から西へ約150m隔たったところを、現在の大江川に並行に谷地形が認められる。谷地形を挟みその両側には尾根状に標高の高いところが並ぶ。大江川の西側(右岸側)では北の稲沢市稲島町から稲島東にかけて標高5.4~5.8mで南北方向に約800mの尾根地形がみられる。さらにその南には国府宮町から高御堂町までの標高4.4~6.0mに、南北の距離約1.5kmで標高の高いところがある。特に国府宮町において、標高5.4~6.0mまでの閉曲線で囲まれた周りから独立した孤立丘のように凸地形がみられる。

いっぽう、大江川の流路の東側(左岸側)にも尾根状地形がみられる。北の稲沢市治郎丸高須町付近には標高5.2~6.2mで南北の距離約700mの尾根地形が認められる。さらに南の治郎丸天神町から正明寺までの標高5.2~6.6mに距離約1kmの尾根状の地形がみられる。これら大江川の東に認められる尾根地形には幅約100mを超えない谷地形が刻まれている。治郎丸天神町に隣接した治郎丸柳町付近には標高4.6~5.0mの谷地形が北側に開口している。また、治郎丸天神町の東から現在の東海道本線の通る長野町には谷幅約700m以上の大きな谷地形がみられる。調査区はこの大きな谷地形がはじ

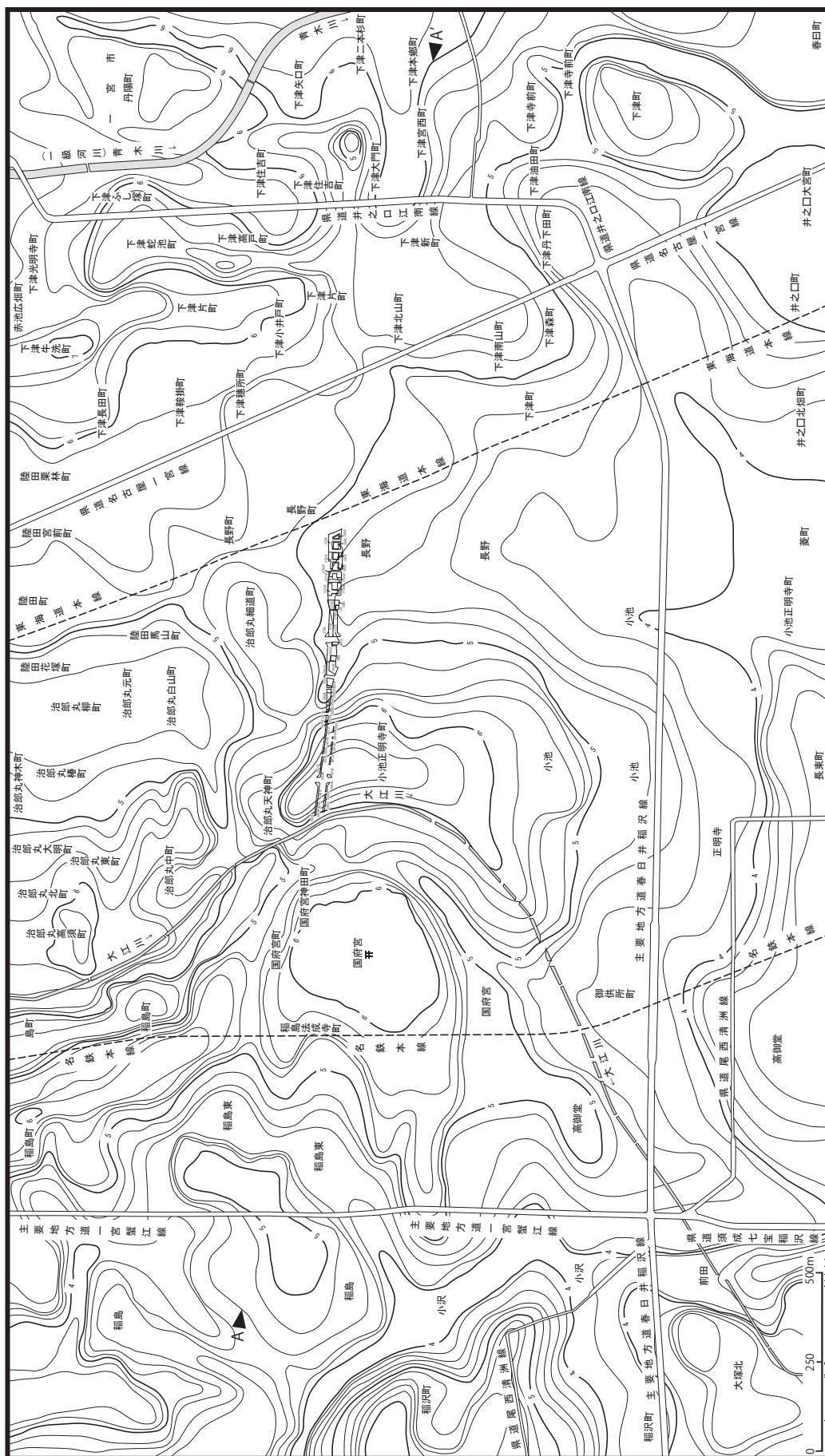


図 409 長野北浦・塔の越遺跡周辺の表層地形と等高線図
図の中央に調査区も配置

図の中央に調査区も配置

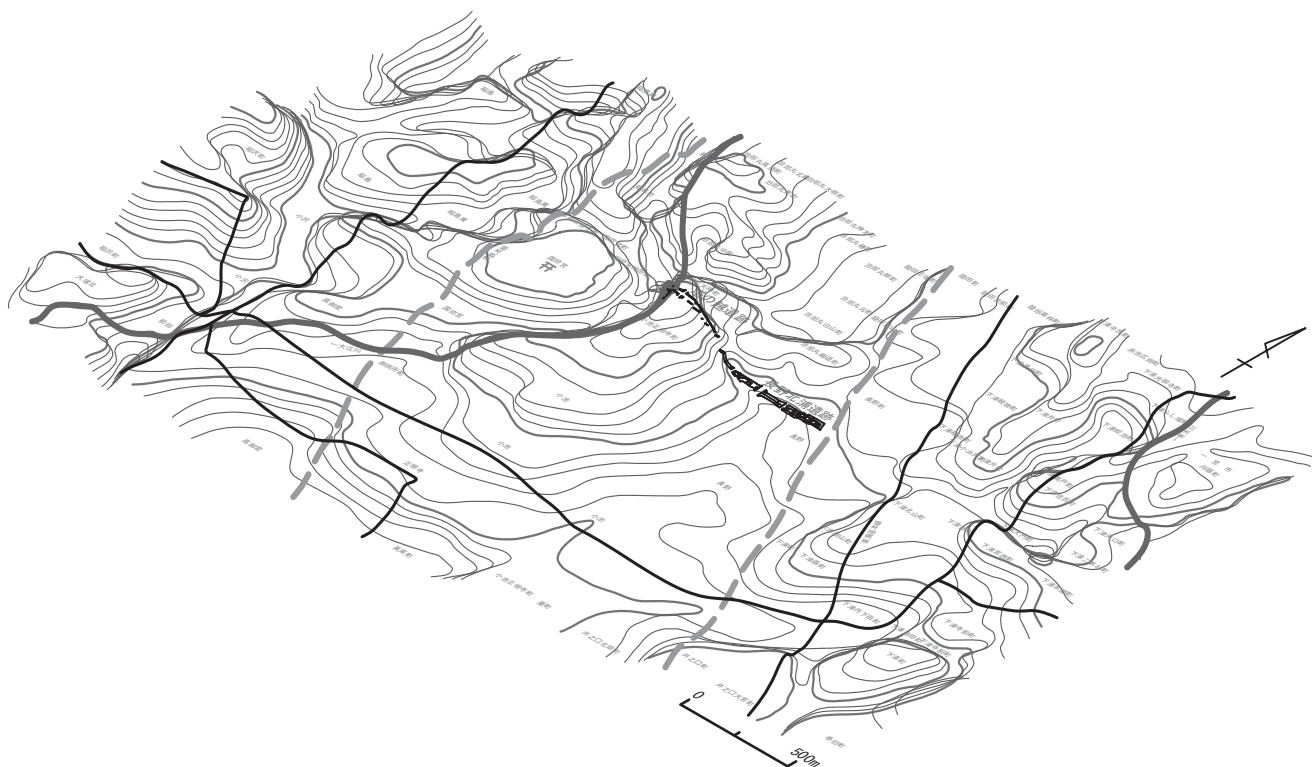


図 410 表層地形等高線図を基にした鳥瞰図
水平方向に対して垂直方向を 100 倍に強調して、図の中央に調査区を配置

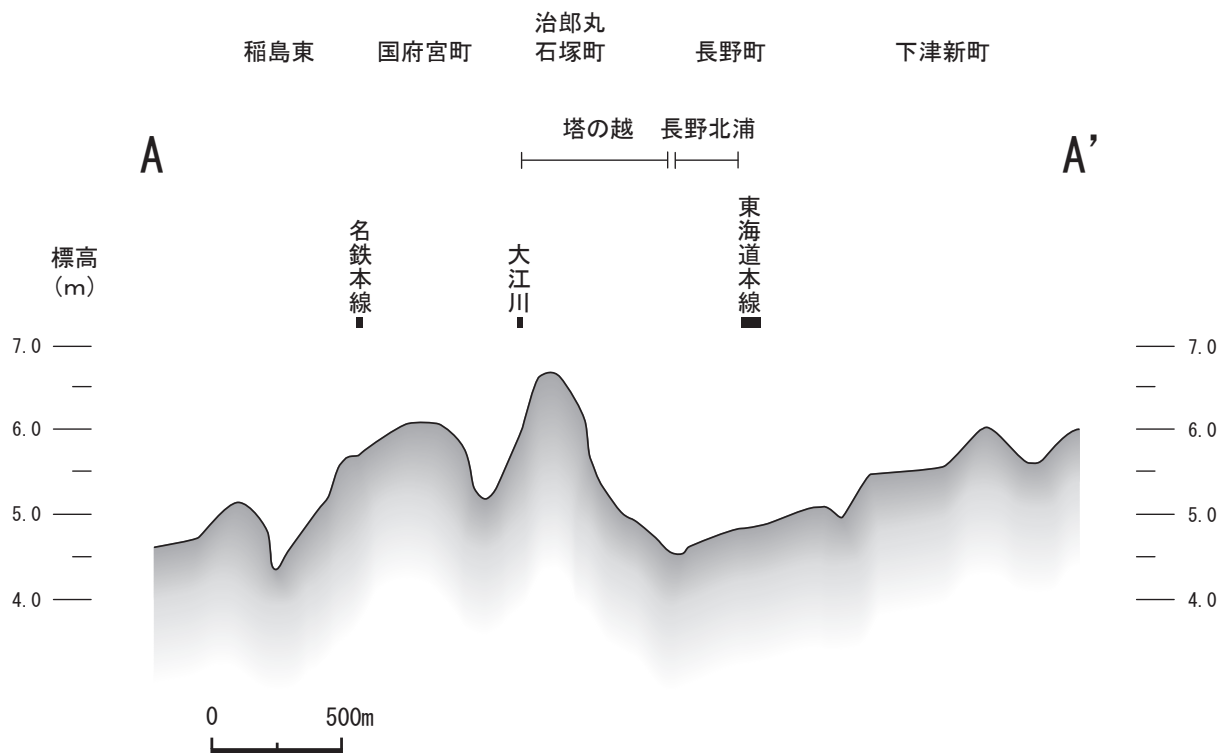


図 411 調査範囲を通る東西地形断面図
作成地点は図 409 を参照、水平距離に対して垂直方向を強調

まる谷頭と、大江川の東に認められた治郎丸天神町から正明寺にかけてみられた尾根地形までの起伏の変化が大きな範囲にまたがっている。

深掘層序

東西の総延長約 800m の各調査区でバックホーによる掘削（10 地点）を実施しているが、それらのうち主要な 5 地点の深掘層序断面を示す（図 412）。各地点の層序の特徴を西側から順にまとめて以下に述べる。

調査区西側の地点 1（塔の越 08E 区）では深度約 4m の深掘断面を得た。下位層より標高 2.20 ～ 3.80m は細粒砂層からなる。褐色粘土層のブロックをレンズ状に挟む。標高 2.20m と標高 2.50m から木材片を採取し放射性炭素年代測定用の試料とした。標高 3.80 ～ 4.60m は極細粒砂の混じるシルト質粘土層である。標高 4.60 ～ 5.15m は褐色のシルト質粘土層からなり、本層の標高約 5.0m 付近が検出面である。標高 5.15 ～ 5.85m は褐色粘土層である。標高 5.85 ～ 6.25m は灰褐色のシルト質粘土層で、本層の頂部が現在の地表面となる。

地点 4（塔の越 07A 区）では深度約 4.4m の深掘断面を得た。下位層より標高 1.27 ～ 2.26m は淘汰良好な中粒砂層からなり、標高 1.28m で放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 2.26 ～ 2.36m は青灰色粘土層で、本層下底の標高 2.27m にて放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 2.36 ～ 2.46m は青灰色シルト層で、本層下底の標高 2.37m にて放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 2.46 ～ 2.76m は黒褐色粘土層からなり、本層下底の標高 2.47m と、上部の標高 2.75m から放射性炭素年代測定用の試料を採取した。標高 2.76 ～ 3.16m は緑灰色粘土層で、中央部の標高 2.96m に層厚約 1cm の炭化物質を含んだ黒褐色粘土層がレンズ状にみられ、放射性炭素年代測定用試料として採取した。標高 3.16 ～ 3.66m は淘汰良好な中粒砂層である。標高 3.66 ～ 4.67m は褐色粘土質シルト層で、本層の頂部が検出面である。標高 4.67 ～ 5.16m は褐色の粘土質シルト層、標高 5.16 ～ 5.66m は現代のかく乱層である。

地点 6（塔の越 07B 区）では深度約 4.8m の深掘断面を得た。下位層より標高 0.06 ～ 1.66m は淘汰良好な粗粒砂層からなる。本層の最上部はシルト成分が混じり、ヨシ属などの草本植物の茎部分が層理に対して垂直に多くみられる。本層の下部標高 0.06m で木材片を、本層最上部の標高 1.58m で草本植物を年代測定用試料として採取した。標高 1.66 ～ 1.86m は灰色粘土層で、本層下部の標高 1.67m で草本植物を年代測定用試料と

して採取した。標高 1.86 ～ 2.20m は黒褐色粘土層で、標高 1.88m から種実を採取し、年代測定の試料とした。標高 2.20 ～ 2.58m は灰色粘土層、標高 2.58 ～ 2.71m は黒褐色粘土層からなり、黒褐色粘土層の下部、標高 2.60m から種実を採取した。標高 2.71 ～ 3.11m は灰色粘土層、標高 3.11 ～ 3.37m は褐灰色粘土層で、褐灰色粘土層の下部、標高 3.12m から種実を採取した。標高 3.37 ～ 3.62m は褐色の砂質シルト層である。標高 3.62 ～ 4.12m は中粒砂層からなり、全体に塊状で堆積構造はみられない。標高 4.12 ～ 4.34m は褐色粘土層であり、本層の頂部が検出面となる。標高 4.34 ～ 4.66m は褐色シルト層、標高 4.66 ～ 4.88m は暗灰褐色シルト層で本層の頂部が地表面である。

地点 9（長野北浦 07D 区）では深度約 4.9m の深掘断面を得た。下位層より標高 0.56 ～ 0.76m は淘汰良好な極細粒砂層からなる。なお、本層は標高 -1.24m まで連続することを確認している。標高 0.76 ～ 1.76m は褐色粘土層である。標高 1.76 ～ 2.16m は淡褐色粘土層からなり、本層の下部、標高 1.78m より草本植物を採取し年代測定用試料とした。標高 2.16 ～ 2.26m は褐色粘土層である。標高 2.26 ～ 2.43m は黒褐色粘土層で、本層の下部、標高 2.28m より種実を採取した。標高 2.43 ～ 2.78m は青灰色粘土層である。標高 2.78 ～ 3.23m は黒褐色粘土層と灰色粘土層との互層からなり、本層最上部（標高 3.22m）に含まれる炭化した木材片を年代測定用の試料とした。標高 3.23 ～ 3.73m はシルト質極細粒砂層である。標高 3.73 ～ 4.06m は褐色を呈するシルト質な中粒砂～粗粒砂層からなり、本層の頂部標高 4.06m が古代の検出面である。標高 4.06 ～ 4.60m は赤褐色粘土層、標高 4.60 ～ 4.85m は暗灰色粘土質シルト層である。標高 4.85 ～ 5.50m は現代の盛り土であった。

地点 10（長野北浦 07A 区）では深度約 3.9m の深掘断面を得た。下位層より標高 1.90 ～ 2.40m は淘汰良好な粗粒砂層であった。標高 2.40 ～ 2.50m は黒褐色粘土層で、本層の下部標高 2.41m から草本植物を採取した。標高 2.50 ～ 3.10m は灰色粘土層、標高 3.10 ～ 3.30m はシルト質砂層からなる。標高 3.30 ～ 4.20m はシルト質細粒砂層からなり、砂成分が優勢である。本層の頂部標高 4.20m が検出面となる。標高 4.20 ～ 5.30m はシルト質粘土層、標高 5.30 ～ 5.80m は現代の盛り土であった。

試錐層序

調査範囲のもっとも西端にある塔の越 08Hc 区の西側

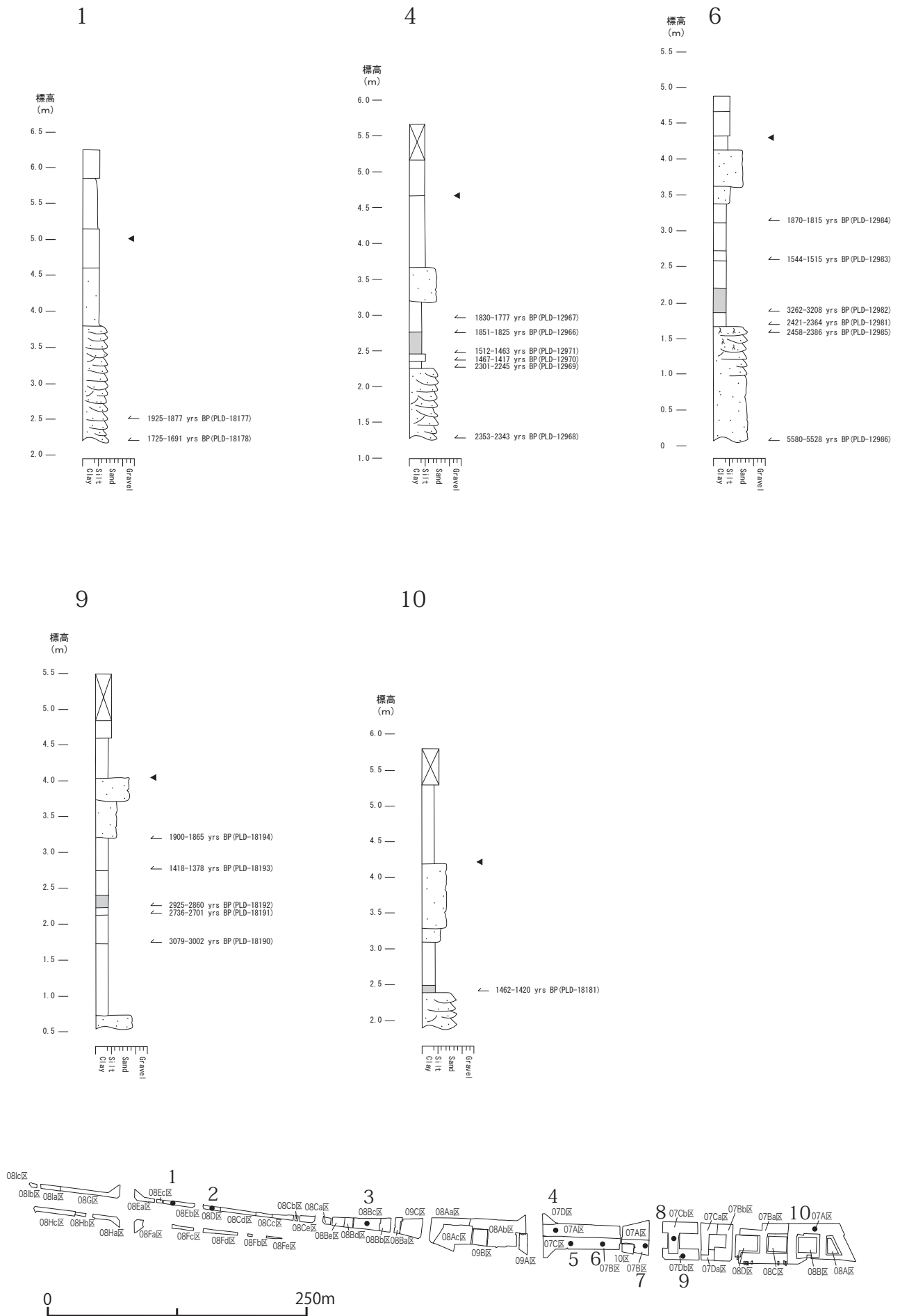
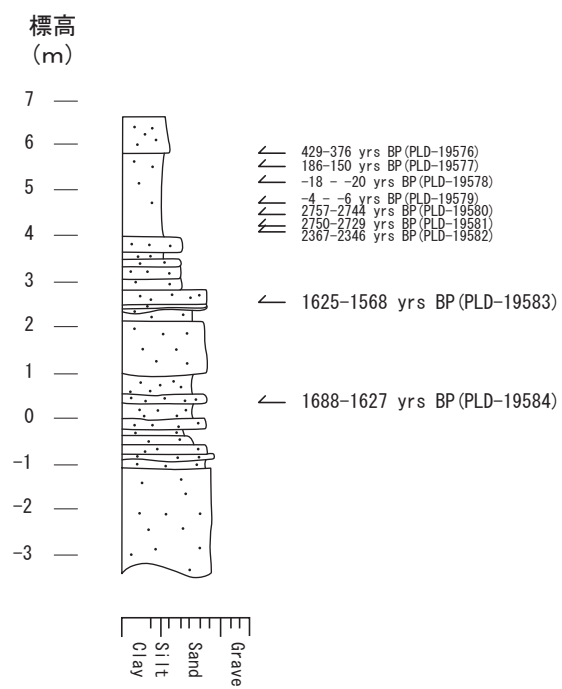


図 412 長野北浦・塔の越遺跡における深掘層序断面図
各柱状図右横の黒色三角形は検出層準を示す

TK1



TK2

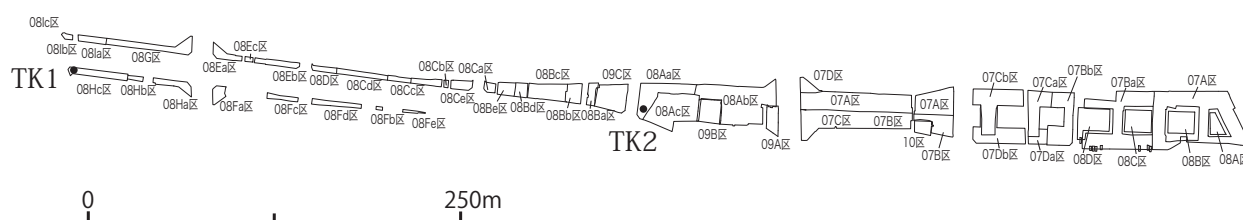
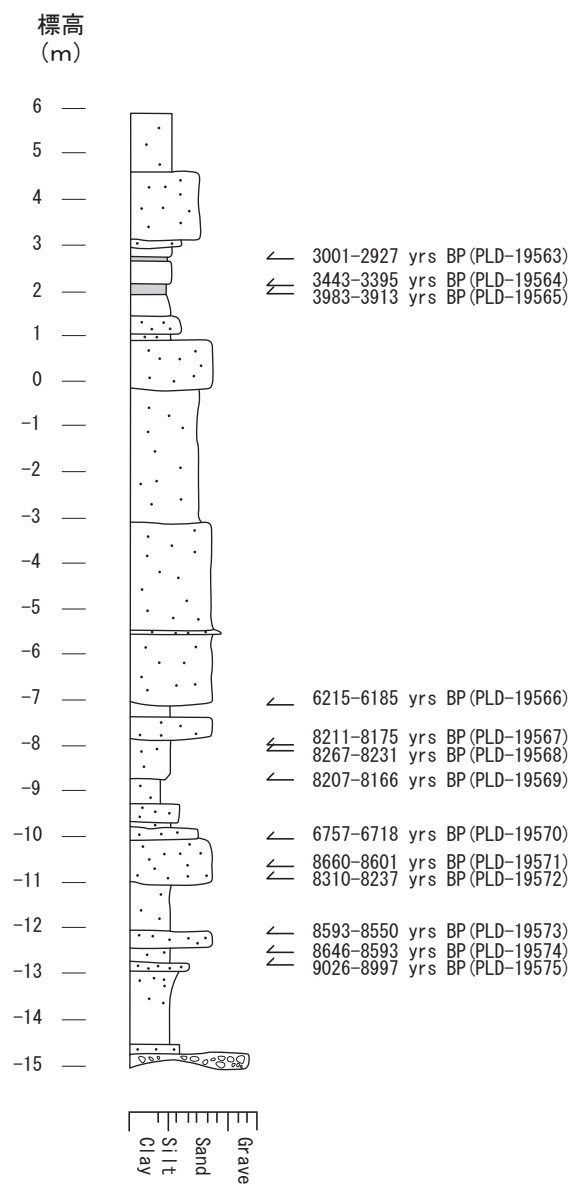


図 413 長野北浦・塔の越遺跡における試錐柱状図

にて、発掘調査終了後に地表（標高 6.64m）から深度約 8m の試錐資料（TK1）を得た（図 413）。地層は全体に砂勝ちで、標高 4m を境にして砂層が卓越する層相とシルト層が卓越する層相とに分けられる。下位層より記載する。標高 -3.36 ～ -1.06m は淘汰良好な極細粒砂層からなり、本砂層の上を層厚 5cm から 40cm ほどの中粒砂～極粗粒砂サイズの砂層が覆う。標高 -0.01 ～ 0.34m にみられる中粒砂層の標高 0.33m からは年代測定用の試料を採取した。また、標高 2.48 ～ 2.58m の淘汰良好な粗粒砂層の標高 2.50m からも年代測定用の試料を採取した。標高 4.00 ～ 5.04m は砂質シルト層からなり、本層からは 7 点の年代測定用の試料を得た。

塔の越 08A 区の南端において地表（標高 5.93m）から深度約 20m の試錐資料（TK2）を得た（図 3）。地層全体は層相から大きく 5 つのユニットに区別される。下位のユニットより、ユニット 1 は標高 -15.07 ～ 14.77m でみられる黄褐色の大礫層からなる。基質はシルトからなり、淘汰は悪い。角礫から円礫までの円磨度がみられ、礫種として濃飛流紋岩がほとんどを占める。ユニット 2 は標高 -14.77 ～ -7.07m の層厚約 1m の砂層と同じく層厚 1m 程度の砂質シルト層との互層からなる。明瞭な層界面をもっており、シルト層や粘土層より 10 点の年代測定用の試料を採取した。ユニット 3 は標高 -7.07 ～ 0.93m の極粗粒砂から中粒砂サイズの、層厚 0.5m から 2.5m までさまざまな層厚をもつ淘汰良好な砂層が堆積する。ユニット 4 は標高 0.93 ～ 2.98m にみられ、層厚約 0.5m の暗灰黄色シルト層と、層厚 5cm から 25cm ほどの黒褐色を呈する粘土層との互層からなる。黒褐色粘土層で年代測定用の試料を 3 試料採取した。ユニット 5 は標高 2.98 ～ 5.93m でみられる、層厚約 1.5m の中粒砂層と同じく層厚約 1.5m の砂質シルト層からなり、全体に砂勝ちの地層からなる。

放射性炭素年代測定

深掘に伴う各地点で合計 47 試料の放射性炭素年代測定値を得た（表 7・表 8）。年代測定値が負の値となる試料を除くと、古い値では地点 6（塔の越 07B 区）の標高 0.06m にて粗粒砂層中から採取した木材片から 5580-5528 cal yrs BP (PLD-12986) の値を得た。また全体では概ね下位層より上位層にかけて約 3000 年前代、1800 年前代、1500 年前代の値がまとまってみられた。

2 地点のボーリングコア資料において各層準から合計 22 試料の放射性炭素年代測定値を得た（表 9・表 10）。古い値について、TK2 コアでは深度約 20m まで掘削をしているため古い値がみられ、標高 -12.90 ～ -12.73m の細粒砂層から採取した植物遺体（標高 -12.79m）が

9026-8997 cal yrs BP(PLD-19575) と約 9000 年前代を示した。また、標高 -12 ～ -7m までで得られた試料はおよそ 8000 年前から 6000 年前代の値であった。いっぽう、新しい値では、TK2 コアの標高 2 ～ 3m に認められる黒褐色粘土層から採取した試料は 3000 年前代の値を示したが、TK1 コアではさらに新しく、標高 -0.01 ～ 0.34m の中粒砂層から採取した植物遺体（標高 0.33m）が 1688-1627 cal yrs BP(PLD-19584)、標高 2.48 ～ 2.58m の粗粒砂層から採取した植物遺体（標高 2.56m）が 1625-1568 cal yrs BP(PLD-19583) と約 1600 年前代の値であった。

(3) 長野北浦・塔之越遺跡の立地環境

表層地形解析により、解析範囲中央部を流れる現在の大江川の流路から、西に約 150m 隔たったところに、流路に並行に谷状地形が連続した。これはかつての流路跡であり、古大江川がかつては現在よりも西を流下していたことを示すものである。また、大江川の流路の両脇に認められた尾根地形は自然堤防地形である。現在の大江川は北から南へ流下する間に、解析範囲においてちょうど調査範囲付近で東方向へ凸状にふくらんで屈曲している。この屈曲の特徴から流路の西側（右岸側）にみられる、国府宮町付近に頂部のある閉曲線からなる標高の高い場所は滑走斜面ととらえられる。対して、流路の東（左岸側）は河川流路の攻撃斜面側にあたる。一般に、攻撃斜面側は大きな洪水の際に流路からあふれ出た水が碎屑物を含みながら流下し、堆積物を累積させていく。治郎丸天神町から正明寺にみられた尾根地形がまさにそれであり、典型的な自然堤防であると言える。なお、先に述べたように河川流路の攻撃斜面は碎屑物の堆積の場であるとともに、洪水時には流路からあふれ出た水の通り道となりやすい場所でもある。治郎丸高須町でみられた標高の高いところと、治郎丸天神町から正明寺までの高まりとの間には、治郎丸柳町へ通じる谷地形が認められたり、長野町に広がる大きな谷地形の谷頭が治郎丸細道町へ向かっており、これらの谷地形はかつてあふれ出した水の通り道であった可能性がある。ここで表層地形解析の結果と東西断面図（図 411）とを参考にして各調査区の地形的な特徴を記すと、塔の越遺跡は大江川の東側につくられた自然堤防の、頂部付近の標高の高い場所から次第に標高を減じつつ、谷地形へと移り変わっていく場所であり、塔の越 07A 区、塔の越 07B 区、塔の越 10 区、長野北浦 07Cb 区、長野北浦 07Db 区が谷の深部にあたっている。また、長野北浦 07Cb 区、長野北浦 07Db 区よりもさらに東に位置する調査区は、谷の深部から再び標高が高くなっていく場所にあたる。このように、表層地形解析の結果から長野北浦・塔之越遺

表 7 深掘層序の放射性炭素年代測定結果 (1)

地点	遺跡名	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	暦年代較正值 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
1	塔の越	08Eb	2.20	褐色粘土混じり細粒砂層	生材	1780 \pm 20	-28.72 \pm 0.13	1778 \pm 19	1725-1691 (42.8%)	PLD-18178 (AMS)
	塔の越	08Eb	2.50	褐色粘土混じり細粒砂層	生材	1950 \pm 20	-25.00 \pm 0.11	1951 \pm 19	1655-1628 (25.4%)	PLD-18177 (AMS)
2	塔の越	08D	1.92	灰色粘土層	生材	1830 \pm 20	-22.96 \pm 0.11	1830 \pm 19	1925-1877 (68.2%)	PLD-12999 (AMS)
	塔の越	08D	1.92	灰色粘土層	生材	1825 \pm 15	-24.80 \pm 0.13	1825 \pm 17	1813-1733 (68.2%)	PLD-13000 (AMS)
3	塔の越	08D	4.30	褐色シルト質砂層	生の葉	-210 \pm 15	-28.89 \pm 0.12	-211 \pm 15	1784-1753 (30.2%)	PLD-12998 (AMS)
	塔の越	08Bc	3.58	灰色～黒灰色粘土層	炭化材	2070 \pm 20	-23.15 \pm 0.11	2069 \pm 19	1812-1792 (19.3%)	PLD-12998 (AMS)
3	塔の越	08Bc	3.58	灰色～黒灰色粘土層	生の草本	3005 \pm 20	-24.51 \pm 0.17	3006 \pm 20	1743-1724 (18.8%)	PLD-12998 (AMS)
	塔の越	08Bc	3.99	灰褐色粘土層	生の植物遺体	2870 \pm 20	-27.39 \pm 0.19	2872 \pm 21	Bomb04NH2:-5 (68.2%)	PLD-12998 (AMS)
3	塔の越	08Bc	4.26	灰褐色シルト層	生の植物遺体	2975 \pm 30	-24.55 \pm 0.19	2974 \pm 32	2060-1994 (68.2%)	PLD-18173 (AMS)
	塔の越	08Bc	4.26	灰褐色シルト層	生の植物遺体	2975 \pm 30	-24.55 \pm 0.19	2974 \pm 32	3256-3203 (46.5%)	PLD-18176 (AMS)
4	塔の越	07A	1.28	中粒砂層	生の草本	2345 \pm 20	-26.65 \pm 0.12	2343 \pm 18	3188-3163 (21.7%)	PLD-18174 (AMS)
	塔の越	07A	2.27	青灰色粘土層	生の草本	2185 \pm 15	-27.46 \pm 0.15	2187 \pm 16	3006-2956 (50.5%)	PLD-18174 (AMS)
4	塔の越	07A	2.37	青灰色シルト層	生の草本	1580 \pm 15	-27.49 \pm 0.13	1581 \pm 16	3033-3013 (12.1%)	PLD-18175 (AMS)
	塔の越	07A	2.47	黒褐色粘土層	生の草本	1550 \pm 15	-27.45 \pm 0.17	1549 \pm 16	3060-3051 (5.7%)	PLD-18175 (AMS)
4	塔の越	07A	2.76	黒褐色粘土層	炭化植物遺体	1900 \pm 15	-26.07 \pm 0.14	1900 \pm 17	3212-3138 (46.0%)	PLD-18175 (AMS)
	塔の越	07A	2.96	緑灰色粘土層	炭化植物遺体	1865 \pm 15	-11.07 \pm 0.16	1865 \pm 16	3130-3105 (13.2%)	PLD-18175 (AMS)
5	塔の越	07C	0.94	最下位粗粒砂層	生の草本	2555 \pm 20	-26.68 \pm 0.15	2554 \pm 18	3095-3079 (9.0%)	PLD-12968 (AMS)
	塔の越	07C	0.94	最下位粗粒砂層	生の草本	2690 \pm 20	-26.38 \pm 0.22	2690 \pm 19	2353-2343 (68.2%)	PLD-12969 (AMS)
5	塔の越	07C	2.56	灰色粘土層	土壌	3420 \pm 20	-26.83 \pm 0.16	3420 \pm 18	2301-2245 (54.7%)	PLD-12969 (AMS)
	塔の越	07C	2.65	黒褐色粘土層	生の草本	1570 \pm 20	-28.99 \pm 0.15	1571 \pm 18	2159-2151 (7.6%)	PLD-12970 (AMS)
5	塔の越	07C	2.70	暗灰色粘土層	生の草本	1740 \pm 15	-28.28 \pm 0.19	1738 \pm 17	2177-2170 (5.9%)	PLD-12970 (AMS)
	塔の越	07C	2.94	暗灰色粘土層	炭化植物遺体	2010 \pm 20	-26.26 \pm 0.11	2012 \pm 19	1467-1417 (47.1%)	PLD-12970 (AMS)
5	塔の越	07C	3.04	明灰色粘土層	生の草本	1455 \pm 15	-26.33 \pm 0.11	1457 \pm 16	1501-1487 (11.6%)	PLD-12971 (AMS)
	塔の越	07C	3.08	灰色粘土層	炭化植物遺体	1905 \pm 15	-24.22 \pm 0.11	1903 \pm 17	1518-1507 (9.5%)	PLD-12971 (AMS)
5	塔の越	07C	3.16	黄灰色粘土層	炭化材	1825 \pm 15	-25.24 \pm 0.13	1824 \pm 17	1512-1463 (48.3%)	PLD-12971 (AMS)
	塔の越	07C	3.26	黄灰色砂質シルト層	炭化材	2705 \pm 25	-26.05 \pm 0.16	2706 \pm 23	1419-1402 (19.9%)	PLD-12971 (AMS)
6	塔の越	07B P-2	0.06	粗粒砂層	生材	4740 \pm 20	-24.41 \pm 0.12	4740 \pm 20	1851-1825 (47.1%)	PLD-12966 (AMS)
	塔の越	07B P-2	1.58	粗粒砂層	生の草本	2410 \pm 15	-27.71 \pm 0.15	2410 \pm 17	1870-1858 (21.1%)	PLD-12967 (AMS)
6	塔の越	07B P-2	1.67	灰色粘土層	生の草本	2425 \pm 15	-27.67 \pm 0.16	2425 \pm 17	1830-1777 (39.8%)	PLD-12967 (AMS)
	塔の越	07B P-2	1.88	黒褐色粘土層	生の種実	3015 \pm 15	-24.49 \pm 0.12	3017 \pm 17	1864-1845 (15.6%)	PLD-12967 (AMS)
6	塔の越	07B P-2	2.60	黒褐色粘土層	生の種実	1620 \pm 15	-28.02 \pm 0.12	1619 \pm 16	1758-1740 (12.8%)	PLD-12967 (AMS)
	塔の越	07B P-2	3.12	褐灰色粘土層	生の種実	1875 \pm 15	-25.66 \pm 0.12	1876 \pm 17	2740-2715 (68.2%)	PLD-12996 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	0.97	粗粒砂層	生の草本	2415 \pm 20	-28.33 \pm 0.20	2414 \pm 20	2791-2759 (65.1%)	PLD-12997 (AMS)
	塔の越	07B P-1	1.98	灰色粘土～砂質シルト層	生の草本	2345 \pm 15	-26.48 \pm 0.11	2343 \pm 16	2836-2833 (3.1%)	PLD-12987 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	2.30	黒褐色粘土層	土壌	3235 \pm 20	-20.08 \pm 0.17	3237 \pm 18	3670-3640 (45.1%)	PLD-12987 (AMS)
	塔の越	07B P-1	2.65	黒褐色粘土層	土壌	2645 \pm 15	-23.57 \pm 0.14	2645 \pm 16	3693-3676 (23.1%)	PLD-12988 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.05	褐灰色粘土層	土壌	2415 \pm 20	-20.26 \pm 0.18	2416 \pm 18	1514-1460 (51.8%)	PLD-12988 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1442-1432 (9.1%)	PLD-12988 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1422-1415 (7.2%)	PLD-12989 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1678-1645 (34.9%)	PLD-12989 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1638-1615 (22.5%)	PLD-12989 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1695-1684 (10.7%)	PLD-12990 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1991-1946 (68.2%)	PLD-12990 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1355-1315 (68.2%)	PLD-12991 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1852-1826 (44.2%)	PLD-12992 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1873-1858 (24.0%)	PLD-12993 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1784-1754 (29.3%)	PLD-12993 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1743-1722 (20.1%)	PLD-12994 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1812-1792 (18.9%)	PLD-12994 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2844-2818 (28.1%)	PLD-12995 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2747-2719 (68.2%)	PLD-12995 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	5580-5528 (50.6%)	PLD-12986 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	5484-5467 (14.8%)	PLD-12986 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	5342-5338 (2.8%)	PLD-12985 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2458-2386 (58.5%)	PLD-12985 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2370-2358 (9.7%)	PLD-12981 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2421-2364 (40.5%)	PLD-12981 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2465-2427 (27.7%)	PLD-12982 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	3262-3208 (59.7%)	PLD-12982 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	3180-3168 (8.5%)	PLD-12983 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1544-1515 (48.5%)	PLD-12983 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1459-1443 (13.5%)	PLD-12984 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1431-1423 (6.2%)	PLD-12984 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1870-1815 (68.2%)	PLD-12984 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2459-2385 (56.5%)	PLD-12980 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2375-2359 (11.7%)	PLD-12975 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2353-2344 (68.2%)	PLD-12975 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	3472-3442 (52.9%)	PLD-12976 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	3424-3410 (15.3%)	PLD-12977 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2763-2749 (68.2%)	PLD-12977 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2459-2385 (56.9%)	PLD-12978 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	2375-2360 (11.3%)	PLD-12979 (AMS)
7	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1851-1826 (38.5%)	PLD-12979 (AMS)
	塔の越	07B P-1	3.21	明褐灰色粘土層	炭化植物遺体	1910 \pm 20	-14.43 \pm 0.13	1909 \pm 18	1878-1860 (29.7%)	PLD-12979 (AMS)

表 8 深掘層序の放射性炭素年代測定結果 (2)

地点	遺跡名	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	暦年代較正值 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
8	長野北浦	07C	1.87	黒褐色粘土層	炭化材	3035 \pm 20	-17.33 \pm 0.13	3035 \pm 19	3265-3217 (46.3%) 3320-3295 (21.9%)	PLD-18182 (AMS)
	長野北浦	07C	20.7	黒褐色粘土層	炭化材	2705 \pm 20	-26.87 \pm 0.13	2707 \pm 20	2800-2769 (39.9%) 2844-2819 (28.3%)	PLD-18183 (AMS)
	長野北浦	07C	3.02	暗褐色粘土層	炭化材	2350 \pm 20	-23.23 \pm 0.17	2351 \pm 19	2355-2343 (68.2%)	PLD-18184 (AMS)
	長野北浦	07C			炭化材	3025 \pm 20	-26.89 \pm 0.16	3025 \pm 20	3265-3210 (52.5%) 3320-3295 (15.7%)	PLD-18185 (AMS)
9	長野北浦	07D P-2	1.78	淡褐色粘土層	生の草本	2920 \pm 20	-26.90 \pm 0.12	2918 \pm 20	3079-3002 (57.9%) 3105-3095 (6.1%) 3137-3130 (4.2%)	PLD-18190 (AMS)
	長野北浦	07D P-2	2.17	褐色粘土層	生の草本	2530 \pm 20	-28.93 \pm 0.17	2532 \pm 20	2736-2701 (34.1%) 2635-2616 (20.0%) 2561-2545 (10.8%) 2581-2575 (3.4%)	PLD-18191 (AMS)
	長野北浦	07D P-2	2.28	黒褐色粘土層	生の種実	2795 \pm 20	-26.13 \pm 0.11	2794 \pm 20	2925-2860 (68.2%)	PLD-18192 (AMS)
	長野北浦	07D P-2	2.80	黒褐色粘土層と灰色粘土層との互層	生の草本	1530 \pm 20	-27.69 \pm 0.12	1532 \pm 21	1418-1378 (48.6%)	PLD-18193 (AMS)
	長野北浦	07D P-2	3.22	黒褐色粘土層と灰色粘土層との互層	炭化材	1935 \pm 20	-14.31 \pm 0.19	1934 \pm 20	1489-1467 (14.8%) 1508-1499 (4.8%)	PLD-18194 (AMS)
									1900-1865 (54.1%)	
									1922-1912 (9.8%) 1841-1835 (4.3%)	
									1462-1420 (36.2%) 1539-1513 (32.0%)	
	長野北浦	07A P-2	2.41	黒褐色粘土層	生の草本	1610 \pm 20	-29.03 \pm 0.14	1611 \pm 18		PLD-18181 (AMS)

表 9 深掘層序 (TK1) の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	暦年代較正值 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
0.33	中粒砂層	生の植物遺体	1765 \pm 20	-25.87 \pm 0.13	1767 \pm 22	1668-1627 (40.1%) 1714-1690 (28.1%)	PLD-19584 (AMS)
2.56	粗粒砂層	生の植物遺体	1710 \pm 20	-24.45 \pm 0.14	1711 \pm 20	1625-1568 (50.3%) 1689-1670 (17.9%)	PLD-19583 (AMS)
4.02	粘土質シルト層	土壌	2375 \pm 20	-20.40 \pm 0.12	2377 \pm 20	2367-2346 (39.7%) 2436-2410 (21.6%) 2400-2389 (7.0%)	PLD-19582 (AMS)
4.20	粘土質シルト層	土壌	2590 \pm 20	-17.84 \pm 0.14	2589 \pm 20	2750-2729 (68.2%)	PLD-19581 (AMS)
4.44	粗粒砂混じり粘土質シルト層	土壌	2620 \pm 20	-18.70 \pm 0.12	2622 \pm 20	2757-2744 (68.2%)	PLD-19580 (AMS)
4.69	砂質シルト層	生の植物遺体	-170 \pm 20	-28.67 \pm 0.14	-168 \pm 19	Bomb04NH2: -4-6 (68.2%)	PLD-19579 (AMS)
5.18	砂質シルト層	生材	-3555 \pm 15	-24.58 \pm 0.12	-3553 \pm 14	Bomb04NH2: -18-20 (68.2%)	PLD-19578 (AMS)
5.54	砂質シルト層	生材	195 \pm 20	-24.09 \pm 0.12	194 \pm 18	186-150 (33.5%) 11-3 (17.8%) 287-271 (16.9%)	PLD-19577 (AMS)
5.76	砂質シルト層	炭化植物遺体	315 \pm 20	-29.57 \pm 0.14	313 \pm 20	429-376 (50.5%) 325-309 (13.8%) 366-361 (4.0%)	PLD-19576 (AMS)

表 10 深掘層序 (TK2) の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	暦年代較正值 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
-12.79	細粒砂層	生の植物遺体	8085 \pm 25	-25.83 \pm 0.16	8084 \pm 27	9026-8997 (68.2%)	PLD-19575 (AMS)
-12.52	砂混じり粘土質シルト層	生の植物遺体	7855 \pm 25	-27.76 \pm 0.14	7856 \pm 27	8646-8593 (68.2%)	PLD-19574 (AMS)
-12.17	粗粒砂層	土壌	7790 \pm 25	-27.06 \pm 0.14	7790 \pm 27	8593-8550 (68.2%)	PLD-19573 (AMS)
-10.93	粗粒砂層	土壌	7430 \pm 25	-25.37 \pm 0.18	7429 \pm 26	8310-8237 (53.3%) 8220-8199 (14.9%)	PLD-19572 (AMS)
-10.64	粗粒砂層	土壌	7880 \pm 25	-26.96 \pm 0.14	7879 \pm 27	8660-8601 (45.3%) 8702-8668 (22.9%)	PLD-19571 (AMS)
-10.06	粗粒砂混じり粘土質シルト層	土壌	5920 \pm 25	-22.83 \pm 0.13	5920 \pm 24	6757-6718 (40.0%) 6780-6762 (18.4%) 6702-6693 (7.4%) 6682-6679 (2.4%)	PLD-19570 (AMS)
-8.75	粗粒砂混じりシルト質粘土層	土壌	7375 \pm 25	-24.72 \pm 0.14	7373 \pm 26	8207-8166 (50.4%) 8290-8263 (17.8%)	PLD-19569 (AMS)
-8.10	粗粒砂混じり粘土質シルト層	土壌	7435 \pm 25	-26.05 \pm 0.13	7434 \pm 26	8267-8231 (26.8%) 8315-8279 (26.5%) 8224-8203 (15.0%)	PLD-19568 (AMS)
-8.07	砂混じりシルト層	土壌	7390 \pm 25	-26.54 \pm 0.14	7389 \pm 27	8211-8175 (38.1%) 8296-8261 (30.1%)	PLD-19567 (AMS)
-7.10	粘土質シルト層	土壌	5385 \pm 25	-23.73 \pm 0.13	5385 \pm 24	6215-6185 (34.7%) 6271-6240 (33.5%)	PLD-19566 (AMS)
1.95	粘土層	土壌	3645 \pm 20	-17.94 \pm 0.14	3644 \pm 21	3983-3913 (68.2%)	PLD-19565 (AMS)
2.13	粘土層	土壌	3200 \pm 20	-19.53 \pm 0.14	3198 \pm 21	3443-3395 (68.2%)	PLD-19564 (AMS)
2.67	シルト質粘土層	土壌	2855 \pm 20	-24.40 \pm 0.14	2855 \pm 20	3001-2927 (68.2%)	PLD-19563 (AMS)

跡の調査範囲は、大江川の流路東側に広がる自然堤防頂部（西の塔の越 08I 区・08Hc 区から塔の越 08Cb 区・08Ce 区かけて）→谷へと変わる地形傾斜変換域（塔の越 08Ca 区から塔の越 07A 区西・07B 区西・07C 区にかけて）→谷の底（塔の越 07A 区東・07B 区東・10 区から長野北浦 07Cb 区・07Db 区にかけて）→谷から標高が再び高くなっていく地形傾斜変換域（長野北浦 07Cb 区・07Db 区から長野北浦 07A 区・08A 区にかけて）といった地形の凹凸が存在することがわかる。

(4) 古環境の形成とその年代

長野北浦・塔之越遺跡の調査範囲が、現在の大江川流路の東（左岸側）に広がる自然堤防頂部→谷へと変わる地形傾斜変換域→谷の底→谷から標高が再び高くなっていく地形傾斜変換域にあたることがわかった。次に、これらの地形が生じた形成年代について述べる。

各調査区で行なった深掘と 2 地点のボーリングコア資料の観察結果から、調査範囲の地下の地層は全体に砂勝ちであることがわかる。これは調査地点が上流から粗粒な堆積物が供給され、かつそれらがたまるような堆積の場にあったことを示す。標高 0m よりも高い層準をみると、標高 0～2m までには極粗粒砂～中粒砂が卓越しており、活動的な流路であったことがわかる。その後、砂層を覆って標高 1～3m にはシルト層や粘土層といった細粒堆積物がたまる環境へと変わる。植物遺体を含む黒褐色粘土層もみられるようになり、当地が後背湿地となったことがわかる。後背湿地となった年代について、地点 4（塔の越 07A 区）の標高 2.36～2.46m の青灰色シルト層から採取した草本植物（標高 2.37m）が 2301-2245 cal yrs BP(PLD-12969)、地点 6（塔の越 07B 区）の標高 1.66～1.86m の灰色粘土層から採取した草本植物（標高 1.67m）が 2421-2364 cal yrs BP(PLD-12981)、地点 9（長野北浦 07D 区）の標高 1.76～2.16m の淡褐色粘土層の草本植物（標高 1.78m）が 3079-3002 cal yrs BP(PLD-18190) などと、3000 年前代から 2300 年前代を示す値を示した。また、これらの細粒堆積物は東西総延長に約 800m におよぶ各調査区の深掘でも確認されることから、3000 年前代から 2300 年前代には後背湿地的な環境であったと推定される。

その後、標高 3m から標高 5～6m（現在の地表面の標高）付近まではシルト層や中粒砂～粗粒砂層が卓越するようになる。ここで、もっとも西端にある調査区、地点 1（塔の越 08E 区）において標高 2.20～3.80m の細粒砂層から採取した木材片（標高 2.20m）は 1725-

1691 cal yrs BP(PLD-18178) と、約 1700 年前代の値であった。いっぽう、地点 6（塔の越 07B 区）の標高 2.58～2.71m の黒褐色粘土層から採取した種実（標高 2.60m）が 1544-1515 cal yrs BP(PLD-12983)、地点 10（長野北浦 07A 区）の標高 2.40～2.50m の黒褐色粘土層の草本植物（標高 2.41m）が 1462-1420 cal yrs BP(PLD-18181) を示すなど、約 1500 年前代から 1400 年前代であった。標高 3m から現在の地表の標高 5～6m に至るまでは、各調査区の地層にはシルト層が卓越するようになるものの、その層序関係は横方向（側方）に不連続となる。これは東西方向で、地表に形成された地形環境が異なることに起因し、調査区の西端では約 1700 年前代には流路であったところが自然堤防へと移り変わり、高燥な環境が生じていたのに対して、調査区の東では粘土層の卓越する細粒な堆積物がたまる環境になったことがわかる。約 1500～1400 年前代頃には、当地には自然堤防と後背湿地という明瞭な地形の差異が出現していたことを示す。

謝辞

本論を作成するにあたり、試錐調査では応用地質株式会社と株式会社東海環境エンジニアに、鳥瞰図の作成では国際文化財株式会社に、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの小林紘一氏・丹生越子氏・伊藤 茂氏・山形秀樹氏・瀬谷 薫氏・Zaur Lomatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏にお世話になった。試料の整理・保管と図面作成では整理補助員の鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

第5章 考察

1. 長野北浦遺跡・塔の越遺跡における古墳時代の遺構・遺物について

(1) 古墳時代前期の土器群について

A. 廻間Ⅲ式後半前後における編年上の問題

赤塚次郎による廻間式土器編年（赤塚 1990）は廻間遺跡出土土器を基軸として構成された古墳時代前期までの土器編年であるが、廻間遺跡自体は廻間Ⅲ式前半までに途絶する。後続する廻間Ⅲ式後半については、廻間Ⅲ式3段階の基準資料として塔の越遺跡（市教委第1次調査、以下省略）SX01、岩倉城遺跡 SX01、廻間Ⅲ式4段階の基準資料として宮之脇遺跡第2号住居、若葉通遺跡 SB02 の土器群が提示されている。加納俊介による編年（加納 1991）においても、塔の越遺跡 SX01 を標識として「塔の越期」が設定されていることから、廻間Ⅲ式後半を中心とした編年上の理解において、塔の越遺跡（・長野北浦遺跡）の土器群の重要性は容易に理解されよう。

廻間Ⅲ式2段階の基準資料としては、廻間遺跡 SB12、同 SB56 の土器群が提示され、同 SZ01 東溝屈曲部（E地点）の土器群も同段階の資料として扱われることが多い。同段階の特色としては、「小型器台の多様化」と「量の増大」が指摘され、同段階に受部が有段状となる器台、X字形の布留系小型器台、小型丸底土器といった特徴的な小型土器群が出現すると理解されている。しかし、同段階に相当する資料は決して豊富ではなく、小型器台（とそれと組み合う器種）の構成変化が適格に把握されるには至っていない。また、X字形の布留系小型器台、小型丸底土器についても、断片的な資料が知られるのみで、これら新出の小型器種の存在形態や普遍性（形式の有無だけでなく、組成上の一器種として定着しているのか、搬入品や模倣品として存在する程度なのか、模倣品とすればどの程度の位相か）、その定着過程については議論の余地が多い。また、塔の越遺跡 SX01、宮之脇遺跡第2号住居等の土器群についても、高杯や各種の小型器種には欠落する形式も多く、器種構成の推移を踏まえた上で様式の画期を論じるには不都合な側面が多い。加納俊介も前後する時期における画期認識の問題を指摘している（加納 1997）。

B. 長野北浦遺跡・塔の越遺跡出土土器の編年的位置

●長野北浦遺跡 07Bb 区 259SD

長野北浦遺跡 07Bb 区 259SD 出土土器群中から、出土状況に依拠して抽出した（古相の）一群である（図 414）。

土器群の内容として、S字甕は頸部調整を施したC類古段階によって占められる、有段高杯は全体の形状が塔の越遺跡 SX01 の高杯と近似し、透孔を上下二段三方向に穿つ、口径が体部径を大きく凌駕する小型丸底土器（鉢）が組成する、小型器台が安定して組成し、貫通孔を有する「東海系器台」の系譜上にあるものを主体とする、等が列記される。ここに示した内容は、器台と鉢が一定量組成しながら、X字形の布留系小型器台、受部を有段状とする小型器台、有段口縁鉢が組成しない点から、塔の越遺跡 SX01 や岩倉城遺跡 SX01 の土器群が示す内容に先行する。一方で、有段高杯は形状が塔の越遺跡 SX01 のものと近似することから、07Bb 区 259SD 出土土器は塔の越遺跡 SX01 の直前、つまり、廻間Ⅲ式2段階に相当すると理解される。（複数個体に認められる）高杯の上下二段の穿孔が同段階の廻間遺跡 SB12 の高杯に共通する点（前者は三方向、後者は四方向）、S字甕の型式的な新古、二重口縁化した柳ヶ坪型壺が安定して組成しない点等からもこの理解は首肯されよう。

●長野北浦遺跡方形周溝（方墳）と周辺遺構

塔の越遺跡円形周溝（円墳）と関連遺構 07B 区 737SX 塔の越遺跡 09C 区

長野北浦遺跡方形周溝（方墳）は、周辺遺構と墳丘部分に重複する 07Ba 区 140SK を含め、出土土器群はほぼ同様の内容を示す（図 415、方形周溝最上層を除く）。

その内容として、S字甕はC類新段階をわずかに含むつつも、D類古段階が主体となる、「山陰系口縁」S字甕が一定量含まれる、二重口縁化した柳ヶ坪型壺、無文化した二重口縁壺が組成する、無透孔屈折脚高杯が組成し、高杯にはタテミガキを施したものが含まれる、受部を有段状とする小型器台、口径が体部径を大きく凌駕する小型丸底壺等の小型器種が組成し、小型器種には粗雑化の傾向も表出する、等が列記される。

塔の越遺跡 07B 区 737SX は円形周溝（円墳）の加工

面と機能面間に集積された土器群で、良好な一括資料である（図 415）。土器群は同形同大の S 字甕 2 個体と小型丸底壺 3 個体、中型の直口壺 1 個体で構成される。S 字甕は D 類古段階、小型丸底壺は口縁部径が体部径を大きく凌駕する形態で、中型の直口壺を含めて精製品の範疇に含まれる。なお、周溝からは口径が体部径を凌駕する丸底鉢が出土している。鉢は上下にやや圧縮された形状で、器壁は薄い。

塔の越遺跡 09C 区に包含された土器群（図 415）は、09C 区 305SX とその内外から出土する土器を含めて、前二者の土器群が示す内容に近似する。土器群には布留式甕が伴う。

以上の土器群は、S 字甕の型式的位置、無透孔屈折脚高杯の組成、小型器台の数量の減少と形式の淘汰、等から長野北浦遺跡 07Bb 区 259SD、塔の越遺跡 SX01 に後出するもので、松河戸 I 式 1 段階に相当すると理解される（赤塚 1994）。他に同段階に相当する土器群として、07Bb 区 259SD の廻間Ⅲ式 2 段階に相当する一群を除いた土器群等がある。08D 区 172SK から単独で出土した近江系の丸底甕も同段階に相当しよう。

●塔の越遺跡 08Ab 区 182SX 下層

長野北浦遺跡 07A・08A・08B 区

廻間Ⅲ式 2 段階に相当するとして長野北浦遺跡 07Bb 区 259SD と松河戸 I 式 1 段階に相当するとして長野北浦遺跡の方墳と周辺遺構、塔の越遺跡円墳（07B 区 737SX）の両者の中間、つまり、廻間Ⅲ式後半（3・4 段階）、塔の越遺跡 SX01（第 1・2 次調査区に包含される土器群を含む、図 414）に対応する良好な資料は少ないが、長野北浦遺跡東半部（07A・08A・08B 区）に包含される土器群（図 415、07A 区 031SK を除く 07A 区 090SI、08B 区 097SK、07A 区 083SD、07A 区 106NR 等）、塔の越遺跡 08Ab 区 182SX の土器群（図 414）がそれに対応すると考えられる。

塔の越遺跡 08Ab 区 182SX の土器群は、S 字甕 C 類新段階を主体として、有段口縁鉢を含む。X 字形の布留系小型器台、受部を有段状とする小型器台を含まないが、小型器台にはいずれも貫通孔がない。長野北浦遺跡 07A・08A・08B 区に包含される土器群も上記の内容に齟齬しない。

C. 小結

以上の編年的考察を踏まえて、長野北浦遺跡 07Bb 区 259SD を塔の越 1 期、塔の越遺跡 SX01 等を塔の越 2 期、長野北浦遺跡方墳と周辺遺構、塔の越遺跡円墳、塔の越遺跡 09C 区を塔の越 3 期の基準資料として指標化する。

なお、各時期はそれぞれ廻間Ⅲ式 2 段階、廻間Ⅲ式 3・4 段階、松河戸 I 式 1 段階に対応する。以下、その内容を S 字甕の型式区分、小型器台（土器群）の構成を主眼として改めて整理する。編年の構成に際しては、既往の資料に加えて、塔の越 2 期（廻間Ⅲ式 3・4 段階）を下限とする御山寺遺跡 07D 区 SU310 等の資料から補足した（図 416・417）。

●塔の越 1 期

S 字甕 C 類古段階を主体とすること、小型器台が盛行することを指標とする（参考となる周辺地域の資料として、恒武西宮遺跡 SX01、昆沙門遺跡 SK01 等がある）。ただし、小型器台が盛行する現象は 1 期以前にすでに表出する（宮之脇遺跡 SB44 等）。小型器台は 1 期以前と同様、「東海系器台」の系譜上にある受部が直線的なものと内彎するものが主体である。また、貫通孔があるものが多い。受部を有段状とする小型器台は同期の廻間遺跡 SB12 に認められるが、焼成後に貫通孔を穿孔したものであることをも勘案すると、同形式は客体的な存在であった可能性が高い（製作者、製作時の意図と使用者、使用時の意図が不一致で、個体そのものが周辺地域から供給された可能性がある）。X 字形の布留系小型器台も安定して組成しない。小型器台には口径が体部径を凌駕する丸底鉢などが組み合う事例が認められ、典型的な有段鉢や小型丸底鉢（壺）はごく少ない。

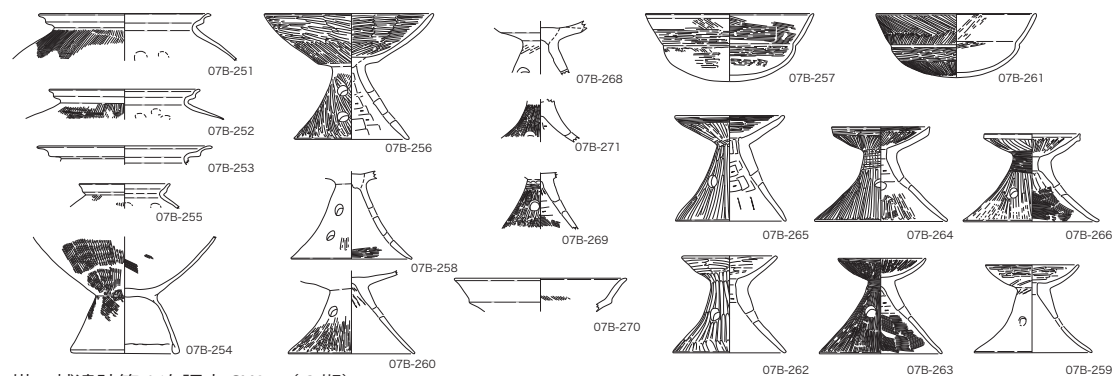
その他、柳ヶ坪型壺は口縁部が二重口縁化し、定式化したものが主体となる。口縁部上段は幅が狭い受口状を呈する。なお、パレス壺や瓢形壺は両遺跡を通じて出土しないことから、塔の越 1 期（廻間Ⅲ式 2 段階）以前には消失しているとみてよい。有段高杯は 1 期と 2 期を通じて、法量の縮小がより顕著となる。杯部はわずかに内彎する程度となる。

●塔の越 2 期

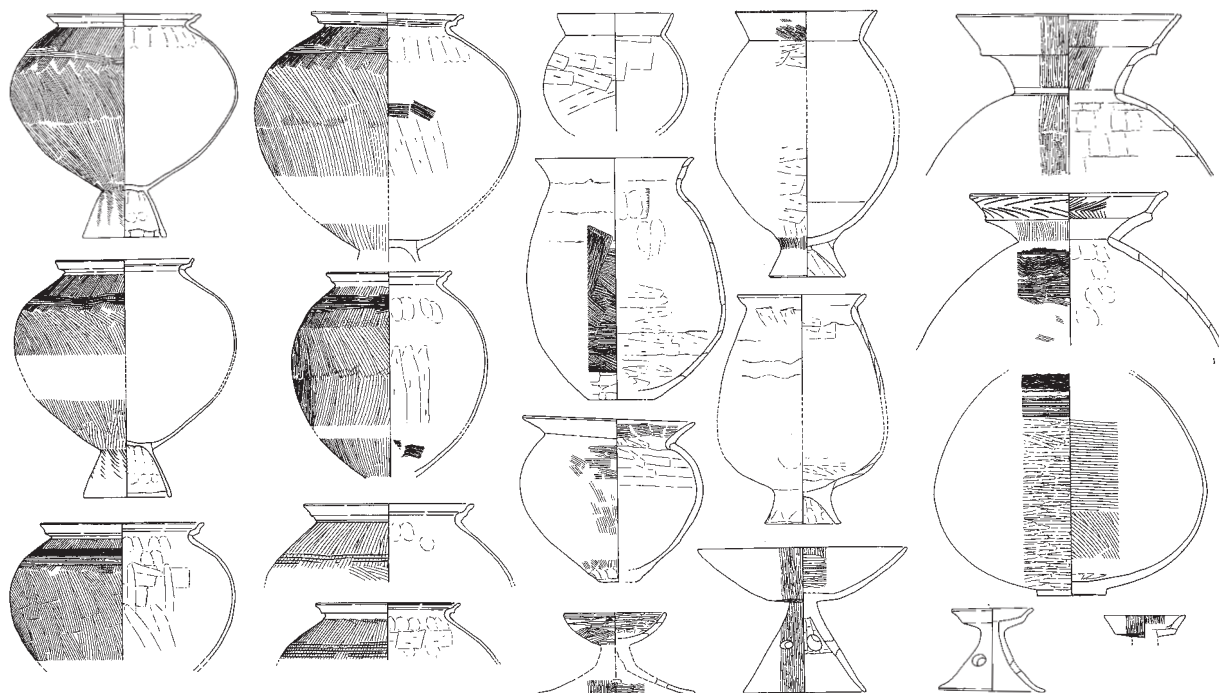
S 字甕 C 類新段階を主体とすること、布留系小型土器群が顕在化し、小型器台の形式が多様化することを指標とする（岩倉城遺跡 SX01 など）。小型器台は受部が直線的なものがほとんど消失する一方で、受部を有段状とする器台、口縁部先端が直立する器台、X 字形の布留系小型器台等の多様な形式が顕在化する。また、貫通孔があるものかないものが混在する。以前の丸底鉢に加えて、有段鉢、小型丸底鉢・壺が組成し、小型精製土器群による組成が明確化する。

その他、「山陰系口縁」S 字甕、柳ヶ坪型壺が安定して組成する。柳ヶ坪型壺の口縁部上段は伸長・外反化し、口縁部下段は肥大化する傾向にある。有段高杯の杯部は直線的または外反する形状に変化する。なお、塔の越遺

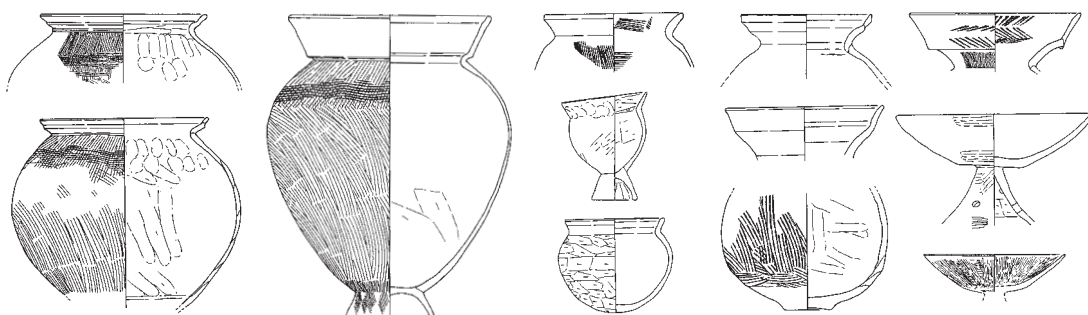
長野北浦遺跡 07Bb 区 259SD (1期)



塔の越遺跡第1次調査 SX01 (2期)



塔の越遺跡第1・2次調査 (2期)



塔の越遺跡 08AB 区 182SX (2期)

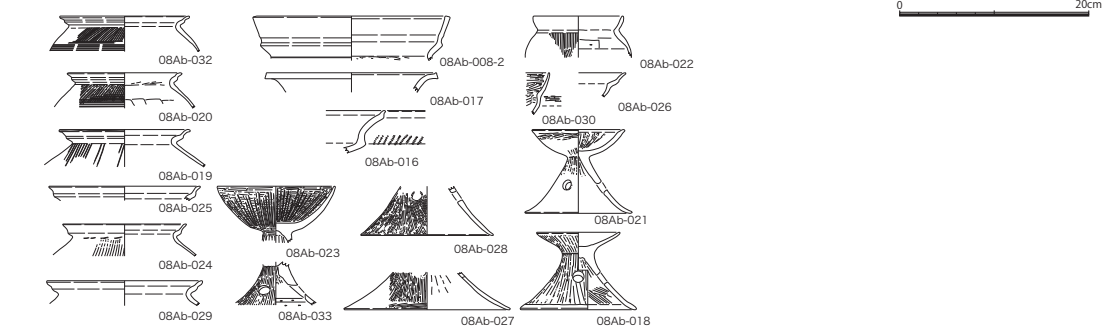
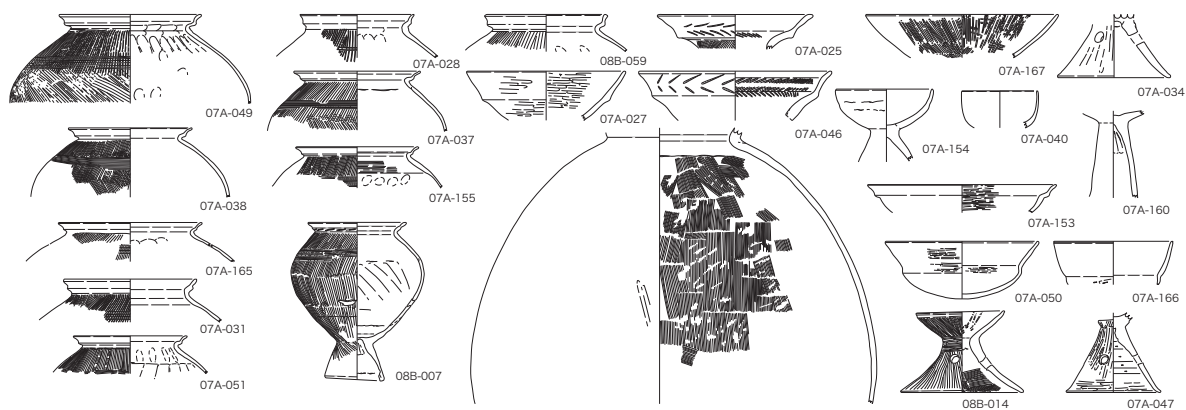
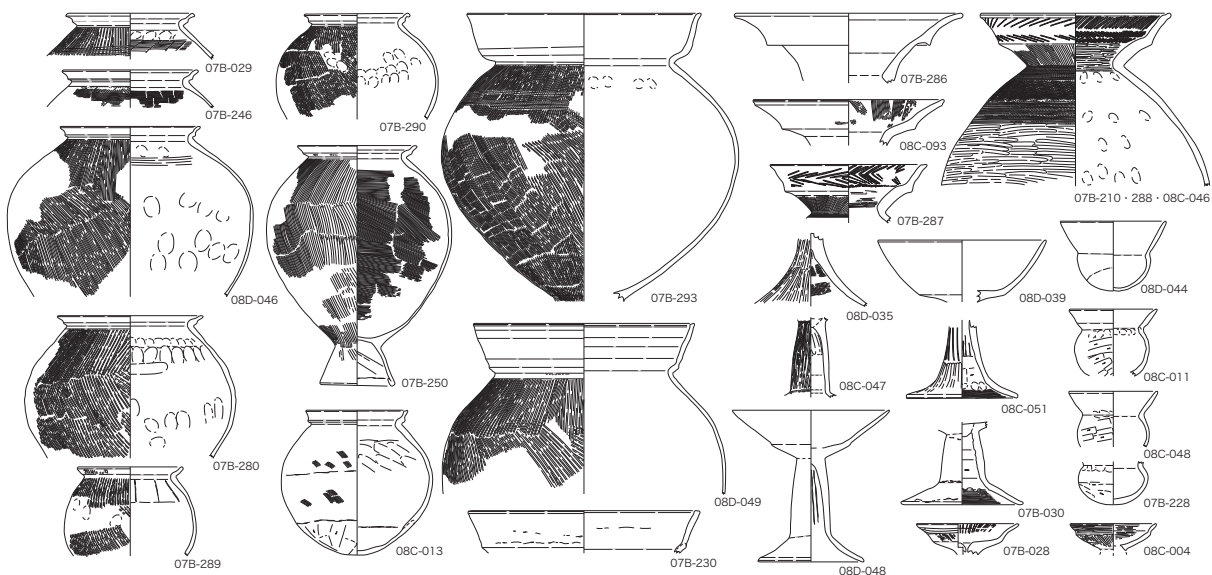


図 414 古墳時代前期の土器群 (1)

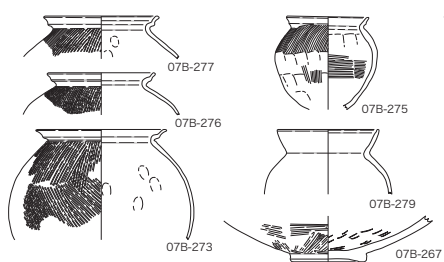
長野北浦遺跡 07A・08A・08B 区 (2期)



長野北浦遺跡方形周溝 (方墳) と周辺遺構 (3期)



長野北浦遺跡 07Bb 区 259SD (3期)



塔の越遺跡円形周溝 (円墳) と関連遺構 07B 区 737SX (3期)



塔の越遺跡 09C 区 (3期)

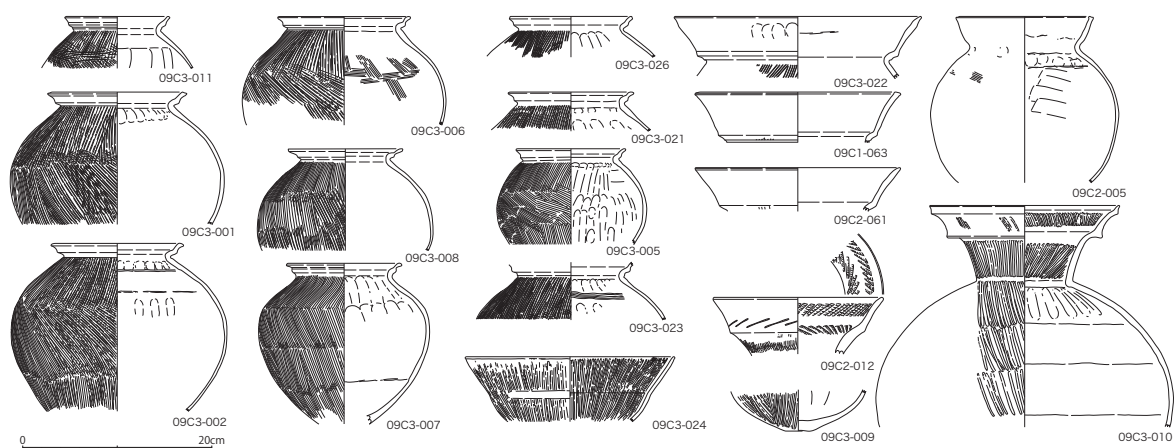


図 415 古墳時代前期の土器群 (2)

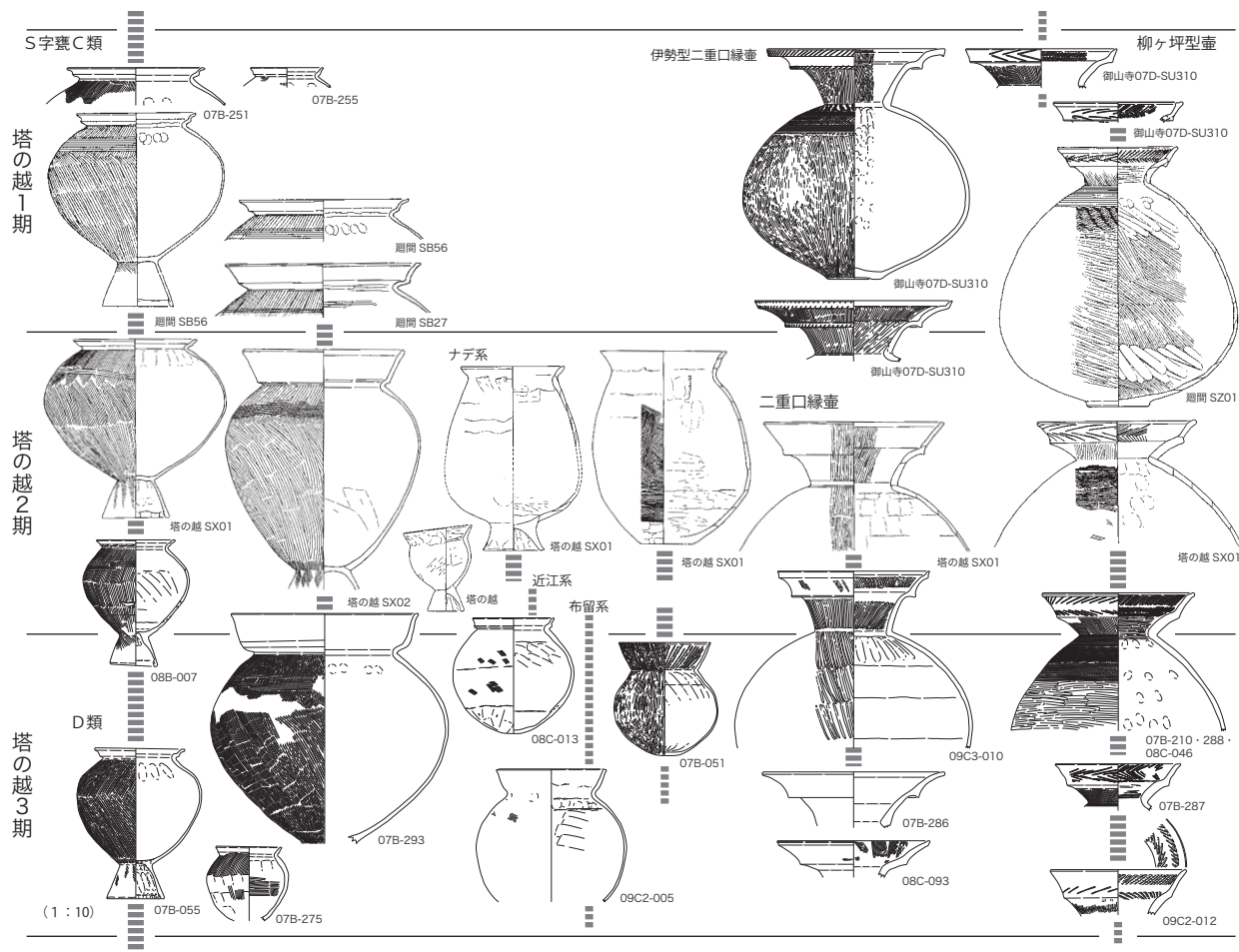


図 416 土器群の変遷 (1)

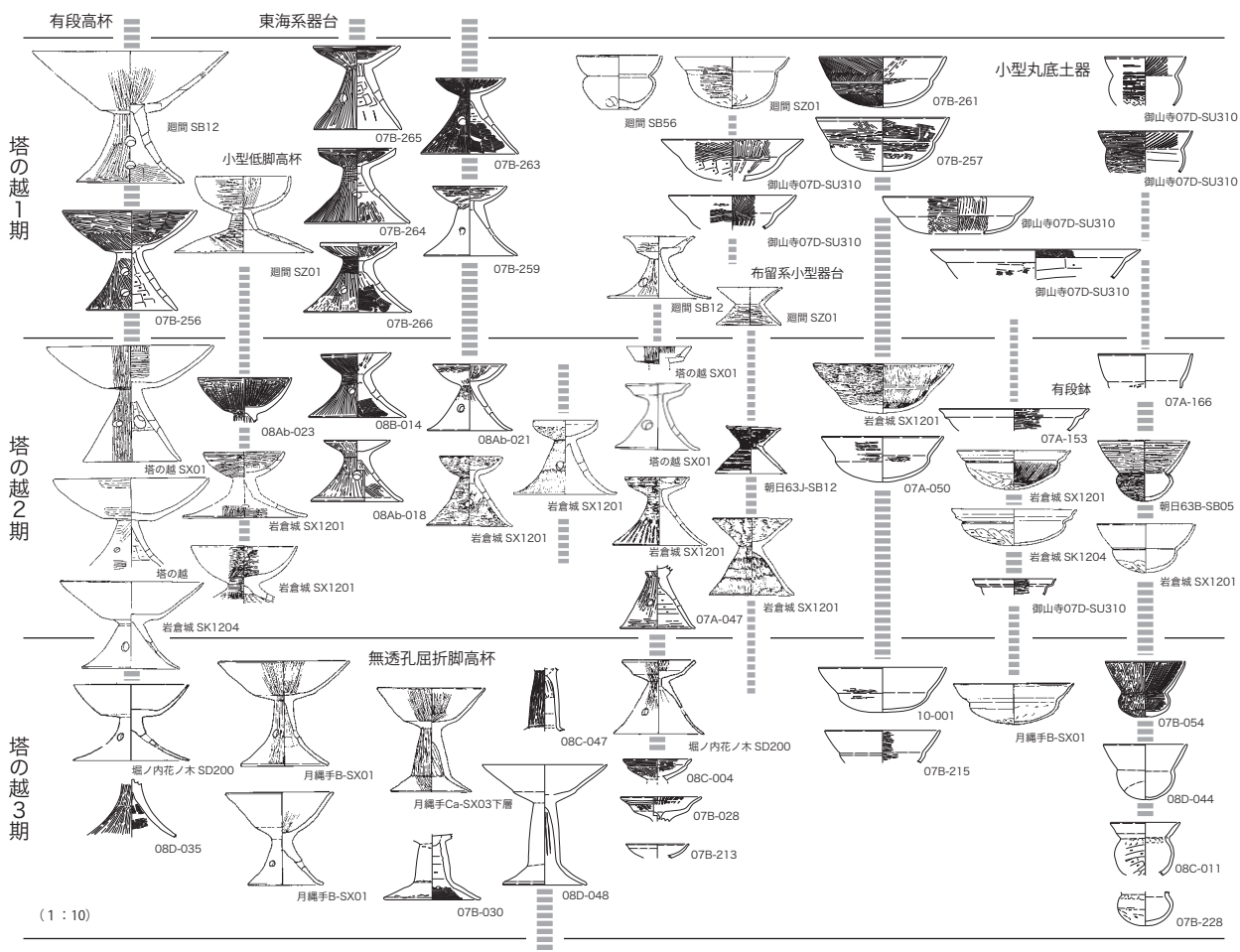


図 417 土器群の変遷 (2)

跡 SX01 に一定量組成するナデ・ケズリ調整を基調とする台付甕と平底甕は、今回の調査においてほとんど確認されなかった。同形式の甕は 3 期以降、中之郷北遺跡など周辺の遺跡にも散見されるが、塔の越遺跡 SX01 は局所的な組成を反映している可能性がある。

●塔の越 3 期

S 字甕 D 類古段階を主体とすること、無透孔屈折脚高杯が組成することを指標とする。小型器台は減少し、受部を有段状とする器台、X 字形の布留系小型器台に形式が淘汰される（「東海系器台」の系譜上にある小型器台はほぼ消滅する）。有段口縁鉢、小型丸底壺は継続して組成するが、粗雑化の傾向が看取されるようになる。ただし、塔の越遺跡 07B 区 737SX のように、精製の小型丸底壺が伴うことがある。無透孔屈折脚高杯は杯部容量、杯部下端の稜径が小さい。また、形状や調整技法は多様で、形式としての安定性を欠く。

その他、「山陰系口縁」S 字甕、柳ヶ坪型壺は継続して組成する。また、布留式甕や近江系の丸底甕が伴うことがある。

なお、近隣の遺跡における同時期の資料として堀之内花ノ木遺跡 SD200、下津新町遺跡、それに後続する資料として下津城下層遺跡 SD29 の土器群がある。なお、中之郷北遺跡においても塔の越 3 期とそれに後続する良好な層位資料が提示されている。

●まとめ

以上の編年的考察から、塔の越 1 期に小型器種群の構成が変化する兆候、塔の越 2 期に布留系小型器種群の顕在化、塔の越 3 期に小型器種群の淘汰と粗雑化を読み取った。小型器種群の対比から、塔の越 1 期、2 期、3 期はそれぞれ畿内地域における布留式中段階の古相、中相、新相（西村 2011）にほぼ対応するものと思われる。

ただ、この間における小型器種群の趨勢としては、口径が体部径を凌駕する丸底鉢が各時期に組成し、「東海系器台」から受部を有段状とする器台へ交替する状況を認めることが可能である。一方、X 字形の布留系小型器台や有段口縁鉢は（塔の越 2 期を中心として）それらを補完する器種であったと捉えられる。3 期に多様性を内包しつつ顕在化する無透孔屈折脚高杯を含めて、畿内からの影響を過大視する姿勢は改められるべきであろう。

なお、結果として、廻間Ⅲ式 3・4 段階の区分は留保した。器種組成の把握には不安定な側面も多く、小型器種群の系譜上の理解には不分明な部分も多い。また、局所的な組成にも留意する必要がある。今後の課題である。

(2) 前期古墳について

A. 方墳と円墳

長野北浦遺跡・塔の越遺跡において、方形周溝・円形周溝各 1 基を検出した。以下、長野北浦遺跡において検出された方形周溝（08D 区 048SD 等）を（長野北浦遺跡の）方墳、塔の越遺跡において検出された円形周溝（07 区 050SD 等）を（塔の越遺跡の）円墳として考察の対象とする。

●墳丘・規模

長野北浦遺跡の方墳は墳丘側が明確な方形を呈し、墳丘の一辺は 25m を計測する。塔の越遺跡の円墳は墳丘側が比較的整った弧状を呈し、墳丘径は 24m に復原される。

長野北浦遺跡の方墳、塔の越遺跡の円墳は、墳丘が完全に失われていた。しかし、古代まで周溝が浚渫されていることから、少なくともその段階までは墳丘が維持されていたと推測される。長野北浦遺跡 08D 区 048SD では、古代の遺物を含む堆積層（黒褐色シルト質粘土）の上位に墳丘盛土に由来する斑土が墳丘側から流入していることが確認されている。墳丘に相当する部分に古代以降の遺構がほとんど検出されないことも墳丘が長期間残存していたこと示す。

塔の越遺跡の円墳については、円墳の墳丘裾付近（円形周溝の内側）に近世以降の溝が掘削され、残存する墳丘上に社殿（ヤシロ）が設置されたことも想定されているように、墳丘の裾付近が改変を受けながらも、周囲からの視認が可能であった程度に（少なくとも近世まで）墳丘が残存していたと推察される。後述の古墳時代中期後半・後期の小古墳（群）が平安時代には墳丘が完全に削剥されていたことからすると、古墳の墳丘は中期後半・後期の小古墳と比較して相対的に高かったと考えられる。

●築造時期

古代における周溝の浚渫もあって、周溝に伴う遺物は少ない。長野北浦遺跡の方形周溝の周囲には、埋没過程に不明確な部分を残すものの、比較的豊富に土器群が検出された。それらは先に考察したように総じて松河戸Ⅰ式Ⅰ段階の編年的位置を示す。古墳の築造時期も同時期として理解する。なお、方墳の墳丘部分に重複する遺構 07Ba 区 140SK に包含された土器群も同様の編年的位置を示す。翻って 07Ba 区 140SK は方墳築造に関連する施設であった可能性も考慮される。ただし、遺構や出土遺物に特徴的な点は見出せない。

塔の越遺跡の円墳の周溝外縁においては、土器集積

07B区 737SX が検出された。土器群は周溝の加工面と機能面間に埋置されたもので、古墳の築造時期を示す良好な資料と考えられる。周溝出土の土器（丸底鉢）も含めて土器群の編年的位置は松河戸Ⅰ式Ⅰ段階である。

●埋葬施設・副葬品

いずれの古墳も埋葬施設、副葬品は遺存していなかったが、長野北浦遺跡の方墳から約20m隔てた07D区 012SKより緑色凝灰岩製の鏃形石製品1点が出土した。鏃形石製品が出土したのは須恵器等を含む古代の堆積層中で、本来は方墳に伴っていた可能性がある。

鏃形石製品は鏃身下半が断面方形を呈する鑿頭形で、同形式の鏃形石製品はメスリ山古墳（20点）、東大寺山古墳（3点）、石山古墳（41点）、尼塚3号墳（2点）、大成洞13号墳（4点）において出土している（図418）。およそ、メスリ山古墳が廻間Ⅲ式3・4段階（塔の越2期）、東大寺山古墳が松河戸Ⅰ式Ⅰ段階（塔の越3期）、石山古墳が松河戸Ⅰ式2・3段階に併行する（早野2011）。

長野北浦遺跡の鏃形石製品は鏃身と茎との間に段差を設けるもので、この特徴から「古式」とも捉えられる（北山2008）。しかし、「古式」とされたメスリ山古墳の鏃形石製品は鏃身側辺が直線的な形状である一方、長野北浦遺跡は鏃身下半側辺が彎曲する。鏃身下半側辺が彎曲する形状は石山古墳の鏃形石製品に多く認められ、石山古墳にのみ認められる篋被付の鏃形石製品の鏃身下半側辺はいずれも彎曲する。鏃身下半側辺の彎曲が石製品としての形式化を示すと理解すれば、長野北浦遺跡の鏃形

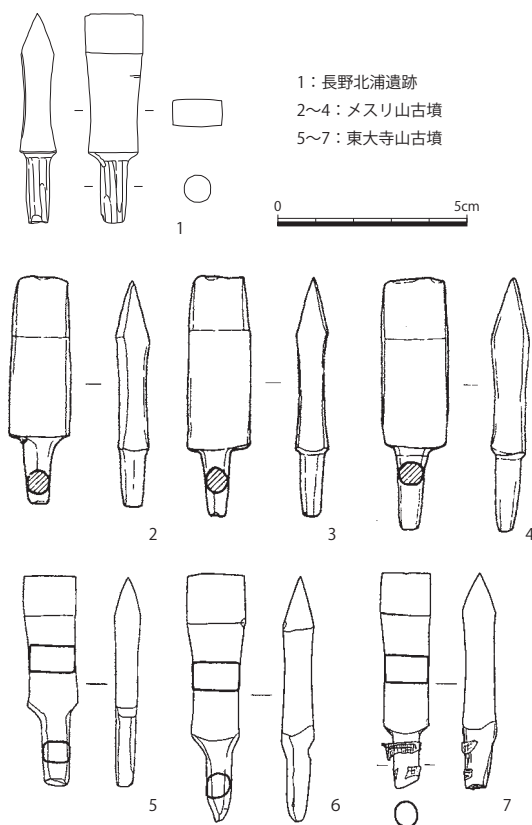


図418 鏃形石製品の諸例

石製品はむしろ新しく位置付けられる。詳細な対比は措くとして、ここでは長野北浦遺跡の鏃形石製品が松河戸Ⅰ式Ⅰ段階とした方墳の築造時期と大きく齟齬しないことを確認するのみとする。

●その他

長野北浦遺跡の方墳は検出した部分の北（北東）隅、西（北西）隅部分の掘り込みが浅く曖昧であったようで、周辺には土器群が散在する。同様な状況は周溝墓（墳丘



図419 周辺における前期後半の古墳の分布

墓)に認められる。例えば、権現山遺跡 SZ02 は西(南西)隅部分の掘り込みが浅く、築造後にも掘削を伴う何らかの造作が行われたようである。権現山遺跡 SZ02 は弥生時代後期における築造が想定されるが、廻間Ⅲ式後半(塔の越2期)まで断続的に墳丘を対象とした供献行為が継続する。廻間Ⅲ式2段階(塔の越1期)まで同様の行為が継続する廻間遺跡 SZ01 の例も含めて、長野北浦遺跡の方墳がこれら伝統的な墳墓における営為と接点を有する可能性を示唆しておきたい。

なお、これらの墳墓における供献行為に際して、使用する土器を仮器化した痕跡は認められない。すでに前方後方墳の西上免遺跡 SZ01 において、仮器化の意識が発露していることからすると、土器を仮器化する行為が当地域においては必ずしも段階的に発展しなかったと認識される。一方、塔の越遺跡の円墳においては、同形同大(同工)の土器を複数個体供献する行為が確認された。同様の事例として、恒武西宮遺跡方形周溝 SZ01 に付属する SX01、曾根八千町遺跡 SX02 等がある。今後、供献行為の位相を把握する作業も必要であろう。

B. 小結—尾張における前期の方墳と円墳について

長野北浦遺跡・塔の越遺跡においては、ほぼ同時期に20m以上の方墳と円墳が築造されていたことが明らかとなった。古墳は一定規模の墳丘が構築されていたと思われ、大型古墳に副葬されることが多い鍬形石製品が伴っていた可能性もある。以下、尾張地域における同時

期の古墳と比較しつつ、古墳の相対的な位置を確認する。

尾張地域各地域においては、長野北浦遺跡・塔の越遺跡の前期古墳と前後して、東谷山山頂付近(旧山田郡)に尾張戸神社古墳(円墳・径27.5m)、南社古墳(円墳・径30m)、庄内川流域(旧春部郡)に天王山古墳(円墳・径28m)、篠木2号墳(円墳・径40m)・同9号墳(円墳・径40m)、出川大塚古墳(円墳・径45m)、五条川流域(旧丹羽郡)の三ツ山1号墳(方墳・一辺22m)・同2号墳(方墳・一辺18m)・同3号墳(方墳・一辺21m)、甲屋敷古墳(円墳?・径約30m)、日光川流域(旧中島郡)のでんやま古墳(円墳・径23m)、野見神社古墳(円墳・径20m)、知多半島基部(旧愛智郡)の兜山古墳(円墳・径45m前後)、斎山古墳(円墳・径約30m)、鳥栖八剣社古墳(円墳・径60m)等の中小規模の円墳、方墳が築造される(図419)。

これらの古墳は方墳で構成される三ツ山古墳群を除いて、いずれも円墳で、同時期の方墳と円墳が隣接して築造される長野北浦遺跡、塔の越遺跡の状況はやや特異である。また、庄内川水系の円墳は葺石が普遍的に認められ、段階的に壺形埴輪、円筒埴輪を採用し、前方後円(方)墳との一定の関係性を示す(瀬川2011)。一方で、古木曾川水系(五条川・日光川水系)の円(方)墳は葺石、埴輪を採用せず、例えば葺石と壺形埴輪、円筒埴輪を採用する前方後円墳、青塚古墳との関係性は希薄である(前方後円墳との関係は希薄であるが、知多半島基部の円墳は前者の様相に類似する)。長野北浦遺跡・塔の

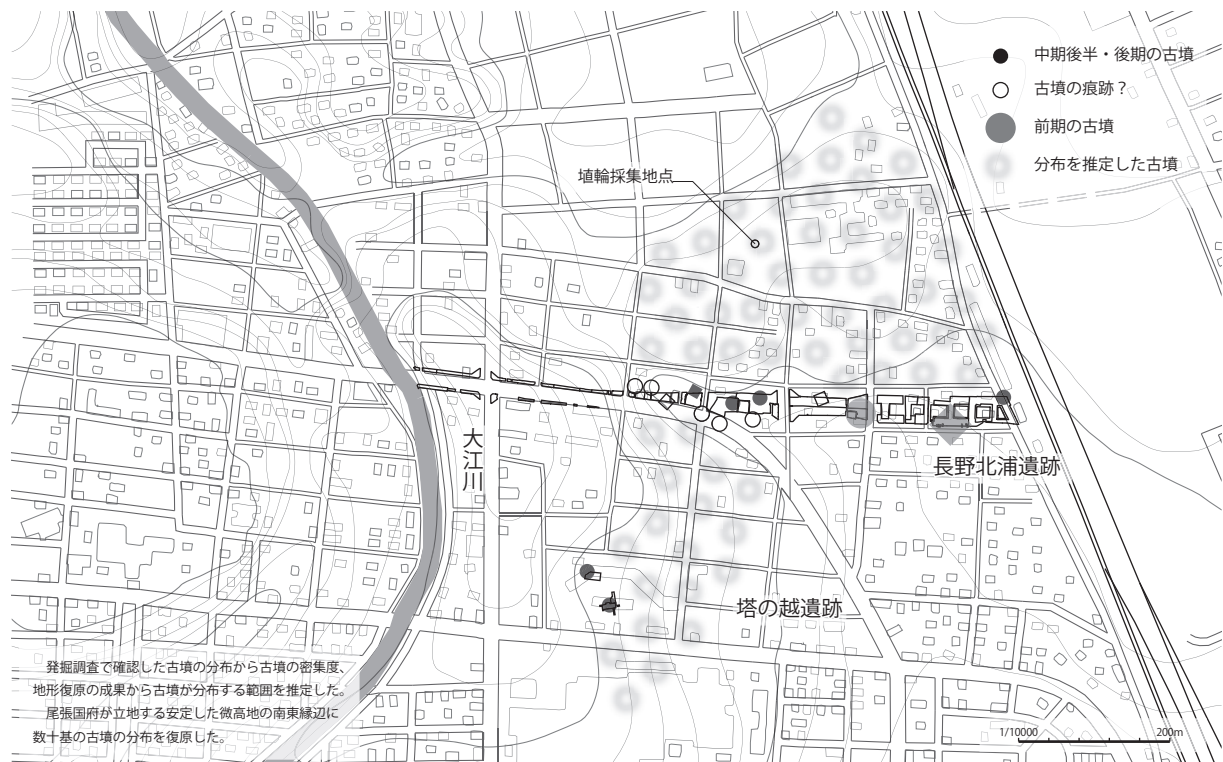


図420 地形の復元と古墳の分布

越遺跡を含む古木曾川水系の前期古墳には、先にも確認したように伝統的な造墓意識がなお色濃く反映されていたのであろう。

(3) 中期後半・後期の小古墳（群）について

A. 長野北浦遺跡・塔の越遺跡の小古墳（群）

●分布

長野北裏遺跡・塔の越遺跡においては、中期後半・後期に帰属する古墳（とその痕跡）を確認した。古墳は、塔の越遺跡 08B 区以東の氾濫原に面した微高地上に群在する。古墳が立地する微高地は塔の越 3 期（松戸Ⅰ式）以降の堆積作用によって氾濫原が微高地化したもので、地形復原の成果をも参考にすると、長野北浦遺跡、市教委調査区、埴輪が採集されている稲沢東小学校付近までを含めて南・東向きの緩傾斜面上、500m 以上の範囲に同時期の古墳が分布していたことが推測される。濃尾平野低地部において中小の古墳が発掘調査によって確認される事例は少なくないが、微高地上の広範囲に中期後半・後期の小古墳が分布することが判明したことは特筆される。

今回の発掘調査で確認された古墳は、確実なもので 4 基、可能性があるものを含めると 10 数基で、市教委調査分を合わせると少なくとも 6 基、最大で 10 基から 20 基の古墳の分布が判明したことになる。遺跡全体では数十基程度の古墳の分布を推測することも可能であろう（図 420）。

●墳形・規模・外部施設

長野北浦遺跡・塔の越遺跡において確認された古墳は、径 10～20m の円墳が主体であるが、確実に方墳が含まれることも今回の発掘調査で判明した。出土遺物の内容から築造時期が判明する古墳は、市教委の調査分も含めていずれも東山 11 号窯式期で、その範囲を大きく逸脱するものは認められない。これらの古墳は近接した時期に築造されたと把握されながらも、埴輪を伴うものと伴わないものの両者が混在する。なお、埴輪は定型化した尾張型埴輪（赤塚 1991）が主体である。今回の発掘調査では埴輪が古墳に伴って出土した状況は認められなかったが、塔の越遺跡 08Bd（08Bc）区、同 07A 区、長野北浦遺跡 07B 区で若干の埴輪が出土した。なお、過去にも（07 区の北に相当する）稲沢東小学校の西で埴輪が採集されている。ただ、実際には埴輪を伴

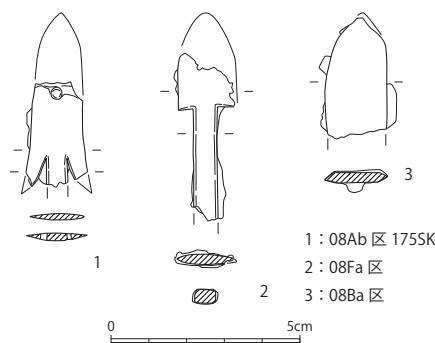


図 421 塔の越遺跡出土鉄製品

わない古墳が多い。市教委による第 2 次調査で確認された古墳（SD07）においても埴輪が「人為的に周溝内に投棄された状況」であったことからすると、実際には古墳に埴輪が樹立されていなかった可能性もある。

●埋葬施設・副葬品

検出された古墳はいずれも後世の削剥によって埋葬施設は遺存していなかった。周溝内や周辺から出土した緑色凝灰岩製管玉や鉄鏃（図 421）が副葬品の一部であったとすれば、これら小古墳の副葬品は若干の装身具と武器によって構成されていたと推測される。

注意されるのは径 15m の円墳（08Ab 区 154SD）の周囲で検出された土坑 175SK である。土坑は長軸 3m、短軸 1.3m の長楕円形を呈し、土坑からは須恵器有蓋高杯と有頸腸挾三角形式の鉄鏃（図 421- 1）が出土した（目釘、刀子片が付着？）。周溝との位置関係から、円墳の周溝外に設置された周辺埋葬施設（土坑墓）の可能性も想起されるが（清家 1999）、須恵器や鉄鏃の出土から、小規模な円墳に従属する埋葬施設としての単純化は難しい。また、円墳との時期差もほとんど認められない。

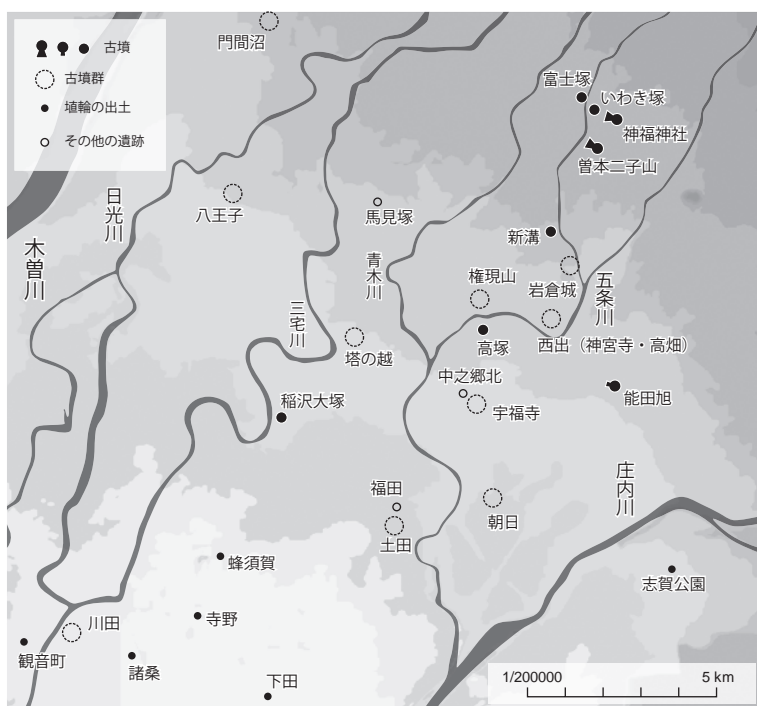


図 422 周辺における中・後期古墳の分布

遺跡	遺構番号	墳形	規模 (m)	時期	埴輪	土器	その他関連遺物	備考
大毛池田遺跡	95Aa区SZ01	円墳	13	H-50		須恵器高杯		川原石積み横穴式石室？
大毛池田遺跡	94G区SD15	円墳						
門間沼遺跡	94C区SZ01	円墳	外周18 内周12	H-11～H-61		須恵器蓋杯・有蓋高杯・甕・壺 土師器宇田型甕・甗（鍋）・高杯		二重の周溝
門間沼遺跡	94C区SZ02	円墳	外周18 内周12	H-11～H-44		須恵器蓋杯・高杯・甕・壺・韓式系土器甗 土師器伊勢型甕・甗（鍋）	靱羽口、木製品鋤・板材	二重の周溝 周溝内土坑 土師器土器棺？
門間沼遺跡	94A区SZ01	円墳	13	H-50		須恵器甕・フラスコ形長頸壺		
門間沼遺跡	94A区SZ02	円墳	6.6×6.2					
岩倉城遺跡	SZ1301・立会	方墳		H-11	朝顔・円筒・形象？	須恵器甕	金環 1	
岩倉城遺跡	SZ1302	方墳		H-61		須恵器蓋杯・高杯・甕 土師器高杯・小型甕		
岩倉城遺跡	SZ1303	方墳		H-44		須恵器蓋杯・甕 土師器伊勢型甕		
岩倉城遺跡	SZ1304	方墳		H-111	円筒	須恵器高杯・壺		
権現山遺跡	1号墳	円墳	14	H-44		須恵器蓋杯（石室内）	鉄刀子（石室内）	川原石積み横穴式石室
権現山遺跡	2号墳	円墳	7					
権現山遺跡	3号墳	円墳	12					川原石積み横穴式石室？
権現山遺跡	4号墳	円墳	25.5	6世紀後半		須恵器甕		
西出古墳		方墳	14	城山2	朝顔・円筒	須恵器蓋杯・有蓋・無蓋高杯・甕・壺・甕 土師器高杯・大型高杯		
能田旭古墳		帆立 全長43 貝形 後門部37			朝顔・円筒・形象 （蓋・家・人物・馬）	須恵器蓋杯 土師器台付甕・高杯・手捏ね土器	木製品杓文字形・笠形・剣形・ 組合材・柱材・板材	
八王子遺跡	SZ01	円墳	10	H61～H-50		須恵器蓋杯・高杯 土師器甗（鍋）		
八王子遺跡	SZ02	円墳	20～30	I-17		須恵器蓋杯・高杯・甕・短頸壺・平瓶・鉢 土師器伊勢型甕・甗		横穴式石室？
八王子遺跡	SZ03	円墳	24	I-17		須恵器蓋杯		
八王子遺跡	SZ04	円墳	21	H-61		須恵器蓋杯・短頸壺		
八王子遺跡	SZ05	円墳	8	7世紀後半		須恵器蓋杯 土師器伊勢型甕		
山中遺跡	SZ04	円墳	14	6世紀			金環 1	
塔の越遺跡	第1次調査SD04	円墳	17	H-11		須恵器蓋杯・有蓋高杯・甕・壺		
塔の越遺跡	第2次調査SD07	円墳	17	H-11	朝顔・円筒	須恵器蓋杯・有蓋高杯		
塔の越遺跡	09C区207SD	方墳	7	H-11		須恵器蓋杯	緑色凝灰岩製管玉 1	
塔の越遺跡	08Aa・Ac区 149SD	円墳	14	H-11		須恵器蓋杯・有蓋高杯等 土師器甕		周溝に8世紀までの遺物
塔の越遺跡	08Ab区154SD	円墳	15	H-11		須恵器蓋杯・有蓋高杯 土師器台付甕	土坑175SKに鉄鏝・有蓋高杯	
長野北浦遺跡	07A区005SD	円墳	10	6世紀？				
朝日遺跡	SZ1002 （検見塚）	円墳	外周48 内周36	城山2	円筒			二重の周溝
朝日遺跡	SZ1001	円墳	10	城山2		須恵器甕		
土田遺跡	SZ10	円墳	18.5	H-61～H-44		須恵器提瓶・短頸壺・甕 土師器鍋	滑石製銀歯文紡錘車 1	
土田遺跡	SZ11	円墳	18	H-61～H-44		須恵器蓋杯		
川田遺跡	SZ01	円墳	外周18 内周11.5	5世紀後半	朝顔・円筒・形象 （家・人物・馬）	須恵器蓋杯他	鉄鏝他、馬歯？	二重の周溝 8世紀まで周溝を再掘削

表 11 尾張平野における中小古墳一覧表（発掘調査によって検出された古墳）

B. 尾張平野低地部の小古墳（群）

発掘調査において検出される小古墳は、調査の主たる対象ではなく、調査の副次的な（偶然の）産物であることから、分布、墳形・規模、埋葬施設・副葬品等を通じて多くを論じることは難しい。このような現状を理解しつつも、尾張平野低地部において検出された小古墳（群）について類型化し、若干の考察を加えることとする（図422・表11）。

長野北浦遺跡・塔の越遺跡の古墳群は東山11号窯式期を中心として築造され、古墳が長期間継続して築造された状況は認められない。川田遺跡と朝日遺跡で検出された古墳や能田旭古墳は、5世紀中葉から5世紀後半（城山2号窯式期の前後）、長野北浦遺跡・塔の越遺跡に先行して築造されるが、同様に古墳の築造は継続しない。門間沼遺跡の古墳群も築造は東山11号窯式期で、古墳の築造は6世紀に断絶し、大毛池田遺跡を含めて7世紀に古墳の築造が再開する。これらの古墳は築造後も周溝が再掘削され、周溝内には6世紀以降の遺物が包含されることが多い。

また、川田遺跡、朝日遺跡、門間沼遺跡の古墳のよう

に規模の大小に関係なく周溝を二重に掘削する古墳が特徴的に認められる。能田旭古墳の墳形が帆立貝形であること、長野北浦遺跡・塔の越遺跡の古墳に円墳と方墳が確実に混在することを含めて、墳形・規模には多様性を内包する。

川田遺跡の二重に周溝を掘削する古墳SZ01は小規模ながらも家・人物・馬を含む形象埴輪を採用し、馬骨を伴っていた可能性がある。これに類する古墳として、周溝から家形埴輪を含む形象埴輪、須恵器筒形器台を含む土器群、馬骨などが出土した東古渡町遺跡SZ02が想起される。東古渡町遺跡は正木町遺跡や伊勢山中学校を中心とする古渡遺跡群に含まれる遺跡で、方墳群（円墳1基を含む）が検出されている。SZ02は東山11号窯式期に帰属する一辺19.5mの方墳である。同様に二重の周溝をもつ門間沼遺跡の円墳94C区SZ02の周溝やその周囲から、鍛冶関連遺物や韓式系土器等が出土していることは注目される。つまり、尾張平野低地部において検出される小古墳の特徴的な墳形に、形象埴輪を採用、あるいは馬匹生産や鉄器製作等に関係するような新興の集団との関係が反映されている可能性が考えられる。帆

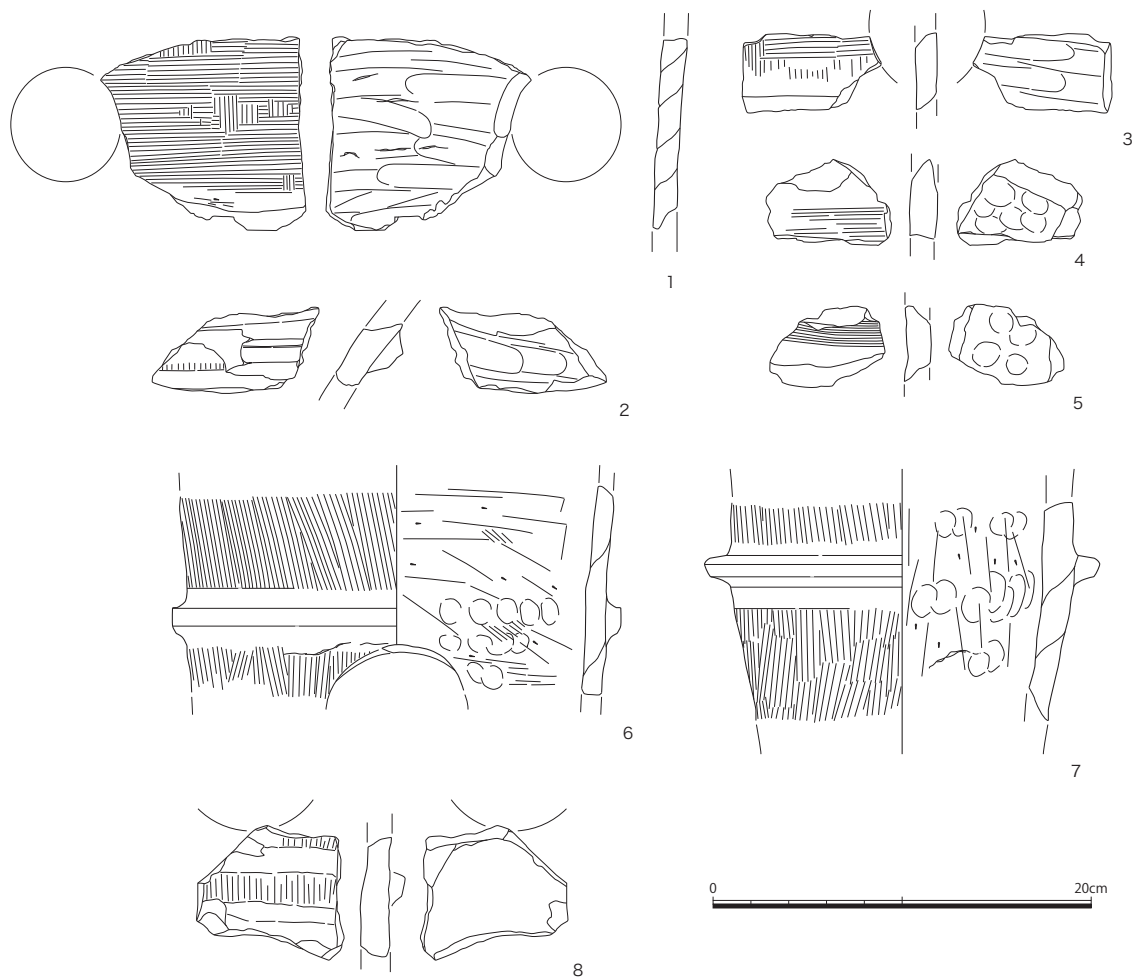


図 423 朝日遺跡 SZ1001(検見塚) 出土埴輪

立貝形前方後円墳である能田旭古墳もこの例に漏れない。

朝日遺跡 SZ1001 (検見塚) は二重の周溝を掘削する中規模の円墳で、周溝からは城山窯やその周辺の小古墳から出土することが多いタテハケ系埴輪と尾張型埴輪が混在して出土する (図 423)。能田旭古墳の埴輪がナデ系、B種ヨコハケ系、尾張型 (C種ヨコハケ系) によって構成され、川田遺跡 SZ01 に伴う埴輪がナデ系の円筒埴輪が主体で尾張型埴輪を含まないことから、これらの古墳における尾張型埴輪の使用は限定的であったようである。尾張型埴輪が定型化し、広く拡散する東山 11 号窯式期に至っても長野北浦遺跡・塔の越遺跡の小古墳群において (尾張型) 埴輪の使用が一般化しなかった点も

こうした状況と無関係ではないように思われる。

なお、塔の越遺跡においては円墳の周溝 (08Ab 区 154SD) 外に周辺埋葬施設 (土坑墓) の可能性がある土坑 SK175 が検出された。門間沼遺跡の円墳の周溝内においても埋葬施設の可能性がある明確な土坑状の掘り込みが確認されている。これらの遺構を周辺埋葬施設とするには不確定な要素を多く含むものの、多様な墳形に反映されるような不均質な集団との関係を考慮しておきたい。この点については良好な検出事例を待って再論する必要がある。

岩倉城遺跡において検出された古墳はいずれも方墳で、東山 111 号窯式期に築造が開始され、古墳時代中期後半から後期を通じて築造が継続する点が特徴的であ



図 424 岩倉城遺跡の古墳

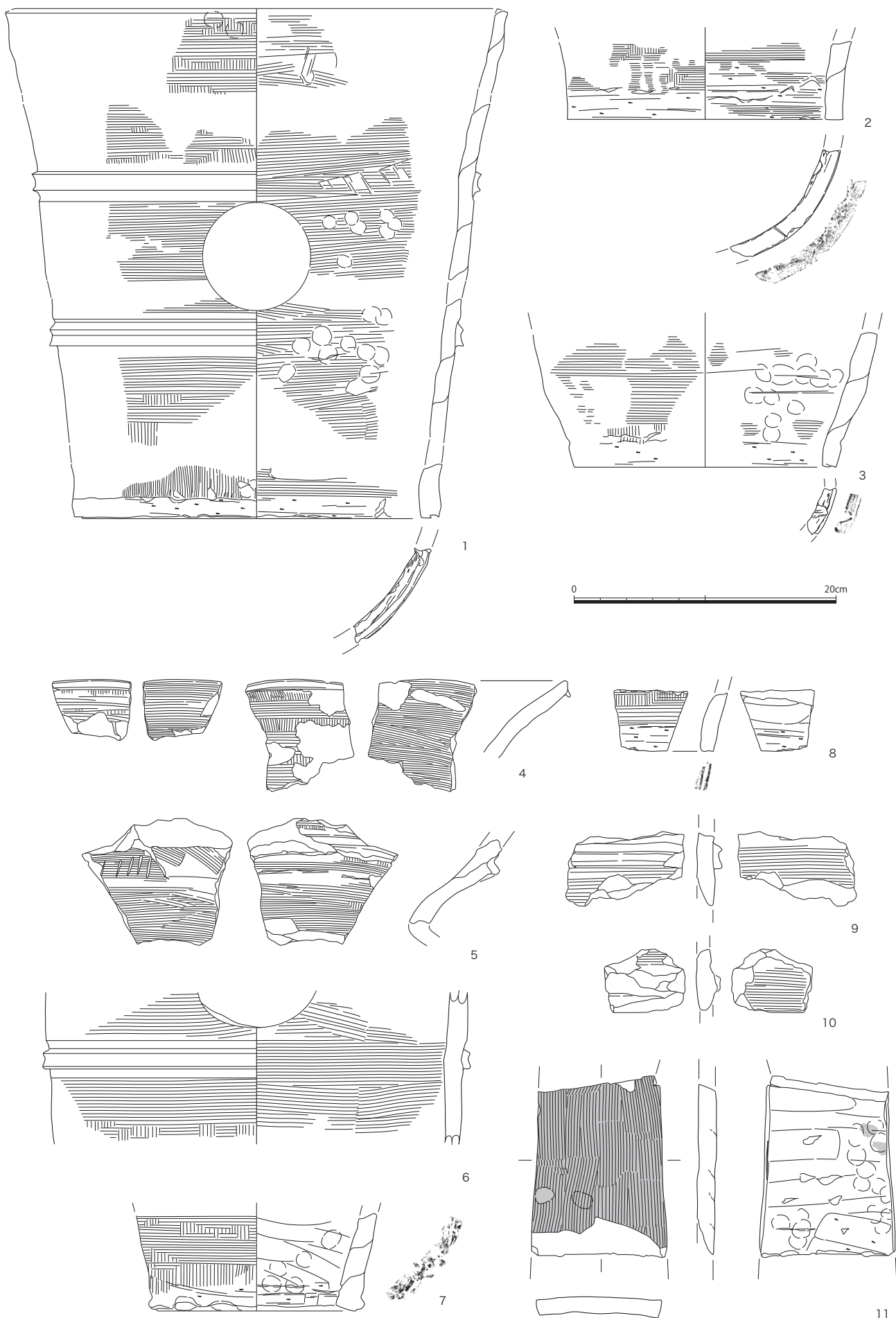


図 425 岩倉城遺跡 2003 年度立会調査出土埴輪

る(図424)。近隣の西出古墳も城山2号窯式期に築造された方墳である。西出古墳を含めて東山111号窯式期から東山11号窯期を通じて埴輪を伴う古墳がほとんどで、埴輪はB種ヨコハケ系の埴輪をわずかに含みつつ、尾張型埴輪を主体とする。図示した埴輪は事務所建設に伴う2003年度の立会調査時(調査担当上野登・原田幹)に出土したもので(図425)、出土した地点から既報告のSZ1301に伴う可能性が高いと思われる。埴輪は二突帯三段(第一段推定12cm、第二段推定10cm、第三段推定12cm)に復原される円筒埴輪(1)を典型として、いずれも回転ヨコハケを施した尾張型埴輪である。底部調整も明確なもの(2、3など)が多い。なお、埴輪が採集されている神宮寺古墳(滅失)、高畑古墳(滅失)もこれらに類する古墳であろう。

一方、権現山遺跡、八王子遺跡、土田遺跡の古墳群は6世紀後半以降に築造が開始される。山中遺跡、大毛池田遺跡、古墳の築造が再開する門間沼遺跡も同様の状況と推測される。古墳はいずれも円墳で、規模は10m前後から30m近くまでのものが認められる。権現山遺跡(1号墳)では川原石積みの横穴式石室が検出され、八王子遺跡や大毛池田遺跡でも埋葬施設が横穴式石室であった可能性が指摘されていることからすると、これらの古墳は埋葬施設に横穴式石室を採用したものが多かったと推定される。

C. 小結

上記の整理から、これらの小古墳(群)を、5世紀後半から後葉までに多様な墳形の古墳が築造されるも築造は継続せず、尾張型埴輪の使用が限定的な古墳群、犬山扇状地の末端、五条川中流域に継続的に築造された方墳群で5世紀後半から後葉を通じて尾張型埴輪を積極的に採用する古墳群、6世紀後半以降に継続して築造され、横穴式石室を埋葬施設とする円墳によって構成される古墳群に大別した。ここではそれぞれを第一類型、第二類型、第三類型として呼称する。

第一類型の古墳群は、それぞれに特徴的な様相が看取されながらも、古墳の分布や古墳を構成する要素は孤立分散的で、空間的・時間的な脈絡に乏しい。能田旭古墳の木製品群(柳沢2009)、これに先行する時期、東山111号窯式期以前(TG232型式期からTK73型式期)の高塚古墳の形象埴輪群(竹内2011)、さらには馬見塚遺跡の土器集積祭祀遺構と鉄製品・石製模造品の遺物群、松河戸Ⅱ式期における福田遺跡や中之郷北遺跡の鍛冶関連遺物等、古墳時代中期に特徴的に表出する様相についても同様な評価が可能であろう。このような評価は

古墳時代中期における尾張平野低地部の必ずしも安定していなかった状況を示すもので、古墳の築造は継続せず、第三類型の古墳群とも明らかな断絶が認められる状況とも深く関係する。これとは対照的に、第二類型とした古墳群は空間的なまとまり、系譜の連続性を示す。

以上、古墳時代中期から後期における小古墳(群)の形成過程から、同時期の尾張平野低地部の社会状況の一端を示した。さらに豊かな社会像を素描する上で、小古墳(群)が分布する微高地が形成される履歴、古墳築造の基盤としての集落や生産域との関係を改めて考察する必要がある。長野北浦遺跡・塔の越遺跡の発掘調査を通じて周辺の景観を復元する意義は決して小さくない。

(早野浩二)

参考文献

- 赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 加納俊介 1991「東海」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣
- 加納俊介 1997「廻間式か元屋敷式か—東国から見た弥生土器と土師器の境界—」『西相模考古』第6号、西相模考古学会
- 北山峰生 2008「メスリ山古墳出土土製品品の検討」『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第3冊、大阪市立大学日本史研究室
- 清家章 1999「古墳時代周辺埋葬墓考—畿内の埴輪棺を中心に—」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
- 瀬川貴文 2011「古墳時代前期の円墳」『名古屋市文化財調査報告書 62 志段味古墳群』名古屋市文化財調査報告 79、名古屋市教育局
- 竹内里紗 2011「高塚古墳出土形象埴輪の再検討—高塚古墳出土埴輪再整理作業報告—」『北名古屋市歴史民俗資料館研究紀要』5、北名古屋市歴史民俗資料館
- 西村歩 2011「近畿」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 早野浩二 2011「東海」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 柳沢一男 2009「熊本県北原1号墳の「盾形石製品」と横口式家形石棺の再検討」『地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』佐田茂先生論文集刊行会

遺跡文献

- 愛知県 2005『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』
- 愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2005『愛知県埋蔵文化財情報20』

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1987『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991『朝日遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994『朝日遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992『岩倉城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1993『山中遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第45集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994『堀之内花ノ木遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2002『川田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第103集

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2003『権現山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2006『島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2009『下津新町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第159集

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2011『御山寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第167集

塔の越遺跡発掘調査団 1988『塔の越遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）』

稲沢市遺跡発掘調査委員会 2003『下津公民館用地埋蔵文化財発掘調査報告書一下津状跡・下津城下層遺跡』

犬山市教育委員会 2001『史跡青塚古墳調査報告書』犬山市埋蔵文化財調査報告書第1集

大垣市教育委員会 1997『曾根八千町遺跡』大垣市埋蔵文化財調査報告第6集

春日井市教育委員会 2006『平成17年度市内遺跡調査概要報告書一大留東島遺跡・神領絲田遺跡・堀ノ内市道遺跡・天王山古墳・松河戸遺跡・南気噴向田遺跡・神領屋敷田遺跡』

春日井市教育委員会 2010『平成21年度市内遺跡調査概要報告書一下大留城跡・東野町西1丁目・神領屋敷田遺跡・松河戸遺跡・堀ノ内表遺跡・天王山古墳』

可児市教育委員会 1994『川合遺跡群』

北名古屋市教育委員会 2010『高塚古墳確認調査報告』北名古屋市埋蔵文化財発掘調査報告

京都大学文学部博物館 1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第6冊

京都府教育委員会 1969『埋蔵文化財発掘調査概報』

慶星大学校博物館 2000『金海大成洞古墳群Ⅱ』慶星大学校博物

館研究叢書第7輯

東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館 2010『東大寺山古墳の研究』真陽社

名古屋市教育委員会 1989『東古渡町遺跡—第一次発掘調査概要報告書—』

名古屋市教育委員会 1991『東古渡町遺跡—第3次発掘調査概要報告書—』

名古屋市教育委員会 2011『名古屋市文化財調査報告書62 志段味古墳群』名古屋市文化財調査報告79

奈良県教育委員会 1977『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊

大阪市立大学日本史研究室 2008『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第3冊

西尾市教育委員会 1994『毘沙門遺跡』

財団法人浜松市文化協会 2002『恒武西宮遺跡』浜松市恒武町恒武西宮遺跡3・6・7次発掘調査報告書

三重県埋蔵文化財センター 2005『第24回三重県埋蔵文化財展 石山古墳』

2. 古代の塔の越遺跡

(1) はじめに

本節では、前章までに提示された稲沢市・塔の越遺跡と長野北浦遺跡の発掘調査成果をもとに、一般に日本史上で古代として区分される西暦7世紀から12世紀における塔の越遺跡の特色を探っていくことで当該遺跡の評価に繋げたい。

これまでの愛知県埋蔵文化財センター並びに稲沢市教育委員会による長野北浦遺跡・塔の越遺跡の発掘調査成果は、古代にとどまらず、古墳時代前期中期を中心とする古墳群や中世以降の盛んな土地利用の痕跡も明らかにしてきた。しかしその中でとりわけ古代の特色を見出そうとするのは、塔の越遺跡が尾張国府跡推定地に東接する位置関係にあるのが最大の理由であるというまでもない。

ただしそれは単に「国府あるいは国衙の続き」という意味ではない。未だ尾張国府跡については、古代から中世を通じて、その中枢である国庁の位置は不明であり、その範囲についても漠然としたものがあるにすぎない。歴史地理学的な考察は重ねられ、考古学的な検証作業もかつては進められたが(註1)、東海地域の他国府で判明した内容と比較すると圧倒的にわからないことの方が多いのが現状である。

つまり、古代の塔の越遺跡を考察することは、場合によっては国府跡あるいは国衙跡の一部を切り取って検討していることになるのかもしれないのである。それだけ重要な命題なのである。

したがって遺跡内容の吟味にあたっては、各国府跡の調査研究での視点を援用することとなる。ひとつは、遺構変遷の分析で建物の方位に注目することと、そこから地区区分と時期区分をおこなうことである。二つ目は、遺物にも注目しながら地区ごとの機能を検討することである。

(2) 塔の越遺跡における

古代から中世の地形的変遷

塔の越遺跡が所在する尾張平野は、特に現在の稲沢市域ではほぼ平坦で高低差をあまり感じさせない。しかしながらこの景観は古代以降にも起きた幾重もの河川の氾濫や開発の結果であり、古代の地形そのものではない。

古代の塔の越遺跡を考察するにあたってはまずこの地形環境の復元をおこなう必要がある。

稲沢市域はほぼ全域が自然堤防地帯である。青木川や三宅川とその支流が屈曲して流れ、その兩岸に自然堤防とその背後に後背湿地が形成される。単純化すると帯状の微高地が畑の畝のように並列する地形がその主体である。とりわけ塔の越遺跡に関わり深いのは三宅川旧河道であるが、本書巻頭でその復元がなされているように、旧河道は現在の大江用水に概ねその名残をとどめ、地籍図や空中写真によって比較的明瞭な痕跡をみることができる。その河道は大きく蛇行し新たな直線河道を形成する直前の状況を示している。つまりそれだけ長期間にわたって自然堤防を発達させてきたといえる。塔の越遺跡は三宅川旧河道左岸に位置し、その遺構面の標高は川に最も近い08G区で5.5m、最も離れた07A区で4.9mである。これはちょうど自然堤防から後背湿地(長野北浦遺跡)へ至る地形断面を表している。また08G区の遺構面では砂層が露出しており、自然堤防の頂部に相当する。大局的には旧河道によって形成された幅450～500mの微高地を見積もることができ、この地形は塔の越遺跡から北に位置する天神前遺跡・治郎丸元屋敷遺跡までが該当すると考えられる。

この自然堤防頂部での土地利用は、塔の越遺跡・天神前遺跡で古墳時代までさかのぼることができるが、その北側の治郎丸元屋敷遺跡・治郎丸土井遺跡は現状で古代から中世の遺跡とされている。付近一帯では弥生時代の遺跡も確認されていないことから、長野北浦遺跡・塔の越遺跡とその周辺が自然堤防形成後最も早くから土地利用がなされた地域として理解されよう(註2)。

このように極めて発達した自然堤防のある旧河道左岸に対して、大国魂神社(国府宮)の所在する右岸では、神社西側の発掘調査地点(稲沢市教育委員会尾張国府跡R地点)ですでに遺構検出面が標高5.0mとなっていて、自然堤防の幅が左岸の半分程度であったことがわかる。旧河道は神社の東・南辺を画するようにして大きく屈曲しており、神社がこの地形をあえて選択していることが想定されよう(図426)。当該地点はさらに西方も含めて尾張国府跡の推定地(政常地区・松下地区他)として発掘調査が実施されているが、明確な遺物の増加がみられるのは9世紀後半以降である。その性格については今後解明されねばならないが、集落形成が塔の越遺跡より遅れるのは確実であろう。

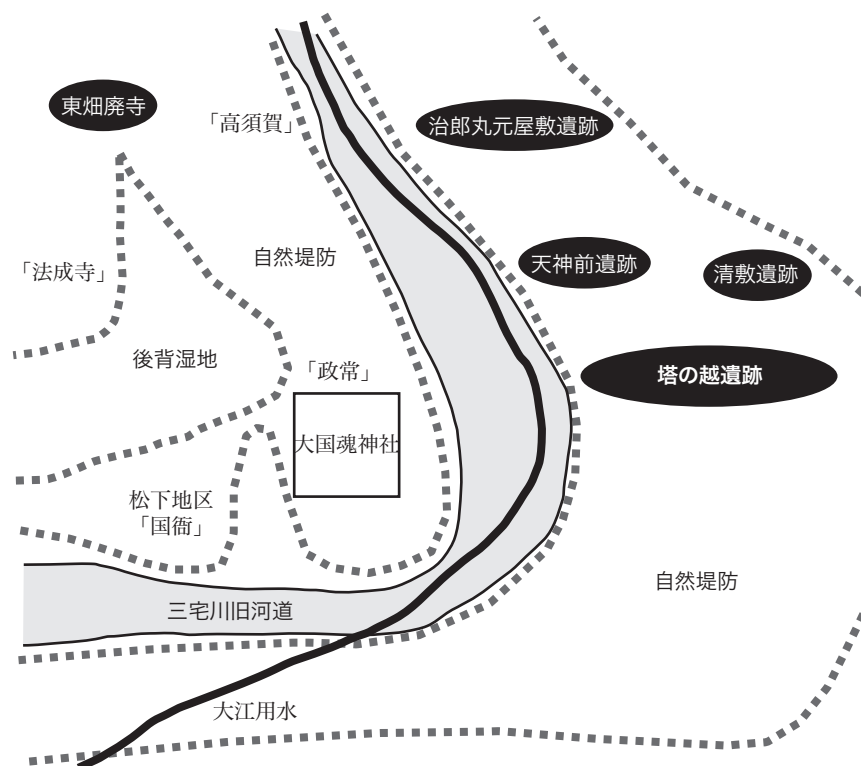


図 426 三宅川旧河道周辺の地形概略と遺跡分布

当然、高位地点は人為的な削平の対象となりやすく、特に東側の長野北浦遺跡は格段に落ち込む場所でもあったことから、中世以降に万徳寺の周辺で耕作地化を進めるにあたって削った土砂で長野北浦遺跡側を埋める整地が行われており、表層の土が東方へ移動している。このことは長野北浦遺跡 07D・E 区や塔の越遺跡 07A 区で斑状をした堆積がみられ、それに中世以前の遺物が含まれることから確認できる。中でも土砂移動の指標としうるのが両遺跡で出土した瓦塔の出土分布である（図 427）。瓦塔は地表に造立する複数の部品で構成される仏教信仰の遺物で、そのため残存状況は表層土の移動に大きく左右されやすい。塔の越遺跡では 08Ab 区・09B 区・稲沢市教育委員会昭和 54 年度調査 B 地点で出土し、

これらは同一個体の破片と考えられるので、後述するように遺跡の中核的な場所に造立されていた可能性が高い。また、そこから東方の低地である塔の越遺跡 07A 区と長野北浦遺跡 07Ba 区で出土した屋蓋部片が互いに接合関係にあり、形状は造立推定地出土の破片と同一である。このことから少なくとも東へ約 250m の土砂移動があったことが考えられる。このように当該遺跡においては、中世以降の土地改変も視野に入れて遺跡の地形環境を考えなければならないのである。

(3) 塔の越遺跡における古代遺構群の開始

まず、古代の塔の越遺跡を検討するにあたって、それがいつから始まっているのか、という点について確認し

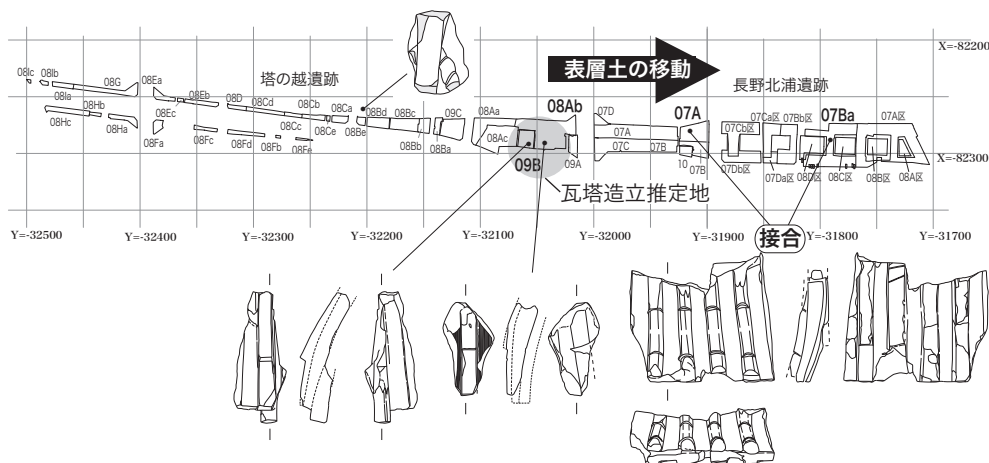


図 427 瓦塔出土地点からみた造立推定地と表層土の移動

ておきたい。その指標となるのが須恵器と土師器であり特に集落に関わる器種として煮炊具が挙げられるが、今次発掘調査の範囲においては、08G区009SXで出土した須恵器甗や土師器長胴甕が最も顕著な資料である。これらは一部(08G-020・021)を除外すると概ねI-17号窯期に相当すると考えられる。他の各調査区で出土している土師器甕も、つまみ上げられた口縁が特徴の伊勢型長胴甕と呼ばれるもので、I-17号窯期から若干さかのぼってH-50号窯期に相当するものと考えられる。このことから当該遺跡における古代の開始が7世紀半ばであり、7世紀前葉を遡るような先行集落の存在については否定的であるといえる。つまり古墳時代中期の古墳群が形成された場所に、推定7世紀半ばになって集落施設の建設が微高地で始まったといえるのである。

しかしながら7世紀後半の遺物が微高地上で広範囲に出土するのは、先に瓦塔出土分布で例示したように後代の開発や流路変化による微高地の削平などによる拡散も考えられるので注意が必要である。特に表土・上位遺物包含層から出土した遺物については著しく原位置から移動している可能性が高く、中・後期古墳やそれに近い7世紀代の遺物の平面的分布状況には年代が古い分注意しなければならない。したがって遺構内出土遺物に限って検討を進めていくことになる。そのようにみたとき、今次発掘調査範囲の西部で検出された性格不詳の土坑08D区018SKではI-17号窯期の須恵器杯蓋・杯身がまとまって出土していることから、当該期に付近で土地利用があったことの確実な証左となる(註3)。それ以外で7世紀後半の可能性が考えられる遺構は、08Cd区010SD、08Bb・Bc区・09C区・07区の掘立柱建物がある。その密度は濃いとは必ずしもいえないが、微高地上の各所で開発が始まったと考えられる。

(4) 遺構の時期と変遷

A. 建物

まずは主要な建物遺構の時期を検討する。調査区ごとに西から進めていく。

竪穴建物群(1)

08Cc区014SI～016SI

後述する溝(1)と溝(2)に挟まれた空間に位置し、互いに一部重複するような位置関係にある。西接する08Cd区007SDも浅い掘り方から竪穴建物の可能性が考えられる。各遺構からはK-90号窯期(9世紀後半)出土している。これより新しい遺物もみられないことから当該期に構築・廃棄されたものと考えられる。

掘立柱建物群(1)

08Bb区掘立柱建物1～3と09C区掘立柱建物1

いずれも国土座標北から西ないしは東へ振れる。ほとんどの建物が西へ59～65°(09C区建物1は東へ25°ということになる)振れるが、08Bb区建物2のみが西へ43°と方位軸を異にする。同建物の柱穴掘り方からは6世紀代までさかのぼる須恵器長脚高杯と土師製把手が確認されたのみで、建物群の中で最古段階のものと想定される。次いで09C区建物1(布掘り掘立柱建物)の抜き取り穴からはI-17号窯期の須恵器杯蓋が出土しているので、7世紀後半中に解体され、その後09C区建物2が重複する位置に建てられている。それと同じ方位軸である08Bb区建物1・3では柱穴から7世紀末の遺物が出土していることから、建物群の構築が概ね8世紀前葉以前に収まるものと考えられ、しかも08Bb区建物2に関しては7世紀半ばを若干遡る可能性もある。古代の塔の越遺跡における初現的な施設であり、その評価が重要になってこよう。

掘立柱建物群(2)

08Ac区

08Ac区ではほぼ南北に方位軸をとる東西棟の掘立柱建物および柵群が検出されている。建物群に先行する井戸とみられる大形土坑(257SX)を埋めた範囲に建物1北西隅側柱(356SK)と建物3南西隅側柱(286SK)が重複している。257SXは斑土が多い堆積状況と出土遺物からO-10号窯期以降に埋め戻されたものと考えられる。また、建物1に関しては報告中で四面廂建物の可能性が指摘されており、廂部分が重複する208SX・201SXの遺物や廂部分北東隅柱351SK出土の灰釉陶器手付瓶(K-14号窯期)から、建物構築時期が9世紀前葉とする見解も生じてくる。なお、当該建物群は少しずつ方位が異なり重複もみられるので複数時期にわたると想定されるが、057SDと建物4の関係(後述)にもあるように8世紀中葉の建物の可能性もあることから、全体として8世紀中葉～9世紀前半にかけての建物群であると考えられよう。

掘立柱建物群(3)

07区・09A区

07A・C区では複数の方位軸からなる建物群(建物1～9、柵1～4)が分布している。まず方位軸で区分してみると、(a)南東～北西グループ、(b)南北グループに分けられる。(a)には大形の柱穴の柵1の他柵2～4と建物5～8が該当する。一方(b)には建物1～4が該当する。(a)のうち建物5・6・8は(b)の建物1・3と重複しそれより新しく、反対に(b)の建物1は(a)の柵

1に重複しそれより新しい。したがって(a)は2時期に区分されかつその間に(b)のグループが存在していることになる。

各遺構の年代は、柵1の柱穴のうち165SK・180SKの柱掘り方からはI-17号窯期の須恵器杯身が出土しており、180SKの抜き取り穴からはC-2号窯期の須恵器杯(完形)が出土している。また344SKからは8世紀前半の須恵器が出土しそれには美濃須恵窯産甕が含まれている。これらを統合すると柵1の構築年代はI-17号窯期で、解体されたのがC-2号窯期と解釈することができる。さらに建物1に関しては、柵1の柱穴と重複する136SK上位層の出土遺物が該当し、それがO-10号窯期古段階の須恵器であることから建物1が8世紀後半に構築されたものと考えられる。これら時期の特定可能な建物以外についてはグループごとに考え、建物1と並列する建物3で括り、建物3に重複する建物6・8と並列する建物5で括ることができる。建物5は建物1に重複していることから先後関係は明らかとなる。以上から1時期目に(a)グループ柵1・2と方位の揃う柵3で7世紀後半、2時期目に(b)グループ建物1・3で8世紀後半、3時期目に(a)グループ建物5・6・8と区分される。3時期目の年代は特定しがたいが、07区内では灰釉陶器が170SBでみられる程度で少数となることから、8世紀末～9世紀前葉に限定されるのではないだろうか。

ところで07区西方の09A区では、掘立柱建物方位軸が南北の建物1がある。この北西隅側柱014SPからは8世紀代の遺物が出土しており、07区の同方位である(b)グループすなわち8世紀後半の建物群に括ることができるであろう。

B. 溝

次に溝遺構について時期を検討する。建物遺構同様に調査区ごとに西から進めていく。

溝(1)

08Cd区004SD・010SDと08Fd区042SX

今次発掘調査地域の中央からやや西寄りに位置する。

北北西から南南東方向へ延びる溝で、国土座標北から西へ約15°振れる。いずれも底面の標高が4.0mで上層が掘り返して拡幅されており同一遺構であるといえる。004SDは010SDの掘り返しによる上層部分で、8世紀後葉の長頸瓶や高盤がある。一方010SDからは8世紀前葉～中葉の須恵器が出土している。一方042SXも上・下層で区分されている。ただし、土層断面図にみる分層線の形状から20層は上層に含まれると判断されるが、遺物は下層として採集されている。報告中でも上・下層で接合関係にあることが記されているのはこのためと考えられる。遺物で多数を占めるのはO-10号窯期古段階の須恵器で、004SDに対応しているといえる。当該溝の機能下限はO-53号窯期の灰釉陶器(08Fd-041)や9世紀代の土師器甕(08Fd-033)で示される。

ところで、08Fd区042SXの西側ではほぼ南北方向に延びる小溝(031SD)が検出されており、出土遺物がO-53号窯期の灰釉陶器で10世紀前半とみられる。またさらに西側には、東北東から西南西方向に延びる小溝(035SD)もある。こちらはO-10号窯期～K-14号窯期(8世紀後葉～9世紀前半)であり、031SDと時期が合わず、むしろ溝(1)の掘り返しの時期に対応するのではないかと考えられる。

溝(2)

08Cd区028SDと08Fe区057SD

北東から南西へ延びる溝で、国土座標北から東へ26°振れる。028SDは逆台形の断面が明瞭であるが057SDはやや不明瞭でしかも028SD底が標高3.5mに対し057SD底は4.3mと高い点にやや問題があるが(註4)、遺物は概ね上・下層に区分され、057SD上層でK-14号窯期(9世紀前半)がみられ、これがほぼ埋没した時期の一端を示す。そして057SD下層と028SD中層からはI-41号窯期～C-2号窯期の須恵器でほぼまとまっており、7世紀末～8世紀前葉に機能していたと考えられる。このことから溝(1)が溝(2)に先行することが確認されるが、先述のように溝(1)は掘り返して機能維持が図られており、両者が8世紀後葉～9世紀前半には共存していたと考えられる。

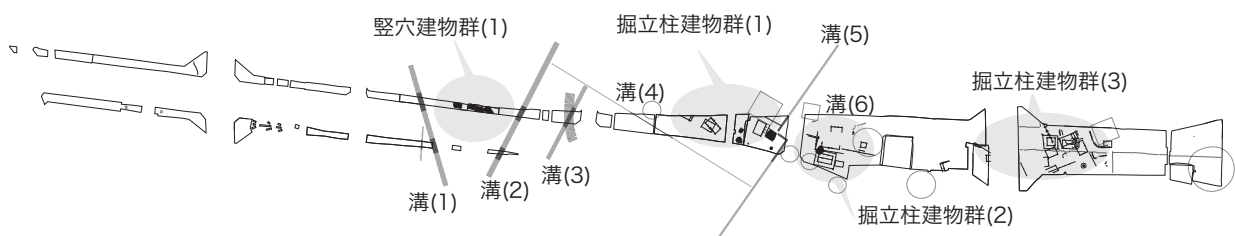


図 428 塔の越遺跡における古代の主要な遺構

溝 (3)

08Ca 区 040SX

溝 (2) の東側に位置する。08Ca 区 037SX (中世の堆積層) 直下での平面形状は不安定であったとされ、その堆積も流水痕跡が観察されている。しかし底では溝 (2) とほぼ同一方向に延びる開削の痕跡が認められ、元来人工物であったものが水流で自然流路のような遺構に変化したとみられる。溝 (2) と近い標高でありながらこちらには水流があったことに注目すれば、意図的に水源へ直結して運河として機能させていた可能性も考えられよう。出土遺物は中層で K-90 号窯期の灰釉陶器がまわっており、それに C-2 号窯期 (1 点 08Ca-026 高杯が H-50 号窯期) の須恵器が混入していることから、開削時期を 8 世紀前葉とし、一時機能停止後に掘り返しを経て 9 世紀代も機能していたと考えておきたい。

溝 (4)

08Bd 区 059SD

検出規模は小溝であるが、削平が激しいため不明な点が多い。それでも 08Bd 区と 08Bc 区にまたがって北西～南東に延び 08Bc 区内で北東へ直角に屈曲しているようである。周囲に塀を伴った痕跡は認められないが、大区画内に対する小区画になるものと考えられる。しかも、囲った内側にこれも周溝のみが残存する円墳の存在が想定される点は興味深い。ともあれ時期は出土遺物から O-10 号窯期の 8 世紀後葉に機能していたと考えられる。

溝 (5)

09C 区 203SD・206SD・220SD

平安時代前葉の井戸 205SE の東側に位置する溝群である。203SD と 206SD は同じ方向に延びており国土座標北から東へ 33° 振れる。並列関係にはなく、220SD を介して 1 本であった可能性も考えられる。したがって 206SD は顕著な出土遺物がないため時期特定が難しいが、203SD と深い関わりで近接時期に開削されたものと考えておきたい。203SD からは 8 世紀中葉の須恵器が出土しており、それ以前の開削であることがわかる。

溝 (6)

08Aa 区 075SD

08A 区建物 4 北側柱列に接して平行しその西側で北へ屈曲する溝である。8 世紀前葉～中葉の須恵器・土師器が出土しているので、ほぼその時期に機能していたと考えられる。また堆積状況から水流があったことが想定される。建物 4 もほぼ同時期の須恵器 (C-2 号窯期～NN-32 号窯期) が出土しており、近接時期であると考えられる。

C. 井戸

古代塔の越遺跡が他の集落遺跡と著しく異なる点として、各時期にわたって井戸が存在していることが指摘できる。井戸についても同様に時期と変遷を考察してみよう。

井戸 (1)

08Ha 区 010SE

出土遺物は灰釉陶器末期のもので 11 世紀前半である。後述する他の井戸の時期とは時期的な空白があることや、その立地が遺跡西端の外れであることから、分けて把握すべきであろう。むしろ三宅川右岸の遺構群の年代に相当している点に注目しておきたい。

08Ba 区・09C 区・08Ac 区の井戸群 (2)～(5)

掘立柱建物群の近辺に 5 基の井戸があるが、最古のものは 09C 区 208SE で、出土遺物は少ないが 7 世紀後半とみられる。次いで (2)08Ba 区 046SE で 7 世紀後半～8 世紀前葉、(3) 同区 047SE で 8 世紀中葉 (NN-32 号窯期) の須恵器一括、(4)08Ac 区 257SX で埋め戻し土に 8 世紀後葉 (O-10 号窯期古段階) の須恵器、(5)09C 区 205SE は枠内から K-14 号窯期の手付瓶と水瓶の一括、の順に展開している。この変遷から、7 世紀後半～9 世紀前半の時期に常に 1 基の井戸が設けられていたことが想定されるのである。

07 区 400SE (6)

井戸掘り方からは 8 世紀中葉の須恵器が多数出土し、枠板内からは O-10 号窯期古段階の須恵器が出土していることから、8 世紀後半に機能していたと考えられる。これは 07 区建物群 2 時期目と対応するであろう。

D. 遺構変遷の総括

以上の項 (A～C) で整理した各遺構の変遷を総括してみよう (図 429)。

7 世紀半ば～7 世紀後半

塔の越遺跡では 7 世紀半ばから後半にかけて、それまで展開していた古墳群に替わって溝と建物群が登場する。最古の掘立柱建物は 08Bb 区建物 2 である。その後掘立柱建物群 (1) を中心に 7 世紀後半は推移し、井戸も併存している。一方、07 区柵 1～3 (掘立柱建物群 (3)) もこの時期に相当するが、柵ばかりで井戸もみられないことから施設の外縁のような位置づけであり、大局的には前者を中核移設としつつ広大な空地という見方ができよう。ただしその中には前代の古墳群の大半が墳丘形状をとどめて残存するという奇妙な景観が展開していたと思われる。

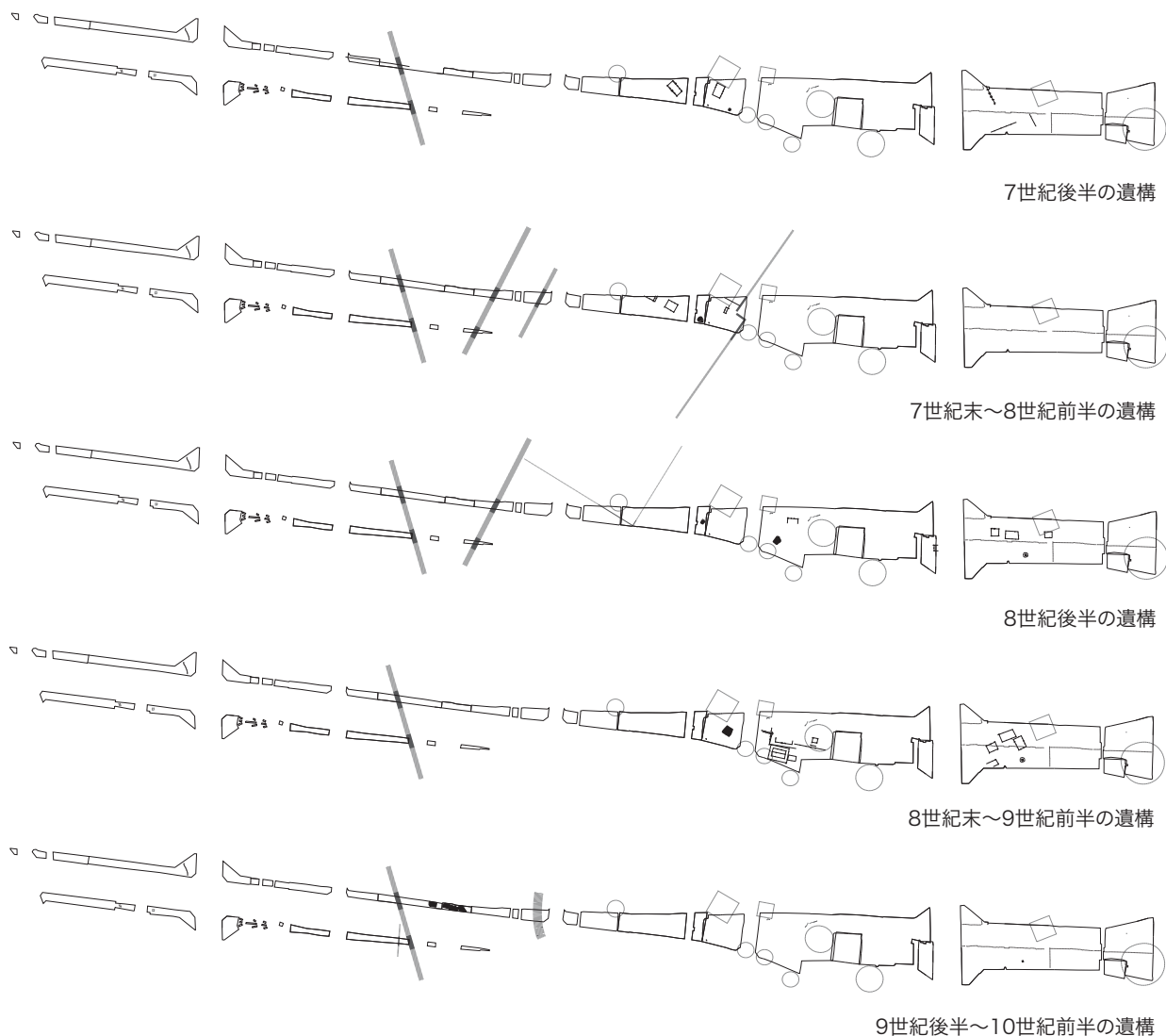


図 429 塔の越遺跡における古代の遺構変遷

溝は、溝(1)が該当する。この溝の方位軸は自然堤防のそれに近く、自然堤防の頂部とその東側の平らな空間を区分する目的があったと推察される。つまり当初は地形に対応して占地範囲を設定しているのである。現状ではこの区画溝の東・南・北辺はその有無も含めて想定できないが、類似する方位軸の07区柵1～3がほぼ遺跡の東端に展開することから微高地の東半部ほぼ全域を占地していたと思われ、その場合区画の東西長は約292mとなろう。

7世紀末～8世紀前半

掘立柱建物群(1)の08Bb区建物1・3と09C区建物2は7世紀末に構築され井戸は08ba区046SEが伴う。建物規模は小さくなったものの井戸が併存していることから、施設の機能は変化していなかったと考えられ、配置変更により中核施設が調査区外になっているものと思われる。

この時期で注目されるのは新たな溝の開削である。溝(2)・(3)・(5)は北東～南西方位軸で、上記建物群と同一

である。溝間の距離は120mである。ただし、溝(2)は明瞭な掘り方で幾度も掘り返して維持を図っていたとみられるのみ対して、溝(5)は規模が小さく東西で対になる関係とは言いがたい。より大きな区画内の小区画を目的としたとも考えられるが、ここより東方で同一方位軸の建物群が見当たらないことを考慮するとやや難しいかもしれない。これに関して溝(2)東側約25mには溝(3)が併行し、当初両者を側溝とする道路が通じていたとすると、当該期の微高地上開発の基軸となる主要道路の可能性を指摘することもできよう。ところで、溝(5)の203SD北東方向延長線上には方墳が存在しており、これを避ける為に屈曲させて206SDへとつないだとも考えられる。そうすると、当該期は面的な開発を進めながらも前代の古墳墳丘にも配慮がなされていたことを示しているようで興味深い。

8世紀後半

塔の越遺跡において8世紀中葉という時期区分で遺構を抽出するのはやや難しい。具体的にはNN-32号窯

期の須恵器を含む遺構であるが、大半は8世紀前葉の遺物と相伴しており、この時期に大きく進展した開発の延長にあるものと思われる。掘立柱建物群(2)の建物4は当該期の可能性もあるが、むしろO-10号窯期古段階の遺物が出土する遺構に着目すると、建物群方位軸の大幅変更がなされていることがうかがえるのである。

南北方位軸を採用する掘立柱建物は、掘立柱建物群(2)から東方に展開する。規模は8世紀前葉のものと変わらず2間×3間を主体としており格段に大きなものはない。07区では新たに井戸400SEが構築され、遺跡東端が中心になった印象もあるが、掘立柱建物群(1)のエリアでは08Ba区047SEが機能しており、ここも何らかの施設が設置されていたものと考えられる。加えてその南側に位置する溝(5)の方位軸は8世紀前葉のそれに符合しており、この区画はリセットされずにそのまま引き継がれた可能性が高い。また溝(1)は7世紀後半に開削されて以来の大規模な掘り返しがなされているが、向きが大きく変更になった形跡はない(註5)。つまり新たな方位軸線が採用されても、統一された方格地割で一面に整地し直すことはせずに、従前の区画に追加して開発エリアを拡大していったのである。

注目すべきなのは古墳群が密集する09C区他のエリアに建物が進出していることで、古墳を削平しながらの開発がこの時期に始まったことを示している。

8世紀末～9世紀前半

前の時期に始まった古墳の削平が進んでいく。それによって掘立柱建物群(2)が形成されていく。当該調査区では調査不能範囲もあって建物配置と全体像の復元ができていない点が惜まれる。特に建物3や柵の想定が報告されたもので良いかどうかは、今後検討すべき課題である。また建物1の身舎については妥当であるとして廂については検討が充分であるとは言いがたい。仮に四面廂建物であるとするならば、これを中心とした施設の展開が想定されよう。

溝(2)は08Fe区057SD上層でK-14号窯期の灰釉陶器が出土しており、下層の8世紀前葉の須恵器群との間に空白期間がある。したがって当該期に掘り返されたと考えられるが、掘立柱建物群(2)はこれと方位軸を揃えるようなことをしていない。また、井戸09C区205SEも従前の区画に合わせたのか建物との向きに違いがある。ただし、両者間の溝(5)は既に埋没しており、一連の空間として利用されていた可能性も考えられる。

9世紀後半

これまで掘立柱建物が圧倒的な展開をみせていた塔の越遺跡であるが、この時期には堅穴建物が中心の景観へ

と変化する。最も明瞭な検出状況にあるのは堅穴建物群(1)であるが、それ以外の調査区で堅穴建物と確定できる遺構はほとんどみられない(註6)。なお、建物自体は一般的な大きさであるが、遺物はここで三足皿が出土し07A区170SBでは耳皿が出土するなど、流通した製品は通常の集落にはあまりないものが含まれている。

溝(2)はほぼ埋没し、溝(3)は水流によって形状が変化し、堅穴建物群の東方で運河のような使われ方をしていたとみられる。この頃には溝(1)は埋没が進み、08Fd区031SDのような小溝が溝(3)と対になるような関係となり、両者間が集落域となっていたと考えられる。また掘立柱建物群(2)もほぼ廃絶し、かつて7世紀半ばに中核な施設を設けた空間の中心は廃れ、その周辺部分で集落が継続するようになっていたのである。

10世紀～11世紀前半

10世紀以降は、遺跡西端の井戸(08Ha区010SE)が機能していた程度で、そこから東方の集落はほぼ廃絶していたとみられる。なお当該遺跡では、山茶碗の出土が極めて少ないので、この後中世を通じて集落としての利用はなかったと推察される。井戸の立地についても旧三宅川右岸で新たに展開し始めた集落との関係で考えるべきで、川を挟んだその縁辺にあるといえよう。また、当該期には交通路である川へ直接アクセスできる環境が重視されたものと考えられる。ともあれ塔の越遺跡の古代はここに終末となる。

(5) 出土文字資料の特徴

ここで出土遺物について、特徴的な点を抽出して検討してみる。塔の越遺跡では、須恵器・灰釉陶器の供膳具が多数を占め、須恵器壺・甕類などの貯蔵具や土師器甕などの煮炊具は少ないように見受けられる。この指摘は、定量的な集計を行っていないのであくまで印象でしかない。しかしながら通常の古代集落の場合、須恵器と土師器の重量比較でほぼ同量であることは豊田市・水入遺跡での遺物整理結果から明らかで(註7)、おそらく塔の越遺跡では圧倒的に須恵器・灰釉陶器の重量が大きいと予想される。

さらにその内容では、緑釉陶器皿の素地が流通しているなど、通常の集落ではみられない特殊な製品の存在を挙げることができる。また09C区205SEで水瓶とともに出土した銅鉗(銅製のピンセット状箸)はまさに祭祀具であり、井戸が祭祀場の一面を占めていたことを裏付けるものである。これら特殊な遺物によって塔の越遺跡を際立たせることはもちろん可能であるが、個別の事例紹介に終始してしまうおそれもあり、尾張国府跡推定地

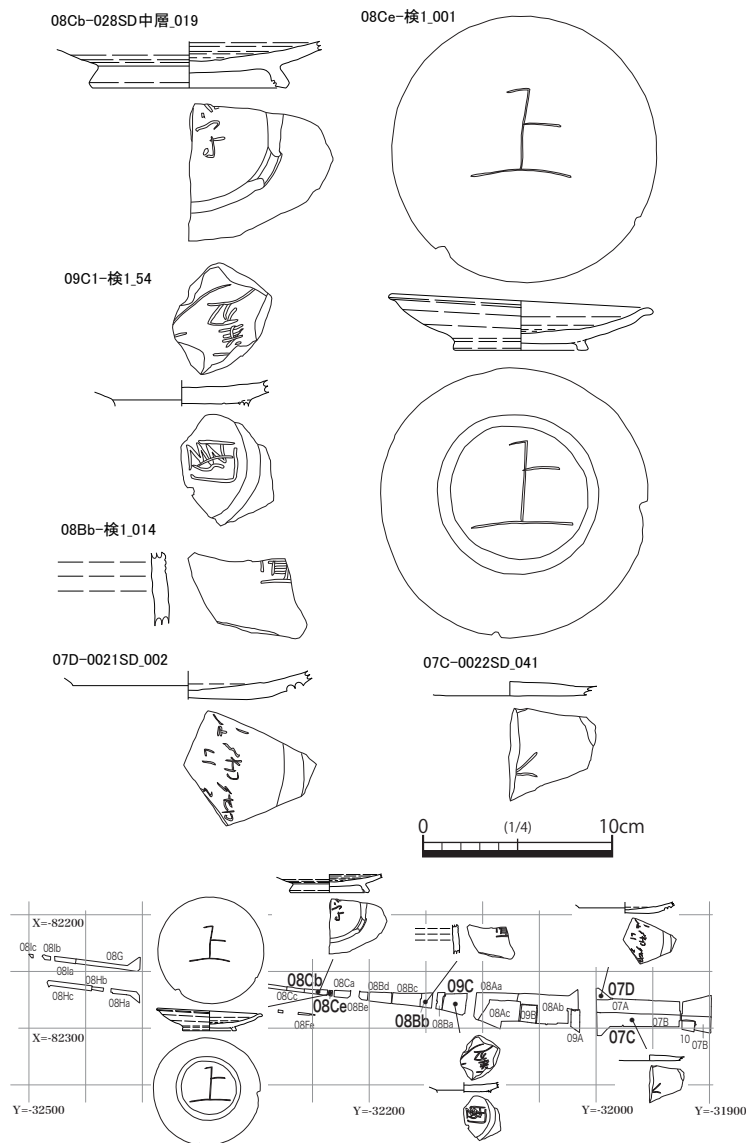


図 430 塔の越遺跡の刻書土器実測図とその分布状況

の発掘調査成果との比較の中で考究しておきたいと考えている。

そこで現状で通常集落と内容的に比較可能な遺物として出土文字資料に注目してみたい（図 5）。しかしながら報告で明らかのように、当該遺跡における墨書土器の出土は極めて少ない。これは墨書土器が増加する 9 世紀以前に遺跡の中心時期があることも関係するが、9 世紀後半以降の遺物が多い尾張国府跡推定地の調査成果や、周辺遺跡での出土状況も加えてもそれほど多くない印象がある。

そのような状況ではあるが、塔の越遺跡では刻書のある須恵器が 6 点以上出土しており、それらが窯記号のようなものではなく文字が刻まれている点で、通常集落との相違点であるといえる。まずは出土状況を確認すると、「口守」は溝 (2) (08Cb 区 028SD 中層) で出土し 7 世紀末～8 世紀前半とみられる。07 区では「御力」の習書が 07D 区 0021SD で出土し、「口」は 07C 区 0022SD で出土している。内外面に「上」刻書のある皿、やはり

内外面に「國」「蓋」とある器、「宣」のようにもみえる「口」は検出面出土であるがいずれも 8 世紀～9 世紀前半に建物群のあるエリアに分布している。

須恵器や灰釉陶器の刻書は生産地（窯）でなされ、生産管理の目的以外ではおそらく供給先を意識したものと考えられるが、その中に「守」や「國」がある点は、供給先の性格をある程度示しているといえる。すなわち「守」は国司の長官であり、「國」は国庁などの国府施設である。したがってこれらの文字資料が塔の越遺跡で集中的に出土している点は、当該遺跡が国府施設の一角である可能性を想起させるのである。

一方、墨書土器は 07C 区 400SE の枠内で出土した内面に漆付着の須恵器無台碗の底部外面に「口口」とあるのが数少ない事例である。全国的にみると、墨書土器の存在から国府などの官衙施設を想定することが多いのであるが、塔の越遺跡を含めて尾張国府跡とその周辺では、墨書土器からのアプローチは難しいと考えられる。しかし視点を変えてみると、国府が優先的に使用できる窯があるとすれば、供給先や使用者を予め特定した製品を作らせて、そのことを刻書によって銘記させることが可能であるから、器に墨書する必要が基本的になくなると考えられないだろうか。小牧市を中心に分布する尾北窯の経営には、これまでの研究で官の関わりが強調されているが、このような窯業地が背後にある国府の土器供給体制については、供給先の状況も詳細に検討し、他国との比較も必要になってくると思われる。

(6) 国司館の可能性と

尾張国府域としての塔の越遺跡

前項までで示した遺構変遷と出土文字資料に関する成果をまとめて、ここでは古代における塔の越遺跡の評価について考察する。

まず問題になるのが、7 世紀半ばに始まって同後半にかけて成立した、大形の掘立柱建物と井戸を中心とする広大な空閑地である。その立地からすると国府に関わる施設の初現を推測させるのであるが、現状の国府研究では、国府の整備は 8 世紀第 2 四半期を想定するのが通説的であり、近年になって 7 世紀末から 8 世紀初頭と

する意見も提出されている(註8)。しかしながら当該遺跡ではそれよりも遡って何らかの施設が構築されており、位置づけについては慎重に進める必要があろう。特に、前代までの古墳群中にあることから、葬・墓制との関連も視野に入れておかねばならない。

その点で7世紀末～8世紀前葉に相当する掘立柱建物群(1)と溝(2)・(5)は、同一方位軸がより多数の遺構で認められ、一定の区画を設定しその内側をより充実させる方向で構築されていることが重要である。その性格としては「□守」刻書須恵器が示すように国守の存在が想定され、かつ政務には直接関わらない井戸を併存していることから、国守の日常的な空間である国司館を考えておきたい。また、9世紀前半に機能した井戸 205SEの枠内からは、シカなどの動物遺体各部位が各層で出土しており、肉食にかかわる痕跡と考えられる。その一方で、水瓶や銅鉗は祭祀の痕跡であることから、井戸を利用したのは肉食と祭祀の両方を行う立場にあったと考えられ、ここからも上位階層である国司の居住施設という性格が導かれる。したがってこの性格は、掘立柱建物群(1)から同(2)へと移行しながら9世紀前半まで引き継がれていたと思われるが、上記で問題にしたように7世紀後半まで遡らせて評価できるかどうかは今後の検討課題である。

そして、近年の国府研究でも明らかにされていることであるが、尾張国府においても統一された方格地割で街区が形成された痕跡は認め難い。当初は河川とそれが形成した自然堤防などの微地形に合わせた方位軸による直線道路を構築し、その後新たな方位軸の区画が生じてもそれまでの軸線は容易に破棄していない。問題はこの直線道路網が及んだ範囲であるが、塔の越遺跡東方低地の長野北浦遺跡において、7世紀後半以降に開削されたとみられる併行する溝群が検出されている。溝群は3条からなり西南西から東北東へ延びている。最も外側どうしの間隔は約14mで中の1条は北から約4m、南から約10mの位置にある。これらが直線道路の側溝であるとなると、国土座標北から約70°東へ振れる軸線を採用していることになる。これは07区柵2(7世紀後半)のそれと同一であり、7世紀後半の方位軸が微高地を外れて東方の低地にまで及んでいたことが示されるのである。ただし長野北浦遺跡では古代の建物は検出されていないので、建物群景観の有無を国府域の定義に該当させれば、ここは国府域外となろう。尤も低地帯をさらに抜けた東方約500m先には別の微高地があり下津遺跡群という古代から中世の重要な遺跡群が展開する。先述したように稲沢市域は、微高地が畑の畝あるいは湿地に浮

かぶ島状に展開する地形が基本であり、なおさら連続する方格地割による街区形成は困難であり、今後の研究の進展によっては下津遺跡群も国府域の「飛び地」として機能していた可能性が示されるかもしれない(註9)。

加えて、塔の越遺跡に国司館の1つを想定するならば、そこから北のさらに標高が高くなる天神前遺跡・清敷遺跡・治郎丸遺跡あたりに、8世紀を中心とする国庁の存在を予想することも可能になってくるであろう。今後の塔の越遺跡を含めた一帯の考古学情報の蓄積と整理がより一層重要になると思われる。(永井邦仁)

註

- 1) 尾張国府の所在地に関する調査研究史は北條 1996 にまとめられている。歴史地理学的では水野時二の研究(水野 1959)が最も参照され、考古学的な検証作業は1977年から1988年まで稲沢市教育委員会によって実施された尾張国府推定地での発掘調査(北條ほか 1979～1989)が基礎とすべき成果である。
- 2) しかし一方で旧河道が塔の越遺跡西端で大きく屈曲していることから、洪水時にうける影響は大きく、08G区・同I区での不明瞭な堆積・遺物出土状況はそれに関わっているのかもしれない。
- 3) 08D区 018SKは竪穴建物と推定される遺構 009SKに掘り込まれる推定長軸約2mの細長い土坑である。明瞭な掘り方などの形状から古墳時代終末期の土坑墓である可能性も考えておきたい。
- 4) 08Fe区 057SDは極端に狭い調査区内で検出されており、その底まで完掘できているか疑問がないわけではない。しかしながらそうであったとしても出土遺物が示す時期相は08Cb区 028SDとほぼ共通しており同一遺構を完全否定するだけの根拠はない。
- 5) 報告では、08Fd区 042SX上層はその検出状況からはほぼ南北のラインが想定されているが、延長である08Cd区 004SDでは変化がみられないので、全体的には変更がなかったとみている。
- 6) 07A区 170SBは浅く平らな遺構を竪穴建物跡と認識しており、確かに9世紀後半以降の遺物も出土している点は重要である。しかしながら竪穴建物群(1)に比較して単独で存在するなど建物群の一角とするには証拠が少なすぎるといえる。
- 7) 豊田市・水入遺跡では古代の須恵器と土師器に限って総重量を計測した結果、須恵器が42%、土師器が58%であることが示された(永井 2005)。
- 8) 大橋泰夫氏は国府跡の下層遺構や年代観の見直しにより、国府成立を7世紀末まで遡らせる見解を示している(大橋 2011)。
- 9) 稲沢市教育委員会による尾張国府跡Z地点の発掘調査は、三宅川旧河道右岸におけるO-10号窯期(8世紀後葉)の竪穴建物群の存在を明らかにした。このことから、右岸微高地にも8世紀代の集落が展開していることが示される。これも塔の越遺跡から見れば「飛び地」のような立地にあたるが、大国魂神社からみると北側の若干標高が高くなる地点であることも重要である。

参考文献

- 大橋泰夫 2011 「古代国府の成立をめぐる研究」『古代文化』第
63 卷第 3 号、財団法人古代学協会
- 田中広明 2006 『国司の館』学生社
- 永井邦仁ほか 2005 『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター発掘
調査報告書第 108 集
- 北條献示 1996 「尾張国」『シンポジウム 2 国府—畿内・七道の
様相—』日本考古学協会 1996 年度三重大会資料集
- 北條献示・岩野見司・日野幸治ほか 1979～1989 『尾張国府跡発
掘調査報告書（Ⅰ）～（Ⅺ）』稲沢市教育委員会
- 水野時二 1959 『尾張の歴史地理』名古屋鉄道

第6章 総括

長野北浦遺跡・塔の越遺跡全体の変遷過程と要点について整理すれば以下になる。

①期：古墳前期前半以前

長野北浦・塔の越遺跡から出土した該期の遺構・遺物は縄文晩期に属す定角式石斧1点のみであり、弥生時代や古墳前期前半期の資料は出土していない。当の磨製石斧にしたところで由来は全く不明であり、遺跡周辺では長期にわたって人間活動の痕跡は認められない。

縄文晩期から弥生前期にかけての堆積層と推測される黒色粘土層は標高約6mを測る現地表はるか下の標高2.7m付近にあり、古墳前期後半の推定旧地表面高度とは3m程の差がある。2000～3000年の間に約3m堆積したということだが、おそらく弥生中期後葉から弥生後期前半にかけて河川活動のピークがあり、青木川・三宅川、日光川等古木曽川水系の溢流によって地表面の大規模かつ不断の更新が進行したのであろう。

②期：古墳前期後半

鬼頭 剛氏による表層地形の復元によれば塔の越遺跡は三宅川左岸の自然堤防高位に、長野北浦遺跡はそれから少し低い谷筋に位置している。地形的に高所は前者だが、まず長野北浦遺跡を中心に居住地や墳墓等が設けられた。しかし期間は短期で、遺構の分布も極めて散漫であり、長期定住は窺えない。安定していたはずの微高地頂部において遺構・遺物の分布は無く、破壊を受けた痕跡も認められないので、居住地・墓地・生産地のトリニティーがどこで、どのように確保されていたのかが問題になる。

なお、塔の越遺跡08Ab区・09C区等で認められた不安定な遺構の検出状況や遺物群の出土状況からこの時期にも大規模な洪水が窺えるので、①期に続く自然堤防形成の最終段階であったと考えられる。竪穴建物や円墳・方墳はその最中に営まれたものであり、それ故に前後の脈絡を欠くことになったと考えられる。

③期：古墳中期～後期

長野北浦遺跡・塔の越遺跡ともに墓域となる。先行する円・方墳とは距離を置いて新たに円墳や方墳が築かれる。一部に埴輪を伴うが、樹立して圍繞されることはなかったらしい。早野浩二氏は稲沢市教育委員会の調査成果や採集品の分布から多数の墳墓が展開する景観を復元している。

④期：7～8世紀前半

塔の越遺跡の東部では井戸を伴う掘立柱建物群が形成され始める。建物の周辺には前代の墳墓の高まりが遺存しており、両者からなる景観が広がっていた。墳墓の周

溝からは継続して遺物が出土しており、それが喪葬儀礼の継続を示すのかどうか不明だが、周溝が埋まり切っていなかったことは確かである。長野北浦遺跡の古墳前期の方墳の北では軸線をあわせるように溝が平行して数条掘削されており、墳墓自体にもその高まりを使用した施設が存在が疑われる。なお、全域に分布する黒色化層は、樹林の伐採による草地化（とその焼却による草地の維持と炭化物の集積）を示しており、長野北浦・塔の越遺跡における人口上昇だけでなく周辺エリアにおける遺跡増加も合わせて中枢形成への方向性が明らかになる。

⑤期：8世紀後半～9世紀

塔の越遺跡のピークとなる時期で、区画溝（水路）や柵列による地割りが施行されて、井戸を伴わない竪穴建物群と井戸を付属させる掘立柱建物群とが分離して併存する。特に、塔の越遺跡09C区周辺で認められた重厚なつくりの井戸と掘立柱建物群の変遷は、国府に関連する施設存在とその継続を示すものとして注目される。永井邦仁氏はここを「国司館」の一つに想定しており、北條献示氏が課題とする「前期国府」の所在地解明の手掛かりともなろう。

⑥期：10～11世紀

塔の越遺跡の東部から長野北浦遺跡にかけて遺構は激減し、全域でも緑釉陶器が極めて少ないことから遺跡のピークが過ぎ去ったことが窺え、周辺は閑散とした景観であったろう。08Ha区で検出された井戸は塔の越遺跡の西部に重心が移ったことを示しており、三宅川西岸に「国府」（北條献示：「後期国府」）がようやく浮上する。

⑦期：12世紀後半～14世紀前半

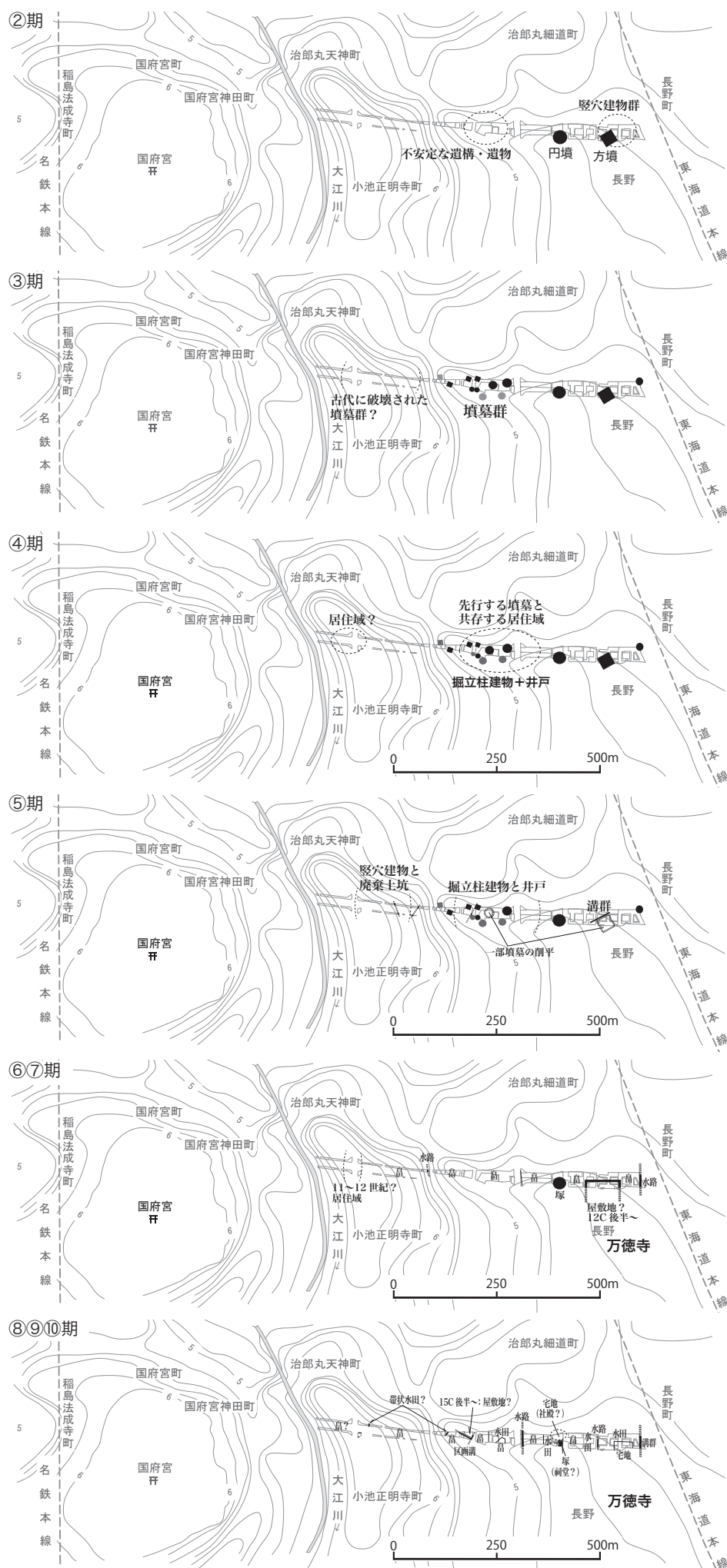
自然堤防の頂部付近での人間活動はほとんど認められず、東へ下った長野北浦遺跡で区画溝を伴う屋敷地の一角が姿を現す。「万徳寺」を核とする集落成員の階層分化を示すものであろう。奥野絵美氏は出土昆虫から周辺に畠が広がる開地環境を想定している。

⑧期：15世紀後半～16世紀

塔の越遺跡では09C区で区画溝や柱穴が見つかったので例外的に屋敷地？が存在した可能性を除けば、長野北浦遺跡を含めて全域で遺跡形成は低調となる。当該期の遺物が近世の溝から出土してもわずかで、遺構周辺の土地利用のあり方に変化が無いことを示す。⑦期の万徳寺を核とする集落の拡大とは対照的にこの時期に収束に転じたのであれば、15世紀に顕在化する集村化に相当する可能性がある。

⑨期：17～18世紀

17～18世紀にかけて長野北浦遺跡周辺の水田化が



進行する。そして、一部に水田化を免れた畠を中心に盛土が行われて宅地が形成される。おそらく、この時期に長野北浦遺跡において古代から中世にかけての遺構群の大規模な破壊が進行したものと思われる。

⑩期：18世紀後半以降

長野北浦遺跡では柱穴の底に
板材（もしくは角材）を据えて
基礎とする掘立柱建物群が展開
する。垣根の植込み跡のような
溝が東西両辺と北辺に認められ
るので、万徳寺周辺の集落が再
度拡大して新たな宅地を形成し
たものと考えられる。柵列や複
数の井戸群が検出されているの
で単一の宅地ではないようだが、
近世農村の一端を示しているこ
とは確かだろう。

塔の越遺跡東端で見つかった古墳前期の円墳もこの時期までは外観が変貌しながらも残丘として存続していたが、最終的には19世紀になって削平された。円墳の北側には井戸や柱穴群が分布しており、いわゆる宅地の一角を構成している。仮に残丘の上に「祠堂」があり、その関連施設ということであれば「長野」村の天保村絵図にある西側の「社」に相当しそうだが、詳細はわからない。いずれにしても⑩期は、最終的には現代にまでつながる「長野」集落の近い歴史を物語る。

一方、塔の越遺跡では⑧期に区画溝が設けられた09C区周辺に再び溝が掘削されるが、屋敷地の様相は窺えない。西方では水路状の幅の狭い水田がいくつか検出されており、畝地帯を貫く用水（帯状水田）があり、そして所々に樹林が島状に点在する景観であったのだろう。



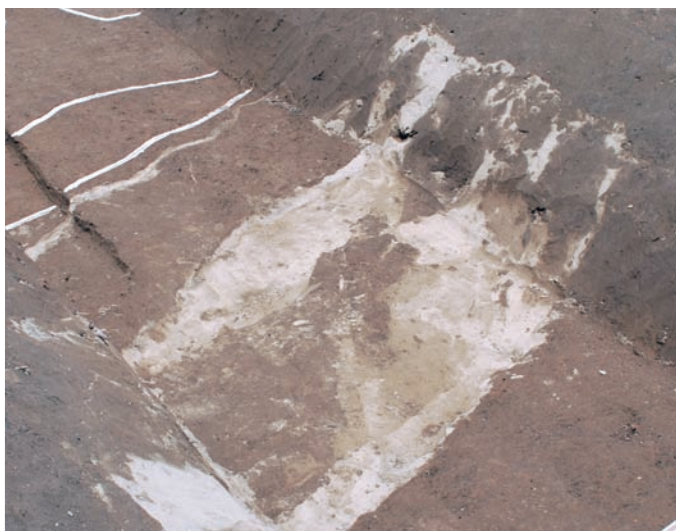




長野北浦遺跡・塔の越遺跡から北方を望む



08G 区 西部 2 面近景 西から



08G 区 011SD 周辺、噴砂検出状況 南東から



08G 区 西部 2 面 南西から



08G 区 検出 2 遺物群 2 南から



08G 区 検出 2 遺物群 2



08G 区 検出 2 遺物群 2



08G 区 検出 2 遺物群 2

4 塔の越遺跡写真図版



08Ha 区 1 面西部近景 東から



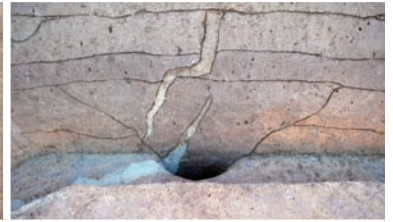
08Ha 区 010SE 土層断面 北から



08Ea 区 1 面西部近景 東から



08Ea区 2面西部近景 南東から



013-015SK 南から



014SK 南から



013SK 東から



015SK 南から

004SK 南から 007-008SK 南から
011SK 南から 012SK 東から
016SK 南から 017SK 南東から
018SK 南東から
019-020SK 南東から



08Ea区 遺構



08Eb区 1面全景 西から



08Eb区 1面東部近景 北東から



08Eb区 025SX 土層断面 西から



08Eb 区 022SK 遺物出土状況 北から



08Eb 区 022SK 土層断面 北から



08Eb 区 023SK
遺物出土状況 南西から

馬の歯？



08Eb 区 023SK 遺物出土状況 南から（鉄クギはスケール代用）



08Eb 区 023SK 土層断面 西から



08Eb 区 023SK 遺物出土状況 西から



08Fa区 1面遺構近景 南西から



006SK 東から
007SK 北から
008SK 北から
009SK 南から



08Fa区 003SX 遺物出土状況 南から



08Fa区 005SK 検出状況 南から



08Fa区 010SK 土層断面 南から



08Fa区 北壁土層断面 南から



08Fa区 西壁土層断面 東から



08Fc区 1面遺構近景 北東から



017SK 土層断面 東から



018SK 土層断面 東から



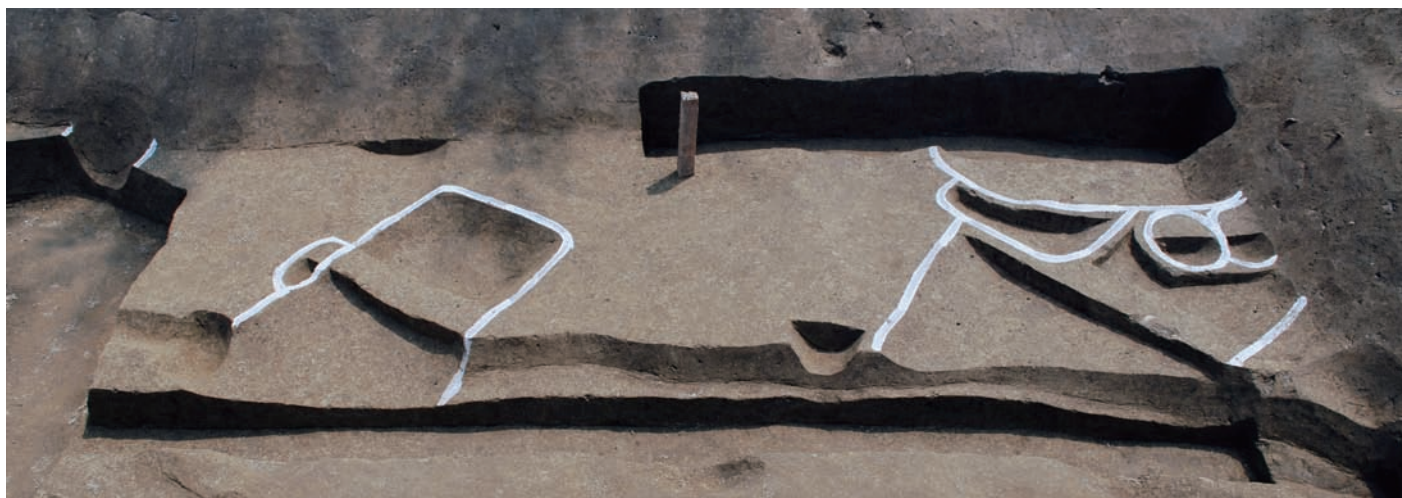
019SK 土層断面 東から



024SK 土層断面 南から



08Fc区 022SK 土層断面 北から



08D区 東部遺構近景 北から



08D区 検出1遺物群



08D区 001SK 遺物出土状況



08D 区 西部遺構近景 北東から



08D 区 009・018SK 土層断面



08D 区 018SK 遺物出土状況 南東から



08Cd 区 全景 東から



08Cd 区 西部遺構近景 東から



08Cd 区 010SD 完掘状況 北西から



08Cc区 検出状況 東から



08Cc区 遺構近景 東から



08Cc区 016SI 掘り下げ状況 南東から



08Cc 区 014SI 掘り下げ状況 南から



08Cc 区 014SI 完掘状況 南から



08Cc 区 015SI 検出状況 南西から



08Cc 区 015SI 埋設土器 南東から



08Cc 区 015SI 床面検出状況 南から



08Cc 区 015SI 埋設土器 東から



08Cc 区 015SI 掘り下げ状況 南から



08Cc 区 015SI 完掘状況 南から



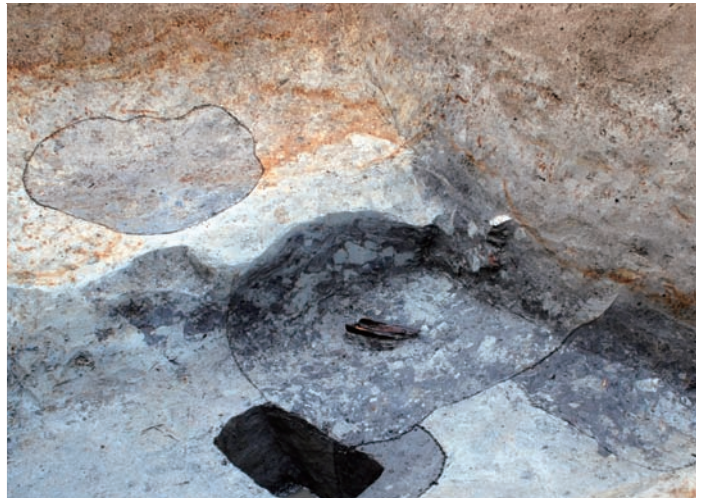
08Cc 区 015SI 埋設土器完掘状況 東から



08Cc 区 015SI 土層断面 東から



08Cb区 遺構検出状況 南東から



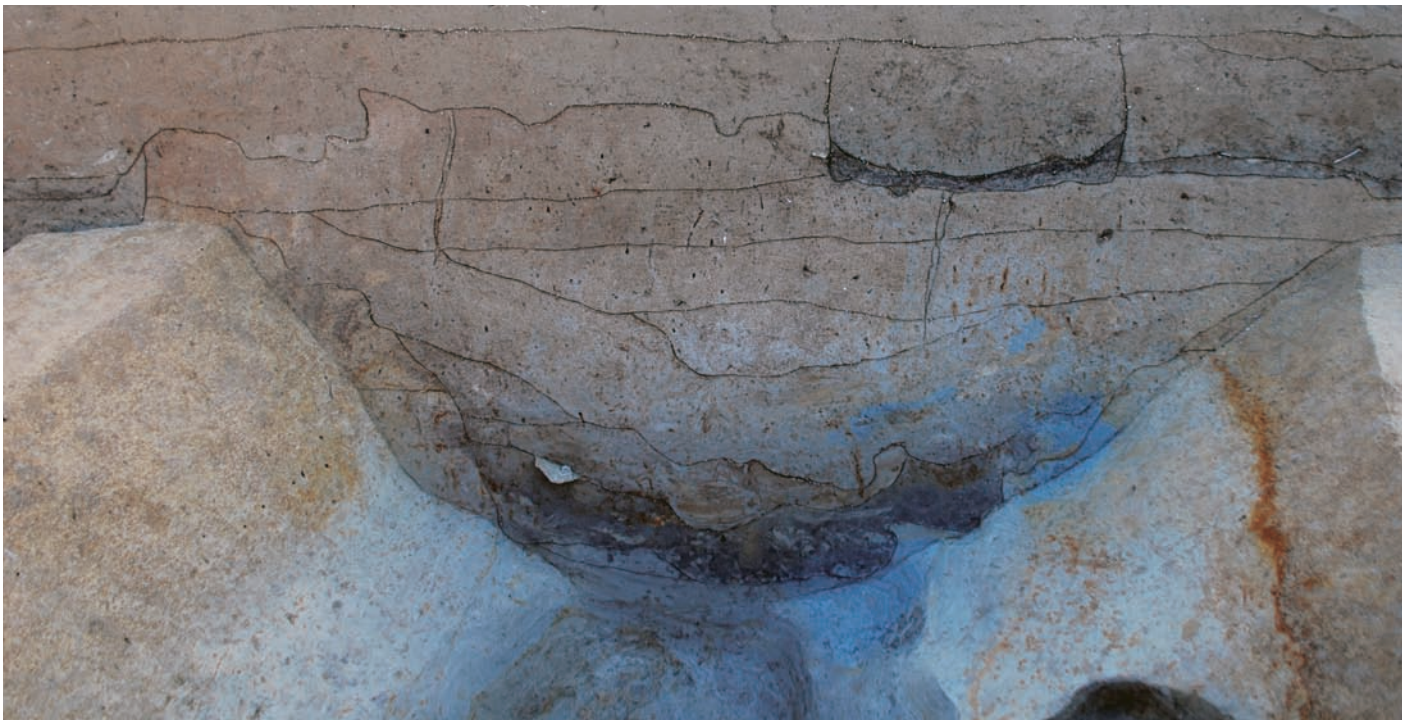
08Cb区 032・035SK 検出状況 南東から



08Cb区 028SD 周辺近景 南東から



08Cb区 032SK 土層断面 南から



08Cb区 028SD 土層断面 南から



08Ce 区 遺物群出土状況 南西から



08Ce 区 焼土・炭化物出土状況 南西から



08Ca 区 038SK 土層断面 北から



08Ca 区 040SX 検出状況近景 南東から



08Ca 区 040SX 近景 南東から



08Fd区 1面完掘状況 西から



08Fd区 025SK 焼土検出状況 南から



08Fd区 025SK 下部焼土検出状況 北から



08Fd区 025SK 遺物出土状況 北東から



08Fd区 025SK 遺物出土状況 北から



08Fd区 025SK 土層断面 西から



08Fd区 055SK 北から



08Fd区 038SK 北から



08Fd区 055SK 完掘 南から



08Fd区 034-041SK 南から



08Fd区 右上

08Fd区 032SK 北から 050SK 南から



08Fd区 053SK 土層断面



08Fd区 031SD 土層断面



08Fd区 035SD 土層断面 南西から



08Fd区 基盤出土土師器 南東から



08Fe区 057SD 掘り下げ状況 南西から



08Bc区 遺構全景 東から



08Bc 区 001ST・004SD 土層断面 南西から



08Bc 区 001ST・036SK 土層断面 北東から



007SK 土層断面 南東から



014SK 土層断面 南西から



016SK 土層断面 南西から



018SK 土層断面 南から



020SK 土層断面 南から



021SK 土層断面 南から



025SK 土層断面 南から



024SK 土層断面 東から



024SK 土層断面 南東から



028SK 土層断面 南から



08Bc 区 011SD 検出状況 南から



08Bc 区 011SD 土層断面 南から



08Bc 区 下層確認状況



08Bb 区 1 面検出状況 南西から



08Bb 区 掘立柱建物柱穴群 北西から



077SK 土層断面 南西から



078SK 土層断面 南西から



079SK 土層断面 南西から



080SK 土層断面 南西から



081SK 土層断面 南西から



082SK 土層断面 北東から



083SK 土層断面 北東から



084SK 土層断面 北東から



085SK 土層断面 北東から



086・087SK 土層断面 南西から



087SK 土層断面 南西から



088SK 土層断面 南東から



089SK 土層断面 南から



090SK 土層断面 東から



094SK 土層断面 南東から



096SK 土層断面 南から



101SK 土層断面 南東から



102SK 土層断面 南から



112SK 土層断面 東から



113SK 土層断面 南西から

08Bb区 遺構



08Ba 区 遺構検出状況 南から



08Ba 区 2面遺構近景 南から



08Ba 区 046SE 近景 西から



08Ba 区 046SE 土層断面 北東から



08Ba 区 055SK 土層断面 西から



08Ba 区 047SE 遺物出土状況 北西から



08Ba 区 047SE 南壁土層断面 北から



08Ba 区 047SE 土層断面 北西から



09C区 1面全景 西から



09C区 2面全景 西から



09C 区 2 面全景



09C 区 404・408SK 柱列 北から



09C 区 306SP 土層断面 南から



09C 区 207SD 遺物出土状況 南から



09C 区 305SX 遺物出土状況 北西から



09C 区 401SX 遺物出土状況 南から



09C 区 305SX 遺物出土状況 東から



09C 区 205SE 周辺 近景



09C 区 205SE 上層断面 西から



09C 区 205SE

上段出土状況

井戸枠上部

下部掘り下げ

井戸枠上部 2

井戸枠上面

井戸枠側板除去





09C 区 205SE 井戸枠側面



09C 区 205SE 井戸内曲物



09C 区 205SE 井戸枠内部



09C 区 208SE 土層断面 西から



09C 区 208SE 西から



09C 区 251SD 遺物出土状況 南から



08Aa 区 1 面西部遺構検出 南から



08Aa 区 1 面西部遺構近景 南から



08Aa 区 1 面北部遺構近景 東から



08Aa 区 002・003SD 土層断面 南から



08Aa 区 2 面西部遺構検出 南から



08Aa 区 2 面柵周辺 東から



09C 区 2 面西部遺構近景



08Aa区 101SX 遺物群出土状況 北西から



08Aa区 2面北部検出状況 南東から



08Aa区 2面北部遺構近景 南から



08Aa区 2面遺構 東から



08Aa区 遠景 東から



08Aa 区 004SK 土層断面 南から



08Aa 区 005SK 土層断面 南から



08Aa 区 008SK 土層断面 南から



08Aa 区 009SK 土層断面 南から



08Aa 区 010SK
南から



08Aa 区 016-18SK 南から



08Aa 区 039SK 土層断面 南から



08Aa 区
土層断面 057SK
南から



08Aa 区 058SK
土層断面 西から



08Aa 区 061SK 土層断面 南東から



08Aa 区 062SK 南から



08Aa 区 073SK 土層断面 北東から



08Aa 区 105SK 土層断面 北から



08Aa 区 109SK 土層断面 南から



08Aa 区 125SK 土層断面 西から



124SK 遺物北 西から



052SK 遺物 南から



086SK 遺物 西から



123SK 遺物 西から



08Aa 区 124SK 遺物出土状況 西から



08Aa 区 067SK 土層断面 南から



08Aa 区 041SK 土層断面 西から



08Aa 区 041SK 土層断面 北から



08Aa 区 043SK 土層断面 北西から



08Aa 区 049SK 土層断面 南から



08Aa 区 051SK 土層断面 南から



08Aa 区 053SK 土層断面 東から



08Aa 区 054SK
土層断面 東から



08Aa 区 108SK 土層断面 北から



08Aa 区 111SK 土層断面 西から



08Aa 区 112SK 土層断面 東から



08Aa 区 148SK
土層断面 東から



08Aa 区 153SK 土層断面 北から



08Aa 区 101SX 大甕片出土状況細部 北西から



08Aa 区 101SX 焼土検出状況 北西から



08Aa 区 101SX 遺物出土状況 北西から



08Aa 区 055SD 西から



08Aa 区 101SX 灰釉陶器出土状況 北西から



08Aa 区 037SD 検出状況 東から



08Aa 区 090SD 内肩土層断面 西から



08Aa 区 149SD 近景 南東から



149SD 上部遺物 南東から



08Aa 区 149SD 遺物出土状況 南東から



08Aa 区 149SD 完掘 東から



08Aa 区 149SD 土層断面 西から



08Aa 区 151SX 土器群出土状況 北から



08Ac区 東部遺構検出状況 北西から

08Ac区 全景 西から



08Ac 区 195SK 土層断面 西から



08Ac 区 201SK 土層断面 南から



08Ac 区 204SK 土層断面 西から



08Ac 区 226SK 土層断面 西から



08Ac 区 286SK 土層断面 南から



08Ac 区 295SK 土層断面 南東から



08Ac 区 297SK 土層断面 南から



08Ac 区 299SK 土層断面 北から



08Ac 区 322-340SK 土層断面 東から



08Ac 区 362SK
遺物出土状況 南から



08Ac 区 270SX 遺物出土状況 南から



08Ac 区 333SE 土層断面 東から



08Ac 区 257SX 土層断面 西から



08Ac区 南西部近景 南東から



08Ac区 149SD 付近近景 南東から



08Ac区 149SD 付近近景 北東から



08Ac区 149SD 土層断面 西から



09B区 1面遺構検出状況 西から



09B区 2面全景 西から



09B区 2面全景 北から



09B区 112SE 北西から



09B区 112SE 全景 北から



09B区 112SE 東から



09B区 112SE 上層遺物出土状況 西から



09B区 112SE 上層 北から



09B区 112SE 上層遺物出土状況近景 西から



08Ab 区 2 面全景 西から



08Ab 区 2 面南西部近景 北東から



08Ab 区 154SD 土層セクション 東から



08Ab 区調査区北壁
154SD 土層断面 南から



08Ab 区 135-136SK 近景 北から



08Ab 区 135SK 土層断面 南から



08Ab 区 136SK 土層断面 北東から



08Ab 区 175SK 遺物出土状況細部 東から



08Ab 区 175SK 近景 南東から

土層断面 南東から

土層断面細部 南東から



08Ab 区 175SK 土層断面 北東から



08Ab 区 154SD 遺物出土状況 南西から



08Ab 区 181SX 土層断面 北西から



08Ab 区 167-169SK 検出状況 南から



08Ab 区 167・169SK 検出状況 東から



08Ab 区 167-169SK 土層断面 南東から



08Ab 区 167・169SK 土層断面 東から



08Ab 区 161・163SK 完掘状況 南西から



08Ab 区 161・164SK 土層断面 東から



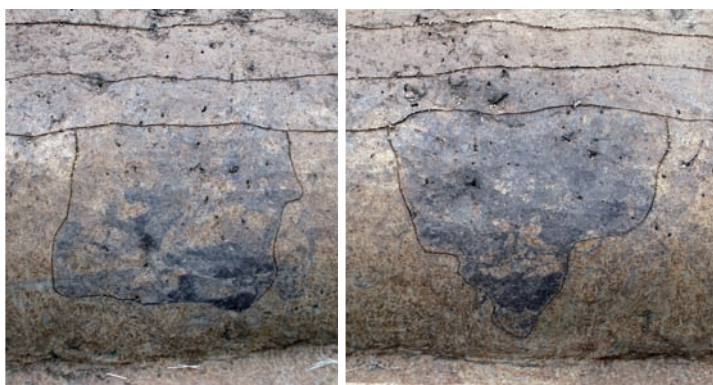
08Ab 区 157SK 土層断面 北から 08Ab 区 163SK 土層断面 北東から



08Ab 区 158SK 土層断面 北から 08Ab 区 159SK 土層断面 北東から



08Ab 区 165SK 土層断面 北から 08Ab 区 160SK 土層断面 北から



08Ab 区 157SK 土層断面 北から 08Ab 区 158SK 土層断面 北から



08Ab 区 182SX 検出状況 南西から



08Ab 区 182SX 上層遺物出土状況 西から



08Ab 区 182SX 上層遺物出土状況 南から



08Ab 区 182SX 中層遺物出土状況 西から



08Ab 区 182SX 土層断面 西から



08Ab 区 182SX 完掘状況 西から



09A 区 全景 西から



09A 区 012SP 土層断面 西から



09A 区 014SP 土層断面 西から



09A 区 014SP 土層断面 西から



09A 区 016SP 土層断面 北から



07A区 1面全景 西から



07A区 1面全景



07A区 1面東部



07A区 1面西部 東から



07A区 1面東部 西から



07A区 2面西部



07A区 2面東部 東



07A区 2面西部 東から



07A区 2面掘立柱建物群近景 東から



07A 区 090SK 土層断面 南から



07A 区 092SK 土層断面 南から



07A 区 111SK 土層断面 南から



07A 区 119SK 土層断面 南から



07A 区 128SK 土層断面 南から



07A 区 130SK 土層断面 南から



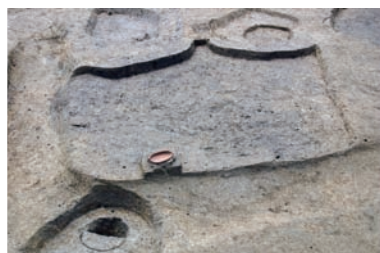
07A 区 280SK 土層断面 南から



07A 区 344SK 土層断面 南から



07A 区 165SK 検出状況 東から



07A 区 180SK 検出 西から



07A 区 344SK 完掘 南から



07A 区 165SK 土層断面 南東から



07A 区 180SK 土層断面 南東から



07A 区 228SK 土層断面 南東から



07A 区 232SK 土層断面 南東から



07A 区 165SK 完掘状況 南東から



07A 区 180SK 完掘状況 南東から



07A 区 228SK 完掘状況 南東から



07A 区 232SK 完掘状況 南東から



07A 区 170SB 南から



07A 区 226SB 南から



07A区 022SD 南から



07A区 044SD
遺物出土状況 南から



07A区 012SD 近景 東から



07A区 004SD 土層断面 南から



07A区 007SD 層断面 西から



07A区 007SD 層断面 西から



07A区 012SD 層断面 北から



07A区 012SD 層断面 西から



07A区 012SD 遺物出土状況 南から



07A区 012SD 遺物出土状況 西から



07A区 045・048SD 近景 西から



07A区 050SD 近景と土層断面 西から



07A区 東壁土層断面 北西から



07A区 256SK 遺物出土状況 北から



07A区 256SK 遺物出土状況 東から



07B区 1面全景 東から



07B区 1面東部 北から



07B区 700SE 層断面 東から



07B区 044SD 近景 北から



07B区 726SD 近景 東から



07B区 690SE 層断面 北から



07B区 045・044SD 層断面 南から



07B区 725・726SD 層断面 東から



07B区 737SX 検出状況



07B区 737SX 検出状況



07B区 737SX 断ち割り



07B区 737SX 掘り下げ



07B区 737SX 掘り下げ



10区 1面全景 北から



10区 1面全景 東から



10区 2面全景 北東から



10区 2面全景 北西から



10区 21SD 遺物出土状況 北西から



10区 21SD 遺物出土状況 北西から



10区 21SD 遺物出土状況 北西から



10区 21SD 遺物出土状況 北から



07C区 1面全景 東から



07C区 2面全景 東から



07C区 3面全景 東から



検出 掘り下げ4
掘り下げ1 掘り下げ5
掘り下げ2 掘り下げ6
掘り下げ3 掘り下げ7

南西から

07C区 400SE



07C区 621-624SK 検出状況 東から



07C区 380SK 土層断面 北から



07C区 624SK
土層断面 南から (以下同じ)



07C区 623SK
土層断面 南から



07C区 622SK
土層断面 南から



07C区 621SK
土層断面 南から



07C区 624SK 完掘



07C区 623SK 完掘



07C区 622SK 完掘



07C区 621SK 完掘



07C区 582SK 遺物出土状況 南東から



07C区 582SK 遺物出土状況 南西から



07C 区 435SB 近景 北東から



07C 区 435SB 遺物出土状況 北西から



07C 区 673SB 北西から



07C 区 675SB 北西から



07A 区 1 面全景と万徳寺（右上） 左は JR 東海道線 北から



07A 区 1 面全景 奥は JR 東海道線 西から



08A区 2面全景 北から



08A区 005SE 曲物（中世）検出状況 東から



08A区 005SE 曲物出土状況 東から



08A区 006SE（中世）井戸枠検出状況 西から



08A区 005SE 下部砂止めの編笠 南東から



08A区 005SE 土層断面 西から



08A区 031SK（古墳前期）土層断面 南から



07A 区 礎板出土状況 東から



07A 区 礎板出土状況 北から



07A 区 礎板出土状況 北から



07A 区 礎板出土状況 西から



07A 区 0101SE (近世) 土層断面 北から



07A 区 050SE (中世) 遺物出土状況 東から



07A 区 0101SE 断ち割り状況 北から



07A 区 050SE 曲物検出状況 東から



07A 区 048SE (近世) 土層断面 西から



07A 区 050SE 曲物出土状況 東から



07A 区 066SE (近世) 土層断面 南から



07A 区 中世屋敷地北東コーナー付近 077SD 他近景 北から



07A 区 中世屋敷地東部南北溝群 077SD 他（中世）近景 南から



08B 区 081SX 近景 北東から



07A 区 中世屋敷地北東コーナー付近近景、礎板 左が北



08B 区 081SX 遺物出土状況 東から



08B 区 2 面柱穴群近景 東から



08B 区 019SE (近世) 近景 東から



08B 区 022SE (近世) 井筒出土状況 東から



043SK 礎板
出土状況 東から



048SK 礎板
出土状況 西から



059SK 礎板
出土状況 西から



048SK 礎板
出土状況 西から



059SK 礎板
出土状況 西から



052SK 礎板
出土状況 西から



2 面礎板
出土状況 東から



052SK 礎板
出土状況 西から



051SK 柱根
検出状況 南から



107SK 柱根・礎板
検出状況 北から



107SK 柱根・礎板
検出状況 東から



07A区 005SD 全景 北西から



07A区 北部1面溝群と005SD 検出状況 北西から



07A区 005SD 土層断面 南から



07A区 2面古墳前期遺構群



07A区 2面090・086SI周辺の遺構群 北から



07A区 2面竪穴090SI(左)086SI(右)近景 北東から



07A区 2面090SI遺物出土状況 南から



07A区 2面090SI遺物出土状況 北西から



07A区 2面092SK遺物出土状況 南東から



07A区 2面0106NR周辺炭化物層検出状況 西から



08B区 094・095SI遺物出土状況 北東から



08B区 097SK土層断面 南から



08B区 096SI近景 南から



08B区 097SK遺物出土状況 南西から



07Ba-Bb 区 1 面全景 東から



07Ba 区 020SE (近世) 土層断面 南から



07Ba 区 034SE 土層断面 北西から



07Ba 区 020SE 桶検出状況 南から



07Ba 区 0227SK (左) 0226SK (右) 礎板出土状況 南から



07Ba区 2面全景 北から



07Ba区 0140SK 遺物出土状況 南から



07Ba区 0238SD 近景 東から



07Ba区 0238SD 土層断面 東から



07Ba区 0140SK 土層断面 南から



07Ba区 方形周溝 0240SD 近景 北から



07Ba区 0240SD 土層断面 南から



07Ba区 0240SD 遺物群出土状況 南から

07Ba区 0240SD
返り蓋出土状況
南から



07Ba区 0240SD 遺物出土状況 南から



07Ba区 0240SD 遺物出土状況 東から



07Ba区 0242SD 土層断面 南から



07Ba 区 方形周溝 0241SD (古墳前期) 近景 西から



07Ba 区 0243SD (中世) 土層断面 東から



07Ba 区 方形周溝 0242SD (古墳前期) 近景



08C区 1面全景 北から



08C区 016SK 礎板
出土状況 南から



08C区 053SK 出土状況 南から



08C区 074・075・076SK 礎板土層断面 南から



08C区 030SK 礎板出土状況 西から



08C区 054SK 礎板土層断面 南から



08C区 0146SK 礎板出土状況 南から



08C区 052SK 礎板出土状況 南から



08C区 054SK 礎板出土状況 南から



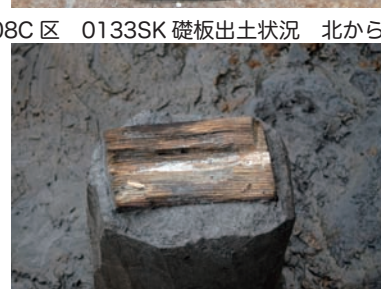
08C区 0133SK 礎板出土状況 北から



08C区 052SK 礎板出土状況 南から



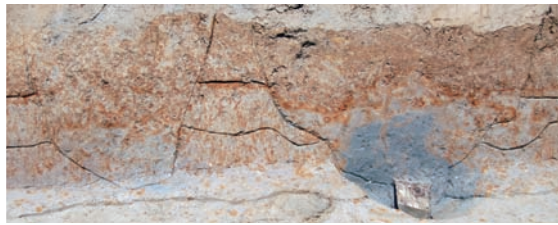
08C区 054SK 礎板出土状況 西から



08C区 0100SD 礎板出土状況 南から



08C 区 077・078SK 礎板土層断面 東から



08C 区 0173・175SK 礎板土層断面 南から



08C 区 0174SK 礎板
出土状況 南から



08C 区 009SK 柱根
出土状況 南から



08C 区 033SK 柱根
出土状況 南から



08C 区 0132SK 柱根
出土状況 南東から



08C 区 0175SK 柱根
出土状況 南から



08C 区 0128・0130SK 柱根土層断面 南から



08C 区 051SK 柱根出土状況 南から



08C 区 050SE 桶出土状況 南から



08C 区 018SE 土層断面 南から



08C 区 2面全景 北から



08C 区 088SE (中世) 土層断面 東から



08C 区 088SE 曲物検出状況 東から



08C 区 088SE 土層断面 東から



08C 区 088SE 曲物内山茶碗出土状況 北東から



08C 区 0104・0105SE (近世) 土層断面 南から



08D区 1面検出状況 西から



08D区 035SD全景 西から



08D区 001・002SE (近世) 土層断面 南から



08D区 方形周溝北溝 048 (古墳前期) 近景・土層断面 西から



08D区 048SD 土層断面 東から



08D区 050SI・051SI 近景 西から



08D区 050SI・051SI 近景 南から



08D区 051SI 出土甕出土状況 南から



08D区 051SI 出土高杯出土状況 南から



07Bb 区 1 面全景



07Bb 区 1 面北部近景 部北から



07Bb 区 1 面南部近景 北から



07Ba 区 0232SE (中世) 木材除去後 南から



07Ba 区 0232SE 検出状況 南から



07Ba 区 0232SE 下部甕と曲物 南から



07Ba 区 0232SE 南西から



07Ba 区 0232SE 下部断ち割り 南から



07Bb 区 019SD (古代) 周辺 北東から



07Bb 区 259SD (古墳前期) 遺物分布状況、縦方向は 019SD



07Bb 区 259SD 近景 北西から



07Bb 区 0259SD 遺物出土状況 北西から



07Bb 区 0259SD 遺物出土状況 西から



07Bb 区 0259SD 遺物出土状況 南から



07Bb 区 0259SD 遺物集積近景 北西から



07C区 全景 北から



07C区 全景 東から



07C区 010SD 全景 北から



07C区 010SD (中世) 南から



07C区 029SD 近景 南から



07D区 全景 東から



07D区 012SK 鎌形石製品出土状況 東から



07D区 012SK 鎌形石製品近景 南東から

塔の越遺跡



07A-140



07A-29



07A-30



07A-6



07A-7



07A-8



07A-13



07A-15



07A-17



07A-18



07A-19



07A-22



07A-23



07A-252



07A-26



07A-28



07A-31



07A-40



07A-44



07A-45



07A-169



07A-27



07A-37



07A-38



07A-196



07A-79



07A-227



07A-65



07C-1



07C-96





08Aa-26



08Aa-10



08Aa-9



08Aa-128



08Aa-145



08Aa-17



08Aa-20



08Aa-188



08Aa-54



08Aa-58



08Aa-36



08Aa-59



08Aa-63



08Aa-272



08Aa-47



08Aa-267



08Ab-3



08Ab-34



08Ab-14



08Ab-11

塔の越遺跡 08Ab 区 175SK



08Ac-43



08Ac-46



08Ac-47



08Ac-103



08Ac-149



08Ac-181



08Ac-2



08Ac-3



08Ac-4



08Ac-5



08Ac-6



08Ac-7



08Ac-9



08Ac-10



08Ac-11



08Ac-12



08Ac-16



08Ac-23



08Ac-1



08Ac-8



08Ba-1



08Ba-2



08Ba-31



08Ba-3



08Ba-4



08Ba-5



08Ba-6



08Ca-20



08Ca-41



08Ca-5



08Ca-28



08Cb-37



08Cb-24



08Cb-23



08Cb-20



08Cb-17



08Cb-2



08Cb-1



08D-14



08Cc-7



08Cc-6



08Cd-5



08Cd-22



08Cd-23



08Cd-32



08Cd-25



08Ce-1



08Cd-24



08Cd-6



08Ce-1





08D-10



08D-2



08D-3



08D-13



08Eb-2



08Eb-13



08Eb-22



08Eb-5



08Eb-6



08Eb-7



08Eb-8



08Eb-29



08Eb-52



08Eb-53



08Eb-54



08Eb-1



08Eb-4



08Eb-56



08Fa-10



08Fa-9



08Fc-15



08Fd-56



08Fd-58



08Fd-57



08Fd-61



08Fd-62



08Fd-63



08Fd-62



08Fe-1



08Fe-17



08G-1



08G-5



08G-4



08G-3



08G-17



08G-20



08G-18



08Ha-1



08Ha-2



08Ha-35



08Ha-37



08Ha-45



08Ha-21



09C2-18



09C2-19



09C2-58



09C2-47



09C2-10



09C2-11



09C2-4



09C2-6



09C2-17



09C2-5



09C2-16



09C2-13



塔の越遺跡 09C 区 205SE

09C2-M-42



07A-251



08Cb-19



07A-189



07A-30



07C-33



07D-2



08Aa-8



08Aa-149



08Aa-243



08Aa-249



008Bb-14



08Ca-10



09C1-54



09C2-93



内面：漆付着

07C-063



08Eb-68



08Bd-18



08Bd-22



09C2-S-36



09C2-S-35



07A-S-004

長野北浦遺跡



08D-49



08A-001



08C-13



08B-007



07D-S-016

07D 区 012SK



07Ba-221



08C-109





07Bb-256



07Bb-260



07Bb-263



07Bb-259



07Bb-264



07Bb-265



07Bb-262



07Bb-266



07Bb-257



07Bb-261



08D-44

塔の越遺跡



09C 区 205SE 上段井桁



09C 区 205SE 下段 集水升



09C 区 205SE 最下部曲物



09C 区 205SE 下段集水升 長辺側板



09C 区 205SE 下段集水升 短辺側板



09C 区 205SE 下段集水升 底板

長野北浦遺跡

09C 区 205SE 隅柱



09C 区 205SE 129



09C 区 205SE 131



09C 区 205SE 130



09C 区 205SE 132

08A 区 006SE 横棧



08A 区 006SE 036



08A 区 006SE 035



08A 区 006SE 032



08A 区 006SE 031



08A 区 006SE 052

08A 区 006SE 046

08A 区 006SE 048

08A 区 006SE 049

08A 区 006SE 050

08A 区 006SE 053



07B 区 187SD 021



07A 区 003SD 004



07B 区 187SD 022



07B 区 156SD 015



07A 区 050SE 002

報告書抄録

ふ り が な	ながのきたうらいせき・とうのこしいせき
書 名	長野北浦遺跡・塔の越遺跡
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第171集
編 著 者 名	石黒立人・樋上 昇・永井邦仁・早野浩二・鬼頭 剛・奥野 絵美・鶴飼雅弘・宇佐見 守
編 集 機 関	公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802番24 TEL 0567(67)4163
発行年月日	西暦2012年3月31日

ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査 面積 m ²	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
ながのきたうらいせき 長野北浦遺跡	あいちけんいなざわし 愛知県稲沢市 なかの 長野	23220	090072	35度 15分 25秒	136度 49分 04秒	2007.4.1 } 2008.3.31 2008.4.1 } 2008.10.31	5,500 1,500	都市再生総合整備事業 3・3・14 稲沢西春線建設
とうのこしいせき 塔の越遺跡	あいちけんいなざわし 愛知県稲沢市 なかの とうのこし じろまる 長野・塔の越・治郎丸		090009	35度 15分 25秒	136度 48分 57秒	2007.4.1 } 2008.3.31 2008.4.1 } 2009.3.31 2009.5.1 } 2009.8.31 2010.4.1 } 2010.4.28	2,500 6,150 710 90	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
長野北浦遺跡	集落	古 墳	墳墓・竪穴住居	土師器	
		中世・近世	掘立柱建物・井戸・溝 土坑	中・近世陶器	
塔の越遺跡	集落	古 墳	円墳・方墳	土師器・須恵器・埴輪	
		古 代	竪穴建物・掘立柱建物 井戸	須恵器・灰釉陶器	
		近 世	井戸・溝・土坑	近世陶器	

文 書 番 号	発掘届出(18埋セ第101号 2007.3.15)	発掘届出(19埋セ第114号 2008.3.11)	発掘届出(20埋セ第129号 2009.3.26)	発掘届出(21埋セ第129号 2010.3.3)
	通知(18教生第2737号 2007.3.28)	通知(19教生第2941号 2008.3.19)	通知(21教生第21号 2009.4.2)	通知(21教生第2611号 2010.3.23)
	終了届・保管証・発見届(19埋セ第116第号 2008.3.11)	終了届・保管証・発見届(20埋セ第119号 2009.3.13)	終了届・保管証・発見届(21埋セ第60号 2009.9.3)	終了届・保管証・発見届(22埋セ第35号 2010.4.28)
	監査結果通知(19教生第2967号 2008.3.24)	監査結果通知(20教生第3270号 2009.3.30)	監査結果通知(21教生第1555号 2009.10.22)	監査結果通知(22教生第793号 2010.7.8)

要 約	<p>長野北浦遺跡・塔の越遺跡の調査によって、古代に関しては南北方向に大溝が掘削されてエリアを画し、そのなかに竪穴建物群や掘立柱建物群が集塊状に存在している様子を把握することができ、一部は国府に関連する可能性が高い。興味深いのは、8世紀代まではそれら建物群が先行して造営された墳墓群とともに一つの景観を構成している点である。4世紀に始まり6世紀まで続く墳墓群の存在は、この地域が濃尾平野における中心地の一つであったことを示すのであり、その西方に尾張国府(衙)が位置している点は重要である。三宅川に沿う自然堤防が安定した高度を保ち、居住環境として他に優越していることは確かであり、尾張国府を含めた濃尾平野における古代史像を考える上で重要な資料を提供した。</p>
-----	--

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第171集

長野北浦遺跡・塔の越遺跡

2012年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社